
真・恋姫†無双～旅人は外史を渡る～

ガスキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜旅人は外史を渡る〜

【Nコード】

N9835K

【作者名】

ガスキン

【あらすじ】

少女達を悲しみから救い、消滅したはずだった旅人は、馱神に救われた。再び仲間の元へ戻るために旅人は新たな世界に渡る。着いた世界は女性だらけの三国時代！？パートナーがいない今の状態で旅人は己の力だけで戦いぬく事が出来るのか？

永遠の旅人とストーリーがつながっています。同作品のトンでもないネタバレもあるので、知りたくない方はある程度ストーリーが進んでからお読みください。そして・・・相変わらず駄文です・・・ご都合主義の塊です。そういつたのが好きでない方は読まれない

方がいいと思います。

プロローグ 消えた男(前書き)

調子によって第二弾です

プロローグ 消えた男

・・・暗い・・・暗い・・・何も感じない・・・俺はどうした？・・・俺は何をした？・・・俺はいつたい？・・・

？「・・・きる」

？

？「・・・おきる」

なんだ？

？「起きるのじゃー！！」

？「！？」

誰かの声を聞き、目を開ける。そこには・・・

馱神「よつやく目覚めたか・・・久しぶりじゃな、旅人 秋月 一
成よ」

俺をあの世界に送った駄神が俺を見降ろしていた・・・

—「あなたは駄神？ 俺はいつたい？ それにここは？」

全く状況がわからなかったので駄神に尋ねる。

駄神「・・・覚えておらんのか？」

覚えていない？ なにを？

駄神「お主はあの世界での戦いでマナを使い果たし消滅しようとしていた」

・・・そうだ・・・俺は、あの最終決戦で力を使い果たしたんだった。

駄神「それを見ていたワシがこうしてお主をここに連れてきた」

—「そうでしたか・・・それで・・・みんなは？」

駄神「心配ないぞ、お主の頑張りで他の者は皆無事じゃ・・・無論、

消滅が決まっていたあの者達もな」

そうか・・・よかった・・・

—「ところで、なぜ俺をここに？ 俺はもう消滅するしか・・・」

馱神「は？ 何を言っておる、お主にはまたあの世界に行ってもら
うぞ」

—「？ どういうことですか？」

馱神「お主をあの世界に送ったのは、彼女達の心を救ってもらった
めと最初に言ったじゃろ？」

—「はい、そう聞きました」

馱神「お主は確かに彼女達を救った・・・が、いかんせんお主の存
在が彼女達の心の深くまで根付いておつての・・・簡単に言つとお
主が消えたせいで彼女達の心にまた傷ができた。しかも、お主が介
入しなかった時よりも深い・・・な」

—「なつ！？ そんな！？」

馱神「本来ならこんな事にはならんかったはずじゃが・・・お主の
天然たらしっぷりを甘く見ていたワシの落ち度じゃ」

—「？？」

馱神「はあゝ．．．これじゃよ．．．」

何を言っているんだ？

—「．．．と、いうことは、俺はあの世界に戻れるのですね」

馱神「じゃから、先ほどからそう言っておるじゃろっ．．．」

そうか．．．またみんなと会えるのか．．．

—「では、さっそく俺を戻してください」

馱神「あゝ．．．それは無理じゃ」

無理？

—「．．．俺をからかってるんですか？」

そう言っつて馱神を睨むと、冷や汗を垂らしながら慌てて口を開いた。

馱神「ち、違うぞ、これにはちゃんとした理由があるんじゃない！

じゃからその殺気を抑えてくれ！！」

そう言われて殺気を抑える。

—「それで・・・理由とは？」

馱神「うむ、お主は一度あの世界から消滅した。一度消滅した者をその世界に送るには時間と力がある。じゃからすぐにはお主を戻せんのじゃ」

—「なるほど、わかりました。それで、どれくらいかかりますか？」

馱神「・・・すまんが、正確な時間は分からのじゃ」

—「・・・そうですか」

だが・・・待っていれば必ず戻れるんだよな。

—「じゃあ、待ちますよ。俺はまたみんなに会いたい」

馱神「ああ、必ずお主を戻してみせる・・・で、その話は置いてお主に相談なんじゃが」

先ほどまでと違い急に明るい口調で話しだす馱神・・・嫌な予感がする。

—「・・・なんですか？」

駄神「いつまでかかるか分からないものを待つのも暇じゃろ？ 待っている間に別の世界に行ってみんか？」

そんな軽いノリで世界移動を勧めないで欲しい。

—「またアニメの世界ですか？」

駄神「違うぞ・・・今度は、ゲームの世界じゃ！」

もうなんでもいい。

—「今の俺には神奈と天音がいませんが・・・いいんですか？」

あの最終決戦が終わり消滅しようとした時、俺は二人との契約を破棄した。あの二人は今もあの世界で元気にやっているはずだ。

駄神「問題ないぞ、今度の世界に魔法はないし、お主の身体能力なら充分じゃ・・・それに、あの力もあるじゃろ？」

戦いの中で目覚めた俺の新たな力、確かにあの力があればなんと

かなる・・・か。

—「どうせ断つても、連れて行くんでしょ？」

駄神「では・・・」

—「ええ、行きますよ。その世界を守るために・・・」

ただ待つのも時間の無駄だしな。

駄神「恩にきるぞい！・・・それじゃさっそく」

俺の返事に気を良くした駄神はパソコンを取り出し起動した・・・
だから、どこから出しているんだ？

—「何をしているんですか？」

駄神「恒例の原作チェックじゃ！今回はゲームじゃから、お主に
プレイしてもらっぞ」

やっぱりこうなるか・・・

—「分かりましたよ・・・」

馱神「おっひよおおおお!!?」

馱神の顔を思いつきり蹴り飛ばす。な、なんてものをプレイさせるんだこの馱神は! / /

—「それで・・・俺は、この北郷 一刀君を手助けすればいいんですか?」

あれから馱神にお仕置きという名のやつあたりをすること数十分、虚ろな目をしだした馱神を開放して今回の鍵になる人物について聞く。

馱神「ああ、そのことじゃが一刀は出んぞ?」

—「は? なんです?」

馱神「大いなる意志・・・いや、なんでもない」

—「?」

何を言っているんだ?

駄神「お主も分かるじゃろ？ あやつが介入したせいで失われた命もある、当然お主には全員救ってもらいたいからな」

全員って・・・結構な人数だぞ。

—「骨が折れそうだな」

駄神「気合じゃ！」

精神論でどうにかなる数じゃないだろ・・・

駄神「そうじゃ、お主にこれを渡しておく」

そう言っただけ渡されたのは一つの腕輪。

—「これは？」

駄神「それはマナを自己生成する素材でできた腕輪じゃ。あの世界には魔力・・・つまりマナが無いからの、これがあればお主もあの世界で生きていけるぞ」

—「・・・ありがとうございます」

これは助かる、いい物をもたらった。

駄神「なあに、またワシの願いを聞いてくれたんじゃ、これくらいはさせてくれ」

ふむ、意外と律儀な人だな。

駄神「さて、そろそろ向かってもらうかの」

駄神が何やらつぶやいている……コレはまさか……

ー「フツ！」

その場から下がる、以前いきなり穴に落とされたしな。そういえば以前の報復を忘れていた。

駄神「甘いぞい」

下がった場所に穴が開いた。

—「なあ！？」

バカな！？ 読まれていたのか？

駄神「どの勢力につくかはお主に任せるが・・・全員を救う事を忘
れずにのぉ」

以前の世界移動の時の様に駄神の声を聞きながら落下していく・・・
アイツ、イツカカナラズケシテヤル・・・

そして俺は意識を失った・・・

プロローグ 消えた男（後書き）

作「俺の小説第二弾！」

一「・・・本当に書きやがった・・・」

作「さあ、これから忙しくなるぞ！」

一「・・・てか、初っ端からネタバレしすぎだろ！！契約破棄って何！？新たな力って何！？」

作「それは・・・まあおいおい分かってくるさ」

一「おいおいじゃねええええ！！！貴様！勢いだけで書いただろ！？ただでさえストーリー展開が遅いのに無茶な事してんじゃねええええ！！！」

作「無茶はしない・・・無理はするが・・・」

一「無駄にカツコイイこと言ってるじゃねえよ！」

作「と、いうわけで俺の二つ目の作品、どうか暖かい目で見守ってやってください。後・・・永遠の旅人と違って、こちらは更新速度が遅いです。あっち進めないと思うように書けませんので（汗）まだ一度も見ていないという方は、もしよろしければ見てやってください。多分見ないとこっちもよく理解できないと思いますので・・・」

一「もう・・・どうにでもなれ・・・」

第一話 落ちてきた男(前書き)

勢力どうしよう...

第一話 落ちてきた男

「う……ここは？」

目が覚めると一面の広野が広がっていた。

「一刀君が目覚めた所か？」

おそらく、原作で主人公の一刀が目覚めたのがここのはずだ。

「……と、いうことは蜀か魏のどっちかか？」

ここにいるということは原作通りなら劉備達か曹操達に出会うことになる。呉は目覚めたら既に拾われているからな。しかし、本来の主人公がいない時点で原作通りに進む可能性は低いが……

「しかし……本当に何も無いな」

ゲームでは一部分しか見えていなかったが、人はおろかちよつとした動物の姿も見えない。正確な場所も分からない。どうするべきか・

？「おい兄ちゃん！ 珍しいかつこうだな・・・」

—「ん？」

これからの事を考え途方に暮れていると、突然後ろから声をかけられた。振り向くと、黄色い布を頭に巻いた三人の男がいた。

小柄な男「アニキ！ あの服は高く売れそうですぜ！」

アニキと呼ばれた男「おう！ つーわけで兄ちゃん、命が惜しけりや身ぐるみ全部置いてきな・・・もちろん、その高そうな腕輪も」

—「腕輪？」

男が俺の手首を指さす。そういえば、駄神がくれたんだっただんな・・・確かに、腕輪からマナが流れ込んでくるのが分かる。これなら力も充分使えそうだ。

小男「オイ！ 聞いてんのか！？ アニキが置いてけって言うてるだから素直に置いてけよ！！！」

腕輪の確認をしていると、しびれを切らしたのか小柄な男が怒鳴ってきた。

「……断る」

なにが悲しくてこんなところで服を脱がなきゃならん。

ア「そうかい……命がいらねえってんだな？　オイ！　チビ！
デク！　やっちまえ！！」

チ「了解、アニキ！」

デ「わ、わかつたんだな……」

リーダー格の男が他の二人に命令する。さて、話を聞きたいから倒すわけにもいかないし……

？「待てい！」

そんな中、第三の音が響く。

ア「だ、誰だ！？」

？「たった一人の庶人相手に、三人がかりで襲いかかるなどと言語道断！！　そんな外道の貴様らに名乗る名前など……ない！！！！」

声のする方を向くと、一人の女性が槍を構え、こちらに突っ込んできた。

女性「ふ！」

デ「ぐふっ！」

チ「な、なんだこいつ！？・・・ぐは！？」

勢いそのまま一瞬で太った男と小柄な男を打ち倒してしまった。

女性「なんだなんだ？ 所詮は弱者をいたぶる事しかできんのか？」

そう言つて、リーダー格の男に向かって不敵に笑う女性。

ア「くっ・・・オイお前ら！ 逃げるぞ！！！」

チ「へ、へえ・・・」

デ「だなあ・・・」

いつの間にか復活していた二人を引き連れて男は逃げだした。

女性「逃がすか！」

すぐさま女性は男達を追った。

—「・・・すごいな」

？「大丈夫ですか？」

—「ん？」

また声をかけられたので振り向くと、少女と女性が立っていた。

女性「ケガは・・・無いようですね」

—「ああ、ありがとう。どこにも異常はない・・・と、というかケガする前にあの人が助けてくれたからな」

そう言ってもう一度先ほどの女性が走って行った方を見る・・・すると、その女性が戻ってきた。

槍を持った女性「やれやれ。すまん、逃げられた」

少女「お帰りなさい。盗賊さんたち、馬でも使ってたんですか？」

槍を持った女性「うむ。同じ二本足なら負ける気はせんが、倍の数で挑まれてはな」

そう言って、軽く肩をすくめる女性。

少女「まあ、追ひ払えただけでも十分ですよ」

女性「それにしても災難でしたね。この辺りは盗賊は比較的少ない地域なんですが・・・」

三人は何やら話を始めた。

—「・・・少しいいか？」

とりあえず話を聞くために三人に声をかける。

槍を持った女性「ん・・・？ ああ、すまんすまん、貴殿の事をほったらかしにしてしまった。それで、ケガは無いか？」

—「ああ、キミのおかげで無事ですんだ。ありがと。えー・・・と」

槍を持った女性「？ おお！ 名乗っていなかったな。我が名は趙

雲

少女「風は程立ですよ」

女性「私は戯志才と申します」

一「俺は秋月 一成。よろしく」

俺が名乗り返すと、何故か三人が驚きの顔でこちらを見ていた。

一「どうした？」

趙「・・・いや、まさか真名を許されるとは思わなかったのにな」

趙雲が答える。

一「真名？」

戯「ええ、姓が秋、名が月、一が字で真名が成・・・といったところでしょう？」

戯志才が続いて答える。そういえばこの時代の名前はちょっと特殊なんだよな。

—「ああすまない、説明不足だった。姓が秋月で名前が一成、字と真名は無いんだよ」

俺が説明すると、三人はまた驚いたようだった。

程「字と真名が無いなんて不思議なお兄さんですね。珍しい服装ですし……もしかして、お兄さんが天の御遣いさんかもしれませんね」

程立が興味深そうに俺を見つめてくる。

—「天の御遣い？」

程「実はですね……」

趙「風、待て……どうやら陳留の刺史殿が来たようだ」

程立の言葉をさえぎって平原を見つめる趙雲にならうと……遠方から砂塵が見えた。

戯「……今関わり合いになるのは避けたいところですね……行きますか？」

戯志才のその言葉に、趙雲と程立は顔を見合わせて小さく頷く。

程「そうですね〜。そだ、よかつたらお兄さんも一緒にきませんか〜？」

一「は？」

趙「ふむ・・・私はいいと思うぞ」

戯「え？」

程立の提案に思わず聞き返してしまった。趙雲は賛成のようで、戯志才は若干驚いているようだった。

戯「風、本気ですか？」

程「ええ、少々思う所がありまして〜。このお兄さんがいったい何者が興味がありますから」

戯「・・・わかりました。私も少々、彼が本当に噂の『天の御遣い』なのか、確かめたくなってきましたので」

どうやら戯志才も賛成のようだ。

「……いいのか？」

程「ええ、先ほどから言っているように、お兄さんに興味がありますから」

戯「あなたが何者なのか話を聞かせてもらいたいので・・・」

趙「それに・・・せっかく助けた御人をそのまま放っておくのも目覚めが悪いからな」

そう言つて微笑む三人・・・優しいな。会つて間もない俺にここまでしてくれるなんて・・・

「……ありがとう」

俺は精いっぱい感謝の気持ちを込めて礼を言った・・・もちろん笑顔を忘れずに。

趙・程・戯「「「?!?!?!?!?!」」」

「「どうした？体の調子でも？」」

趙「い、いやなんでもない！（な・・・なんて綺麗な笑顔をするのだ／＼）」

程「お気になさらずに」（あややく思わず見惚れてしまいました）

／＼」

戯「問題ありません！……ハッいけない！こんなところでアレを出すわけには……」

—「そうか？ 無理はしないようにな」

趙・程・戯「」（いや！）貴殿（お兄さん）（あなた）のせい
ですから！！」

—「ん？ なんだ？」

何故か突っ込まれた気がする。

こうして、俺はこの世界で最初に出会った三人と行動を共にすることになった。果たして、この外史はこれからどうなるのか、それはまだ誰にも分からない……

第一話 落ちてきた男（後書き）

作「プルツツヒイイイイ！！！！」

一「・・・色々言いたいが、まずは落ち着け」

作「何を言う！これが落ち着いていられるか！！」

一「何をそんなに興奮している？」

作「だって・・・恋姫の新作が出るんだぞおおおお！！！！」

一「・・・ああ、そのことが」

作「ああ・・・じゃねーよ！！またみんなに会えるんだぞ！！しかもウワサでは・・・雪蓮生存！これだけで俺はご飯を3杯はイケる！！」

一「みんなとか言つな、気持ち悪い・・・まあ彼女が生きてくれるのは嬉しいことだが」

作「だろお！？発売日は七月らしいが、俺のテンションは今からクライマックスだ！！」

一「今からそんなに興奮して燃え尽きても知らんぞ・・・あと、金はあるのか？お前バイト先つぶれてから収入ないだろ？」

作「恋姫のためならバイトなんざ速攻で見つけてやらあ！！！！」

一「・・・そのバイタリティを別の事に活かせよ・・・」

作「では、俺と同じく恋姫達に魅せられた人達よ！今から楽しみに待とうではありませんか！！！！」

「……お前、発売されたらこの小説どうするんだ？」

作「もちろん、新作のストーリーも練りこんで続けるぞ」

「……いつ終わるんだよこの小説……」

第二話 巻き込まれそうな時は全力で逃げるべきだが巻き込まれたら覚悟を決め

書き忘れていましたが、この小説は時系列がバラバラです。原作であつたイベントは勢力に限らずできるだけ書いていこうと思いますので、なんでこのイベントの後にこのイベントがあるんだよ・・・！ というツッコミはご容赦下さい。なにせ・・・自己満足の駄文ですから。

第二話 巻き込まれそうな時は全力で逃げるべきだが巻き込まれたら覚悟を決め

あれから近くの街についた俺達は、話をするためにある店に入った。そこで俺は真名について説明を受け、三人に俺が何者なのかを話した。

趙「・・・つまり要約すると、貴殿はこの世界の人間ではない・・・ということでしょうか？」

—「ああ、そうなるな」

程「旅人さんですか」。いったい今までいくつの世界を周ったのですか？」

—「正確にはおぼえて・・・て、随分あっさり信じるんだな。自分で言ってもかなり目茶苦茶な話だと思っただが」

趙「なに、貴殿の目を見ればウソを言っているのではないことくらい分かる」

戯「それに・・・ある程度予想はしていましたから」

戯志才はその理由を語り出した。

今から数ヶ月前、管輅という占い師がある予言を行った。その予言は噂となり、多少の形を変えながら一気に大陸全土へと広まったらしい。

『流星と共にこの地に降り立った天よりの遣いが動乱の世を太平へと導くであろう』……と。

—「それがさつき言っていた天の御遣いというやつか……それが俺だと？」

先ほど程立が言っていた言葉を思い出す。

戯「ええ、多分間違いないかと。あなた自身他の世界からやってきたとおっしゃっていますし、その絹とも違う陽の光を映し光る服などこの世界では見たことありません。それに、あなたと出会う前に風があるものを見ているのです……風」

そう言っつて程立を見る戯志才、俺もつられて彼女を見る。

戯「……風？」

程「………ぐう」

戯「寝るな！」

程立は寝ていた。それはもう気持ちよさそうにぐっすり。

程「おお!? 風としたことがついっつかり」

うっかりであそこまで爆睡するの?

程「えつとですね、お兄さんと会う前に、こう、空を見ていたらですね、流れ星が流れたのですよ」

—「流れ星?」

程「ええ、それはもう昼の空でもくっきり見える鮮やかなものでした。先ほど稟ちゃんが話した予言にもあつたと思います」

—「流星と共に・・・というやつか」

程「正解です。流れ星と言動、風体を見てお兄さんが天の御遣いだと確信しました」

—「なるほど・・・」

そこまでそろっていれば、御遣いと間違えられてもしょうがないな。

趙「それで・・・貴殿は御遣いとしてこの世界で何を成すつもりだ?」

趙雲が俺を見つめ、程立と戯志才もこちらを見ていた。

—「さつきも話したが俺は旅人だ。そして、この世界に呼ばれたということは、俺が守るべきモノ、支えるべき人がいるはずだ。だから俺は・・・まずそれを探そうと思う」

趙「・・・それが見ず知らずの他人だとしても？」

—「それが俺の旅人としての役目だからな。それに・・・そう言う趙雲は、何故他人である俺を助けてくれたんだ？」

趙「むっ・・・」

—「結局・・・他人かどうかなんて関係ないんだよ。守りたいから守る・・・それだけだろ？」

俺の答えに趙雲が黙りこむ。

趙「・・・そうだな。貴殿の想い・・・確かに伝わりました。私の事は星と・・・貴殿は我が真名を預けるにふさわしい・・・いや、ぜひ受け取ってほしい」

程「風の目に狂いは無かったですね。風の真名は風ですよ」

戯「私の真名も受け取ってください。私の真名は稟。それと・・・本当の名は郭嘉といます。今まで偽名を名乗っていてすみません

でした」

三人が真名を預けてくれた。それだけ俺を認めてくれたということか・・・

一「確かに受け取ったよ星、風、稟。俺には真名が無いから一成と呼んでくれ」

星「承知した、一成殿」

風「お兄さんはお兄さんですから」

稟「わかりました一成さん」

俺の名を呼んでくれるみんな・・・若干一名違うが。

その後、この町で一泊することにした三人。俺は金が無いので野宿でもしようかと思っていたのだが、星が食事代と宿代を出してくれた。「一成殿の想いに心打たれた。これくらい出させてくれ」とのことだ・・・助かる。

食事後・・・

一「それじゃ、先に失礼するよ」

星「おや、もうお休みになられるのか？」

—「明日も早いだろうし、色々あつて疲れたからな」

風「そうですか、お兄さんお休みなさい」

稟「よい夢を・・・」

三人とあいさつを交わし、寢室へ行くこうとすると・・・

?「オウ兄ちゃん！ みんなが寝た後に盛ってオイタするんじゃないぞぞぞ」

—「ッ!?!」

三人とは明らかに違う口調に振りかえると・・・風の上に乗っていた人形？ が俺に向かってしゃべっていた。

—「なつ！ しゃべった!?!?・・・ところで、オイタってなんだ？ 別に俺は寝相は悪くないと思うし・・・夢遊病の気もないぞ?」

俺がそう言つと、星は笑い、風は頷き、稟は・・・なぜか鼻をおさえていた・・・

—「ふう……」

寝台に横になる。思い出すのは先ほど星に言った言葉……俺はいつたい誰と共に行動するのか？ 原作ではこの時点で曹操に拾われていたはずだが……実際にはあの三人と行動している。いずれあの三人もそれぞれの勢力に属することになるだろうし……その時、俺はどこにいるんだろう？ 蜀か？ 呉か？ それとも魏か？

そんな疑問を繰り返しながら夜は更けていった……

—「おはよう、星、風、稟」

星「おはようー成殿」

風「おはようございます」

稟「おはようございます」

集合場所に向かうと既に三人がいた。

—「ところで、三人はこれからどうするんだ？」

星「そうですね……とりあえず、私はこの辺でお別れですな」

星の一言に驚く二人。

星「おや？ どうした？」

「多分、いきなりお別れなんて言うから驚いたんだと思うぞ」

星「いや、なに、少々路銀が心もとなくなってな、どこかに仕官で
もしようかと」

稟「そうですね……この辺りだと、冀州の袁紹か幽州の公孫贇あ
たりですか？」

星「ああ、だが……噂通りなら袁紹殿はあまり好きになれそうに
ないので公孫贇殿の方へ行こうと思う」

なるほど、こうして星は公孫贇の下へ行くことになったんだな。

風「そうですね……さみしくなりますね……」

風が若干落ちた声で言う。

星「すまないな、二人も早く仕えるべき人物に出会えるよう祈って

おくよ。そして・・・一成殿、貴殿m「たいへんだ〜!!」!?!?」

星が俺に何か言おうとした瞬間、宿の外から大きな声が聞こえた。

—「何かあったのか?」

稟「わかりません、様子を見に行きましょう」

稟の言葉に従い外に飛び出す。

そこには、逃げ惑っている大勢の人達がいた。

星「どうした! 何があった!?!」

星が近くにいた男性を呼び止めた。

男「ぞ、賊が攻めて来たんだ! あんたたちも早く逃げなよ!?!」

星・風・稟「コッツ!?!」

賊か。だが・・・

風「この街の県令さんはどうしたんですか？」

稟「それに、警護の兵は？」

男「とつくに逃げちまったよ！ あの野郎俺たちからしぼれるだけしほり取ってこんな事になったらすぐトンスラこきやがった！！そのせいで兵も混乱してて使いものになりやしねえ！！！！」

星「なんだと！！」

星が怒りの声をあげる。当然か、本来なら民を守るべきはずの存在が民を見捨てて逃げ出したんだからな。

稟「それは・・・」

風「ひどいですね」

二人もあきれた声を出した。

男「だろ！？ この街はもうダメだ。あんた達も早くしなよ！！」

そう言って男性は走って行った。

「…………どうする？」

三人に尋ねる。

星「ふっ……知れたこと」

不敵に笑いながら街の入口に向かう星。

風「星ちゃん？」

稟「何をする気ですか？」

星「当然賊を迎え撃つ」

風・稟「な!?!」

「……………」

そのまま歩みを続ける星。

風「一人じゃ無茶ですよ!」

稟「死ぬ気ですか!?!」

星「この私が賊如きに後れをとるとでも？　なあに死にはせん、す
ぐに片づけてみせるぞ」

振り向き、俺達に笑いながら言つてのける星。

「……………どうしても行くのか？」

思わず、俺も星に尋ねる。

星「然り……………それに一成殿、守りたいから守る……………そう言った
のは貴殿でしょう？？さあ、風たちと共に避難なされよ……………貴殿の
支えるべきものが早く見つかるよう願つております。では……！」

最後にそう言い残し駆けて行く星。

「（守りたいから守る……………そうだよな…………）」

稟「星……………！　くつ……………行きましょう。彼女の想いを無駄にし
てはいけません」

「……………」

風「お兄さん？」

俺は決心を固める。

—「・・・二人は避難してくれ・・・俺は星を追う」

風・凜「え!?!」

驚愕する二人。

風「何言ってるんですかお兄さん!」

凜「賊三人に後れをとるあなたに何ができるといっんですか!?!
第一武器が無いじゃないですか!?!」

必死の形相で俺を止める二人。そんなに俺弱そうに見えるか? ま
あ、初対面が初対面だったしな。

—「武器ならあるさ・・・」

そう言って自分の胸を指す。

風・凜「?」「」

わけがわからないといった顔をする二人を尻目に、俺は集中する。想像するのは一振りの剣、そして俺は力を開放する。

—「発現！」

俺の声と共に右手に剣が現れる・・・これが、あの戦いの中で手にした俺の新たな力。心の力を具現化する・・・心剣『絆』とでも名付けるか？

風「お兄さん・・・」

凜「その剣はいつたい・・・」

—「帰ったら必ず説明する。だから二人とも、俺が星といっしょに帰ってくるのを待っていてくれ」

風「・・・わかりました。待ってますからね」

凜「絶対話してもらいますからね・・・！ だから、無事に帰ってきてください・・・」

—「ああ、約束する・・・この剣に誓って」

星・・・待ってるよ、君だって俺が守るべき一人なんだからな！！

星の無事を祈りつつ、俺は街の中を駆ける。

果たして旅人は間に合うのか？・・・それはまだ、誰にもわからない・・・

第二話 巻き込まれそうな時は全力で逃げるべきだが巻き込まれたら覚悟を決め

作「盛り上がってきたな」

一「・・・本当にネタバレしやがった」

作「どうだ？新しい力は？」

一「・・・なんとというアー〇ーもどき・・・」

作「な！？なんだと！」

一「なんだよ心剣つて！？厨二にもほどがあるだろ！！」

作「うるせー！この力はお前にとっても重要なものなんだぞ！いずれ、永遠の旅人の方で明らかになるが」

一「そうは言うが、お前こっちの更新は遅いとか言ってたのにこっちばかり書いてるだろ？」

作「しかたねえだろ！前書きにも書いたがなのは最新話の後のストーリーがわからんから他の作品を見て勉強してんだよ・・・」

一「素直に原作見るよ・・・」

作「だが断る！！」

一「何故に！？」

作「原作を見ると、自分の小説の下手さ加減が浮き彫りになるから
見ない!!」

—「見ても見なくてもお前の作品は下手だよ・・・」

作「ひ、ひどい・・・」

第三話 自重しない人間ほどやっかいなやつはいない(前書き)

星がメインヒロインっぽいですね、こんな星じゃない！ と感じ
た方は速やかにお戻りください・・・

第三話 自重しない人間ほどやっかいなやつはいない

星SIDE

星「・・・来たか」

街の前に陣取り、賊の到着を待っている、しばらくして砂塵が見えてきた・・・そこまで多くない、せいぜい五百人程度か？

星「これならいけるか・・・」

恐怖はない。あるのは賊に対する怒りと、友を守れるという喜び、そして・・・

星「一成殿・・・」

思い浮かぶのは昨日出会った青年。

不思議な男だった・・・

笑顔の綺麗な男だった・・・

立派な志を持った男だった・・・

星「ハッ・・・！」

気づけば彼のことはかり考えている自分がいた。出会ったばかりの女にここまで想わせるとは・・・なかなか罪なお方だ。

星「一成殿・・・願わくは貴殿と酒を酌み交わしたいものです」

そのためにも・・・今はこの迫り来る賊どもを打ち倒さなければな。

星「趙子龍・・・参る！！」

なぜか、普段より力がみなぎるのを感じた・・・

星SIDE OUT

IN SIDE

—「星は無事か？」

あれから街の入口に向かったが、逃げ惑う人々に邪魔され、予想以上に遅れてしまった。

—「アレは・・・！」

ようやく街の外に出ると、そこには倒された二百人以上の賊と、未だに槍を振るい続けている星の姿があった。

—「よかった。無事だったんだな」

安心して星に向かって走る・・・が、今までの疲れがたたったのか、倒れた賊に足を捕られた星が転倒した。そこに・・・

賊「死ねえええええ！！！」

賊の一人が剣を振り上げる。

—「やらせるか！！！」

俺は剣を構えると、星と賊の間に向かって全力で投擲した。

ガギイイイイイイイン！！

果たして・・・俺の放った剣は、しっかりと間に突き刺さった。

賊「な、なんだ!?!」

星「これは?」

突然の事に固まった賊に向かい走り、勢いのままに蹴りを放つ。いきなり蹴り飛ばされた賊は宙を舞い、そのまま地面に叩きつけられた。

星「か、一成殿!?!」

星が驚きの声をあげる。それもそうだろう。逃げろと言った相手がこんなところに来るんだからな。

一「星！ 君を・・・助けに来た!!」

そう言って俺は星に笑いかけた。

S I D E O U T

星 S I D E

向かってくる賊を愛用の槍で斬り、突き、薙ぐ・・・いったい何人斬ったのか、百人を超えたあたりから数えていない。

星「ふ・・・所詮は群れなければ何もできないクズか。一人一人は大したことないな」

そう強がってみるが・・・正直きつい。せめて・・・背中を預けられる人物がいてくれたら・・・

そんな事を思っていると、戦いの中集中力を欠いたせいか、倒した賊に足を捕られ倒れてしまった。普段ならこのような失態は犯さないのに・・・

賊「死ねえええええ!!!」

賊の一人が私に向かって剣を振り上げる。防ごうとするが思うように腕が動かない。賊の動きがやけにゆっくり見える。

星「（ああ、私はここで死ぬのか・・・）」

まだ、仕えるべき主君に出会ってもいないのに。

星「（一成殿・・・最後に、もう一度貴殿と・・・）」

ガギイイイイイイン！！

賊「な、なんだ!？」

星「これは？」

剣が振り下ろされる瞬間、私と賊の間に一本の剣が突き刺さった。
賊も突然のことで固まっている。そこへ・・・

ダダダダ・・・バキイ！！

何者かが駆け寄って来たかと思ったら、私の前にいた賊が蹴り飛ばされて宙を舞った。

星「……え？」

何故……何故この方がここに？

星「か、一成殿!？」

一「星! 君を……助けに来た!!」

啞然とする私に振り向きながら、一成殿は笑いながら地面に突き刺さった剣を抜き、私を守るように賊に向かう。

トクン……

星「!？」

なんだ？ この胸の高鳴りは？ 戦場での気分の高揚はよくあるがこれは違う。私はこんなのは知らない。一成殿を見ると、体が熱くなる。顔が赤くなっているのがわかる。どうしたのだ私は？

星SIDE OUT

IN SIDE

地面に突き刺さった剣を抜き、星の前に立つ。残りは・・・二百人くらいか。全く・・・一人で頑張りすぎだろ。

—「星・・・まだ行けるか？」

星に状態を聞く。厳しいようなら下がってもらいたい・・・

星「・・・」

—「星？」

なんの返事も返さないのだから星を見ると・・・ほんのり顔を赤らめてこちらを見ている星がいた。

—「まさか・・・星！　しっかりしてくれ!!」

星の肩をつかみ軽くゆする。すると・・・

星「か、一成殿！　なにを!？」

—「何をじゃない！　大丈夫か!!　毒にやられたのか!？」

星「毒・・・？」

—「そんなに顔を赤くして・・・苦しいのか？ きつければ街に・・・」

星「い、いえ！ 問題ありません。これは・・・そう！ 賊を斬って精神が高ぶっております故赤くなっているにすぎません！！」

星の説明にほつとしつつ、再び賊に向かう。

賊「なんだあテメエは？」

—「旅人だ」

賊「ただの旅人が関係ねえのにしゃしゃり出てくんじゃねえ！！
そこの女とまとめて殺してやる！！」

—「そうはいかん。それに・・・貴様らは俺の大切な友人を傷付けた。そつちこそ、生きて帰れると思うなよ・・・」

ブワッ！！

賊達「ヒイ！？」

星「クッ！！」

賊に殺気を叩きつける。耐えきれなかった者が次々に気絶していく。星も苦しそうだ・・・自重自重。

—「さあ・・・己の罪を数える・・・」

賊達「う・・・うわあああ！！！！」

叫びこちらに向かってくる賊達。ヤケクソになったか。

—「星・・・まだいけるか？」

再び星に尋ねる。

星「ふっ・・・不思議ですな、先ほどまで腕が全く動かなくなるほど疲弊していたのですが、今は・・・誰にも負ける気がしませぬ」

—「そうか・・・聞け！ 賊ども！！ 旅人、秋月 一成！！」

星「常山の昇り竜、趙子龍！！」

—「星」「いざ・・・参る！！！！」

S I D E O U T

星 S I D E

星「はああああ!!！」

賊「ぎゃあああああ!!！」

軽い、軽い、体が軽い！ 先ほどまでの疲れはなんだったのかとい
うくらい今は力がみなぎる。共に戦う者がいるだけでこころも違っても
のなのか。

—「はあああああ!!！」

賊「ヒイヒイヒイ!!！」

チラと横目で一成殿の姿を見る。全く無駄のない動き、流れるよう
な太刀捌きで一撃で複数の賊を吹き飛ばしている。あれほどの武を
持つ者が天界には大勢いるのか？

トクン

まただ。また一成殿を見ていると胸の鼓動が速くなる。これはいい……

気づけば、あれだけいた賊も五十人足らずになっていた。このまま一気に押し切ろうとした私達の前に一人の男が立ちふさがった。

？「情けねえ野郎どもだ！　こんな小僧と女相手になに手間取ってやがる！！」

賊「お、お頭！」

星「ほお……この男がこの賊達の親玉か」

お頭「お前らはすつこんでろ！！　俺がこの小僧をぶっ殺して、女の方はゆっくり可愛がってやる」

星「……下種が」

男が私を舐めるような視線で見えて来たので思わず毒づく。

ー「そうはいかん。貴様のようなクズに、星ほどの美しく気高い女性を好きにさせるわけにはいかない」

星「な……／＼」

なんてことを言うんだー成殿は!? だが・・・成殿にそう言われ
ても不思議と嫌じゃない。それどころか、そう見ていただいている
と思うと心が沸き立つ。

お頭「生意気言ってんじゃねえ!!」

ー成殿の言葉に腹を立てたのか、顔を真っ赤にしながら斬りかかる
男。

ー「遅いな・・・怒りに身を任せた攻撃ほど避けやすいものは無い」
だが、それを全て避けるー成殿。ヤツの攻撃をまるで苦にしていな
いようだった。

お頭「クソ!! おりゃああああ!!」

ー「む・・・」

初めて剣を使って防いだー成殿。そこへ・・・

お頭「いまだ! お前らやつちまえ!!」

賊達「へい!!」

星「な!？」

男のかけ声に弓を構える賊達。一騎討ちの最中に攻撃だ!？

星「ふざけるな! 一騎打ちをなんだと心得ている!!」

お頭「へ! 俺達は武人じゃねえ、どんな手を使っても殺す。それが俺達よ!! やれえお前ら!!」

星「やめろおおお!!!!」

私の叫びもむなしく矢は放たれた。

そして、矢は一成殿の体に・・・

—「・・・その程度で俺を殺せるとでも?」

お頭「なにい!？」

星「え?」

刺さる前に全て防がれた・・・いつの間にか一成殿の左手に持たれていた光の盾によって。

お頭「て、テメエ！ いつの間になんか！？」

「心とは変わりゆくもの、常に同じ形とは限らない」

星「？」

どつという意味だろう？あれも一成殿の力なのか？

「さて・・・そろそろこちらの番だ」

そう言って今度こそ剣を構える一成殿。すごい・・・ここからでも彼の殺気を感じる。

お頭「く・・・クソツタレ」

「どうした？俺を殺すんじゃないのか？」

お頭「う・・・うあああああ！！！！」

ザン！

すれ違う二人、そして・・・

お頭「が・・・は・・・あ」

男がゆっくりと倒れた。もう二度と起き上がっては来ないだろう。

—「・・・あの世で今まで殺してきた人たちに詫びるんだな」

男の死体を一瞥して残りの賊達を睨む一成殿。

—「さあ、次は誰だ？」

賊A「お、お頭がやられたあ！」

賊B「勝てるわけねえよ！！！」

賊C「逃げろおお！！！」

一斉に武器を捨てて逃げ出す賊達。頭がいなくなればこんなものか。

星「待て！！！」

すぐさま追いかけてみようとしたが

? 「今です! 矢を放って下さい!」

突然の声と賊達に向かって降り注ぐ矢を見て動きを止める。

稟「第二陣! 構えて下さい!」

風「お兄さん達に当てないように充分注意してくださいね」

兵「ハッ!」

稟「・・・今です! 発射!」

再び降り注ぐ矢の雨。なす術もない賊達は一人、また一人と倒れていった・・・

「どうやら、風達が兵をまとめてくれたようだな」

一成殿が街の城壁を見ながらつぶやく。

星「ええ、あの二人は軍師志望ですか・・・ら・・・」

ペタン

言い終わると同時に地面にへたり込んでしまった。どうやら限界みたいだ。

—「星、どうしたんだ？」

星「お恥ずかしながら・・・限界が来たようで、足に力が入りません」

—「ふむ・・・」

私が答えると一成殿は何か考える仕草をし、そして・・・

—「星・・・嫌かもしれないが少し我慢してくれよ」

星「一成殿何を？・・・きゃっ」

私の前に来たかと思うと、突然、私の背中と膝を下から抱え持ちあげた。

星「か、かかか一成殿!？」

一「動けないまま放置するわけにもいかないだろ？ このまま街まで連れて行くから少し耐えてくれ」

これは・・・一成殿の顔がすぐ近くにあって落ち着けん！ なんなのだこの抱え方は／＼ だが・・・こうして一成殿の胸の中にと、気持ちが悪くも確かだ。

一「星・・・大丈夫か？」

私の様子を見て不安げな顔をする一成殿。とても先ほどまであれだけの武を振るっていた方とは思えんな。

星「ええ、一成殿のおかげで疲れ以外は特にありません」

一「そうか・・・よかった」

星「っ・・・／＼」

嬉しそうに笑う一成殿。前回見たのと同じ見る者を虜にする笑顔。その笑顔を見て、私は先ほどまでの疑問の答えを知った。

なんてことはない、私はこの方に惚れたのだ。高い志を持ち、私の危機に駆け付けてくれ、私を魅了する笑顔を持つこの青年に惹かれたのだ。

—「星……？ やっぱりどこかケガでもしたんじゃない？」

またしても不安な顔をする一成殿。ふふ、今はそれすらも愛おしく感じる。

星「心配症ですな一成殿は……」

ギュツ！

—「せ、星！？」

首の後ろにまわしていた腕に力を込めてさらに密着するようになると、彼の顔がみるみるうちに赤くなった。

星「ん？ なんですかな」

—「いや……その……なんでもない……」

ふふふ、思ったよりも初心なですね。てつきり女性の扱いには慣れてると思っただのですが、これからが楽しみです。

これからどうやって一成殿をからかってやるのか？ 一成殿に抱えられ、街に戻るまでの間、私はずっと考えていた・・・

第三話 自重しない人間ほどやっかいなやつはいない(後書き)

作「戦闘終了！ いや〜難しかったね」

―「そこまで言うほどのものじゃなかったがな」

作「グサ！ うるせい！ 今の俺にはこれが精一杯なんだよこの天然ジゴロ！！ スケコマシ！！ 女の敵！！！」

―「全部お前が考えたんだろがああああ！！！」

バキイ！

作「ぎゃああああ！！！」

―「つたく、ふざけたこと言いやがつて。だいたい、永遠の旅人もそうだが一つのイベントが長すぎなんだよ！ まだこれ序盤の序盤だろ！？」

作「ふははは、俺も書いていて驚いた。これじゃ思いつきり星がメインの話になるな」

―「なんで書いた本人が驚いてんだよ・・・」

作「キャラの心情は難しいね、これからも書くけど・・・」

―「もう少し分かりやすくまとめて書けよ、長々書けばいいって

もんじやないだろ？」

作「頑張ります・・・」

第四話 本人の知らないところで盛り上がられても困る(前書き)

やっと、出発です・・・

第四話 本人の知らないところで盛り上がられても困る

街に戻った俺達を待っていたのは、人々の歓声だった。

「これは……」

星「当然でしょう、我等はこの街を救った英雄なのですから」

満足そうに星が答える

「……星、そろそろ降りてくれると助かるんだが」

星「何を言っておられるー成殿、貴殿は動けない女性を放り出すおつもりか？」

ニヤニヤしながら答える星。

「……わかった、もう何も言わん。とりあえず風と稟を探そう」

星「そうですね、あの二人にも礼を言わねば」

そのまま星を抱えながら二人を探す。しばらくして、二人の姿を発見した。

風「お帰りなさい〜お兄さ・・・ん・・・」

凜「無事でし・・・た・・・か・・・」

向こうも俺たちに気付いたようだが、なぜかこちらを見て固まった。

—「どうしたんだ二人とも？」

風「なるほど〜、帰りが遅かったのは二人でよろしくやっていたからですか〜」

凜「一成さんが星と・・・ブハッ！」

ドサッ

—「!?!?」

風がそう言うと、凜がいきなり鼻血を出して倒れた。

—「凜!?!? どうした? しっかりしろ!?!」

風「あら〜、またですか凜ちゃん。お兄さん大丈夫です、いつもの

事ですから」

—「いつもの？」

風「はい。実は稟ちゃんは一を聞いて十を妄想する変態さんなんですわ、風の言葉でまた妄想したんでしょ」

稟を介抱するために、再び宿屋に向かう。しばらくすると稟が目覚めたので、改めて話をする。

稟「さあ一成さん！ 話してもらいますよ！ あの剣はいつたいたいなんなんですか？」

風「風も気になってるんですよ、いきなりお兄さんの手に現れたんですから」

星「そうなのか？ 一成殿、私にも教えていただきたい」

—「わかった・・・でも、これからの話は三人だけの秘密にしといてくれよ」

うなずく三人、俺は説明した。

アレは俺の心の力を具現化した剣で、俺の望む形に姿を変えること、前にいた世界でこの力に覚醒したこと、そして・・・この力のせいで消滅したこと。

説明が終わると、三人の顔が沈んでいるのに気づいた。

—「どうしたんだ？」

凜「申し訳ありません—成さん。これは興味本位で聞いていい話じゃありませんでした」

風「自分の消滅を覚悟して力を使うなんて・・・」

星「すまない—成殿、私がふがないばかりに貴殿にまたその力を使わせてしまった」

—「気にしないでくれ、使うべきだったから使っただけだし、それに・・・もう消滅することもないからな」

俺の言葉に若干顔を明るくさせる三人、全て俺が望んだことなんだから気に病む必要なんてないのに。

星「消滅しない・・・？ それはなぜでしょう？」

—「この世界に来る前に、駄が・・・知り合いにこの腕輪をもらっただけな」

そう言って三人に腕輪を見せる。

風「綺麗ですね〜」

稟「確かに・・・それで、この腕輪がいったい？」

一「この腕輪からマナ・・・俺の力の源が流れ込んでくるんだよ。俺が消滅したのは力を使い果たしたから、つまり、これがあれば消滅せずに戦い続けることができるってわけ」

俺の説明に納得する三人。

星「しかし・・・天界というのは凄まじいですな」

稟「ええ、このような技術が存在しているなんて」

風「驚きなのですよ〜」

まあ、一応神から渡されたものだし、多元世界の中でもこれと同じくらいの技術を持っている世界は限られているだろう・・・

一「そうだ、言い忘れてた、二人とも・・・援護ありがとう」

星「私からも礼を言う、あれには助けられた」

風「いえ〜。お兄さんたちが頑張ってるのに風達だけが何もしない

わけにはいきませんでしたから」

稟「念のため、救援要請もしておきましたが・・・心配には及びませんでしたね」

そう言つて笑う二人、さすが軍師志望、抜け目がないな。

一「それじゃ、今度こそお別れだな」

賊を退けた今、俺達を邪魔するものは何もない。今度こそ出発の時だ。

風「はい、お兄さんお気をつけて」

稟「ご武運を」

一「ああ、二人も気をつけて」

二人と握手を交わす。また会えるといいな。

星「・・・」

一「星？」

風「星ちゃん？」

凜「どうしたんですか？」

黙りこむ星にたまらず声をかける

星「・・・決めた！ 私は一成殿について行くぞ！！！」

・・・

—「なんだってええええ！！！」

青空に、俺の声が響いた・・・

風「星ちゃん・・・」

凜「どういった風の吹きまわしですか？」

星「なに、簡単な事だ」

そう言って俺の腕に抱きつく星。

星「惚れた男について行くのは女として当然だろう？」

惚れた？ 星が？ 誰に？ ……俺に？

—「せ、星？」

星「駄目でしょうか一成殿？」

そう言っただけ抱きつく力を強める星。

—「そ…そう言ってくれるのは嬉しいんだが…俺達はまだ出会ったばかりだし…その…」

星「…プツ…クク…」

しどろもどろに答えようとすると、星が吹き出した。

星「冗談ですよ一成殿、貴殿は本当にからかいがいがありますね」

さっと俺から離れる星。なんだ冗談だったのか。

「性質の悪い冗談はよしてくれ星……」

星「いやーはっはっは！ すみません、つい」

悪びれもせずに笑う星。駄目だ、彼女には勝てる気がしない。

「はあ……もういいよ。それじゃ星、風、稟、またいつか」

星「ええ、その時は共に酒でも飲みましょう」

風「またですよお兄さん」

稟「また……いつか……お会いしま、は……鼻血が……」

もう一度三人に挨拶し、今度こそ出発する。さて……次は何処へ行く？とりあえず、地図もないし……適当か……

S I D E O U T

星・風・稟 S I D E

星「行かれたか……」

風「不思議なお兄さんでしたね……ところで星ちゃん、さっきの

話は本当はどうなんですか？」

星「話とは？」

風「お兄さんに惚れたって話ですよ」

星「ふふ、さあな」

風「あ〜ごまかしましたね」

星「それよりも・・・稟をなんとかしないと」

稟「やっぱり・・・一成さんと・・・星は・・・」

風「はい、稟ちゃん起きましようね〜、ほ〜らテンテン〜」

稟「う〜ん・・・はっ！ 一成さんは!？」

星「お主が気絶している間に発たれたよ」

稟「・・・そうですか」

風「あれ〜稟ちゃん、もしかしてお兄さんの事」

稟「な!?! なにを言うの風! 私と一成さんがそんな・・・ブ
ハッ!」

ドサッ

星「・・・またか」

風「はっい、トントント」

自分が発った後でこんなやり取りが行われていたのを、もちろん彼は知らない・・・

星・風・稟SIDE OUT

曹操SIDE

曹「これは・・・どういふこと？」

街が賊に襲われていると聞いて駆け付けてみれば、肝心の賊は既に全滅し、街は平穏そのものだった。

曹「私達より先にたどり着いた軍がいたの？」

もしま官軍・・・？ そんなわけではない、今のやつらにそこまで脅

のある者は存在しない。もしいるなら、賊がこの街を攻めるはずもないのだから。

？「華琳さま！」

そんな愚にもつかない事を考えていると、夏侯惇・・・春蘭がやって来た。

曹「お疲れ様春蘭、それで？」

夏侯「はい！ 住民に聞いたところ、この街に軍は私達以外やってきてはいないということです」

軍がないのに賊を撃退した？

曹「それだけこの街の警備兵が優秀だったって事？」

夏侯「いえ、賊が攻めてきた時、兵は混乱していて役に立たなかったそうです」

曹「・・・それじゃあいったいどうやって・・・」

？「華琳様・・・その事について」報告が「

わけがわからない中、夏侯淵・秋蘭が戻って来た。

曹「秋蘭・・・それで、報告は？」

夏淵「はっ、住民に聞いたところ、この街を救ったのは二人組の男女だそうです」

曹「・・・なんですって？」

たった二人で賊から街を守ったというの？ ありえない・・・

夏淵「信じられないのも無理がありません。ですが華琳様、聞き込みをした者全てから同じ答えが返ってきたのです。赤い槍を持った女と、輝く剣と光の盾を持った男が賊を打ち倒した・・・と」

少数なら笑い飛ばせるが、それだけ多くの人間から聞いたのならそれが真実なのでしょうね。

曹「そう・・・その男女の特徴は？」

夏淵「はっ、女の方は青い髪に白い服、男の方は黒みがかつた銀髪に太陽の光を反射する見たこともない服を着ていたそうです」

女の方はいいとして・・・

曹「その男・・・気になるわね」

巷を騒がせている噂が頭をよぎる・・・まさかね。

曹「とにかく、実力の方は充分のようだし・・・ぜひとも欲しいわね・・・」

それだけの武を持つ者なら必ず私の覇道の力になるはずだ。フフ・・・
待っていなさい、必ず探し出してあげる。

第四話 本人の知らないところで盛り上がられても困る（後書き）

作「曹操に目を付けられたな」

一「ああ、でも実際に会うのはまだ先なんだろう？」

作「うん、とりあえずお前には主要な勢力全てに行ってもらおうから」

一「なん・・・だと・・・」

作「そのあとで、改めてどこかの勢力に入ってもらおうから」

一「めんどくせえ、なんでそんなこと」

作「もちろん、フラグを立ててもらったためだ」

一「なん・・・だと・・・」

第五話 ご都合主義は主人公の特権です（前書き）

意外？ な人物と出会います。

第五話 ご都合主義は主人公の特権です

星たちと別れて約二週間、その間いくつかの村に立ち寄り、なぜか毎回襲ってくる賊を撃退していると異名がついた。

曰く、武器製造機（絆をいろいろ変えて戦ってたから）。

正義の使者（たいした見返りも求めず戦ってくれるから）。

自重しない男（賊を盛大に吹き飛ばしまくったから）。

破壊神（地面やらなんやらを壊しまくったから）などなど・・・正直
まともなものはほとんどなかった。天の御遣いと呼ばれる事もあつたが、まだそっちの方がマシだった。

「ふう、やっと落ち着けたな」

現在、俺は森に囲まれたある川原に来ていた。理由は簡単、水が無くなってしまうたのでその補給のためだ。

「・・・よし、これでだけあれば充分」

入れ物に水を入れ、いざ出発しようとしたその時……

ガサガサ！

—「ん？」

近くの草むらから音がしてきた。動物か何かだろうか？

少女「はあっ……はあっ……え？」

—「……こんにちは」

調べようと近づくと、一人の女の子が必死な顔で現れた……

S I D E O U T

少女 S I D E

少女「はあっ……はあっ……」

苦しい。足が重い。でも止まるわけにはいかない。服が破けているけどそんな事を気にしてられない。今の私には、こうして逃げることしかできないのだから。

賊A「どこに行きやがった!？」

賊B「アニキ! こっちに足跡がありましたぜ!」

賊A「でかしたチビ! おいデク! さっさとついて来い!」

賊C「だなあ・・・」

少女「ツ・・・! 追いつかれる!？」

背後から聞こえてくる足音は確実に近づいてくる。それでも・・・

少女「私・・・頑張るよ、詠ちゃん」

今もきつと私を心配してくれている大事な親友のためにも、捕まるわけにはいかない。

しばらくすると木々の間から光が差ししてきた。どうしよう・・・隠れるなら森の方がいいけど・・・

ガサガサ！

そんな事を考えている間にも足音が近づいてくる。

少女「・・・迷ってられない！」

私は森を抜ける。そこには・・・

少女「はあっ・・・はあっ・・・え？」

「・・・こんにちは

私にあいさつする銀色の髪の男の人がいた・・・

少女SIDE OUT

IN SIDE

「・・・こんにちは

とりあえずあいさつしておく。

少女「あ、こんにちは・・・じゃなくて、早く逃げて下さい!」

俺に向かって逃げろという少女。なにかあったのか？

—「どうして」やっと追い付いたぞお嬢ちゃん・・・そういう事か」

少女が出て来た場所から、三人組の男が出て来た。

—「(はて・・・どこかで見たような)」

賊A「おとなしく観念しな・・・って！ テメエはあの時の!」

—「・・・ああ、思い出したぞ。お前らあの時星にボコボコにされた奴らだな」

よく見れば、俺がこの世界に降り立って最初に出会った賊の三人だった。

A「あの時はよくも・・・って、んな事はどうでもいい。兄ちゃん、おとなしくその嬢ちゃんを俺たちによこしな」

リーダーらしき男、確か・・・アニキだったか？　が、女の子を指して言った。

ア「素直に言うことを聞きゃあ、命だけは助けてやるよ・・・もちろん、身ぐるみは置いて行ってもらうがな」

一「・・・一つ聞ぐが、渡した場合、この娘をどうするつもりだ？」

俺がそう言つと少女の体がピクンと動く。しまった、不安にさせてしまったか。

ア「もちろん、犯らせてもらうぜ。見たところいいとこの娘みたいだし、さぞ楽しませてくれるだろうな」

そう言つて下卑た笑いをする三人。

一「・・・わかった」

俺の言葉に賊は笑い、少女はあきらめの顔をする。

一「勘違いするな。そんな事言われて渡すわけないだろうがど阿呆。この娘は俺が守る」

少女を背に隠し、宣言する。

ア「守るだあ？ 女に助けってもらってたお前が？ ははは！ コイツはいいや、おいデク！ このバカやつちまえ！」

チ「わかったんだな、アニキ」

大柄な男が短剣を構える。この程度の相手なら素手で充分だな。

少女「あ……」

背中少女が声をかけてくる。さっきの賊の言葉に不安を感じているのだろう。

ナデナデ

少女「あ……」

一「大丈夫……あの程度のやつらに負けはしない、君は必ず守ってみせる」

できるだけ安心させるように頭を撫でる。これで落ち着いてくれる
といいけど。

少女「・・・へう／＼」

顔を赤くする少女「・・・なんでだ？

デ「行くだなあ」

少女を下がらせると同時に男が突っ込んできた。

「ふん！」

バキィ！

デ「ぎゃ！？」

男の腹を思い切り蹴り飛ばすと、そのまま木をへし折りながら森の
中に消えていった。

ア・チ・少「「「・・・え?」」」

驚く三人。まあ蹴り一発であそこまで人間が吹っ飛ぶのもすごいよな。

ア「て、テメエ! 何しやがった!??」

一「何って・・・蹴っただけだが?」

ア「ふざけるな! ただの蹴りで人間があんなに飛ぶわけ・・・」

チ「あ、アニキ!」

小柄な男がアニキと呼ばれる男の声を遮る。

ア「なんだよチビ! 今俺は・・・」

チ「アイツ・・・もしかして、今噂になってるヤツじゃ・・・」

ア「噂だぁ・・・? ってまさか・・・」

チ「あの銀色の髪に光る服・・・間違いねえ!!」

ア・チ「破壊神!??」

「……そう呼ばれる時もある……」

なんで数ある異名の中で一番物騒なヤツで知られてるんだよ……

ア「げえええ!! 本物お!?!」

チ「や、やばいよアニキ、噂じゃあアイツにケンカを売った相手は死よりもつらい目に遭うとかなんとか」

そんなことになってるのか? どんだけ尾ひれがついてるんだ。

「で……次はどっちだ?」

二人を睨みつける。

ア「ヒイ! 勘弁してくださいいい!!」

チ「その娘は諦めますからあ!」

「ならとつとと失せろ……」

ア・チ「すみませんでしたああああ!!!!」

叫びながら先ほど男が飛んでいった方に向かって走る二人。にしても・・・異名だけで追い払えるとは・・・これは使えるかもな・・・

少女「あ・・・あのう」

「ん？」

気づけば、下がらせていた少女が俺の前に立っていた。

少女「本当に・・・ありがとうございます。あなたがいなかったら今頃・・・」

そうやって自分の体を抱きしめる少女。よく見たら少し震えている。無理もない、あれだけの目に遭ったんだからな。

ナデナデ

少女「あ・・・」

よって、再び少女の頭を撫でる俺。

「もう大丈夫、君を追っていた奴らはもういないからね。安心し

てくれ」

少女「……はい」

そのまま少女の震えが収まるまで、俺は撫で続けた。

—「落ち着いたかい？」

少女「はい。ありがとうございます／＼」

数分後、落ち着いた少女に俺は話を聞くことにした。

—「俺の名前は秋月 一成。えつと……君は……」

少女「申し遅れました。私は董卓。真名は月と申します」

—「真名まで……いいのか？」

月「はい、秋月様は恩人ですから」

そういつて微笑む董卓……月。

—「わかった、つつしんで受け取らせてもらおうよ。俺には真名が無

いから一成って呼んでくれると嬉しい」

月「わかりました一成様」

一「月・・・その様って恥ずかしいから止めてくれないかな？」

月「へう・・・じゃあ、一成さんで」

一「呼び捨てでもいいんだが・・・まあいいか」

月「それで・・・その・・・一成さん」

一「ん？ なんだ？」

月「さっきの人たちの話の中にあつた破壊神って・・・」

一「ああ、俺の異名。向かう先に毎回現れる賊を倒していたらいつの間にか付いていた。他にも色々あるけど・・・ロクなものが無いんだよ・・・」

月「じゃあ・・・やっぱり、一成さんが天の御遣い様なんですね？」

一「たまにそう呼ばれる時もあるけど・・・」

俺がそう言つと、月が興奮したように話す。

月「お会いできて光栄です！ 御遣い様の噂は私達の所にも届いています！ 弱きを助け、悪をくじく。今日出会つて噂通り・・・いえ、

噂以上の方だと思いました!!」

とても嬉しそうに話す月。噂ってすごいな・・・

「ゆ、月、落ち着いてくれ」

月「え・・・？ へう、すみません。つい」

月を落ち着かせると、とたんに顔を真っ赤にさせて黙ってしまった。

「」ところで・・・どうして追われていたんだ？」

秀囲気を変えるために別の話をふってみる。

月「それは・・・そうだ！ 早く行かないと!!」

突然何かを思い出したような月に事情を尋ねる。

月「実は・・・この近くのお城に用事があつて、向かっていたところを先ほどの人達に・・・」

「」なるほど・・・だからこんな場所に」

月「お城には私の友達が先に向かっているんです。多分、私が未だに到着しない事を気にしていると思うんです」

一「そうか・・・もしよかつたらいつしよに行ってもいいかな？このまま一人で行かせるのもあれだし・・・」

月「それは嬉しいですけど・・・いいんですか？」

一「ああ、行くあてもないからね。俺その日ぐらしかから」

月「クス・・・はい、それじゃいつしよに行きましょう」

一「そうと決まれば・・・よつと」

月「え？」

俺は月を抱きかかえる。

月「か、一成さん!？」

一「友達が待つてるんだろ？なるべく急いだ方がいいからね。少し我慢していてくれ」

そう言って背中に翼・・・ハイロウを展開させる。空からなら城も見つけやすいしな。

月「綺麗・・・」

月が感嘆の声をあげる。なるべく力は使いたくないが・・・非常時だし仕方ないな。

そのまま空へと舞い上がる。

月「ふわぁ・・・すごい・・・」

ー「月、城はどっちにあるかわかるか？」

月「はい・・・あつちです」

月が指す方向へ体を向ける。

ー「月、飛ばして行くから舌を噛まないようにね」

月「え？ きゃ・・・きゃあああ〜!？」

ハイロウをはばたかせ、空を駆ける。

月「へう~~~~~!!」

雲ひとつない空に月の悲鳴？が響いた。

第五話 ご都合主義は主人公の特権です（後書き）

作「月かわいいよ月！」

一「いきなり気持ち悪いこと言ってんじゃねえ。あとなんだあの異名は!？」

作「かつこいいだろ？」

一「どこがだ！下手したらかなり危ない奴としてとられるだろうが!?!」

作「それも狙い」

一「死ねよやああああ!?!?!」

作「ぎゃばらあああああ!?!?!」

第六話 乱入すると大抵白い目で見られる(前書き)

チートします。自重しません。

第六話 乱入すると大抵白い目で見られる

城に向かう道中、いやこの場合は空中か・・・？ 月に尋ねる。

一「月、君の友達はどういう人なんだ？」

月「詠ちゃんの事ですか？」

一「えっと・・・それは真名だろうか？」

月「あ、すみません。彼女の名前は賈馱と言って・・・」

そう言って月は賈馱について話してくれた。

一「そうか・・・月は彼女の事が大好きなんだね」

月「はい！ 詠ちゃんは大事な親友です」

そのままとりとめのない会話をしていると城が見えて来た。

一「あれは・・・」

城の周囲では兵らしき人間達と、先ほどの男たちと似た格好をしている賊・・・黄巾党が戦闘を繰り広げていた。

—「さっきのやつらの仲間か？」

月「そんな！？ 詠ちゃん！！」

月が悲痛な声をあげる。無理もない。今話していた友達があのにいるのだから。

—「月・・・俺にしっかりさがみついでてくれ」

月「一成さん？」

—「奴らを止める」

俺は集中する。想像するのは一丁の長銃。それにオーラフォトンを流し込む。

—「月、目をつむっててくれ」

月「はい！」

月が目をつむつたのを確認し、俺は引き金を引く。

—「オオオラフォトンツ・・・ブラスタアアア！！！」

瞬間、世界が光に包まれた・・・

S I D E O U T

賈 駆 S I D E

賈「敵はこちらの二倍・・・か」

城壁の上から、城の周りにいる賊を見下ろす。本国に救援の要請はしたけど・・・正直間に合いそうにない。そのせいか兵たちの士気も上がらない。官軍のやつらなんて、祈っているやつもいる。まったく、祈るくらいならどうやってこの状況を打破するか少しは考えなさいよ。

賈「・・・というか、そもそもなんでボクが指揮を執らなきゃいけないのよ」

まったく、へぼ太守のせいでロクな事にならない。それよりも・・・

賈「月・・・お願い、無事でいて」

消息を絶ったと報告を受けた時は正気を失いそうになった。それでも可能性を信じて待つ。この城にやって来るのを・・・

賈「その時のためにも・・・さっさと片付けないとね」

ボクがそう言うと同時に、敵が動き出した。さて・・・戦闘開始ね。

・・・

賊「うおおおお!!」

兵「くらええええ!!!!」

賊「死ねええええ!!!!」

怒号、悲鳴、剣戟の音が響き渡る。今のところ城に被害は出ていない。このまま行けるかな？

そう思った瞬間・・・

ドゴオオオオン！！！！

賈「な、なに！？」

突然の振動がボクを襲った。おそらく城門を突破しようとしているのだろう。

賈「・・・マズイわね」

予想していたよりも敵の攻撃が激しい。敵も後が無い分必死だ。

賈「みんな頑張るのよ！ 援軍が来るまで耐え抜けばボクたちの勝ちなんだから！！」

兵A「お・・・応っ」

兵B「そうはいつでも・・・」

兵C「む、無理だよ！？」

兵たちも限界が近い。援軍が到着するのがいつか、ハッキリと言えないのが歯がゆい。

賈「（月ゴメン・・・ボクの方が駄目みたい・・・）」

あきらめの心が芽生えようとしたその時・・・

？「オオオラフォトンツ・・・ブラスタアアア！！！！」

賈「ツ！？」

謎の叫び声とともに、ボクの視界は真っ白になった。そして光が収まり、目を凝らすと・・・

賊「う、うう・・・」

あれだけいた賊の半分以上が倒れ・・・

？「・・・」

翼をはばたかせ、長い筒のようなものを携えている人間？ がいた・

・

賈馱SIDE OUT

IN SIDE

—「・・・やりすぎた」

加減がうまく出来なかった。光が収まると、半分以上の賊が地に伏しているのが確認できた。

月「・・・」

—「月、もう目を開けても大丈夫だよ」

月「は、はい・・・え!？」

目を開けた月が驚きの声をあげる。当然か、目を開けたらさっきまで暴れていた賊の半分以上が倒れているんだから。

月「これは・・・一成さんが？」

—「ちょっとやりすぎたがな．．あと、気絶しているだけで殺してはいいから」

月「そうですか．．」

ホツとした様子の方、やっぱりこの娘は人が死ぬのは好きじゃないようだ。それが敵だとしても．．

—「さて．．動きは止めたし、次は．．」

俺は次の作戦に移る、都合よく敵味方全てが俺を見ている。

—「．．．聞け皆の者！ 我が名は秋月 一成！ 破壊神、天の御遣いと言えはわかるだろう？ 賈馱よ、董卓は無事である！ 我は董卓よりこの城の存在を知りやってきた。それがどうだ、賊に襲われているではないか！！ このような所業、我には許す事が出来ん！ さあ勇敢なる兵たちよ、今こそ再び勇気を振り絞り己を貫け！
！ そして賊どもよ、我を怒らせた事を後悔するがいい！！」

静寂に包まれる戦場。だが、次の瞬間．．

兵達「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

兵達の雄叫びが響き渡った。

月「一成さん……」

「……痛っ」

月「？」

「舌がつつてしまった。慣れない事はするもんじゃないな」

思わず苦笑いをする。こんな一喝などした事無いし、俺には似合わ
ん。

月「ふふ……かつこよかったですよ」

「……ありがとう」

やっぱり止めておけばよかったかもしれない。

「……さて仕上げに……さあ！ 勇者たちよ！！ 熱く滾る魂を……
雄叫びと共に解き放て！！！！！！」

兵達「うおおおおおおお……！！！！！！」

俺の号令で勢いよく敵に向かう兵達。今さらだが勝手に号令をかけてよかったのだろうか？

S I D E O U T

賈 駆 S I D E

賈「なんなのよいったい!？」

突然現れた男を見る。いきなり出て来たと思えば、光って、敵が倒れている。わけわかんないわよ!!

兵 A「あれは？」

兵 B「知るかよ・・・」

兵 C「もしかして・・・」

兵たちも突然の事で動きを止めている。そこへ・・・

男「・・・聞け皆の者！ 我が名は秋月 一成！ 破壊神、天の御遣いと言えはわかるだろう？ 賈 駆よ、董卓は無事である！ 我は董卓よりこの城の存在を知りやってきた。それがどうだ、賊に襲わ

れているではないか!! このような所業、我には許す事が出来ん!
! さあ勇敢なる兵たちよ、今こそ再び勇気を振り絞り己を貫け!
! そして賊どもよ、我を怒らせた事を後悔するがいい!!」

賈「(あの男が天の御遣い?..月が..無事!?)」

ボクがそう思った瞬間・・・

兵達「」「」「うおおおおおお!!!!!!!!」」「」

賈「な!？」

兵たちの雄叫びがボクの耳をつんざく。

兵A「御遣い様だ!」

兵B「天の御遣い様が来て下さったぞ!!」

兵C「勝てる! 俺たちは勝てるぞお!!」

先ほどまでとはうって変わって士気は最高潮である。

賈「まったく・・・現金なものね」

とてもさつきまで諦めていた顔をしていたとは思えない。

そこへ・・・

月「詠ちゃん！」

賈「月・・・月っ！」

あの男に連れられて、大切な親友が目の前に降り立った・・・

賈 駆 SIDE OUT

IN SIDE

号令の後、月を城へ連れて行く。戦闘に巻き込むわけにはいかな
いからな。

月「一成さん・・・すみません」

一「いや、月みたいなか弱い少女を危険な目に遭わせるわけには行
かないからな」

月「へう・・・／＼」

とりあえず、城壁の上に降り立つと・・・

月「詠ちゃん！」

賈「月・・・月っ！」

月が一人の少女に抱きつく。なるほど、彼女が月の言っていた・・・

賈「月・・・無事でよかった・・・」

月「ごめんね詠ちゃん心配かけて」

賈「ううん！ 月が無事ならそれでいいの・・・」

月「詠ちゃん・・・」

感動の再会だな・・・と。

—「それじゃ、俺も行ってくるよ」

月に背を向け、長銃を剣に変える。

先ほどまで怒号と悲鳴が飛び交っていた場所は、今は歓喜の声に包まれるのだった・・・

第六話 乱入すると大抵白い目で見られる（後書き）

—「おい……」

作「なに？」

—「力は使わないんじゃないのか？」

作「今回は特別だよ。さすがに毎回使ったら戦いにならん」

—「だよな」

作「まあお前の場合、肉体の方も異常だがな」

—「マジかよ……」

作「それにしても、チートだね。一発で半分以上吹っ飛ばすなんて」

—「そういえば……結局俺の力……心剣『絆』ってなんなんだ？」

作「簡単に言うと、お前が想像した武器ならなんでも具現化できるってこと。だから今回長銃になったんだよ。剣っていうのは便宜上そう呼んでいるだけ」

—「もはやなんでもありだな……」

作「だってチートだもん」

—「……はあ……」

第七話 噂と実際出会ってみての印象は違う(前書き)

シンデレってなんですか？

第七話 噂と実際出会ってみたいの印象は違う

兵たちと共に賊を撃退した俺は城に招かれた。そこで賈馱から今回の戦いの経緯を聞いた。

曰く、この城・・・漢中城には視察のために来た・・・というのは建前で、防衛隊派遣というのが本当の理由だという。

現在の漢中は後漢王朝の直轄地となっている。それに、荊州、涼州、益州、長安を結ぶ交易の要衝でもある。その重要性から、漢から赴任してきた太守が周辺の領主に防衛部隊を出すよう依頼してきたという。しかし、おおっぴらにそのように言えば無能の烙印を押されてしまう。そこで、他の領主による視察と称して呼びだしていたのだ。

・・・ぶつちやけ「自分達だけじゃ無理だからみんな助ける」ということらしい。

最も、領主達も自分の領地を治めなくてはならないのでそれほど多くの兵を送らなかったが・・・

そして、その視察の本隊到着の先駆けとして城に入っていた賈馱に、自分の主の消息が途絶えた事と賊の出現が報告された。

賈「・・・以上があんたが来るまでの経緯よ」

―「なるほど」

賈馱の説明を受け考える・・・これってとばっちりじゃないか？

賈「全く、無能太守のせいで散々な目に遭ったわよ」

―「それで、その太守は？」

賈「敵の大軍を見た途端に気絶して寝込んでるわよ」

とことん無能だな。

月「一成さん・・・今回は本当にありがとうございました」

―「ん？」

月が頭を下げてきた。

月「私を助けていただいたばかりか、この城も守っていただけで・・・おかげで詠ちゃんも兵の皆さんも無事でしたし・・・どれだけ感謝しても足りません」

賈「その・・・一応、ボクからも礼を言っておくわ」

賈駆もそれに続く。

賈「正直・・・あなたが来てくれなかったらこの城は落ちていたでしょうし、何より・・・月が無事だった事が本当に嬉しかった。だから・・・ありがと・・・」

お互いが無事でよかった・・・か、本当に仲がいいんだな。

一「ゆ・・・董卓も賈駆も気にしないでくれ。俺が董卓を助けたのも、この城に来たのも全て偶然だったワケだし・・・」

月「それでも・・・助けていただいた事に変わりはありませんから」

賈「礼くらい素直に受け取りなさい・・・それと、ボクがいるからって遠慮せずに真名で呼べばいいじゃない」

微笑む月とそう言う賈駆。

一「・・・わかった？」

賈「あんた、さっき月って呼んでたじゃない」

—「……あ」

そういえば……城壁の上で呼んだ覚えが……

月「何かお礼をしたいのですが……」

—「気にするな。助けたいから助けただけだし」

賈「それじゃボクたちの気が収まらないの……！　そうだ、ボクの真名を預けるよ」

—「いいのか？　真名を……」

賈「他に何もなし、か……勘違いしないでよ！　月を真名で呼んでるならボクもそう呼べっただけで、別に呼んでほしいってワケじゃないんだから……！」

—「一気にまくしたてる賈ウラナ。」

—「ありがとう。詠……でよかったか？」

詠「フンッ……」

—「何か反応してくれ……」

月「クスクス・・・一成さん、詠ちゃんは照れてるだけですよ」

詠「ゆ、月〜！」

じゃれあう二人・・・この笑顔を守れてよかった・・・

・・・

—「それじゃ、俺はそろそろ行くよ」

月「はい・・・道中お気をつけて」

詠「・・・・・・・・」

出発を見送ってくれる二人・・・詠はまたそっぽを向いているが。

月「ほら、詠ちゃん」

詠「う・・・わかったわよ」

俺と顔を合わせる詠。

詠「その・・・気をつけて行きなさいよ」

一「ああ、ありがとう二人とも。また会おう」

月「はい、その時を楽しみにしています」

詠「フン・・・さっさと行きなさいよ・・・」

二人に背を向け歩き出す。予想外の出会いだったな・・・後に起る戦い、あの娘は絶対に守ってみせる・・・

SIDE OUT

月SIDE

月「行っちゃった」

一成さんの背を見つめ、これまでの事を思い出す。森の中、追われていたなんの関係もない私を助けてくれた。急いでいると言った私を城まで連れて行ってくれた。そして・・・

詠「変な男だったわね・・・」

私の大切な親友を助けてくれた。天の御遣い以外に破壊神なんて呼ばれてるけど、本当はとっても優しい人。

一成さんの笑顔を思い出す。きれいな笑顔だった。心が優しい人じゃないとあんな顔はできない。それに・・・

月「・・・かつこよかったなあ」

剣を振るっている時もかつこよかったけど、あの号令・・・凛々しい横顔を思い出すと顔が熱くなる。

月「へう・・・／＼」

詠「ちよつ、ちよつと月！ どうしたの？ 顔真っ赤よ!？」

詠ちゃんが私の顔を見て慌ててる。へう・・・もしかして・・・今も？

月「な、なんでもないよ詠ちゃん」

詠「そ、そう?」

なんとかごまかす、気をつけなきゃ・・・

詠「それにしても・・・破壊神なんていうから、どんなにツライヤツかと思ったら・・・案外普通ね。それに・・・」

月「それに・・・かつこよかった？」

詠「まあなかなか・・・って、何言わせるの!？」

月「ふふ・・・」

今度は詠ちゃんの顔が赤くなった。

詠「ぼ・・・ボクは別にアイツの事なんて・・・/ /」

月「わかってるよ詠ちゃん」

詠「月・・・?」

月「照れてるんだよね?」

詠「ちが〜う!」

月「ふふ・・・」

一成さん・・・今度お会いした時は、あなたのお話を聞かせてくださいね。

私は、
一成さんの歩いて行った道の方をずっと見続けていた・・・

第七話 噂と実際出会ってみたいの印象は違う(後書き)

作「再び出発」

—「・・・詠ってこんな娘だったか？」

作「ツンデレは難しいね」

—「・・・もういい、黙れ」

作「後にもう一度月の許へ行くからな」

—「また少しネタバレしたよな」

作「いいだろこれくらい。お前には反董卓連合編では月たちの方へついて連合軍相手に存分に無双してもらおう」

—「無双って・・・やりすぎるなよ」

作「大丈夫！剣の一振りです数十人が吹き飛ばす程度だから」

—「それがやり過ぎて言ってるんだよ！」

第八話 極限状態の人間の邪魔をしない(前書き)

キャラの名前がわかり難いかもしれません。

第八話 極限状態の人間の邪魔をしてはいけない

月たちと別れて数日、俺はある街にやって来た。

—「・・・腹減ったな」

俺は今空腹に苦しんでいた。この街以外に立ち寄れる場所は無かつたし、食料も持っていなかった。今にも倒れそう。

—「とりあえず飯を・・・」

そう思い、目に入った店に入る。適当な席に座り、早速注文する。

—「青椒肉絲チンジャオオロスと回鍋肉ホイコーロそれと杏仁豆腐お願いします」

給仕の女性「はい、かしこまりました。少々お待ち下さい」

注文を聞きに来た女性に注文し料理を待つ。

?「お姉ちゃん、愛紗、早く来るのだ!」

?「まってよ鈴々ちゃん!」

？「こら鈴々！ 一人で先に行くんじゃない！」

？「二人が遅いのだ！ 鈴々はお腹ペコペコなのだ！」

すると、一人の少女と、それに続き、二人の女性が店に入って来た。

女性B「全く・・・お前というやつは」

女性A「まあまあ愛紗ちゃん、ここまで来るのに大変だったし・・・ね？」

女性B「桃香さまがそうおっしゃるなら・・・」

少女「さっすが、お姉ちゃんは話がわかるのだ！ 愛紗は堅物だからこまるのだ」

女性B「鈴々々！！！」

女性A「あ、あはは・・・」

—「（にぎやかだな・・・）」

給仕の女性「お待たせしました、ご注文の品です」

—「来たか」

さっそく料理を口に運ぼうとしたが・・・

？「なんだよこのクソ不味い料理はよお！」

突然聞こえてきた怒声が俺の箸を止めた・・・

S I D E O U T

劉備 S I D E

管輅ちゃんの占いを信じて天の御遣い様を探して数週間、未だに会うことができない。でも、行く先々で話は聞くから確かにいるというのはわかっている。だから、こつして愛紗ちゃんと鈴々ちゃんといっしょに探しているんだけど・・・

劉「この街にもいないか？」

噂を聞く方角に足を進めてたどり着いた街だけど、それらしい人は見えない。うっ・・・どこにいるんだらう？

？「桃香さま～！」

？「お姉ちゃん！」

落ち込んでいる私を呼ぶ声に振り向くと、愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの姿があった。

劉「二人とも・・・どうだった？」

愛「申し訳ありません・・・私の方は何も」

鈴「鈴々もダメだったのだ」

劉「そっか・・・」

二人の方も収穫は無かったみたい。

グ

劉「あ・・・」

鈴「にははは、鈴々お腹すいたのだ」

鈴々ちゃんのお腹からかわいい音がなった。

劉「そういえばそろそろお昼の時間だね。いったん中止して、ご飯でも食べに行こっか」

鈴「賛成なのだ！ 早く行くのだ！」

そう言って走り出す鈴々ちゃん。ふふ、よっぽどお腹がすいてたんだね。

愛「あ、こら待て鈴々！・・・行ってしまった」

劉「はぐれちゃいけないから私たちも行こ、愛紗ちゃん」

愛「はい、桃香さま」

愛紗ちゃんといっしょに追いかけると、あるお店の前にいた鈴々ちゃんを見つけた。

鈴「お姉ちゃん、愛紗、早く来るのだ！」

劉「まってよ鈴々ちゃん！」

愛「こら鈴々！ 一人で先に行くんじゃない！」

鈴「二人が遅いのだ！ 鈴々はお腹ぺこぺこなのだ！」

私たちを見て鈴々ちゃんはお店の中に入っていった。

愛「全く・・・お前というやつは」

劉「まあまあ愛紗ちゃん、ここまで来るのに大変だったし・・・ね？」

愛「桃香さまがそうおっしゃるなら・・・」

鈴「さつすが、お姉ちゃんは話がわかるのだ！愛紗は堅物だからまるのだ」

愛「鈴々々！！」

劉「あ、あはは・・・」

なんとか愛紗ちゃんをなだめて席に座ろうとすると・・・

？「なんだよこのクソ不味い料理はよお！」

突然怒鳴り声が聞こえた。

劉「な、何！？」

愛「むっ・・・」

鈴「あそこなのだ」

鈴々ちゃんの指差す席を見ると、三人組の男の人が給仕の女性に向かって怒っていた。

男A「この店じゃこんなモンを客に出すのかよ!」

給仕の女性「も、申し訳ございません」

男A「店主呼べ、店主!」

すると、お店の奥から店主と思わしきおじさんが出てきた。

店主「ど、どうされましたお客様?」

男A「お前が店主か? お前の店じゃこんな料理で金を取るのか? ええ!」

店主「も、申し訳ございません。すぐに別の料理を・・・」

男A「いらねえよ・・・! その代わりに、謝罪の証にこの店の売り上げをよこしな!」

店主「そんな!」

男B「アニキが言っただから早くしろ！」

男C「早くするんだなあ」

ひどい言い掛かりだ。おそらく、最初からこつする気だったのだらう。

愛「あやつらあー！」

劉「お、落ち着いて愛紗ちゃん！」

愛「桃香さま！？ ですが！」

劉「気持ちわかるよ。でも、今出て行っても相手にしてもらえないと思うから」

愛「・・・わかりました」

今にも飛び出しそうな愛紗ちゃんを抑えて様子を見る・・・私も本当はすぐ止めたいけど・・・

店主「そ、それだけのご勘弁を！ そんなことをしたら明日からどうやって・・・」

男A「うるせえ」

バキッ！

給仕の女性「きゃああ！」

おじさんが男の人に殴り飛ばされた。そのまま近くの机を巻き込みながらおじさんは倒れた。

男A「だったらこの女をもらっていくぜ！ それでチャラにしてやる」

店主「ゆ、許して下さい！それは私の娘です！ どうか、どうか！」

男A「娘一人で店が助かるんだろ？ だったらあきらめな」

店主「そ、そんな」

給仕の女性「お父さん！」

女性の手をつかんで店を出て行くところとする三人。

愛「もう我慢できん！ 桃香さま、私は行きます！」

愛紗ちゃんが限界みだいだった。武器を持って三人の前に立つ。

愛「待て貴様ら！ これ以上は「ざあかましいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii
!!!!!!!!!!!!!!!!」な!?!」

劉「きゃっ!」

鈴「なんなのだ!?!」

店主「う．．．うう．．．」

給仕の女性「ああ．．．」

男A「な、なんだ!?!」

男B「あ、アニキ、あそこ!?!」

男の人の指差す方向を見ると、そこには．．．

銀髪の男「料理が．．．俺の料理が．．．」

虚ろな目、だけど私でもわかるくらい凄まじい殺気を放ち三人を見つめている銀色の髪 of 男の人の姿があった．．．

劉備SIDEOUT

IN SIDE

「」コロツキか

どうやら言い掛かりをつけて金を巻き上げようという魂胆らしい。

「」下らんな・・・

とりあえず止めようと席を立つ。

ゴ」うるせえ！

バキッ！

給仕の女性「きゃああー！」

店主の男性が殴り飛ばされ、俺のいた席を巻き込みながら倒れた。

・・・一口も食べていない料理ごと。

「……………」

あれ？ 俺の料理は？ まだ食べていないのに……ああ……もし
かして、この床に散らばっているやつか？ はは……見事に全滅
だ……

……オレノ

……リヨウリガ

……ゼンメツ

……

……

……

……プチン。

その時、俺の中の何かが切れた音がはつきり聞こえた・・・

騒ぎの中心を見る。三人の男と二人の女性の姿が見える。アレか・・・あの男達が俺の料理を・・・何やら騒いでいる。

うるさい・・・黙れ・・・腹に・・・響くだろうが!!!!

「「「ごめかましいiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!」」」

俺は叫ぶ・・・それは魂の叫びだった。

ゆっくりと歩を進め、湧き上がる力をため込む。全ては俺の幸せのひとつを奪った者どもへ報いを受けさせるために。

「「貴様等が・・・貴様等が・・・」

ゴ「な、なんだテメ・・・ヒツ!? アンタは、いや、あなた様は
!!!!」

ゴA・B「「破壊神!?!」」

「ああ・・・貴様らか・・・数日ぶりだな」

よく見れば数日前、月を襲おうとしていた三人組だった。二度ある事は三度あるというが・・・

女性A「えっ！　ウソ！？　じゃああの人为天の御遣い？」

女性B「なっ！？　このような所で出会うとは・・・」

少女「あのお兄ちゃんが御遣いなのか？」

店主「おお・・・なんという」

給仕の女性「御遣い様・・・」

周りの人たちが何か言っているがよく聞こえない。今の俺には目の前の三人以外に意識を向ける気は無い。

「つくづく貴様等とは縁があるようだな・・・」

ア「そ、そういうダンナはなんでここに？」

「貴様らと会った日から口クなもの食べていなかったからな、たどり着いたこの店で食事をしようと思ったら・・・またずいぶんと面白そうなことをしてるじゃないか。なあ・・・アニキ、チビ、デク・・・だったか？」

そう言っつて三人を睨みつける。今の俺なら視線だけで人が殺せそう
だ。

ア「あ、あつしらのあだ名を御存じで？」

ー「そりゃああれだけ目の前で呼ばれてりゃあ憶えるさ。とりあえ
ず・・・その女性を離せ・・・」

そう言っつてさらに殺気を強くする。

ア「へ、へい！　すぐに！！」

慌てて女性から手を離すアニキ。女性は父親の方へ走って行った。

ア「そ、それじゃあつしらはこの辺で・・・」

店から出て行くこうと背を向ける三人。は？　何を言っているんだ？

ー「俺の話はここからだぞ」

再び睨みつける。すると、蛇に睨まれた蛙のように三人の動きが止まった。

ア「ま、まだなにか?・・・」

ー「ああ・・・アレを見る」

そういつて床に散らばった料理を指す。

ア「あのこぼれた料理が何か?」

ー「・・・アレは俺の数日ぶりの食事だった。お前らにわかるか? 空腹に苦しみ、やっと食べる事ができると思った料理が目の前でこぼれ落ちて行く時の気持ちか・・・」

天国から地獄へたたき落とされる絶望感が・・・

ー「お前らが余計な事をしてくれたせいで俺の腹は限界だよ・・・」

ア「そ、それは・・・」

ー「三人とも・・・すこし頭・・・潰そうか?」

ア・チ・デ「ヒッ!」「ヒッ!」「ヒッ!」

俺は三人に向かつて突っ込み、大柄な男・・・デクに飛び膝蹴りを叩きこむ。

—「これは店主の分！」

ゴキイ!

デ「ぐえ・・・！」

そのまま空中で一回転し、小柄な男・・・チビの脳天に踵落としを決める。

—「これは娘さんの分!!！」

ガツン!!

チ「ぎゃ・・・!!」

着地し、右手にありったけのオーラを込める。そして、リーダー・・・アニキに渾身の掌底を打ち込む。

「そしてこれが・・・一口も食われることなく逝ってしまった・・・料理たちの怒りだああああああああああ！！！！！！！！！！」

バゴン！！！！

ア「ぎゃああああああああ？！？！？！？！？」

吹き飛んだアニキはそのまま店の天井を突き破り・・・

キラッ

彼方へと消え去った。

「・・・・・・・・さて」

俺は気絶しているチビとデクを外に引きずり出す。そして・・・

「「そおい！！！」

ブウォン！！！！！！！！！！

アニキが飛んで行った方へおもいつきりぶん投げた。運がよければ再会できるだろう。

—「また会つたら・・・今度こそ殺るか？」

そつだな、そつしよう・・・

店主「あ・・・あのお」

—「はい？」

振り返ると店主の方と娘さんがいた。

店主「あなた様のおかげで助かりました。まさか、御遣い様に助けていただけるとは」

娘「なんとお礼を言ったらいいか・・・」

そつ言つて頭を下げる二人。

—「いいですよ礼なんて。むしろ、お店を壊してしまつて申し訳ないと思つていますし」

店主「そんな！ とんでもないです！ 店の売り上げも、娘も守っていたいただいたのに、これで文句を言うような恩知らずではありませんん！」

—「そ、そうですか。それじゃ俺はこの辺で」

娘「待ってください！ せめて、お食事を・・・」

—「いえ、お店の修繕などで忙しいでしょうし、そのお気持ちだけ受け取っておきます」

そう言っつて店を後にする・・・正直かなり美味しそつだったのでかなりもつたたいない。しかし、お店に迷惑をかけるわけにもいかなかつたし・・・しょうがない。

—「・・・別の店を探そう」

とにかく何か腹に入れないと本当に倒れそつだ。そつ思い店を探している・・・

？「ま・・・待ってくださいー！」

—「・・・今度はなんだ？」

気力を振り絞り振り返る。

女性A「はあっはあっ・・・やっと追い付いた」

女性B「お疲れ様です桃香様」

少女「にははは、お姉ちゃんは足がおそいのだ」

女性A「むっひどいよ鈴々ちゃん！」

声をかけて来たのは、先ほどの店にいた女性達だった。

女性B「コホン・・・桃香様」

女性A「は、そうだった・・・あのう・・・失礼ですがあなたのお名前は何ですか？」

「人に名前を尋ねるなら、まず自分が名乗ったらどうだ？」

空腹のせいか、若干声が荒くなる。

女性A「あ、ごめんなさい。私の名前は劉備」

女性B「私は関羽。劉備様の忠実なる家臣」

少女「鈴々は張飛なのだ！」

—「……そうか」

どこかで見覚えがあると思ったら、ゲームに出てきたのと全く同じ姿だ。彼女達が蜀の中心人物か……

—「俺の名前は秋月 一成。よろしく」

劉「銀色の髪に光る服、そして秋月……」

関「桃香様……」

劉「うん、間違いないよ！ この人が」

張「にや？ 御遣い様なのか？」

劉「そうだよ鈴々ちゃん！ やつと見つけたよ！」

関「おめでとございます桃香様」

劉「二人のおかげだよ〜ありがと〜」

抱き合う三人。なんなんだいったい？

—「すまない……話が見えないんだが」

劉「あ、ごめんなさい・・・一つお聞きしますが、あなたが天の御遣い様ですか？」

—「・・・そう呼ばれる事もある。今じゃもっぱら破壊神の方が有名だがな」

広めたやつ出てこい！

劉「そうですか・・・！ 御遣い様、お願いがあります！」

先ほどまでと違い引き締まった顔をする劉備。関羽もそれに続く。張飛は・・・点心の店を見つめている。

劉「御遣い様・・・私たちに力を貸してください」

—「・・・ハイ？」

空腹に苦しんだ末にたどり着いたこの街で、俺は慈愛の王・・・劉備玄德に出会った。この出会いが何をもたらすか、それはまだ誰にもわからない・・・

第八話 極限状態の人間の邪魔をしてはいけない（後書き）

—「……………」

作「ん？どうした？」

—「俺のキャラが崩壊していく……………」

作「腹が減りやイライラするだろ」

—「イライラのレベルじゃないだろ！なんだよ料理たちの怒りって！？」

作「俺には料理の声が聞こえるのさ」

—「下らねえウソついてんじゃねえ！」

作「ほら、落ち着けて。カルシウムが足りないからそんなにイライラするんだよ」

—「…………俺のイライラの原因の一番はテメエという存在だということが何故わからん」

作「なにか言っただか？」

—「いつか死なす……………」

第九話 覚悟無き理想は決して叶わない (前書き)

やっぱり・・・蜀ですかね・・・

第九話 覚悟無き理想は決して叶わない

劉備SIDE

劉「すごい・・・」

あつという間に男の人達をやっつけちゃった御遣い様・・・ちよつと怖かったけど。

店「おお、ありがたやありがたや」

おじさんが御遣い様の去って行った方を向いて拝んでいた。

劉「・・・ってこうしちゃいられない！愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、追いかけてよう！」

愛「わ、わかりました！」

鈴「むぐ！ まだ何も食べていないのだ！」

ゴメンね鈴々ちゃん。でも今を逃したらもう出会えないかもしれな
いから。

急いで後を追う・・・しばらくして、銀色の髪の男の人の後姿が見えた。

劉「ま・・・待ってくださいー！」

引き止めるために大きな声を出す。

男「・・・今度はなんだ？」

どうしたんだろう？ なんだかとてもつらそうな顔をしている。

劉「はあっはあっ・・・やっと追いついた〜」

全力で走ったから疲れちゃった。

愛「お疲れ様です桃香様」

鈴「にははは、お姉ちゃんは足がおそいのだ」

劉「むっひどいよ鈴々ちゃんー！」

これでも一生懸命走ったもん！

愛「コホン・・・桃香様」

愛紗ちゃんの言葉に我に返る。ああ！御遣い様が呆れてる！

劉「は、そうだった・・・あのう・・・失礼ですがあなたのお名前は？」

男「人に名前を尋ねるなら、まず自分が名乗ったらどうだ？」

少し怒ったような声。そうだよ、ちゃんと自分から名乗らないと。

劉「あ、ごめんなさい。私の名前は劉備です」

愛「私は関羽。劉備様の忠実なる家臣」

鈴「鈴々は張飛なのだ！」

男「・・・そうか」

私の後に続いて自己紹介する二人。

男「俺の名前は秋月 一成。よろしく」

御遣い様も名前を教えてくださいました。一成さんか。

劉「銀色の髪に光る服、そして秋月……」

愛「桃香様……」

劉「うん、やっぱり間違いないよ！ この人が」

鈴「にや？御遣い様なのか？」

劉「そうだよ鈴々ちゃん！ やつと見つけたよ！」

愛「おめでとうございます桃香様」

劉「二人のおかげだよ、ありがと」

思わず二人を抱きしめてしまった。だって嬉しいんだもん！

—「すまない……話が見えないんだが」

劉「あ、ごめんなさい……一つお聞きしますが、あなたが天の御遣い様ですか？」

間違いないだろうけど、一応本人に確認する。

—「……そう呼ばれる事もある。今じゃもっぱら破壊神の方が有名だがな」

なぜか落ち込んだ様子の御遣い様。そう呼ばれるの嫌いなのかな？

劉「そうですか……！ 御遣い様、お願いがあります！」

これから言う言葉に緊張してしまう。断られたらどうしよう？ 愛紗ちゃんも真剣な顔で御遣い様を見ている。鈴々ちゃん……もう少し我慢してね。

劉「御遣い様……私たちに力を貸してください」

精いっぱい気持ちを込めてお願いする。みんなが笑って暮らせるために御遣い様の力を貸してほしいと。でも……

—「……ハイ？」

返ってきたのは了承の言葉でも拒否の言葉でもなく……わけがわからないといった感じの声だった……

劉備SIDE OUT

IN SIDE

マズイ・・・限界みたいだ。目の前の女性・・・劉備の言葉もハッキリ聞こえなくなってきた。

劉「で、ですから私達に力を・・・」

—「すまない・・・話は後で必ず聞くから・・・」

話を遮り、近くの店を指す。

—「今は・・・飯を食べさせてください・・・」(泣)

朦朧とした意識の中、三人と共に店に入った。

・・・

—「ふう・・・助かった」

俺の目の前には大量の皿があった。とにかく片っ端から注文して腹に入れ、なんとか落ち着いた。

劉「す・す・すごい」

関「鈴々と同じくらいの食欲だと!？」

張「にや? 鈴々はもっと食べられるのだ!」

おかわりする張飛・・・まだ食うのか?

—「それで、悪いんだがもう一度話を聞かせてもらえないか?」

劉「はい、私達は・・・」

劉備が語り出した。曰く、三人は弱き人々が理不尽な目に遭い傷つき倒れていくことに我慢ができなくなり、少しでも力になれるようにと旅をしていたらしい。

劉「・・・でも、三人だけじゃもうどうしようもないところまできている」

関「権力を持った人間による圧政、それによる賊の増加、それが繰

り返される日々」

張「鈴々達がどんなに頑張っても、もう限界なのだ」

劉「そんな時・・・天の御遣い様の噂を聞いたんです！」

—「俺の？」

劉「はい！ 見返りも求めず賊からたくさんの人々を守っている素晴らしい方だと！！」

あれは向かう先に勝手にやってきた賊を迎え撃っていたただけなんだが・・・

関「先日も城を襲った賊の大軍を、天の光により退治したと聞いております」

天の光？ 城って言うと・・・

—「・・・ああ、オーラフォトンブラスターの事か？」

天の光か・・・言い得て妙だな。

劉「おおらぶおとんぶらすたあ？」

関「むう・・・不思議な名前ですね。それが天の秘術なのですか？」

張「おら・・・ふおと・・・むゝ！ 難しいのだ」

一「オーラフォトンブラスターな。俺の武器の一つだよ」

三人の前で長銃を発現させる。

劉「ふわぁ！」

関「なつ！ どこから!？」

張「きれいな筒なのだ」

驚く三人。

一「これは銃といって、この部分を引いて、こっちの穴からオーラ・
・・気を発射して攻撃するんだよ」

とりあえず銃について説明する。思いのほか時間がかかってしまっ
たが・・・

一「話が逸れたな。それで、噂を聞いて俺に会いに来たと？」

劉「はい、御遣い様をお願いしたい事がありまして」

さつき言つてたやつだな。

—「それは？」

劉「御遣い様・・・私達に力を貸してください！」

そう言つて頭を下げる劉備。関羽も、今回は張飛も真面目にしている。

—「力を？」

劉「はい、天の御遣いであるあなたに力を貸していただければ、今よりもっと多くの人々を救える事が出来ると思うんです！」

関「無力な人々を・・・悪しき者の手から守るために！」

張「力を貸してほしいのだ！」

人々を救う・・・か。

—「劉備……一つ聞かせてくれ。君の目指すものはなんだ？」

劉「それは……誰もが笑顔で暮らせる世を作る事です！」

真っ直ぐな目で俺を見る劉備。

—「……理想はあくまで理想だ。君の言う世界を作るのは並大抵な事では不可能だ」

劉「……はい」

—「君のその理想によって、これから多くの人が倒れていくだろう。君にはその覚悟があるのか？」

劉「それは……」

—「覚悟が無ければ止めた方がいい……君には俺と同じようになつてほしくない」

劉「え？」

そう……力を得るために旅人になっても、結局多くを失ってしまった俺の様には……

劉「……ます」

—「ん？」

劉「あります！ 私にだって・・・譲れないものがあるんです！ だから・・・だからお願いします！ 私達に力を貸してください！！」

再び頭を下げる劉備。これは・・・本物だな。

ゲームの中ではただ理想を追い求めてるだけの人物だと思っていたが、本当はしっかりとした覚悟を持っていたんだ・・・

—「・・・わかったよ」

劉「それじゃあ！」

—「俺の力がどこまで役に立つかわからないが、それでもいいなら君達の理想を共に追わせてくれ」

この娘といっしょなら、不可能も可能になりそうだな。

劉「ありがとうございます！ いっしょに頑張りましょう！」

関「共にこの乱世を鎮めましょう！」

張「いっしょにがんばるのだ〜！」

笑顔の三人・・・この笑顔を守らなくてはな。

・・・

—「・・・この辺か？」

関「はい、おかみの話ではこの辺りに桃園があるはずです」

劉「おかみさん、いい人だったね」

鈴「早くお酒のみたいのだ！」

さっきの店のおかみさんに桃園の場所を聞き、俺達は今そこに向かってる。俺達の話聞いていたらしく、俺達の新しい門出を祝ってお酒まで渡してくれた。話の後、まったく行くあてを覚えていなかった劉備に若干呆れていると、さらにおかみさんがこの近くを治めている公孫贇のところへ行ってみるようすすめてくれた。

嬉しかったので笑顔でお礼を言うと、なぜか顔を赤くされてしまったが・・・

—「公孫贇・・・か」

劉「え？ ご主人様、白蓮ちゃんの事知ってるの？」

—「名前だけ……って劉備……そのご主人様って？」

劉「だって、ずっと御遣い様って言っわけにもいかないし、あと私の事は桃香でいいよ」

—「真名か？」

桃「うん、これからはいつしよに頑張る仲間だもん」

関「そうですね、ご主人様、私の事は愛紗とお呼びください」

張「鈴々は鈴々なのだ」

関羽と張飛も真名を覚えてくれた。

—「わかったよ、桃香、愛紗、鈴々……俺の事は一成でいい……」

桃「なに？ ご主人様？」

愛「ご主人様……なにか？」

鈴「お兄ちゃんどうしたのだ？」

—「いや……なんでもない」

決定みたいだな・・・

・・・

桃「到着」

そうこうしている内に目的の場所に着いた。一面に広がる桃の花。

愛「美しいですね。桃園の名にふさわしい場所です」

—「そうだな・・・」

前の世界でみんなと花見をしたのを思い出した・・・みんな元気かな。

鈴「お酒なのだ」

嬉しそうに走り回る鈴々。

愛「・・・約一名、この素晴らしさをわかっていない者がおりますが・・・」

桃「鈴々ちゃんらしいね」

—「なんとなくあの子の事がわかった気がする・・・」

適当な場所を探し、おかみさんにもらったお酒を盃に注ぐ。そして、それを空に掲げながら誓いの言葉を述べる。

桃「我ら四人！」

愛「姓は違えど姉妹の契りを結びしからは！」

鈴「心を同じくして助けあい、みんなで人々を救うのだ！」

桃「同年、同月、同日に生まれるを得ずとも！」

愛「願わくば同年、同月、同日に死せんことを願う！」

—「・・・乾杯」

俺・・・姉妹じゃないけど・・・

俺はこの世界で進むべき道を決めた。この心優しき少女、桃香の力になる事を・・・この出会いが何をもたらすのか・・・それはまだ誰にもわからない・・・

第九話 覚悟無き理想は決して叶わない (後書き)

作「勢力決定、蜀になったな」

一「・・・全部回ってから決めるんじゃないのか？」

作「そうしたかったんだけど、そうしたら反董卓連合で月たちところへ行くのに時間が足りなくなるからこうした。蜀は原作で唯一死者が出なかったしな」

一「そうか・・・ならなんで素直に協力させなかったんだ？俺にあらんな過去ないだろ！」

作「桃香がただの甘ちゃんじゃなく、ちゃんと覚悟を持っているんだということを見せたかったんだよ」

一「なるほど・・・お前には考えているな」

作「だろ？さあ、今回はあの娘との再会だぞ」

一「あの娘って・・・もしかして！」

作「ふっふっふっ、楽しみにしているよ」

第十話 いきなり再会すると何を話していいかわからない(前書き)

あの娘が再び登場します。

第十話 いきなり再会すると何を話していいかわからない

桃園での誓いの後、俺達はさっそく公孫贄の城へと向かった。

門兵「止まれ！ 何者だ！？」

桃「太守様に会いに来たんですけど、劉備が来たと伝えてもらえませんか？」

門兵「劉備？」

桃「はい、昔からの友達なのでそれでわかってもらえるかと・・・」

門兵「承知した。しばし待たれよ」

そう言っ中に入って行く兵。

桃「ふう・・・緊張した」

—「公孫贄は友達なんだろ？なんでそんなに緊張してたんだ？」

桃「だって、あの兵の人怖いんだもん」

怖いって（苦笑）

門兵「お待たせした。お会いしてくださるそうなのでついいてくるよ
うに・・・」

門兵の後に続いて城の中に入った。

公「桃香！ 久しぶりだな〜！」

桃「白蓮ちゃん！ うん、久しぶりだね！」

再会を喜ぶ二人。彼女がハム・・・公孫贄か。

公「桃香、今まで何をしていたんだ？ 連絡もとれなかったから心配してたんだぞ？」

桃「えつとね・・・あちこちで色んな人達を助けてたの」

公「・・・それだけか？」

桃「それだけ」

あきれた様子の公孫贄。

公「はぁ・・・桃香、ずっとそんな事やってたのか？」

桃「うん・・・」

公「どうして？」

桃「私・・・どこかの県に所属してその周りの人しか助けられないのが嫌だったの」

公「だからって・・・一人じゃ大したこともできないだろ？」

桃「そうでもないよ。それに・・・私にはとっても頼りになる仲間達がいるんだよ」

そう言つて、俺達を見る桃香。

公「ん？ この三人の事か？」

愛「私は関羽、劉備様一の家臣！」

鈴「鈴々は張飛なのだ！」

一「俺は秋月 一成。よろしく公孫賛」

公「秋月・・・？ もしかして・・・」

桃「うん！ この人が天の御遣い様だよ！」

自慢げに話す桃香。

公「なっ！ アンタが噂の破壊神!？」

—「やっぱり破壊神で知られてるんだな・・・」

いっそのこと天の御遣いじゃなくてそう名乗るか？

公「ふ〜ん・・・へ〜・・・アンタがねえ・・・」

俺をジロジロ見る公孫贄。

—「どうした？」

公「え？ あゝ悪い悪い。想像していたのとだいぶ違うからついジロジロ見てしまった。許してくれ」

屈託なく笑う公孫贄。

—「いや、気にしないでくれ。勝手にそう呼ばれているだけだしな」

つられて笑い返す。

公「ツ・・・／＼ あ、ああわかった・・・」

なぜか顔を赤くされた・・・

桃「白蓮ちゃん・・・？ どうしたの？」

公「え！？ い、いやなんでもない！」

桃「そう？」

公「そ、そんなことより桃香、本当の用事はなんなんだ？ただ会いに来たわけじゃないだろ？」

桃「うん、賊退治をしてるって聞いたから手伝いにきたんだけど」

公「おお、それは助かる！ 兵を指揮する人間が足りなくて困ってたんだよ」

桃「皆とっても強いから安心してね」

公「桃香がそう言うなら大丈夫だろうけど・・・本当に？」

不安げに俺達を見る公孫贇。まあ初対面だし・・・

？「おやおや、伯珪殿にはその二人の力量が見抜けませんか？」

物陰から一人の女性が出てきた。

公「そう言うお前にはわかるのか？」

女性「当然、そちらの二人は只者ではない、雰囲気でわかります。そして……」

愛紗と鈴々を見た後、俺に視線を移す女性。

女性「この方の破壊神という異名は伊達ではない。そうでしょう？
……一成殿」

—「……星」

星「お久しぶりですな、一成殿」

俺はあの時の女性……星と再会を果たした。

公「秋月……星と知り合いなのか？」

—「ああ、俺が賊の三人組に絡まれていたところを彼女が助けてくれたんだ」

星「その後、私と一成殿で街を襲う賊を撃退しましてな。ふふ、あの時は心が躍りました」

・ あの時を思い出して楽しそうに笑う星・・・大変だったんだがな・・・

桃「ご主人様そんなことしてたんだ」

愛「さすがですご主人様！」

鈴「二人でやつつけるなんてすごいのだ！」

三人が称賛の目で俺を見てくる。

星「ん？ そういえば、そちらの三人には名乗っていませんでしたな。私は趙雲、よろしく頼む」

桃「私は劉備です。よろしくお願ひします」

愛「私は関羽」

鈴「張飛なのだ」

お互いの自己紹介が終わると、公孫賛が口を開いた。

公「ふむ、桃香の力は知っているし、二人は星のお墨付き、秋月は・
・今の話で充分だな。すまないが・力を貸してくれ」

桃「もっちろん！ がんばっちゃうよ！」

愛「お任せください！」

鈴「鈴々もやるのだ！」

—「やれる事は精いっぱいやるぞ」

星「ふむ、一成殿も出るのか・・ならば、また貴殿と私で賊ども
を薙ぎ払ってやりましょうぞ」

そう言つて俺に腕を絡める星。

—「せ、星？ なにを！？」

星「おや、私の気持ちはあの時伝えたはずですが？」

—「あの時つて・・あれは冗談じゃ・・」

星「おや、一成殿は私が冗談で告白をするような女に見えるとでも
？だとしたら悲しいですな」

そう言つて袖で目を隠す星。泣いているように見えるが・・・口が笑つてる！

愛「ご主人様！ どういうことですか!？」

なぜか愛紗に詰め寄られた。

—「愛紗？ どうしたんだいきなり？」

愛「どうした・・・じゃありません！ いったい趙雲殿とはどういった関係なのですか!？」

—「それは・・・」

星「ふむ、一夜を過ごした仲・・・ですかな？」

—「ただ同じ宿屋で寝ただけだろ！ 部屋は違つたし、誤解されるような言い方をしないでくれ!！」

愛「ご〜しゅ〜じゅ〜ん〜さ〜ま〜・・・」

—「愛紗、落ち着いてくれ。だから誤解・・・」

愛「いいわけは結構です！ さあ！ しっかり説明してもらいますよ!！」

なぜかみっちり説明するはめになってしまった。なんでこんな目に・

桃「愛紗ちゃん、ヤキモチ焼いてるんだね。可愛い」

鈴「にゃ！餅！？どこなのだ？」

桃「そのお餅じゃないよ鈴々ちゃん……」（苦笑）

星「これは、また面白い方を見つけましたな」（ニヤリ）

誰か助けてくれよ……

公「……いつになったら出発できるんだ？……」

第十話 いきなり再会すると何を話していいかわからない（後書き）

作「星再登場！」

—「・・・そうだな」

作「なんだ？嬉しくないのか？」

—「もちろん嬉しいさ・・・けど」

作「けど？」

—「またからかわれるのかと・・・」

作「ああ・・・駆け引きで星に勝つのは不可能だな」

—「はあ・・・」

第十一話 勇気ある行動は評価されるべき(前書き)

今度はあのコンビが登場します。

第十一話 勇気ある行動は評価されるべき

愛紗による尋問が終わると、まるでタイミングを計ったように兵が飛び込んできた。

兵「伯珪様！ 賊が出現したとの報告がありました」

全員「ッ!?!」

場が緊張に包まれる。

公「詳しく話してくれ」

兵「は！ 現在賊はここより数里離れた場所で他県より移民中の民を襲おうとしているとの事です！」

公「そうか、ご苦労さがってくれ」

兵「は！」

そう言って兵は間を出ていった。

公「さて、さっそくみんなの力を借りる時がきたな」

桃「うん！ みんなを助けなきゃ！」

愛「賊どもめ・・・私が成敗してくれる！」

鈴「鈴々もやってやるのだ！」

星「ふふふ、弱きものを守るために賊を討つ。正に私のための舞台だな」

—「・・・また俺の異名が広がって行く」

若干気分を落としつつ、俺達は民を守るために出撃した。

数刻後、俺達は目的の場所に到着し、現在陣を展開して伝令からの報告を待っている。ちなみに俺に兵はついていない。なんでも「破壊神様のお力になるどころか、我々では足を引っ張ってしまいます！」とのことらしい。なので、俺は遊撃のポジションについている。

伝令「伯珪様！ 先行中の部隊より民達を発見したとの報告です！」

公「わかった・・・全軍！ 急ぎ民の救援に向かうぞ！」

公孫贇の号令の下俺達は民と合流するために進軍を開始した。しば

らくすると、荷物を抱えた農民の一団が姿を現した。

公「桃香、民を安全なところまで誘導してやってくれ」

桃「うん！ みなさ〜ん！ 落ち着いて、私達の後についてきてくださ〜い！」

桃香と数人の兵が民達を連れて下がって行った。

—「公孫贇、これからの動きは？」

公「ん？ ああ、桃香達が戻って来るまではこの場所で待機かな」

星「やれやれ、一気に攻めればよいものを、伯珪殿は時期を見るのが下手ですな」

公「あのなあ、桃香達も重要な戦力なんだからほっぴりだして攻めるわけにはいかないだろ」

星「そういうことにおきましよう」

公「お前、相変わらずだな・・・」

疲れた様子の公孫贇。

鈴「にゃ？ 公孫贇のお姉ちゃん、どうしたのだ？」

—「……そつとしいてあげる鈴々」

公孫贇、君も俺と同じか……

鈴「わかったのだ……あれ？」

鈴々が前方を見て表情を変えた。

—「どうした？」

鈴「……逃げ遅れている人がいる」

—「なっ！？ 見えるのか!？」

鈴「うん、女の子二人と、お年寄り一人なのだ」

よく見ればうつすらと人の形をした何かが見える。よく見えるな鈴々。

—「くそ！ やるしかない、鈴々！」

鈴「何お兄ちゃん？」

—「俺が先行して三人を守るから、何人か足の速そうな人を連れて後から来てくれ！」

鈴「わかつたのだ！」

—「公孫贖！ 星！ 愛紗！ 悪いが先に行かせてもらう！」

愛「ご主人様！？」

星「一成殿何を！？」

公「待て秋月！」

—「理由は鈴々に聞いてくれ！ とにかく俺は行く！」

そう言い残し、俺はハイロウを展開させ一気に跳躍した。

愛「あれは！？」

鈴「きれいなのだ・・・」

星「純白の・・・翼？」

公「秋月・・・お前はいつたい・・・」

残された四人は一成の翼を見て、一瞬戦場だということを忘れ心を奪

われていた・・・

SIDE OUT

少女 SIDE

少女A「はわ、はわ、はわ、はわ」

少女B「あわ、あわ、あわ、あわ」

老婆「はあ、はあ、はあ、はあ」

お婆さんと雛里ちゃんといっしょに一生懸命走る。早くしないと賊に追いつかれちゃう。

老婆「わしは・・・もう駄目じゃ、二人とも、わしの事はいいからお逃げ」

お婆さんがへたり込んでしまった。

少女A「だ、駄目ですよ！ せつかくここまで来たんですから！」

雛「朱里ちゃんの言う通りです。あと少し頑張りましょう」

雛里ちゃんもお婆さんを励ます。

老婆「でも、このままじゃお嬢さん達も・・・」

少女「そ、それでも駄目です！ わ、私達は弱き人達を守るために塾を飛び出してきたんです！ だからお婆さんを見捨てて行くなんてできません！」

雛「わ、私も朱里ちゃんと同じ気持ちです！ だ、だから諦めないでください！」

怖いけど・・・それでも、お婆さんを見捨てる事なんてできない。

老婆「・・・ありがとうねお嬢さん達」

少女「じゃあ！」

老婆「ああ、お嬢さん達のためにももう一度頑張るよ」

雛「は、はい！ 頑張りますよ！」

老婆「ああ、頑張るよわしは！」

お婆さんの目に光が戻った。よし、もうひと踏ん張りだ。

賊「見つけたぞ！ オイ！ 弓を持つてるやつ出てこい！」

その時、いつの間にか目で見えるところまで来ていた賊の何人かが弓を構えてこちらに向けていた。

少女「そんな・・・！？」

老婆「いかん！ お嬢さん達！ 早く逃げなさい！」

雛「駄目です・・・今からじゃ間に合いません」

雛里ちゃんが悲痛な声をあげる。確かに、今から逃げても弓の射程からは逃げられない。

少女「ッ！」

雛「朱里ちゃん！？」

お婆さんの前で両手を広げて立ち塞がる。せめてお婆さんだけでも・

老婆「お嬢さん何を！？」

少女「お、お婆さん。あなただけでも守ってみせます！」

とても怖いけど・・・さっきお婆さんを・・・弱い人を守るって言ったばかりだから！

雛「朱里ちゃん・・・」

少女「雛里ちゃん・・・お婆さんといっしょに私の後ろに」

雛「ううん・・・私もいっしょに」

そう言って私の隣に並んで両手を広げる雛里ちゃん。

少女「雛里ちゃん・・・」

雛「私達・・・親友でしょ？」

震えながら、でも笑顔でそう言う雛里ちゃん。

少女「そうだね・・・親友だもんね」

雛「うん！」

意識を賊に向ける。今にも矢が射られそうだ。

賊「放てええええ!!」

そして、矢が私達に向かって発射された。

少女「ッ……」

雛「うう……」

雛里ちゃんと手を繋ぎ来るべき時に備える。お婆さん……どうか
無事で……

……

……

……

少女「？」

いつまでたつても痛みがやってこない。もしかして、痛みを感じる
ことなく死んじゃったのかな？

雛「あれ？」

雛里ちゃんも疑問に思ったみたい。私達どうなっちゃったんだろう？

少女「雛里ちゃん？」

雛「朱里ちゃん？」

お互いを確認する。

少女「私達・・・死んじゃったのかな？」

雛「でも・・・痛みを感じなかった・・・」

少女「私もだよ。今も目をつむってるけど・・・」

雛「わ、私も・・・」

少女「そ、それじゃ、いつしよに開けようか」

雛「うん」

少女「いつせいの……せ！」

私達はゆっくりと目を開けた。

朱「……翼？」

視界には私達を守るように包んでいる白い翼が見えた。それは矢を全て防ぐと、ゆっくりと私達から離れた。

？「……無事か？」

雛「え？」

声に振り向くと、そこには私達を守ったであろう翼を纏って、私達を見つめている銀色の髪の男の人が立っていた……

第十一話 勇気ある行動は評価されるべき(後書き)

作「はわわ軍師とあわわ軍師の登場だ〜！」

一「……これ無印のイベントだろ？」

作「細かい事はいいだろ」

一「やれやれ……」

作「朱里と雛里かわいいよね〜妹に欲しいな」

一「黙れ変態。二人が汚れる」

作「そ、そこまで言うことないだろ……」

一「お前、前は月が可愛いとか言ってただろ」

作「もちろん月も大好きさ！」

一「……このロリコンが」

作「違う！俺はただ、純粹に可愛いと思っただけで……」

一「はいはい、ワロスワロス」

作「話を聞けえええ！！！」

第十二話 外見で人を判断するというのがほとんどの人間は見た目で決める（前

テンパっている女の子って可愛いですよね。

第十二話 外見で人を判断するなというのがほとんどの人間は見た目で決める

危ない所だった。賊が弓を構えたのが見えたのでとっさに三人を翼で包んで矢から守った。おかげで矢を何発か受けたが、大した事は無い。が、やはり腹は立つので後でやつらにお返ししなくてはいけない。

少女A「・・・翼？」

—「・・・無事か？」

翼を戻し三人を見る。疲れているようだったがケガ等はないようだ。

少女B「え？」

女の子の一人が俺の声に振り向く。それに続いてもう一人の少女とご老人も俺を見る。

老婆「あ、あなた様は？」

—「俺は・・・」

鈴「燕人張飛！ ただいま参上なのだ！」

説明しようとした瞬間、鈴々がやって来た。その後ろには数人の兵がついて来ていた。

少女A「は、はわわ！」

少女B「あ、あわわ！」

老婆「ヒエ!？」

鈴々の突然の登場に三人とも驚いているようだった。

鈴「にゃ？ まだ子どもの女の子なのだ。ケガしてないのだ？」

鈴々が少女を気遣う。すると、なぜか不機嫌になる少女。

少女A「大丈夫です。けど、私は子どもじゃありません！ 大人の女の子です！」

そう言う少女。大人なのに子なんだな・・・

少女B「しゅ、朱里ちゃん。そんなこと言ってる場合じゃ・・・」

もう一人の少女が抑える。

―「鈴々早かったな。さすがだ」

鈴々の頭をなでる。

鈴「ふにゃ〜、気持ちいいのだ……って、そんなことしてる場合じゃないのだ！」

そういえばそうだったな。あまりにもほのぼのしすぎて忘れていた。

―「さっきの続きですが、俺達はあなた達を助けに来たんです」

先ほどのご老人の質問に答える。

老婆「そ、それは本当ですか？」

―「ええ、この先に公孫贖の軍が展開しています。あなた達より先に行った人達も安全なところまで下がってもらっています。だから後はあなた達だけです」

ご老人の手を掴み立ちあがらせる。が、ふらついているので体力が限界なのだろう。

—「すみません、この人をお願いします」

兵「は、お任せください！」

兵の一人にご老人を任せる。

老婆「ご苦勞をおかけします・・・さあ、お嬢さんたちもいっしょに行こう」

少女A「はわわ・・・」

少女B「あわわ・・・」

老婆「お嬢さん・・・？」

ご老人の誘いになぜか首を振らない二人。

少女A「えつと・・・その・・・お婆さんは先に行ってください。私達は後から行きますから」

少女B「・・・から」

—「？」

そう言っつて俺を見つめる二人。

—「……とりあえず、ご老人を安全なところまでお願いします。
鈴々、お婆さんを頼むな」

鈴「うん！ お任せなのだ！」

鈴々と兵たちをさがらせ、二人に向き合う。

—「俺に何か？」

少女A「は、はい……いきなりすみませんが、あなたのお名前は？」

—「俺の名前……？ 秋月 一成だけど」

少女B「ッ！ 朱里ちゃん！」

少女A「うん……！ やっぱりあなた様が天の御遣い様なんですね？」

—「あ、ああ、一応……な」

興奮した様子の二人に驚きながらも頷いた。

少女A「はわわ・・・姓は諸葛！ 名は亮！ 字は孔明でしゅ！」

少女B「姓は鳳！ 名は統！ 字は士元でしゅ！」

諸・鳳「「が、頑張りましゅ！」」

—「「・・・へ？」」

思わず間抜けな声を出してしまった。いや・・・突然すぎて意味がわからない。

諸「はう・・・噛んじやいました・・・」

鳳「わ、私もだよ朱里ちゃん・・・」

落ち込む二人。どうにかして落ち着いてもらわないとな・・・

ポン

諸・鳳「「え？」」

とりあえず・・・二人の頭をなでる。

「落ち着いて、ゆっくり話を聞かせてくれ」

ナデナデ

諸「はう・・・／＼」

鳳「あう・・・／＼」

顔を赤くする二人。しまった・・・逆効果だったか？

諸「あ、ありがとうございます・・・」

鳳「・・・ます」

なんとか落ち着いてくれたようだった。

「よし、それじゃあ話を」追いついたぜ！「・・・はあ」

俺の話を守る声のする方へ目を向けると、賊が約三十人ほど俺達を

困んでいた。どうやらこいつらがさっき矢を放ったやつらしい。

—「…………どうやら追いつかれたようだな」

あれだけ話していたので無理もないが。

諸「はわ……すみません」

鳳「私達の所為で……」

—「いや、二人の所為じゃないよ。さっさと動かなかった俺に責任がある」

さて、どうするか……

賊A「なんだ、三人ぼっちか」

賊B「いいじゃねえか、とりあえず剥いじまおうぜ」

賊C「ああ、見たところ男の方は高そうな服を着てるし、ガキの方もまあまあだしな」

好き勝手に言っている賊。さっきの矢の件もあるし……さっさと終わらせるか。

賊A「にしても・・・女はないのかよ」

賊B「いるにはいるが・・・ガキだしな」

賊C「駄目だな、楽しめやしねえ」

諸葛亮と鳳統を見ながら笑う賊。それに対し俯く二人。

賊D「じゃあ、俺にくれよ」

新たな賊がそう言う。

賊A「なんだお前、こつというのが好きなのかよ？」

賊B「変態だな。ぎやはははー！」

賊C「好きにしるよ。俺は金目のものが手に入りやどうでもいい」

なんだコイツ・・・ロリコンか？ いつの時代にもいるんだな。

賊D「へへ、お嬢ちゃん達、せいぜい俺を楽しませてくれよ」

諸「い、いや・・・」

鳳「来ないでください・・・」

怯える二人に迫る賊・・・俺を無視するとはいい度胸だな。

ボキイ！

賊D「ぎゃああああああ！！！！」

諸・鳳「え？」

—「・・・薄汚い手で二人に触れるな」

二人に触れようとした手を取りあえずへし折る。

賊A「て、テメエ！」

賊B「大人しくしやがれ！」

賊C「死にてえのか！」

—「うるさい黙れ。さっさと消えろ」

この二人を怯えさせた時点でこいつらは抹殺決定だ。

賊A「何言つてやがる！ この人数が見えねえのか！？」

―「見えているが・・・それが何か？」

賊B「なっ！？ テメエ一人でなんとかなると思ってたのか？」

―「むしろ、この程度の人数で俺を止められるとでも？ 笑わせるな」

賊C「言ってくれるじゃねえか！ そんなに死にてえのか！？」

―「いちいちわめくな。来るならさっさと来い」

いかげんこいつらの相手も飽きてきた。

諸「あ、あのお・・・」

鳳「あんまり挑発しない方が・・・」

―「大丈夫。なんとかなる」

賊A「上等だ！ やるぞテメエらあああ！！！！」

賊達「おおおおお！！！！」

一斉に向かってくる賊達。手間が省けて助かる。

諸「はわっ！ き、来ましたよお！」

鳳「ど、どうしよう朱里ちゃん!？」

一「二人とも、俺にくっついて」

広範囲攻撃をするから二人を巻き込まないようにしないな。

諸「は、はい！」

鳳「こつですか？」

二人が俺の服を掴んでくっついてきた。

一「それでいい・・・発現！」

絆を手甲状態にして装備する。

諸「はわわ・・・!？」

鳳「な、なに・・・？」

二人が驚きの声をあげた。これについても後で説明しないとな。

—「やるか・・・」

両手にオーラを収束し、一気に地面に叩きつける。

—「爆砕・・・跳天昇！！」

賊達「ぎゃあああああ！！！！」

俺を中心に放射状に広がる気柱が賊を吹き飛ばした。この技本当に便利だな。

ドサツ×30

吹き飛んだ賊が地面に落ちてきた。

—「今日も飛んだな」

諸「す、すごい・・・」

鳳「あれだけの賊を一撃で・・・」

これで改めて話が聞けるな。っと、その前に・・・

—「二人とも、もう離れてくれても大丈夫だよ」

諸・鳳「「え？」」

—「いや、だから離れてくれても・・・」

俺が言う前に二人が慌てて離れる。

諸「は、はわわ！ しゅみましえん！」

鳳「あわ・・・あわ・・・あわわ!!」

—「そんなに慌てなくても・・・」

諸「は、はい」

鳳「しゅみましえん・・・」

—「いや、謝る必要も無いんだが・・・」

—「それで・・・話の続きなんだけど」

諸「は、はい。では改めて・・・御遣い様！」

鳳「私達を・・・お仲間に加えてください！」

頭を下げる二人。

—「どういうことだ？」

諸「・・・私達は水鏡先生という有名な先生の私塾で勉強していました」

鳳「でも・・・こんな時代で、力の無い人達がつらい目に遭ってて、そういうのが我慢できなくて・・・だから私達、自分の学問を少しでも役に立てたいと思って・・・」

諸「そんな時、天の御遣い様が光臨されたって聞いて、雛里ちゃんと一緒にお会いする為に旅をしていたんです」

鳳「それで、ちょうど土地を移ろうとしている人達に会って一緒に次の街へ行こうとして・・・」

—「それで賊に襲われていたところ、俺に出会った・・・と？」

諸・鳳「はい！」

なるほど、俺なんか会うために・・・

―「二人の想いは強いんだな・・・」

諸「そ、それで・・・その・・・」

鳳「お仲間に加えて頂けるのでしょうか？」

不安な顔の二人。答えはもちろん。

―「・・・俺は君達が思っているような人間じゃないかもしれないぞ？ それでもいいのか？」

諸「じゃあ！」

―「ああ、こんな俺でもよければ二人の力を貸して欲しい」

俺の言葉に二人の顔がほころぶ。

諸「はい！ ありがとうございます！！」

鳳「い、一生懸命がんばりませう！ あう・・・噛んじゃった・・・」

・・・和む。

一「よし、とりあえず二人は先ほどのご老人の所まで避難して
くれ。ここはもうじき本格的な戦場になる」

二人を避難させようとすると、腕を掴まれた。

諸「わ、私達もご一緒させてください！」

鳳「きつとお役に立ってみせますから！」

一「・・・いいのか？」

諸・鳳「は、はい・・・」

言葉とは裏腹に二人とも震えている。それでも二人の目は本気だ。

一「君達は本当に勇気があるな」

諸「そ、そんな・・・私なんて・・・」

一「ご老人を身を盾にして守ろうとしていたじゃないか。並大抵な
勇気じゃあんな事は出来ないさ」

鳳「あわわ、見ていらしたんですね」

一「ああ、だから自信を持って。その二人の勇気を俺に貸してくれ」

諸・鳳「はい！」

元氣よく頷く二人。

一「じゃあ・・・失礼するよ」

そう言つて二人を抱きかかえる。

諸「はわっ！？ み、御遣い様！？」

鳳「な、ななな何を！？」

一「このまま公孫贖の軍の所まで連れて行くから嫌だろうけど我慢してくれ」

再びハイロウを展開させて宙に飛び上がる。

諸「ふわぁ・・・」

鳳「綺麗です・・・」

一「ありがとう。それじゃ・・・しっかりと掴まっててくれ」

そう言ってハイロウをはばたかせ、一気に突き進む。

諸「は、はわ~~~~~!!!」

鳳「あわわ~~~~~!!!」

二人の悲鳴が響き渡った・・・月の時もそうだったが、飛ばし過ぎかな？

新たな仲間を加え、俺はみんなの所へ戻った。

第十二話 外見で人を判断するなというのがほとんどの人間は見た目で決める（後

作「改めて、朱里と雛里が参入！」

一「会話長すぎだろ。よく賊が待ってくれたな」

作「そこは、まあ……ご都合主義ということだ……」

一「……だな」

作「……その話はお終い！別の話をしよう」

一「別つて……何話すんだよ」

作「お前の手甲、あれいいよな！やっぱり男は拳で語るのが一番だ！」

一「……俺の一番得意なのは剣なんだが。しかも今回の技、拳使っていないだろ」

作「地面に叩きつけてたろ？……魏に行ったら尻に教えるか？」

一「教えてどうするんだよ？」

作「師弟対決みたいな事を……な。例えば……」

荒野にて・・・

—「呷いいいいいい！！！！」

呷「師匠おおおお！！！！」

バゴオオオオーン！！！！

作「・・・みたいな」

—「なんだよそのG　ンのノリは・・・」

作「・・・いいな、やるか」

—「しかも決定かよ！！」

作「呷可愛いよね　真面目なところも、可愛い服を着て照れてるところも」

—「確かに・・・彼女のひたむきなところは好きだな」

作「お！ついにお前も女の子を意識するようじに・・・」

—「貴様と一緒にするなこの節操無し」

作「ひ、酷い・・・でも否定できない」

第十三話 いじられキャラはどこまでいってもいじられる(前書き)

白蓮って普通に可愛いと思うんだけどな

第十三話 いじられキャラはどこまでいってもいじられる

空を飛びながら辺りを見回すと、公孫贄の軍と・・・それに向かって進んでいる賊の一団が見えた。

―「あれか」

諸「すごい・・・敵の規模が簡単にわかる・・・」

―「はは、さすがに空から見られるとは思っていないだろうしね」

鳳「ですね」

―「さて、あれが公孫贄軍だ。そろそろ降りるからしっかりと掴まってくれよ」

諸「は、はい」

鳳「ツ・・・(ギョツ!)」

俺は公孫贄達を探した後、ゆっくりと降り立った。

S I D E O U T

愛「ご主人様はまだお戻りにならないのか！」

桃「愛紗ちゃん、落ち着きなよ」

鈴「さつきから同じ事ばかり言ってるのだ」

愛「何を言ってるのです桃香様！ご主人様が心配ではないのですか！？」

桃「もちろん心配だよ・・・でも」

鈴「お兄ちゃんなら大丈夫なのだ！」

ぎゃあぎゃあわーわー！！

星「やれやれ、落ち着きの無い方達だ・・・」

公「星、お前は心配じゃないのか？」

星「ええ。賊如きが一成殿を倒すなど、伯珪殿が私を口で言い負かす事ほどあり得ない事ですからな」

公「ああなるほど・・・つてオイ！」

星「はっはっは！冗談ですよ」

公「お前が言つと冗談に聞こえん・・・」

星「ん？・・・どうやらお戻りになったようですね」

公「え・・・？ あっ」

二人が空に視線を向けると、先ほどと同じく翼をはばたかせながら一成がこちらに向かって降りてきた。

一「到着・・・っと」

少女A「は、はわわ」

少女B「あわわ」

両脇に二人の少女を抱えて・・・

I N S I D E

愛「ご主人様！」

降りると同時に愛紗が詰め寄って来た。

一「ただいま愛紗」

愛「ただいまではありません！ 私が・私達がどれだけ心配した
とお思いですか！！」

真剣な顔で俺を見る愛紗。そうか、心配させてしまったか。

ポン

愛「ご、ご主人様！？」

—「すまない、心配をかけてしまって」

ナデナデ

愛「い、いえ。わかってくださればいいのです」

—「ああ、本当にすまなかった」

愛「は、はい・・・／＼」

桃「愛紗ちゃんだけずる〜い！私も心配してたのに」

—「おかえり桃香。みんなは？」

桃「大丈夫。ちゃんと街まで送ったから心配ないよ」

—「そうか、お疲れ様」

桃「うん」

鈴「お兄ちゃん！ 鈴々、ちゃんとお婆さんを避難させたのだ！」

—「さすが鈴々」

鈴「鈴々えらい？」

—「ああ、偉いぞ鈴々」

ナデナデ

鈴「ふにやあ〜」

星「一成殿・・・私には何もないのでですか？」

—「せ、星、何かって何？」

星「そうですね・・・では今夜こそ私と共に一夜を過ごし」勘弁してくれ「ククツ・・・冗談ですよ」

—「だからそういう冗談は・・・」

公「秋月・・・お前も大変だな」

—「わかつてくれるか公孫贄？」

公「ああ、痛いほどな・・・」

—「ありがとう！」

感極まって公孫贄に抱きついた。

公「あ、ああ秋月！？何を！？」

—「俺の気持ちをわかつてくれるのは君だけだよ公孫贄！」

公「わかった！わかったから離れてくれ！」

星「おやおや、伯珪殿、羨ましいですな。一成殿から抱きついてもらえるなど」

公「ツ・・・／＼ あ、秋月！早く離れる！他の者に示しがつかない」

愛「ご主人様！何をなさっているのですか！！」

桃「いいなあ白蓮ちゃん・・・」

鈴「鈴々もギョっしてほしいのだ！」

星「一成殿、次は私に・・・」

公「誰か！　なんとかしてくれ〜〜〜！！！」

・ 戦場とは思えない、気の抜けた会話が繰り返り広げられるのであった・

諸「あ、あのお・・・」

なんとか落ち着いた俺たちに諸葛亮が話しかけてきた。鳳統は・・・
諸葛亮の背に隠れている。

愛「ん？　そういえばお主達は？」

―「新しい仲間だ。俺に会うために旅をしていたらしい」

桃「そうなんだ、私達と一緒にだね」

諸「し、諸葛亮といいましゅ！　お願いしましゅ！」

鳳「・・・鳳統でしゅ・・・お願いしましゅ・・・」

星「ふむ、可愛らしいお嬢さん達だな」

愛「仲間・・・ですか。ご主人様が決められたのなら私は異存はありませんが・・・しかしまだ少女ではありませんか。そのような娘に戦場での務めができるのですか？」

「・・・愛紗、それは違うぞ。戦場に出るのに年は関係ない。確固たる信念を持って彼女達も戦うことを決心したんだ。・・・愛紗だって自分が女だからという理由で戦場に出るなと言われたら嫌だろっ?」

この二人も守りたいもののために立ちあがったんだしな・・・

愛「・・・そうですね。私が浅はかでした。諸葛亮に鳳統・・・だったか?」

諸「は、はい」

鳳「はい・・・」

愛「すまなかつたな。お主達の決意を侮辱するような発言をしてしまったって、許して欲しい」

諸「い、いえそんな!」

鳳「お気になさらずに・・・」

愛「そうか、ありがとう」

笑いあう三人。

—「愛紗も納得してくれたようだな・・・しかし、なんでまた急にあんな事を？」

鈴「お兄ちゃん、愛紗はヤキモチ焼いてるだけなのだ」

—「ヤキモチ？」

愛「だ、誰がヤキモチなど焼くものか！ ご主人様の側に女性が増えるのは護衛上問題があると思ったから私は・・・」

鈴「にやはは！ それがヤキモチって言うのだ。それにお兄ちゃんに護衛なんて必要ないのだ」

愛「だから違うと言っているだろ！」

鈴「違わないのだ~~~~~！！！」

・・・なるほど、そういうことか。

—「愛紗、すまなかったな」

愛「ご主人様？」

—「勝手に決めた事、怒ってるんだろ？」

愛「・・・はい？」

—「これからは事前にみんなに相談するようにするから、今回は許

して欲しい」

おそらく俺が勝手に仲間に入れた事が不腹なのだろう。規律を大事にする彼女の事だ、軍が乱れる事を気にしているのだろう。

愛「ご主人様、いったい何の話を？」

一「え？ だって、二人の仲間入りを俺だけで決めたから怒っているんだろ？ だからさつきもあんな発言を・・・」

俺がそう言つと、場の空気が凍った。

桃「・・・ご主人様」

星「無自覚なつえに鈍感ですか・・・これは骨が折れそうだ・・・」

公「正直、お前の疲れる原因つてお前自身じゃないのか秋月？」

鈴「うにゃ？ みんなどうしたのだ？」

愛「そ・・・そうですね！ そうなんですよご主人様！ 次からは気をつけてくださいね！」

一「ああ、充分反省したよ」

桃「愛紗ちゃん・・・」（苦笑）

桃香の苦笑いが気になるが、そろそろ気持ちを切り替えないとな。

—「公孫贛、敵が見えてきたがどうする？」

公「え？　こちらからはまだ見えていないが」

—「そうだった・・・空から見たんだった」

公「空からって・・・どうだったんだ？」

—「数自体はそんなに大したことは無い。このままぶつかり合ってもこちらが勝てるだろうけど」

公「私としては無駄な犠牲は払いたくない」

—「もちろんだ。そうすると・・・」

諸「あの、いいですか？」

どうしようか考えていると、諸葛亮が手をあげた。

—「何かいい考えでも？」

諸「はい。先ほど御遣い様と一緒に空から見たところ、賊は陣形も整えずにこちらに向かっています。ですからこちらは伏兵を配置し

つつ、賊を待ちかまえて一当てした後、伏兵の場所まで下がって一気に攻撃するのがよいかと」

鳳「これなら最小限の被害で済むはずです。また、この近くにはちよつど伏兵を配置するのに最適な場所があつたはずですから、そこを利用すればよろしいかと・・・」

全員「・・・・・・・・・・」

諸「あ、あの？」

鳳「ダメ・・・ですか？」

一「・・・・・・・・いや、大したものだな」

愛「それが成功すればヤツらは一網打尽だな。素晴らしい策だ。さすがご主人様が目をつけた者だな」

鈴「にははは！　いまさらカツコつけてもしょうがないのだ！」

愛「鈴く々〜!!」

鈴「にははは」

桃「すごい諸葛亮ちゃん、鳳統ちゃん！」

公「ああ！　これならいける！」

星「ふむ、先ほどの言葉は訂正しなくてはな。可愛らしいだけでなくこのような素晴らしい知恵があるとは・・・」

みんなの称賛に二人は照れているようだ。

諸「あ、あのお、できれば真名で呼んで欲しいんですが」

突然諸葛亮がそんな事を言う。

—「真名を？」

諸「はい、これから一緒に戦う仲間ですから。ぜひ呼んで欲しいんです！」

鳳「わ、私も…お願いします！」

桃「そうだね、仲間だもんね！ 私の真名は桃香だよ」

愛「仲間か…ならば真名を託すのも道理。私の真名は愛紗だ」

鈴「鈴々は鈴々なのだ！」

諸「私の真名は朱里です。よろしくお願ひします桃香様、愛紗さん、鈴々ちゃん」

鳳「あ…離里です。よろしくお願ひします」

—「よろしく朱里、離里。俺の事は一成と…」

桃「ご主人様の事はご主人様って呼んであげてね」

朱「は、はい。よろしくお願い致しますご主人様！」

雛「ご主人様・・・お願いします」

一「・・・ああ、よろしく」

やっぱりご主人様なんだな・・・

星「ふむ・・・ならば私の事も星とお呼びください」

星が俺以外のみんなに言う。

桃「いいの？」

星「ええ。出会って間もないですが、あなた方は真名を預けるにふさわしい方達と思ひましてな。ぜひ受け取って欲しい」

桃「うん！　ありがとう星ちゃん！」

愛「ありがたく受け取らせてもらっ」

鈴「わかったのだ星」

朱「はわわ、私達もですか？」

雛「いいのかな朱里ちゃん？」

星「当然。お主達も私が認めた方だからな」

真名を交換して、より仲を深めたようだな。

公「……………」

—「どうした公孫贄？」

さつきから黙ったままだ。

公「……よし決めた！ 秋月、私の事も真名で呼べ！」

公孫贄までもがそんなことを言ってきた。

公「協力してもらっているのに何も渡さないのも失礼だしな。け、決して仲間はずれが嫌だとかそんなんじゃないからな！」

—「わかったよ。えっと……白蓮でよかったか？」

白「あ、ああ／＼」

—「どうした？ 顔が赤いが？ 嫌なら無理せずに……」

白「いや、大丈夫だ！ なんでもない！ そ、そうだ！ 他のみんなも真名で呼んでくれ！」

愛「よろしいのですか？」

白「ああ、桃香の仲間なら私にとっても友人だしな」

鈴「白蓮お姉ちゃんなのだ！」

星「照れ隠しに私達をダシに使うとは……困った方ですな白蓮殿」

朱「白蓮さんか」

雛「優しそうな人だね」

—「なら白蓮、俺の事も一成って呼んでくれよ」

白「え!?!」

—「これが俺の真名みたいなものだし……俺だけ呼ばせてもらうのも悪いし」

白「い、いやいや！ 秋月でいいよな!?! 勘弁してくれ!」

—「なんで?」

白「そ、それは……」

桃「ふふっ、ご主人様。白蓮ちゃんは恥ずかしいんだよ」

白「なあ!？」

—「恥ずかしい?」

星「なるほど・・・男性の真名を呼ぶのは親密な関係でないといけないと・・・初心な方ですな」

白「う、うるさ〜い!余計な事を言うんじゃない!」

桃「きゃ〜白蓮ちゃんが怒った〜!」

星「適当に言ったのですが・・・当たりましたか」

白「も、もういい!それより、賊が迫ってきてるんだからさっさと準備に移れ〜!!!」

おっと、そうだったな。作戦も決まったし、いよいよ戦闘だな。

新たな仲間たちに頼もしさを感じつつ俺も戦闘の準備に入った・・・

第十三話 いじられキャラはどこまでいってもいじられる（後書き）

作「なんとか全員の名が交換できた・・・」

—「無理やりだがな。特に白蓮」

作「俺にはこれが限界だ」

—「まあ、元々期待してないしな」

作「ガクリ・・・」

—「・・・にしても、白蓮も星にいじられるんだな」

作「みんな白蓮の事普通とか目立たないとか言うけど、俺は可愛いと思うな・・・特に髪を下ろしたところとか」

—「ツ・・・／／」

作「おやあ？何を想像したんだい一成君？」

—「そ、それは・・・」

作「もしかして・・・原作のあのシーンを・・・」

—「黙れえええええ！！！！」

作「ぎゃあああああ！！！！」

「げ、原作の事は忘れよう。そつだ、それがいい」

作「そ、そしたらこれから先の展開が・・・」

第十四話 無双無双と言うが実際には不可能だと思っ(前書き)

今回も派手にやります。

第十四話 無双無双と言うが実際には不可能だと思う

作戦も決まり現在はそれぞれの配置についている。桃香と鈴々は伏兵の指揮、愛紗と星は敵を誘導する部隊、白蓮、朱里、雛里は本陣での総指揮及びもしもの時の策の変更のために待機をしている。それで、俺はというと・・・

「やっぱりここからはよく見えるな」

再び空に上がり、賊の後方へ回っていた。伏兵によって浮足立った賊を挟撃するためだ。見ればちょうど愛紗と星の部隊が賊とぶつかるところだった。

「・・・面白いくらいに引つかかるな」

下がる愛紗達を追う賊がそのまま伏兵のいる場所まで追っている。少しは怪しいとは思わないのか？

「よし、そろそろ出番だな」

俺は地面に向かって降りて行った・・・

S I D E O U T

愛紗 S I D E

愛「いいぞ！ このままヤツらをあの場所まで引き付けるのだ！」

兵「応っ！」

朱里と雛里の策通り、賊を伏兵のいる場所まで引き付ける。そこで桃香様と鈴々の隊が弓で一斉に攻撃する手筈になっている。

愛「それにしても・・・何も考えずに突撃してくるとは」

おかしいとは思わないのだろうか？

星「ふ・・・理性を持たない獣どもに考えなどあるはずなかるうな・・・」

星が皮肉気に笑う。

愛「確かに、他者を襲い、奪いつくすあやつらは最早人ではないな」

星「然り、だからこそ我らで討ち、民の平穩を守らなければならん・
・」

愛「ふ・・・お主とは気が合いそうだな。星よ」

星「私もだ、愛紗よ」

お互いに笑いあう。

愛「しかし・・・こう逃げるだけというのも歯がゆいな」

本当なら今すぐにも向かって行きたいのだが・・・

星「なに、後少し辛抱すれば今までの借りも返せる。その時に私達
と一成殿で思う存分暴れればよい」

星が空を見上げながら言う。

愛「ご主人様・・・」

一人で背後から攻めると聞いた時は反対したが、あの目を見ると何も
も言えなくなる。

愛「全く……ご主人様は」

でも、またあの雄姿を見れるのは少し嬉しい。

星「おや？ 愛紗、何をニヤついているのだ」

星が私の顔を見て楽しそうに笑う。

愛「べ、別にニヤついてなどいない！」

星「そうか？ てっきり一成殿の事でも考えているのかと思ったのだが……」

愛「なあ！？」

な、なぜわかったのだ！？

星「……凶星だな」

愛「うぐ……」

星「はっはっは、一成殿もそうだったが、お主も相当からかい甲斐があるな」

愛「せ、星！」

星「ククク・・・おっと、そんな事をしている内に目的の場所まで来てしまったな」

前を見ると、例の場所まであと少しだった。

愛「よし！ このまま突っ切るぞ！ 全員遅れるな！」

兵に指示し馬を加速させる。さあ、反撃開始だ！

愛紗SIDE OUT

桃香SIDE

桃「・・・来た！ 愛紗ちゃん達だ！」

その後ろにはたくさんの方の姿があった。

桃「鈴々ちゃん！」

鈴「うん！ みんな合図を聞き逃さないよう気をつけるのだ！」

兵「はっ！」

桃「私達が失敗したらこの作戦は駄目になっちゃうからみんな頑張ろうね！」

兵「応っ！」

兵のみんなが力強く返事をしてくれる。本当なら私も剣を持って戦いたいけど、私には愛紗ちゃんや鈴々ちゃんみたいに強くないから・・・でも。

—「いいか桃香、剣を持って誰かのために戦うこと、これは誰もができる事じゃない。それと同じに、みんなの先頭に立って道を進む。これも誰にでもできる事じゃない。確かに桃香は愛紗達のように剣は振るえないかもしれない。でも、愛紗達の進む道の先を進んでいるのは桃香なんだよ。君が道を切り開いてくれるから愛紗達も戦えるんだ。もちろん俺もね・・・」

ご主人様が言ってくれた。私がみんなの進む道を切り開いていると。だったら私はみんなのために出来る事をしよう。

鈴「お姉ちゃん！」

鈴々ちゃんの声で我に返る。いけない、集中しなくちゃ。

桃「・・・今だよみんな！」

鈴「撃つのだ〜！」

私達の号令で一斉に矢が放たれた・・・

桃香SIDE OUT

IN SIDE

—「成功だな」

作戦通り、誘い込まれた賊に大量の矢が放たれた。それと同時に愛紗達の隊も反転し反撃に移っている。

—「来たか」

賊がこちらに向かって後退してきた。だが、逃がすわけにはいかない

—「発現」

大剣を携え賊に向かって突撃する。

—「はあああああ！…！！！」

さあ、戦いの時間だ・・・

S I D E O U T

愛紗 S I D E

愛「今こそ反撃の時！ 行くぞ！」

兵達「おおおおおおお！…！！！」

私の号令と共に兵達が一斉に反撃に移る。賊どもは畏れだど気づいた
ようだが遅すぎた。

愛「はあああああ！…！！！」

武器を振るい賊をなぎ倒す。見れば、星も次々に賊を打ち倒している。

星「どうしたどうした！ この程度か？」

愛「このまま押し切るぞ！ 皆続けえええ！！！」

兵達「おおおおおお！！！」

流れは完全に私達のものだった

賊A「ひ、ひいいい！！！」

賊B「逃げる！ 逃げるんだあああ！！！」

賊が反転し退却を始めたが・・・

—「はあああああ！！！」

その先では、身の丈ほどはあると思われる大剣を振るい賊を吹き飛ばしているご主人様がいた。

星「さすが一成殿だな。人間があんなに飛ぶところなど初めて見た

ぞ
」

ご主人様が剣を振るう度に数十人単位の賊が宙を舞っていた。

愛「さすがご主人様！ 私も負けていられない！」

武器を持つ手に力を込める。

愛「我等もご主人様に負けるな！ 行くぞ！」

兵A「応っ！ 將軍と御遣い様に続けえええ！！！」

兵B「さすが御遣い様だぜ！ あの力・・・惚れちまいそうだ！」

兵C「確かに、男ならあれくらい暴れてみたいもんだぜ！」

兵達もご主人様の雄姿を見て闘志を燃やしているようだ。

星「ふ・・・兵の士気も上げるとは・・・一成殿には敵いませんな」

愛「当然だ！ 我等のご主人様だからな」

星「私の・・・の間違いじゃないのか？」

愛「せ〜〜い〜〜!!!!」

星「おっと、私ではなく賊に武器を向けて欲しいのだがな」

愛「く・・・おぼえておけよ」

星を一睨みした後、私は再び賊に向かって行った・・・

愛紗SIDE OUT

本陣にて・・・

本陣にいる者達は固まっていた。それというのも・・・

—「ちえああああ!!!!」

賊「ぎゃああああ!!!!」

先ほどから賊があちこちで宙を舞っていたからである。

雛「しゅ、朱里ちゃん、これって・・・ご主人様がやってるのかな？」

朱「間違いないよ雛里ちゃん。だって、ご主人様の声が聞こえるたびに敵が吹き飛んでるもん」

雛「私達の策・・・必要なかつたんじゃないかな？」

朱「そ、そんなことないよ！・・・多分」

圧倒的な一成の力を見て、自分達の策が本当に役に立ったのか若干不安を感じる二人。

白「これは・・・出番が無さそうだな」（苦笑）

何もしなくても戦いが終わりそうな雰囲気苦笑いを浮かべる白蓮。

本陣には穏やかな風が吹いていた・・・

I N S I D E

「・・・終わったな」

気づけばあれだけいた賊も全員地に伏せ、残っているのは白蓮の兵と俺達だけだった。

愛「ご主人様！」

星「一成殿！」

愛紗と星が走って来た。

—「二人ともお疲れ様」

愛「ご主人様こそ、素晴らしい武でした！」

星「惚れ直しましたぞ一成殿」

—「あ、ああ・・・ありがとう」

桃「ご主人様〜！」

鈴「お兄ちゃ〜ん!!」

桃香と鈴々も兵を連れて戻って来た。

—「お疲れ様桃香、鈴々。完璧なタイミングだったな」

桃「たいみんぐ？」

「あつと・・・頃あいつて意味だよ」

桃「そっか、ありがとうご主人様」

鈴「お兄ちゃん！ 鈴々はどうだったのだ？」

「ああ、鈴々もばっちりだったよ」

鈴「にははは 当然なのだ！」

お互いの健闘を讃えあいつつ、俺達は本陣に戻った。

こうして、この世界での初の軍での戦いは俺達の快勝で幕を閉じたのだった・・・

第十四話 無双無双と言うが実際には不可能だと思っ(後書き)

作「戦闘って難しいね」

一「今さら何言ってるんだよ」

作「ぶっちゃけ、策とか考えつかないから」

一「じゃあなんで書いたんだよ」

作「書きたかったから」

一「馬鹿かコイツ」

作「うるさい！つーかお前が無双するから策なんて必要無いっつーの！」

一「あのなあ・・・戦いが一人の力でどうにかなるわけないだろ」

作「お前ならできる！そういう設定にしたからな」

一「・・・チートし過ぎるのもどつかと思っがな」

第十五話 一人旅って寂しいのかと思ったがこれはこれで楽しいものがある(前)

他勢力に会いに行きます。

第十五話 一人旅って寂しいのかと思ったがこれはこれで楽しいものがある

朱里と雛里を仲間に加えた日から数日。俺達は白蓮と共に賊退治に精を出した。そんなある日、俺はみんなにある決意を話した。

全員「旅に出たい!？」

—「ああ、許してくれないか？」

これから物語に関わる人物に会っておきたいのだが・・・

愛「何故ですかご主人様！ これからという時に!」

桃「そっだよ！なんでいきなりそんな・・・」

鈴「鈴々達の事嫌いになっちゃったのだ？」

朱「はわ！ そうなんですかご主人様!？」

雛「うっ・・・グスッ・・・」

— 一斉に俺を引き止める皆。雛里に至っては泣きそうな顔をしている。

雛「ご、ご主人様・・・」

—「そんなわけないだろ、ちゃんと理由を話す。だから泣かないでくれ雛里……」

ナデナデ

雛「は、はい……／＼」

雛里が落ち着くまで頭をなでる。なでやすいからすっかりクセになっってしまった。

朱「いいなあ雛里ちゃん……」

桃「うん、羨ましい……」

鈴「鈴々だったくさんなでてもらってるのだ」

愛「……はっ、ご主人様。それで……理由とは？」

—「ああ、実は」

俺は理由を話した。この大陸についてもっと知らなくてはいけないので、見聞を広めるため旅に出たいと。

「俺の考え通りなら、近いうちに戦乱の世になる。だからその前に知るべき事は知り、やるべき事はやっておこうと思ってな」

愛「そうですか・・・」

桃「さすがご主人様だね」

鈴「お兄ちゃん偉いのだ！」

朱「確かに、見聞を広めるなら旅に出るのが一番です」

雛「私達も旅の間に色々な事を学びましたし・・・」

みんな納得してくれたようだ。

愛「ご主人様のお気持ちは理解しました。ですが！ お一人では危険すぎます！」

愛紗は俺が一人で行くのに賛成できないようだ。

愛「せめて、誰かお供の者を一人連れて行くようにしてください！」

桃「はいはい！ じゃあ私が・・・」

全員「駄目です！（なのだ）」

桃「うう・・・私だつてご主人様と旅したいのに」

落ち込む桃香。

一「いや、俺一人でも大丈「ならば私が行こう」夫・・・」

全員「星！（ちゃん！（さん！）」

いつの間にかやって来ていた星が手をあげていた。

星「私ならば問題は無かろう？私はただの客将であるからいつ出て行くのも私の自由だ」

一「いや、白蓮に許可もらえよ」

星「なに、白蓮殿なら喜んで行かせてくれるでしょう」

・・・納得。

愛「何を言う！お主に行かせるくらいなら私が」

一「いや、愛紗には桃香を支えてもらわないと。同じ理由で鈴々も駄目だし、朱里と雛里は入ったばかりで不安だろうから離れ離れにするわけにもいかないし」

星「やはり私が・・・」

—「いや、駄目だから」

星「むう・・・残念ですな」

—「そういうわけで、俺一人で大丈夫だよ」

むしろ一人じゃないと色々都合が悪いしな・・・主に月の件とか。

愛「わかりました。そこまで言うのでしたらご主人様を信じます」

—「ありがとうございます」

愛「ですが！ 必ず私達のところへ戻ってきてくださいね！」

—「・・・ああ、この世界での俺の帰る場所はみんなのところだ」

愛「ならばいいのです」

そう言って笑う愛紗。他のみんなも笑顔を見せる。

そして数日後・・・

「わざわざ見送りしてくれるのか」

俺は今城の前でみんなと別れのあいさつをしている。まさか白蓮まで来てくれるとは思わなかったが。

白「当たり前だろ。短い時間とはいえ一緒に戦った仲間の旅立ちなんだから」

「ありがとな白蓮」

白「い、いいよ礼なんて！　こそばゆい」

そう言って顔を背ける白蓮。

「……そつだ、白蓮。これを君に」

俺は懐から首飾りを取り出して白蓮に渡す。

白「これは？」

「お守りみたいな物だ。受け取って欲しい」

星「ほう……綺麗な石すな」

桃「白蓮ちゃんだけずるゝい！ ご主人様、私には？」

愛「こほん……ご主人様、私には必要無いですがどうしても言うなら」

鈴「愛紗、素直に欲しいって言うのだ」

朱「いいなあ白蓮さん」

雛「うん……」

全員が白蓮を羨ましそうな目で見ている。

白「な！？ あ、秋月！ 私にはこんな物」

一「頼む、受け取ってくれ、そして……戦場に出る時は必ず身につけておいてくれ」

俺が真剣に言うと白蓮達の顔が変わった。

桃「ご主人様、あの首飾りって」

一「言つたる？ お守りみたいな物だと、だから白蓮頼む」

白「……わかった。なんでそんなに真剣なのかわからないが、せっかく私にと贈ってくれたんだ、受け取らせてもらおうよ」

首飾りを身につける白蓮。

—「そうか・・・よかった」

これでもしもの時も大丈夫だな。

—「それじゃ俺はそろそろ行くけど・・・最後に、桃香」

桃「何？ ご主人様？」

—「これから先、君はたくさん悩み苦しむ事があるだろう。でも君は一人じゃない。仲間がいる。一人じゃ無理でもみんなと一緒になら必ず何とかなる。だろ？」

桃「うん！ 私には頼りになる仲間がこんなにいるもん！」

そう言って周りの仲間を見渡す桃香。

—「でも」

桃「でも？」

—「最終的に決めるのは桃香だ、前にも言ったが、君がみんなの進

む道を切り開くんだからな。そして、一度決めたらながあつても変えるな。それを決めた自分の心を信じるんだ。それがもし力を必要とする事なら、それを使うのを躊躇つてはいけない。例え・・・
相手が自分の知っている人物だとしても」

桃「え？」

一「俺が言いたいののはそれだけさ。それじゃあみんな、またな」

桃「待つてご主人様！ 最後の言葉つてどういう意味なの！？」

ハイロウを展開して空に舞い上がる。すまない桃香、今それを教えるわけにはいかないんだ。いずれ俺達は戦う事になるんだからな・・・

一「君達と同じように、月も俺が守るべき子だからな・・・」

俺は、いずれ戦火に巻き込まれるであろう一人の優しい少女の事を思い浮かべた・・・

第十五話 一人旅って寂しいのかと思ったがこれはこれで楽しいものがある(後

作「旅立つ一成、これからどうなるのか!？」

一「全部貴様のさじ加減一つだろうが」

作「うぐ……」

一「旅立つ理由も滅茶苦茶だし」

作「お前が言っただろ!」

一「……お前が言わせただろ」

作「さ、さあ!これから他の勢力に行くわけだが」

一「流すな」

作「前から言っているが、最終的にお前は月に味方して桃香達と戦うからな」

一「だからあんな事言わせただな」

作「ああ、ちなみに白蓮に渡した首飾りは敵の攻撃を防ぐ力があって、あれで麗羽に攻められた時に助かったって事にするから」

一「……今の言わなくてもよかっただろ」

作「あ……」

「馬鹿が」

第十六話 他人に憧れられるのは恥ずかしい(前書き)

連投終了・・・燃え尽きた・・・まずはあの三人に会いに行きます。

第十六話 他人に憧れられるのは恥ずかしい

旅に出て数日、俺はある村にやって来た。前回とは違い食料を持って旅をしていたのだが、さすがに心もとなくなってきたので偶然見つけたこの村で補充しようとしたのだが・・・

—「人が・・・いない？」

村にしては大きめの感じだが、肝心の人の姿が見えない。とりあえず人を探すために村の中を歩き回っていると。

?「止まれ！」

—「ん？」

声をかけられ振り向くと、手甲をつけた俺と似た髪の色をしている少女が俺を睨んでいた。

少女「見ない顔だな、何者だ!？」

—「この村の人か？ 他の人達はどこに・・・」

少女「質問に答えろ！」

今にも殴りかかってきそうな少女を落ち着かせるためにとりあえず名乗ることにした。

「俺は秋「凧ちゃん！ 待つので〜！」「待つんや凧！」・・・」

最近名乗ろうとする度に遮られてる気がする・・・見ると、後ろから新たに二人の少女がやって来た。

少女B「凧ちゃん、その人は違うと思うので〜」

少女C「黄色い布を巻いとらんし、間違いないやろ」

二人がそう言うと、少女が頭を下げてきた。

少女A「すみません、ヤツらの仲間かと思いましたが」

どうやら勘違いしていたようだ。

「いや、誤解が解けたならいいんだが」

少女B「怒ってなくてよかったの〜」

少女B「ほ、本当に御遣い様なの!？」

—「一応そう呼ばれることもある」

少女C「噂と違ってずいぶん優しそうな兄さんやな」

—「噂……か」

今の俺ってどんな人物にされてるんだろう……

少女A「み、御遣い様！ お会いできて光栄です！ あの、私は楽進と申します！ 御遣い様の武勇は私の耳にも届いております、それで、その」

—「そ、そうか。とりあえず落ち着いてくれ」

急に興奮した様子の少女……楽進を落ち着かせる。

楽「はっ！ す、すみません／＼」

少女B「凧ちゃんは御遣い様に憧れてるの」

少女C「せやな、兄さんの活躍を聞きたびに自分の事みたいに喜んでったし」

少女B「御遣い様みたいに弱い人を守るために義勇軍を結成したのも凧ちゃんなの」

楽「ふ、二人とも！」

楽進が慌てて二人を止める。

—「楽進・・・だったか？」

楽「は、はい！」

—「君も自分の守りたいもののために戦っているんだな。立派だよ」

楽「あ、ありがとうございます！」

少女B「凧ちゃんよかったの」

少女C「憧れの人に褒められた気分はどうや？」

楽「そ、それは・・・」

少女B「凧ちゃん顔が真っ赤なの」

少女C「何をそんなに照れとるんや？」

ニヤニヤしながら楽進を見る二人。

楽「・・・二人ともいいかげんにしろよ」

少女B「お、落ち着くの凧ちゃん！」

少女C「ほんの冗談やないか！」

かと思えば楽進が睨むとすぐさま表情を戻した。なるほど、この子達の関係性がわかった気がする。

一「少しいいか？」

とりあえず話を聞こう。

一「楽進と、えっと・・・後の二人は？」

少女B「沙和は于禁なの」

少女C「ウチは李典や」

一「そうか、俺も改めて名乗るけど、名前は秋月 一成。秋月でも一成でも好きな方で呼んでくれ」

楽「はい秋月様！」

于「わかったの一成さん」

李「ウチは兄さんって呼ばせてもらっわ」

一「ああ、呼びやすいのでいいよ。ところで……何かあったのか？ さつきから人の姿が見えないんだけど」

俺がそう尋ねると三人の顔が変わった。

楽「そうだ。秋月様、すぐにこの村からお逃げください」

一「逃げる？」

于「そうなの、もうすぐこの村に黄巾党が攻めてくるの」

黄巾党というと……ああ、あの黄色い布を巻いたヤツらだな。

李「せやから早く逃げた方が……」

一「いや、俺もこの村を守るのに力を貸すよ」

楽・于・李「……え？」「……」

なぜか驚く三人。

楽「しかし、敵は大軍です。いくら秋月様でも」

一「問題ない、それに・・・ヤツらには借りがあるしな」

前に矢で射られた恨みを晴らすいい機会だ。

楽「で、でも・・・」

于「凧ちゃん、一成さんの力を借りた方がいいの」

李「せや、噂によるとこの兄さん、敵の半分を一撃で吹っ飛ばす武器を持つとるらしいで」

月を守った時の戦いが随分広がってるみたいだな。

楽「・・・申し訳ありません秋月様。ご助力頂けますか？」

一「ああ、もちろん！」

笑顔でそれに応える。

楽・于・李「「「ツ・・・／／」「」」

・・・顔を赤くされた。

楽「（な、なぜだ！？ あの顔を見る事ができない！）」

于「（カッコいいの〜）」

李「（凧ちゃうけど、確かに憧れるのもわかる気がするわ）」

なんだ？調子でも悪いのか？・・・はっ、もしかしてこれから戦いなのに笑ったりしたから怒ったのか？

その事について謝ったら首を傾げられた・・・なんでだ？

楽「秋月様！ 南門の防柵は完成しました！」

于「西門も完成なの！」

李「東門が少し不安やけど・・・まあなんとかなるやろ」

東門か・・・俺が行くか。

兵「報告します」

義勇軍の一人が報告に来た。

兵「賊とは違う軍が接近中です！ おそらく陳留からの軍です！」

陳留？ どこかで聞いたおぼえが・・・

—「・・・ああ、あの時の」

星達と出会った時、俺たちに向かって来ていた軍を思い出す。

楽「そうか！ すぐに迎え入れる準備を！ 私も行く！」

そう言って走って行く楽進。

—「・・・東門でも見に行くか」

そう思い東門に向かった。

・・・

—「これなら大丈夫か？」

李典が東門が不安と零していたので見てみたが、これくらいなら充分力バー出来る範囲のものだった。

楽「秋月様！ どちらにいらっしやいますか！」

—「楽進！ こっちだ！」

俺の声に気づいた楽進がこっちにやって来た。

楽「秋月様、ここにいらしたんですね」

—「すまない、李典が東門が不安と言っていたので様子を見に来たんだ」

楽「そうですね、ご苦労様です」

楽進に軽く報告する。

？「すまない、そろそろいいか？」

楽「は、お待たせしました」

俺と楽進が話していると、楽進の後ろにいた女性が話しかけてきた。
・・・って!?

—「あ、天音!？」

俺の目の前には、長い間パートナーだった天音にそっくりの女性がいた。

女性「天音？ すまないが人違いだ。私の名は夏侯淵」

少女「僕は許緒！ よろしくね兄ちゃん！」

女性・・・夏侯淵と共にいた少女・・・許緒があいさつしてくれた。

—「すまない、知り合いに似ていたから。俺は秋月 一成。よろしく二人とも」

許「うん！」

元気よく返事してくれる許緒。反対に何か考えている様子の夏侯淵。

夏「秋月・・・もしかして、巷で天の御遣いと呼ばれているのは」

一「ああ、多分俺だ」

俺がそう言うと二人は驚いたようだった。

許「え？ 兄ちゃんが御遣い様なの？」

夏「やはりな、もしかしたらと思ったが間違いなかったか」

一「楽進、この二人が」

楽「はい、陳留からの援軍を率いている將軍の方です」

夏「我らが主、曹操様より命じられ援軍に来た。曹操様率いる本隊ももつじきこちらに到着するだろう」

一「そうか助かる。それで俺に何か？」

夏「ああ、これから作戦等について話し合っただが、秋月にも意見が聞きたいのだ」

一「・・・俺もいいのか？」

楽「はい！ 秋月様の知恵をぜひお貸しいただきたいのです！」

夏「というわけだ。すまないが一緒に来てくれ」

「わかった」

俺は楽進達と一緒に作戦会議に参加することになった・・・正直力
になれる事は無さそうだが・・・

第十六話 他人に憧れられるのは恥ずかしい（後書き）

作「北郷隊の三人との出会い」

一「楽進のキャラはあれでいいの？」

作「正義感のとても強い彼女だから、天の御使いの活躍を聞いたらあんな感じになるのかなと想像してみたんだが」

一「活躍って・・・賊を叩きのめしたただけだろ」

作「いいんだよ、お前だってファンだって言われて嬉しいだろ？」

一「言われたことないからわからん」

作「・・・これだよ」

一「それより・・・こっちで天音の名前を出していいの？」

作「キャラ設定で姿のイメージは恋姫の夏侯淵だって書きちゃったし、姿を見て見間違えるのは当然かなと」

一「性格は全然違うがな」

作「ああ、Mだし」

一「余計な事言つと天音に殺されるぞ」

作「は、ははは・・・まさか」

—「天音が出たということは・・・神奈もか？」

作「ああ、呉に行った時が楽しみだな」

—「何が楽しみなんだよ」

作「お前の反応がな。あと、天音が気になる方は、俺のもう一つの小説『魔法少女リリカルなのは 永遠の旅人』をご覧ください」

—「ちゃっかり宣伝してんじゃねえよ！」

第十七話 人のやりたがらない事を進んでやる人は好感が持てる(前書き)

これ・・・風か？

第十七話 人のやりたがらない事を進んでやる人は好感が持てる

会議場所まで行くと于禁と李典がすでに来ていた。

夏「それで、賊の数はわかるか？」

楽「はっ、およそ五千、まだいる可能性もありますが、だいたいこのくらいだと思います」

夏「そうか・・・何か防衛の手は？」

李「各門にそれぞれ防柵を作りました。東門が少し不安やけど、兵を多く配置すれば何とかなる思います」

李典が柵について話す。

—「そのことで少しいいか？」

夏「うん？どうした秋月？」

—「東門には俺を行かせてくれ。なんとかかしてみせる」

夏「・・・大丈夫なのか？」

—「ああ、防衛なら得意だからな」

というか、攻めてくる前に潰せばいいしな。

夏「わかった・・・頼む」

一「任せてくれ」

楽「さすがです秋月様！」

于「一成さんカッコいいの〜」

李「兄さんならなんとかかなりそうやな」

許「自分から難しい所に行くなんて、兄ちゃん偉いね」

みんなが尊敬の眼差しを送って来る。少しくすぐったいな。

夏「ふむ・・・ならば、西門に私と季衣、南門に楽進と季典、問題の東門には秋月と・・・念のために于禁、頼む。弓兵は分けて配置する事にしよう」

俺が撃てばそこで終わると思うけど・・・

楽「は！お任せください！」

李「凧と一緒にか・・・まあ、なんとかなるやろ」

于「一成さんよろしくなの」

「ああ、よろしく」

許「よし！僕もがんばるぞー！」

それぞれがやる気のある声を出す。

夏「弓兵は此方から送る。皆は準備を整えてくれ」

全員「はっ！（はい！）（了解）」

夏侯淵の言葉で会議は終了した。

李「それじゃ、ウチは柵の確認に行ってくるわ」

楽「では、私は先に南門に向かい兵をまとめておこう」

「わかった、于禁、俺達も行くぞ」

于「はいなの、二人とも頑張るの」

二人と別れ、東門へ向かった。

東門では、兵達が装備等の最終確認を行っていた。

于「それで一成さん、どうするの〜?」

一「そうだな」

やっぱり・・・

一「吹き飛ばすか・・・(ボソツ)」

于「え?」

一「とりあえず、敵が見えたら弓で攻撃して、後は直接戦闘かな」

于「やっぱりそうなるの〜」

于禁も同じ考えらしい。

一「よし、戦法も決まったし、于禁は敵が来るまで休んでなよ」

于「一成さんはどうするの〜?」

—「俺は敵が来るまでここで待つ、いつ来るかわからない以上、誰かが見てないといけないからな」

于「わかったの、休ませてもらうの」

そう言つて戻つて行く于禁。さて・・・いつ来ることやら・・・

夜が明け、朝日が昇る頃、彼方に砂塵が見えた。間違いない、黄巾党の一団だ。

—「・・・来たか」

于「一成さん！」

警鐘の音に于禁もやつて来た。

于「敵はどうなの!？」

—「・・・あれ」

于禁が視線を向ける。そこには大地を埋め尽くすほどの大勢の賊の姿があった。

「……多いな」

こんな大勢の人間と戦うのも久しぶりだな。

「さっそく弓の準備を……于禁？」

于「……」

于禁の様子がおかしい。心なしか震えているようだ。

「于禁……どうしたんだ？」

于「一成さん……沙和達勝てるのかな？」

「え？」

于「あんなにたくさん敵、見たことないの……」

なるほど、于禁はこれだけの敵を見るのは初めてのようだな。

于「もし、沙和達がやられちゃったら……」

—「大丈夫だよ」

于「え？」

—「確かに敵は大勢いる。でも、俺達にだって仲間がいるだろ？自分の欲望を満たすためだけに徒党を組んでいるあいつらと違って、この村を守るために立ちあがった勇気ある仲間が……」

俺が周りを見渡すと、兵のみんなが頷く。

—「そんな俺達が、あんな賊如きに負けるわけがない……だろ？」

于「うん……」

—「なに、いざとなったら俺が君を守るさ」

安心させるために于禁の頭をなでる。

于「か、一成さん！？」

—「な？だから安心してくれ」

于「わ、わかったの／＼」

—「よし……」

どうやら落ち着いたようだ・・・顔が赤いのが気になるが。

兵A「御遣い様余裕ですね」

兵B「戦いの前に見せつけてくれるぜ」

兵C「于禁様も満更じゃ無さそうですね」

于「み、みんな！何言ってるの〜！」

兵達「はははははは！〜！」

笑顔のみんな・・・これならいける、絶対勝てるぞ。

俺はこの戦いの勝利を確信した。

于「一成さん！敵が弓の射程に入ったの！」

「よし！みんな頼むぞ！」

兵「応っ！」

兵の皆が弓を構える。そして・・・

—「今だ！」

于「放つの〜!！」

俺達の合図で一斉に放たれた矢が賊を貫く。もちろんこれだけで終わるとは思っていない。

—「次の矢を構えろ！」

于「急ぐの!！」

再び放たれる矢。しかし、未だに敵の多くは健在だ。

兵「御遣い様!于禁様!このままでは!！」

于「仕方ないの、このまま直接戦闘に入るからみんな武器を持つのか!！」

兵「応つ!！」

—「……………」

于「一成さん行くの!……………一成さん?！」

あゝ、もう限界だ。あいつら見てたらイライラしてきた。

—「決めた・・・吹き飛ばす」

于「か、一成さん？」

兵「御遣い様？」

于禁達が何事かと見てくる。

—「于禁、兵のみんなをさがらしてくれ」

于「え？」

—「あいつら吹き飛ばす」

そつだ、最初からこうすればよかったんだ。

—「発現」

俺は長銃を発現させ、オーラを込める。

于「綺麗なの〜」

兵「な、なんだ!？」

一「目をつぶしたくなかったら目をつむれ!」

俺の注意にみんなが目を閉じる。賊の中心に照準を定める。

一「まとめて吹き飛べ・・・オーラフォトンプラスター!!!!!!」

カッ!!!!!!・・・ドゴオオオオオオン!!!!!!

瞬間、凄まじい音と共に、世界が再び光に包まれた・・・

一「よし!だいぶ片付いたな」

見れば、あれだけいた賊のほとんどが倒れている。立っている者も、戦意を喪失したのか逃げ始める者が大半だった。

于「うそ……」

于禁が茫然としている。

—「于禁！残りの敵を片付けよう！」

俺は長銃を手甲に変え、敵に向かって行った。

于「……」

—「于禁！どうしたんだ！しっかりしろ！」

于「わ、わかったの！みんなも続くの！」

兵「お、応っ！」

俺の後に続く于禁と兵達。

兵A「すげえ……さすが御遣い様だ」

兵B「お前……あの方の別の名を知ってるか？」

兵C「破壊神だろ？最初はなんでこんな優しそうな方がそう呼ばれ

てるのかわからなかったが・・・今ので納得した」

兵A「見るよ・・・あの穴、どんだけの威力があったらあんな穴が開くんだよ・・・」

兵B「あの方が味方でホントよかったぜ・・・」

兵A・C「ああ・・・」

兵達のつぶやきが俺の耳に入ることはなかった・・・

S I D E O U T

夏侯淵 S I D E

夏「状況はどうなっている！」

兵に尋ねる。先ほどの東門から聞こえてきた凄まじい音と光が気になるが、今は目の前の敵を倒すしかない。

兵「は！我が軍は未だ奮戦しております！防柵もいまだ健在です！」

夏「わかった！すぐに戻れ！」

兵「は！將軍もご武運を！」

こちらの方は問題ないな。南門と東門・・・特に東門の方は大丈夫なのだろうか・・・

兵「報告します！南門はまだ健在！ですが・・・状況はよろしくありません！」

夏「くっ・・・やはりこのままでは・・・」

南門に援軍を送りたいが・・・その余裕もなさそうだ。

于「報告なの〜」

夏「な！于禁！？」

何故東門に向かった于禁がここに？まさか・・・

于「東門、敵殲滅なの〜」

夏「・・・は？」

何？今なんと言ったんだ？殲滅？何が？

夏「于禁、すまないがもう一度報告を頼む」

于「はいなの！東門に向かって来ていた賊を殲滅したのでこちらの手伝いに来ましたの。南門にも一成さんが向かったの」

夏「・・・わかった。いろいろ聞きたいが今は賊を片付けるのが先だ。于禁も頼む」

于「はいなの！」

そうやって賊に向かって行く于禁。いったい何があったんだ？この短時間で賊を殲滅するなど・・・

夏「・・・やはりあやつのか？」

秋月 一成。流石は天の御使いといったところか？

後で話を聞かなくてはな・・・

夏侯淵 SIDE OUT

IN SIDE

賊を殲滅した俺達は、それぞれ別の門に援軍に向かった。俺は今南門へ向かっている。

—「李典!」

前方に李典の姿が見えた。愛用のドリルで敵をなぎ倒している。

李「兄さん! どうしてここに! ?」

—「実は・・! ? 李典後ろだ!」

賊「死ねええええええ! ! ! !」

李「しまっ! ?」

李典が俺を見て気を緩めた瞬間、彼女の後ろから一人の賊が彼女に向かって剣を振り下ろした。李典も気づいたようだが、防御が間に合わない。

—「クソッ! やらせるかよ!」

とっさに彼女を守るように抱きかかえ、空いている手で剣を受け止める。

賊「なっ!?!」

李「に、兄さん!」

—「……俺の仲間に出すとはいいい度胸だな」

手にオーラを込めて賊を殴り飛ばす。そのまま他のヤツらを巻き込みながら賊は吹っ飛んで行った。

—「無事か李典!?!」

李「あ、ああ。ウチは大丈夫や。兄さんおおきにな」

—「いや、俺が声をかけなかったらこんな事にならなかった。俺の落ち度だな、すまん」

李「そんな! 戦闘中にうつかりしたウチが悪いんや! 兄さんは命の恩人や!」

—「……ありがとう」

李「そ、それで兄さん……」

—「ん？」

李「いつまでこのカッコでおるん？・・・正直恥ずかしいんやけど
／＼」

よく見れば、俺が李典を抱きしめた格好で、お互いの顔が至近距離にある。

—「す、すまん！！！！」

光の速さで離れる。

李「・・・そこまで勢いよく離れられると悲しいんやけど・・・」

—「いや！別に李典がどうというわけじゃなくて・・・俺みたいな男にいつまでも抱きつかれるのも嫌かと思って・・・」

必死にいいわけする。

李「・・・別に嫌やなかったんやけどな」

—「え？」

李「な、なんでもあらへん！それより兄さん、なんでここに？東門の敵は？」

一「殲滅した。俺はこっちの援軍に来たんだ。于禁は西門へ向かった」

李「はあ！？殲滅って・・・この短時間で？」

一「ああ」

李「・・・兄さん、噂通りの人やな」

一「そうなのか？」

詳しくは知らんが・・・ろくな噂じゃないんだろうな。

李「ってそうや兄さん！凧が最前線で戦つとるから助太刀したつてや！」

一「わかった！」

俺は楽進のもとへ向かった・・・

S I D E O U T

楽進SIDE

楽「はあああああ!!」

ズオオオオ!!!

賊「ぎゃあああ!!」

気弾を放ち賊を吹き飛ばす。正直キツイが弱音を吐いている場合ではない。

楽「秋月様が奮戦しておられるのだ、私が倒れるわけにはいかない!!」

秋月様のためにも負けるわけにはいかない。せっかくお会い出来たのだから。

弱者を守る天の御遣い、最初聞いた時は信じていなかった。しかし、日が経つにつれあの方の噂が次々と聞こえてきた。

曰く、街を守るためにたった二人で賊に立ち向かいこれを撃退した。

曰く、襲われている城を天の一撃で救った。

先日も、土地を移ろうとしている人々を襲おうとしていた賊を、その圧倒的な武で打ち倒し人々を救ったそうだ。

憧れた。自分の力を自分のためではなく弱き者のために使うその高潔な心に憧れたのだ。噂で銀髪だと聞いた時は、自分とのちょっとした共通点を見つけられて嬉しかった。

だから、秋月様のように人々を守るために自分も義勇軍を結成した。いつかお会い出来た時に、あなたのように人々を守るために自分の力を使っていると胸を張って言うために。

そして昨日・・・とうとうお会いすることができた。最初はまさか御遣い様とは気づかず、失礼な態度を取ってしまった。情けない・・・あれだけ憧れていたお方にあんな態度を取ってしまった。

その事について謝罪すると、秋月様は気にしていないとおっしゃった。やはり強さだけでなく、優しさも兼ね備えている方だと思っ
た。

沙和と真桜のヤツが私の事を秋月様に話した時はかなり恥ずかしか

つたが、それを聞いた秋月様が

《君も自分の守りたいもののために戦っているんだな。立派だよ》

と、私を褒めてくださった時は嬉しかった。私のやってきたことが憧れの方に認められた事がなにより嬉しかった。

・・・悪乗りしだした二人は黙らせた。

さらに、秋月様は、賊がこの村にやって来ていると知ると、力を貸して下さるとおっしゃった。村の事情に巻き込むわけにはいかなないと一度はお断りしたのだが、結局お力をお借りすることにした。

秋月様は、自ら防柵が不安な東門の防衛を申し出た。自分ならなんとか出来ると。頼もしいお言葉だった・・・沙和のヤツしっかりやっているのだろうか？

戦闘が開始してしばらくすると、東門の方から轟音と眩い光が私を襲った。あれは・・・気！？沙和は使えないから、恐らく秋月様のお力だろう。

きつと今も賊を相手に武を振るっているのだろう。ならば、早く片付けて救援に向かわねば。沙和だけでは不安だからな・・・

楽「さあ！どんだんかかって来い！」

私の挑発に大勢の賊が向かってきた。迎え撃つために気弾を放とうと気をためていると。

楽「な！？これは！」

私を遥かに凌駕する気の持ち主が接近してきた。振り向くとそこには・・・

楽「あ、秋月様！？」

秋「楽進！君を援護する！」

輝く手甲を身に付けた秋月様が私に向かって走って来ているのが見えた。

楽進 SIDE OUT

IN SIDE

李典に言われ楽進の援護に向かうために走っていると、気弾を放ち賊を倒している楽進が見えた。

—「・・・オーラに似ているな」

彼女なら俺の技も使えるかもしれない。そんな事を思いながら彼女に向かつて走る。

楽「あ、秋月様!？」

楽進が驚きの顔で俺を見る。

—「楽進！君を援護する！」

そう言っって彼女の前を通り過ぎ賊の中に突っ込む。そして

—「爆碎跳天昇!!!」

いつものように賊を気柱で吹き飛ばす。

賊達「ぎゃあああああああ！！！！」

そして、いつものように宙を舞う賊達。

—「さあ！どんどん行くぞ！」

俺は賊の中心に向かって突っ込んで行った・・・

S I D E O U T

楽進 S I D E

楽「・・・すげい」

秋月様の技に目を奪われる。私の気弾とは威力も大きさも違う圧倒的な気の柱。私も今の技を身につけるのに必死に努力したが、秋月様はいつたいどれほどの修練を積まれたのだろうか？

楽「秋月様！」

賊に向かつて行く秋月様を追いかける。

楽「秋月様何故ここに！？東門は！？」

—「東門の敵は片付けた！だからこっちの援護に来た！」

楽「な！この短時間で！？」

なんとということだ。私達が苦戦している間に既に敵を殲滅しているなんて。

楽「わかりました！ご助力感謝します！」

—「楽進大丈夫か？キツイなら一度さがって・・・」

私を気遣ってくださる秋月様。

楽「お気遣いありがとうございます。ですが問題ありません。まだ行けます」

せつかく秋月様の武を間近で見られる機会なのだ。さがっている場

合ではない。

—「わかった、つらくなったらすぐ言ってくれ」

楽「はっ！ありがとうございます！」

—「よし！行くぞ！！」

楽「はい！！」

秋月様と一緒に賊に突撃する。負ける気は全くしなかった。

そして半刻ほどたった時。

楽「これは？」

—「銅鑼の音だな」

秋月様の言う通り、今のは銅鑼の音だ。いったい何が？

兵「報告します！新たなる軍勢が接近中！旗印は曹！」

どうやら、援軍の本隊が到着したようだ。これで勝敗は決したな。

楽「秋月様！」

—「ああ、これで決まりだな。楽進もう一踏ん張りだ！」

楽「はい！」

勢いのまま賊を蹴散らす。味方の到着に士気の上がった味方と援軍によつて、残りの賊も倒されこの戦いは終結した・・・

第十七話 人のやりたがらない事を進んでやる人は好感が持てる（後書き）

作「長かった」

一「また、大技使わせやがって」

作「いや・・・つい」

一「それに于禁は戦いの前に怯えるような子じゃないだろ？彼女だって立派な武将だ」

作「それは・・・あれだけの敵がいたら少しは怖くなるのかと思っ
て」

一「あまりキャラを変え過ぎるとファンの方から叩かれるぞ・・・
主に楽進の」

作「勘弁してください！」

一「今回も派手にやったな。彼女もうオリキャラみたいじゃないか
？」

作「そこまで言うか!？」

一「彼女の心酔率半端じゃないか？なんだかついて来そうなん
だが」

作「・・・それいいな」

第十八話 仲のいい人は名前で呼ぶべきだ（前書き）

今さらだが李典の口調おかしくないかな？

第十八話 仲のいい人は名前で呼ぶべきだ

戦闘が終了したので楽進と共に会議をした場所まで戻る。

于「あ、一成さんに凧ちゃん！」

李「兄さんお疲れさん。凧を助けてくれておおきにな」

于禁をはじめとした面々も戻って来ていたようだ。さらに初めて見る金髪の少女と黒髪の女性がいた。

一「李典、先に戻ってたんだな。姿が見えなかったから心配したぞ」

李「堪忍な兄さん。先に報告しときたい事があつたさかい」

一「いや、無事だったんならそれでいい」

李「・・・おおきに」

于「そういう一成さんは大丈夫だったの？」

于禁が心配そうに見てきた。

一「ああ、俺も凧も特に怪我は無い・・・よな？」

凧「はい、心配かけたな沙和」

于・李「……………」

凧「？…沙和？」

一「二人ともどうした？」

于「一成さん……………」

李「いつの間に凧を真名で呼ぶようになったん？」

凧「そ、それは……………」

一「ああ、戦闘が終了した後、凧が教えてくれてな…………今さらだが本当によかったのか？」

凧「はい！秋月様にはぜひとも真名で呼ばれたく思いました！」

一「じゃあさ、俺の事も一成と呼んでくれよ。それが真名みたいなものだから」

凧「そ…そんな恐れ多い事」

于「え！？もしかして沙和、初対面の人を真名で呼んでたの!？」

一「いや、あくまで『みたい』なものだから。それに、最初に言いやすい呼び方で呼ぶように頼んだのは俺だから気にしなくていいよ」

于「ほっ・・・よかったの」

一「まあ、そういうわけで凧と呼ばせてもらってるわけだ」

李「なるほどな、道理で凧が嬉しそうなわけや」

凧「なあ!？」

于「隠そうとしてもバレバレなの」

李「態度で丸わかりやな」

凧「ツ・・・／＼」

顔を赤くする凧。そんなに恥ずかしいのか？

于「いいなあ凧ちゃん・・・そうだ！一成さん、沙和の事も真名で呼んでほしいの」

李「そうやな、兄さん、ウチの事も真名で呼んでや」

一「いいのか？」

于「うん！沙和の事励ましてくれたし、そのお礼なの」

李「命の恩人に対する礼としてはちょっと物足りんかもしれへんが、受け取ってえな」

礼か・・・なら受け取らないと失礼だよな。

—「わかった、じゃあ二人の真名を教えてくださいか？」

于「沙和の真名は沙和なの〜」

李「ウチの真名は真桜や」

—「沙和に真桜だな・・・よしおぼえたぞ。改めてよろしく沙和、真桜」

沙「うん、よろしくなの〜」

真「よろしゅうな兄さん」

俺はこの村で出会った三人と真名を交換した。

少女「・・・そろそろいいかしら」

真名を交換し終わった俺達に少女が話しかけてきた。

—「ああ、すまない。それで君は？」

少女「人に名を尋ねるならまず自分から名乗ったらどうかしら？天の御遣い、秋月 一成」

—「……俺を知っているのか？」

少女「ええ、あなたのウワサは行く先々で聞いているわよ。私達が救援に向かった街を守ったのもあなたでしょう？」

—「ああ、稟が救援を要請したのは……」

少女「おそらく私達でしょう。街の者に話を聞いたら皆あなたの事を話したわ。銀色の髪の輝く剣と光の盾を持つ男に救われたとね」

女性「何！？お前がその男なのか！？」

黒髪の女性が俺を指差して驚く。

夏「姉者……もしかして気づかなかったのか？」

女性「秋蘭！？お前はわかっていたのか？」

夏「ああ、本人にも確認したからな」

女性「そんな……」

項垂れる女性。

少女「・・・とにかく、今回の件についても感謝するわ、秋蘭と季衣もよく頑張ったわね」

許「はい！」

夏「ありがとうございます華琳様、ですが、こちらにいる三人と義勇軍の者達。そして秋月がいなければこの村は落ちていたかもしれ
ません」

許緒が嬉しそうに返事をし、夏侯淵が俺達を見ながらそう言った。

少女「そう、あなた達ありがとう。心から感謝するわ」

凧「い、いえ！当然の事です！」

沙「そ、そうなの〜！」

真「曹操様にお礼を言われるなんて・・・夢じゃうか？」

とても嬉しそうな三人。

—「ん？曹操？」

少女「あら、そういえばまだ名乗っていなかったわね。私は曹孟徳。
そしてこちらが」

女性「夏侯惇だ、そこにいる秋蘭・・・夏侯淵の姉でもある」

一「そうか・・・俺は名乗る必要は無いよな？」

曹「ええ、それより秋月。あなたに聞きたい事があるの」

一「何だ？」

夏侯淵が口を開く。

夏淵「秋月・・・あの短時間でどうやって敵を殲滅したんだ？それに、突如響いた轟音と眩い光はいつたい・・・」

曹「気になって東門を見れば、地面に深々と空いた穴・・・答えなさい。あなたは何をしたの？」

気がつけば沙和以外の全員が俺を見つめている。

一「それは・・・」

沙「一成さんが叫んだと思ったらみんな吹き飛んでたの」

一成「沙和以外の面々」・・・はい？」

沙和が説明してくれたのだが・・・

—「沙和・・・それじゃわからないと思うぞ」

沙「え〜？でもそうとしか言えないの〜」

夏惇「うむ、私には何となくわかったぞ」

許「僕も！」

夏淵「姉者、季衣、少し黙っていような」

凧「沙和・・・もつと詳しく話せ」

真「それじゃ理解出来る方がおかしいわ」

曹「于禁・・・だったかしら？その光る前の事を話してちょうだい」

沙「えつと・・・賊がいつぱいやつて来て・・・まずは弓で攻撃して・・・それでも全然減らなかつたから沙和達も武器を持って戦おうとしたら・・・」

曹「戦おうとしたら？」

沙「一成さんが「吹き飛ばす」って言って、綺麗な筒が出て来て」

夏淵「筒？」

—「「この事だ」

手甲を消し、長銃をみんなに見せる。

沙和以外「な!？」

沙「やっぱり綺麗なの」

凧「あ、秋月様・・・手甲は？」

—「今はこの形になってる」

真「どういうカラクリや!？」

—「後で教えるよ」

沙「一成さんがその筒を敵に向けたと思ったら、ピカって光ってすごい音がして、目を開けたら」

曹「賊が吹き飛んでいたと？」

沙「そうですね」

みんなが長銃を見る。

曹「秋月、それは何？」

—「俺の武器、ここを引くとこの穴から気が発射されて敵を攻撃する仕組みだ」

凧「気ですか？」

—「ああ、凧が使ってるものとはほぼ同じだ。俺はオーラと呼んでいいけどな」

凧「おおら……ですか」

真「兄さん、天の国ではこんな技術があるんか!？」

—「あるにはあるが……これは俺が作ったようなものだし」

真「ホンマか!？兄さんカラクリ作れるんか!？」

—「作ったというか最初からあったというか……」

夏淵「信じられんな。そんな細い筒で人が倒せるものか」

夏淵「確かに信じられないが、現に賊は倒されたのだしな……」

許「うーん、僕も信じられないな。でも、兄ちゃんがウソつくとは思えないし……」

みんな半信半疑のようだった。

曹「そうね……秋月、今その武器の威力を見せてもらってもいい

かしら？」

夏淵「か、華琳様！危険です！もし、本当にそこまでの威力があれば・・・」

曹「だから実際に見て確かめるんじゃない・・・で、どうかしら？」

一「わかった、でも危ないから村の外で使わせてもらおうぞ」

曹「もちろん。さっそく行きましょう」

全員で村を出てしばらく歩く。

一「さて、この辺でいいか。みんな離れていてくれ」

全員が距離を取ったのを確認して俺は長銃にオーラを込める。見せるだけだし、五割くらいの力でいいか。

一「はああああ・・・」

曹「な、何!？」

夏惇「クツ・・・馬鹿な!？この私が震えているだ!？」

夏淵「これほどとは!」

許「わわわわ！」

凧「これが・・・おおら!?!」

沙「本当に凧ちゃんと一緒に力なの?!?!」

真「絶対ちゃう!こんなヤバそうなもの見たことないわ!」

俺は銃口を空に向け引き金を引いた。

ー「オーラフォトン・・・ブラスター!?!」

カツ!?!!

銃口から放たれた光は、雲を吹き飛ばしながら彼方へと突き進み、ゆっくりと消えていった。

ー「・・・とまあ、こんな感じの武器だ」

全員「・・・」

返事は無い。みんな光が進んで行った方を見て固まっている。

曹「……何よアレ？」

—「これで信じてもらえたか？」

曹「ええ、見た事を後悔するほどね」

—「？」

夏淵「確かに、あれだけの威力ならあの結果も納得できるな」

沙「うん……」

凧「沙和？どうしたんだ？」

沙「うん、沙和が見た光はもっと強かった気がするの」

真「……もうなんでもありやな……」

夏惇「……」（未だに固まっている）

許「ふわぁ、すごかったな。ピカって光ってびっくりしちゃった」

—「まあ信じてもらえたようだよよかった。俺としてはあまり使いたくないんだが、今回は絶対に負けられない戦いだっただからな」

威力も見せたので村に戻る。

曹「まだ夢を見ていたような気分だけど、それよりも……あなた

達に褒美を与えないとね」

—「褒美？」

曹「ええ、秋蘭の言った通り、あなた達がいなかったらこの村の被害は深刻でしたでしょうし、これだけの働きをしたのだから褒美を与えないわけにはいかないでしょう？」

そう言う曹操・・・と言ってもな。

—「俺は偶然この村に来ただけだし・・・」

凧「わ、私達も当然の事をしただけで・・・」

沙「はい！沙和、阿蘇阿蘇に載ってた新作の服がほしいの〜」

真「ウチはカラクリの部品やな。ちょうど切らしてて困ってたんや」

断ろうとする俺と凧。逆にもらう気満々の沙和と真桜。

凧「・・・二人とも」

沙・真「冗談です！もらうわけにはいきません！！」

凧が二人の方を向くと、全力でさっきの言葉を撤回する二人。どう

したんだ？

曹「そういうわけにはいかないの。これは私の沽券にも関わることなんだから」

なるほど、十分な働きをした者に褒美を与えない器量の小さい者と思われたくないわけだな。

一「じゃあ・・・この三人を君の軍に入れてあげてくれないか？」

凧・沙・真「「え？」」

一「三人の力は充分知っただろうし、君にとっても悪い話じゃないだろうけど」

曹「それは嬉しいけど・・・」

凧「秋月様・・・なぜ？」

一「君達は虐げられて来た人達のために義勇軍を結成したんだろ？彼女の軍に入れば今よりもっと多くの人を助けられるようになるぞ？」

凧「秋月様・・・」

沙「一成さん・・・」

真「兄さん……」

—「な？」

頷く三人。

凧「……曹操様！私達三人を軍の末席に加えてください！」

沙「沙和達一生懸命頑張りますから！」

真「どうか！よろしゅうお願いします！」

曹操に頭を下げる三人。答えは知っているんだが緊張する。

曹「……三人とも頭をあげなさい」

凧・沙・真「……」

曹「あなた達の思いはわかったわ。以後は私の軍でその力を振るいなさい」

凧「そ、それじゃあ！」

曹「ええ、私の覇道に力を貸してちょうだい」

凧・沙・真「……はい！（なの！）……」

喜び合う三人。凧に至っては涙を流している。

—「・・・よかったな三人とも」

君達ならきつと多くの人を救えるさ・・・

そう思い、俺は次の目的地に向かうために村を後にしようとしたのだが・・・

曹「待ちなさい秋月、私の話は終わっていないわよ？」

なぜか曹操に引きとめられた。

—「ん？まだ何か？」

褒美の事は言ったし、もう用は無いはずだけど・・・

曹「あなたほどの武の持ち主を私が逃すわけ無いでしょう？」

—「どづいづことだ？」

曹「単刀直入に言うわ。秋月・・・私の所に来ない？あの力を見た以上、あなたを放っておくわけにはいかないわ」

一「・・・・・・・・はい？」

なぜか曹操に勧誘されてしまった。

第十八話 仲のいい人は名前で呼ぶべきだ（後書き）

作「曹操のお誘いだ。お前はとうするんだ？」

一「とうするって・・・断るに決まってるだろ。俺は桃香達の力になるって決めたんだから」

作「ですよな」

一「当然だ」

作「まあ、お前には曹操に付き合ってもらったがな」

一「・・・え？」

作「とりあえず・・・黄巾党が壊滅するまでは客将として魏にいてもらおう」

一「なんで・・・ってまさか」

作「ああ、フラグのためだ」

一「ふざける！そんなくだらねえことで行ってたまるか！」

作「決定事項だ。あきらめろ」

一「畜生・・・」

第十九話 自分の力を認めてもらえるのは嬉しい(前書き)

今回短めです。

第十九話 自分の力を認めてもらえるのは嬉しい

曹「それで・・・どうかしら？」

俺の力を買ってくれるのは嬉しいんだが・・・

—「すまないが、君の部下にはなれない」

曹「・・・理由を聞いてもいいかしら？」

—「力を貸すと決めた娘達がいるからな。彼女達の想いを裏切るわけにはいかない」

曹「そう・・・」

夏侯「貴様ああ！せつかくの華琳様のお誘いを断る気か！？許さんっ！！」

夏侯が剣を向けてきた。それを手甲で受け止める。

ガキイイイイイン！！！！

夏侯「なっ！？」

夏侯惇が驚愕する。

「……すまないが殺されるわけにはいかない。抵抗はさせてもらおう」

殺気をぶつける。

夏侯「クッ！」

曹「……やめなさい春蘭」

夏侯「しかし華琳様！」

曹「やめなさいと言っているの」

夏侯「は、はい……」

曹操の一言で剣を収める夏侯惇。彼女には頭が上がらないようだな。

夏淵「それにしても……姉者の一撃を片手で受け止めるとは」

許「兄ちゃんすごいね！僕には無理だよ」

曹「それで秋月、何故あなたは一人旅をしているの？さっき言って

いた力を貸す娘達はどうしたの？」

—「見聞を広めるためだ。君も感じているだろう？近いうちに戦乱の世になる。だから今の内に出来ることはやっておこうと思ってる。彼女達に許しをもらって旅をしている」

理由はそれだけではないが、言うわけにはいかない。

曹「そう・・・ならば私達と来なさい」

—「いや、だから・・・」

曹「部下になれと言ってているんじゃないわ。私のところで色々学べばいいし、黄巾党を討伐するまで協力してくれないかしら？」

—「客将か？」

曹「そういうこと。それに・・・あの子達はあなたに来て欲しいみたいだし」

—「え？」

曹操に言われてみると、凧達が俺を見つめていた。

凧「秋月様・・・」

沙「一成さん……」

真「兄さん……」

曹「ふふ、ずいぶん気に入られた様ね」

一「むっ……」

うーん……仕方ないか。

一「わかった、君に協力しよう。ただ、一つだけお願いがある」

曹「何かしら？」

一「俺にはやるべきことがある。だから時期が来たら抜けさせてもらおう」

曹「いいでしょう。さっきも言ったけど黄巾党を討伐するまででいいわ」

一「よし、ならしはらく世話になる」

俺は曹操に協力することにした。

凧「秋月様！また一緒に戦えるのですね！！」

—「ああ、少しの間だがよろしくな」

沙「一成さんがいてくれれば百人力なの」

真「兄さん。あとでさっきの筒もつかい見せてもらってもええか？」

—「別にかまわんが」

真「よっしゃ！約束やで！」

夏淵「秋月、よろしく頼む」

許「兄ちゃんよろしくね」

—「ああ、こちらこそ」

俺の参入は好意的に受け取られているようだ。

夏惇「か、華琳様！私は反対です！！」

・・・夏侯惇を除いて。

曹「あら春蘭、私の決定に不満があるの？」

夏惇「そ、そうではありませんが、こんな武器に頼り切った男など

いなくても、黄巾党ぐらい私が倒してみせます!！」

武器に頼り切った・・・か。確かにアレじゃそう思われるよな。

曹「では、秋月自身が武を持っていれば反対じゃないのね」

夏惇「ええ、その時は私もコイツを認めます」

曹「そう・・・わかったわ」

俺を指差す夏侯惇と、面白そうに見つめてくる曹操。あれ？嫌な予感がする。

曹「ならば春蘭、秋月と勝負して自分で確かめるといいわ。この男が本当に強いのかどうか」

やっぱり・・・

夏惇「ありがとうございます華琳様！必ずやこの男を打ち破ってみせます!！」

燃える夏侯惇。俺の意思は？

―「……俺は一言もいいと言っていないんだが」

曹「あら、あそこまで言われて悔しくないの？」

―「悔しいもなにも、勝負する理由が無い」

夏惇「はーっはっはっは！どうした秋月？怖気づいたのか？」

―「人の話を聞け」

夏淵「すまない秋月。あんなった姉者は止められん」

許「勝負するしかないよ。兄ちゃん頑張ってね」

マジか……

曹「逃げられないわよ秋月。大人しく勝負しなさい」

―「はあ……わかったよ」

さっさと終わらせよう。

―「じゃあさっそく」

曹「待ちなさい、せつかくの勝負をこんなところではもったいないわ。城に戻ってやるわよ」

俺としては早く終わらせたいんだが。

曹「それと、楽進達には私の真名を許します。以後は華琳と呼びなさい。春蘭達もね」

夏惇「私の真名は春蘭だ。よろしく頼む」

夏淵「私は秋蘭」

許「僕は季衣だよ。よろしくね」

凧「はっ！私の真名は凧です。よろしくお願いします！」

沙「沙和は沙和ですの〜」

真「ウチは真桜言います。どうぞよろしゅう」

曹「秋月、あなたは春蘭との勝負に勝てば真名を呼ぶことを許します。精々頑張ることね」

夏惇「お言葉ですが華琳様、ヤツが勝つことなど万に一つもありません。この私が必ず斬ってみせます！」

物騒な事を言わないでくれ。

曹「ふふ、期待しているわ。さあ、城に戻りましょう」

こうして、なぜか俺は曹操の城に行くことになってしまった。

第十九話 自分の力を認めてもらえるのは嬉しい（後書き）

—「短いな」

作「前回のに入れてもよかったかも」

—「まあその場その場で書いているお前には厳しいかもな」

作「確かに・・・」

—「それにしても・・・なんで戦う必要があるんだ？」

作「初の武将との戦いだが、当然お前が勝つ」

—「さすがに今回は苦戦するだろ？」

作「いや、瞬殺だ！」

—「おい！」

第二十話 因縁をつけられるのは迷惑以外の何物でもない（前書き）

相変わらず戦闘書くの下手だな・・・

第二十話 因縁をつけられるのは迷惑以外の何物でもない

曹操に付き城に入ると、フードを被った少女が出迎えてくれた。

少女「お帰りなさいませ華琳様・・・そのケダモノは？」

少女が俺を睨む。ケダモノって・・・

曹「失礼よ桂花、新しい客将よ。秋月、自己紹介して」

一「ああ、俺の名前は秋月 一成だ。よろしく」

少女「秋月？もしかしてアンタが天の御遣い？」

一「一応・・・な」

少女「そう・・・私は旬？。それ以上寄らないでよ汚らわしい」

自己紹介が終わるとすぐ俺から離れる少女・・・旬？。確か・・・相当な男嫌いだったよな

凧達が自己紹介を終えると、曹操がさっそく勝負をするよう言ってきた。全員で中庭に向かう。

—「で、ルールは？」

曹「るるるる？」

—「決まりの事だ」

曹「そうね。気絶、もしくは武器を落とした方の負けということではないわね？」

夏侯「はい華琳様！」

—「わかった」

夏侯惇と対峙する。武器は……あの剣のリーチに手甲は不利かなら

—「発現」

俺は武器を発現させる。今回は一振りの刀だ。

旬「なっ！？何よアレ！？」

曹「落ち着きなさい桂花。アレが秋月の力よ」

夏淵「ふむ、ずいぶん細い剣だな」

許「あんなので春蘭様の剣を受けたら折れちゃいますよ」

凧「今回は手甲ではないのか」

沙「一成さん色々な武器を持つてるの」

真「うう、勝負より兄さんの武器の秘密が気になってしゃあないわ」

それぞれが感想を漏らす。そういえば、この時代では珍しい形だな。

夏惇「行くぞ秋月！はあああああ！！！！」

夏侯惇が突っ込んできた。早い・・・さすが武将。

「「ぶっ！」

慌てず回避する。

ドローン！！！！

・・・オイ

—「穴が開くって・・・どれだけの威力があるんだ？」

受ければ致命傷は避けられないだろう。

夏惇「クソツ！避けるなあああ！！！」

—「避けなきゃ死ぬだろう」

夏惇「ならば死ねええええ！！！」

—「死ねって・・・」

気絶までだろうか？

曹「へえ・・・やるわね」

夏淵「ええ、姉者の攻撃をあれだけ避ける者も珍しいです」

旬「な、何なのよアイツ。脳筋だけど実力は本物の春蘭の攻撃を避けるなんて」

許「春蘭様も兄ちゃんも頑張れ〜！」

凧「わ、私はどちらを応援すればいいんだ・・・」

沙「一成さん頑張るの〜」

真「兄さん気張りや!」

ギャラリーの視線を感じる。

夏惇「ならば……これでどうだ!!!」

「むっ!」

全力の一閃から連続攻撃に変わった。縦、横、斜めから来る斬撃をしゃがみ、飛び、刀で受け止める……重いな。

「さすがだな夏侯惇。凄まじい一撃だ」

夏惇「はっはっは!!!どうだ!私の力は?降参するなら今の内だぞ!!!」

「いや、これで少しは本気が出せそうだ」

そう言うと夏侯惇の笑い声が止まった。

夏惇「ほう……私相手に手加減していたと?」

—「そうじゃない、君の力を量らせてもらったただけだ。ここからは俺も攻撃させてもらう」

夏侯惇「舐めるな！はあああああ！！！」

夏侯惇が高速の連撃を放ってきた。だが・・・遅い！

—「はっ！」

夏侯惇の背後に周り、刀を鞘に入れたまま打ち付ける。

夏侯惇「がはっ！」

吹き飛ぶ夏侯惇。だが、すぐに体制を整え俺に剣を向ける。

夏侯惇「貴様！今何をした！？」

—「何って・・・別に」

夏侯惇「ふざけるな！どうやってあの一瞬で私の背後に周った！？妖術か！？」

—「妖術って・・・ただ速く動いただけだ」

夏惇「なんだと!?!」

俺の言葉に驚く夏侯惇。

—「簡単な事だ。相手が速く動くならそれ以上の速さで動けばいい。だからそうしただけだ」

夏惇「なっ!?!」

—「君より速く動いたから君の後ろに周ることができた・・・理解したか?」

夏惇「認めん!私の一撃より速いだと?私は認めんぞ!」

再び斬りかかって来る夏侯惇。それを避ける俺。

曹「相手より速く動く・・・か」

夏淵「口で言うのは簡単ですが・・・実際に行える者はそうはいないでしょう」

曹「ええ、正直秋月の姿を追いかけただけで精いっぱいだったわ」

夏淵「私もです」

凧「すごい……」

沙「沙和には見えなかったの。二人はどうなの？」

真「……ウチも」

凧「私は……少しだけ」

真「ホンマか凧!？」

沙「アレが見えるなんて、さすが凧ちゃんなの」

許・旬「ポカーン……」

さて……そろそろ終わらせるか。

夏惇「秋月! 貴様さつきから避けてばかりで攻撃してこないではないか!」

一「そうだな……なら、行かせてもらおう」

夏惇「ああ、来い!」

俺は刀を腰に差し、体制を低くする。俺の構えに不思議そうな顔を

する夏侯惇。

夏侯「なんだ？それがお前の構えなのか？」

—「ああ」

目を閉じ集中する。狙うはただ一点。

曹「何をするつもり？」

夏淵「わかりません。ですが」

曹「ええ、ここからでも彼の殺気が伝わって来るわ」

俺は夏侯惇に向け突撃する。

—「月輪の太刀・・・参る！」

すれ違い様に夏侯惇に斬りかかる。

夏侯「クッ！」

それを防ぐ夏侯惇。だが・・・甘い！

—「ふっ！」

反転し、背後から再びすれ違い様に刀を振るう。

夏惇「な！？ぐああああ！！」

対処し切れず、俺の一撃を食らい崩れ落ちる夏侯惇。どつやら勝負ありだな。

曹「そこまでよ。勝者秋月！」

—「ふう……」

刀を消す。俺は夏侯惇に近づいた。

夏惇「ふっ……まさか私が負けるとはな」

—「いい勝負だった。やっぱり強いな」

夏惇「それは嫌みか？」

—「いや、それは……」

夏惇「ふん、言ってみただけだ」

そう言つて笑う夏侯惇。さっきまでよりずいぶん柔らかい態度だな。

曹「お疲れ様春蘭。おしかったわね」

夏惇「か、華琳様！申し訳ございません！あれだけの口を叩いておきながら……」

曹「そんなことないわ。あなたはよくやった。今回は相手が悪すぎただけ……」

俺を見ながらそう言う曹操。

曹「見事ね秋月、約束通り私達を真名で呼ぶことを許します」

一「わかった華琳。俺の事は一成と呼んでくれ。それが俺の真名みたいなものだから」

華「わかったわ一成」

旬「か、華琳様！このような者に真名を教えるなど……！」

華「あら、これほどのものを見せてくれた者に真名を教えるのはおかしくないでしょう？」

旬「そ、それは……」

華「そうだね、桂花。あなたも一成に真名を教えなさい」

旬「華琳様！……くっ……桂花よ。華琳様がおっしゃるから許すけど……軽々しく呼ばないでよね！！」

一「よろしく桂花」

桂「か、軽々しく呼ばないでって言ったでしょ！！」

そっぽを向く桂花……俺にどうしろって言うんだよ。

許「兄ちゃんすごいね！春蘭様に勝っちゃうなんて！僕の真名は季衣だよ！」

夏淵「私の真名は秋蘭だ。今度は私とも一戦願いたいな」

一「よろしく季衣。秋蘭……今度な」

夏惇「おい秋月」

一「ん？」

夏惇「私の真名は春蘭だ。仕方ないからそう呼ばせてやる」

一「ああ、よろしく春蘭」

春「ふん・・・」

立ちあがろうとする春蘭だったが、足に力が入らないのか再び地面にへたり込む。

秋「どうした姉者？」

春「情けない話だが足がしびれて思うように動けん」

桂「全く、体力だけが取り柄のくせに情けないわね」

春「なんだと！」

桂「なによ！」

睨みあう二人。犬猿の仲とはこの事だな。

凧「秋月様、見事でした」

沙「春蘭様に勝っちゃうなんて」

真「さすが天の御遣いやな」

一「ああ、ありがとう三人とも」

三人に礼を言い、再び春蘭達を見る。・・・仕方ないな。

一「春蘭」

春「なんだ！今は取り込み中・・・」

一「よつと・・・」

春蘭を抱きかかえる。

春「な、何をする！？」

一「気をつけていたがケガをしているかもしれないからな。医務室へ連れて行く。季衣、案内頼めるか？」

季「うん！こつちだよ兄ちゃん」

春「離せ！一人で行ける！！」

一「動けないんだろ？嫌だろうけど我慢してくれ」

春「だからと言って！」

華「あら、せつかくの厚意なんだから大人しく連れて行ってもらいなさい」

春「か、華琳様・・・」

華「ふふ、これは命令です。春蘭、一成に運んでもらいなさい」

春「・・・わかりました」

華琳に命令され大人しくなる春蘭。

春「くっ・・・秋月！華琳様の命令だ、しっかり私を医務室まで連れて行くんだぞ！」

—「任せてくれ」

春「・・・ふん」

俺は季衣の案内の下、春蘭を医務室へ運んだ。結果はどこも異常なし。よかったよかった。

華「ふふ、春蘭の顔、面白かったわね」

秋「華琳様・・・もしかして、姉者の慌てるどころが見たかっただけでは？」

華「あら秋蘭、あなたはあの顔を見てなんとも思わなかったの？」

秋「・・・新鮮でした。姉者のあんな顔を見るのは」

華「ふふ、そうですね」

俺がいなくなった後でこんな会話がされていたのをもちろん俺が知る由も無かった。

第二十話 因縁をつけられるのは迷惑以外の何物でもない（後書き）

作「これで魏の面々とは全員真名を交換したな」

—「だな・・・」

作「今回はチートは抑えたぞ」

—「そうか？」

作「相手より速く動くって努力すれば出来そうじゃないか」

—「そのまま相手の背後に回ることって出来るものなのか？」

作「しらん。やったことないからな」

—「というか不可能だろ」

作「お前なら出来るさ。このチート野郎」

—「黙れへボ作者。もっと戦闘描写をうまく書け」

作「戦闘は難しいんだよ・・・」

—「最後に・・・医務室つてあるのか？」

作「・・・次回お楽しみに！」

—「適当に書いたな」

第二十一話 どうせなら頼む上司になりたい(前書き)

警備隊発足!これからどうしよう

第二十一話 どうせなら頼れる上司になりたい

春蘭との手合わせから数日、俺は華琳や桂花と共に街の現状について話し合っていた。

華「警備隊？」

一「ああ、必要かと思ってな」

思い付いたことを話す。

桂「ちょっとあんた！ 華琳様が治められているこの街で犯罪が起ころうとも!？」

一「いくら治めている人間が立派でも、完全に犯罪を防ぐことはできない。それは君だってわかってるだろう？」

桂「それは・・・」

華「いいのよ桂花、確かに一成の言う通りだわ」

桂「華琳様・・・」

華「それで、人員はどうするの？」

一「凧達に任せてみたらどうだ？ まだここに来て日が浅いし、街

の人達に顔をおぼえてもらういい機会だ。早く打ち解けてもらいたいしな」

凧ならしっぴかりやってくれるだろうし、沙和と真桜は・・・うん、信じよう。

華「そうね、それじゃあ隊長はあなたに任せるわよ一成」

一「え？」

華「あなたが言い出した事なんだから、あなたが責任者になるのが筋じゃないの？」

一「・・・確かに」

華「でしょう？ ならお願いね。あの娘達には伝えておくわ」

一「しかし、いずれ俺はここを去るんだぞ？ そんなヤツに隊長を任せるのは・・・」

華「なら、あなたが後任を任せられそうな人物を探しなさい。まあ、おそらくあの三人の中から決まるでしょう。しっかり見ていなさい」

一「・・・わかった。やらせてもらう」

華「やり方等はあなたに任せます。しっぴかりね」

桂「あんたの考えた案なんだから、ちゃんと結果を出しなさいよ」

「了解」

こうして俺は予期せぬ形で警備隊の隊長になってしまった。

翌日・・・

「」と言つわけで、君達は俺と一緒に街の警備をすることになったわけだが・・・」

中庭に集まっていた凧達に話をする。

凧「はい！ お任せ下さい！ この任、必ず成し遂げてみせます！
！」

凧が燃えていた・・・予想通り、彼女がいれば大丈夫だな。

沙「警備隊か、沙和に出来るのかな？」

真「まあ、凧に任せとつたら大丈夫ちゃう？」

・・・この二人も予想通りだ。

一「とりあえず、今日は街の中を見て回って道をおぼえて行こう。いずれ正式に警備兵が入ってくるだろうから、その時は君達が教えてあげてくれ」

凧「わかりました秋月様・・・あの・・・隊長とお呼びした方が？」

一「ん？ そうだな・・・俺としては今まで通りでも構わないんだが、隊員が増えたらそうも言ってもらえないし・・・」

沙「え、沙和、一成さんて呼びたいの？」

真「ウチも兄さんって呼び方になれてしもたからな、なんか違和感が・・・」

凧「二人とも、そういう問題じゃ・・・」

一「・・・よし、なら個人で会う時には今までの呼び方で、警備中は隊長って事で」

これなら問題ない・・・はず。

沙「わかったの〜一成さん」

真「さすが、話がわかるな兄さん」

凧「いいんですか？ 秋月・・・隊長？」

「ああ、俺にとって君達は部下じゃなく仲間だしな。なるべく名前で呼び合いたいと思う」

凧「・・・わかりました。では自分も秋月様と呼ばせて頂きます」

「嫌なら無理に呼ばなくていいぞ。凧はこういった事はきっちり分別しておきたい性質だろ？」

凧「い、いえ・・・別に嫌と言うわけでは」

沙「凧ちゃん、素直に呼びたいって言えばいいの〜」

真「せや、そもそもなんであんな事聞いたんや？ 兄さんは別になんも言っただけじゃあな」

凧「そ・・・それは・・・」

「さて、そろそろ行くのか。華琳に報告もしなきゃいけないし」

凧「はい隊長！」

沙「逃げたの〜」

真「凧、まだ答えを聞かせてもらってないで」

俺は三人と一緒に街へ向かった。さあ、初仕事だ。

意気揚々と街に向かったわけだが・・・

沙「あゝ！ あの服可愛いの〜！」

真「おお！ この部品は!?!」

さつきからこの調子だ。さらに、頼みの綱の凧は・・・

凧「不審者・・・不審者・・・」

周りを睨みながら歩いている。熱心にやってくれるのはありがたいが・・・正直、君が不審者に見えるよ凧・・・

凧「不審者・・・不審者・・・」

一「えっと・・・凧？ 真面目にやってくれるのは嬉しいが、もう少し肩の力を・・・」

凧「どうしました隊長！！ 不審者ですか!?!」

そう言って気弾の準備をする凧。

一「落ち着け凧「食い逃げだ〜！」ッ!・・・」

突然の声に凧が駆けだした。

凧「待て！ 逃がさんぞ！ 大人しく投降しろ！！」

犯人「ふざけんな！！ どけええええ！！！！」

犯人が凧に向かって突進する。

凧「仕方ない、ならば力づくで大人しくなってもらおう！ はあああ
ああああ！！！！」

気弾を準備する凧・・・大き過ぎじゃないか？

ー「な、凧！ 威力を抑え・・・」

凧「食らえええええ！！！！」

犯人「ぎゃああああああ！！！！」

凧の放った気弾は犯人を吹き飛ばした・・・周りの家や店を巻き込みながら・・・

沙「えへへ、買ったの〜」

真「いや〜！ ええ買い物したわ〜」

凧「・・・よし！ 隊長！ 犯人を確保しました！！」

満足げな三人・・・沙和、真桜、何やってたんだ・・・凧、周りを
見てくれ・・・

—「はあ・・・」

華琳への報告どうしよう・・・

—「・・・報告は以上だ」

華「そう・・・初日から成果をあげるなんて大したものね」

凧「ありがとうございます！」

沙「頑張ったかいがあったの〜」

真「せやな」

・・・君達何もやってないだろ。

華「ただ・・・いささかやり過ぎね。店の持ち主等から苦情が殺到しているわ」

凧「う・・・」

華「街を守る警備隊が街を壊しては本末転倒よ。今回は許すけど、次は無いわよ？」

一「ああ、すまなかつたな」

凧「も、申し訳ありませんでした・・・」

華「ではこの話は終わります。一成以外の三人は残りなさい、別の話があります」

俺だけ下がらせる華琳。

一「俺はいいのか？」

華「ええ、用があるのはこの娘達だから」

一「わかった、失礼する」

俺は玉座の間を後にした・・・

—「さて、そろそろ寝るか」

夜になり、やることも無かったので就寝することにした。

コンコン

凧「あの・・・秋月様」

—「ん？ 凧か？」

ノックの後、凧の声があった。どうしたんだこんな時間に・・・？
ちなみにノックは俺が教えた。

凧「はい、沙和と真桜も一緒です」

—「そうか、とりあえず入ってくれ」

凧「失礼します」

凧達が入って来た。何故か全員が暗い顔をしている。

—「どうしたんだ？ 何かあったのか？」

凧「秋月様・・・申し訳ございませんでした！」

沙「一成さんごめんなさいなの〜！」

真「兄さん、堪忍や！」

—「？ なんで謝るんだ？」

凧「秋月様のお心遣いにも気づかず、私達は・・・」

沙「華琳様から聞いたの〜」

真「ウチらを警備隊に推薦したのは、ウチらが早くこの街に馴染めるようにするためにしてくれたんやって」

凧「それなのに、逆に迷惑をおかけしてしまって・・・」

沙「沙和なんて、全然お仕事しなかったし・・・」

真「ウチらは兄さんの優しさを踏みにじってしもつた・・・」

—「そうか・・・」

華琳「・・・なんで話したんだ？」

—「反省してくれたか？」

コクン×3

—「よし、なら俺は何も言わないぞ」

凧・沙・真「」「え？」「」

—「明日からまた頑張ってくださいよ？」

凧「ゆ、許して頂けるんですか？」

—「許すも何も、俺は怒っちゃいないよ」

沙「で、でも……」

—「反省してくれたんだろ？ それとも、ウソなのか？」

真「ウソちゃう……！ けど、警備はうまくいかんかったわけやし……」

—「失敗することは悪い事じゃ無い。本当に悪いのは失敗しても反省しない事だ。三人とも……次も今日と同じような事をするか？」

凧「いえ！ 次からは周りの状況を確認、必要以上の威力を出さないように精進します！」

沙「沙和も次はしっかり見回りするの〜！」

真「ウチも気合入れてやることにするわ！ 見とつてや兄さん！」

やる気を見せる三人。

ナデナデ

凧「あ、秋月様！？」

沙「何するの〜！？」

真「な、なんや！？」

思わず三人の頭をなでてしまった・・・なんだか子どもの成長を喜ぶ親の気分だな。

凧「・・・／／」

沙「えへへ／／」

真「兄さん・・・ハズい／／」

しまった。調子に乗り過ぎたか？三人とも顔が真っ赤だ。

スッ・・・

凧・沙・真「」「あ・・・」「」

慌てて手を離す。何故か寂しそうな感じの三人だが、気のせいだろう。

一「それじゃ、改めて三人ともよろしくな」

凧「はい！ 今度こそご期待に応えてみせます！」

沙「一成さんも頑張るの〜」

真「ウチらに任せっきりはあかんで兄さん」

一「はは！ 余計な事を言ったかな？」

笑顔の三人・・・この時、ようやく俺は彼女達と本当に向き合えた気がした・・・

S I D E O U T

華琳 S I D E

華「ふふ、仕方ない娘達ね」

偶然一成の部屋に入って行くのを見て扉越しに聞いてみれば・・・

華「やっぱりあの娘達を一成に任せたのは正解だったわね」

お互いも知り合ってまだ日が浅いのに、あそこまでの信頼関係を築けるなんて・・・やっぱり欲しいわね。

華「このまま残ってくれないかしら？」

あの娘達が泣きつけばあるいは・・・

華「・・・無理ね。あれだけの目をした人間を引き止めるのは簡単じゃないわ」

だからと言って諦めるわけにはいかないわ。欲しいものは必ず手に入れる、それが私よ。

華「ふふ、一成、必ず振り向かせてみせるわ。覚悟していないさい」

気分の良くなった私は、気付かれない内にその場を後にした・・・

華琳 SIDE OUT

IN SIDE

—「う・・・」

ゾクッ！

なんだ今の寒感は何？

凧「秋月様？ どうされました？」

—「ちよつと寒気が」

沙「風邪なの？」

—「いや、誰かに目をつけられた感じの寒気だ」

真「どんな寒気やねん・・・」

そつとしか言いようがない・・・なんだっただらう？

第二十一話 どつせなら頼れる上司になりたい(後書き)

作「お父さん」

一「いきなりなんだよ」

作「いや、今回のお前のポジション。優しい中にも厳しさを持った言葉・・・見事だった」

一「まあ、彼女達がやる気を出してくれてよかった」

作「三人ともすっかりお前にメロメロだよな」

一「どこをどう見たらそんな考えになるんだよ？」

作「お前になでられて顔を赤くしていたじゃないか。今回の事で確実に仲は進展したぞ」

一「あれはいきなりあんな事されて怒っていただけだろ？」

作「・・・本気か？」

一「ああ」

作「自分で考えたヤツだが・・・ホントお前ムカつくな」

一「なんでだよ」

第二十二話 狸寝入りってバレバレじゃね？（前書き）

拠点です・・・酷いです・・・

第二十二話 狸寝入りつてバレバレじゃね？

警備隊発足から数日、人が変わったように仕事をする風達のおかげでだいぶ仕事が回るようになった。当初の目論見通り風達もだいぶ街の人達におぼえてもらったようだし結果は上々だった。

—「えつと・・・華琳はどこだ？」

華琳の許可がある書類があったので彼女の部屋に向かったのだが、姿が見えなかったので城の中を探し回っている。

秋「ん？秋月じゃないか」

中庭に向かうと弓を携えている秋蘭に会った。

—「やあ秋蘭、鍛練か？」

秋「ああ、そう言うお前はどしたんだ？書類など持って」

—「華琳に許可をもらわなきゃいけない書類があったんでな、彼女の部屋に向かったんだが姿が見えなくて・・・秋蘭、何か知っているか？」

秋「そうか、華琳様は今日はお休みの日だ。最近働き続けの毎日の

ようだったから無理を言っただけで休んで頂いている」

確かに、彼女が休んでいる所を見た事が無いな。

—「うん、休みを邪魔するのは悪いな。明日にでも・・・」

秋「いや、もし用があるなら遠慮なく話すようにとおっしゃっていただけませんか、聞きに行っても問題は無いだろう」

—「彼女らしいな」

秋「全くだ・・・少しはご自愛して頂きたいのだが・・・」

—「・・・無理だな」

秋「だが、それでこそ華琳様だ」

そう言って笑う秋蘭。

—「・・・」

秋「ん？私の顔に何かついていないか？」

—「いや、秋蘭の笑った所を初めて見たから」

秋「ふ・・・以外か？私だって笑う時はあるさ」

—「そうじゃなくて・・・ただ、そうやって笑っている方が綺麗だ
なって」

何言ってるんだ俺？

秋「ふむ、では普段は綺麗ではないと？」

—「そ、そうじゃなくて！普段の秋蘭も綺麗だけど、笑ったらもっ
と綺麗だと言う意味でその・・・」

ああ、馬鹿か俺は・・・

秋「ふつ、言ってみただけだ」

—「え？」

秋「先ほどの言葉は褒め言葉として受け取っておこう。それにして
も・・・お前はからかいがあるな」

—「前にも同じ事を言われたよ・・・」

星・・・元気だろうか？

秋「それより、早く華琳様の元へ向かった方がいいのではないか？」

—「いや、どこにいるのかさっぱりで」

秋「あちらで休んでおられるが、秋月……」

—「ああ、すぐに終わらせるよ」

秋「すまないな」

—「俺だって休みの日に仕事の話はして欲しくないからな、じゃあ行ってくる」

俺は秋蘭の教えてくれた場所に向かった……

S I D E O U T

秋蘭 S I D E

秋「……行っただか」

再び鍛練を再会する。的に向かって矢を射続けながら私は秋月について考える。

天の御遣い、破壊神とも呼ばれていたな。その絶大な力で賊から街や村を守る英雄。街でもあの男の話はよく聞く。そのどれもがあの男を讃えるものだった。

秋「華琳様が欲するのもわかる気がするな」

あの人を引き付ける力、必ずや華琳様の力になるだろう。現に凧達は秋月に心酔している・・・と言つか惚れ込んでいる。

秋「それにしても・・・綺麗か・・・」

華琳様や姉者には何度も言われているが、男から面と向かって言われるのは初めてだった。

秋「むっ・・・」

的を外してしまった。私とした事が考えに没頭しすぎたか。

秋「私に的を外させるとは・・・秋月、やはり面白い男だな・・・」

再び放たれた矢は、今度こそしっかりと中心に突き刺さった・・・

秋蘭SIDE OUT

IN SIDE

—「確か・・・こっちの方に・・・」

しばらく歩いていると、ハンモック？に寝転がっている華琳を発見した。

—「すまない華琳、ちょっと聞きたい事が・・・」

華「すう・・・すう・・・」

—「寝ているのか？」

やっぱり疲れていたんだな。起こすわけにもいかないのだからその場を後にしようとしたのだが・・・

華「う・・・ううん・・・」

ギョッ

・・・服の端を掴まれてしまった。

「・・・抜けん」

・ どうしよう・・・無理に動かせば起こしてしまうかもしれない・・・

「しょうがない、しばらくここにいてる事にするか」

そう決めて俺は華琳の隣に腰かけた・・・

S I D E O U T

華琳 S I D E

「しょうがない、しばらくここにいてる事にするか」

・ そう言って一成が私の隣に座った。どうしてこうなったのかしら・・・

華「（そもそも、なんで私が寝たふりをしなきゃいけないのよ？）
普通に話しかければよかったのになぜか出来なかった。それどころか引き止めてしまうなんて・・・

華「（これじゃまるで私が一成と離れたくないみたいじゃない）
確かに欲しいとは思っているけど、それは私の覇道の力にするため
で、一成自身が欲しいと言うわけでは・・・

一「・・・こうしてみると、ただの女の子なんだがな」

華「（ちよっ！ちよっ・・・）」

一成が私の髪に触れてきた。人が寝ているのをいい事に何してるのよ！？

一「だが、実際にはこの肩に色々なものを背負っているんだよな・・・」

そんな私の気持ちなど露知らず、頭をなでてくる一成。

華「()・・・何時以来かしら？頭をなでられるなんて・・・」

気がつけばすっかり一成のされるがままになっていた。くっ・・・この曹孟徳ともあろう者が・・・

「・・・可愛い寝顔だな」

華「(な!?)」

真剣な声でなんて事言つたよこの男は!?!それに、そんなのは当然・・・

トクン

華「(ッ!?)」

何?なんでこんなにドキドキするの?生娘じゃあるまいし、こんな言葉は何度も言われてきた。なのに・・・何故・・・?

「俺は・・・近い内にこの娘達と戦わなければならないのか・・・この娘達だけじゃない、桃香達とも・・・そして、孫策達とも・・・

」

華「（え？）」

どういう事？一成はこれから何が起きるのを知っているの？桃香・
・おそらく一成の言っていた仲間ね。孫策・・・確か春蘭と季衣
が以前会った人物の筈。

一「・・・何を弱音を吐いているんだ俺は？誓ったじゃないか、全
員を救ってみせると。それが、俺がこの世界に来た理由なんだから
な」

私達を救う・・・それがあなたの戦う理由な一成？

一「さしあたっては・・・やっぱり月だな。時期を見て洛陽に行か
ないと」

洛陽・・・いったい何があると言うの・・・

一「だが今は華琳・・・君を守るために俺は戦うよ。それが俺の役
目だ・・・」

華「それは・・・私の元へ来ると言う事かしら一成？」

限界だった。これ以上は聞いてはいけない、そう思い起きたふりをする。

―「か、華琳！？どうして？」

華「あれだけ耳元で騒がれれば目が覚めるのは当然でしょ？」

―「うっ……スマン。せつかくの休日を……」

申し訳なさそうな顔をする一成。

華「それで……用は何？まさか何も無いのに起こしたわけじゃないでしょう？」

―「ああ、君に許可をもらわなければいけない書類があつてな。これなんだが」

そう言つて書類を見せてきた。ふむ、これは……

華「いいでしょう、許可します」

―「そうか、ありがとう。さっそく戻つて仕事の続きをしなくては」

そう言つて背を向ける一成。

華「あら、もう行くの？せっかく話し相手になってあげようと思っ
たのに」

一「それは嬉しいが、警備隊の仕事があって時間がなくてね、また
今度お願いするよ」

華「そういえば、ずいぶんまともになってきているじゃないの。街
での評判も良いそうよ」

一「ああ、風達が頑張ってくれているからな。なぜか三人ともすこ
いやる気だし」

華「・・・あなたのお陰だっかわからないのかしら？」

一「ん？何か言ったか？」

華「いいえ、それより早く行きなさい。私と話していて仕事が出来
なかった・・・なんて言わせないわよ」

一「そうだな、それじゃ俺は行くよ。いい休日を」

華「ええ、あなたの分までしっかり休ませてもらうわ」

一「はは！よろしく」

そう言って去って行く一成・・・さっきの話は忘れた方がいいわね。

《・・・可愛い寝顔だな》

華「・・・アレも忘れた方がいいわね・・・」

そう思い再び目を閉じる。やがて私は眠りについた。

なぜか夢に一成が出てきた・・・

第二十二話 狸寝入りってバレバレじゃね？（後書き）

—「華琳にバレたな」

作「ああ」

—「いいのか？」

作「大丈夫だろ。彼女も忘れるって言ってたし」

—「そうか、ならいいんだが」

作「にしても・・・拠点イベントって難しいね」

—「・・・これ拠点イベントだったのか？」

作「おまつ・・・華琳のヤツはわかるだろ？」

—「いや、お前の文章構成とキャラの理解の下手さに失望した。華琳もそうだが、秋蘭はあんな女性だったか？」

作「だってクールビューティーな彼女にどうやってフラグを立てればいいのかわからねえんだもん！」

—「なら無理に拠点イベントやるなよ」

作「やりたいんだからしょうがないだろ！！」

—「その結果・・・ファンの方々に叩かれるとしてもか？」

作「すんまつせんでしたあああああ!!!!」

—「え〜華琳及び秋蘭ファンの方々、今回はこのようなものをお見せしてしまい申し訳ございませんでした。このバカも反省しているようなので、ボロクソに言うのは勘弁してやってください。たぶん・
・自殺します」

作「一成・・・お前・・・」

—「お前に死なれたら困るからな」

作「一成〜!」

—「近寄るな!」

バキ!

作「ぎゃあああああ!!!!」

第二十三話 道を歩く時は周りを見る(前書き)

ネタが無いので原作イベントを使う俺の馬鹿さ加減に脱帽・・・

第二十三話 道を歩く時は周りを見る

「ヒマだ・・・」

今日は休日なのだがこれと言ってやる事が無かった俺は部屋で寝ていた。

「うん・・・鍛練でもするか」

そう思い部屋を出ようとすると・・・

パンツ!!

春「秋月！いるか!?!」

春蘭がドアを開けて入って来た。

「春蘭・・・ノックをしてくれ。あと、そんなに強く開けると扉が壊れるぞ」

春「むっ、スマン・・・ではなく!秋月!力を貸せ!!!」

かなり興奮した様子の春蘭。

—「君がそんなに必死になると言う事は・・・華琳に関係ある話か？」

これまでも、この状態の彼女に色々振り回されたからな。

春「違う！秋蘭が・・・秋蘭が大変なのだ！！」

—「え？」

予想外の答えに驚く。秋蘭が？

—「わかった、案内してくれ！」

春「うむ！私について来てくれ！！」

春蘭の後に続き走る。敵に襲われたのか？それとも急病か？クソッ！無事でいてくれよ秋蘭・・・

春蘭に付きたどり着いたのは一件の店だった。大勢の人が列を作り、それが店の中まで続いている。そしてその中には……

秋「おお、早かったな姉者」

ズシャアアアアアアア！！！！

先ほど春蘭が大変だと言っていた秋蘭の姿があった。その姿を見た俺は盛大な土煙を揚げながらズツコケた。

春「お、おい……どうした秋月？」

—「……どういふ事だよ……」

秋「何かあったのか秋月？」

—「……春蘭が君が大変だって言うから慌ててやって来たんだが」

秋「そうか、だが私はこの通り元気だよ」

—「……確かに」

見ればケガは無いし、苦しそつでも無い。

—「春蘭・・・」

ジト目で春蘭を見ると、若干狼狽した様子で説明してくれた。

春「わ、私は秋蘭の言った通りにしたただけだ！そ、そうだろう秋蘭
！？」

秋「そうか・・・私の言った通りにしたのだな姉者は・・・」

秋蘭・・・彼女に何を吹き込んだんだよ・・・

—「まあ、何も無かったんならよかったよ。それじゃあ俺はこれで
・・・」

俺はその場を後にしようとしたのだが・・・

ガシツ！！×2

秋「おつと秋月、説明はするからな」

春「逃がさんぞ！大人しく一緒に並べ！！」

二人に肩を掴まれ無理矢理列に引きずり込まれた・・・

—「えつと・・・つまり、一人一個限定のお菓子を華琳の分も買いたいから一緒に並んで欲しい・・・と？」

二人が頷く。やっぱり華琳に関する話だったか。

春「うむ！この菓子は華琳様の好物だからな、今日のお茶の時にぜひともめしあがって頂きたく思ってたな！」

秋「しかし、華琳様をこのような列に並ばせるわけにはいかないのだな、非番のお前を呼んだのだ」

—「それにしたって呼び方があるだろ。春蘭があんな言い方するからもの凄く心配してしまっただじゃないか」

春「うつ・・・」

秋「なんだ？心配してくれたのか？」

—「当たり前だろ、仲間なんだから」

秋「ふつ・・・すまなかつたな」

—「しかし・・・俺より女性を連れて来た方がよかつたんじゃないか？」

見れば並んでいるのは女性ばかりで、男性の姿は俺を含めて数人しか見えなかった。

—「思いつきり場違いな気がする・・・視線も感じるし・・・」

周りの女性のほとんどが俺を見ているのがわかる。

春「心配するな！私は気にしていない」

—「いや、俺が気にするんだが」

秋「すまないな、少しだけ我慢してくれ」

—「・・・・・・・・」

春「だ、駄目か？」

春蘭が不安そうな顔で聞いてくる・・・珍しいな、彼女のこんな顔は・・・

—「わかったよ、どうせヒマだったし協力するよ」

途端に笑顔になる春蘭。

春「よし！それでこそ華琳様にお仕えする者だ！！」

—「俺は客将なんだが・・・」

春「はっはっは！細かい事は気にするな！」

秋「助かるぞ秋月」

—「まあ・・・あんな顔されたら断るわけにもいかないからな」

秋「ふっ・・・確かにな」

改めて、俺は列に並ぶ事にした。

ちなみに、一成を見ていた女性達は

女性A「あれって秋月様よね？」

女性B「ええ、間違いないわ」

女性C「ああ・・・今日もカッコいい・・・」

女性D「秋月様って甘い物が好きなのかしら？」

女性E「なんか以外」

女性F「でも、そんな所も素敵・・・」

・・・とまあこんな会話をしていたのだが、もちろん一成が知るはずも無かった・・・

しばらくするとようやく列が動き出した。しかし・・・改めて見ると随分な人数だな、ちゃんと買えるのだろうか？

—「なあ、目的のお菓子が買えなかったらどうするんだ？」

秋「その時は別の菓子を買うしかないな」

春「何を言う！華琳様がめしあがる物だぞ！絶対買える！！」

—「なんなんだその自信は・・・」

秋「やれやれ」

俺と秋蘭はため息をついた。

？「やっと買えたの〜」

？「はあ、めっちゃしんどかった・・・」

？「二人とも、わかっていると思うがすぐに警備に戻るぞ。こんな所を秋月様に見られてしまったら・・・」

聞きなれた声に目を向けると凧達の姿が見えた。

ー「あれ？三人ともどうしてここに？」

俺が声をかけると三人の動きが止まり、やがてゆっくりとこちらに振り向いた。

沙「か、一成さん・・・」

真「あ、あはは・・・兄さん奇遇やなあ」

凧「秋月様！？こ、これは・・・その・・・」

ー「今日は三人が警備担当の日じゃなかったっけ？」

凧「申し訳ありません。私は止めたのですが・・・」

沙「何言ってるの〜！ 凧ちゃんだつてその気だつたくせに〜！！」

凧「そ、それは……」

真「で、でもな兄さん！ ちゃんと仕事はやつとるし、今は休憩中やつたから買いに来ただけで……」

一「そうか、なら問題ないけど」

春「秋月！ 何をしている！ もうすぐ私達の番だぞ！！」

一「わかった……それじゃ三人ともこの後の警備もよろしくな」

凧「はっ！ 失礼します」

沙「お任せなの〜」

真「兄さんも頑張りや」

そう言つて去つて行く三人。休憩中か……原作に比べて随分仕事熱心になってくれたな。主に沙和と真桜……理由はわからんがいい事だ。

・ 三人の成長に嬉しさを感じつつ、俺は春蘭と秋蘭の元に向かった……

秋「無事に買えてよかったな姉者」

春「ああ！これで華琳様もお喜びになつてくださるぞ！！」

秋「それは何よりだが、せっかく買えたのだから転ばぬように気をつけるのだぞ」

お菓子を購入し上機嫌に歩く春蘭。秋蘭の注意も聞いていないようだった。

—「・・・」

そんな彼女の姿を見て少し唾然とする。

秋「どうした秋月？」

—「いや・・・彼女もあんな姿を見せるんだなと思ってな」

秋「姉者は華琳様が絡むと大抵ああなるぞ」

—「なるほど・・・」

春「秋月！お前のお陰で助かった！礼を言っぞ！！」

—「あ、ああ・・・」

春蘭が俺に礼？

—「・・・初めてだな、彼女に礼を言われるなんて」

秋「今の姉者は素直だからな、自然に出たのだろう」

—「そうか・・・」

彼女にもこんな一面があったんだな。あつ、そういえば呼び方が『貴様』から『お前』になったな。

春「うわ！！」

ガラガラ！！

いきなり聞こえて来た春蘭の声と大きな音に目を向けると、そこには転んでいる春蘭と去って行く馬車が見えた。どうやら春蘭の前方不注意で馬車にぶつかりそうになり、慌てて避けようとして転んでしまったようだ。

—「春蘭！」

秋「大丈夫か姉者!？」

急いで春蘭に近づくと

春「あ……ああ……」

呆然とした春蘭の声がした。見ればお菓子の入っていた袋が彼女の目の前で潰れていた。

—「あちゃあ……」

秋「だから気をつけると……」

春「うう……あ……ああ……」

かなりのショックを受けている様子の春蘭。とりあえず立たせるために手を差し出す。

—「春蘭……立てるか？」

だが春蘭は反応せず、目に涙を溜め出し、やがて限界を迎えた。

春「う、うわあああああん!!!」

—「なっ!?!」

大粒の涙を流しながら泣き出す春蘭。

春「うわああああん!!せっかく・・・せっかく華琳様の為に買ったのにいいいい!!!」

秋「やれやれ・・・今回は諦める姉者。そこまで潰れてしまったはどうしようもないぞ」

随分慣れた様子で春蘭を慰める秋蘭。

秋「今日は運が悪かったただけだ。また今度買いに来よう」

春「しゅ、しゅうらん・・・」

秋「よしよし・・・秋月、協力してもらって悪いが次も頼んでいいか?」

秋「ひつく・・・えぐ・・・あ、あきづきい・・・」

—「それはもちろんいいが・・・」

本当にこれでいいのか？今回の華琳とお茶会をととも楽しみにしていたのは今の彼女を見れば一目瞭然だ。そんな彼女をこのまま帰らせていいのか？

—「・・・なわけないよな」

俺は決心する。

—「秋蘭、春蘭を頼む。俺は店に戻ってまた買ってくる」

秋「何？・・・しかし、もし運よく買えたとしても一個しか買えんぞ？」

—「華琳の分だけで勘弁してくれ。それに・・・」

泣いている春蘭を見る。いつもの猛々しさは無く、まるで少女のような姿を見て思わず苦笑いしてしまう。

—「仲間の泣き顔を見るのは嫌だからな」

春「うう・・・ひっく・・・あきづきい・・・」

秋「・・・わかった、私は姉者を見ておく。頼んだぞ秋月」

—「ああ」

俺はさっきの店に戻った・・・

—「・・・やっぱり駄目か」

急いで戻ったが結局売り切れていた。どうする？あきらめるか？

《うっ・・・ひっく・・・あきづきい・・・》

—「・・・いや、諦めるわけにはいかない」

だがどうする。誰かに譲ってもらうか？しかし・・・そんな人物は・・・

—「・・・あっ！」

心当たりがある俺は目的の人物を探しに街を駆け回った・・・

—「いた！」

探し回る事数分、俺は目的の人物を発見した。

凧「秋月様？どうしたのですかそのように急いで？」

—「よかった、やっと見つかった」

沙「え？沙和達を探してたの？」

真「心配せんでも、ちゃんと見回りはしとるで？」

—「いや、君達にお願いがあつて・・・あの店で買ったお菓子はまだあるか？」

凧「え、ええ、警備が終わった後食べようかと」

—「そうか！」

よし！まだ希望はある！

沙「それがどうしたの？」

—「頼む！そのお菓子を譲ってくれないか!？」

頭を下げる。

凧「あ、秋月様!？」

沙「いきなりなんなの!？」

真「なんや、わけありのようやな・・・」

—「実は・・・」

俺は先ほどの出来事を三人に話した。

凧「そうですか、春蘭様が・・・」

沙「春蘭様可哀そうなの」

真「確かに、それは気の毒やな」

—「せっかく苦勞して買った物を手放すのは嫌だと思っが頼む。もちろん代金は払うし・・・俺に出来る事は何でもするから、だから・・・」

頭を下げながらお願いする。これで駄目なら・・・

凧「秋月様・・・頭をお上げください」

沙「それくらいお安い御用なの〜」

真「せやな、今度メシおごってくれたらチャラにしたる」

そう言つて俺に袋を渡してくれる三人。

—「本当にいいのか？」

凧「ええ、私達がこの街でこれを買えたのも、元はと言えば秋月様が華琳様に私達を軍に入れるよう言つて下さつたからです」

沙「それ以外にも一成さんにはたくさんお世話になつたの〜」

真「これくらいの事で兄さんの力になれるならウチらに異存はないで」

—「・・・ありがとう。本当に恩に着るよ」

凧「いえ、それより早く春蘭様に」

—「そうだな」

沙「それじゃあ一成さん、春蘭様達によろしくなの〜」

真「ほなな、兄さん」

一「ああ、それじゃあな」

もう一度礼を言い、春蘭達の所へ戻った・・・

S I D E O U T

凧・沙和・真桜 S I D E

凧「・・・行かれたか」

沙「それにしても・・・一成さんはお人よしなの」

真「まあ、兄さんのそれは今に始まった事やないけどな」

凧「そうだな」

沙「春蘭様が羨ましいの。あんなに一成さんに心配されて」

凧「そうだな」

真「せやなあ、ウチもあんな風に想われてみたいわ」

凧「そうだな」

沙「凧ちゃん？」

凧「そうだな」

真「な、凧？どうしたんや？」

凧「・・・ん？どうしたんだ二人とも？」

沙「それはこっちの台詞なの」

真「もしかして、そんなにあの菓子食べたかったんか？」

凧「ち、違う！ただ・・・やはり秋月様はお優しいと思っただけだ」

沙「ふん・・・それだけなの？」

凧「な、なんだ？」

沙「もしかして凧ちゃん・・・春蘭様に妬いてるの？」

凧「なっ！？何を馬鹿な事を！！」

真「はは、ん、なるほど。なんや凧も羨ましかっただけかいな」

凧「だから違つとー！」

沙「ほらほら」

真「正直に吐いた方が楽やで凧」

凧「・・・いいかげんにしろ」

気を溜める凧。

沙「な、凧ちゃん落ち着くの〜!」

真「この前兄さんに気弾の威力は抑えるって言ったばかりやる〜!」

凧「問答無用!秋月様もお許し下さる筈だ!〜!」

この日、久しぶりに街に轟音が響き渡った・・・

凧・沙和・真桜 SIDE OUT

IN SIDE

—「おい二人とも〜!」

俺は春蘭と秋蘭と合流した。相変わらず春蘭は泣いていた。

秋「秋月・・・どうだった?」

春「ひつく・・・やっぱり・・・駄目・・・だったか？」

不安げに聞いてくる二人に袋を差し出す。

一「ほらコレ、ちゃんと三人分あるぞ」

二人の顔が驚きに染まる。

春「あ・・・ああ!!」

春蘭が中身を確かめると、確かにあのお菓子が入っていた。

秋「秋月・・・どうやって手に入れたのだ？しかも三つも」

一「駄目もどだったんだが・・・なんとかなるもんだな」

春「秋月！恩に着る！本当にありがとう!!」

一「気にするな、泣き止んでくれてなによりだ」

春「秋蘭、今度はお前が持っていてくれ。また私が持って転んではいけないからな」

秋「ふふっ、そう言う事なら遠慮なく持たせてもらおうか」

秋蘭に袋を渡す春蘭。流石にまた探して来いと言われても無理だしな・・・

—「それじゃあ俺は失礼するよ。疲れたから帰って寝る」

春「そうか・・・秋月、今回は本当に助かった。ありがとう」

秋「私からも礼を言うぞ秋月。姉者の為に尽力してくれてありがとう」

—「どういたしまして。お茶会楽しんでくれよ？」

俺は城へ戻るために歩き出した。何故か背中に視線を感じながら・・・

春「・・・・・・・・」

秋「ん？どうした姉者？何をそんなに見ているのだ？」

春「い、いや！なんでもない！！」

秋「？」

夜になり、今日の事を振り返る。

—「なかなか忙しい休日だったな」

まあ春蘭と秋蘭の力になれたからいいか。

—「・・・風達には改めてお礼言わなきゃな」

コンコン

—「ん？」

秋「秋月、私だ」

—「秋蘭か？どうぞ」

秋「失礼する」

秋蘭がやって来た。なんだ？何かあったのか？

—「どうしたんだ？」

秋「なに、お前に渡したい物があったな」

そう言つて秋蘭が差し出したのは紙に包まれた何か。

—「何だ？」

秋「開けてみてくれ」

紙を開くと中から現れたのは今日、嫌と言つほど見て来たあのお菓子だった。しかもなぜか半分。

—「これは？」

秋「今日の華琳様とお茶を飲んだ時、姉者が残しておいてな。何故だと思つ？」

—「さあ・・・」

秋「ふふっ、恐らくお前へのお礼のつもりだろうよ」

—「え？」

秋「受け取つてやつてくれ。姉者の精いっぱい感謝の印だ」

—「わかつた・・・でもなんで秋蘭に頼んだんだ？」

秋「ふふっ・・・さあな」

—「？」

秋「用はそれだけだ。夜遅く邪魔したな」

そう言つて部屋を出て行く秋蘭。俺はお菓子を口に入れた。時間が立つてすっかりパサパサになっていたが。

—「・・・美味しいな」

何故かそれが美味しく感じた・・・

S I D E O U T

春蘭 S I D E

春「・・・むう」

次の日、何故か秋月の部屋の前に立っている私。何故ここに来てしまったのだ？

春「そ、そうだ！昨日の礼を改めてしなくてはな！」

決してあの菓子をちゃんと食べてくれたのか気になったわけじゃないぞ！

ガチャ

そんな事を考えていると、扉が開き秋月が姿を現した。

—「あれ？春蘭？どうしたんだ？」

春「お、おお！秋月！いや・・・その・・・なんだ・・・改めて昨日の礼を言いたくてな」

—「もう充分礼は言ってもらったがな。そうだ、華琳とのお茶会は楽しかったか？」

春「あ、ああ、華琳様もあの菓子をめしあがって喜んでおられたぞ」

—「そうか、春蘭も食べたんだろ？美味しかったか？」

春「あ、ああ・・・それで・・・その・・・お前は・・・」

—「ん？」

春「・・・いや、何でも無い」

この様子じゃあの菓子は食べなかったようだな。秋蘭が渡してくれ
たと言っていたが、やはりあんな物じゃ・・・

—「さて、今日も一日頑張るか」

春「そうだな・・・」

秋月が私の横を通り過ぎる。その時・・・

—「・・・お菓子ありがとう。美味しかったよ」

春「えっ!?!」

—「じゃあな」

そう言い去って行く秋月。

春「食べて・・・くれたんだな・・・」

ま、まあ当然だな！私が渡してやった物なのだからな。

春「さあ！今日も一日華琳様の為に頑張るぞ！！」

秋「どうした姉者？随分嬉しそうだが？」

春「ふっ・・・さあな」

秋「？」

第二十三話 道を歩く時は周りを見る（後書き）

—「なあ、質問があるんだが」

作「何だ？」

—「この小説って蜀がメインじゃないのか？」

作「そうだけど・・・何で？」

—「何着々と魏でイベント進めてるんだよ！これじゃ魏がメインの小説じゃないか！」

作「だって、当分の間敵になるわけだし、今の内にフラグ立てとかないと」

—「またそれかよ」

作「呉でも同じ事するからな。その後月の所で・・・最後に蜀だな」

—「メインが最後かよ」

作「何言ってるんだ？お前の使命は全員を助ける事なんだからどこにいようが関係ないんだよ」

—「クツ・・・それを言われると・・・」

作「大人しく流れに身を任せろ」

—「絶対ロクな目に遭わない気がする」

作「気のせい……じゃない—」

—「おい—」

第二十四話 さりげない優しさは気付かれにくい(前書き)

俺って最低だ・・・

第二十四話 さりげない優しさは気付かれにくい

—「……………」

桂「……………」

俺は桂花と共に街中を歩く。が、先ほどから全く会話が無い。それと言つのも、彼女から『話しかけるな』と言つオーラが漂っているからだ。

—「(なんとか仲良くできないかな?)」

そもそも、何故彼女と行動しているのか?それは朝方に遡る……

朝方にて……

—「調査?」

華「ええ、最近この辺りの森で怪しい人影が目撃されたと言つ報告が相次いでいるの。そこで、あなたに詳しい調査……可能ならば確保をお願いしたいの」

他国の斥候か何かか？

—「わかった・・・ところで、それは俺だけの仕事か？」

華「いえ、あなた一人じゃ大変そうだし・・・そうね、桂花を共に行かせます」

桂「か、華琳様!？」

華「あら、痕跡の調査ならあなたがいた方がいいでしょ？」

桂「わ、私を信頼していただけるのは嬉しいですが・・・なぜこの男と一緒になのですか!？」

華「桂花・・・あなたは相手が気に食わないからと言って仕事を放棄するの?」

桂「と、とんでもございません!!華琳様の命なら私は・・・」

華「そう、ならお願いね」

・・・見事に誘導されたな。

桂「・・・そういう事よ。癪だけど、あなたと一緒に調査に協力するわ」

一「助かる桂花、街の地理はおぼえたが外はまだ不安だからな」

桂「ふん、しょうがない男ね・・・あと、軽々しく真名で呼ばないでと言ったでしょ」

一「・・・すまん」

桂「出発は昼よ、それまでに準備しなさいよ」

一「了解」

俺は準備のために部屋に戻った・・・

S I D E O U T

華琳 S I D E

一成と桂花が出て行った後、代わりに凧達が入って来た。

凧「華琳様、お呼び出しを受け参上しました」

沙「何か御用ですか？」

真「警備の事なら兄さんがいた方がいいと思いますけど」

華「あなた達に頼みたい事があるのよ」

凧「頼みごと……ですか？」

華「ええ……その前に質問なんだけど、あなた達、一成と桂花の仲をどう思うかしら？」

沙「一成さんと桂花様ですか？」

真「うん……兄さんは問題ないけど……桂花様がなあ……」

凧「ああ、桂花様は秋月様を嫌っている節があるからな」

沙「一成さんが話しかけても冷たいの」

三人とも同じ考えのようだった……

華「一成は良いとして……問題は桂花ね、このままだといつか戦場で取り返しのつかない事になる予感がするのよ」

凧「ええ、お二人とも軍の中心になっっているお方、そんな二人の仲が悪ければ、少なからず兵に動揺を与えてしまう恐れがあります」

さすが凧ね、私の考えをすぐ理解するなんて。

華「もちろんそんなことは許されない、そこで少しでも関係が改善

するように二人だけで任務に就かせたの」

なぜわざわざ桂花を共にさせたのかは、実はこの理由からだった。

凧「なるほど……では私達は」

華「そう、あの二人の様子を見守ってて欲しいの」

真「ウチらがですか？」

華「ええ、こんな事を頼めるのは貴方達くらいだから」

沙「何だか面白そうなの」

凧「沙和！」

華「いいのよ、実際面白そうだからやらせてみたんだから」

凧「そ、そうですか……」

真「そんな事言つて、凧も気になるんじゃないか？あの桂花様を兄さんがどうやって落とすかを」

凧「お、落とすだと？」

華「あら、それは気になるわね。ふふ、三人ともしっかりね」

さて、今回の件でどう転ぶか・・・見物ね・・・

華琳 SIDE OUT

IN SIDE

ということ、俺と桂花は森に向かっていた。

桂「なんであんたみたいなケダモノと二人っきりで調査なんて・・・

」

「しかし、君だけではもし敵が現れたら危険だ」

桂「なら秋蘭とかでもよかったじゃない」

「文句は華琳に言ってくれ」

桂「華琳様に文句なんて言えるわけないでしょ!!」

「ならどうすればいいんだ・・・」

うん、なんとか彼女と友好的に出来ないものか。彼女も守るべき一人だからな。

凧「やはり、そう簡単にはいかないか」

沙「桂花様だからしかたないの」

真「せやな、今も兄さんから離れて歩いとるし、これは一筋縄じゃいかへんで」

—「ん？」

不意に何かの気配がしたので振り返る。

桂「どうしたのよ？」

—「いや・・・なんでもない」

気のせいかな？

桂「ならさっさと行くわよ。こんな仕事すぐに終わらせてやるんだから」

—「ああ」

桂花に続く。

沙「・・・危なかったの〜」

凧「さすが秋月様、気配に気付くとは」

真「相手が兄さんやって事すっかり忘れてたわ」

凧「もう少し離れて尾行しよう。このままでは秋月様にばれるのも時間の問題だ」

沙「わかったの〜」

真「おっと、そうこうしてる内に進みだしたで」

凧「よし、行くぞ」

街を離れて少しした森の中に入った後、改めて確認をする。

—「人影の確保か・・・可能性は低いな」

桂「ええ、でもそれは期待していないわ。その人影が何なのか、痕跡の調査が主ね」

—「うん、多分それもほとんど見つからないと思うな」

そんなものを残していたら斥候失格だ。

—「よし、それじゃあ早速調べよう。はぐれない様気をつけてくれよ？」

桂「ならゆっくり歩けばいいでしょ！」

結構深いな、はぐれたら見つけるのは難しそうだ。

桂「ちょっと！どんどん先に行かないでよ！！！」

—「これでもゆっくりのつもりだったんだが」

桂「あんたの足と一緒にしないでよ！！！」

ペースを落としつつ、さらに奥に進む。

—「何か見つけたか？」

桂「別に何も見つけていないわ」

木の枝を折りつつ進む。

桂「（なんで枝なんて折ってるのかしらコイツ？）」

凧「秋月様は何をされているのだ？」

真「さあ？」

沙「・・・なるほど、やっぱり一成さんは優しいの」

凧「どういう事だ沙和？」

沙「一成さん、桂花様が歩きやすいように邪魔な枝を折って進んでるの」

真「そういえば、ウチらが歩いた道、随分枝が少なかったような・・・」

沙「だから前を歩いていたらんだと思うの」

凧「秋月様・・・さすがです！」

真「ああいうさりげない優しさってええなあ」

—「・・・何も見つからないか」

桂「つ、疲れた・・・あなたに合わせて歩いた所為で酷い目に会ったわよ!」

森に入って結構な時間が経ったが、未だに手掛かりはゼロだった。桂花は近くの大岩に座り、足を押さえていた。

—「もしかして・・・痛めたのか?」

桂「そうよ!全く・・・最悪よ」

見れば足が腫れていた。

—「冷やさないとマズイな、ちょっと待っててくれ」

桂「何処行くのよ?」

—「多分近くに水辺があるはずだ、布を濡らしてくる」

桂「なんでわかるのよ?」

—「匂い・・・かな。後、土の湿り気が結構あるからな、これは近くに水辺がある事を示している・・・はず」

桂「はずってなによはずって」

—「・・・じゃ、行ってくる」

俺は水辺を探しに奥に進んだ・・・

S I D E O U T

桂花 S I D E

桂「・・・ふん」

何のつもりかしら？まさかこれで私のご機嫌をとったつもり？

桂「まあ・・・今まで出会ってきた男よりかはまともだけど・・・」

それでも、アイツだって男だ。いつ豹変するかわからない。

桂「所詮はケダモノよ・・・」

ガサガサ

近くの草むらから音がした。もう帰って来たの？

桂「随分早かったわね。もしかして・・・」

男「ああ？なんだお前？」

出て来たのは秋月ではなく、見るからに怪しい男だった。

桂「な、何よあんた！？まさか・・・噂の人影の正体はあんた！？」

男「噂だあ？」

桂「とぼけないで！何処の斥候よ！？こそこそ嗅ぎまわったりして
！！！」

男「うるせえな。俺はただこの森で暮らしているだけだ」

桂「なんですって？」

男「色々やり過ぎてな、お尋ね者なのさ」

斥候ではない？

桂「何よ！無駄足だったってわけ！？」

男「そういうお前は何の用でこの森に入ったんだ？」

桂「あんたには関係ないでしょ！！！」

男「チツ・・・ぎゃあぎゃあうるせえアマだな！」

桂「な、なによ！近づかないで！！！」

男が私に近づく。

男「ちょうどいい、長い間森に籠ってたまつてな、いっちょ発散させてもらっせ」

桂「ふ、ふざけんじゃないわよ！！誰があんたみたいなケダモノに！！！」

逃げようとするが、足が痛んで走れない。

桂「痛ッ！」

男「なんだ？走れないのか？これはずいてるぜ」

男がさらに近付いてくる、ああもう！こんな肝心な時にアイツは何やってんのよ！！

桂「ちょっと！いつまでかかってんのよ！！ホント使えない男ね！！」

男「連れがいたのか？まあ、もし来ても殺すだけだな」

男が私の手を掴む。

桂「は、離しなさ・・・きゃあ！！」

そのまま押し倒される。

凧「クツ・・・見失ってしまうとは・・・」

沙「・・・ツ！二人ともアレ！」

真「なっ！？桂花様！！」

凧「おのれ！あの男許さん！！」

沙「一成さんがいないの!!」

真「そんなん後や!とにかく桂花様を!!」

男「さあて・・・観念しな」

何よ、何よ何よ何よ!!私を守るんじゃなかったの!?

桂「助けなさいよ!!秋月~~~~~ツ!!!!」

森の中に私の悲鳴が響いた。

男「だから無駄だと・・・」

?「・・・離れる下種が」

メキメキツ!!

男「ぎゃあああああ!?!?!?!?」

桂「え？」

突然の声と共に、男の体が持ち上がる。見れば男の後頭部を掴んでいる手が見えた、そして……

—「すまない、遅くなって」

男を持ちあげたまま私を見る秋月が立っていた……

桂花 SIDE OUT

IN SIDE

水辺から戻る途中、桂花の怒鳴り声が聞こえて来たので急いで戻ると、押し倒された桂花と彼女に馬乗りになっている男がいた。

—「……離れる下種が」

男の後頭部を掴んで持ち上げる。俺の仲間に出すとは……許さん!!

—「ふん！」

とりあえず首を折り、投げ捨てる。

—「桂花！大丈夫か！？」

桂花に駆け寄る。

桂「……………」

—「桂花？」

桂「…………いのよ」

—「え？」

桂「遅いって言ったのよ！！何やってたのよあんた！！もう少しであのケダモノの毒牙にかかるところだったじゃない！！！」

言葉とは裏腹に震えている桂花、やはり怖かったんだな。

—「…………すまない、俺がいれば君があんな目に遭う事も無かった。俺の失態だ」

頭を下げる。俺は馬鹿だ、斥候がいるかもしれない森の中に戦う力の無い少女を置いておくななんて・・・

桂「ふん・・・だけど、あんたに助けられたのも事実よ。今回は許してあげる」

—「・・・ありがとう」

桂「それと、コイツは斥候じゃないわ。ただの賊よ」

桂花が男を指差して言う。

—「コイツが人影の正体か」

桂「そうよ、これで任務はお終いな」

—「そうだ、桂花、足を見せてくれ。冷やさないと」

濡らした布を近づける。

桂「さ、触らないでよケダモ・・・」

—「我慢してくれ」

有無を言わず、患部に当てる。

「しばらくそうしててくれ」

桂「……………」

五分後……………」

「どうだ？」

桂「痛みはだいぶ引いたわ」

「歩けそうか？」

桂「それくらい……………」痛ッ……………」

「やはり冷やただけじゃこれが限界か」

桂「な、なんとかしなさいよ！あんた天の御使いでしょ！？」

「……………」今は関係ないか？」

さて、どうするか……………」

—「……よし、桂花、来い」

背を向けしゃがみこむ。

桂「な、なによ?」

—「君を城までおぶって行くから、背中に乗ってくれ」

桂「ふ、ふざけないで……誰がそんな……」

—「頼む、嫌だろうけど我慢してくれ」

真剣に頼み込む。

桂「ツ~~~~~わかったわよ!」

桂花が背に乗った事を確認して来た道に戻る。

沙「……よかったの〜」

凧「ああ、一時はどうなる事かと思ったが」

真「見てみ桂花様の顔、満更でもなさそうやで」

沙「これで桂花様も、少しは一成さんの事を見直してくれるといいの？」

凧「そうだな」

真「それにしても・・・相変わらず絶妙な頃合いで出てくるな兄さんは」

沙「乙女の危機に颯爽と現れる・・・カッコよかったの」

凧「秋月様なら当然の事だ」

真「ウチも助けてもらったしな」

凧「私もだ」

沙「え〜！沙和だけ仲間はずれなの〜!？」

凧「む、動きだしたぞ」

真「今度は見失わんようにせんとな」

沙「いいな〜」

一「足は大丈夫か？一応振動が行かないように歩いてはいるんだが」

桂「・・・ええ」

一「そうか、よかった・・・」

再び無言になる。しかし、出発の時に感じていた彼女のオーラは感じなかった・・・

城に着くと、華琳に出会った。

華「あらあら・・・随分仲が良くなったのね」

桂「か、華琳様！？これは・・・」

一「ちょうどいい、華琳、報告だ」

俺は森の中であった出来事を報告する。

一「・・・と言っわけだ」

華「・・・そう、ありがとう一成。桂花を助けてくれて」

—「いや、元はと言えば俺の所為だからな。礼なんて言わないでくれ」

華「そうはいかないわ。桂花は私にとって大切な娘なんですから」

桂「華琳様……」

—「……そうか」

華琳の顔を見れば、どれだけ彼女を大切に思っているか一目瞭然だった。

桂「ところであなた……いつまでおぶっているつもり？」

—「おっと、すまない」

桂花を下ろす。

—「じゃあ、俺はこれで失礼する」

華「ええ、お疲れ様」

—「桂花、足は医者に診てもらってくれよ」

桂「そんなこと、あんたに言われなくてもわかってるわよ」

—「そうか」

俺は疲れたので部屋に戻る事にした・・・

S I D E O U T

華琳 S I D E

桂「何よあの男・・・」

一成の背を見つめる桂花。

華「ふふ、桂花、一成の事少しは認めたかしら？」

桂「か、華琳様!？」

華「あら違つもの？真名を呼ばれても怒らなかつたじゃない」

桂「そ、それは・・・」

答えに詰まる桂花。ふふ、可愛い・・・

華「まあいいわ、あなたも休みなさい。その前に医者に診てもらおうのよ?」

桂「……はい……失礼します」

そう言っただけで去って行く桂花。

華「……さて、では報告を聞きましょうか」

私がそう言くと物陰から凧達が出て来た。ふふ、一体何があったのかしらね。

私は期待に胸を膨らませた……

第二十四話 さりげない優しさは気付かれにくい（後書き）

作「桂花・・・デレない」

—「彼女は無理だろ」

作「彼女の拠点は書けないと思っていたのだが、他の作者の方々のSSを参考に書いてみた」

—「と言つかパク・・・」

作「わーーーー！！！！」

—「うっさい」

作「お、お前が変な事言うからだろ！！！！」

—「事実だろ？」

作「・・・仕方ねえだろおおお！！俺には文才が無いんだからああああ！！！！」

—「・・・いつもそう言えば何とかなると思ってんじゃねえぞ」

作「・・・」

第二十五話 他人のコーディネートなんて出来るわけがない(前書き)

そろそろ進めないとな・・・

第二十五話 他人のコーディネートなんて出来るわけがない

—「ん？なんだ？」

街中を警備中、怒声と悲鳴が聞こえて来たので急いで向かうと、男性二人が殴り合いのケンカをしていた。

どうやらお互い酷く酔っ払っているようで、ふらふらと千鳥足だった。

—「全く・・・昼間から酒飲んでるのか」

隊員「た、隊長!？」

俺より先に来ていたであろう警備隊員達の一人が慌てた様子で近寄って来た。最近警備隊に志願する兵が増えて来ており、彼もその一人だ。

隊員「どうしてこちらに？今日は別の地区の担当では？」

—「騒ぎを聞いて気になって来てしまった。さっさと止めよう」

俺は酔っ払いに近づく。

隊員「そんな！隊長のお手を煩わせるわけには……」

—「いいからいいから」

男A「何だデメエ！！」

—「警備隊だ、酒を飲むのはかまわんが、周りに迷惑をかけるんじゃない」

男A「うるせえ！！」

男の一人が殴りかかって来たので、その手を掴み背に回す。

男A「痛え！！」

そのまま地面に引き倒し、もう片方の手も封じ先ほどの隊員に任せ
る。

—「さて……あなたはどうしますか？」

もう一人の男を睨みつける。

男B「あ……ああ……」

男は地面にへたり込んでしまった。どうやら抵抗する気は無いようだな。

隊員A「助かりました隊長」

―「ああ、そつちもご苦労様」

隊員B「すみませんでした隊長、自分達の仕事でしたのに」

隊員C「余計な手間をかけさせてしまって、これでは警備隊員失格ですね」

落ち込む隊員達。

―「……以前別の人に言った事なんだが、失敗する事は悪い事じゃない。本当に悪いのはそこから何も学ばない事だ」

隊員A・B・C「……」

―「みんなに聞くが、今回の件で反省すべき部分は見つかったか？」

全員が頷く。

「なら、その学んだ事を次に活かせばいい、そうすれば必ずうまくいくぞ」

隊員A・B・C「ハッ！！！」

「よし！その意気だ！！」

彼らはまだ実力が不足しているが、経験を積みれば頼りになる警備兵になるだろう。

「それじゃあ、俺は自分の担当地区に戻るから、この二人をよろしく」

隊員A「ハッ！お任せ下さい！！」

「頑張れよ」

俺は再び警備に戻った・・・

隊員A「さすが隊長だよな、あんなにあっさりと鎮圧するなんて」

隊員B「睨んだだけで黙らせるなんて俺には絶対無理だ」

隊員C「しかも、何も出来なかった俺達を怒るところか励ましてくれるなんて・・・」

隊員B「女だけではなく、男が惚れる男って隊長のような方言うんだろうな」

隊員C「實際街の娘達に大人気らしいぞ」

隊員A「納得だよな」

隊員C「俺、警備隊に入ってよかった」

隊員A「俺も」

隊員B「あんな器の大きい方の下で働けるのは幸せだよな」

隊員A・C「ああ」

こうして、着々と信者を増やしていく一成だった・・・

—「やっぱり、全てを防ぐ事は難しいな」

警備隊が発足してから街での犯罪回数は確かに減少していた。だが、先ほどの様な小さな騒動は後を絶たない。警備隊も人数が増えたが、そのほとんどが実力不足だった。

—「こればかりは鍛練して力をつけてもらうしかないな」

考えながら歩いていると

？「おお、秋月ではないか」

—「ん？」

突然声をかけられたので振り向いてみると、春蘭が立っていた。

—「やあ春蘭、街中で会うなんて珍しいな」

春「うむ、確かに珍しいな、お前は何をしていたのだ？」

—「俺は警備中だよ。さっきも一騒ぎがあったんだが無事に終了した」

春「ほう、やるではないか」

—「そう言う春蘭はどうしたんだ？」

春「それは・・・そうだ秋月、お前に頼みがあるんだが」

—「・・・もしかしてまたお菓子か？今は仕事だから並ぶわけに

はいかないんだが」

春「ふふん、違つぞ秋月。菓子の子ではない」

何故か胸を張る春蘭。

—「それじゃあいったい？」

春「お前に道案内を頼みたい」

—「道案内？」

春「実は華琳様と秋蘭といつしよに下着を買いに行く予定だったのだが、待ち合わせの時間に遅れてしまつてな。店を周って探していたのだが見つからないのだ」

—「なるほど」

春「警備隊のお前なら街の構図に詳しいだろう？だから案内しろ」

—「それは構わないけど・・・時間ぐらい守れよ」

春「し、仕方ないだろう！それよりも早く案内しろ！」

—「ああ、ついて来てくれ」

俺は春蘭を案内する事にした・・・

一件目

— 「いたか？」

春「いや、ここにはいなかった」

二件目

— 「どうだ？」

春「ここも違う」

三件目

— 「ここもか？」

春「ああ・・・」

とりあえず知っている店を周って見たが、華琳と秋蘭の姿は見えなかった。

—「うん・・・こんな時沙和がいてくれたらな」

春「沙和がどうしたのだ？」

—「彼女は阿蘇阿蘇って言う女の子向けの雑誌をよく読んでいて流
行の店に詳しいんだ」

春「ならば沙和に聞いてみればいいだろう。警備中ではないのか？」

—「彼女は今日非番だからどこにいるかわからないんだよ」

春「むっ、残念だ」

そんな会話を続けていると四件目の店に到着した。

—「ここで終わって欲しいんだがな」

中に入って行く春蘭を見つめながら一人呟いた。

しばらくして嬉しそうに春蘭が出て来た。

春「秋月！華琳様と秋蘭を見つけたぞ！！」

—「そうか、よかったな」

春蘭の後ろから二人がゆっくりやって来た。

秋「すまなかつたな秋月、姉者が迷惑をかけて」

一「いや、案内も警備隊の仕事だからな」

華「春蘭から話は聞いたわ、春蘭・・・一成にお礼を言いなさい」

春「は、はい・・・恩に着るぞ秋月」

一「どういたしまして、次からは時間を守れよ」

さて、仕事にもどるか。そう思い踵を返そうとすると

華「待ちなさい一成」

華琳に引き止められた。

一「どうした？まだ何か用があるのか？」

華「ええ、護衛の仕事よ」

一「護衛？誰の？」

華「無論、私の護衛に決まっているでしょ」

—「……春蘭と秋蘭がいるじゃないか」

華「私はあなたに命じているの」

はあ……どういつつもりか知らないが、断れそうもないな。

—「わかった、ここにいればいいんだな？」

華「それじゃ護衛にならないでしょ。私の近くにいなさい」

近くって……

—「まさか……俺にこの店に入れと？」

華「そうよ、それが護衛の仕事ですもの」

男の俺に女性向けの服しか無いこの店に入れと？なんとかしてもらおうと春蘭と秋蘭に目で助けを求めるが

春「……」

秋「くくっ……頑張れよ秋月」

春蘭に無言で睨まれ、秋蘭は面白そうに俺を見ていた。どうやら助けは期待できそうにない。

華「さあ、行くわよ」

—「……了解」

俺は覚悟を決めて入店した……

秋「では華琳様、私は姉者の下着を見てやらねばなりませんので秋月とご一緒にお選びになってください」

春「おい秋月！少しでも華琳様に不埒な視線を向けてみる！私が切り捨ててやる！！」

—「言われなくてもそんな事するわけないだろ」

そう言い残し店の奥に消えて行く二人、俺は華琳が先に行った場所へ向かう。

—「（し、視線が痛い……）」

先ほどから客の女性達の視線が突き刺さるのを感じ、居心地の悪さは最悪だった。

華「やっと来たのね・・・どうしたのそんなに暗くなって？店の雰囲気が悪くなるじゃない」

一「・・・そう思うなら今すぐ俺を解放してくれ」

華「駄目に決まってるでしょ、文句を言うくらいなら早く買い物が終わるよう祈っていれば？」

そう言いつつ下着を手にとっていく華琳。もちろん見るわけにはいかないので視線を逸らす。

一「（男の俺の前で下着を選ぶなんてどういっつもりなんだ？）」

華「ねえ、一成・・・どこを見ているの？」

一「・・・気にするな」

華「人と話す時は相手の顔を見て話すのが礼儀じゃないの？」

一「ぐっ・・・わかった・・・」

諦めて華琳の方を向く。

華「それで・・・これはどう思うかしらっ」

華琳が黒色の下着を見せてきた。

「・・・どう・・・とは？」

華「私に似合うかと聞いているの」

「俺の意見なんか参考にならないぞ」

華「それは私が決める事よ」

下着を体に当てながらこちらを見てくる華琳、どっちら答えなければ解放する気はないようだ。

華「さあ、もう一度聞きましょう・・・これはどう思うかしらっ」

「・・・どう思う」

華「聞こえないわよ？」

「・・・どう思う」

ヤケクソ気味に答えると華琳は満足そうな笑みを浮かべ、それを机の上に置いた。

華「なら、これはどうかしら？」

次に華琳が手にしたのは若干派手目の白の下着だった。

—「俺の意見はさっき言っただろう・・・」

華「一成、私はそんな事は聞いていないのよ」

俺の眼前に下着を突き付けながら華琳が問う。

華「これは私に似合っているかいないか、答えなさい」

クツ・・・絶対楽しんでるな。

—「・・・いいんじゃないか」

華「そう・・・でも、これは駄目ね」

そう言って下着を棚に戻し、また別の下着を手取る。今度は青色で先ほどよりもさらに派手な下着だった。

華「これはどうかしら？」

まさか・・・これから手に取った下着全てに意見を求める気か？

「（こつなっ たら適当に答えてさっさと終わらせるしか）いいと思・・・」

華「言うておくけど、適当な答えはもう駄目よ」

・・・先を越されてしまった。

華「この下着のどこがいいのか説明してみなさい」

女性の下着のどこがいいかなんて答えられるわけないだろ！！

華「ふふっ、あなたが答えるまで次の下着は選ばないわよ」

「・・・」

覚悟・・・決めるか・・・

—「・・・華琳にはもっと大人し目の下着が似合うと思う・・・着る人間が綺麗だからその方がつり合いがとれるんじゃないのか？」

何言ってるんだ俺？見れば華琳も戸惑っているようだった。

華「そ、そう・・・まあまあ答えね」

—「そうか・・・」

—「華」「(き、気まずい・・・)」「

沈黙・・・そんな雰囲気破ったのは華琳の方だった。

華「そ、それじゃあ・・・次の物にいくわよ」

—「・・・ああ」

俺は腹を括った・・・

S I D E O U T

春蘭・秋蘭SIDE

秋「ふふっ、華琳様、楽しそうだな」

春「うぬぬ……秋月めええええ！！」

秋「（からかうつもりで尋ねたのに、まさか本気で答えられるとは思わなかったのだろうか……）」

春「私だって華琳様の下着を選ばせて頂きたいのに……」

秋「（あそこまで戸惑われる華琳様も珍しいな。だが、お楽しみになられているようでよかった）」

春「秋蘭！早く選ばなければ秋月に華琳様を一人占めされてしまうぞ！！」

秋「それは大変だな。ならば姉者の気に入った下着を私に見せてくれ」

春「うむ！……これはどうだ？」

こちらはこちらで楽しんでいるようだった……

春蘭・秋蘭SIDE OUT

IN SIDE

華「ふう・・・なかなか楽しめたわね」

一「それはよかったな・・・」

満足げな華琳・・・俺はすっかり疲れてしまったが。

一「はぁ・・・」

華「何ため息ついてるの、私と過ごした時間がそんなにつまらなかったのかしら？」

華琳がそう言うと同時に春蘭と秋蘭からの鋭い視線を感じた。下手に答えれば斬りかかられて射られるのがオチだ。

一「別につまらなくは「隊長!」「ん?」

隊員A「秋月隊長!!」

隊員B「こちらにおられましたか!!」

先ほどの隊員達が慌てた様子で駆け寄って来た。

—「どうしたんだ？そんなに慌てて」

隊員C「南地区で男が暴れております！」

隊員A「他の隊員達が取り押さえようと奮闘しておりますが、その男がかなり手ごわく・・・」

隊員B「申し訳ないのですが、隊長のお力をお貸し頂きたく思い参りました！」

—「わかった、すぐに行こう。華琳、すまないが俺はこれで失礼させてもらう」

隊員A「ハッ！こちらです！！」

俺は隊員達と共に現場に向かった。

華「・・・答えてから行きなさいよ、馬鹿・・・」

華琳の拗ねた様な声は俺の耳には届かなかった・・・

第二十五話 他人のコーディネートなんて出来るわけがない（後書き）

—「今回もロクな目に遭わなかった」

作「何を言う！彼女が自分の選んだ下着を身につけてくれるなんて嬉しいじゃないか！」

—「気持ち悪い事を言うな、それに華琳は彼女じゃないだろ」

作「これからのお前の行動次第だな」

—「知るか」

作「さて・・・結構フラグも立ってきた事だし、そろそろ黄巾党と決着つけて次の場所に行くか」

—「次つて・・・確か呉だよな？」

作「ああ、呉でも色々イベント起こすから楽しみにしてるよ」

—「・・・向こうでも同じような事が起こるのか・・・」

第二十六話 バトルものに修業はつきもの(前書き)

気に関しては全てオリジナルです。便利な言葉だな気って・・・

第二十六話 バトルものに修業はつきもの

休日、中庭で鍛練しようと思かうと季衣がいた。

「季衣も鍛練か？」

季「あ、兄ちゃん！うん、そうだよ！」

トゲ付きの鉄球を振り回しながら答える季衣。

「季衣は凄いな、そんな鉄球を軽々振るえるんだから」

季「えへへ、そうかな？」

しばらく季衣の鍛練を見た後、頃合いを見計らって水を渡す。

「はい、お疲れ様」

季「ありがとう兄ちゃん・・・あ〜美味い！」

とても美味しそうに水を飲む季衣、どうやらかなり長い時間鍛練していたようだ。

「ん？季衣、ケガしているじゃないか」

よく見れば、顔や体の至る所に擦り傷や切り傷があった。

季「こんなのへっちゃらだよ。鍛練した後はいつてもこうだもん」

まるで気にしていないように言う季衣。

「駄目だぞちゃんと手当しないと。ちょっと待っててくれ」

救護室から傷薬を取って来る。

「お待たせ、これを使うんだ」

季「うえ〜、これ沁みるから嫌なんだよね」

「う〜ん、こればかりは我慢してもらうしかないからな」

傷の箇所薬を塗っていく。

季「くすぐりたいよ兄ちゃん」

「・・・よし、これで終わりだ」

とりあえず、目に見える部分全てを塗り終える。

季「ありがとう兄ちゃん！」

「」どういたしまして

季衣の頭をなでる。

季「うん、兄ちゃんの手ってあったかいな」

「」そうなのか？」

季「うん！僕大好き！」

「」ははっ、ありがとう

この子は鈴々に似ているな・・・元気になっているだろうか・・・

S I D E O U T

春蘭SIDE

春「なんだ？」

中庭を歩いてしていると話し声がしたので向かってみた。

春「あれは・・・季衣と秋月か？」

秋月が季衣に薬を塗っている。どうやら季衣のケガの手当てをしているようだ。

春「うゝむ・・・何だ？」

二人を見ていると何故か落ち着かない。

春「ん？」

目の前には大きな岩。

春「・・・よし！」

ゴンッ!!

春蘭SIDE OUT

INSIDE

ゴンッ!!

—「何だ？」

何かがぶつかった様な大きな音がしたのでそちらを向いてみると

春「おお、季衣と秋月ではないか。何をしておるのだ」

春蘭がやって来た。

・・・額から血を流しながら。

季「しゅ、春蘭様!! どうされたんですかその額!？」

春「あ、ああこれか？これはその・・・ぶつけてしまったな」

—「何にぶつけたらそんなに血が出るんだよ・・・」

春「それで・・・そのだな・・・」

何故か俺をチラチラと見てくる春蘭。

季「そうだ！今兄ちゃんに傷薬を塗ってもらってたんですよ。春蘭様も塗ってもらったらどうですか？」

春「ほ、ほう、そうなのか。それはちょうどいいな」

—「季衣・・・これは薬でどうにかなる傷じゃないぞ・・・」

明らかに手術レベルだな。

春「なんだと！貴様！季衣には塗ったくせに私は駄目だというのは！？」

—「落ち着け！今そんなに興奮したら」

ピュ〜〜ッ・・・

吹き出す血の量が増えた。

季「うわわわ！！春蘭様〜〜！！！」

—「だから言ったのに……」

季「兄ちゃん！なんとかしてよ〜〜！！！」

—「……仕方ない」

春蘭の額に手を当てる。

春「な、何を」

—「治すからじっとしててくれ」

春蘭にオーラを流す。

季「傷が……」

春「な、何をしたのだ秋月！？」

—「君の体に気を流して生命活動を促進させた」

春・季「「????」」

—「……とにかく俺の力だよ」

季「そうなんだ〜凄いね兄ちゃん」

春「難しい言い回しをせずに最初からそう言え」

—「……」

そうだった……この二人に説明しても理解してもらえないはずも無かった。

季「春蘭様、大丈夫ですか？」

春「あ、ああ痛みも無いし……助かったぞ秋月」

—「全く、何があったか知らないが、あまり俺や季衣に心配かけないでくれよ」

季「そうですねよ春蘭様。僕とっても心配したんですからね！」

春「す、すまん季衣……秋月も心配してくれたのか？」

—「当たり前だ。大事な仲間を心配するのは当然だからな」

春「そ、そうか！」

季「兄ちゃん、僕は？」

—「もちろん、季衣も大事な仲間だよ」

季「えへへ、ありがと兄ちゃん！」

—「・・・ふう」

あの後何故かご機嫌な春蘭と季衣の二人と別れた後、俺は鍛練を始めた。

しばらくすると、何かが近づいてくる気配がしたのでそちらに意識を向けると凧がやって来た。

—「凧、どうしたんだ？」

凧「た、鍛練の邪魔をしましてしまい申し訳ありません」

—「いや、ちょうど休憩しようと思っていたから気にしないでくれ」

凧「は、はい・・・」

何故か歯切れの悪い凧。

—「本当にどうしたんだ凧？妙にソワソワしているけど」

凧「・・・よし、言っぞ・・・秋月様！お願いがあります！！」

—「お願い？」

凧「私を・・・鍛えてください！！」

真剣な目で俺を見つめる凧。

—「鍛える？」

凧「はい、以前秋月様はこうおっしゃってましたよね。私の使う
気と秋月様の使われているおおらと言っ力は似ていると」

そう言えば、以前みんなに俺の力について説明した時にそんな事を
言ったような気がする。

凧「私はもっと強くなりたい。ですから、同じような力を持つ秋月
様にぜひともご教授して頂きたいと思ひまして」

—「そうか・・・」

凧「駄目・・・でしょうか？」

不安げな表情をする凧を安心させるために答える。

—「いや、それぐらいならお安い御用だ。それに、凧には以前お菓子を譲ってもらった借りがあるからな」

凧「あ、ありがとうございます!！」

—「それじゃあ早速やりたいが・・・凧、時間は大丈夫か？」

凧「問題ありません。今日の仕事は全て終わらせてあります」

—「ははっ、さすが凧だな。それじゃあ始めようか」

凧「お願いします師匠!」

—「・・・師匠？」

なして？

凧「教えて頂くのですからこう呼んだ方がよろしいかと思ひまして」

—「まあ、好きに呼んでくれ」

「ついで、俺と凧の特訓が始まった・・・」

「さて、始める前に・・・凧、手を出してくれ」

凧「？はい・・・」

差し出された凧の手を握る。

凧「し、師匠！な、何を！？」

「今から君の気の容量を調べるからしばらくこのままでいてくれ」

凧「は、はい・・・」

意識を集中させ、凧の気を感じる・・・ふむ、さすがだな。これほどの量を扱える者はそうそういないぞ。

「なるほど・・・」

凧「・・・／＼（い、いつまで手を握っていればいいのか？）」

「・・・よし、これでいいな」

凧の手を離す。

凧「ど、どうでした？」

一「さすがだな凧、これほどの気を扱える人間は今まで数人しか見た事無いぞ」

凧「そ、そうなんですか？」

一「ああ、君なら俺の技も使えそうだな」

凧「ぜ、ぜひ教えてください！！」

一「あ、ああ、後でな」

興奮する凧を抑える。

一「まずは意識をはっきりさせる事から始めよう」

凧「意識・・・ですか？」

一「気っていうのは扱う者しだいでも形を変える事が出来る。身体強化に使ったり、凧みたいに気弾として飛ばしたり、俺みたいに気柱を発生させたりな」

凧「なるほど」

「てつとり早く理解してもらうには・・・そうだな、風、あの岩に向かって気弾を放ってみてくれ」

前方にある大岩を指す。

風「わかりました・・・はあああああ！！！！」

ドンッ！

風の放った気弾は、大岩を破壊した。

「じゃあ次は俺がやってみるから見ててくれ」

別の大岩に向かって気弾を放つ。

「はっ！！」

ガツンッ！！

風「なっ！？」

俺の放った気弾は、大岩を砕かず、円形の穴をあけただけだった。

「……つとまあ、こんな感じだ。どうだ凧？」

凧「すごい……周りに一切ヒビを入れずに、気弾の大きさ分だけの穴をあけるなんて……」

「これがさっき言った意識の違いだ。一つ聞いてみるが、さっき気弾を放った時、凧はどんな事を考えていた？」

凧「気弾を岩に当てる事……それだけを考えていました」

「そうか、ちなみに俺はあの岩を貫通させようと意識して放った……これがどういう意味かわかるか？」

しばらく考え込む凧だったが、突然思いついたように声をあげた。

凧「そうか！当てることだけを考えていた私と違い、師匠は最初から岩を貫通させるつもりで放った。この意識の違いが先ほどの結果に繋がるわけですね!？」

「そういつ事。こういつたちよとした事でも随分戦い方が広がるだろ？」

凧「はい！勉強になります!！」

「それじゃあ、その事に注意してもう一度放ってみてくれ」

凧「はい！はあああああ！！！！」

「まあ、さすがに一回で出来るのは難しいから、感覚だけでも覚えてくれれば……」

ガツンッ！！

凧「で、出来た……」

「え？」

凧「出来ました師匠！見て下さい！！！」

凧の指す大岩には確かに円形の穴が開いていた。

「なん……だと……」

まさか一回で成功させるとは、この世界の人間のスペックを侮っていた。

「天才……か」

凧「どうされました師匠？」

一「いや、何でもないよ。気弾はこれでいいとして、次は身体強化だな」

凧「はい」

一「と言ってもやる事は簡単だ。常日頃に気を体に纏わせるだけだ」

凧「そ、それだけですか」

一「そう、それだけ。無意識に発動出来るようになったら完璧だな。敵との戦闘中に一々意識して発動させるのは大きな隙になるからな」

凧「な、なるほど」

一「それに、気の量も増えるしな。まあ、スタミナ・・・体力と同じ物だと考えてくれ」

凧「わかりました」

一「最後に・・・俺の技を一つ教えるよ」

凧「は、はい!!」

一「凧には見せた事あるよな。爆碎跳天昇って言う技なんだけど」

凧「師匠が使われていた気柱を発生させる技ですね」

「そう、それを教えたいんだけど」

凧「お願いします!!」

「意識としてはそうだな・・・自分を守る壁を想像してみてください」

凧「壁・・・ですか？」

「そう、この技は攻撃にも使えるが、防御にも使える技だからな。その方が想像しやすいだろう」

凧「わかりました、では早速・・・はあああああ!!!!」

凧が気を練り込む。そして・・・

凧「爆砕・・・跳天昇!!!」

シューシュー

凧「あ、あれ？」

「何も起きないな」

凧「も、もう一度・・・爆砕跳天昇!!!」

シーーーーーン

凧「もう一度……」

シーーーーーン

凧「ま、まだまだ……」

シーーーーーン

凧「くっ……」

その後も凧の頑張りも空しく不発が続き、数刻後。

凧「はあっ……はあっ……」

ー「凧、そろそろ終わりにしよう。これ以上は」

凧「いえ！まだやれます！！」

ー「しかし……」

凧「私は強くならなければならぬのです！」

凧の目に諦めの色は無かった。

「どうしてそこまでやるんだ？」

凧「私は・・・師匠の様に弱き者を守れる人間になりたいのです。そして、華琳様にお仕えしている今、守りたいモノがさらに増えました。だから・・・私は強くなりたいのです」

凧が自らの想いを話す。

「君は今でも充分強いさ・・・」

凧「何かおっしゃいましたか師匠？」

「いや、何でもないよ。そうだな・・・それじゃあ、その守りたいモノが自分の背にいと想像してやってみてくれ」

凧「背中に？」

「そうだ、それでうまくいかなかったら今日はもう終わりにするからな」

これ以上やったら壊れてしまう。そう思い凧に釘を刺す。

凧「わかりました。いきます！」

凧が再び気を練り込んでいく。ここまでは先ほどまでと同じだ。

凧「（私が守りたいモノ・・・魏の民達、我が主華琳様、そしてなにより・・・）」

ー「・・・・・・・・」

凧「（私に進むべき道を示して下さいました師匠。あなたを守るために私は・・・）」

ー「むっ、先ほどまでとは雰囲気が違う」

これはもしかして。

凧「（必ずこの技を習得してみせます！！）爆碎・・・跳天昇！！」

ブワッ！！

凧の叫びと共に二つの小さな気柱が立ち昇った。それはとても小さく、すぐに消えてしまったが、確かに存在していた。

凧「し、師匠……」

—「凧、おめでとつ。今の感じを忘れないようにな」

凧「はい、ありがとう……じいさま……」

—「おつと」

ドサッ

糸の切れた人形のように崩れ落ちる凧、どうやら気絶してしまった様だ。

—「全く、こんなになるまで無茶をして……君に何かあったら華琳に怒られるのは俺なんだぞ？」

さて、部屋に送ってあげたいが、起こしてしまうかもしれないしな。

—「おつ、いい所に木があるな」

丁度いい、ここであればらく休ませてあげよう。木を背もたれにして座り、凧の頭を膝に乗せる。

凧「う・・・うん・・・」

「「お疲れ様、凧」

しばらくして、睡魔が襲ってきた。疲れていた俺はそのまま意識を失うのだった・・・

S I D E O U T

凧 S I D E

凧「（う・・・うん）」

意識を取り戻す。私は一体どうしたんだ？

凧「（そうだ、成功して気が緩んだのか気絶してしまったんだ）」

「
なんと言う事だ。せっかく師匠に稽古をつけてもらっていたのに。」

凧「（途中で気を失うなど、なんて情けない・・・）」

そう言えば、私は今何処にいるのだろうか？

凧（何か固い物が頭の後ろにあるが・・・なんだ？）「

気になって目を開ける。すると・・・

「ぐぐぐ・・・」

目をつむり、寝ている師匠の顔が見えた。

凧「なっ!？」

どどどいうことだ!?!なんで師匠が!?!

「うん・・・」

凧「はっ・・・」

マズイ!起こしてしまったか?慌てて口を押さえ、恐る恐る師匠の顔を見る。

「……………ぐ……………」

凧「よ、よかった……」

師匠の寝息を聞き安堵する。そして改めて状況の確認をする。

凧「恐らく……気絶した私を気遣ってそのまま寝かせて下さったのだな」

無理に付き合っただけで頂いたのはこちらの方なのに、優しい方だ。

凧「（師匠の……膝枕／＼）」

男性なので若干固いが、それでも心地よかった。

凧「（もう少しこのままで……）」

- ・ 結局、師匠が目を覚まされるまで、私は膝枕を堪能するのだった……

第二十六話 バトルものに修業はつきもの（後書き）

—「おい、黄巾党はどうした？」

作「いや、季衣の拠点を忘れててな、今回こんな風にしたみた」

—「忘れてたのかよ」

作「季衣には後で謝っておこう。ちなみに、春蘭の流血は真・恋姫のアンソロの話を参考にしてみた」

—「あれは流血してなかったけどな」

作「まあ、丸パクリは駄目だし、あっちの方が都合が良かったからな」

—「パクリ魔のくせに、今さら何言ってるんだ？」

作「だから！お前は誤解を招くような発言をするな！！」

—「事実だろ」

作「・・・さて、風がパワーアップしたぞ」

—「都合が悪くなったら流す癖、直した方がいいぞ」

作「ハハハ、ナンノコトデセウ」

—「気ってあんなのでいいのか？」

作「知らん、オリジナルだ」

一「お前、風には色々オリジナル入れるよな」

作「風好きだもん」

一「そして、風ファンの方に叩かれる・・・と」

作「叩き上等！！・・・やっぱ勘弁」

一「チキンのくせに大口たたくな阿呆」

第二十七話 やりたい事やっつて何が悪い？（前書き）

魏編だけで十話近く・・・このまま魏メインにしようかな・・・

第二十七話 やりたい事やっつて何が悪い？

俺は現在、凧と共に情報収集と言う名目で出撃していた。どうやら華琳はそろそろ黄巾党との決着をつけるつもりらしい。

—「情報収集と言っつたって・・・何から手をつければいいのか」

凧「こればかりは地道にやっつて行くしかありません」

—「だよなあ・・・」

俺に答えつつ周囲を警戒する凧。

—「そう言えば、体調は大丈夫なのか？最近ずっと鍛練してるだろ？」

凧に気の使い方を教えた日から、彼女はほぼ毎日、中庭で鍛練をしていた。そのおかげで、気柱を最大四本立てられるようになった。

凧「問題ありません。お気遣いありがとうございます」

—「ならいいけど、無理だけはしないでくれよ？たまには休む事だつて大事だ」

凧「大丈夫です。それに・・・私は戦う事しか出来ませんから・・・」

—「ていつ！」

ピシッ！

凧「あうっ！」

凧にデコピンをかます。痛そうに額をさする凧。

—「戦うことしかできない？そんなわけないだろ。君に出来る事は戦い以外にも必ずあるはずだ」

凧「師匠・・・」

—「だから・・・そんな悲しい事を言わないでくれ」

凧「は、はい。申し訳ありませんでした」

真剣に謝る凧。うっくん、この娘はなんでも深く考えすぎる癖があるからな。

—「・・・そうだ風、君、料理はできるか？」

風「え？は、はい、多少は」

—「じゃあ・・・結婚するってのも一つの道だぞ？」

風「け、結婚ですか！？」

—「そう、愛する人のために毎日料理を作る。戦いとは無縁の幸せな生活をするのもいいんじゃないのか？」

武将とは言え、風だって立派な女性だ。いずれは誰かと結婚して幸せになつて欲しい。

風「・・・無理ですよ師匠」

—「どうして？」

風「こんな・・・傷だらけの女を娶ってくれる方など・・・いるわけありません」

腕の傷を擦りながら自嘲的な笑いを浮かべる風。

風「この傷は私の誇りです。私が今まで人々を守ってきた証なんです。そして、華琳様のため、魏のためにこれからも傷は増えていくでしょう・・・」

—「……………」

凧「もちろん後悔はありません。将として、主のために戦える事は幸せです……………ですが、私にはもう、女としての幸せは望めないでしょうね……………」

—「そいつ!」

ピシッ!

凧「うあっ!」

再び凧にデコピンをかます……………先ほどよりも強めに。

—「凧……………本当にそう思っているのか?」

凧「し、師匠?」

—「さっき言ったよな?その傷は人々を守った証だと。自分の誇りだと……………」

凧「は、はい……………」

—「そんな誇りある傷を気にして、凧自身を見ないようなヤツは俺が許さん。例え……………それが凧本人だとしてもな」

凧「師匠……」

—「俺は知っている。いつもひたむきで、一生懸命で、真面目な凧の事を。いや、俺だけじゃない。華琳も春蘭も秋蘭も、桂花や季衣や沙和、真桜だって……」

凧「華琳様達が？」

—「ああ、それに、華琳ならきつところ言っただろっな「傷があるうとなかるうと、凧は可愛い娘だ」ってな」

間違いないな。今だって閨に連れて行くのを虎視眈々と狙っているみたいだし。

凧「か、可愛い！？私ですか！？」

—「おいおい、自覚なしか？」

凧「……それは師匠も同じだと思いますけど……」

—「ん？」

凧「い、いえ！なんでもありません！！それで……その……師匠もそう思っ下さっているのですか？」

—「……」

凧「で、ですから・・・その・・・私が・・・か、可愛いと・・・
／／」

—「もちろん。なんなら俺と結婚して欲しいくらいだ」

凧「ええっ!？」

—「凧ほど魅力的な女性はそうそういないからな」

凧「あ、あう・・・／／」

俺の言葉に顔を真っ赤にする凧。これで少しは自分に自信を持って
くれたかな？

—「なんて、冗談だ・・・」

凧「師匠・・・いえ、秋月様・・・」

—「凧？」

凧「ふ、不束者ですが・・・よろしくお願いいたします／／」

—「え？」

凧「で、ですから・・・私と結婚・・・」

・・・

「はいいいいいいい!!?!?!?!?」

調査にやって来た森の中に、俺の声が響いた・・・

凧「ど、どうしました師匠!?!」

「ど、どうしたって・・・凧が変な事言っから」

凧「し、師匠が言って下さった事じゃないですか!」

「あ、あれは冗談で」

凧「え?」

「凧が自分の事を卑下しすぎているから、なんとか自信を持ってもらいたくて・・・」

凧「・・・そうですか」

「それにほら!凧にだって相手を選ぶ権利があるし、俺なんかじゃ嫌だろっし・・・」

凧「・・・むしろ師匠以外の方となんて考えられません」

「風？何か言ったか？」

風「な、なんでもありません・・・ありがとうございます師匠。少しは自信が持てた気がします」

「そっか・・・馴れない事言った甲斐があったよ。冗談とは言え、プロポーズなんて初めてやったしな」

風「ぶるぽおず？」

「告白って意味だよ。正確には少し違うけど」

俺がそう言つと、また風の顔が赤くなった。

風「は、初めてですか？師匠の事だからってつきり・・・」

「もしかして・・・誰彼構わず告白するような軽い男だと思っただかな？」

風「ち、違います！師匠ほどの素敵な男性なら告白の経験くらいあるのではないかと思ひまして・・・」

「・・・」

結婚か・・・俺には不可能な話だ。

—「……俺の運命に巻き込むわけにはいかないからな……」

凧「え？」

—「なんでもないよ。それより……」

周囲の草むらから殺気を感じる。

—「凧……気付いたか？」

凧「はい、囲まれています」

俺と凧が戦闘態勢を整えた瞬間

黄「……うおおおおおおお！！！！」「」「」

黄巾党が叫び声と共に俺達に襲いかかって来た。だが、闇雲に攻め
たって勝てるわけもなく、数分後には全員が地に伏せていた。

凧「敵の部隊と言うわけでは無さそうですね。待ち伏せでしょうか
？」

—「いや、待ち伏せにしては人数が少なすぎる。偵察か何かじゃな

いか？」

ふと、近場に倒れている男の懐から何かが見えた。気になって引っぱり出してみると、それは小さな巻物だった。

—「なんだこれ？」

気になって紐を解く。開いてみると、何やら地図の様なものが描かれていた。その横には何やら文字も書いてある。

凧「師匠！これは……！」

—「集合場所の地図……と言う事は、こいつらは連絡係か」

凧「これで、敵の拠点の一つがわかりましたね」

—「よし、早速戻って報告しよう」

凧「了解です師匠」

俺達は城に戻った……

華「大手柄よ。一成、凧」

—「ああ」

凧「ありがとうございます!」

上機嫌で俺と凧を褒める華琳。あの巻物は、早速軍議で採り上げられた。

秋「先ほど戻った偵察部隊から報告がありました。それと照らし合わせて検証してみました。どうやら敵の本隊に間違いありません」

秋蘭が告げる。

—「本隊か・・・ならば恐らく・・・」

秋「ああ、首謀者の張三姉妹が揃っているとの報告もあった」

華「それは間違いないのね?」

秋「ええ、ですが・・・」

秋蘭が眉を顰める。

華「どうしたの?」

秋「報告では、三人の歌を全員が聞いていて、異様な雰囲気を漂わせていたとの事です」

華「・・・何かの儀式かしら?」

秋「詳細は不明です。兵の見解では、士気高揚が目的ではないかと言っています」

華「士気高揚ね・・・洗脳の間違いじゃないの?」

「そうか、この時代にはアイドルやライブなんてものは存在しないはずだ・・・なんで彼女達がそんな事をしているのかは知らないが・・・

—「多分・・・単純に歌を聴いているだけだと思っぞ」

華「あら、一成は何か知っているの?」

—「偵察部隊が見た時はライブ中じゃなかったのか?」

秋「らいぶ?」

華「聞いた事無いわね。天の国の言葉かしら?」

—「そうだ。ちなみにライブって言うのは・・・」

俺はアイドルとライブについて説明した。

華「・・・つまり、人前で歌ったり踊ったりするのがあいどるで、それを披露するのがらいぶ・・・と言う事でいいのね？」

一「ああ、だいたい合ってる」

春「理解できん。何故その様な事をするのだ？」

春蘭が不思議そうな顔をしている。

一「そうだな・・・よくアイドルは夢を与える存在だと言われているな」

凧「夢・・・ですか？」

一「ああ、アイドルの歌や笑顔に元気づけられる人間はたくさんいたからな。人気のアイドルはそれこそ世界中で愛される存在だったぞ」

秋「そこまでの影響力があるのか？」

一「『歌に国境は無い』その言葉通り、世界中の人間が同じ歌で笑ったり泣いたりしていたんだ」

華「それが本当なら・・・使えそうね」

—「ん？」

華「何でもないわ。とにかく、一成と風のお陰で一気にカタがつきそうね。これで終わらせる・・・みんな、決戦よ!!」

全員「はいっ!!」

—「ああ!!」

玉座の間に、全員の声が響き渡った・・・

S I D E O U T

黄巾党 S I D E

?「人和ちゃ〜ん!お腹空いたよ〜ん!」

黄巾党・大天幕・・・その中で、三姉妹の長女、天和の能天気な声が響く。それに続き、次女である地和の不満声も聞こえてきた。

地「人和。私もう限界よ。ご飯も少ないし、お風呂もロクに入れな

い。それに何より、ず〜つと天幕の中で息が詰まりそう!」

人「言われなくても分かっている。でも仕方が無いでしょ。曹操って奴に、糧食庫が丸ごと焼かれちゃったんだから」

地「仕方ないわよ!別の所に行けば良いじゃない。今までだって、煩くなったら他の所にサッサと移動してたじゃないの!」

地和の発言に、人和が頭を抱えた。

人「・・・私達の活動が朝廷に眼を付けられたらしいの。大陸中に黄巾党討伐の命が下っているわ」

地「は、はあ?何よそれ!?私達、討伐されるような事は一切してないわよ!」

人「確かに私達は何もしていないわ。ただし、周りの連中がね」

地「ど、どう言う事よ!」

人「連中が付いてくると、絶対に大きな動きになる。彼等を連れて国境は越えられないのよ」

天「え〜っ?じゃあ今までみたいに、色々な国は回れなくなっちゃうの?」

地「天和姉さんはもう黙っててよ!連中が付いてくるなら、こっそり置いていけば・・・」

人「出来るならとつくにやってるわ。何度か試したけど、その度に別の誰かが寄って来るのよ」

だから無駄だと思って諦めた。人和は地和にそう告げた。

天「全くもう！何でこんな事になったの〜！」

能天気な様子で言い出した天和を地和が攻める。どうやら2人は歌を歌っている最中に兵達に言ってしまったらしい。

天和曰く「大陸の皆に愛されたい」・・・とか。地和曰く「(歌で)天下を獲りたい」・・・とかなんとか。

それを本気にした周りの人間が乱を起こしているというわけだ。騒がしい二人を余所に、人和が溜息をついたその時

？「張角様！張宝様！張梁様！」

天幕の外から、三人を呼ぶ兵の声が聞こえた。

人「入りなさい」

兵「失礼します！」

天「どうしたんですか？」

兵「はっ。軍により追われた新たな者達が、我々に合流したいと言つてきているのですが・・・」

天「それって、私達の歌を好きって言ってくれてる人達なんですよね？」

兵「その通りです」

兵の言葉に天和が笑みを浮かべる。

天「じゃあ良いんじゃないですか？」

地「そうね。応援してくれる子は大切にしないとね！」

人「・・・と言う事です。後はそちらにお任せします」

兵「では、早速食料と装備の支給を行います」

そう言つて、兵は天幕を後にした。

人「何？食料も装備も持たずに合流したいって・・・たかりに来て

るだけじゃない」

地「もう！馬鹿馬鹿馬鹿！！何で姉さんあんな事を言うの！？？」

天「え〜！だってちーちゃんだって、応援してくれる子は大切にしようって……」

地「だ、だって、あんな事言われたら、ああ答えるしかないでしょ！！！」

天「私だってそうだもん！！！」

人「全く……今の食料の状況を見れば、これ以上の受け入れが無茶だってわかるはずなのに……」

地「じゃあ人和が言ってくればよかったじゃない！！！」

人「建前ってものがあるでしょ？」

天「あ〜〜ん！！お腹空いたよ〜〜！！！」

その後、また別の兵が受け入れの報告をし、三人はそれに許可を出すのだった……

第二十七話 やりたい事やっつて何が悪い？（後書き）

作「やっと黄巾党とケリがつけれそうだ」

一「長かったな」

作「拠点イベントやれるだけやっつたからな」

一「黄巾党との戦いはどれくらい続くんだ？」

作「多分・・・二・三話」

一「短っ！！」

作「だって戦いなんてつまらんだろ？平和が一番さ」

一「それはそうだが・・・」

作「と言うわけで、お前のチート能力でさっさと終わらせるからな」

一「頼むから世界観にあった戦い方をさせてくれ。いつもいつもブラスターぶっ放すのも飽きてきた」

作「それは約束できん」

一「しろよ！！」

第二十八話 全てを失ってもついて来てくれるのが本当の仲間だ(前書き)

一気に終わらせます。

第二十八話 全てを失ってもついて来てくれるのが本当の仲間だ

一「秋蘭、たった今本隊が到着したようだぞ」

秋「そうか、各隊の報告はまとまっているか？」

黄巾党と決着をつけるべく、先に先発隊として出陣した俺と秋蘭と季衣は黄巾党の本隊を確認していた。凧達三人も俺の部下という形で同行している。

報告によれば、ヤツらの総勢は二十万、しかしその動きはかなり鈍く、なにより、その二十万の中でまともに戦えそうなのはたった三万程だという。

秋「二十万もの軍勢がいるのに関わらず、戦えるのが三万だと？」

季「もしかして・・・畏かな？ だったらどうしよう？」

真「そんな風には見えへんかったけどな。武器も食料も全然足りてへんようやし・・・」

凧「先ほども何処からか流れ着いてきた兵達が合流していたようです」

一「つまり、二十万と言う数は非戦力を合わせた上での数・・・と
言う事か？」

沙「その上新たに合流した兵と前からいた兵との間で内輪揉めが起きてるの〜。あれじゃあ指揮もろくに機能してないと思うの〜」

一「合流しすぎて逆に動けなくなるとは・・・本末転倒じゃないのか？」

秋「そうだな、本拠地が無いなら陣内に入れるしかない。その結果がこれだ」

そこで俺は気付いた。

一「・・・なるほど、これが華琳の狙いだっただのか」

秋「そうだ、ここまで組織が肥大化すれば、自ずと動きが鈍くなるし、指揮系統もままならん。そうなればこの程度、そこらの野盗と変わりはないさ」

秋蘭の言葉に全員が頷く。

秋「攻撃の機は各々の判断に任せるが、張三姉妹だけには手を出さないように。以上だ」

季・凧・沙・真「「「はっ!!」「」「」

一「了解」

それぞれの配置に付く。さあ……この馬鹿げた戦いを終わらせよう……

S I D E O U T

張三姉妹 S I D E

黄巾党・大天幕。指揮系統が機能していない黄巾党は、更なる混乱に陥っていた

兵「敵の奇襲です。各所から火の手が上がっています！」

兵からその事を聞かされた人和は、顔を青ざめ頭を抱えた。人数が増え過ぎている為、誰に指示をして良いのか分からないのだ。次々と大天幕に混乱した大量の兵が押し寄せ、首領である張三姉妹に指示を仰いだ。

人「ともかく敵の攻撃があるだろうから、皆に警戒するように伝えて！」

地「火事も手の回る者が消せば良いでしょ！ サッサとやっちゃって！」

人和と地和の指示を聞き、兵達は天幕を出て行った。

人「（もうこれ以上は限界だ。ここには居られない）」

弱々しい声を出す2人の姉を見つめながら、人和は奥から荷物を取り出した。

地「何？その大荷物？」

人「逃げる支度よ。3人分あるから、みんなでもう1度、初めからやり直しましょう」

人和の提案に一瞬躊躇いの表情を浮かべる二人だったが。

地「・・・仕方ないか。でも2人が居るなら大丈夫かな？」

天「そうだね。ちーちゃんと人和ちゃんが居るなら、何度だってやり直せるよ」

人「そう言う事。そうだ、これも持って」

人和は机の上に置いていた、1冊の古い本を手を取った。以前ある

男から無理矢理貰い受けた『太平要術の書』である。

地「太平・・・何とかだっけ？」

人「そうよ。これを使って、またみんなで・・・」

人の言葉を遮るように、天和が太平要術の書を取り上げた。そしてそれを乱暴に置いた後、用意していた荷物を手に持つ。

人「ね、姉さん!？」

天「2人が居ればどうでも良いから早く逃げようよ!!」

二人の手を引いて、天和は天幕を飛び出した・・・

張三姉妹SIDE OUT

華琳SIDE

桂「華琳様。先発隊が行動を開始したようです。敵陣の各所から火の手が上がりました」

春「伝令が届きました。作戦通り奇襲をかけるとの事です」

桂花と春蘭の報告を聞き、私は思わず笑みを浮かべた。

華「そう・・・桂花、わかってるわね？予定通り動きなさい」

桂「御意！」

春「しかし・・・今まで手こずっていたのに、今回はかなりあっさりと事が進みますね」

桂「それは春蘭が弱くて、頭が悪いからじゃない？」

春「な、何だと!？」

桂「あら、ごめんなさい。今さら事実を言ってもしょうがないわね」

春「き、貴様あああ!！」

華「はあ・・・やめなさい春蘭。桂花も挑発しないの」

今にも桂花に殴りかかりそうな春蘭を抑える。全く・・・もう少し仲良く出来ないものかしら？

桂「華琳様。そろそろ我々も動く時です。号令を頂けますか？」

華「あら、もう？もう少し掛かると思っていたけど、随分早いわね

？」

桂「敵の混乱が輪を掛けて酷いでしょう。ともかく、こちらの準備は既に整っております」

桂花の進言にゆっくり頷く。

桂「張三姉妹は元々旅芸人。こんな負け戦に最後まで付き合つとは思えません」

華「ええ。急がなければ彼女達、私達じゃなくて身内に殺されかねないわ」

恐らく味方を置いて、張三姉妹は何処かへ逃げるつもりだろう。そうなれば彼女達を慕って集まった黄巾党の連中が黙ってはいない。彼等は報復の為、絶対に張三姉妹を殺しに掛かる筈である。目的は張三姉妹の生け捕り。最悪の事態だけは避けなければならない。

華「皆の者！聞け！！」

出陣を待つ兵達に号令をかける。

華「汲めない霧は葉の上に集い、既にただの雫と成り果てた。山を歩き、情報を求めて霧の中を彷徨う時期はもう終わりよ。今度はこ

こちらが呑み干してやる番！ならず者共が寄り集まっただけの烏合の衆と、我等の決定的な力の差・・・この私に、しっかりと見せなさい！総員、攻撃を開始せよ！！」

兵達「うおおおおお！！！！」

さあ・・・完膚無きまでに叩き潰してあげるわ・・・

華琳SIDE OUT

IN SIDE

ー「はあああああ！！！！」

黄「ひiiiiiiiiiiii！！！！」

刀を振るい、黄巾党を吹き飛ばす。近くでは風が気弾で敵を吹き飛ばしていた。

ー「たった数日でこの違い・・・やはりセンスがあるな」

気弾も身体強化も以前よりかなり精度が上がっていた。

極めつけは

凧「爆碎跳天昇!!!」

ブワッ!!

黄「ぎゃああああああ!!!」

—「・・・すっかりものにしてるな」

自分の身長程の気柱を発生させる凧。教えた者としては嬉しい限りだ。

凧「ん？師匠！あれを!!!」

—「何だ？」

凧が俺の背後を指す。そこには、曹の旗を掲げ、大地を揺らしながら迫ってくる華琳率いる本隊の姿があった。

凧「流石は華琳様。予定通りですね」

「そうだな、なら俺達は季衣と真桜と合流して、左翼に向かおう」

凧「右翼は秋蘭様と沙和でしたね。後は2人が来てくれれば」

真「お〜〜い！凧〜〜い！！」

季「兄ちゃ〜〜ん！！」

凧が呟くと同時に、二人の元気な声が聞こえた。

「二人とも、ケガは無いか？」

真「全然。なんや、一方的すぎてこっちが悪いくらいやったわ」

季「うん。で、華琳様も来たし、そろそろ合流かなあって」

「そうか、ちょうど俺達もそう考えてたんだよ」

凧「では師匠、号令をお願いします」

「俺が？」

真「ウチらがやるより兄さんの言葉の方が兵の士気も揚がると思う
で」

季「僕はそう言っの苦手だし、兄ちゃんに任せるよ」

兵達を見ると、全員が期待に満ちた目をしていた。

「（やれやれ、柄じゃないんだがな・・・）」

兵達「・・・」

「これより俺達は本隊に合流し、左翼に展開して黄巾党を叩く！張三姉妹は発見次第捕縛するようにしてくれ！！人々に恐怖と悲しみを与えた外道共を・・・今こそ俺達の手で討つ！！！」

俺の号令に、凧・季衣・真桜が拳を天に向ける。

兵達「うおおおおおおお！！！」

兵達も、雄叫びと共に剣を天に向けた・・・

数刻後、戦局は圧倒的に魏に傾いていた。最初の内は我武者羅にこちらに向かって来ていた黄巾党だったが、不利だと悟ったのか、次々と武器を捨てて離脱して行った。それでも向かって来る者もいたが、士気の高い魏兵によってあっという間に討ち取られていった。

「策もなく、指揮系統もままならない状態で華琳達に勝てるわけもないか」

黄「死ねええええええ！！！」

背後から黄巾党の兵が剣を振りかざして襲ってきた。

「背後から襲つなら声を出しては意味がないぞ」

受け流し、体制を崩したところを斬り裂く。兵はそのままうつぶせに倒れた。

「そろそろ終わりそうだな」

凧が気で吹き飛ばし、季衣が鉄球で叩き潰し、真桜がドリルで敵を貫いていった。

兵「秋月様！ご報告します！！」

「御苦労さま。どうしたんだ？」

兵「実は・・・」

兵が俺に耳打ちした。その内容に思わず眉を顰めた。

「……本当に？」

兵「何度も確認しましたが、間違いありません」

「わかった。すぐに向かう。凧！俺に付いて来てくれ！」

丁度敵を掃討した凧に声をかけ、報告のあった場所へ向かう。目指すは逃げる姿が目撃されたと言う張三姉妹の元だ……

S I D E O U T

張三姉妹 S I D E

地「この辺りまで来れば……平気かな？」

天「もう声もだいぶ小さくなってるしね。でもみんなには悪い事しちゃったかな？」

人「難しいけど、正直こんな騒ぎになるとは思ってもいなかったわ。潮時でしょう」

大天幕からひっそりと抜け出した天和達は、戦場からだいぶ離れた所まで逃げていた。しかし置いて来た事に罪悪感を覚えているのか、人和は時々後ろを振り向いている。天和と地和も彼女と同様に不安げな顔をしていた。

地「け、けどさ！これで私達も自由の身よね！お風呂も入り放題よ」

人「・・・手持ちのお金は一切無いけどね」

地「う・・・」

人和の一言に声を詰まらせる地和。

天「お金はまた稼げば良いよ。初めからやり直すんだから」

地「そ、そうよ！3人でまた旅をして、楽しく歌って過ごしましょう！」

人「そして、大陸で一番の・・・」

？「・・・盛り上がったところに水を差すようで悪い気がするな」

？「ですが、このままでは話が進みません」

話が盛り上がる三人の前に二人の男女が立ち塞がった。一人は端正な顔つきで、輝く服を身にまとっている男。もう一人は眼光鋭い傷

だらけの女。

共通しているのは銀色の髪。そして、こちらを襲う凄まじい威圧感。

三姉妹の顔が恐怖に歪み、その場で固まった。あまりの恐怖に体を震わせる。

男「君達が張三姉妹・・・で合ってるかな？」

女「盛り上がっているところ悪いが、大人しくしてもらおうか」

男が優しく、女が睨みながら告げる。

人「くっ！こんな所にまで追手が！」

天「どうしよう？護衛の人達は居ないよ」

地「うう・・・まだやりたい事がたくさんあるのに・・・」

男「いや、殺すつもりは無いから。ただ、大人しくついて来てもらうと助かる」

人「・・・断れば？」

男「うゝん・・・俺としてはあまり手荒な事はしたくないんだが・

・・・」

女「師匠、私にお任せ下さい・・・私には無手の心得があるからな。あなた達を無傷で捕まえる事は可能だ。心配せずとも手加減はする」

女が拳を握りしめ、笑顔で告げる。そんな彼女に、師匠と呼ばれた男は苦笑いを浮かべ、三姉妹はさらなる恐怖を感じた。

黄A「待てテメエ等！俺達の張宝ちゃんに何をしようとしてやがんだ！..！」

その時、慌てて駆け付けてきた数人の人影があった。

黄B「張角様！ここは俺達に任せて、早く逃げて下さい！..！」

黄C「張梁ちゃんの可愛い顔には、指1本たりとも触れさせはしねえぞ！..！」

剣を構えた黄巾党の兵が、天和達を守るように立ち塞がった。

天「み、みんな・・・」

地「どうして・・・」

人「私達・・・あなた達を見捨てて・・・」

黄A「俺達は張宝ちゃん達の歌に救われたんだ!!」

黄B「だから今度は、俺達が張角様達をお守りします!!」

黄C「さあ来やがれ!張梁ちゃん達を守るためならこの命、惜しくはねえ!!」

啞然とする天和達に笑いながら答える兵達。

女「逃げた主を庇うか・・・見上げたものだな」

男「きつと、最初はこの人達みたいに、純粹に歌に惹かれた人達の集まりだったんだろうな」

天「(そうだ、最初はただ歌を聞いてくれるだけで嬉しかった)」

地「(いつからだろう・・・勝手に略奪を繰り返す集団になったのは・・・)」

人「(いつからだろう・・・あの時の気持ちを忘れてしまったのは・・・)」

男「慕われてるな」

男が三人を見つめる。

男「呷……」

女「ええ、わかっています」

男「あなた達の漢気に敬意を表して、本気で行かせてもらいます」

男が刀を構え、女が拳を握る。そして

男「はあああああ!!」

女「せやああああ!!」

男が刀を振り、女の手から何かが放たれた。一瞬で地に伏せる兵達。

黄A・B・C「う……うう……」

呻き声をあげる兵達。どうやら死んではないようだ。

男「殺すにはもったいない人達だからな」

男が呟く。

地「な、何よあれ！いきなり光って、何か吹っ飛んだわよ！？意味判んない！？」

天「あのお兄さんも早すぎて何も見えなかったよ」

人「・・・諦めましょう、姉さん。あんなの喰らったら、絶対に無事じゃ済まないわ・・・」

怯える天和と地和の前に人和が進み出た。

人「・・・いきなり殺したりはしないのよね？」

身体がガタガタと震えている。人和も本当は怖いのだ。そんな彼女に手を突き出す男。

人「ッ・・・！！！」

何かされるのではないかと思い、目を閉じる人和。

男「怖がらせてすまない。約束する、悪いようにはしないよ」

そんな彼女に優しく声をかけながら、頭をなでる男。

人「あつ・・・」

予想外の行動に戸惑う人和だったが、いつしか、男の手の心地よさに身を任せていた。

男「落ち着いたかい？」

人「は、はい・・・」

男「それで・・・どうかな？」

人「わかりました。投降します」

男「そうか、ありがとう」

そう言っつて微笑む男。

人「ツ・・・」

それを見て、顔を赤らめる人和。

男「どうしたんだ？顔が赤いけど？」

人「い、いえ！何でもありません！！」

男「ならいいけど。それじゃ凧、三人を縛ってくれ」

女「……」

男「凧？」

女「は、はい！！何ですか師匠！？」

羨ましそうに人和を見ていた女だったが、男の言葉に慌てて正気を取り戻す。

男「いや、三人を縛ってくれないか？」

女「わ、わかりました」

地「ちょ、ちょっと！縛るってどういう事！？」

地和が声をあげる。

男「一応、君達は捕虜として扱われるからな。流石に自由にしておくわけにはいかないんだ。形だけでも捕縛したようにしないと」

冷静に答える男。

地「だからって！」

人「落ち着いて姉さん。この人の言う通りよ」

納得いかない様子の姉を抑える人和。

地「何よ！そう言うあんただって、ちょっと優しくされたからって
気を許し過ぎよ！！」

人「わ、私は別に・・・」

地「頭なでられて顔を赤くしてた癖によく言うわよ」

人「う・・・」

地「ね？天和姉さんもそう思うでしょ！？」

地和が天和に同意を求めるが

天「ねえねえお兄さん。私もなでて欲しいな〜」

まるで友達に話しかけるように男に声をかける姉の姿を見て肩を落

とす。

地「ちょっと！姉さんまで何やってんのよ!？」

天「だって、人和ちゃんが羨ましいんだもん。お兄さんカッコいいし、仲良くしたいな」と思ってる・・・」

地「も～～～～！！何なのよ～～～～！！！！」

こうして、黄巾党首領である張三姉妹は捕縛され、長きにわたった黄巾の乱は幕を閉じた。

第二十八話 全てを失ってもついて来てくれるのが本当の仲間だ（後書き）

作「黄巾の乱終了」

一「早いな。一話で終了か」

作「長々やってもしょうがないからな」

一「戦闘描写ほぼ皆無だったな」

作「それよりフラグ立ての方が大事だからな。最後に人和フラグが立っただし、天和フラグも立ちかけたしな」

一「最近ナデポとニコポの意味を知ったんだが」

作「まさにお前にピッタリの言葉だよな」

一「あまりいい言葉じゃ無いけどな」

作「え？そうなのか？」

一「詳しく調べてみるんだな」

作「了解」

一「ちなみに、華琳の号令、あれ考えたのお前じゃないだろ？」

作「な、なんでそう思うんだ？」

「お前の足りない頭であんな立派な文句が思い浮かぶわけがない」

作「く、くそっ……事実だから言い返せない！」

第二十九話 再会の為の別れって大切です（前書き）

魏編終了・・・長かったな。張三姉妹の名前が紛らわしくてこんがらがってきた。

第二十九話 再会の為の別れって大切です

華「……で、貴方達が張三姉妹？」

三人を連れて本陣に戻ると、開口一番華琳が尋ねた。

張宝「そうよ！何か悪いの！！」

華「……季衣、間違い無いかしら？」

季「はい。僕が見たのと同じ人達です」

季衣の言葉を聞いた張角が笑顔を浮かべた。

張角「私達の歌、聞いてくれたんだ！！どうだった？」

季「うん！すっごく上手だったよ！」

出会ってまだ間も無いと言うのに、季衣と張角は意気投合していたようだった。

「……どうしてこんな事をしたんだ？君達はただの旅芸人だったんだろっ。」

張梁「それは・・・色々あって・・・」

色々・・・か。

—「少なくとも君達の行動で、大勢の人が傷つき、命を失った人もいる。・・・それはわかるよな？」

張宝「それはみんなが勝手に・・・！」

—「しかし事実だ」

凧「師匠？」

俺の様子を怪訝に思ったのか凧が話しかけて来たが、応える余裕が無いくらい俺の中には感情が渦巻き、必要以上に彼女達を攻めていた。

—「（そうだ、この娘達に悪気は無い。わかってる・・・わかってるんだ・・・）」

頭では理解していても、感情が許さない。

—「その命を背負っていく覚悟が君にはあるのか？」

張角・張宝・張梁「……」

華「そこまでよ」

華琳の声に我に返る。

華「あなたらしくないわね一成。どうしたと言っの？」

一「……何でもない。少し……昔を思い出したただけだ」

過去の出来事と重ねてしまうとは、俺もまだまだ未熟だな。

華「色々と言ったわね……話してみなさい」

張宝「話したら斬る気でしょ！私達に討伐命令が下っているのは知っているんだから！」

華「それは話を聞いてから決める事よ……それから一つ、誤解しているようだけど」

張角「何よ!!」

華「貴方達の正体を知っているのは、恐らく私達だけよ」

張角・張宝・張梁「……えっ？」

華琳の一言に間の抜けた声を出す三人。

華「桂花、説明してあげなさい」

桂「はい」

華琳に言われ前に出る桂花。

桂「いい？貴方達、ここ最近私達の領を出ていなかったでしょ？」

張梁「それは、あれだけ搜索や国境の警備が厳しくなったら・・・出て行きたくても行けないわ」

桂「だから、張角の名前こそ知られているけど・・・他の諸侯の間では、正体不明のままよ」

張梁「？」

桂花の説明に釈然としないのか、張梁が首を傾げた。

一「捕まえた黄巾兵を尋問しても、君達の正体は誰も話さなかったんだ」

張角・張宝・張梁「「えっ!?!」」

華「大人気じゃない。あなた達」

華琳が笑う。

華「それにこの騒ぎに便乗した盗賊達は、そもそも張角の正体を知らないもの。そいつ等の出鱈目な証言が混乱に拍車を掛けて。確か・・・今の張角の想像図は」

桂「これを見てみなさい」

桂花が懐から張角の想像図が描かれた紙を取り出した。そこには身長3mはあるうかと言う髭を生やした凶暴そうな大男が描かれている。御丁寧に腕は8本、足が6本、頭に鋭利な角が3本、長い尻尾も生えていた。

張角「え〜!お姉ちゃんこんな怪物じゃないよお!」

張宝「いや、いくら名前に角があるからって、頭に角は無いでしょ、角は・・・」

華「理解した?・・・つまり貴方達の認識なんて、この程度と言う事よ」

張梁「・・・何が言いたいの?」

張梁が華琳を睨むように見つめた。

華「黙っていてあげても良い・・・と言っているのよ」

それに対し、意地の悪い笑みを浮かべながら答える華琳。

張梁「・・・どう言う事？」

華「あなた達の人を集める才覚は相当な物よ。それを私の為に使うと言うのなら・・・その命、生かしておいてあげても良いわ」

張梁「・・・目的は何？」

真意が読み切れないのか、さらに問い掛ける張梁。

華「私が大陸に覇を唱える為には、今の勢力では到底足りない。だからあなた達の力を使って兵を集めさせてもらおうわ」

張梁「その為に働けと・・・？」

華「ええ。活動に必要な資金は出してあげる。活動地域は・・・そうね、私の領内なら自由に動いて構わないわ。通行証も出しましょ

う

張宝「ちょ、ちょっと待ってよ!!それじゃあ私達の好きな所には行けないって事になるじゃない!そんなの冗談じゃない・・・」

反論しようとした張宝の口を、張梁が慌てて塞いだ。そして、再び華琳と向き合う。

張梁「曹操・・・これからあなたは自分の領土を広げていくのよね?」

華「それがどうかした?もしかしてそれだけじゃ不満なのかしら?」

張梁「いいえ・・・そこは私達でも旅が出来る、安全な場所になるの?」

華「当たり前でしょう。平和にならないのなら、わざわざ領土を広げたりしないわ」

張梁「そう・・・」

華琳の自信に満ち溢れた声を聞き、張梁はしばらく考えた後、ゆっくりと頷いた。

張梁「・・・その条件を飲むわ。その代わり、私達3人の命を助けてくれる事が前提よ」

華「わかってるわ。じゃあ、決まりね」

華琳が満足そうに頷いた。

張宝「も～～～！！何勝手に話を進めてるのよ！！天和姉さん！このままでいいの！？」

納得できないのか、張宝が姉に助けを求める・・・が

張角「え～、だってお姉ちゃん、難しい話はよく分からないもん」

返って来たのは何とも呑気な答えだった。

張宝「ぐぐぐぐぐ・・・！！」

張宝は明らかに憤っていた。

「（姉に振り回される妹・・・か）」

もう一つの姉妹の様子を見る。

先程まで張三姉妹のやりとりを見ていた秋蘭は春蘭に視線を移していた。

秋「・・・はあ」

春「ど、どうした秋蘭！？何故私を見て溜め息をつく！？」

秋「いや・・・何でも無いさ」

—「（・・・やっぱり似てるな）」

その間も張宝と張梁の話し合いは続いていた。

張梁「ちい姉さん、元々選択肢は無いのよ。ここで断れば間違い無く殺されるわ」

張角「た、確かにそうだけどさ・・・」

張梁「生かしてくれる上に、活動資金までくれて、自由に歌って良い・・・破格の条件よ」

張宝「・・・でもさ、歌って良いのはコイツの領地だけなんじゃない？」

張宝が不貞腐れた様に呟いた。

張梁「これから曹操が勝手に広げてくれるわ。それに最終的には、大陸全土が曹操の物になるのなら、安全になるまで曹操の為に歌ってあげても良いでしょう?」

張宝に説明しながら華琳の方を向く。

張梁「・・・そう言う考えで良いのよね?曹操?」

華「ええ、あなた達は私の広げた領地で好きに歌ってくれば良いわ」

張角「よ、用が済んだからって、殺したりしないわよね?」

張宝が不安そうに尋ねる。それに対し、微笑みながら華琳は答えた。

華「用済みになったら支援を打ち切るだけ。でもその頃には、大陸一の歌い手になっていられるでしょう?・・・せいぜい私の国を賑やかにしてちょうだい」

一「(明らかに挑発してるな・・・)」

華琳の挑発に張宝が指を指しながら言い放った。

張宝「・・・面白いじゃない。それは張三姉妹に対する挑戦として受け取れば良いのね？」

華「そう取るのなら、好きに取れば良いわ。私があなた達に求めるのは結果だからね」

張宝「よし！なら決まりだわ！！」

闘志を燃やす張宝。そんな中、話について行けてなかった張角が思わずと尋ねる。

張角「え〜つと・・・結局私達は、助かるって事で良いのかなあ？」

張宝「そうよ姉さん！私達、また大陸中を旅して回れるのよ！！」

張角「本当！？やったあ！またみんなで歌って旅が出来るんだね」

張宝「よし！あんな太平・・・何とかって言う本に頼らず、自分達の力で・・・！」

「（・・・大丈夫だ、この娘達はあいつらとは違う・・・）」

あどけなく笑う彼女達の様子を見て、俺はそんな事を考えていた。

華「・・・ちよつと待つて。今あなた、太平何とかって・・・！」

華琳が顔色を変え、張宝に詰め寄った。

張梁「太平要術？」

華「それよ！あなた達、それをどうしたの！？」

—「何だそれは？」

秋「以前、華琳様が探しておられた物だ」

秋蘭が説明してくれた。

張角「え〜〜つと・・・」

張角曰く、ある日見知らぬ男に貰い受け、それに記された方法を使った結果、あの様な事になったらしい。

その事を聞いた華琳が深い溜め息をついた後、本の所在を彼女達に尋ねた。

張梁「私達の居た陣地に置いてある筈だけど・・・恐らくもう灰になっっている筈よ。それがどうしたの？」

華「そう・・・」

春「華琳様、私が探して参りましょうか？」

華「不要よ、それより、誰かあの陣にもう1度火を。また悪用されては堪らないわ」

秋「分かりました。私が引き受けましょう」

一「いいのか？俺はよくわからないが、ずっと探していたんだろ？」

華「構わないわ。それがあの本のお天命だったのでしょう・・・」

一「天命か・・・華琳らしいな」

こうして張三姉妹の処遇も決まり、華琳達は悠々と帰還したのだった。ちなみに名前が知られたら大変な事になると言う事で、彼女達は真名で呼ばれる事になった。

一「まあ・・・元々真名で呼ばれてたんだし・・・いいよな」

華「何か言った一成？」

一「いや、何でも無い」

城に戻った俺達は全員玉座の間に集まった。

華「まずはみんなご苦労様。あなた達のおかげで黄巾党を壊滅させる事ができたわ」

全員「はっ!」

華「今日やるべきだった仕事や軍議は後日に回します。今日はゆっくり休みなさい。これは命令よ」

全員「ありがとうございます」

「「「っいいいか華琳？」

華「あら、何かしら?」

「「黄巾党を潰した事だし、そろそろ俺は失礼する」

全員「・・・えっ?」

俺がそう言った瞬間、全員が驚きの顔で俺を見た。

「「・・・どうした?」

春「ど、どつ言つ事だ秋月!？」

一「俺がここで世話になるのは黄巾党を討伐するまで・・・そつだつたよな華琳？」

華「・・・ええ」

一「俺にはやるべき事がある。目的を果たした以上、もうここにはいられない」

孫策に会い、月を助ける為にも。

春「し、しかし!?!」

華「いいのよ春蘭」

春「華琳様・・・」

華「約束を違える様な恥知らずな真似は出来ない。それに、一成は元々客将。私の部下じゃないわ」

春「・・・」

華「出発は何時にするの？」

一「早ければ明日にでも」

華「そう・・・なら戻っていいわ。色々準備もある事でしょうし・・・」

一「わかった。失礼する」

俺は玉座の間を後にした・・・

S I D E O U T

玉座の間にて・・・

全員「・・・」

一成がいなくなった後の間は沈黙に包まれていた。

春「秋月め・・・このまま華琳様の下で戦えばよかったものを・・・」

そんな中、春蘭が沈黙を破り、口を開いた。

秋「何だ姉者、秋月と一緒にいたかったのか？」

春「なつ！？馬鹿を言うな！！私はただ、あれほどの武を持つ者ならきつと華琳様の霸道の役に立つと思つて……！！！」

秋「ふふつ、そう言う事にしておこつか」

春「そ、そう言う秋蘭はどうなのだ？随分仲が良さそうだったが……」

秋「私か？ああ……私は秋月の事を気にしていたよ」

春「何つ！？」

季「僕も兄ちゃんの事が好きです……もう会えないのかな？」

凧「師匠……」

沙「沙和も一成さんの事が好きなの」

真「せやなあ、ウチらがここにいられるのも、元々は兄さんのおかげやしな」

春「お、お前達まで……」

桂「ふんつ、あんた達何言つてんのよ。むしろ、ケダモノがいなくなる事に喜んだらどうなの？」

季「え、でも桂花様も兄ちゃんと仲がよさそうじゃないですか」

季衣の一言に桂花が食ってかかる。

桂「あんた目がおかしいんじゃないの！！何で私があんなケダモノと・・・」

秋「しかし、以前に比べて随分態度が柔らかくなっているではないか」

春「そう言えば・・・真名を呼ばれても怒らなくなったな」

桂「うるさいわよ脳筋！！」

春「何だと！！」

華「静まりなさい・・・」

先程から黙っていた華琳が口を開く。

華「あなた達、何を勘違いしているのかわからないけど、私は一成を諦めたわけじゃないわよ」

全員「え・・・？」

華「彼の言つやるべき事が何なのかわからないけど、恐らく・・・近い内に私達の前に立ち塞がるはずよ」

秋「それは・・・秋月が敵になると言う事でしょうか？」

華「ええ、間違いなくね」

断言する華琳に全員が息をのむ。

華「ならば話は簡単。堂々と戦い、打ち倒し、下せばいい」

春「しかし、あやつは相当な武を持っています」

華「あら、私の信頼する将達はたった一人の男に臆するのかしら？」

不敵に笑う華琳。

春「……いえ、華琳様の為ならば……秋月だろっが何だろっが、私が叩き斬ってやります!!」

秋「姉者、斬っては駄目だ」

春「むっ、そうか。捕まえなくてはいけなかったな」

季「兄ちゃんを捕まえるのか……面白そうだね」

沙「一成さんと戦うなんて……勝てっこないの……」

真「こっとなったら風、あんただけが頼りや!!」

凧「わ、私が!？」

沙「そうなの!一成さんに特訓を受けた凧ちゃんなら……!」

凧「な、何故それを……」

真「ふっふっふっ……ウチ等が知らんかったとでも思ったんか？」

沙「最近の凧ちゃんの行動はばっちり押さえてるの……」

真「兄さんと二人つきりで、随分楽しそうにしとったなあ」

凧「……/」

沙「あ……、赤くなったの……」

桂「華琳様……何であんなケダモノなんか……」

華「あら、桂花は嫌なの？」

桂「嫌です。ですが……華琳様がお望みになられるのなら、あらゆる策を使っても秋月を捕えてみせます」

全員が一成を手に入れる為、闘志を燃やしていた……若干違う者もいたが……

華「私は曹孟徳。欲しい物は必ず手に入れる・・・楽しみに待っていなさい」

IN SIDE

ゾクッ！

ー「ッ!？」

天「どうしたんですか？お兄さん？」

ー「いや、何でもないよ」

玉座の間を後にした俺は、買い物をするために街に出た。そこで偶然張三姉妹に出会い、今は一緒にご飯を食べている。

何故か俺の奢りで・・・

地「ちよつと姉さん！それちいのだよ！」

天「良いでしょ？お姉ちゃんにも分けてよ」

人「2人とも、太らないように注意してよね」

—「・・・凄いな」

あの細い体のどこにあんなに食べ物が入るんだ？

天「すみませ〜ん、これのおかわりくださ〜い！」

地「これもお願いね」

店員「かしこまりました」

—「まだ食うのか・・・」

金・・・大丈夫だろうか？

人「あの・・・すみません」

—「いや、気にしないで。君も何か食べたかったら注文していいからね」

人「あ、ありがとうございます・・・／＼」

地「さつすが天の御遣い！太っ腹だね！」

天「お兄さん優しいね。ますます気に入っちゃったよ〜〜」

—「・・・君達は少し遠慮してくれ・・・」

人和と話していた間にさらに注文していた二人に苦笑いを浮かべる。俺が天の御使いだと言う事は既に説明済みだ。ついでにアイドルとライブについても話した。

人「あの、一成さん・・・どうして曹操の元にいたんですか？」

—「ん？」

人「いえ、天の御使いともあろう人が他人の下で働くとは思えなかったので・・・」

—「華琳達とは偶然出会ってな。黄巾党を潰すまでは客将として世話になってたんだよ」

人「そうだったんですか・・・」

—「俺としては予想外の出来事だったんだがな」

天「でも、おかげで私達と出会えたんだよね〜？」

地「そうよ！ちいところして一緒に食事するなんて、黄巾の兵にもやらせたことなかったんだから、光栄に思いなさいよ！」

人「姉さん・・・」

—「・・・ぶっ」

地和の言葉に思わず吹き出してしまった。

地「ちょっと、何がおかしいのよ？」

一「いや、すまない。そうだな・・・こんな美人三人と一緒に食事出来るなんて、俺は幸せ者だ」

笑いながら答える。

天・地・人「コッツ!？」

すると、何故か三人の顔が赤くなった。

地「と、当然ね・・・(よ、よく見れば結構格好いいじゃない／＼)
」

人「あ、ありがとうございます・・・(な、なんでこんなにドキドキするの・・・／＼)」

天「・・・うん、決めた！」

突然天和が俺に腕を絡めて来た。

—「天和？」

天「お兄さんは今から私の彼氏にけつて~~~~い!!」

—「・・・なして？」

天「だつて~~~~、お兄さん格好いいし、あんな事言われたら好きになるしかないじゃない」

地・人「ダメツ!!」

地和が絡めた腕を解き、人和が俺を守る様に立った。

天「え~~~~なんで~~~~?もしかして二人もお兄さんのことが？」

地「そ、そんなわけないじゃない!!」

天「じゃあいいじゃない~~~~い」

人「一成さんの気持ちを無視したらダメでしょ!!」

天「お兄さん、私が彼女じゃ嫌？」

俺を見つめる天和。ご丁寧に瞳を潤ませている。

「……すまないが、君の気持ちに応える事は出来ない」

天「え〜、どうして〜?」

「俺は明日この街を発つ。だから、君と一緒にはいられない」

天「え?」

俺の答えに固まる天和。

地「ど、どうして?」

「俺にはやらなければならない事があるんだ・・・」

人「そんな・・・」

「だから最後に、こうして君達と話せて嬉しかったよ」

天「そんな〜!! せっかく運命の人に出会えたと思ったのに〜
〜!!」

人「もう会えないんですか?」

人和が顔を伏せる。

—「いや、そうでもないぞ」

人「え？」

—「だって、君達は今からも歌い続けるんだろ？なら公演中に何処かで出会うかもしれないじゃないか」

人「あ・・・」

—「もし近くで公演中だったら必ず応援に行かせてもらうよ・・・差し入れを持ってね」

人「そう・・・ですね」

三人の顔に元気が戻る。

—「ああ、その時は聞かせてくれよ？大陸—を指す君達の歌を・・・」

天「もっちろん」

地「精々期待してなさい。最高の歌を聞かせてやるんだから！！」

人「私・・・待ってます。—成さんが応援に来てくれるのを・・・」

—「ああ、約束だ！！」

その時の三人の笑顔は、今までの中で一番のものだった……

翌日……

—「さて、行くか」

俺は城を後にしようとした。

華「待ちなさい一成」

が、華琳を含む全員に止められてしまった。

—「あれ、みんな……どうしたんだ？」

季「お別れを言いに来たんだよ」

—「お別れ？」

華「あなたには助けられた。そんな人物を黙って行かせるなんて失礼な事出来るわけないでしょ？」

—「そうか・・・」

春「秋月、お前には世話になった。菓子の方は本当に感謝している」

—「春蘭・・・あまり秋蘭に迷惑をかけるなよ？」

秋「秋月、お前には姉者の事で尽力してもらった。私からも礼を言わせてもらう」

—「秋蘭・・・春蘭を抑えられるのは君しかいないからな・・・頑張ってくれ」

季「ばいばい、兄ちゃん！僕の事忘れないでね？」

—「季衣・・・ああ、もちろんだ。俺の事も忘れないでくれよ？」

桂「ふん・・・さっさと行きなさいよケダモノ」

—「桂花・・・」

桂「・・・ま、まあ、無事くらいは祈っててあげるわ」

—「ありがとう・・・」

桂「・・・ふん」

沙「一成さん・・・沙和達の為に色々してくれてありがとうなの」

一「沙和・・・警備隊の仕事、頑張ってくれよ？」

真「兄さん、おおきにな。結局兄さんの武器については何も分からなかったけど・・・ウチは諦めへんからな」

一「真桜・・・君のカラクリはきつと華琳の力になる。しっかりな・・・」

凧「師匠・・・」

一「凧・・・」

凧「師匠・・・本当にありがとうございました。あなたから教わった教えを忘れず、これからも尽力して参ります」

一「凧・・・君ならこれからもたくさんの人を助けられる。その力・・・大事にするんだぞ？」

凧「はいっ！師匠！！」

華「ようやく私の番が来たわね」

—「華琳……」

華「一成、正直言って私はあなたを手放したくない」

—「……すまない」

華「いいのよ別に、ただ……」

華琳の目が俺を捉える。

華「覚悟していなさい……私が言いたいのはそれだけよ」

—「？」

華「ふふっ、いずれわかるわ」

よくわからんが、これで全員とあいさつを交わせたな。

—「みんな、今までありがとう。短い間だったけど、みんなと過ごせて楽しかった。いつになるかわからないけど、必ずまた会おうな」

俺はハイロウを展開した。

—「それじゃ……またな!」

そのまま空に飛び上がる。街の上を飛びながら、彼女達を探す。

「……いた」

俺の目線の先には天和達がいた。どうやらこっちにも気付いた様で、三人とも手を振ってくれている。

「またな、三人とも。歌……楽しみにしてるよ」

手を振り返し、俺はさらに高度をあげた。目の前には広大な大地が広がっている。

「よし……行くか!!」

こうして、俺は様々な出会いをした魏を後にする。

次の目的地は孫策が治める呉……

「さて、今度はどうなることやら」

俺の胸には期待と不安が渦巻いていた・・・

第二十九話 再会の為の別れって大切です（後書き）

作「久々の更新だ！」

一「だな」

作「いや〜なのは小説が盛り上がってきたから、最近あっちにかかりつきりだったからな〜」

一「おかげで無印編は完結したたる」

作「おかげ様でな。つゝわけでこっちの話を進めたわけだ」

一「やつと呉か・・・彼女達苦手なんだよな」

作「何で？」

一「いや、あの服装は・・・何とかならんのか？」

作「お前・・・全国のユーザーさんを敵に回す気か？」

一「？」

第三十話 見るからに怪しい物には手を出さない方がいい(前書き)

さて、これからどうすっかな・・・

第三十話 見るからに怪しい物には手を出さない方がいい

魏を出発して一週間余り。

空を飛び、偶に見かける街で休憩を繰り返しながらひたすら呉を指す。

—「以前立ち寄った街の人の話によると、そろそろ見えて来る頃だ
と思うけど・・・」

グキョルルルルル!!

その時、俺の腹の虫が盛大な音をあげた。

—「・・・腹減ったな」

ただでさえハイロウの展開には体力を使うのに、こつも連日飛び続けていたらいくらなんでも・・・

—「まずい・・・意識が・・・」

あまりの空腹に意識を失った俺は、そのまま地面に落下していった。
・
・

S I D E O U T

孫策 S I D E

孫「はあ・・・何か面白い事でもないかしら・・・」

気分転換の為に遠乗りに出る。全く・・・袁術からの無茶な要求の
所為でイライラが募るばかりだ。

？「策殿。あまり城から離れてはならぬぞ」

孫「わかってるわよ、祭・・・」

そんな私を祭・・・黄蓋がたしなめる。

孫「でもね〜、帰っても袁術の言う事聞かなくちゃならないし・・・
・いつその事逃げ出しちゃおうかしら？」

祭「策殿・・・」

孫「やあね〜！冗談に決まってるでしょ」

今は大人しく従っているけど、いつか必ず独立してやるんだから。

ドゴオオオオオオオオン！！！！

孫・祭「「ッ!?!」」

その時、凄まじい轟音が辺りに響き渡った。

孫「・・・何かしら?」

私の勘が告げている。何か面白そうな事が起こっていると。

孫「行くしかないわよね」

祭「策殿!?!?・・・ええい!仕方ない方じゃ!?!」

祭が慌てて私の後について来た。

孫「・・・何コレ？」

音のした場所にたどり着いた私が見たのは、地面に深々と開いた大きな穴。そして

孫「足・・・？」

その中心に生えている人間？の足だった。

孫「どうやってたらこんな状況になるのかしら？」

上半身は完全に地面にめり込んでいた。

孫「ねえ・・・面白そうだから拾っていい？」

祭「駄目じゃ」

孫「お願・・・」

祭「駄目じゃ」

孫「え〜〜いいじゃない！祭だって興味あるでしょ？」

とりあえず足をつついてみると

ピクン……

……見事に反応した。

祭「まあ……気になると言えば気になるが……」

孫「でしょう?」

祭「しかし……公謹のヤツが何と言うかの……」

孫「大丈夫よ。冥淋甘いんだから。それに……」

改めて生えている足を見る。

孫「見れば見るほど気になるでしょ?」

祭「……確かに」

祭も足に近づぐ。

孫「っつかし、こんな状態で生きてるなんて凄いわね……よいし

よっ……」

とりあえず引っこ抜く事にした。

孫「うう〜ん！……抜けないわね。祭、あなたも手伝って」

祭「仕方ないの」

祭と一緒にもう一度力を込める。

孫「せえ……の……!!」

ズボツ!!

孫「あら、いい男」

地面から現れたのは、端正な男の顔だった。年は……私と同じくらいかしら？

祭「ふむ、銀髪か。それに、この見慣れぬ煌びやかな服装……もしゃ」

孫「あら祭。何か知ってるの？」

祭「・・・いや、憶測でものを言うべきではないな」

孫「さて、拾った事だし・・・さっそく連れて帰りましょう」

祭「・・・本当に大丈夫かの？」

孫「だ〜いじょうぶ。この人多分いい人だから」

祭「それは・・・勘かの？」

孫「ええ」

色々話を聞かなくちゃね・・・主にさっきの状況について。

祭「公謹にはどう説明するつもりじゃ？」

孫「普通に拾ったって言えばいいのよ」

祭「・・・はあ」

冥琳もきつとこの人を気に入ると思う・・・これも勘だけどね。

城に向かって馬を進める。ちなみに彼は祭が運んでくれていた。

孫「（この人との出会いは私の・・・いや、呉の未来に大きく影響するものになる・・・）」

そんな確信めいた予感があった。

孫「ふふっ、遠乗りしてよかった。これから面白くなりそうね・・・」

祭「何か言ったか策殿？」

孫「何でもないわ」

祭「？」

孫「ただいま〜」

城に戻った私達を早速冥琳が出迎えてくれた。

冥「雪蓮！！また私に黙って勝手に遠乗りなどして・・・！！」

孫「いいじゃない、ちょっとくらいい」

冥「良くない！お前は冥の王なのだぞ！！もしもの事があつたらぶ
つする！！」

孫「ゴメンゴメン。お土産があるからそれで許してよ」

冥「土産だと・・・？」

孫「祭、お願い」

祭「これじゃ」

そう言つて肩から男を下ろす。

冥「・・・それは何？」

冥琳が顔をヒクつかせながら尋ねて来た。

孫「拾つた」

冥「・・・話を聞かせてもらおうか？」

青筋を浮かせる冥琳。

孫「ちよっ！？落ち着いてよ！！ちゃんと説明するから！！」

何とか宥めた後、私は事情を説明した。

孫「……と言っわけなの」

冥「何を考えているのだ……素性もわからぬ者を連れて来るなど。祭殿、あなたがいながら何故この様な事になったのですか？」

祭「わ、僕は止めたのじゃぞ！じゃが……策殿があまりにも必死に言うからつい……」

孫「何よ～～祭だってノリノリだったじゃな～～い」

祭「そ、それは……」

冥「全く……私に相談もせずに勝手に決めて……」

何故か寂しそうな冥琳。

冥「べ、別に……呼んで欲しかったわけではないぞ！」

孫「（……刺さつてるところ見たかったのかしら？）」

冥「それで……この男はどうするの？」

孫「話が聞きたいから目覚めるまでここに置いておくわ」

冥「・・・わかった。ならば部屋を用意しよう」

孫「さすが冥琳！話がわかるわ」

冥「今までの経験上、もう何を言っても無駄だってわかっているからな」

呆れた様な顔をする冥琳。今までって・・・何かあったかしら？

孫「それじゃ、早速彼を・・・」

冥「残念だが雪蓮、袁術がお呼びだ」

その言葉に一気に気分が滅入る。

孫「え〜今から〜？もう、空気読みなさいよね」

冥「と言うわけで祭殿。その男を部屋まで運んでください。私は雪蓮について行かなければなりませんので」

祭「やれやれ、仕方ないのお」

孫「お願いね祭・・・襲わないのよ？」

祭「ふっ、それはどうかの？」

お互い笑った後、私は袁術の元へ向かった。さて……今度はどんな無理難題を押し付けられることやら……

孫策SIDE OUT

祭SIDE

祭「さて、いつまでもここにいっても仕方ないの」

男を肩に担いで部屋に向かう。細身の割には結構な重さだった。

祭「ふむ……相当鍛えておるな」

体つきでわかる。この男……相当な場数を踏んでおる。下手したらこの儂よりも……

祭「一体何者じゃ？」

そんな事を考えていると、目的の部屋に着いた。

扉を開き寝台に向かう。

祭「よ……っと……」

ドサッ

男を寝台に寝かせる。

男「……」

祭「全く……呑気に寝おってからに……」

男は相変わらず眠っていた。あれだけの事があったと言っのに……

祭「大物なのか……それとも馬鹿なのか……」

男「う……ううん……」

男が動き、服がはだけて胸元が露わになった。

祭「……」

その様子を、思わず食い入る様に見つめてしまった。

祭「……はっ！儂は一体何を……」

この男を見ていると久しく忘れていた自分の『女』が疼くのがわかる。

祭「やれやれ、これでは本当に襲ってしまいそうじゃ」

男の服を直した後部屋を後にした。

祭「策殿。儂等ほとんどでもない男を拾ってしまったかもしれんぞ……」

何せ……この儂をその気にさせてしまったのじゃから……

祭SIDE OUT

INSIDE

—「…………ん」

意識が覚醒してきた。

—「（俺は一体……？）」

段々記憶が戻って来た。

—「（確か……飛んでる最中に意識を失って、それから……）」

多分落下して地面に激突したんだろうな。

—「（しかし……地面にしては随分柔らかい様な……）」

完全に覚醒し目を開けてみる。

—「…………どこだ？」

俺は見知らぬ部屋のベッドで横になっていた。

—「誰かが助けに来てくれたのか？」

ガチャ

？「おお、目覚めたか」

その時、扉を開け、一人の女性が部屋に入って来た。

—「・・・神奈・・・」

その女性は、以前のパートナーであった神奈に瓜二つだった。

？「神奈？ 儂の名は黄蓋。人違いではないか？」

女性は黄蓋と名乗った。

—「すみません。あまりにも知人に似ていましたから・・・あなたが俺をここに？」

黄「いや、正確には策殿・・・儂がお仕えしている方がお主をここに連れて来たのじゃ」

—「そうですね。その人に礼を言いたいのですが・・・」

黄「心配するな。お主に聞きたい事があると言っておったからな、その時に言えばよい」

—「わかりました」

黄「今呼んで来るから待っておれ」

そう言つて黄蓋さんは部屋を後にした。

—「もしかして・・・ここは呉か？」

なんともまあ・・・情けない形でやつて来たものだな。

黄「待たせたな。連れて来たぞ」

黄蓋さんが再び部屋にやつて来た。その後ろには二人の女性が立っている。

女性A「目が覚めたみたいね」

桃色の髪をしたかなりの覇気を持った女性が話しかけて来た。

—「ああ、おかげさまでな。あなたは・・・？」

女性A「人にもものを探ねる時はまず自分からじゃないの？」

なんか前にも言われた様な・・・

—「すまない。俺の名前は秋月 一成だ」

女性A「そう。私は孫策。呉の王よ。そしてこっちが・・・」

女性B「周瑜だ・・・」

周瑜は俺を睨むように見つめている。孫策も笑ってはいたが、瞳は鋭く、俺を量っているようだった。

孫「さて・・・あなたには聞きたい事があるわ」

—「何だ？」

—「一体何を聞かれることやら・・・」

孫「まず……どうやったたらあんな面白い刺さり方が出来るの？」

—「……はい？」

刺さる？

周「聞くところはそこじゃないだろ！！」

孫「何言ってるのよ！あんな気になる事そのまま流せるわけないじゃない！」

—「すまない……意味がわからないんだが？」

孫「実はね……」

俺は孫策から事情を聞いた。何でも、遠乗りの最中に轟音を聞き、向かってみると俺が地面に突き刺さっていたらしい。

—「……まさかリアル犬神家を体験するとはな……」

周「りあるいぬがみけ？」

黄「どう言う意味じゃ？」

—「……地面に突き刺さる事って意味にしておいてください」

孫「それで……どうしてそうなったの？」

理由は……やっぱりアレだよなあ。

—「空を飛んでいる最中に空腹のあまり気絶してしまっただけ。そのまま地面に落下した時に衝撃が強すぎて突き刺さったんだろうな」

孫・周・黄「……」「……」

俺がそう言つと、三人は啞然とした顔をした。

孫「……聞き間違いかしら？私、今あり得ない事を聞いた気がするのだけれど」

周「奇遇だな……私もだ」

黄「お主……大丈夫か？頭でも打つたのか？」

—「（あつ、そう言えば彼女達にはまだ見せていなかったんだっかな）」

落下した後に見つけたと言つ事は、俺が空を飛んでいる所は見えていないわけだしな。

—「聞き間違いじゃないよ。ほらっ」

ハイロウを展開する。

ブワッ

孫・周・黄「っっなっ!?!?!」

—「この翼で飛んできたんだけど・・・信じてくれたかな？」

黄「妖術か!?!」

周「離れる伯符!?!」

黄蓋さんが驚き、周瑜が孫策を守る様に立ち塞がった。

—「妖術じゃない。これが俺の力なんだよ・・・」

周「信じられるか!?!」

—「うっん・・・」

どうしたら信じてもらえるんだ？

孫「ねえ・・・あなたもしかして、天の御遣いなんて呼ばれてたりする?」

そんな中、孫策が口を開く。

—「ああ、そんな風に呼ばれることもある」

孫「やっぱり」

にこやかに笑い、俺のハイロウに触れる孫策。

孫「へ〜〜、本物の翼みたいね〜」

—「本物なんだが・・・」

孫「うそっ!?!?・・・あなた人間?」

—「一応は・・・な」

周「伯符!」

孫「そんなに怒鳴らなくても聞こえるわよ」

周「不用意に近づくな!!何をしてくれるかわからんぞ!!」

孫「大丈夫よ。彼が本物の御使い君なら私達に危害を加えたりしないわ」

周「だからって……！」

黄「公謹よ、策殿が言うなら大丈夫だろう」

周「祭殿まで……」

孫「それで、噂の御使い君はなんであんな所にいたのかしら？」

—「呉に向かおうとしていたんだが……まさかこんな形で来る事になるとは思わなかったよ」

孫「あら、呉に何の用？」

—「見聞を広めるために旅をしているんだ。それで、君の事を聞いて一目会いたくなってるね」

孫「噂の御遣い君に興味を持たれるなんて私も有名になったわね・
・それで、実際に会ってみてどう思ったのかしら？」

—「噂以上の人物だったよ」

孫「嬉しい事言ってくれるじゃない」

本当に嬉しそうに笑う孫策。

黄「ふむ、秋月よ。お主これからどうする気じゃ？」

—「目的も達しましたし、次の場所にも……」

孫「あら、もう行くの？せつかくだし……もうちょっとここで過ごしてみない？」

—「え？」

孫策の予想外の申し出に、今度は俺が啞然とする番だった。

周「正気が伯符……？」

孫「失礼ね、私はいたって正気よ。それで……どうかしら？」

—「俺としては嬉しいけど……いいのか？」

孫「ええ、私あなたの事気に入っちゃったのよね。それに、あなたは私達に借りがあるでしょ？」

—「むっ……」

確かに、彼女達には助けられた。

孫「それも返さずに立ち去るってのはちょっと都合が良すぎないかしら？」

ニヤリと笑う孫策。

「つまり、借りを返し終わるまでここにいろ・・・と？」

孫「理解が早くて助かるわ」

そうだな、彼女達と親交を深めるのもいいかもしれないな。

「・・・わかった。しばらくの間世話になるよ」

孫「よし、決定ね」

黄「やれやれ、相変わらず強引に決められる方じゃの」

孫「あなたは反対かしら祭？」

黄「いや、俺もこの男の事を気に入ったからの。むしろ賛成じゃ」

周「・・・」

孫「冥淋・・・」

周「・・・はあ、仕方ないわね」

孫「いいの？」

周「天の御使いが我々の元にいると世間が知れば色々都合がいいかもしれないからな。精々有効に活用させてもらおう」

どうやら周瑜も賛成してくれたようだ。

孫「それじゃあ最後に、私の真名を教えるわね」

—「いいのか？」

孫「ええ、信頼の証として受け取ってちょうだい。私の真名は雪蓮よ」

黄「儂の真名は祭じゃ。よろしくの秋月」

周「冥琳だ。よろしく頼む」

—「ああ、よろしく雪蓮、祭さん、冥琳。俺には真名が無いから—
成と呼んでくれ」

三人の信頼に笑顔を以って応える。

雪・祭・冥「……ツ……/」「」

すると、三人とも顔を赤くして固まってしまった……どうでもい

いが、何故俺が笑うとみんな顔を赤くするんだ？

「どうしたんだ？」

雪「な、何でもないわ（うう、戦の後じゃないのに体が疼く・・・）

「

祭「・・・主はもっと自分の事を知るべきじゃ（無自覚・・・か）

冥「はあ・・・（心配事がまた増えたな・・・）」

「」？
「」？

こうして、俺は冥王孫策に出会った。一体この国ではどんな事が起
きるのか？

今の俺には知る術は無かった・・・

第三十話 見るからに怪しい物には手を出さない方がいい（後書き）

作「呉に到着〜」

一「自分の力じゃないけどな」

作「お前、今回かなりマヌケな姿を晒したな」

一「ああ、まだまだ修行がたりないな」

作「ははっ！ダッセエ〜」

一「・・・死ね」

作「ちよっ！冗談だつて!!」

一「チツ・・・」

作「ところで、話は変わるが、小説を書いていて面白い事に気付いたんだが」

一「何だ？」

作「俺の書いている二つの小説・・・恋姫の方がお気に入り登録やポイントの数は多いんだが、感想は圧倒的になのは小説の方が多いんだ」

一「理由は？」

作「俺が想像するに、恋姫の読者はシャイな方が多いんだと思う。だから感想もそつと自分の胸に秘めてるんだろっな」

一「・・・ただ単に書く事が無いくらいシヨボイからだ俺は思うけどな」

作「お、お前・・・」

一「だって・・・事実だろ？」

作「ちくしょう!」

第三十一話 やっぱ記念日って大事(前書き)

呉ってアットホームな感じがいいですね。

第三十一話 やっぱ記念日って大事

雪「一成、一緒に街に行きましょう」

呉にやって来て数日たったある日、俺の部屋に入って来た雪蓮が開
口一番そう言った。

—「いきなりだな」

雪「だって〜〜こない天気の日に城に籠ってるなんて勿体無い
じゃない」

言われて窓から外を覗くと、確かに雲一つ無い快晴だった。

—「確かにいい天気だな」

雪「でしょ?」

—「別に構わないけど・・・仕事は?」

雪「うつ・・・」

俺の一言に声を詰まらせる雪蓮。

—「また冥琳に怒られるぞ?」

雪「か、帰ってからちゃんとやるわよ。さあ、そうと決まれば」

ギョッ

俺の手を握る雪蓮。

—「雪蓮?」

雪「つまらないわね。せつかくこんな美女と手を繋いでるんだからもっと喜びなさいよ」

—「むっ、すまん・・・」

雪「いや、冗談のつもりで言ったんだけど・・・」

—「え、でも雪蓮は美人じゃないか」

十人に聞いたら十人とも同じ風に答えると思うが。

雪「い、言っじゃない・・・」

—「?」

こうして俺は、雪蓮と一緒に街に出かける事になった・・・

冥「雪蓮。今日の仕事だが・・・」

ガチャ

冥「・・・いない」

雪蓮の部屋を訪れた冥琳だったが、肝心の本人はそこにはいなかった。

冥「ふっふふふ・・・しえ〜れ〜ん〜・・・」

街人A「おお、孫策様！」

街人B「今日も抜け出して来たんですかい？」

雪「はあいみんな　　そうなのよ、冥琳ったら全然許してくれない

んだもん」

街人C「周瑜様もお気の毒ですね」

雪「ちよつと〜どついう意味よ〜?」

街人A・B・C「はははは!」「」

街に来た雪蓮に多くの人が話しかける。それに対し、雪蓮も気さくに返していた。

—「仲がいいんだな」

雪「ええ、この街の人はみんな家族みたいなものだからね」

—「家族・・・」

民と同じ目線に立つ君主・・・か。

—「いいな、こつ言う関係」

雪「ありがと」

街人A「孫策様・・・そちらの御人は?」

俺に気付いた一人が尋ねる。

雪「ふふつ、みんな彼の事を知ったら驚くわよ」

街人C「そんなに凄い方なのですか？」

雪「彼は秋月 一成・・・天の御使いと呼ばれている男よ」

街人A・B・C「「えっ!?!」」

驚愕の表情を浮かべる三人。

—「ばらすなよ・・・」

雪「いいじゃない。いずれ知られる事なんだから」

街人A「あ、あなた様が天の御遣い様でいらしたのですか!?!」

街人B「そうとは知らず、とんだ失礼を!!!」

街人C「なにとぞ・・・なにとぞ、命ばかりは・・・!!!」

—「・・・ちよつと待て」

なんだいきなり?

街人B「御遣い様と言えば、一つ怒らせれば死よりもつらい苦しみをその者に与えると、もっぱらの噂で・・・」

—「・・・・・・・・」

最早何も言うまい・・・

雪「あなた・・・そんな事してたの？」

—「なわけないだろ！　どんだけ短気なんだよ俺！！」

街人C「ゆ、許して頂けるのですか？」

—「何とも思っていないのに許すも許さないも無いですから・・・」

街人A「ありがとうございます！！」

—「もういいですから・・・」

先程から周りの視線を集めているのがわかる。

雪「大騒ぎになっちゃったわね」

—「君の所為だろ！」

雪「あらっ、私何か言ったかしら？」

—「……もういい」

街人C「と、ところで御遣い様。どうして呉にいらしたのですか？」

—「一成でいいですよ。旅をしていたんですが、途中で気を失ってしまつて倒れていた所を雪蓮に助けられたんですよ」

雪「あの時は面白かつたわよね〜」

街人A「何かあつたんですか？」

雪「聞きたい？実はね〜」

雪蓮が俺を発見した時の状況を話した。

雪「……と言つわけなの。笑つちゃうでしょ？」

—「俺としては早く忘れて欲しいんだが……」

雪「何言ってるのよ？ こんな面白い事忘れるわけじゃない」

—「……はあ」

三人と別れ、さらに街の中を歩く。その間も絶えず雪蓮は街の人とあいさつを交わしていた。

—「どこに行くんだ？」

雪「あなたに会わせたい人達がいるの」

そう言う雪蓮の後について行くと、たどり着いたのは一軒の家の前だった。

雪「おじいちゃん！ おばあちゃん！」

雪蓮が呼ぶと、中から老夫婦がゆっくり出て来た。

老人「おおっ！ 雪蓮嬢ちゃん！」

老婆「あらあら、よく来てくれたわねえ雪蓮ちゃん」

嬉しそうに雪蓮の真名を呼ぶ二人。

—「雪蓮、このお二人は？」

雪「私が子どもの頃からお世話になってる人達よ」

—「なるほど、だから真名を・・・」

雪「そう言う事」

老人「おや？ そちらの若いのは？」

老婆「素敵なお方ね。もしかして・・・雪蓮ちゃんのいい人かしら？」

—「俺は・・・」

雪「ええ、いずれそうなるかもしれない人よ」

俺の声を遮る雪蓮。

老婆「あらあらまああ」

老人「あのお転婆な雪蓮嬢ちゃんにお・・・これで孫呉も安泰じやな」

嬉しそうに笑う二人。

—「意味がよくわからないんだが？」

雪「あら、そう言う可能性が無いとは言いきれないでしょ？」

—「？」

老人「お若いの。名前を聞かせてくれんかの？」

—「すみません、名乗るのが遅れました。俺の名前は秋月 一成と言います」

雪「巷を賑わせている天の御使いよ」

老人「なんとっ！ この方がそうか！」

老婆「ああ、ありがたやありがたや・・・」

俺を拝むおばあさん。

—「俺は拝まれる様な人間じゃないんですが・・・」

老人「ふむっ、御使い様は随分謙虚なのじゃな」

老婆「さすが雪蓮ちゃんの選んだ方ね」

—「謙虚と言うか・・・」

実際俺がしてきた事なんて大した事じゃ無いと思うのだが・・・

雪「そっだ、おじいちゃんおばあちゃん。あの事についてなんだけど」

老人「おおっ、あれか。どうじゃった？」

雪「ごめんなさい。まだこれといった人が見つからないの」

老婆「いいのよゆっくりでも。私達の為にしてもらっている事なんですからね」

雪「本当にごめんね」

—「何の話だ？」

雪「もうすぐ二人が結婚して四十年が経つの。その記念に二人の絵を送ろうと思ったんだけど、なかなかいい絵師が見つからないのよ」

絵か・・・

—「なんだったら俺がやるつか？」

雪「一成って絵描けるの？」

—「絵じゃないけどな」

雪「？」

—「発現」

俺の手に現れたのは一つのカメラ。発現出来るのは何も武器だけで

は無い。やろつと思えばこんな物だつて出せる。

雪・老人・老婆「……ッ!?」「」

案の定驚く三人。

―「これを使えばいい」

雪「な、何それ!?…。。つていつかどっから出したの!?!?」

―「これはカメラって言う写真を撮る道具だ」

雪「カメラ?　しゃしん?」

老婆「知ってますかおじいさん?」

老人「いや、さっぱりじゃ」

―「説明するより見てもらった方がいいな」

雪蓮にカメラを渡す。

―「ここを覗いて俺の姿が確認出来たら、この出っ張りを押してくれ」

雪「こゝ、こゝかしら？」

ぎこちなくカメラを構える雪蓮。

「そうそう、それでその出っ張りを……」

雪「これね……えいっ」

カシャッ！

雪「きゃ！？」

シャッター音に驚き、カメラを落としかけた雪蓮だったが、なんとか持ち直した。

雪「な、何の音？」

「写真を撮った音だよ……おっ、出て来た」

ポラロイド型のカメラからゆっくりと写真が出て来た。

雪「それが写真？ 真っ黒じゃない」

「まあ見てればわかるよ」

軽く振りながら少し待つと、ゆっくりと浮かび上がって来た。

雪「えっ！？ これって・・・」

「これが写真。撮ったものをそのまま紙に写しとった物だ」

老人「こりゃたまげたのお！！」

老婆「まるで御遣い様がこの中に入っている様ですねえ」

感嘆の息をもらす二人。

「これを使えば絵よりもっといい物が出来るぞ」

雪「ありがとう一成！ やっぱりあなた最高だわ」

「それじゃあ早速撮ろうか。お二人とも、そこに並んでください」

とりあえず、家の前に並んでもらう。

「雪蓮も入りなよ」

雪「い、いいわよ。せつかくの夫婦二人の記念に私が入ったら・・・」

老人「何を言っておる。雪蓮嬢ちゃんはわし等にとって孫みたいなものじゃ」

老婆「家族が一緒にいるのはおかしい事じゃないですよ・・・そうですね御遣い様？」

雪「おじいちゃん・・・おばあちゃん・・・」

「おばあさんの言う通りだ。観念して入るんだな」

雪「・・・もう、みんな強引なんだから」

言葉とは裏腹に、嬉しそうに二人の間に立つ雪蓮。

雪「これでいいかしら？」

「ああ、それじゃあ三人とも、少し動かないでくださいね」

三人の姿がしっかりと映っているのを確認してシャッターを切る。

カシャッ

—「はい、お疲れ様」

やがて出来あがった写真は、満面の笑みを浮かべた三人が写っている最高の一枚だった。

—「それではこれを。少し小さいですけど許してください」

老人「いやいや、こんな素晴らしい物を頂いたのに文句など言ったら罰が当たるわい」

老婆「本当にありがとうございます。これは一生の宝にさせていただきます」

—「ははっ、喜んでいただけただけで何よりです」

この笑顔、撮ってよかったな。

雪「本当にありがとうございます。それじゃおじいちゃんおばあちゃん、また来るからね」

老人「ほっほっ、待つとるぞ」

老婆「いつでもいらっしやいね」

—「失礼します」

夫婦に別れを告げ、街の散策に戻る。

雪「ねえ、あなたのいた所じゃあんな凄い物がたくさんあるの?」

—「カメラの事か? ああ、あれくらいならたくさんあったぞ」

雪蓮とカメラの話をする。どうやら相当興味を持ったようだ。

雪「そうだ! 今度みんなで撮りましょうよ」

—「それもいいかもな」

雪「約束よ」

俺は写真を撮る約束をした。

?「おおっ! 策殿に秋月ではないか!」

—「ん?」

名前を呼ばれ振り向いてみると、ある店の中に祭さんがいた。

雪「あら祭。またお酒？」

その周りには、酒が入っていたであろう入れ物が散乱していた。

祭「うむ、昼から飲む酒はまた格別じゃからな 策殿もどうじゃ？」

雪「もつちろん」

—「祭さん・・・仕事は？」

祭「なんじゃ秋月。冥琳みたいな事を言いよつてからに」

この人もか・・・

祭「大体あやつは石頭すぎるのじゃ」

雪「そうよね。もう少し融通利かせてくれてもいいのにな」

祭「全くじゃ」

—「・・・言いたい放題だな」

その時、二人の背後に忍び寄る人影があった。

—「あっ……」

雪「どうしたの一成？ そんな顔しちゃって……」

—「……後ろ」

雪・祭「後ろ？」

冥「……悪かったな。融通が利かないくらい石頭で……」

二人が後ろを振り向くと、素敵な笑顔を浮かべた冥琳が立っていた。

祭「め、冥琳……」

冥「仕事をほっぽりだして……また随分と楽しそうに酒を飲んでいらっしやいましたね祭殿……」

雪「いつからそこに!?!?」

冥「たった今だ。聞き慣れた声がしたものだからやって来てみれば……どうやら当たりだった様だな……」

ニヤリとする冥琳。

—「冥琳」

冥「災難だったな秋月。どうせ雪蓮に無理矢理連れ出されたのだから?。」

雪「ギクツ!。」

冥「・・・凶星の様だな」

さすが軍師。見事な洞察力だ。

冥「さあ、逃がしはしないぞ? すぐに戻って仕事を・・・」

街人A「大変だ~~~~!!。」

雪・祭・冥「~~~~ツ!?!」

ただ事ではない様子の声に動きを止める三人。

街人B「どうした!?!。」

街人A「黄巾の残党だ! 向こうの老夫婦が襲われた!!。」

一「老夫婦・・・まさか!。」

雪「おじいちゃん・・・おばあちゃん・・・!!!。」

血相を変えて駆け出す雪蓮。

祭「策殿!？」

冥「どうしたのだ一体!？」

—「俺達も行くぞ!」

俺達はすぐさま雪蓮の後を追いかけた・・・

S I D E O U T

雪蓮 S I D E

雪「はあっ、はあっ、はあっ・・・!」

ひたすら走りおじいちゃん達の家に向かう。

やがて家の前に人だかりが出来ているのを確認した。

雪「おじいちゃん! おばあちゃん!」

人混みをかきわけ前に出ると

黄巾兵A「金と食い物だ！！さっさと持って来い！！」

黄巾兵B「馬も忘れるなよ！！」

黄巾兵C「逆らえばこのババアをぶっ殺す！！」

おばあちゃんに剣を向け、要求する黄巾兵と

老婆「おじいさん！しっかりしてくださいおじいさん！！」

人質にされ、必死におじいちゃんの名前を呼ぶおばあちゃん

そして

老人「う・・・うう・・・」

・
・
地面に横たわり、血溜まりを作っているおじいちゃんの姿があった。

—「雪蓮!!」

祭「策殿!!」

冥「これは!？」

私を追って来たであろう一成達も到着した。

街人A「孫策様!」

街人B「黄蓋様! 来て下さったのですね!」

街人C「周瑜様! 黄巾の残党が!!」

黄巾兵A「孫策だと!? じゃあこの女が呉の王か?」

雪「・・・それがどうした?」

溢れ出す怒りを必死に抑える。叶うなら今すぐ八つ裂きにしてやりたい。しかし、おばあちゃんを人質に捕られている以上、うかつな事は出来ない。

それに

老人「うう・・・」

今も苦しんでいるおじいちゃんを早く助けないと取り返しのつかない事になってしまう。それだけは避けなければいけない。

黄巾兵 A「俺達の要求は聞いたよな？」

黄巾兵 B「大人しく従った方がいいぜ？」

黄巾兵 C「じゃないと・・・あんたの大事な民が死んじまうぞ？すでに一人死にそうだけどな」

黄巾兵 A・B・C「「ぎゃははは!!」「」

雪「貴様等あ！」

黄巾兵 A「おっと！ 下手な真似はするなよ？」

そう言ってさらにおばあちゃんに剣を近づける。

雪「くっ！」

黄巾兵 C「なんだ？ そんなにこのババアが大事かよ？」

雪「・・・ええ、そうよ。その人は私の事を孫の様に可愛がってく

れた。私にとって大事な人……」

老婆「雪蓮ちゃん……」

雪「待っててねおばあちゃん。すぐに助けてあげるから！」

そうは言うものの……一体どうすれば……

——」……雪蓮」

雪「一成？」

今までと様子の違う声に目を向けると……

雪「ッ!？」

私ですら寒気を感じるほどの強烈な殺気を放っている一成がいた。

——「あのクス共は俺に任せろ。君はおじいさんを頼む」

雪「えっ？」

冥「秋月？」

祭「何をするつもりじゃ？」

異変に気付いた二人も一成に話しかけたが、彼はそれを無視して賊の前に立った。

黄巾兵A「何だデメエは？」

一「今から死ぬ人間に言っても意味は無い……」

黄巾兵B「何言って……」

ゴキイツ!!

男の言葉が最後まで発せられる事は無かった。何故なら一成によって一瞬で首を折られたからだ。

雪「(早い!?)」

一「ふっ!!」

ゴキイツ!

続け様に二人目の首をへし折る一成。その様子には私は目を奪われて

いた。

祭「策殿!」

雪「・・・はっ!」

祭の声を聞き、慌てておじいちゃんの傍に駆け寄る。

雪「おじいちゃん!」

老人「しえ・・・しえねん・・・じょう・・・ちゃん・・・」

雪「そうよ! 私よ!」

よかった。まだ意識がある。急いで医者に見せなくては。

黄巾兵A「ぎゃああああ!?!?!?!」

賊の悲鳴に目を向けると、一成が賊の顔を掴み持ち上げていた。

一「貴様・・・よくもおじいさんを・・・」

黄巾兵A「ま、待ってくれ!! あれは俺じゃ・・・」

—「黙れ」

ゴキイツ！

—「・・・ふん」

三人目の首も折った一成はその死体を無造作に投げ捨てた。

—「大丈夫ですかおばあさん？」

老婆「わ、私の事よりおじいさんが！！」

おばあちゃんが私達の元に駆け寄って来た。

老婆「おじいさん！ おじいさん！」

雪「冥琳！ 医者を！！」

冥「すでに呼んでいる！」

老人「無駄じゃよ・・・わしはもう・・・」

雪「何言ってるのおじいちゃん！！」

老人「わ・・・しの・・・体の・・・事・・・は・・・わしが・・・一番・・・
わか・・・」

老婆「そんな!？」

老人「すま・・・ない・・・ばあさ・・・ん」

老婆「おじいさん! 私を置いて先に逝かないでくださいよ!..!」

祭「ええい!! 医者はまだか!？」

雪「おじいちゃん! 諦めないで!..!」

何でもいい。おじいちゃんを助けて!!

誰もが諦めかけたその時、救世主が現れた。

—「そうですよおじいさん。せつかく四十周年を迎えるんでしょう
? まだ死ぬのは早いですよ」

老人「み・・・みつかい・・・さま・・・」

—「安心してください。俺が治します」

老婆「えっ!？」

—「俺は天の御使いですよ? 任せてください」

雪「一成・・・あなたなら何とかなるの？ おじいちゃんを助けられるの？」

子どもの様に彼にしがみつく。そんな私の頭を優しくなでる一成。

「ああ、君の大切な人は俺が助けてみせる」

雪「お願い一成！ 私に出来る事は何でもする！ だから・・・だからおじいちゃんを！！」

「何言ってるんだ雪蓮？ 友達を助けるのに見返りなんて求めるわけないだろ」

雪「一成・・・」

「いいから見ててくれ」

そう言って一成は目を閉じた。

「はあああああ・・・」

瞬間、一成の体から何かが湧き出て来るのが見えた。

祭「まさか・・・気か？」

雪「知ってるの祭？」

祭「少しはな、しかし・・・使い手を見るのは初めてじゃ」

冥「これが秋月の力が・・・」

一「癒しのマナよ・・・彼の者を癒し、活力を与えよ。アースプ
ライヤー！」

一 成が何か呟くと、緑色の光がおじいちゃんの体を包んだ。

雪「う、うそ・・・」

冥「傷が!？」

祭「何が起こったんじゃ!？」

光が収まると、おじいちゃんの体にあつた傷が痕も残さず消え去っ
ていた。

一「・・・治癒完了」

老人「わ、わしは一体・・・」

老婆「おじいさん!」

何が起こったのか理解できていないおじいちゃんにおばあちゃんが抱きつく。

老人「ばあさん・・・わしは・・・」

老婆「御遣い様が助けてくださっただんですよ!」

一「一応大丈夫だとは思いますが、念の為に医者に診てもらってください」

老婆「御遣い様。本当に・・・本当にありがとうございます!」

老人「わしなんかの為に・・・なんとお礼を言ったらよいのか・・・」

一「いいですよ礼なんて。俺が助けたいと思ってやっただんですから」

照れ臭そうに頭を掻きながら、微笑む一成。

トクン・・・

雪「え?」

「瞬間心臓が跳ねた気がするけど・・・気のせいかしら？」

医「患者はどこですか！」

その時、医者らしき人物がやって来た。

「「こつちです」

医「こ、この方ですか？」

「「一見大丈夫そうですが、念の為に検査をお願いします」

医「わ、わかりました。ではこちらに・・・」

医者に連れられ、おじいちゃんとおばあちゃんは街中に消えていった。

「「さて、これで一件落着だな」

街人A「な、何が起きたんだ・・・？」

街人B「あの御人が何か呟いたかと思えばじいさんの傷が消えてたぞ」

街人C「御使いって呼ばれてたよな・・・まさか!？」

街人A・B・C「天の御遣い!？」

周りにいた民達が騒ぎたてる。

—「やりすぎたか・・・？」

このままじゃ面倒な事になりそうね。

雪「みんな、いったん城に戻るわよ」

私達は城に戻る事にした・・・

雪「さて、改めてお礼を言わなきゃね」

玉座の間で一成に向き合う。

雪「一成・・・本当にありがとう。あなたがいなかったら・・・きつとおじいちゃんは助からなかったわ」

精いっぱい感謝の気持ちを込めて頭を下げる。

冥「雪蓮!？」

冥琳が驚きの声をあげる。当然だ。王が頭を下げているのだから。

雪「一成には大きな恩が出来た。礼を言うのは当然よ」

冥「しかし!」

雪「くどいわよ冥琳」

冥「・・・」

押し黙る冥琳。

「頭をあげてくれ雪蓮」

言われて頭を上げる。

「俺は当然の事をしたただけだ。俺だってあの二人にもっと生きていて欲しいし・・・何より雪蓮の頼みだったからな」

雪「それは・・・私が呉の王だから？ だから助けてくれたの？」

何故かそんな事を聞いてしまう。私らしくない言葉に私自身が戸惑ってしまった。

—「そんな事は関係ない」

雪「えっ？」

そんな私の質問をバツサリ切り捨てる一成。

—「俺は呉王『孫策』を助けたんじゃない。友達の『雪蓮』を助けたんだ」

雪「あっ・・・」

—「って、さっきも言ったけど、出会ったばかりなのに友達って呼ぶのもおかしいかな？」

ドクン・・・

雪「ッ！？ ま、まただ・・・」

一成の優しい言葉にまた心臓が跳ね上がる。

私……もしかして……

—「雪蓮？」

雪「な、何！？」

—「大丈夫か？ 何だか顔が赤いが……」

雪「だ、大丈夫よ！ それより一成。疲れてるんじゃない？ 部屋に戻っていいわよ」

—「そうか？ だったら休ませてもらうよ」

そう言って一成は玉座の間から出て行った。

雪「……ふう」

一成が出て行ってやっと気持ちが落ち着いてきた。

祭「策殿……本当にどうしたのじゃ？」

雪「祭……私病気かもしれない」

冥「何だと!？」

祭「どう言う事じゃ？」

雪「一成の笑顔をみると……何だか胸が苦しくなる。でも、彼がいなくなると落ち着くの。これって一体……」

祭「ふむっ……」

考え込む祭。

祭「わかったぞ策殿」

雪「本当？」

祭「それは……恋の病じゃ」

雪「恋……?」

冥「祭殿! 真面目に答えてください!」

祭「わしは真面目じゃ。策殿は秋月に惚れたのじゃよ」

雪「私が……一成に?」

確かに出会って間もないけど、一成は強くて、格好良くて、とっても優しくて……

雪「……って、完全にはまってるじゃない」

冥「雪蓮？」

雪「そっか〜。私……一成の事が好きなんだ」

いったん自覚するとすんなり受け入れる事が出来た。

雪「よし……決めた！絶対一成を手に入れてやるんだから！！」

祭「おお！策殿が燃えておる！」

雪「ふふん、覚悟していなさい一成。私を本気にさせた罪は重いわよ」

冥「意気込むのはいいが、確か話では秋月は別の勢力に加入しているはずだが？」

雪「ならその勢力をぶっ潰してやればいいだけじゃない」

冥「……はあ」

冥琳が呆れているけど、こればかりは止められないわよ。

雪蓮SIDE OUT

INSIDE

ゾクッ！

ー「また寒気が・・・この世界に来てから妙に多いな」

第三十一話 やっぱ記念日って大事（後書き）

作「雪蓮陥落！」

一「彼女ってこんなキャラだったか？確か原作じゃ速攻で賊をぶっ殺してた気がするが」

作「この小説の雪蓮は乙女全開でいくぞ」

一「しかもカメラまで出しやがって。つーか、俺の力って本当に何でもありだな」

作「お前が望むなら包丁やつつかえ棒にもなるぞ」

一「チートなのにそう聞くとシヨボく感じるな・・・」

第三十二話 一度でいいから様って呼ばれてみたい(前書き)

穩を出すの忘れてました。なので無理矢理出します。

第三十二話 一度でいいから様って呼ばれてみたい

魏の時とは違い仕事が無い俺は部屋で大人しくしていた。

雪蓮に何か仕事を貰おうとしたら「一成はここにいてくれるだけでいいわよ」「なんて言われる始末。

—「二ト・・・か」

せめて戦いの時は役に立たないとな。

祭「入るぞ秋月」

祭さんがやって来た。

—「どうしたんですか祭さん？」

祭「今から玉座の間に来てくれんか？」

—「何かあつたんですか？」

祭「いや、実はまだお主に会わせておらぬヤツがおったのじゃが、その者が戻って来たから顔合わせをさせようと思つての」

—「わかりました。すぐに行きます」

祭さんと一緒に玉座の間に向かう。いったい誰だ……？

祭「連れて来たぞ策殿」

玉座の間には雪蓮と冥琳。それと初めて見る眼鏡をかけた女性。

雪「ご苦労様、祭。ごめんね一成、急に呼び出したりして」

—「俺に会わせたい人がいるって聞いたんだけど？」

冥「そうだ。穩、あいさつを」

女性「はい〜。姓は陸、名は遜。字は伯言で、真名は穩です〜」

—「俺は秋月 一成。姓が秋月で名が一成だ。字と真名は無い。それにしても……真名までいいのか？」

穩「はい〜。みなさんの事も真名で呼んでますし、御遣い様に呼んで頂けるなら光栄です〜」

—「わかったよ穩。俺の事は一成でいいよ」

穩「はい、一成さん」

彼女が陸遜か。おっとりした雰囲気の人だな。

穩「一成さん。今度一成さんがいた世界についてお話を聞きたいんですが〜」

一「ああ、それくらいならお安い御用だよ」

穩「ありがとうございます〜。それじゃあ今度、私の部屋でじっくり〜」

一「わかった」

知識に対して貪欲な所はさすが軍師といったところか。

雪「あ〜あ・・・知らないわよ一成」

冥「秋月・・・しっかりな」

祭「使い物にならぬよう気をつけるのじゃぞ」

一「？」

雪蓮達が意味深な事を呟いた。

雪「何でもないわ。それより一成、実はもう一つあなたにお願いがあるの」

「仕事か？」

雪「ある意味仕事かしら。私達と一緒に袁術に会いに行つて欲しいの」

「袁術つて確か・・・」

雪「私達をこき使つていけない小娘よ」

雪蓮が吐き捨てる様に言う。

「その袁術がどうして俺なんか・・・」

冥「実はな、お前が天の御遣いだと言う事がどこからか知られてしまつてな。おそらくこの城にいる袁術の飼い犬の所為だろうが」

雪「そしたらあの小娘「面白い。妾にも会わせるのじゃ！」なんて言つて来たのよ！全く・・・私の一成は見世物じゃないって・・・」

「・・・最後の方に聞き捨てならない言葉があつた気がするが・・・」

雪「あらごめんなさい。まだだったわね」

—「……………」

冥「本来なら無視する所だが、相手が袁術ではな。今ヤツに機嫌を損なわれるわけにはいかないのだ」

雪「不本意だけどね……………」

—「選択肢は無さそうだな」

雪「本当にごめんね」

—「謝らないでくれ。これくらいで雪蓮達の為になるんなら喜んで会いに行くよ」

雪蓮は気にし過ぎだ。もつと気楽に言ってくれて構わないのに。

雪「も、もう。何でそう言う事サラツと言っちゃうかな」

冥「済まない秋月」

祭「いいのお。今の言葉はなかなかじゃったぞ」

穩「そうですね〜。思わず惹かれちゃいました〜」

—「よくわからんが……………ありがとう」

冥「では行くか。早くしないとうるさいからな」

雪「そうね。祭、穩、留守番お願いね」

祭「うむ、任された」

穩「いつてらっしゃいませ〜〜」

雪「それじゃあついて来てね」

—「わかった」

俺は袁術に会いに行く事になった。

—「こんなイベント原作にあったか？」

？「遅いぞ孫策！妾が呼んだのじゃからもつと早く来れぬのか!？」

雪「ごめんなさいね〜。何分急な話だったから準備に手間取っちゃって」

目の前の少女……袁術の言葉を軽く流す雪蓮。

袁「それで……その男が御使いとやらか？」

雪「……そうよ」

見つめられ、前に出る。

袁「お前、名は何と申すのじゃ？」

—「人にものを尋ねる時はまず自分からじゃないのか？」

袁「なっ!？」

袁術が目を見開く。

?「あなた!美羽様に向かってなんて無礼な……!」

—「俺は一般常識を言ったただけだ。それとも……四世三公の名門生まれの御令嬢はそれすら守れぬ常識知らずか？」

?「くっ……」

袁術の傍に控えていた女性を見据える。

冥「ほう……言うではないか秋月」

雪「いいわよ一成。もっと言ってやって」

後ろで二人がひそひそ話している。

袁「ふむ……確かにそちの言う通りじゃ」

?「美羽様？」

袁「誇りある袁家の者として恥知らずな真似は出来ぬ。御遣いよ、すまなかつたの」

そう言つて頭を下げた。

?「み、美羽様!？」

雪「う、うそ……あの袁術が頭を下げるなんて……」

冥「……私は夢でも見ているのだろうか？」

俺以外の全員が驚きの表情で袁術を見つめる。

袁「どうしたのじゃ七乃？」

？「だ、だって、美羽様が頭を下げられるなんて……」

袁「妾も不思議なんじゃが、何故かこの者に頭を下げるのに抵抗は全く無かったのじゃ」

俺を見ながら話す袁術。

袁「妾は袁術。字は公路じゃ。御遣いよ、改めて名を教えてくださいか？」

—「俺は秋月 一成。字は無い。さっきは済まなかったな袁術」

袁「よいのじゃ。妾にも非はあったのじゃからな。七乃、そちも名乗るのじゃ」

？「私は張勳と言います。よろしくお願いしますね秋月さん」

—「こちらこそ」

袁「秋月よ、もっと近くに来るのじゃ」

言われて袁術の前に立つ。

—「どうしたんだ？」

袁「なかなかの男前じゃな……どうじゃ秋月、妾の夫とならぬ

か？」

—「……………は？」

—瞬思考が停止した。

袁「先程の言葉、妾に対してあそこまで堂々と言い放った者は初めてじゃ。妾はそちが気に入ったぞ」

—「いや、気に入ってくれたのは嬉しいが、夫って……………」

袁「むっ、妾が妻では不服か？」

—「……………俺はロリコンでは無い」

その時、背後から凄まじい殺気を感じた。

雪「ふ……………ふふふ……………何ふざけた事言ってるのかしら袁術ちやん？」

冥「お、おい雪蓮？」

雪「私の前で一成を夫呼ばわりなんて……………いい度胸ね」

袁「ぴいつ!?!?」

俺の腰にしがみ付く袁術。

袁「こ、怖いのじゃ〜!」

―「雪蓮も袁術も落ち着け」

雪「むっ……」

袁「う〜……」

張「怯える美羽様……可愛いです」

涙目の袁術を見て、張勳が悶えている。

―「雪蓮、子どもの言う事に本気で殺気出すなよ」

雪「だって……」

袁「わ、妾は本気じゃぞ!」

―「駄目だよ袁術。夫婦になるって事は簡単な事じゃない。相手の事をよく知りもしないのに結婚したら必ず後悔する事になる」

袁「……」

―「俺は君に後悔して欲しくない。だから、そう簡単に決めては駄

目だ・・・」

俺なんかよりいい人はたくさんいるしな。

袁「・・・わかったのじゃ」

—「そうか」

袁「ならば秋月よ、早速今日からここで暮らすのじゃ！」

—「・・・待て」

何でそんな結論に至る？

袁「ここで妾と過ごし、妾の事をたっぷりと知るが良い。そうすれば結婚出来るじゃろ？」

—「それは・・・」

張「さすが美羽様！相手の都合を無視して勝手に話を進めるなんて」

美「はっはっは！もっと褒めてたも」

—「いや、褒めてないだろ」

袁「どうじゃ秋月。悪くない話じゃろ？」

期待を込めた目で俺を見つめる。

—「……済まないが、断らせてもらおう」

袁「え？」

—「俺は雪蓮達に恩がある。それを返すまで彼女達の元を去るわけにはいかない」

雪「一成……」

冥「お前……」

二人に視線を向け頷く。

—「そう言うわけで、悪いが……」

袁「……じゃ」

—「え？」

袁「嫌じゃ嫌じゃ！妾は秋月と暮らすのじゃ～～！！」

大粒の涙を流す袁術。

張「よしよし美羽様。泣かないでくださいね〜」

袁「な、七乃〜」

雪「やれやれ、やっぱり袁術ちゃんは袁術ちゃんね」

冥「先程の態度で少しは見直したと思ったが・・・」

張勲にしがみ付く袁術に、溜息を吐く雪蓮と冥琳。

—「・・・わかった。必ずまた会いに来るからそれで許してくれ」

袁「ヒック・・・ほ、本当かの・・・？」

—「ああ、約束する。いいよな雪蓮？」

袁「そ、孫策・・・」

雪「・・・はあ、仕方ないわね」

冥「いいのか？」

雪「あんな姿見て断る程性格悪くないわよ」

俺の服の端を掴み、不安げな様子の袁術を指す。

冥「・・・確かに」

袁「じゃあ！」

雪「たまになら許してあげる。たまにならね」

—「済まないな」

袁術の頭をなでながら礼を言う。

袁「そちの手は温かいの〜」

目を細める袁術。

—「何だか妹が出来た気分だな」

袁「妾が妹？・・・ならば、そちの事を兄様と呼んでいいかの？」

—「え？」

袁「駄目・・・かの・・・？」

上目使いは止めてくれ・・・

—「いや、いいよ」

袁「やったぞ七乃！妾に兄様が出来たぞ！」

張「よかったですね美羽様」

先程とは打って変って、嬉しそうに笑う袁術。

冥「やれやれ、現金なものだな」

雪「いいの？・・・あんな事言ってる？」

—「多分あの子は家族と言うものに飢えていたんだと思う。だから少しでも家族の温かさを教えてあげられたらと思ってるな」

冥「ほう、初対面の相手をそこまで見抜くとは。鍛えればいい軍師になりそうだな」

—「俺が？ははっ、ガラじゃないよ」

雪「あなたってホントお人好しよね。まあそこがいい所でもあるけど・・・」

袁「兄様。今度来る時は妾秘蔵の蜂蜜水をごちそうするから楽しみにしておくのじゃ」

「わかった。楽しみにしてるよ袁術」

袁「兄様！妾の事は美羽と呼ぶのじゃ！」

「美羽」

美「うむ、それでよい」

張「私の事も七乃でいいですよ」

「わかった七乃さん。俺の事も一成と呼んでくれ」

雪「それで、一成も紹介した事だし、話はもう終わりかしら？」

美「・・・おお！そうじゃった。実は、この近くの古城に賊が籠
つておるらしくての、孫策よ、お前達で退治してくるのじゃ！」

七「詳しい事はこの書簡に書いてますから」

七乃に渡された書簡には、古城周りの地図と、敵の兵力について書
かれていた。

雪「これってウチの兵力の倍以上じゃない・・・」

冥「軍師の立場から言わせてもらえば正面から挑むのは無謀だぞ」

「せめて援軍があればな」

雪「それよ一成。ねえ袁術ちゃん。孫家の家臣を呼び戻してもいい

かしら？」

美「どうじゃ七乃？」

七「問題無いと思いますよ」

美「ふむ、ならば構わんぞ」

雪「ありがと。それじゃ行って来るわね」

俺達は美羽の元を後にした・・・

雪「ただいま〜。あ〜もう、むかつく〜」

冥「今は我慢するしかあるまい・・・」

穩「お帰りなさい雪蓮様、冥琳様、一成さん」

祭「して、今回は何を言われたんじゃ？」

雪「聞いてよ祭！実はね・・・」

雪蓮は美羽とのやりとりを二人に話した。

祭「はっはっは！秋月よ、ずいぶんと気に入られた様だな」

—「理由はわかりませんがね・・・」

穩「それにしても〜、相変わらず袁術さんはお馬鹿さんですね〜」

冥「ふっ、確かに。普通は許可などせぬぞ」

雪「何にせよ、これで堂々と蓮華達を呼び戻せるわ」

—「誰なんだ？」

雪「私の妹よ。少し真面目すぎる所があるけどいい娘よ。きっと成も気に入ると思うわ」

冥「お前はもう少し蓮華様を見習って欲しいものだがな」

雪「あら、私だって真面目にやる時くらいあるわよ」

祭「秋月よ、ようやくお主の武を見る事が出来そうじゃな」

穩「期待してますよ〜」

—「そんなに凄いもんじゃないですよ」

次の日、準備を終えた俺達は賊がいるとされる古城に向かった・・・

S I D E O U T

孫權 S I D E

孫「姉様に会うのも久しぶりね」

賊退治の為に城を離れていたけど、元気にされていたかしら？

？「それにしても、袁術が馬鹿で助かりましたね」

？「うう・・・緊張します」

甘寧・・・思春と呂蒙・・・亞莎が眩く。

思「そんなに緊張する事もないだろう？」

亞「し、しかし。孫策様と周瑜様と言えば正に雲の上にいるっしやるような方。そんな方と今からお会いするなんて、緊張するに決まっていますよ！」

孫「大丈夫よ亞莎。姉様は優しい方だから」

亞「は、はい・・・」

・・・本当に大丈夫かしら？

孫「そう言えば、姉様からの文に気になる所があったのよね」

思「気になる所ですか？」

孫「ええ、新しい仲間が出来たけど、もしかしたら私の兄になるか
もしれない・・・ですって」

思「あ、兄ですか？」

亞「もしかして、ご結婚されるとか・・・？」

孫「姉様が？まさか・・・」

思「他に何か書かれていたのですか？」

孫「祭も認める程の人物だから私達も気に入るはずだって・・・」

思「祭殿が？・・・なるほど、なかなかの人物の様ですね」

亞「そ、そんな・・・ただでさえ緊張しているのに、さらにその
様な方とお会いするなんて！」

思春が感心し、亞莎が体を震わせていた。

孫「何にせよ、見極めなくてはね・・・」

孫権 SIDE OUT

IN SIDE

城を出て二日、ただ今行軍真最中。

雪「もうすぐね」

一「誰と合流するんだ？」

雪「妹の孫権に親衛隊長の甘寧、あと呂蒙って娘よ」

一「呂蒙か・・・」

穩「知ってるんですか・・・？」

一「名前だけはな。確か・・・元武官で今は軍師だろ？」

冥「正解だ。随分詳しいな」

一「駄が・・・知り合いに叩きこまれてな」

祭「ほお・・・その者、かなりの博識じゃな」

「「それでもないですよ。むしろ馬鹿ですから」

祭「？」

「「何でもないです。それよりそろそろ合流地点ですよ」

前方に砂塵が見える。

冥「ちょうど向こうも到着した様だな」

雪「さて、久しぶりに可愛い妹の顔でも拝みましょうかね」

俺達は合流地点に足を速めた・・・

？「姉様！」

雪「久しぶりね蓮華！元気にしてた？」

？「ええ、思春のお陰で大事ありません」

雪「ありがとね思春。蓮華を守ってくれて」

？「はっ、ありがとうございます」

合流地点で俺達を待っていたのは、雪蓮に似た少女とその娘に従っている鋭い瞳の女性。そして

？「……………」

その背後に隠れ、縮こまっている少女だった。

？「亞莎。大丈夫だから」

前に押し出された少女は、顔を赤くさせながらゆっくりと口を開いた。

？「あの……………その……………呂蒙と申します。字は子明で真名は亞莎です……………」

雪「よろしくね亞莎。随分緊張してるみたいだけど？」

？「姉様と冥琳に会って聞いた時からずっとこの調子なんです。いつもはしっかりしてるんですけど……………」

呂「はう……………」

雪「可愛いわね〜」
大丈夫よ。捕って食ったりしないから」

冥「お前は軍師だろう？この程度で緊張してどうする」

呂「す、済みません……」

祭「冥琳よ、もっと優しく言えんのか？」

冥「私は当然の事を言っただけです」

祭「やれやれ」

穩「大丈夫ですよ〜亞莎ちゃん。冥琳様は本当は優しい方ですか
ら〜」

呂「は、はい……」

？「それで姉様。文に書かれていた事ですが」

雪「そうそう、三人に紹介しなきゃいけない人がいるの」

そう言つて三人の前に俺を立たせた。

雪「この人が文に書いた人よ。一成、中央にいるのが孫権。左が甘
寧で右が呂蒙よ」

一「秋月 一成だ。よろしく三人とも」

呂「こゝ、こちらこそ！」

呂蒙が力強くお辞儀をしてくれた。

孫・甘「……………」

それとは対照的に、黙って俺を見つめる二人。

—「何か？」

孫「お前が文に書かれていたヤツか」

—「さつきから気になってたんだが、文って何だ？」

孫「どうやって姉様に取りつたか知らないが、私は認めんぞ。お前が兄になるなど……………」

ちよつと待て…………

—「おい、君は文に何て書いたんだ？」

雪「あら、ちよつとした世間話よ」

—「絶対ウソだろう！何だよ兄って!？」

雪「まあそれは置いて。蓮華、一成は私が拾ったのよ」

孫「姉様が？」

雪「実はね……」

雪蓮は孫権に俺との出会いを話した。

孫「からかっているのですか姉様！人間が空を飛ぶなど……」

雪「それが本当なのよね〜。一成、見せてあげて」

「「はあ……」

溜息を吐きつつ、ハイロウを展開する。

孫・甘・呂「「なっ!?!?!」

この反応にも慣れた。

雪「ね？」

甘「こゝ、これは一体!?!?!」

呂「綺麗です……」

—「ありがとう」

孫「よ、妖術使い!？」

俺に剣を向ける孫権。

雪「落ち着きなさい蓮華。これが一成の力よ」

祭「権殿、天の御遣いの名は聞いた事があるでしょう?こやつがそ
うじゃ」

孫「この男が御遣い?」

雪「そう言う事。だからどんな不思議な力を持っててもおかしくな
いの」

納得してくれたのか剣を収める孫権。

雪「さて、話が逸れちゃったけど、三人とも改めて自己紹介しなさい。
ちなみに私達は全員真名を預けているから」

孫「姉様が真名を!？」

雪「だからと言ってももちろん強制はしないわ。どうするかは三人に

任せるから」

孫「……わかりました」

孫権が俺の前に立つ。

孫「正直、まだお前を完全に信用は出来ない。だが、姉様や祭が認める程だ、私の真名を預けよう」

—「いいのか？別に無理して……」

孫「構わん。私は孫権、字は仲謀。真名は蓮華だ」

—「ありがとう蓮華。俺には真名が無いから—成って呼んでくれ」

蓮「あ、ああ……」

妙に齒切れの悪い蓮華。

—「蓮華……やっぱり嫌なんじゃ……」

蓮「い、いや、そうではない……」

—「？」

雪「そう言えば蓮華、あなた男の人に真名を呼ばれるのって初めて

よね？」

蓮「ッ！？」

—「そうなのか？」

雪「よかったわね一成。蓮華の初めての相手で」

蓮「姉様！」

雪「あははは」

甘「私は甘寧、字は興霸。真名は思春だ」

—「よろしく思春」

思「……」

—「どうした？」

品定めするかのように俺を見つめる思春。

思「やるな貴様。出会ってから今までの間、全く隙が無かった」

—「そう言う君こそ、いつでも俺に斬りかけられる様にさりげなく構えているじゃないか」

俺がそう言つと若干目を見開いた。

思「私の動きを見切るか。面白い・・・ぜひとも手合わせしたいものだな」

一「そのうちな」

最後に呂蒙が前に出る。

呂「あの・・・私は呂蒙と言います。字は子明で真名は亞莎です」

一「・・・一ついいかな？」

亞「ひゃ、ひゃい！何でしょうか!?!」

一「いや、どうして横を向いているのかと・・・」

ここに来てから一度も目を合わせてくれない。ハイロウは見てくれたのに・・・

亞「そ、それは・・・御遣い様のお顔があまりにも眩しくて、拝見する事が出来ないんです・・・」

一「眩しいって・・・ライトじゃないんだから」

亞「らいと？」

—「何でもないよ。それより、一度でいいから目を合わせてくれな
いか？君に悪気は無いのはわかっているけど、やっぱり少し寂しい」

亞「す、すみません。そうですね、やっぱり失礼ですね」

ゆっくりと顔を前に向ける亞莎。

亞「……………」

—「なんだ、大丈夫じゃないか」

亞「は、はい……………」

—「改めて、よろしくな亞莎」

亞「お、お願いしましゅ……………／＼」

しかし、すぐに顔を伏せてしまった。

—「やっぱりすぐには慣れないか」

亞「うう……………済みません……………」

—「いいえ。ゆっくり慣れていってくれたらいいよ」

亞「はい……お優しいんですね御遣い様」

一「そうか？普通だと思うけど。あと俺の事は一成でいいよ」

亞「わかりました一成さん」

笑い合う俺と亞莎。

穩「あら〜〜早速一人陥落ですね〜」

穩が冷やかす様に言う。

亞「あ〜〜……／＼」

一「陥落？何が？」

穩「うふふ〜、何でもないですよ〜」

一「？」

雪「一成ってもしかして、亞莎みたいな娘が好きなのかしら？」

冥「さあな……」

祭「やるのお秋月。出会ったばかりの女子を落とすとは」

蓮「……………」

思「どうされました蓮華様？」

蓮「な、何でもないわ……………」

思「はあ……………」

こうして、無事に三人と合流出来た俺達は、残りの人物と合流する
為に行軍を再会した……………」

第三十二話 一度でいいから様って呼ばれてみたい(後書き)

作「あゝ面倒臭かったゝゝ。こんな事なら最初から蓮華達出してればよかった」

一「ならそうすればよかっただろうが」

作「そしたら美羽とのフラグが立たないだろ。だから今回こうしたんだから」

一「ちょっと強引すぎないか？ってか美羽があんなに素直なのっておかしいだろ」

作「ただでさえ出番の少ないキャラなんだから多少の無茶は許して欲しい」

一「俺じゃなくて読者の方に言えよ」

作「お願いします」

一「もっと強く！」

作「お願いします！！」

一「もっと！！」

作「しゃあああああつす！！」

一「……」

作
「
.
.
.
.
.
」

第三十三話 放火 駄目絶対！（前書き）

戦闘描写が書けない・・・

そして・・・ネタが無い！！

第三十三話 放火 駄目絶対！

—「次は誰と合流するんだ？」

雪「もう一人の妹の孫尚香と周泰の二人よ」

—「もう一人いたのか」

雪「あの娘は私に似てるからきつとあなたの事も気に入るはずよ」

—「だといいんだが・・・」

行軍再会から数刻後。合流地点で俺達を待っていたのは二人の少女だった。

？「やつほ〜お姉ちゃん！雪蓮姉様！」

雪「小蓮、久しぶりね」

蓮「元気になっていた？ケガは無い？」

？「もう、また子ども扱いして！明命もいたんだし見ての通り全然大丈夫だよ」

？「はい！小蓮様はご自分の役目をしっかり果たしております！」

蓮「いいのよ明命、気を使わなくても」

？「むっ！ひどいよお姉ちゃん！」

？「あの、蓮華様。小蓮様は本当に……」

蓮「ふふっ、冗談よ。ごめんなさい小蓮。久しぶりに会えて嬉しかったからつい……ね？」

妹に笑顔を向ける蓮華。

—「へえ……」

雪「どうしたの一成？」

—「蓮華もあんな風に笑うんだな」

思「当たり前だ。貴様は蓮華様を何だと思っているんだ」

—「いや、なんだかずつと張り詰めている様な気がしてな。今は感じられないけど……」

祭「ほお……よく見ておるな秋月」

冥「やはり捨て置くには惜しいな。秋月よ、お前が望むならすぐにも軍師として鍛えてやるが……どうだ？」

—「遠慮しておくよ。前にも言ったけどガラじゃない」

穩「そうですね。せつかく私が手取り足取り教えてあげようと思っただんですが」

亞「……残念です」

雪「一成の言う通りよ。いつもは毅然とした態度を執っているけれど、あれが本当の蓮華よ」

一「そうか」

雪「今はまだ無理かもしれないけど、そのうち必ずあなたにも笑顔を見せてくれるはずよ。頑張りなさいね一成」

一「頑張るって何をだよ……」

？「ねえねえ、あなたが文に書かれていた人よね？」

蓮華と話していた二人が近づいて来た。

蓮「……」

蓮華を見ると、先程までの笑顔はなく、懨然とした顔をしていた。

一「初めまして、俺の名前は秋月 一成だ」

？「私は周泰、字は幼平。真名は明命といいます！」

—「よろしく明命」

明「はい！」

ふむ、元気な娘だな。

?「シャオは孫尚香だよ。真名は小蓮だけど、あなたはシャオって呼んでいいよ」

—「え？」

小「シャオあなたの事気に入っちゃった ねえ、一成って呼んでいい？」

—「あ、ああ。それが俺の真名みたいなものだからな」

小「ありがと一成。それにしても・・・姉様ずるいよ。こんな格好良い人と一緒にいたなんて」

俺に抱きつく小蓮・・・もといシャオ。

雪「ちよつと小蓮！私の一成から離れなさい！！」

—「俺はいつ君の物になつたんだ？」

小「いいじゃない。姉様だってやってるんでしょ？」

雪「私だって数回しかやってないわよ！」

反対の腕に抱きつく雪蓮。

—「話を聞け・・・というか離れてくれ」

冥「雪蓮、お前まで何をしている・・・」

祭「孫家の二人をたらし込むか。秋月よ、もしかしたら本当にお主が冥の王になるかもしれんのお・・・」

穩「羨ましいですね〜〜亞莎ちゃん」

亞「な、何で私に聞くんですか!？」

穩「わかってるくせに〜〜」

亞「ツ・・・／／」

明「はうあ!一成さんは大人気です!!」

思「・・・くだらん」

誰か、この状況を何とかしてくれ・・・

蓮「いいかげんにしてください姉様!!」

雪「どうしたの蓮華? そんなに大声出して」

蓮「どうしたではありません! 王ともあるう方がその様な振る舞いをされては兵に示しがつきません!!」

小「ぶくく! 相変わらず石頭なんだから」

蓮「小蓮!」

雪「やれやれ、もう少しこのままでいたかったけど、しょうがないわね」

二人が離れ、ようやく解放された。

—「ありがとう蓮華。助かったよ」

蓮「お前の為ではない。私は孫家の者として当然の事を言っただけだ」

—「それでもだよ。ありがとう」

蓮「わ、わかったからもう止める」

—「ああ」

蓮「ツ……／＼」

礼を言うと蓮華の顔が若干赤くなった。

—「（しまった、しつこくし過ぎたか？）」

小「あれ〜？お姉ちゃん顔が赤いよ」

蓮「ツ!？」

雪「あら本当。どうしたのかしら蓮華？」

蓮「な、何でもありません!！」

小「ふうん……」（ニヤニヤ）

雪「そう……」（ニヤニヤ）

蓮「な、なんですかその顔は？」

雪・小「別に〜」

蓮華が二人に何か言われている。

—「祭さん、俺は蓮華を怒らせる様な事をしてしまったんでしょうか？」

祭「いや、お主は何もしておらん。お主はな……」

—「？」

冥「雪蓮、ふざけるのもそこまでだ。古城まではあと半日、今の内に作戦を考えた方がいい」

雪「はいはい、わかってるわよ」

冥「秋月、亞莎、何か意見はあるか？」

亞「わ、私ですか!？」

—「なんで俺まで……」

冥「これが見取り図だ」

俺と亞莎の前に古城の見取り図が広げられた。

冥「どうだ、何か思いついたか？」

—「……なあ亞莎、籠城する時は普通兵糧や武器を充分貯蔵しておくものだよな？」

亞「は、はい。そうしないと戦えませんから」

—「だったらそれを使えなくしてやればいいんじゃないか？」

亞「そうですね。おそらくこの倉庫に納められているはずですよ。見取り図を指す。」

一「手っ取り早くやるんだったら燃やすのが一番だな。あとはどうやって兵を動かすかだけど・・・」

亞「正面から攻める囿役と、中に侵入して火を放つ役に分けるのが一番だと思います。その後、開門してなだれ出て来た賊を本隊が一気に殲滅するのがよろしいかと」

一「だな。どうだ冥琳？」

冥「うむ、確かに今の我々にとっては最善の策だな」

亞「あ、ありがとうございます！」

雪「やるじゃない亞莎」

蓮「言ったでしょう姉様。亞莎は普段はしっかりしているって」

穩「一成さんもなかなかの読みでしたねぇ」

祭「将としての知は充分のようじゃな。武の方も期待しておるぞ」

冥「では、囿役は秋月と祭殿。侵入役は思春と明命に任せる。成功率を上げる為に作戦決行は夜とする」

一「了解」

祭「腕が鳴るのお」

明「お任せ下さい！」

思「御意」

冥「雪蓮達は門が開くまで待機」

蓮「わかったわ」

小「は〜い」

雪「え〜、私も一成と一緒にきたかったのに〜」

冥「許すと思うか？」

雪「ですよ〜」

王が囿ってまじだろ・・・

夕刻、古城にたどり着いた俺達は短い休憩を取った。

そして迎えた夜。

—「さて……」

思春と明命はすでに侵入する為に出発している。

祭「そういえば秋月、お主武器はどうした？」

雪「まさか……あのかめらってやつが武器じゃないわよね？」

—「そんなわけないだろ。ちゃんと準備してるよ」

手甲を発現させる。

亞「ふわわ！？何処から出したんですか!？」

—「話すと長くなるから戦いが終わったら説明するよ」

祭「では、行くか秋月」

—「はい……あ、そうだ冥琳」

冥「なんだ？」

—「門ってさ、別に俺がぶち破っても問題無いよな？」

全員「え？」

「……………何でもない」

さあ、しっかり時間稼ぎさせてもらうか……

S I D E O U T

待機組 S I D E

雪「どういう意味かしら？」

冥「まるで一人で門を突破出来る様な口振りだったな」

蓮「何を馬鹿な。あの巨大な門を一人で開くなど……」

小「でも一成って天の御遣いなんですよ？なら出来るんじゃない？」

亞「開くんじゃなくて破るって言ってましたよね？どうする気なん
でしょう？」

穩「ああ！一成さんの秘密が気になります……！！」

冥「穩、こんな時くらい我慢しろ」

待機組SIDE OUT

IN SIDE

祭「秋月よ、さっきの言葉はどつ言つ意味じゃ?」

一「言葉通りですよ。あの程度の作りの門でしたら簡単に破壊出来ますから」

祭「・・・さらつと恐ろしい事を言つのは」

一「そうですね?」

祭「仮にお主がその力を私欲の為に使つたら・・・おそらく止められる者は存在せんじやろつな」

一「それはあり得ません。俺は仲間の為にしか力は使いません」

祭「ふむ、やはりお主はいい男じゃな」

一「」
「」

祭「見せてもらつぞ。お主の力を」

一「任せてください。祭さんは必ず守ってみせます」

俺がそう言つと祭さんが呆氣にとられた顔をした。

祭「お主が……儂を？」

—「俺の戦いは仲間を守る戦いですから」

祭「はっはっは！儂を守るか。そんな事を言われたのは初めてじゃぞ秋月！！」

—「あ、すみません。祭さん程の強さを持つ人に守るなんて失礼ですよね」

祭「何を言つておる。嬉しいぞ秋月」

—「え？」

祭「男に守ると言われて喜ばん女はおらんぞ。久しぶりに心打たれたわい」

—「はあ……」

そう言うものなのか？よくわからん。

祭「しかし、こんな老骨の心を揺さぶるとは……若造のくせに生意気じゃぞ」

「老骨って・・・祭さんは充分お若いじゃないですか」

どうでもいいが実年齢は何歳なんだろう？

「いや・・・気にしては駄目だ」

祭「・・・お主はもう少し考えて発言するべきじゃ・・・／／」

「はい？」

祭「はあ・・・」

S I D E O U T

明命・思春 S I D E

明「囿のみなさんが動き始めた様ですね」

思「ああ、今の内だ」

二人は闇夜に紛れ、あっという間に倉庫に到着した。

明「あっけなかつたですね。警備も無しなんて」

思「賊など所詮こんな物だ。それより早く火を点けるぞ」

明「はい」

点火され、徐々に広がっていく炎。

思「よし、このまま燃え広がれば……」

賊「なっ！？火が！！」

その時、一人の賊が炎に気付いた。

思「チイツ！気付かれたか！？」

明「ど、どうしましょう！？」

思「ここまで広がれば充分だ。撤退するぞ！」

明「わかりました！」

賊「大変だ～～！倉庫が火事だ～～！！」

賊の叫び声を背に、二人は再び闇夜の中に消えた……

明「……はあ、ここまで来れば大丈夫ですね」

思「門はどうだ？」

明「まだ閉まってます」

思「まずいな。このままでは囿部隊が危険だ」

明「私達も行きましょう！」

思「ああ、そうです……」

バゴオオオオオオオオン!!!!

明「はうあ!?!」

思「何だ!?!」

突如響き渡った轟音に身を竦ませる二人。

明「何の音ですか……って、はわわわわ!?!」

思「どうした明命!？」

明「し、思春さん!も、門が……!!」

思「門……?」

明命の言葉に思春が門に目を向けると

思「なっ!?!」

そこにあつたはずの門は木っ端微塵に粉碎され瓦礫の山と化して
いた。

思「いったい何が……」

明命・思春SIDE OUT

待機組SIDE

雪「まだかしら?」

冥「落ち着け、もう少しだ」

小「あつ！あそこ見て！火の手が上がってる！！」

蓮「後は門が開くのを待つだけね」

だが、待てども待てども門の開く気配は無かった。

穩「どうしたんでしょ〜？」

雪「火を消そうとでもしてるんでしょ。全く、あそこまで燃え広がったらどうしようもないでしょうに」

亞「囀のみなさん大丈夫でしょうか？」

冥「このままではまずいな。雪蓮、急いだ方がいい」

雪「そうね、全軍！急いで囀部隊の援護に・・・」

バゴオオオオオオオン！！！！

全員「ッ！？！？」

雪蓮の号令は、轟音にかき消された。

小「わわわ！なにになに！？」

亞「ツ！み、みなさんあれを！！！」

蓮「も、門が……」

穩「あらら〜、見事に木っ端微塵ですな〜」

雪「一成かしら？」

冥「まさか……本当に破壊したと言っのか！？」

雪「何にせよ好機ね。行くわよみんな！！！」

兵達「お、応ッ！！！」

待機組 SIDE OUT

IN SIDE

—「まだか？」

火の手が上がって数十分が経過したが、未だに門は閉じたままだった。

祭「秋月！無事か！？」

弓を構えつつ祭さんがやって来た。

―「俺は大丈夫です。祭さんは？」

祭「俺も問題無い。しかし、このままでは埒があかぬぞ！」

仕方ない……やるか。

―「祭さん……急いで兵達に俺から離れるよう伝えてください」

祭「何をする気じゃ！？」

―「出て来ないのなら引き摺り出すまでです」

両手にオーラを収束する。

祭「これは！？皆、急いで秋月から離れよ！！！」

兵達「えっ？！」

祭「早くしろ！巻き込まれたいのか！！！」

兵達「は、はい!!」

周りに人がいない事を確認し、門に向かって気弾を放った。

—「はあああああ!!!!」

バゴオオオオオオオン!!!!

凄まじい音と共に門は瓦礫と化した。

—「……もう少し加減した方がよかったか？」

正直やり過ぎた。

賊A「う、うわあああああ!!!!」

賊B「化物だあああああ!!!!」

賊C「逃げろ!!殺されるぞ!!!!」

次々と城から出て来る賊達。

祭「わ、僕は夢でも見ておるのか？まさか・・・こんな・・・」

一「祭さん。敵が出て来ましたよ」

祭「・・・・・・・・」

一「祭さん？」

祭「・・・・・・・・はっ！な、何じゃ秋月？」

一「行きましょう。敵が出て来ました」

祭「あ、ああ。そうじゃな・・・」

どうしたんだ祭さん？さっきまで元気だったのに、今はとても疲れた顔をしている。

その後、待機していた本隊が合流し明命と思春も加わったおかげで、あっという間に賊は壊滅した。

呉へ戻る道中、全員から質問責めにされ、呉にたどり着いた時には俺はすっかり憔悴しきってしまった。

亞「そう言えば、天の御遣いには別の異名があると聞いた事があります」

雪「そうなの？教えてよ一成」

一「……………破壊神」

全真「……………なるほど」

第三十三話 放火 駄目絶対！（後書き）

作「さて、やっと全員そろったな」

一「戦闘描写皆無だったな」

作「いいじゃん、チートしたし」

一「てかお前さ、いいかげんこの時代に合った戦い方させるよ」

作「いいんだよ。さっさとストーリー進めなきゃならんのに、こんな所で時間をかけるわけにはいかん」

一「ずっとこんな調子で進めるのか？」

作「まさか。今はあくまでプロローグ、本当の戦いは反董卓連合編からだ」

一「プロローグに三十話以上かけてんじゃないやねえよ！！」

作「冗談だよ」

一「……笑えねえよ」

第三十四話 普段笑わない娘が笑った時の破壊力は異常（前書き）

お待たせしました、呉の拠点イベントに入ります。

第三十四話 普段笑わない娘が笑った時の破壊力は異常

古城での戦いから一週間、合流した仲間とも少しうちとける事が出来た。

—「おはよう蓮華、思春」

蓮「あ、ああ……」

思「……」

この二人以外とだが……

—「やっぱり、避けられてるのか？」

蓮華はなんだか戸惑っている様だし、思春なんてあいさつすらしてくれない。

—「まあ、仕方ないか」

？「なにが仕方ないの？」

フニユン

「「どうおあ!?!」

突如背中に感じた柔らかい感触に飛び上がる。

雪「おはよう一成、朝から元気ね」

「「し、雪蓮?」

雪蓮が笑みを浮かべながら俺に抱きついていた。

雪「それで、どうしたの?何か考えているみたいだったけど」

「「ああ、実は・・・」

フニユン

「「・・・」

雪「実は?」

フニユン

「……雪蓮、離れてくれないか？」

雪「え〜〜どっしして〜？」

フニユン

雪蓮が身動きする度に、背中感触が強くなる。

「……てる」

雪「え？」

「む、胸が背中に当たってるんだが……」

雪「当然よ、当ててるんだから」

「はい？」

雪「ふふっ、柔らかいでしょ」

どっちら俺をからかっているつもりの様だが……

「……こういう事は好きな人にだけするべきだ」

雪「だからしてるんじゃない」

—「冗談はいいから早く離れてくれ」

雪「……冗談じゃないんだけど」

なぜか頬を膨らませながら離れる雪蓮。

雪「話が逸れちゃったけど、さっき言いかけた事話してくれない？
何か力になれるかもしれないし」

—「ありがとう雪蓮、実は蓮華と思春の事なんだが……」

先程のやりとりを伝える。

—「……というわけで、どうやら俺は二人に避けられているみたいなんだ」

雪「思春は仕方ないとして……まったく、困った娘ね……
わかったわ、私に任せて」

—「いいのか？」

雪「もちろん、そうね……明日の朝、玉座の間に来てちょうだい」

—「明日？何かあるのか？」

雪「それは明日のお楽しみよ」

なんだ？雪蓮の笑顔に嫌な予感しかしない。

雪「忘れないでね〜」

そう言い残し、雪蓮は去って行った……

翌日、言われたとおりに玉座の間に向かった。

雪「来たわね一成」

—「雪蓮、いったい何を……」

雪「まあまあ、もう少しで来ると思っから」

—「来る？」

蓮「どうしたんですか姉様？私だけ呼び出すなんて」

やって来たのは蓮華だった。

—「あれ、蓮華？」

蓮「あ、秋月！？」

—「一成でいいって言ったはずなんだが」

蓮「わ、私の勝手だろう」

—「それはそうだが・・・」

雪「はいそこまで。話を進めるわよ」

—「ああ」

蓮「はい」

雪「蓮華、あなた一成を避けているそうね？」

蓮「別にそんな事は・・・」

雪「あなたの性格からして、一成の事をすぐに受け入れられないのはわかるわ」

蓮「・・・はい、姉様の言う通りです」

雪「そこで私は考えたの、一成の事をもっと知れば蓮華も一成を認めるんじゃないかって」

蓮「は、はあ……？」

雪「というわけだえ、今から二人で街に出かけなさい」

一・蓮「……はい？」

俺と蓮華の声が見事に重なった。

雪「仲良くなるには一緒に過ごすのが一番、それに蓮華は最近頑張り過ぎだからね、丁度いい息抜きになるわ」

蓮「ね、姉様の心遣いは嬉しいですが、だからってどうして私がこの男と一緒に……」

雪「ちなみに命令だから断れないわよ」

蓮「ぐっ……」

雪「それじゃ、楽しんでらっしゃい」

雪蓮は玉座の間を出て行った。

一「あの顔……楽しんでるのは雪蓮の方じゃないか？」

蓮「……」

—「蓮華、嫌なら別に……」

蓮「行くぞ秋月」

—「行くなって……何処へ？」

蓮「街に決まっているだろう。話を聞いていなかったのか？」

—「しかし……」

蓮「命令ならしかたないだろう」

—「わかった、行こう」

蓮「ふんっ……」

大丈夫だろうか……

S I D E O U T

蓮華 S I D E

姉様に言われ、秋月と街に出たわけだけど……

秋「今日も賑やかだな」

蓮「そうだな・・・」

秋「天気もいいし」

蓮「そうだな・・・」

秋「絶好の散策日和だな」

蓮「そうだな・・・」

秋「・・・」

蓮「・・・」

秋月はしきりに話しかけてくれるけど、私は同じ様に答える事しか出来なかった。

街人A「あれ、御遣い様に孫権様じゃないですか」

秋「こんにちは」

街人B「どうされたんですか？」

秋「ブラブラしに来ました」

街人C「今日は孫権様とご一緒なんですね」

秋「雪蓮に駆り出されまして・・・」

民達と楽しそうに話す秋月。

蓮「え？」

その姿が、一瞬雪蓮姉様と重なって見えた気がした。

秋「どうしたんだ蓮華？」

蓮「なんでもない、それにしても、ずいぶんと仲がいいのだな」

街人B「御遣い様にはいつもお世話になっていきますから」

街人A「この前はウチの店の手伝いをして頂きましたし」

街人C「俺のとなりの子どもの遊び相手になって頂いた事もありますよ」

蓮「お前・・・そんな事をしていたのか？」

秋「ああ、困ってたからな」

それが当然かの様に言う。

街人A「そうだ、御遣い様、これどうぞ」

一人が秋月に点心の入った包みを渡した。

秋「これは？」

街人A「この前のお礼です。食べてみてください」

秋「こんなにたくさん頂いていいんですか？」

街人A「もちろんです」

秋「ありがとうございます」

民達と別れ、街中を歩く。

秋「美味そうだな、蓮華も食べないか？」

そう言って、私に点心を見せて来た。

蓮「いらん。それに、お前が貰った物だろう」

秋「そうなんだけど、俺一人じゃ食べきれないし」

何を思ったのか、半ば強引に私の手に乗せる。

蓮「お、おい！」

秋「一緒に食べよう・・・な？」

蓮「わかった！わかったから手を離せ！！」

秋「あ、悪い」

なんのつもり！？いきなり手を掴むなんて・・・

秋「・・・うん、美味しい。蓮華も食べてみなよ、凄く美味しいぞ」

蓮「あ、ああ・・・」

一口齧る。

秋「どうだ？」

蓮「・・・美味しい」

秋「だろ？」

ドキッ！

蓮「ッ！？」

秋月の笑顔に何故か胸が高鳴った。

秋「どうした蓮華？」

蓮「な、なんでもないわ！」

秋「わ？」

蓮「はっ・・・！」

いけない、つい口調が・・・

秋「ふふっ」

蓮「な、何がおかしい！？」

秋「いや、やっと素のキミが見れたと思ってな」

蓮「なっ!?!」

秋「こんな時くらいは肩の力を抜いてもいいんじゃないかな?」

蓮「お、大きなお世話だ・・・」

秋「ははっ、すまんすまん」

蓮「ふ、ふんっ・・・」

この男と話していると調子が狂ってしまっ。でも・・・

蓮「不思議と嫌ではないのよね・・・」

秋「何か言ったか?」

蓮「なんでもない、それよりこれから・・・」

?「うえええええん!!」

突然聞こえて来た泣き声が私の声を掻き消した。

蓮「な、なんだ?」

秋「・・・あそこの娘だ」

秋月の示す先には一人の女の子が佇んでいた。

秋「気になるな、行ってみよう」

蓮「お、おい秋月」

秋「見た以上、放っておくわけにはいかないだろ」

蓮「仕方ないな・・・」

女の子の元へ向かう。

少女「うええええん！お母さあああん！！」

秋「どうしたのかな？」

少女「ええええん！！」

蓮「お母さんとはぐれちゃったの？」

少女「うわああああん！！」

話しかけてみるが、聞く耳持たずで泣き続ける女の子。

蓮「困ったわね、どうすれば……」

ポン

少女「うええええん……ふえ？」

秋月が女の子の頭に手を乗せると、ぴたりと泣きやんだ。

秋「よしよし、怖かったのかな？もう大丈夫だからね」

ナデナデ

少女「ふわぁ……」

頭をなでられ、幸せそうな顔をする女の子。

少女「お兄ちゃんの手、温か……い」

秋「ふふっ、そうかい？」

完全に落ち着いたのか、涙もすっかり止まっていた。

蓮「慣れているのね」

秋「昔から泣いている子や落ち込んでいる子にはこうしてたからな」

蓮「とにかく、これで話が聞けそうね」

秋「ああ・・・ねえ、キミ、どうして泣いていたのか教えてくれな
いかな？」

少女「うん、あのね、お母さんと一緒にお買い物しててね、きれいなちょうちゃんを見つけたの。それでね、追いかけてたらお母さんが見つからないの」

秋「えっと・・・つまり？」

蓮「迷子でいいんじゃないかしら？」

秋「それは大変だな、よし！俺も一緒にお母さんを探してあげるよ」

少女「ほんとに！？ありがとうお兄ちゃん！」

秋「というわけで蓮華、俺はこの娘のお母さんを探すからキミは先に城に・・・」

蓮「何言ってるの秋月？私も手伝うわよ」

秋「え？」

蓮「こんな小さな娘を放つて先に帰るなんて出来るわけないでしょ」

少女「お姉ちゃんも一緒に探してくれるの？」

蓮「ええ、もちろんよ」

少女「ありがとうお姉ちゃん！」

蓮「ふふっ……」

抱きついて来る女の子に思わず笑みがこぼれる。

秋「……これで二回目だな、キミの笑顔を見るのも」

蓮「え？」

秋「やっぱりキミは笑顔の方がいいよ」

蓮「なっ……／＼」

い、いきなり何を!?

少女「あれ?お姉ちゃん、顔が赤いよ?」

蓮「だ、大丈夫よ!さあ、早く探しましょう!」

蓮華SIDE OUT

IN SIDE

少女「それでね、お父さんとお母さんはいつつもちゅくしてるの」

—「そうか、葵ちゃんのお父さんとお母さんはとても仲がいいんだね」

少女「うん」

少女「……葵ちゃんのお母さんを探しつつ、不安にさせないよう
に絶えず会話を続ける。」

ちなみに葵は真名だが、この娘は名前についてまだよくわかってな
いらしく、こつして真名で呼ぶようお願いしてきた。

葵「ねえねえ、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

—「ん？」

蓮「何かしら？」

葵「二人は恋人さんなの？」

一「え？」

蓮「なななな！？」

一「七七？」

何言ってるんだ蓮華？

葵「男の人と女の人が一緒にお出かけするのは恋人同士だからって
お母さんが言ってたの」

お母さん、あなた娘に何教えてるんですか・・・

蓮「そ、そそ、そんなわけないでしょ！！」

葵「ふえ？そうなの？」

一「別に恋人同士じゃなくても一緒に出かける事もあるよ。それに、
蓮華の様な可愛い娘に俺みたいなお普通の男はつりあわないよ」

蓮「か、かわっ！？」

葵「そんな事ないよ〜、お兄ちゃんとっても格好良いもん」

—「嬉しい事言ってくれるね」

蓮「ツ~~~~／／」

—「あれ、蓮華、どうし・・・」

?「葵!」

—「お?」

一人の女性が駆け寄って来た。

葵「あ、お母さん!」

母「葵・・・無事でよかった」

—「思ったより早く見つかったな」

蓮「そ、そうね。よかったわ」

—「蓮華、さつきから様子がおかしいぞ?」

蓮「わ、私はいたって正常よ!」

母「御遣い様に孫権様まで・・・どうされたのですか?」

葵「あのね、お兄ちゃんとお姉ちゃんが一緒にお母さんを探してく

れたの」

母「まあ！なんとお礼を申し上げればいいか」

—「いいですよ別に、俺は当然の事をしただけですから」

蓮「秋月の言う通りだ。気にするな」

母「は、はい、本当にありがとうございます」

葵「ねえ、お兄ちゃん、お願いがあるんだけど・・・」

母「葵！御遣い様をお願いなんて！」

—「いいですよ別に・・・何かな葵ちゃん？」

葵「あのね、葵・・・お兄ちゃんのお嫁さんになりたい！！」

蓮・母「「え？」」

—「お、俺の？」

葵「お兄ちゃん格好良いし、優しいし、葵の事ナデナデしてくれたし、大好き！！」

—「あ、ありがとう・・・」

葵「待っててねお兄ちゃん！葵、すぐに大きくなるから！」

母「し、失礼します！」

何故か顔を青くさせた母親に手を引かれ、葵ちゃんは去って行った。

—「俺はロリコンじゃない!」

蓮「良かったわね、素敵なお嫁さん候補が出来て」

—「勘弁してくれ・・・」

蓮「ふふっ・・・」

微笑む蓮華。

—「・・・」

蓮「どうしたの?」

—「だいぶ心を開いてくれたみたいだな」

蓮「え?」

—「今も笑っていたし、それに・・・さっきから口調が変わってるぞ」

蓮「・・・ああ!」

—「もしかして……気付いてなかったのか？」

蓮「い、いつから!？」

—「葵ちゃんに会った時くらいからかな」

蓮「うう……」

—「なんだか、やっと本当の仲間になれた気がするよ」

表情も柔らかい、本当の蓮華がそこに立っていた。

蓮「……不思議ね、出会って間もない人にこんなに心を許すなんて……」

—「……」

蓮「最初はなんでこんな男が、なんて思ったけど、今日一日あなたと過ごして、なんで姉様達があなたにあんなに惹かれているのかわかった気がするわ」

そうだろうか？ただからかわれているだけの気がするが……

蓮「あなたの事、誤解していたわ。今までごめんなさい。そして、改めてよろしくね、か、一成……」

え？

—「蓮華……今、俺の事……」

蓮「あ、あなたが呼ぶように言ったんでしょ／＼」

—「……ありがとう蓮華」

手を差し出す。

蓮「何？」

—「握手だよ。よろしくの意味を込めてさ」

蓮「ふふっ、わかったわ……」

お互いに近づく。

蓮「きゃっ!?!?」

その時、突然蓮華が何かに躓き、俺の方に倒れて来た。

—「おっと・・・」

すかさず抱き止める。

蓮「ッ!？」

腕の中で体を震わせる蓮華。

—「蓮華、ケガは？」

蓮「だ、大丈夫だから・・・早く離して／＼」

—「ああ、すま・・・」

?「秋月・・・貴様、何をしている・・・」

蓮華を離そうとした瞬間、背後から殺気を感じた。

—「誰だ・・・」

蓮「し、思春!？」

思「ご無事ですか蓮華様!？」

殺気の正体は思春だった。俺と蓮華の間に立ち、射殺す様な視線を向けて来る。

蓮「あなた、どうしてここに？」

思「私は蓮華様の護衛、傍にお控えするのは当然の事です」

一「なるほど、俺達をつけていたのはキミだったのか」

蓮「え？」

街中を歩いている時、ずっとつけられている気配を感じていた。敵意がなかったので放っておいたが、まさか思春だったとはな。

思「やはり気付いていたか。しかし、そんな事はどうでもいい。もう一度聞くぞ、蓮華様に何をしようとしていた？」

一「何って、別に何も・・・」

思「とぼけるな！先程蓮華様に抱きついていただけではないか！！」

蓮「み、見てたの思春！？」

一「あれは、こけそうになったから仕方なくやったただけだ」

思「問答無用！！」

—「キミが聞いて来たんだろう!!」

剣を抜く思春。

—「こんな街中で何考えてるんだ」

とりあえず・・・

—「逃げる!」

俺は城に向かって駆け出した。

思「待て!」

すかさず追いかけて来る思春。

蓮「ま、待ちなさい思春!」

その思春を追う蓮華。

—「何処かに隠れているべきか・・・」

城に戻り、隠れられそうな場所を探す。

雪「あら、一成じゃない。もう帰って来たの？」

—「雪蓮、すまない、今は時間が・・・」

思「追いついたぞ秋月！」

—「・・・はあ」

蓮「思春！私の話を聞いて！..！」

思「わかっています蓮華様・・・この男を斬ればよろしいのでし
よう?？」

蓮「だから違うの！あれは本当に事故で・・・」

雪「なにになに?どうしたの?」

—「それが・・・」

雪蓮に事情を説明した。

雪「あら、じゃあ一成は悪くないじゃない」

思「しかし！蓮華様に抱きついたのは事実です！！」

一「だから、抱きついたんじゃないじゃなくて抱き止めただけ……」

思「同じ事だろう！！」

一「むう……」

雪「いいな、蓮華、一成の方から抱きついてももらえるなんて」

蓮「姉様！」

一「キミは人の話を聞いていたのか！？」

雪「冗談よ。それで、思春はどうしても一成が許せないのよね？」

思「当然です」

雪「だったら勝負してみない？」

一「は？」

雪「一成が勝ったら素直に許す。思春が勝ったら煮るなり焼くなり好きにしちゃえばいい。どうかしら？」

思「それはつまり、秋月を斬ってもいいと言っ事ですね？」

雪「そうなるわね」

思「やります!」

—「即答!？」

雪「決まりね じゃあ中庭に行きましょう」

—「俺の意思は？」

雪「あら、あのまま思春に追いかけて回される方が良かったかしら？」

—「むっ……」

雪「それにね、この勝負に勝てば思春もあなたの事を認めると思っている。そうすれば、あなたの悩みも解決するでしょ？」

—「雪蓮、もしかしてこうなる事がわかってたのか？」

雪「さあ、どうかしらね？」

蓮「ごめんなさい一成、私がこけたりしたから」

—「何言ってるんだ、あの時はああするのが一番だったんだから気にしないでいい」

蓮「ええ……ありがとう」

雪「あらあら、朝までと全然態度が違うわね。やっぱり出かせさせて正解だったかしら」

蓮「はい、私の考えすぎだった様です」

雪「うんうん、よかったわ。でもね蓮華」

蓮「はい？」

雪「いくら仲が良くなったからって惚れたら駄目よ？一成は私が手に入れるんだから」

蓮「なっ！？そ、そんなわけないじゃないですか！私が一成になんて・・・」

チラッ

—「ん？」

蓮「ツ~~~~~／／」

雪「（この反応、満更じゃなさそうね）」

蓮「と、とにかく！そんな事はありません！！」

雪「そう、まあそういう事にしておきましょうか」

—「さつきから何の話だ？」

雪「何でもないわよ〜」

「？」

思「秋月！何をしている、早く来い！！」

思春はやる気、いや、殺る気満々の様だ。

「やるしかないか・・・」

負けたらどんな目に遭うかわからないしな。

こうして、春蘭に続き、二人目の武将との闘いに臨む事になった・・・

第三十四話 普段笑わない娘が笑った時の破壊力は異常（後書き）

作「約二週間ぶりの更新、お待たせしていたみなさん、申し訳ありませんでした」

一「安心しろ、こんな駄文なんか誰も待っていない」

作「久しぶりだったのに、キツイな」

一「なんでこんなに遅かったんだ？」

作「・・・ゲームしてまして」

一「・・・おい」

作「仕方ねえだろお！始めたら止められないんだよ！魔機神最高
！！！」

一「ジャンキーめ」

作「あまりの面白さに二日でクリアしちまったぜ」

一「早っ！」

作「まあ、落ち着いたし、これで前みたいに小説に集中できそうだな」

一「思春との戦いか、厳しそうだな」

作「それだけで終わると思ってるのか？」

「え？」

作「呉にはバトルジャンキーなあの人がいるだろ」

「おいおい、まさか・・・」

作「まあ、楽しみにしている」

第三十五話 雨降って地固まる・・・のか？(前書き)

思春が春蘭みたいになってきた・・・

あと、若干15禁・・・かな？こつこついうの書くの初めてでよくわかりませんが・・・

第三十五話 雨降って地固まる……のか？

さて、なし崩し的に思春と勝負する事になってしまったわけだが・

雪「どっちが勝つか見物ね」

蓮「思春……凄いやる気ね」

この二人はまだいい、事情を知ってるわけだしな。

しかし……

祭「楽しみじゃのお……これで酒があれば最高なんじゃが」

冥「急に呼び出されたと思ったら……また雪蓮の気まぐれか」

穩「一成さ〜ん、頑張ってくださいね〜」

亞「私まで見物させて頂いてよろしいのでしょうか？」

小「一成！シャオに格好良い所見せてね」

明「ほ、ほんとに思春さんと戦うんですね」

「……なんでみんないるんだよ」

なぜか、他のみんなまで中庭に集まっていた。

雪「あら？こんな面白い事私達だけで楽しむわけにはいかないですよっ？」

はい！犯人発見！！

「雪蓮……またキミの仕業か」

雪「いいじゃない、みんなあなたの力が気になってしょうがないのよ……前回の一件の所為だね」

やっぱり門の破壊はやりすぎたか。

雪「最後に確認するけど、相手が気絶、もしくは降参した時点で終了よ、いいわね？」

思「わかりました」

「ふむ、つまり戦えなくさせたらいいんだな？」

雪「え？ええ、そういつことよ」

—「了解した……合図を頼む」

手甲を発現させ、思春を見据える。

思「……」

思春も鍛練用の剣を構える。何故鈴音を使わないのかは……察して欲しい。

雪「それじゃ……始め!!」

思「はあっ!!」

開始の宣言と共に、思春が斬りかかって来た。

—「（速い!）ふっ!」

ガキイイイイイン!!

その一撃を、手甲で以って防ぐ。

思「チイツ！」

—「せやっ！」

そのまま、力任せに押し返した。

—「（速さはかなりのものだが、力はそうでもないな）」

どうやら、彼女は速さと手数で勝負するタイプのようだ。

思「戦闘中に考えることは、ずいぶん余裕だな！」

体勢を整え、再び思春が襲いかかって来た。

思「ふっ！はっ！！せいつ！！！」

—「そんなっ！事はっ！！ないっ！！！」

あらゆる角度から迫る連撃を、あえて全て受け止めた。

—「（さて、彼女の戦い方もわかったし、そろそろこっちから攻め

るか……」

SIDE OUT

思春SIDE

思「（くそっ！何故斬れない！？）」

先程から何度も斬りかかるが、その全てを防がれてしまった。

秋「さすが思春、凄まじい速さだな」

思「……それは皮肉のつもりか？」

秋「まさか、素直に賞賛してるだけだよ」

その攻撃を全て防ぎきったくせに……どの口が言っている。

思「嘗めるな……！」

ガキイイイイイイン……！！

私の渾身の一撃はまたしてもヤツの右手の手甲に受け止められた。

ゾクッ！

思「ッ！？」

突如襲い来る悪寒に、急いで後ろに離脱した。

その刹那・・・

ブオン！！

秋「・・・避けられたか」

数秒前まで私がいた場所に、秋月の左拳が放たれていた。

思「（危なかった・・・）」

もし、少しでも判断が遅れていたら、あの拳は私に突き刺さってい

た。

タラリ・・・

頬に生温かい感触、触ってみるとわずかな痛みを感じた。手には少量の血。

思「まさか・・・拳圧だけで切ったというのか!?!」

秋「今度はこっちからいくぞ」

思「来い! (あの威力、一発でも喰らったらそこで終わりだ!)」

秋「はあっ!」

思「くっ・・・!」

ガキイイイイイイン!!

秋「まだまだ!」

キン!キン!!ガキン!!!

思「チイツ！！（な、なんて速さだ！！）」

避けるどころか、防ぐだけで精一杯になるなんて。

思「（それにこの重さ、このままでは潰される！！）」

これ以上時間をかければ敗北は必至、ならば……限界が来る前に決着をつけるしかない！

思「調子に乗るなあ！」

秋「なっ！？」

急な反撃に、秋月の顔が驚愕に染まった。

思「もう一撃！！」

気力を振り絞り、剣を振るう。

ガキン！！

秋「ぐうっ!!」

またしても防がれたが、無理に受け止めた所為か秋月の体勢が崩れた。

思「もらった!」

私は勝利を確信し、最後の一撃を加えようと剣を振り上げた。

これで決着がつく……はずだった。

秋「……それはどうかな?」

秋月の目はまだ死んではおらず、不敵に私を見つめていた。

思「負け惜しみか?大人しく負けを認め……」

ピキ……

思「ん?」

ピキピキ・・・

思「なっ！？剣が！？」

私の持つ剣には、いつの間にかかなりの罅が入っていた。

秋「やっと努力が実を結んだか」

思「貴様・・・いったい何をした？」

秋「・・・別に相手を打ちのめすだけが戦闘不能にさせる方法じゃない」

思「は？」

秋「むしろ、キミみたいな武将を気絶させたり、降参させたりするのはかなり難しい。だから、俺は別の方法を考えた。例えば・・・相手ではなく、相手の持つ武器を使えなくすればいい・・・ってな」

ピキピキピキ・・・

思「ま、まさか・・・」

秋「俺はキミを倒す為に戦っていたんじゃない……最初からその剣を破壊するために戦っていたんだ」

バキイイイイン！！

秋月の言う通り、何度も衝撃を与えられた剣は限界を迎え、粉々に砕け散った。

思「……なるほど、道理で私の攻撃を避けて受け止めたり、故意に私に防がせていたわけだ。あれが全て武器を破壊する為の布石だったとはな……」

秋「……わかった？」

思「わからないとでも思ったか？ 貴様ほどの速さがあれば、私に何もさせずに倒す事など造作も無いはずだ」

秋「むっっ……」

思「ただでさえ圧されていたのに、その上武器まで失ってしまったら勝てるはずもない……私の負けだな……」

思春SIDE OUT

IN SIDE

雪「そこまで！勝者一成！！」

一「勝った・・・」

手甲を消し、息を吐く。

小「一成〜〜！！」

一「ぐばっ！？」

小蓮がいきなりタツクルをかましてきた。

一「も、もろに腹に・・・」

小「格好良かったよ一成！さすがシャオの旦那様だね」

一「俺とキミは夫婦じゃないだろ・・・」

小「いいの、いずれそうなるんだから」

雪蓮もそうだが、この娘も人の話を聞いてくれないのか・・・

祭「見事じゃったぞ秋月、まさか、あんな方法で決着をつけるとは
の」

一「仲間を傷付ける趣味はありませんからね」

春蘭の時は……まあ、武器が違ったし仕方ないよな。

冥「甘いな、そのままではいずれ命を落とすかもしれんぞ？」

一「これが俺だからな、それに、死ぬつもりもないし」

冥「ふつ、だが、お前らしいな」

穩「一成さ〜くん、お見事でした〜」

一「ありがとう穩、まあ、ギリギリだったけどね」

亞「でも、あんな手甲でよく壊せましたね」

一「武器つてのはどこかに脆い部分があるからな、そこを狙えば結構簡単だよ」

亞「わ、わかるんですか!？」

一「ああ」

亞「（お互いが動きあう戦闘中の中でその部分を見つけて、しかも正確に攻撃するなんて……）凄いですね……」

明「一成さん凄いです！思春さんに勝っちゃうなんて！私なんて何回も模擬戦してるのにまだ一回も勝てないんですよ！」

—「お、落ち着け明命、顔が近い・・・」

明「はうあ！？し、失礼しました！」

—「いや、別に謝らなくても・・・」

蓮「一成、ちょっと来て」

蓮華が手招きする。

—「どうしたんだ蓮華？」

蓮「思春があなたに言いたい事があるんですって」

—「言いたい事？」

思「・・・」

蓮「ほら、思春・・・」

思「・・・すまなかつたな秋月」

—「え？」

思「お前は蓮華様を助けただけだったのに、私は感情に任せてお前を責めてしまった」

—「……………」

思「だから……すまなかった」

思春が頭を下げる。

—「なんだ、そんな事か」

思「そんな事だと？」

—「気にするな、状況が状況だったし、誤解が解けたんなら充分だ」

思「しかし……………」

—「それに、大切な人が危険な目に遭いそうになったら頭に血が上るのは当然の事だしな」

思「秋月……………」

蓮「ね？私が言った通りでしょう？」

—「蓮華、思春になんて言ったんだ？」

蓮「あなたはきつと気にしてないから謝る必要はないって言ったの。なのに思春ったら、あなたに謝りたいって言って聞かなかったし……」

」・

思「れ、蓮華様!？」

蓮「ふふっ」

—「そうか・・・」

思「な、なんだ・・・？」

—「いや、責任感の強い娘だと思ってな」

思「なっ!？」

蓮「どうしたの思春? なんだか顔が赤いわよ?」

思「なんでもありません!!」

蓮「そ、そう・・・？」

さて、思春と少し打ち解ける事が出来たし、これで終わり・・・

雪「・・・ああ! もう我慢できない! —成、次は私と勝負よ! —!」

—「だが断る!」

雪蓮の誘いを即座に斬り捨てる。

雪「いいじゃない、もう一戦くらい」

—「勝負する理由が無いだろ・・・」

雪「何言ってるのよ、あなたと思春が勝負した所為で体が疼いてしようがないのよ？ だったらあなたが責任を取るのは当然じゃない！」

—「勝負するよう言ったのはキミだろうが！！」

雪「あ～～あ～～！ 聞こえな～～い！！」

—「子どもか！！」

祭「うゝむ、出てしまったのぉ、策殿の悪い癖が」

冥「強い者を見ると戦いたくなる・・・その所為で今までどれだけ迷惑したことが・・・」

—「なんだよその悪癖・・・」

蓮「姉様！ 一成は勝負を終えたばかりですよ！？ 少しは考えてください！！」

雪「なによ～～、蓮華までそついう事言うの～～？」

いいぞ蓮華、もっと言ってやってくれ、そして雪蓮、少しは自重しろ！！

雪「一成……どうしても勝負する気はないのね？」

「ああ……」

睨みあう俺と雪蓮。

雪「……わかったわ、勝負はあきらめる」

「そうか」

雪「でもね、この疼きは簡単には収まらないの。だからあ……」

ガシッ！

「なっ!?!」

一瞬で俺の首根っこを掴む雪蓮。

雪「あなたには別の方法で私の疼きを止めてもらっわ」

「別の方法？」

雪「さあ一成、私の部屋に行くわよ!」

一「なんで?」

雪「わかってるくせに」

一「いや、さっぱりなんだが」

わけのわからないまま、俺は雪蓮に引き摺られ、彼女の部屋に向かった……

祭「ふむ、秋月のヤツ、策殿相手にどれくらい持つかの?」

冥「さあ、どうでしょうね……」

亞「あ、あの……雪蓮様と一成さんどうされたのですか?」

明「なんだか、雪蓮様様子がおかしかったですよね?」

冥「そういえば、お前達は知らなかったな。雪蓮はな、強い者を見ると体が疼くというやつかいな癖を持っている」

祭「本来なら、戦う事によってその疼きは収まるんじやが、秋月はそれを拒否した。じゃからもう一つの方法をとるつもりなのじや」

亞「もう一つの方法……?」

明「なんですか？」

祭「それはの……ゴニヨゴニヨ……」

亞・明「ツ~~~~~／／」

祭「はっはっは！お主達には刺激が強すぎたかの？」

亞・明「あうあう……／／」

ガチャ

雪蓮が自室の扉を開き、俺を招き入れた……というか、引き摺り込んだ。

—「雪蓮、いったいどうしたんだ？」

雪「一成……」

—「雪蓮？」

雪蓮の様子がおかしい、瞳が潤み、頬が蒸気している。こころなしか息も荒い様な……

雪「はあっ、はあっ……一成」

「雪蓮。本当にどうしたんだ？体調が悪いんなら寝台に横に……」

雪「そうね、寝台に行かなきゃ……ね！」

グルン！

「ツ！？」

瞬間、世界が回った。どうやら、雪蓮に投げられた様だ。あまりに突然の事に受け身もとれず、俺は寝台に落とされた。

「ぐはっ！」

雪「一成！！」

雪蓮が俺に覆いかぶさり、そして……

「ムグッ！？」

俺の唇に押し付けるようなキスをしてきた……ってちよっ!?

雪「ん……はあっ……」

数秒後、満足したのかゆっくりと雪蓮が離れた。

—「し、雪蓮!?何を!？」

雪「うふふ……」

妖艶に笑う雪蓮に嫌な予感がした。

—「待てよ……」

ただ事で無い様子に、原作を思い出してみる。確か……戦終わりに今みたいな状態になって、一刀君を拉致って、それで……

—「……ああ!!」

俺は全てを理解した。マズイ!とにかくマズイ!なんとか脱出しなければ!!

雪「はあっ、はあっ、どうしたの一成？」

一「雪蓮、俺、用事があるんだが・・・」

雪「大丈夫、すぐに終わるわ。あなたは天井の染みを数えていればいいの」

一「その台詞は色々ヤバいから言っちゃ駄目だ!!」

雪「ふふっ、いただきま〜す」

仕方ない、最後の手段だ！

一「ごめん雪蓮！」

トンッ

雪「あっ・・・」

首筋に手刀を打ち、雪蓮の意識を断つ。

一「た、助かった・・・」

気絶した雪蓮を寝台に寝かせ、俺は部屋を後にした……

祭「おお、秋月ではないか」

部屋に戻る途中、祭さんに会った。

祭「ずいぶん早い帰りじゃな、それで……どうじゃった？策殿は満足したのかの？」

―「雪蓮なら気絶させました」

俺がそう言つと、祭さんが心底驚いた顔をした。

祭「あの策殿が気絶じゃと！？うむむ……どれだけのものを持っておるのじゃ？」

―「祭さん？」

祭「益々気に入ったぞ秋月、いつか儂も肖りたいものじゃ」

―「はあ……」

祭「はっはっは！後で策殿に感想でも聞いてみるかの」

謎の言葉を残し、祭さんは去って行った。

「……………寝るか」

肉体よりも、精神的に疲れた俺は寝台に横になった途端、すぐに意識を失った……………

第三十五話 雨降って地固まる……のか？（後書き）

作「今回は、ちょっと大人な話だったな」

一「テメエ……よくもあんな目に遭わせてくれたな……」

作「キスの味はどうだった？」

一「……死ね」

バキッ！

作「ぎゃあああああ！！」

一「もう一度殴られなくなかったらさっさと立て」

作「はい！」

一「それで……どうしてああなった？」

作「原作なら戦の後にあったイベントだけど、たぶん、呉にいる間に戦はもう起きないと思うから、今回入れてみた」

一「今度こそファンの方に叩かれるかもな、そして、耐え切れなくなったお前は失意のうちに執筆を止め、この小説は永遠に完結する事は無くなるんだな……」

作「勝手に未来予想図描くな!!」

一「超ドンマイ」

作「慰める気ないだろ？」

一「ああ」

作「……………」

第三十六話 猫まっしぐら（前書き）

動物に好かれる人と嫌われる人の違いってなんなんでしょうね。

ちなみに私は、何もしていないのに犬に追いかけられたりタツクルされたりした事が三回あります・・・ええ、嫌われてますよ動物に。

第三十六話 猫まっしぐら

—「ふう……風が気持ちいいな」

思春との戦いから三日、俺は何の気なしに城壁の上で涼んでいた。

—「あの日から思春も話し掛けてくれるようになったし、雪蓮の言う通りだったな。まあ……本人にはとんでもない目に遭わせられかけたけど……」

本当に思い出せてよかった。

—「……ん？」

ふと、向こうの方に見知った姿を見かけた。

—「あれは……明命か？」

あの黒髪に長刀、間違いない。

—「何してるんだ？」

気になった俺は明命の元に向かった。

—「明命、こんな所でどうしたんだ？」

明「……………」

明命は答えず、彼方を見つめているだけだった。

—「何か見えるのか？」

明「……………」

—「明命……………」

何度話し掛けても反応が無いので、試しに目の前で手を振ってみた。

明「はうあ！？ な、なんですか？」

—「やっと気付いてくれたか」

明「あれ、一成さんじゃないですか。こんな所でどうしたんですか？」

「そう言う明命こそ、さっきからじつと彼方を見つめてどうしたんだ？」

明「私ですか？ 見張りをしているのです」

「見張り？」

明「はいっ！ いつ敵が攻めて来るかわかりませんから、しっかりと見ておかないといけないのです！」

「そうか、明命は偉いな」

明「いえ、当然の事です！」

ふむ、真面目な娘だな。今も会話をしながら視線は外していない。

くきゅるるる……

その時、明命のお腹から可愛らしい音がした。

「明命、お腹空いてるのか？」

明「大丈夫です」

言い切る明命。もしかして……今の音に気付いてないのか？

「（どうやら、この娘は一つの事に集中すると周りの事が気にならないようだな・・・）」

明「今のところは異常無し・・・と」

「（いかにも彼女らしいが、ご飯くらいきちんと食べるべきだ）」

そう思った俺は、一旦その場を後にして街に向かった・・・

「これだけあれば充分か」

とりあえず十個ほど肉まんを購入して城壁に戻る。

「おい！ 明命~~~~！」

明「あ、一成さん。急に居なくなつててびっくりしましたよ」

「すまない、これを買に行つてたんだよ」

肉まんを見せる。

明「美味しそうな肉まんですね。どうしたんですかこれ？」

—「差し入れだよ」

明「え？」

—「これなら見張りしながら食べられるだろ？」

明「もしかして……私の為にですか？」

—「さつきからそう言ってるんだが……」

袋を渡す。

明「あ、ありがとうございます！」

—「どういたしまして。見張り頑張ってたな」

明「はい！」

余計なお節介かと思っただが、喜んでもらったみたいでよかった。

—「それじゃあ、俺はこれで……」

ぐきゅるるるー！

明「はうあ!？ 凄い音です!」

—「……………」

今度は俺の腹の虫が盛大な音をたてた。

—「そういえば、俺朝飯食ってなかった……」

明「そうなんですか?」

—「ああ、寝坊してな」

丁度昼時だし、どこかで済ませるか。

明「そうだ! —成さんも一緒に食べましょうよ」

—「しかし、それは明命の為に買った物で……」

明「買った本人がお腹を空かせるのに私だけ頂く訳にはいきませ
んよ」

この目、逃がしてくれそうにないな。

—「……わかった。俺ももらっていいかな？」

明「もちろんなのです！」

適当な場所に腰掛け、肉まんを受け取り口に入れる。

明「もぐもぐ……美味しいです！」

—「だろ？ 俺のお気に入りの店で買ったんだよ」

明「お気に入り……ですか？」

—「街をぶらつく事が多くてね、おかげですっかり詳しくなったよ……主に食い物方面で……」

明「食べ物……」

—「今度ヒマな時にでも案内しようか？」

明「は、はい！ ぜひお願いします！」

—「よし、約束だな」

しばらく取りとめの無い話をしている中、いつの間にか明命の武器の話になった。

―「明命の武器って日本刀みたいだな」

明「にほんとう?」

―「こんなやつ」

刀を発現させる。

明「はうあ!?! ま、またいきなり出て来ました!」

―「これが日本刀。明命のは直刀みただけど、これは少し刀身を反らしてるんだよ」

明「ほえ〜・・・綺麗な刀ですね〜」

―「芸術品としての一面もあるからな。有名な刀はそれこそかなりの値打ち物になるし」

明「なるほど〜、納得ですね」

刀を消し、立ち上がる。

―「さて、いつまでも邪魔をするわけにもいかないし、そろそろ失礼するよ」

明「そんな、邪魔だなんてとんでもないです！ こちらこそ、肉まんありがとございました。とつても美味しかったです！」

—「そう言ってもらえたら助かるよ。見張り頑張つてな？」

明「はい！」

これ以上ここにいても邪魔にしかならないので、俺は明命と別れ、街の散策をする事にした。

明「よし！ —成さんのご期待に応えるためにも、お役目をしっかり果たしますです！！」

後ろから聞こえてくる彼女のそんな声に、自然と笑みが浮かんだ・

次の日・・・

店主「それでは、後で城の方へお送りいたしますね」

—「お願いします」

祭さんに頼まれた俺は、酒を注文しに再び街に出ていた。

—「かなりの量だったけど、まさかあれ全部一人で飲むのか？」

・ おそらく雪蓮と飲むつもりだろうが、祭さんだからもしかしたら・

？「・・・様」

—「ん？」

路地裏からかすかに聞こえて来た声に耳を傾ける。

？「お猫様、お猫様・・・」

—「この声は・・・」

昨日も聞いたその声に自然と足を向けると、そこには予想していた通りの人物がいた。

—「やっぱり明命だったか」

明「あっ！ —成さん！ またお会いしましたね」

—「こんなところで何をしてるんだ？」

明「それはですね・・・」

?「にゃあ〜」

—「猫・・・？」

明命の傍には一匹の猫が丸まっていた。

明「はう〜〜〜」

なんと愛らしいお姿なんでしょうか〜〜」

猫「にゃあ？」

明「はうあ!?! い、今の表情・・・堪りません!?!」

—「どうしたんだその猫？」

明「街を歩いていたら偶然お姿を見かけたのです。そのまま追いかけていたらここにきていました」

—「なるほど、明命は追いかけるほど猫好きなんだな」

明「はい！ 私はお猫様を愛しています!?!」

—「そ、そうか・・・」

彼女の目を見ればそれが本気で言っている事だとわかる。

猫「ふにゃ〜」

「ん？ どうしたんだ？」

起き上がり、体を擦り付けて来る猫をなでる。

猫「にゃ〜〜」

気持ちよさそうに目を細める様子に、思わず和む。

811

明「す、凄いですー成さん！ お猫様の方から近付いてくるなんて・・・」

「昔からよく懐かれるんだよ、理由はわからないがな」

その所為でとんでもない目に遭う事も多々あったが、今となってはいい思い出だ。

明「うう・・・羨ましいです。私なんて、いつつも触ろうとしただけで逃げられてしまうのに・・・」

沈んだ声でそう洩らす明命の前に猫を差し出す。

明「一成さん？」

「」「こつすれば逃げられる心配も無いだろ？ 触ってみなよ」

明「よ、よろしいのでしょうか？ 私なんかが・・・」

「」「いいからいいから」

明「そ、それでは・・・お猫様、モフモフさせて頂きます」

モフ・・・

明「はっ
」

モフモフ・・・

明「はっはっ
」

モフモフモフ・・・

明「はう~~~~」

明命の顔が蕩けている。そんなに嬉しかったのだろうか？

猫「・・・フシャー〜！」

ザクツ！

明「あ痛っ！」

すると、いままで大人しかった猫が突如暴れ出し、俺の手からすり抜けた後、明命の手を引つ掻いた。

トットットット・・・

明「ああ！ 行ってしまいました・・・」

ー「大丈夫か明命？」

明「大丈夫です、こんな事しよつちゆうですから」

見れば結構な傷で、今も血が滴っている。

—「少し見せてくれ」

明「え？」

—「傷を見せてくれと言ってるんだ」

明「は、はい……」

差し出された手を握り、じっくりと傷を見る。

—「とりあえず、手当てをしないとな」

明「そんな、ご迷惑をお掛けするわけには……」

—「迷惑なわけないだろ。それじゃ……失礼するよ」

チュッ

明「ふわっ!?!」

傷口に唇を当て、血を吸い出す。

「……………」

口の中に溜まったそれを、地面に吐き捨てた。

明「か、かかかか一成さん！？ 何を！？」

「あの猫はおそらく野良だ。野良猫の爪にはバイ菌やらなんやらがたくさんだからな。しっかり吸い出さないといけないんだよ」

明「そ、そうなんですか？」

「本当は消毒するのが一番なんだが、あいにく手元がないしな。いきなりあんな事してすまなかった」

明「い、いえ……ありがとうございます」

「最後に、これを傷口に当てて……と」

懐からハンカチとして使っていた布を取り出し、彼女の手を巻きつける。

「これで完了だけど、あくまで応急処置だから、後でちゃんとした処置をしてもらってくれ」

明「わかりました」

—「それじゃあ俺は城に戻るよ」

明「そういえば、一成さんはどうして街に？」

—「祭さんに酒の注文を頼まれてな、こっして駆り出されたってわけ」

明「た、大変ですね・・・」

—「ははっ、もう慣れたよ」

なんだかんだ言って、あの人には逆らえる気がしないからな。

—「そのハンカチはキミにあげるから好きに使ってくれ。それじゃ・・・」

明「あ・・・」

早く報告しないとまた祭さんが不機嫌になるからな。

俺は若干早足で城に戻った・・・

S I D E O U T

明命SIDE

明「・・・行ってしまいました」

一成さんの後ろ姿を見送りながら、先程の事を思い出す。

お猫様に引っ掻かれた私の手を握って、そして・・・

ドキッ！！

明「はうあ！？・・・い、今のはいったい・・・？」

思い出した瞬間、心臓が大きく跳ね上がった。さらに・・・

明「ど、どうしたんでしょう・・・体が熱いです・・・」

そのハンカチはキミにあげるから好きに使ってくれ。それじゃ・・・

手に巻かれた布をそっとなでる。はんかちの意味はわからないけど、

おそらくこの布の事だろう。

明「一成さんはお優しいです。昨日も肉まんをごちそうしてくれましたし、今日だって、こうして傷の手当てをしてくれました……」

ははっ、もう慣れたよ

ドキユン!!

明「ツ~~~~~」

一成さんの笑顔が浮かんだ瞬間、先程よりもさらに大きく心臓が跳ね上がったのがわかった。

明「わ、私……本当にどうしちゃったんでしょうか……？」

こんな事は初めてだ。何かの病気なのだろうか？

明「とにかく、私も城に戻りましょう」

でも、城に戻ったら一成さんに会うかもしれないし……

明「ま、またドキドキしてきました」

・・・落ち着くまで街の見回りでもしていよう。

明「そうと決まれば、早速始めるのです！」

しかし、見回りの最中も、結局一成さんの事を考え続けていた・・・

呉の忠臣明命。彼女が恋の病にかかった瞬間だった。

第三十六話 猫まつしぐら（後書き）

作「今回は明命onlyだ」

一「原作イベントだな」

作「下手にいじくるよりそのままの方がいいと思ってな」

一「お前にしてはいい判断だ」

作「明命タン、ギザカワユス」

一「……次また下らない事言ったら、お前のある事ない事ネットに流してやる」

作「フヒヒ、サーセン」

一「……謝られてるのになんでこんなに腹立たしいんだ？」

第三十七話 人の助言には耳を傾けるべきだが鵜呑みにするのもどうかと思う

呉のイベントが思いつかない。魏はスラスラ出て来たのに・・・

今回、今まで以上に激しいキャラ崩壊が起こりますが、どうか温かい目で見てやってください。我慢できない方はどうかお戻りを・・・恐らく、後悔します。

第三十七話 人の助言には耳を傾けるべきだが鵜呑みにするのもどつかと思つ

祭「のお秋月よ、ちと儂と街に出てくれんかの？」

ある日の昼下がりに、俺は祭さんに街に誘われた。

「どうしたんですかいきなり？」

祭「実は、今日の夜に策殿と月見酒をするつもりなんじゃが、その時に飲む酒を買いに行こうと思つての。儂一人じゃ運べそうにないので手伝ってもらいたいのじゃ」

「え？ この前注文したヤツはどうしたんですか？」

祭「あの程度、とつくに飲みほしてしまつたわ」

あの程度って……かなりの量だつたぞ？

「わかりました、お付き合いしますよ」

祭「うむ、助かるぞ秋月。では早速出かけるかの」

「はい」

あまり買いきれないように見張っておかないとな。飲み過ぎは体に悪いし……

祭さんと共に、以前酒を注文したあの店に向かう。

祭「秋月、今さらじゃがこの暮らしにはなれたか？」

一「はい。街のみなさんも親切にしてくれますし、蓮華や思春も打ち解けてくれましたしね」

祭「ほお……」

一「ただ……最近また別の問題が……」

祭「なんじゃ？」

一「今度は明命に避けられている気がするんですよ。この前まではよく話しかけてくれていたんですが」

祭「明命が？……お主、あの娘に何かしたのか？」

一「いえ、思い当たる事は何も」

祭「ふむ、謎じゃな」

一「怪我の経過だけでも聞きたいんですけどね」

祭「怪我？」

—「ええ、実は……」

祭さんに数日前の事を話す。

—「……というわけなんです」

祭「……」

—「祭さん？」

祭「秋月……十中八九お主の所為じゃな」

—「ええ!？」

祭「……本当にわからんのか？」

—「ええ、さっぱりです」

祭「(こやつ……たらしと言つ異名の方が相応しいのではないか?)」

—「祭さん？」

突然無言になつた祭さんを不思議に思いつつ、店へと歩みを進めていく……

思「祭殿？ それに、秋月」

向こうの方から歩いて来る思春を発見した。彼女の方も俺達に気付いた様だ。

—「やあ思春。街中で会うなんて初めてだな」

思「私とて用があれば街に出たりもする」

—「それもそうか」

思「それより秋月、祭殿はどうされたのだ？」

無言の祭さんが気になるのか、彼女がそんな事を聞いて来た。

—「わからない。さっきからずっとこの調子なんだ」

思「あの・・・祭殿？」

祭「ん・・・？ おお！ 思春ではないか。どうしたんじゃこんな所で？」

思「それはこちらの・・・いえ、なんでもありません」

祭「？」

？「あ〜〜！ こづがいさまだ〜〜！！！」

—「ん？」

？「ほんとだ！ こづがいしょうぐんだ！！！」

？「みんな〜〜！ こづがいさまがいるよ〜〜！！！」

一人の女の子が祭さんの名を呼ぶと、それを皮切りに次々と子ども達が集まり出した。

女の子A「わ〜い こづがいさま〜〜！！！」

男の子A「あそぼつよししょうぐん！！！」

女の子B「あそんであそんで〜〜！！！」

祭さんを取り囲み、期待を込めた目で見つめる子ども達。

祭「こ、これ！ まとわりつくでない！！！」

男の子B「だって、こづがいさまあつたかいんだもん」

女の子C「ねえ〜〜、いいでしょ〜〜？？」

祭「やれやれ、仕方ないのお・・・」

子ども達「わーい」

そんな子ども達を優しく抱き止める祭さん。その姿は、まるで本当の母親のようだ。

—「すごい人気だな」

思「あの様な性格でいらっしやるからな。この街では祭殿を慕っていない人間を探す方が難しい」

—「ああ、わかる気がするよ」

祭さんと子ども達の様子を見つめる周りの人達も優しい目をしてい

祭「秋月、思春、そんな所で突っ立つとらんで少しは助けようと思

思「い、いえ私は・・・」

—「どうしたんだ思春？」

思「・・・私は子どもが苦手なのだ。どう接していいかわからない・

・・・」

なるほど、ある意味納得だな。

—「・・・そうだ！ いい考えがあるぞ」

思「なに？」

—「耳を貸してくれ」

思「？」

思「ついた事を思春に伝える。」

—「・・・という感じでやってみてくれ」

思「そ、そんな事出来るわけがないだろう!!」

—「いいからやってみてくれ。以前、キミと似た悩みを持っていた娘もこれでみんなと打ち解ける事が出来た。試してみる価値はあるぞ」

思「・・・嘘ではないだろうな？」

—「悩んでいる人に嘘を教える様なマネするわけないだろう」

思「・・・わかった」

意を決し、子ども達の元へ歩み寄る思春。

—「（頑張れ思春。キミなら出来る・・・）」

思「スー・・・ハー・・・」

深呼吸をし、気持ちを落ち着かせ、そして・・・

思「・・・お、オッス！ 思春だよ 一緒に遊ぼ？ テヘッ」

腰に手を当て、もう一方の手を三つ指にし、目元に当てながら満面の笑みを浮かべる思春。

祭「・・・」

子ども達「・・・」

—「（あれ？ おかしいな・・・）」

俺の予想では今ので思春の周りに子ども達が集まるはずだったんだが。実際には誰一人として反応せず、冷やかな風が場を吹き抜けて

いた。

街人A「・・・なあ、あの方って甘寧様で間違いないよな？」

街人B「そのはずだけど・・・」

街人C「甘寧様ってあんな事するんだ・・・ちよつと意外かも」

思「・・・」

—「思春・・・？」

プルプルと体を震わせる思春を不思議に思い、話しかけようとした瞬間・・・

ビュンツ！！

—「ツ！？」

突如振り抜かれた鈴音を慌てて回避する。

思「ふ、ふふふ・・・よくも私を謀ってくれたな秋月・・・」

—「落ち着け思春。前は本当に・・・」

思「黙れえ！！ 貴様を殺して私も死んでやる！！」

一「（まずいな、完全に頭に血が上っている）」

今にも襲いかかって来そうな思春。そんな彼女を抑えたのは意外な人物だった。

女の子A「かねいさまかわいい〜」

思「え・・・？」

男の子A「ねえねえ！ もういつかいやって〜！！」

思「も、もう一回だと!？」

女の子B「だめ・・・？」

思「ゆ、許してくれ。もう私にはあんな事・・・」

うん、やっぱりあの作戦はいつの時代でも有効なんだな。

街人A「俺、今まで甘寧様の事苦手だったんだけど・・・今日から認識を改める事にするよ」

街人B「なんだ？ この胸を締め付けられる感覚は？ まさか・・・」

俺、甘寧様の事？」

街人C「私も今度あの人にもやってみようかしら？」

街の人の反応も上々だ・・・効果の強すぎた人もいるみたいだが。

祭「く、くくく・・・いいぞ思春。いい酒のつまみが出来たわい」

子ども達「かんねいさま~~~~」

思「ま、待てお前達！ 近付かないでくれえ！！」

.....

祭「・・・とまあ、こんな事があつたんじゃよ」

雪「あははは！ 何それ？ 最高~~~~」

あの後、子ども達を思春に任せ、俺達は酒を買いに戻った。そして夜、俺はなぜか二人と一緒に月見酒をする事になった。

—「・・・なんで俺ここにいるんだ？」

祭「付き合ってもらった礼じゃ。お主も飲むがいい」

「あ、ありがとうございます」

注いでもらった酒を一気に飲み干す。

祭「おお！ いい飲みっぷりじゃな」

「身内に大酒飲みがいましたからね。付き合わされている内になつたんですよ」

雪「身内ねえ．．．どんな人？」

「容姿は祭さんにそっくり．．．と言うか祭さんそのもの。人をからかうのが好きで、酒が大好き。喋り方も祭さんに似てるな」

雪「まんま祭じゃない．．．ちょっと会ってみたいかも」

「違う所と言ったらそうだな．．．一人称が妾な所くらいか？」

祭「そうか、じゃから初めて顔を合わせた時に僕を見て驚いておったんじゃない？」

「そう言う事です」

雪「ねえ、やっぱり寂しい？」

「ん？」

雪「だって、いきなりこの世界に呼ばれて、その人とも離れ離れになっちゃって、帰れる保証も無いんでしょう?」

いや、帰れるには帰れるんだがな。

—「……そうでもないさ」

雪「え?」

—「どんなに離れていても心は繋がっている。一度結ばれた絆は決して失われる事は無い。だから寂しくは無い……かな」

そう……今まで出会って来た全ての仲間との絆がある限り、俺は戦い続ける事が出来る。戦いの中で常に感じている事だ。

雪「絆か……いい言葉ね」

—「ありがとう雪蓮」

祭「秋月……水を差す様で悪いが……よくそんな恥ずかしい台詞を堂々と言えるの……」

—「恥ずかしい?」

俺は思っている事をそのまま言っただけなのだが?

雪「……私も、あなたと絆を結べるのかしら？」

—「雪蓮？ 何か言ったか？」

雪「なんでもないわ。それよりほらっ、もっと飲みなさいよ。さっきから全然進んでないじゃない」

—「お手柔らかにな」

雪「（そのためにもまず、あなたとの距離を縮めないとね）」

おまけ『その後の思春さん』

思「まったく……あの男の所為でとんだ目に遭ってしまった……」

子ども達に解放され、へとへとになった思春は自分の部屋に戻っていた。

思「……まあ、感謝するべきなのだろうな。あれだけの子どもに囲まれたのは初めてだったしな」

何の気なしに部屋を見渡した彼女の目に入ったのは、備え付きの鏡台。

思「……………」

その前にじつと立つ思春。

思「そ、そうだ。実際皆にどう映ったのか確認しないと。そう、それだけだ……………」

誰もいないのに言い訳しつつ、例のポーズをとる思春。そして…………

思「オッス！ 思春だよ 一緒に遊ぼ？ テヘッ」

再び満面の笑みを浮かべる思春。普段の彼女を知っている者が見たら己が目を疑う光景だろう。だが安心して欲しい。この場には彼女しかない…………

ガタンッ！

思「だ、誰だ!？」

蓮「し……思春……」

しかし、天はこのようなおもしろ……貴重なイベントをそのまま終わらせるつもりは無かったようだ。先程のポーズ、台詞、眩い笑顔は、全て彼女の敬愛する主にバツチリと見られていたのだ。

思「蓮華様!？　こ、これはですね!！」

蓮「よ、用があつたんだけど……い、忙しそうだからまた今度にするわね」

ダッ!

逃げる様に部屋を去る蓮華。

思「お、お待ちください蓮華様!」

蓮「わ、私……誰にも言わないから!！」

思「違うんです!　話を聞いてください!　蓮華様あああああ
ああ!——!」

この日、初めて思春の絶叫が城に響いたそうなの。

余談だが、この日から街では『オッス!』『テヘッ』『が子ども達の間で流行り出したらしい。

思「秋月いいいいい!!」 やっぱり貴様は殺してやる!」

第三十七話 人の助言には耳を傾けるべきだが鵜呑みにするのもどうかと思う

作「えー、まずは謝罪を。更新を待たれていた皆様、お待たせして申し訳ありません」

一「理由は？」

作「自動車免許取得の為の勉強やら大学のテストやらで執筆する時間が無かったんです・・・」

一「嘘吐くな。ゲームしてたくせに」

作「あれも勉強だ。台詞回しやら表現やらのな」

一「まあ、そういう事にしといてやるう」

作「前書きにも書いたが呉のネタが思いつかないんだよ。魏はあんなにスラスラ出たのに」

一「そうなのか？」

作「特に冥琳と亞莎の二人。冥琳に至ってはイベントどころかフラグすら立っていないからな」

一「冥琳は・・・難しいな」

作「だろ？マジ思いつかないんだよ。どうしよう・・・」

一「残りは冥琳に亞莎、穩と小蓮、さらに美羽と七乃さんか・・・」

まだ先は長いな」

作「今回の話も本当は月見酒だけの話にしようと思ったが、急にあの台詞を言わせたくなくてな。誰に言わせようか悩んだんだが、普段とのギャップを考えて思春にしてみた」

一「原作だったら絶対言いそうにないな」

作「細けえ事あいんだよ」

一「お前・・・それ言いたかっただけだろ？」

作「ちなみに免許ですが・・・落ちました。それも二回・・・」

一「何やってんだよ・・・」

第三十八話 導く者と支える者（前書き）

やべえ・・・キャラ崩壊が止まらない。前回の比じゃねえぞ!!

そしてまた出た。必殺の丸投げ!!

第三十八話 導く者と支える者

冥「秋月、丁度良かった」

玉座へと続く廊下の途中、冥琳と鉢合わせた。

一「何か用か冥琳？」

冥「いいかげんお前をこちらに寄越せと袁術が煩くてな。すまないが今からヤツに会いに行ってくれないだろうか？」

そういえば美羽とは顔合わせをした時からずっと会っていないな。

一「わかった。約束してたし、行って来るよ」

冥「あの時の袁術の様子からして心配する事は無いと思うが……
気をつけるよ」

一「大丈夫だよ。美羽はいい子だからな」

冥「相変わらず甘いなお前は。だがその甘さ……嫌いではないぞ」

一「ははっ、ありがとう」

・
・
・

? 「はあああああ!!」

ガギン!

— 「ん？」

冥琳と別れ、いざ美羽の元へ向かおうとする俺の耳に、気迫の込められた声と、金属のぶつかり合う音が聞こえて来た。

— 「中庭からか？」

気になった俺は中庭に向かった。

蓮 「せええええええい!!」

思 「振り抜きが甘いつ! そんな一撃では簡単に避けられてしまいませんよ!!」

思「……………」

—「どうした思春？ 俺の顔に何かついてるか？」

思「……………何でも無い」

—「？」

蓮「そうだ一成。あなたこの後時間あるかしら？ も、もしよかつたら私と……………」

思「蓮華様、鍛練の時間はまだ終わりではありませんよ」

蓮「う……………」

—「おっと、鍛練の邪魔をして悪かったな。俺も用事があるし、失礼するよ」

蓮「用事？ 何かあったの？」

—「今から美羽……………袁術に会いに行つて来る」

蓮「え！？ ど、どうしてあなたが袁術に！？」

—「冥琳に頼まれてな。俺自身、遊びに行く約束をしていたから」

蓮「そ、そう……………」

—「それじゃあ、鍛練頑張つてな蓮華」

蓮「……ええ」

手を振りながら二人と別れ、今度こそ美羽の元へ向かった。

思「それでは蓮華様。鍛練を再会します」

蓮「わかったわ……」

思「では、私は防御に徹しますので思う様に斬りかかって来てくだ
さい」

蓮「ええ……」

思「（なんだ？ 先程までとは雰囲気……）」

蓮「……行くわよ」

思「ッ!？」

ガギン!!

思「ぐッ!？（先程までとは重さが!）」

蓮「ふっ……!」

ギン！！

思「そ、その調子です！（それにこの覇気、蓮華様はどうされたのだ？）」

蓮「それ！ それ！！ それえ！！！！」

ギン！ ギン！ ガギン！！

思「れ、蓮華様！？」

蓮「何かしら・・・？」

思「その・・・先程までよりかなり気合が入っておりますが、どうされたのですか？」

蓮「別になんでもないわ。そう・・・一成が袁術の真名を呼んだり、遊ぶ約束をしていた事なんて私には関係ないもの。さあ思春、無駄話はお終い。続けるわよ？」

思「ぎよ、御意・・・」

蓮「声が小さい！！」

思「御意！！」

・・・

美「兄様~~~~！」

ギユ！

城に到着し、玉座の間に入った瞬間、美羽が抱きついて来た。

—「久しぶり美羽。元気だったか？」

美「もちろんじゃ！ 妾はいつでも元気じゃぞ！」

—「ははっ、そうか」

ナデナデ

美「ふや~~~~」

七「こんにちはは一成さん」

—「七乃さんも久しぶり」

七「そうですね。顔合わせ以来でしょうか？」

美「兄様、会いに来てくれたという事は、仕事はもう無いのじゃない？」

—「仕事？」

美「妾は早く兄様に会いたかったのじゃが、孫策のヤツが兄様は会う暇が無いくらい仕事が忙しいのじゃと・・・」

—「（雪蓮、どういづつもりだ？）」

美「兄様の仕事の邪魔をするわけにはいかんからの。ずっと我慢しておったのじゃ」

—「そうか、すまなかつたな美羽」

美「いいのじゃ。こうして会いに来てくれたのじゃからな」

—「ありがとな」

礼の意味を込め、もう一度美羽の頭をなでる。

美「やっぱり兄様の手は気持ち良いの〜。・・・そうじゃ七乃、蜂蜜水を用意するのじゃ！」

七「はい。かしこまりました〜」

美「兄様！ 約束通り妾秘蔵の蜂蜜水をご馳走するのじゃ！」

一「それじゃあ場所を移さないか？ そんな上等な物を立ったまま頂くつてのもな」

美「それもそうじゃな。七乃〜」

七「その点もバツチリですよ〜。中庭に用意してありますから」

美「うむ！ さすが七乃じゃ。褒めてつかわすぞ」

七「ふふ、ありがとうございます〜」

美「では兄様、早速中庭に向かうのじゃ」

一「ああ」

美羽と手を繋ぎながら中庭に向かうと、三人分の椅子と机。その上に瓶が一本置いてあった。

一「・・・七乃さん。いつたい何時の間にこれだけの準備を・・・？」

七「細かい事は気にしないでくださいな」

一「はあ・・・」

美「兄様、早く座るのじゃ」

美羽に急かされ、椅子に腰かける。美羽、七乃さんも俺の両隣に座る。

七「……はい、どうぞー成さん」

七乃さんが置いた器には金色に輝く液体がなみなみと入っていた。

ー「これが美羽の言っていた蜂蜜か」

美「そうじゃ。妾以外が飲むのは七乃に続いて兄様が二人目なのじや。存分に堪能するがよいぞ」

ー「頂きます」

ー「一口飲むと、濃厚な蜂蜜の味が口内に広がる。だからと言って飲み難くは無く、スルスルと喉を通って行った。」

ー「これは……美味しいな」

美「当然じゃ！ 妾秘蔵の物なのじゃからな！ 七乃、早く妾の器にも入れてたも」

七「はいはい」

—「……ぷはっ」

その味を気に入ってしまった俺は、あっという間に飲みほしてしまった。

美「おお！ いい飲みっぷりじゃない兄様。そんなに気に入ってくれたのかの？」

—「ああ、こんなに美味しい蜂蜜は初めてだ。俺が今まで旅して来た中でもここまでの物は無かったぞ」

美「旅？ 兄様は旅をしておったのか？」

—「ああ、色々な場所を転々とな」

美「兄様、妾は兄様の旅の話が聞きたいのじゃ」

—「話？」

七「そうですね。天の御使いがどんな事をしていたか私も気になるります。一成さん、お話してくれませんか？」

—「別にかまわないが、面白くは無いと思うぞ？」

七「それは私達が判断する事ですよ？ それに……美羽様は待ちきれない様ですし」

美「わくわく……わくわく……」

—「わかった。それじゃあ、何から話したらいいか……」

よくよく考えれば、俺って闘ってばかりだしな……

……

—「……なんて事があったな。さすがに右腕を吹き飛ばされた時は焦ったよ」

今ならそんなへまはしないが、あの頃は旅人になったばかりで実力も不足していたからな。

七「み、右腕ですか……？」

美「そ、その後兄様はどうなったのじゃ！？ 死んでしまったのかの！？」

—「いや、死んでたらここにはいないだろう……」

美「おお、そうじゃった」

七「美羽様……」

—「その後は仲間の援護を受けながら戦って、最終的にはそいつを

倒す事が出来た。腕もその時の仲間に治してもらったんだ」

美「なんと!? 片腕のまま戦ったのか？」

一「腕一本失ったくらいで諦めるわけにはいかなかったからな」

七「くらいって・・・」(汗)

一「とまあ、こんな感じの話だが・・・面白かったか？」

美「うむ！ 兄様の話、そこいらの書物よりよっぽど面白かったぞよー!」

一「そうか。そう言ってくれると嬉しいよ」

七「そうですね。私も久しぶりにドキドキしましたよ」

美「兄様！ もっと聞きたいのじゃ!」

一「そうだな・・・じゃあ、もう一つ」

美「わくわく・・・わくわく・・・」

一「これはある国の王の話なんだがな」

美「ふむ・・・」

一「その王は王らしくからぬ人物だった。城を抜け出しては城下に遊びに出たり、仕事をサボったりな。おかげで民や臣下には心の中で無能呼ばわりされていた」

七「それは当然ですね」

美「？ 七乃？ 何故妾を見つめるのじゃ？」

七「なんでもないですよ美羽様」

一「そんな中、その国は化物達に襲われた。その数約五千体。荒野を埋め尽くすその姿に、人々は絶望し、誰もが国の終わりを確信した。ただ一人・・・王を除いてな」

美「ば、化物じゃと？」

一「王は剣を持ち、馬に跨り、一人で化物達に向かって行った。誰もが王を止めようとした。だが王は止まらなかった。「私は王だ！ 国を・・・民を守らない王が何処にいる！！」と言ってな」

美「一人で・・・」

一「城を抜け出し、仕事をサボり、国の事など考えていないと思われた無能はそこにはいなかった。彼は間違いなく王だった」

七「その王様はどうなったんですか？」

一「王は強かった。何百体もの怪物を一人で倒していった。しかし、必ず限界は来る。剣は折れ、傷ついた王の命は風前の灯だった。だが、王は死ななかった。彼を無能呼ばわりしていた者達の手によつてな」

美「・・・」

一「王の言葉、王の戦う姿、それに心打たれた臣下の者や兵達が一斉に王を助けに来たんだ。それだけじゃない、民達までもが武器を持って怪物に立ち向かった」

七「それは・・・すごいですね・・・」

一「相手は強大だったが、誰一人として諦める者はいなかった。王に貰った勇気が全員の胸の中で燃えていたからな。そして、遂には化物達を撃退する事が出来た」

美「おお・・・！」

一「その時以来、王を無能呼ばわりする者はいなくなった。そして、彼は最高の王として人々に語り継がれる事になった・・・これでこの話は終わりだ」

美「うう・・・良かったのじゃ〜」

一「王は心の底から民の事を想っていた。だからこそ、民にも王の想いが伝わったのだろくな。晩年、その王はこんな言葉を残している。「国あつての王ではない。民あつての王だ」ってな」

美「民あつての王・・・」

七「美羽様・・・？」

美「・・・のう兄様、妾もその王の様になれるかの？」

一「ん？」

七「い、いきなりどうされたんですか美羽様！？ そんな事を言うなんて!？」

美「同じ人の上に立つ者として、その王は心から尊敬出来る。妾もその者の様になりたいのじゃ」

一「大丈夫、そう思えるなら美羽もきつとなれるさ」

美「本当かの？」

一「ああ。そのためにも、王としての教養や心構えをしつかり持たないと。幸い、七乃さんっていう先生もいる事だし」

美「うむ！ 七乃、よろしく頼むのじゃ!！」

七「は、はい・・・(こ、こんなの美羽様じゃない!!)」

これでこの子が自覚を持ってくれれば、少しはいい方向に向かうはずだ・・・

・・・

一「・・・という感じで・・・美羽？」

美「すう～～すう～～」

「寝てるし・・・」

七「あらあら、ずっと集中してお話を聞いてたから疲れちゃったんでしょね」

「こんな所で寝たら風邪ひくな。七乃さん、部屋まで美羽を運ぶから案内頼んでもいいかな？」

七「わかりました。では付いて来て下さい」

美羽をおんぶし、七乃さんの案内で寝室に向かう。

七「一成さん。どうして美羽様にあの話を？」

「あの話？」

七「無能と呼ばれていた王の話ですよ。もしかして・・・美羽様の為に？」

「勘繰り過ぎだよ。よくあるお伽噺話だろ？」

七「それにしてもはやけに具体的な所がありましたけど。もしかして、話の中の王ってあなたなんじゃ・・・」

「俺が王？ ははっ、面白い事を言うな七乃さん」

七「ですが・・・」

「俺は人々を『導く者』じゃない。そういつた人物を『支える者』だからな。第一、俺はそんな大した器じゃないよ」

七「（あなたが立ちあがったらすぐに人が集まりそうですけどね・・・）」（苦笑）

「七乃さん？」

七「そこまで言うならそういう事にしておきましょう。自覚されても困りますしね」

「？」

日も傾いていたので、美羽を寝台に寝かせた俺は七乃さんに後を任せ、美羽の元を後にした。

「・・・懐かしい話だ」

おい一成！ 街に出るぞ！！

また大臣に怒られるぞ？

大臣が怖くて王が務まるものか

王は仕事をサボったりしないと思うが

いいんだよ。いざという時には本気出すから

期待しないで待っておくよ

もちろん、お前にも手伝ってもらおうぞ

わかってるよ。俺はキミの力になる為に呼ばれたんだからな

くう〜！ いいねいいねえ！！ 私が女だったら確実に惚れてるぞ！

・・・喜んでいいのか？

ひ、酷え・・・

— 「ぶっ・・・」

あの時のやりとりを思い出し、思わず吹き出す。かつて共に戦った仲間。その姿は今でも鮮明に思いだせる。

— 「・・・ん？」

物思いに耽りながら城に戻ると、行く前と全く同じ光景が中庭で繰り広げられていた。

思「蓮華様、そろそろ終わりに致しましょう」

蓮「大丈夫よ思春。まだやれるわ」

思「しかし、これ以上続けては蓮華様のお体が・・・」

蓮「問題無いわ。何故か疲れを感じないの。ふふっ、こんな初め
てだわ」

思「で、ですが・・・」

蓮「いいでしょ？」

—「おい、蓮華」

蓮「あらい成。袁術の所へ行ったんじゃないの？」

—「ああ、それで帰って来たんだが」

蓮「もう？ ずいぶん早いわね」

—「早いつて・・・あれからかなり経ってるぞ？」

俺が出発したのは昼ごろ。そして現在、辺りは薄暗くなっていた。

蓮「あら、もうこんな時間？ 鍛錬に集中していて気付かなかった
わ」

—「かなり熱心にやってたんだな」

蓮「ええ、おかげでかなり上達した気がするわ」

—「そうか。だけど、長時間やればいいってもんでもないぞ。暗くなってきたし、そろそろ止めにしたらどうだ？」

蓮「私としてはまだ続けたいけど、あなたがそう言うなら・・・」

そう言って構えを解く蓮華。

—「（やっぱり蓮華は真面目だな。ここまで鍛錬に力を入れるとは）

思「・・・助かったぞ秋月」

—「？ 俺何かしたか？」

蓮「ふう、一段落したらお腹が空いちゃったわ。ねえ一成、一緒に夕飯でもどうかしら？」

—「いいのか？」

蓮「最近お話出来なかったし、ね？」

—「そうだな。じゃあ思春も一緒に・・・」

思「私はいい。それより秋月、せっかく蓮華様がお誘いくださった

んだ、変なマネはするなよ？」

蓮「思春・・・ありがとう」

思「いえ、では私はこれで・・・」

蓮華に頭を下げ、思春は去って行った。

「」どうしたんだ思春？ いつもなら付いてくるはずなのに」

蓮「・・・気を使ってくれたんでしょう」

「」え？」

蓮「なんでもないわ。行きましょ」成」

「」ああ」

蓮華と夕食を取った俺は、そのまま部屋に戻り就寝した。

第三十八話 導く者と支える者（後書き）

作「さあ、原作ブレイクの第一歩だ」

一「もうすでに至る所でブレイクしているだろうが」

作「この小説では美羽はお馬鹿キャラでは無く出来る子にするからな」

一「また思い切った事するな」

作「これも外史の一つの形だ」

一「なんだそれ？」

作「いい言葉だろ？ 何せ……どんな滅茶苦茶しようとするこの言で押し通せるからな!!」

一「凧の扱いも？」

作「一つの形」

一「……雪蓮の性格も？」

作「一つの形！」

一「（駄目だこいつ、早く何とか……いや、無駄か……）」

作「最後に一言……」

—「おい待て、もう一つ聞かせる。俺の過去・・・どうするつもりだ？」

作「・・・」

—「書くだけ書いて終わりか？ それとも過去編を書くのか？ 答えろ」

作「・・・萌将伝面白え—————！！！！」

ダダダダ！！

—「逃げるな阿呆！ きちんと説明しろ！！」

第三十九話 教養を身につけるには読書が一番だがたまに余計な知識も得る(前)

最近本読んでないな。てか読む気が起きない・・・

第三十九話 教養を身につけるには読書が一番だがたまに余計な知識も得る

今日も今日とて街に出る。最近は何に声をかけてくれる人達も増えたが、これも仕事が無いからと毎日の様に街に出たお陰だろう。

「……喜んでいいのか？」

街人「お、兄ちゃん！ そんな辛気臭い顔してどうした？」

「いえ、今の立場に満足していいのかと思ひまして……」

街人「？ よくわからんが、悩みなんざ食って寝ればなんとでもなるさ。……というわけで、ウチの点心でもどうだい？」

「ははっ、そうですね。なら三つほど頂けますか？」

街人「はいよ！ まいどあり！」

点心食べながら街中をぶらつく。うん……美味い。

「……ん？」

見覚えのある後ろ姿を発見したので目を凝らす。

亞「……………」

亞「サだった。歩くたびにその長い袖がプラプラと揺れている。俺は早速彼女に近づいた。」

—「亞莎」

亞「え？」

俺の声に振り向く亞莎。その顔がみるみる内に赤くなる。

亞「か、一成さん！？ こ、こ、こ、こんにちははははは……！」

—「ああ、こんにちは。とりあえず落ち着いてくれ」

亞「あつう……／＼」

—「街で会うのは初めてだな。何か買い物か？」

亞「は、はい。今日は非番ですから本を何冊か買おうと思っ……」

—「本？」

亞「まだまだ勉強しないといけない事がたくさんありますから」

この時代の本か・・・どんな物が興味があるな。

—「ふむ・・・」

亞「一成さん？」

—「亞莎、俺もついて行っていいかな？」

亞「ええ！？ わ、私とですか？」

—「俺も本を読みたくなっとな」

亞「で、ですが・・・」

亞莎は何故か顔を俯かせている。

—「ああすまない。せつかくの非番の日を他人に邪魔されるのは嫌だよな」

亞「ち、違います！ そうじゃないんです！ ただ・・・」

—「ただ？」

亞「い、一緒になんて・・・まるで、その・・・」

—「？」

亞「な、何でもないです……」

一「よくわからんが、一緒に行ってもいいのか？」

亞「はい」

一「ありがとう、亞莎」

当然の礼儀として、笑顔で礼を言う。

亞「ツ~~~~ツ~~~~ノノ」

すると、袖で顔を隠されてしまい、隙間から見える彼女の顔は火が出そうなほど真っ赤だった。

一「亞莎、大丈夫か？」

亞「ひゃい！？ だ、大丈夫でひゅ！」

一「そうか。体調が悪いなら無理するなよ？」

亞「（一成さんの所為ですよ~~~~！）」

場所がわからないので、未だに顔を隠す亞莎に本屋まで案内してもらった。

「そういえば、亞莎って元武官なんだよな？」

丁度いい機会なので、彼女の事を知るために質問する事にした。

亞「はい。今は文官のお仕事をさせて頂いていますが、少し前までは武官の立場でした」

「その眼鏡は度が合っていないんだろ？ よく戦う事が出来たな」

亞「私は他人の気を感じる事が出来るんです。それを頼りに敵の攻撃を避けたり、逆に攻撃する事が可能なんです」

「なるほど。ちなみに俺の気はキミから見てどうだ？」

亞「とても眩しいです。初めてお会いした時は驚きました。こんな気を持った人に会うのは初めてでしたから」

「そうか・・・だからあの時なかなか顔を見てくれなかったんだな」

亞「すみません・・・」

「ははっ、気にしないでくれ。それより、今は平気なのか？」

亞「だ、大丈夫です。少し慣れましたから」

俺の顔をじっと見つめる亞莎。

亞「……あう／＼／／」

……本当に大丈夫なのか？

そうこうしている内に、目的の本屋に到着した。

亞「ところで、一成さんはどんな本を読まれるんですか？」

—「実はこの世界の本を読むのは初めてでな、何かお薦めの本ってあるかな？」

亞「そうですね……では、これなんてどうですか？」

亞莎が一冊の本を手取る。

亞「私も読んだ事ある本なんですけど、とても面白いですよ」

—「ならそれにするかな。亞莎はどの本を買った？」

亞「私は……あつ、よかった。まだ置いてあった……」

別の棚から三冊取り出し、嬉しそうに戻って来た。

亞「この前見つけてからしばらく経ってたから売れてしまったかと心配してたんですけど、よかったです」

二人で会計に向かう。

店員「あら、呂蒙様。いつもご購入ありがとうございます。それに御遣い様もいらっしやいます」

人懐こい笑顔を浮かべ、店員の女性が俺達の名を呼ぶ。

—「顔馴染みなのか？」

亞「はい。本を買う時はいつもこのお店を利用させてもらっていますから」

店員「そつだ呂蒙様。以前ご所望されていた本がようやく届いたんですが……」

亞「本当ですか!？」

店員「ええ、今取って来ますから」

亞「ま、待ってください!」

奥に引つ込もうとした女性を慌てて止める亞莎。

店員「どうしました?」

亞「あの、今日は……その……」

店員「……ああ、なるほど」

俺の顔を見て納得する女性。心なしかニヤついている様な気がする。

「……どうしました?」

店員「いえ、何でもないですよ。では、今度いらした時にお渡ししますね」

亞「すみません……」

店員「いえいえ。それでは今日はその三冊でよろしいんですね」

亞「はい」

「あ、すみません。この本も一緒にお願いします」

店員「わかりました」

亞「一成さん？」

「俺がまとめて払うよ。案内してもらったのと選んでくれたお礼だ」

亞「と、とんでもないです！ その程度でお礼なんて悪いですよ！」

「気にするな。どうせ使い道の無い金だからな。だったら亞莎の為に使う方がよっぽど有意義だ」

亞「で、ですが……」

店員「呂蒙様。これだけ言うてくださっているんですから素直に受け取っちゃえばいいんですよ。それに、女性に贈り物をするのは男の甲斐性ですからね」

亞「……か、一成さん。お願いしていいですか？」

「ああ、もちろん」

四冊分の代金を渡す。亞莎は大事そうに本を抱えていた。

「（本当に嬉しそうだな。まあ、ずっと欲しかった物が買えたんだから当然か）」

亞「一成さん。本当にありがとうございます」

「こちらこそ、本を選んでくれてありがとうございます」

亞「クスッ。どういたしまして」

目的を達した俺達は店を出た。

店員「ありがとうございますー！ 呂蒙様！ 頑張ってくださいね〜〜！！」

「？」

亞「あ〜〜〜／＼」

去り際に女性が意味深な言葉を漏らした。が、気にしてはいけない気がするので忘れる事にしよう・・・

「・・・」

夕食後、早速本を開く。物語は主人公の少年が幼馴染の少女と共に旅をするという物だった。どちらかというと大人が読むというより、

若者向けの内容の様だ。

「ライトノベルみたいだな。・・・読んだ事ないけど・・・」

だが、読めば読むほど引き込まれるモノがあり、気がつけば半分以上読んでいた。

「そろそろ寝るか・・・」

続きが気になったが、さすがにこれ以上は明日に響くので俺は寝台に横になった。

三日後・・・

俺は再びあの本屋に向かう事にした。どうやらあの本はシリーズ物らしく、はまってしまったので続きを買いに行く事にしたのだ。

亞「おはようございますー成さん」

「・・・おはよう亞莎」

亞「どうしたんですか？ お疲れの様ですが・・・」

「いや、昨日一昨日と連続で夜更かししてな。少し眠い」

亞「夜更かし？」

「あの本が予想以上に面白くてな。おかげで読み終えてしまった」

亞「え？ あれだけの量を二日でですか!？」

「さすが亞莎お薦めの本だな。特に主人公が幼馴染を助ける為に
単身洞窟に潜り込む場面は興奮したよ」

亞「あ、私もその場面は好きです！ あと、小川を渡ろうとして
一緒に転んじゃう所とか！」

「ああ、あそこの二人の口喧嘩は面白かったな。内容がくだらな
すぎて・・・」

亞「ですよね？ 私も思いつきり笑っちゃいました！」

その後、十分ほど亞莎と本の話で盛り上がった。話の最中、亞莎の
顔はとても活き活きとしていて、あの本がどれだけお気に入りかが
よく伝わって来た。

亞「あ・・・いけない私ったら。ごめんなさい一成さん。引き止め
てしまって」

「いや、俺も楽しかったから」

亞「そう言っ頂けると助かります。ところで、これからどちらへ？」

一「本屋にな。どうにもあの続きが気になってしょうがないから残りの分も買おうかと思って・・・」

亞「だ、だったら・・・私が貸しましょうか？」

一「え？」

亞「私、全冊持ってますから、もしよかったら・・・」

一「いいのか？」

亞「はい！一成さんにはもっと読んでもらいたいですから！」

一「ありがとうございます。じゃあ、いつ取りに行けばいいかな？」

亞「今日は仕事で夜まで時間が取れないんです。それでもよろしかったら、夜に私の部屋に来てもらえればお渡ししますよ」

一「わかった。なら夜にお邪魔させてもらつよ」

亞「わかりました。それでは私はこれで」

一「ああ。仕事頑張つてな」

亞「はい！」

元氣な返事を残し、亞莎は去って行った。

「借りてばかりも悪いし、俺も何か……」

そういえば、夜まで仕事があると言っていたな。なら疲れているだろうし差し入れでも持って行ってあげよう。

「そうなると何を持って行くべきか」

原作を思い出す。亞莎の好きな物は……

「……ああ、アレがあつたか」

彼女の代名詞……は言いすぎだろうが、お気に入り（正確にはこれから気に入る）のアレなら喜んでくれるだろう。

「そうと決まれば、早速買いに行こう」

S I D E O U T

亞莎SIDE

亞「こ、これで大丈夫だよ・・・ね？」

仕事が終わりに、部屋に戻った私は急いで片付けに取りかかった。おかげで何とか一成さんが来る前に終わらせる事が出来た。

だ、だったら・・・私が貸しましょうか？

亞「うう・・・何であんな事言っちゃったんだろう・・・」

いくら本の話が出来て嬉しかったからって男の人を部屋に呼ぶなんて・・・でも、あれだけお話出来る人も初めてだし・・・

亞「不思議な人だなあ・・・」

天の御遣いなんて呼ばれているけれど、だからといって尊大ではなく、私みたいな者にも気さくに話しかけてくれる。目上の方には物腰丁寧で、雪蓮様を始め、多くの方に信頼されているし、噂ではあの衰術にまで気に入られているらしい。

亞「（そういえば、最近明命の様子がおかしいような。一成さんを避けてるみたいだし・・・何かあったのかな？）」

コンコン

一「亞莎、俺だ」

亞「は、はい！」

のつく（一成さんが教えてくれた）と共に、一成さんの声がしたので、慌てて扉を開ける。

ガチャ

一「こんばんは亞莎。ゴメンな、こんな時間に・・・」

亞「い、いえ。私が言った事ですから。とりあえず入ってください」

一「お邪魔します」

亞「どうぞ」

一「これ差し入れ。よかったら食べてくれ」

一成さんの手には大きな袋があった。

亞「何ですか？」

一「多分、亞莎なら気に入ってくれると思うぞ」

亞「はあ・・・？」

机に置かれた袋の中に目を通す。

亞「お団子？」

一「胡麻団子だ。疲れている時は甘い物を食べるのが一番だからな」

亞「あ、ありがとうございます」

一「はは、喜んでもらえて何よりだ」

とりあえず座ってもらい、本棚から約束の本を取り出す。

亞「この四冊が続きます。上から順になっていますから読む時は気をつけてくださいね」

一「ああ、ありがとう。じゃあ俺はこれで・・・」

亞「え？」

「いつまでも邪魔するのも悪いしな。それに、仕事終わりで亞莎も疲れているだろうし」

立ち上がり、扉に向かう一成さん。

ギョッ

亞「……………」

そんな一成さんの服の端を無意識に掴む私。

「亞莎？」

亞「え？……………あっ！」

我に返り、慌てて手を離すと、一成さんが不思議そうに見つめて来た。

「どうしたんだ？ まだ何か？」

亞「……………もう帰っちゃうんですか？」

—「え？」

亞「な、何でもありません・・・」

うう、今日の私はおかしい。用が済んだら帰るのは当然の事だ。私はいったい何を期待していたのだろう・・・？

—「あー・・・その・・・亞莎、もう少しここにいていいかな？」

亞「え？」

—「もちろん、嫌なら「嫌じゃないです！」あ、ありがとう」

亞「・・・」

—「・・・」

亞「と、とりあえず、座りませんか？」

—「・・・そっだな」

ど、どうしよう。さっきまでと全然空気が違う。何か話題は・・・

亞「そ、そっだ！ —成さんの持って来てくれた胡麻団子食べまし

よ
「--」

「ああ、すっかり忘れてた。亞莎、まずはキミから食べてみてくれ」

亞「いいんですか？」

「もちろん。キミの為に持って来たんだからな」

亞「で、では……」

「一つ手に取る。胡麻団子とはよく言ったもので、お団子が完全に胡麻に包まれていた。」

亞「ぱくっ……」

「一口齧ると、胡麻の香りとお団子の甘さが口いっぱいに広がった。さらに一口……先程よりも強い香りと甘さがした。」

「……どうだ？」

亞「美味しいです。私、こういう物を食べるのは初めてで……ちょっと感動してます」

「……そうか。そう言ってもらえると持って来た甲斐があるよ」

亞「あの……もう一ついいですか？」

「なんなら全部食べてもいいぞ?」

亞「それはさすがに悪いです。一成さんも食べてくださいよ」

「そうか? なら俺も頂くよ」

一成さんと一緒に二つ目の胡麻団子を食べる。

亞「こんな美味しい物どこに売ってるんですか?」

「普通に街に売ってるぞ。よかったら今度の非番の日にも案内しようか?」

亞「ぜひお願いします!」

「わかった。じゃあ約束な」

亞「はい!」

結局、ほとんど私が食べてしまった。だって美味しかったんだもん。
・・・

「.....」

亞「……………」

胡麻団子を食べ終え、一成さんは本を読み、私は勉強する事にした。静寂の中、本を捲る音と筆の進む音のみが部屋に響く。

チラッ

一「……………」

一成さんは真剣な顔で本を読んでいる。その横顔に思わず見惚れてしまった。

亞「……………はっ！ いけない、集中しなくちゃ！」

しかし、集中しようとするほど一成さんの事が気になってしまっ
まっ。

亞「今日はもう止めよう。これじゃあ勉強する意味が無い」

そう思い、筆や本を片付ける。一成さんは相変わらずだ。どうやら集中すると周りの事が気にならない性格らしい。

亞「ふわ・・・あ・・・」

仕事の疲れだろうか。だんだん眠くなってきた。

亞「（一成さんに言わなきゃ。言わなきゃ・・・）」

意識が朦朧として来た。早く一成さんに・・・

亞「・・・すう・・・すう・・・」

限界だった。机に突っ伏したまま、私は意識を手放した・・・

亞莎SIDE OUT

IN SIDE

亞「・・・すう・・・すう・・・」

「・・・ん？」

聞こえて来た寢息に目を向けると、亞莎が机に突っ伏して眠っていた。

—「亞莎、こんな所で寝たら風邪引くぞ」

亞「すう……すう……」

完全に落ちていた。さて、どうするか。寝台に運ぶべきだろうが、無理に動かすと起こしてしまうかもしれない。

—「……そうだ」

上着を脱ぎ、彼女にかける。これなら風邪の心配も無いだろう。

—「黙って帰るのも失礼だし、書き置きでもしておこう」

亞「ん……成さん……」

—「お休み亞莎」

俺はゆっくりと扉を閉めた……

S I D E O U T

亞莎 S I D E

チュンチュン

亞「ん・・・」

小鳥のさえずりを聞き、ゆっくりと目を開ける。外はすっかり明るくなっていた。

パサ

亞「え？ これって・・・」

身動きと共に、背中に乗っていた何かが落ちた。これは・・・一成さんの上着？

亞「そうだ、一成さんは・・・」

あの後いつたい何が・・・？ 寝起きで回らない頭で考えていると、目の前に字の書かれた紙を見つけた。

『亞莎へ。黙って帰るのも失礼なので書き置きしておく。本当は寝台に運ぼうかと思っただが、起こすのも悪いのでそっとしておく事にした。だがそのままでは風邪を引く恐れがあったので、俺の上着を被せておいた。じゃあ・・・お休み』

亞「わざわざ書き置きをしていくなんて。それに、こんな高価そうな上着を私なんかの為に・・・」

一成さんの優しさに心が温くなる。こんな感覚は初めてだった。

亞「（何だろう、この気持ち？）」

不快感は無い。いや、むしろ・・・

亞「・・・とりあえず、上着を返しに行こう」

心に芽生えたそれを不思議に思いつつ、私は上着を手に一成さんの部屋に向かった・・・

周瑜、陸遜に期待されるほどの知謀を持つとされる呂蒙こと亞莎。彼女をして理解出来ないそれが、親友と同じ病である事に彼女が気付くのはまだしばらく先の事である。

第三十九話 教養を身につけるには読書が一番だがたまに余計な知識も得る（後

作「亞莎可愛いよ亞莎！」

一「二回目だぞその台詞」

作「健気だよねえ。一刀に褒めてもらう為に胡麻団子の日を提案したりして。一刀が兵達に恨まれるのも当然だと思っぞ」

一「萌将伝ネタか。気の話も萌将伝で出たしな」

作「昔の亞莎って雪蓮以上だったらしいな。一度見てみたいな」

一「その話題は止める。本人にとっては知られたくない事らしいしな」

作「残念。イケイケな亞莎も見てみたかったな」

一「イケイケって……今時使うか？」

第四十話 何事も頑張り過ぎず適度に休もう(前書き)

冥琳は苦手です(ネタ的な意味で)

第四十話 何事も頑張り過ぎず適度に休もう

コンコン

一「冥琳、いるか？」

冥「秋月か？ ああ、入れ」

ガチャ

冥「お前が訪ねて来るなど珍しいな。何か用か？」

一「亞莎と一緒にキミを探していたんだ。何でも確認して欲しい事があるそうだぞ」

冥「そうか、ならすぐに向かうとしよう」

一「……」

冥「ん？ 私の顔に何かついてるか秋月？」

一「いや、何だか疲れた顔をしている様な気がしてな」

冥「そうか？ 別にいつも通りだと思っが」

一「ちゃんと休んだりしてるか？」

冥「多少はな」

一「多少って……まさか休みの日とかも仕事してるってオチじゃないよな？」

冥「そうだが、それが何か問題でも？」

何を言ってるんだという表情で答える冥琳。いや、それ休みじゃないだろう……

冥「さて、もういいか？」

一「あ、すまない引き止めてしまって」

冥「お前はこれからどうするのだ？」

一「いつもみたいに街の警邏（とうさ）（という名の一人歩き）かな」

冥「ふっ、そうか、しっかり励めよ？」

一「キミはもう少し……いや、何でも無い」

冥「？」

冥琳と別れた俺は、街ではなく雪蓮の部屋に向かった。今の時間は彼女も仕事をしている……はずだ。うん、信じよう！

コンコン

雪「はい！ 誰かしら？」

一「俺だ雪蓮」

中からの返事に心底安堵した。

雪「一成？ どうしたの？」

一「少し話があるんだが、今入っても大丈夫か？」

雪「ええ、いいわよ」

一「じゃあ、失礼します」

ガチャ

扉を開けると、大量の書類に向かっている雪蓮の姿があった。

一「忙しそうだな」

雪「忙しそうじゃなくて忙しいのよ。一成、ちょっと肩揉んでくれないかしら？」

一「ああ、それくらいならお安い御用だ」

雪蓮の背に周り、彼女の方に手を置く。そして、ゆっくりと動かしていく。

雪「効く効く〜 上手じゃない一成」

一「そうか？ まあ、喜んでくれたのなら何よりだ」

その後、彼女が満足するまで俺は肩を揉み続けた・・・

雪「ふ〜。気持ち良かった〜。ありがとね一成」

一「どういたしまして。それじゃあ俺はこれで・・・」

雪「あら、私に話があるんじゃないの？」

一「・・・あ」

そうだ、すっかり忘れてた。このままじゃただ雪蓮の肩を揉みに来ただけじゃないか。

—「実は、冥琳の事なんだが・・・」

雪「冥琳？」

—「彼女少し働き過ぎじゃないか？ さっき本人に聞いたが休みの日も仕事しているみたいだし」

雪「やっぱりあなたもそう思う？ そうなのよ、それにいくら言っても自分は大丈夫だからって聞いてくれないし」

—「疲労つてのは本人の知らない所で溜まっていくものだ。ただでさえ彼女は人に弱みを見せようとしなないしな」

このままではいずれ彼女は原作と同じ道を・・・

雪「一成？ どうしたの、そんな難しい顔して」

—「・・・何でも無いよ」

雪「でも、一成の言う通りよね。・・・いつその事王の命令って事で無理矢理休ませちゃおうかしら」

—「それは・・・いや、彼女相手にはその方がいいかもしれないな」

雪「じゃあ早速明日冥琳を休ませるわよ。私が冥琳に言うておくか

ら、あなたは穩と亞莎に冥琳の仕事を何とか都合してもらおう言
って来てちょうだい」

—「任せてくれ。じゃあ今から行って来るよ」

雪「お願いね」

雪蓮の部屋を出て、今度は穩を探す。数分後、彼女を見つけた俺は
早速雪蓮の計画を伝えた。

穩「わかりました。では、明日の冥琳様の仕事は私と亞莎ちゃん
で分担することにしましょう」

—「すまない、結果的にキミ達の負担を増やす事になってしまっ
て」

穩「気にしないでください。大変という量ではありませんし、私も
冥琳様の事少し心配だったんですよ」

—「ありがとう。そう言ってもらえると助かるよ」

穩「亞莎ちゃんも一成さんのお願いだったら張り切って仕事して
くれると思いますし」

—「え？」

穩「うふふ〜。何でも無いですよ〜」

二人には後日お礼しないとな。穏と別れ、街に向かいながら俺はどんなお礼をすればいいか考えていた・・・

翌日

―「・・・落ち着かん」

冥琳がちゃんと休んでいるか気になってしょうがなかった俺は、昨日と同じく彼女の部屋に向かった。

―「あれ？」

部屋に向かう道中、チラと中庭を見ると、椅子に座って茶を飲んでいる冥琳の姿が見えた。

―「おはよう冥琳」

冥「ああ、おはよう秋月」

こちらを一瞥し、再びお茶を飲む冥琳。どろぢら雪蓮はつまぐちつてくれたようだ。

—「今日は休みなんだな」

冥「そうだ・・・まあ、どこのお節介による予定外の休みなんだがな」

—「う・・・」

冥「おや、どうやらそのお節介に心当たりがあるようだな」

—「・・・わかって言ってるだろう」

冥「ふっ、さあな」

微笑んでいるあたり休む事自体は不満に思っではないようだ。少しホツとした。

冥「何もしない休日というのも久しぶりだからな、精々羽を伸ばさせてもらうさ」

—「そうか、それはよかった。邪魔するのも悪いし、俺はこれで・・・」

冥「待て。せっかくだ、お前も飲んでいかないか？」

—「いいのか？」

冥「なに、たまにはお前と二人で話すのもいいかと思ってな。それ

とも、何か用事があるのか？」

—「じゃあ……ご同伴に預らせてもらつよ。っと、俺の茶器も取って来ないとな」

冥「それには及ばん。お前の分も用意してある」

—「え？」

冥「雪蓮のヤツがどうせお前がやって来るだろうから予め二人分用意しておくよう言つて来たからな。……まさかこんなに早く来るとは思つてなかったが」

よ、読まれていた！？ 不覚……

冥「どうした？ 座らないのか？」

—「あ、ああ……」

促され、向かい合うように椅子に腰かけると、冥琳が俺のカップにお茶を入れてくれた。

—「ありがとう」

礼を言いつつお茶を含む。この世界に来てよく飲んでいたので上等

な物だと一発でわかった。

冥「しかし、こうしてお前と二人っきりで話すのも何だか妙な感じだな」

一「そうだな。キミと話す時はいつも他に誰かいたからな。何だか新鮮だよ」

冥「確かに……」

一「……」

冥「……」

それっきり会話は止み、辺りにはお茶を飲む音と茶器が擦れる音だけが響いた。

一「（会話と言っても何を話せば……何か彼女が興味を持ちそうな話題は……）」

？「にゃ〜〜」

一「ん？」

可愛らしい声をあげたのは物陰から現れた猫だった。悠々と中庭を横切って行く猫。

冥「猫か・・・？ 何でこの場所に・・・」

一「何処からかわからないが結構入り込んでくるぞ」

冥「そうなのか？」

一「ああ、そして、猫が現れた後は必ず・・・」

明「お猫様~~~~」

同じく物陰から現れた明命が、顔を蕩けさせながら猫の後を追って行った。

冥「・・・今のは何だ秋月？」

一「え？ 気付かなかったのか？ 明命だよ」

冥「それはわかっている。私が聞きたいのはあやつの行動についてだ」

一「彼女は猫好きだからな。猫の事になると周りが見えなくなるみたいだぞ」

冥「話には聞いていたが、まさかあそこまでのモノとは・・・」

驚く冥琳。初めて見る表情だった。

—「冥琳には好きな物って無いのか？」

明「お猫様〜〜」

猫「フシャー〜！」

明「ああ！ 怒らせてしまいました・・・。ですが、私は諦めません！ 一成さんの様にお猫様の方から近付いて来て下さるようになるその日まで！」

遠くから明命の決意表明らしきものが聞こえて来た。

冥「・・・すまないが、我を失うほど心奪われる物は私には無いのだがな」

—「いや、明命を基準に考えなくていいんだ。ちょっと興味を持つような事でも構わない」

冥「そうだな・・・」

思ったより真剣に考え出す冥琳に苦笑いを浮かべる。軽く答えてくれればよかったんだが・・・

冥「……好きというわけではないが、琴を演奏するのは心が安らぐ」

一「へえ、冥琳って琴が弾けるんだな。もしよかったら今度聞かせてくれないか？」

冥「それは構わんが、聴かせられるような腕は持っていないぞ？」

一「じゃあ約束だ」

冥「やれやれ、強引なヤツだな。わかった、いつになるかわからないが約束しよう」

冥琳への質問を終え、今度は俺が尋ねられる番になった。

冥「私からもお前に聞きたい事があるんだが」

一「何だ？ 俺に答えられる事なら何でも聞いてくれ」

冥「そうか、では遠慮なく聞きましょう。秋月よ……お前は何か戦う？」

一「え？」

冥「お前の噂は出会う前からよく聞いていた。弱者を守る徳高き天の御遣い……まさか雪蓮が連れて来るとは思っていなかったがな」

一「あの時の事は思い出したくないんだがな……」

冥「最初は信用していなかった。御使いの名を語り雪蓮に取り入ろうと画策しているのではないかと。だが、実際は違った。日が経つにつれ皆がお前を信頼するようになった。もちろん、私もな」

一「・・・それは嬉しいな」

冥「お前は噂通りの人間だった。老夫婦を助けた時もそうだったが、お前は他者の為にとこまでも戦える人間だ。それも見返りなど求めず。だからこそ私にはお前が異質に見えるのだ」

一「異質？」

冥「お前の様な考えの人間を私は今まで見た事が無い。中には義憤に駆られて立ち上がる者もいるだろうが、その様な人間でさえ心の奥に何か抱えているものだ。完全な善の者などこの世に存在しないのだからな」

一「・・・」

冥「気分を害したのなら謝る。だが、それでも聞かせて欲しい。秋月よ、お前は何故戦う・・・いや、戦える？」

冥琳の目が俺を見据える。これは、心して答えなければいけないな。

一「冥琳は勘違いしている。俺は善人なんかじゃない。ただの偽善者だ」

冥「……どういう事だ？」

一「俺が戦うのは、後悔したくないからだ」

冥「後悔？」

一「例えばさ、今にも死にそうな人が目の前にいて、自分にはその人を助ける力がある。見捨てる事も出来るが、もし見捨てたら俺は一生悔み続けるだろう。「何故あの時助けなかったのか？」ってな

冥「……」

一「そんな思いをしたくないから、自分の自己満足を満たしたいから、俺は戦う。まさに偽善者だろ？」

冥「お前……」

一「それによく言っただろ『やらなくて後悔するよりやって後悔しろ』って」

冥「いや、初耳だ」

一「あれ？」

この時代には知られていないのか……って、実際誰が言い出したんだこれ？

一「と、とにかく、これが俺の戦う理由だ。答えになったかな？」

冥「充分だ。すまないな、答えにくい質問をしてしまった」

一「いや、こっちだって質問したから答えるのは当然だ」

冥「私とお前のでは質の重さが全然違うと思うのだが・・・」

一「気にしたら負けだぞ」

冥「わ、わかった」

何故かどもる冥琳。そんなに変な事言っただか俺？

その後、お茶を飲みながらまったり過ごし、気付けば日が傾いていた。

冥「もうこんな時間か。どうやらずいぶんと話し込んでしまった様だな」

一「そろそろお開きにしようか？」

冥「そうだな。なかなか楽しかったぞ秋月。休日をこんな風に過ごすのも悪くないな」

一「なら休日に仕事するのは止めてくれよ。ヒマなら俺がいくらでも話し相手になるから」

冥「ふっ、善処しよう」

これでもっと自愛してくれるようになればいいんだが・・・冥琳だ
しな。

一「これからも気に入った方がいいのかもしれない」

こんな風に思う辺り、やっぱり俺ってお節介なのか？

S I D E O U T

冥琳 S I D E

冥「ふう・・・」

夕食を済ませ、寝台に腰掛ける。先程から感じていたが体が軽い。
まさか一日休んだだけでここまで顕著に表れるとは。

冥「それだけ疲労が溜まっていたという事か」

コンコン

その時、私の部屋をのつくする音が聞こえた。まさかとは思つが・

冥「秋月か？」

雪「ざんねん。私でした〜」

扉を開けて入って来たのは雪蓮だった。やけに顔がにやけているが、気のせいではないだろう。

雪「ねえねえ、どうして一成だと思ったの？　もしかして、約束してたりとか？」

冥「さあな。それよりどうしたこんな夜更けに？」

雪蓮の言う通りだ。何故私は秋月だと思ったのだろうか？　それはさて置き、私の答えが不満なのか、雪蓮が頬を膨らませながら右手をあげる。そこには……

冥「……酒？」

雪「正解　あなたのためにとっておきのヤツを持って来たのよ」

冥「お前が飲みたいだけだろう」

雪「や、やあねえ！ そんなわけないじゃない！」

冥「はあ・・・」

ごまかすように座り込み、酒を盃に注ぎ始める雪蓮に、私は溜息を吐くしかなかった。

雪「はい、あなたの分」

冥「すまないな」

一口飲むと、心地よい熱が喉を通りぬけていった。ほっと息を吐く私の様子に雪蓮は満足そうな顔をしていた。

雪「その顔・・・どうやら休日を満喫してくれたみたいね」

冥「そうだな。これで明日から今まで以上に仕事に励めそうだ」

雪「それはよかったわ。実を言うとね、あなたがいつ倒れるか心配だったのよ」

冥「何だ？ 心配してくれたのか？」

雪「当然じゃない。私は冥琳が大好きなんだから」

冥「・・・お前がもっとやる気を出してくれば私の負担も減るんだがな」

私に抱きつきながら雪蓮が固まった。

雪「あ、明日から頑張ります・・・」

冥「そうか、しっかり聞いたぞ。明日からが楽しみだな」

雪「冥琳~~~~~!」

第四十話 何事も頑張り過ぎず適度に休もう（後書き）

作「や、やっと冥琳の話が終わった」

一「長かったな」

作「扱いにくいんだよ彼女は！ これ以上キャラ崩壊させるわけにはいかないしな」

一「今さら言う事じゃないけどな」

作「まあ、これからも彼女はこんな感じで書いていくつもりだから」

一「今回も語ったな俺。どうせ深くは考えてないんだろっが」

作「おお、よくわかったな」

一「……そこは嘘でも違っつて言えよ」

作「あ、そうだ。中庭に椅子って違和感があるって思った方がいるかもしれないませんが、今回二人がいた場所は無印で恋が愛紗達を撃沈させ、真で桃香が勉強していたあの建物だと思って下さい。まあ、正直うる覚えですが……」

第四十一話　そして歴史は動き出す（前書き）

呉編ラストです。小蓮と穏好きの方、申し訳ありません。

第四十一話　そして歴史は動き出す

雪「ん〜、やっぱりここは気持ちいいわね」

雪蓮が大きく背伸びをする。俺は今、彼女と共に城壁の上に来ていた。

雪「夕日が綺麗ね」

—「そうだな」

雪「あら・・・」

—「どうした？」

雪「風が・・・」

地平の彼方を見つめながら呟く雪蓮。

—「風？」

雪「風の雰囲気が変わったの。・・・何かが起こりそうな、そんな気がする」

—「勘か？」

雪「あら、私の勘はよく当たるのよ？」

フツと視線を戻す雪蓮。夕日も沈んで来たし、そろそろ戻った方がいいだろう。

—「そろそろ戻ろうか」

雪「え〜、せつかく二人つきりなんだからもう少しいましょうよ」

—「体が冷えたら大変だろ？ キミの服は風通しが良過ぎみたいだし」

雪「あら、だったらあなたが温めてくれればいいじゃない」

両手を広げながら何かを期待するように俺を見つめる雪蓮。

—「（はて、俺が温める？・・・ああ、なるほど）」

スツ・・・

雪「え？」

上着を脱ぎ、彼女の方にかける。

「どうだ？ これで多少はマシだと思うけど」

雪「・・・ええ、さすが天の国の服ね。とても温かいわ」

「それは良かった。じゃあ、雪蓮の言う通りもう少しここで・・・」

雪「気が変わったわ。・・・帰るわよ一成」

どうした？ と聞き返す前にスタスタと歩いて行く雪蓮。心なしか不機嫌な顔をしている。

「さっきまでとても上機嫌だったのに・・・わからん」

雪「（抱き締めてくれると思ったのに・・・馬鹿）」

早足で彼女の後ろ姿を追いかけながら先程の言葉を思い出す。

「（何かが起こる・・・か）」

他の人物の言葉ならまだしも、今回は雪蓮だ。まず間違いないだろう。

・・・雪蓮の予感が現実になったのはそれから三日後の事だった。

その日、俺を含めた臣下全員が玉座の間に集められた。

雪「・・・全員揃ってるわね」

全員「はっ!」

—「呼ばれてなんだが、俺はここにいていいのか？ みんなが集まってるって事は、何だか重要そうな話みたいだけど」

雪「構わないわ。今からの話は私達だけの問題じゃないから」

蓮「どういう事ですか姉様？」

雪「冥琳」

冥「・・・つい先日、袁紹より各地の諸侯に檄文が送られた」

ついに来たか・・・

祭「袁紹といえば・・・」

「美羽の従姉だな」

冥「そして、その内容というのが・・・」

冥琳が檄文を読みあげる。その内容は、予想していた通りの物だった。

蓮「反董卓連合・・・ですか」

雪「そう、つまり「好き勝手やってる暴君董卓をみんなで殺っちゃおう!」って事なんだけど、みんなはどう思う?」

蓮「ど、どうと言われましても・・・」

亞「冥琳様はどうお考えなのですか?」

冥「ん、私か?・・・私は参加するべきだと思う。この戦い、うまくやれば孫呉独立の第一歩になるだろうからな」

孫呉の独立。それはここにいる全員の悲願だ。冥琳の言葉に全員参加への意思を示している。

「.....」

だが、真実を知っている俺の気分は冷めきっていた。あの月が暴君？ 出鱈目にも程がある。

雪「不満そうね一成」

全員の視線が俺に向けられる。

一「不満というか・・・みんな、疑問に思わないのか？」

祭「どういう意味じゃ？」

一「この檄文に書かれている事が真実なのかって事ですよ祭さん。いかにもな感じで書かれてはいるが、あくまで袁紹の立場からの一方的な言い分。圧政が布かれ、民が苦しんでいるというのも、噂として広まっているだけで確証出来るほどの説得力は無い。だからこそ、それに書かれている事を鵜呑みにするのもどうかと思うんだが・・・」

冥「なるほど、よく読みとつたな秋月」

穩「一成さんの言う通りです。もちろん、私達も全てを信じているわけではありません。ですが、真実だという事も否定できませんから」

亞「それに風評の問題もあります。ですから、ここは参加するしかないと思われれます」

—「そうか……話の腰を折ってすまない。続けてくれ」

雪「なら、連合には参加する……という事でいいわね？」

雪蓮の最終確認に全員が頷く。

雪「わかったわ。じゃあ、これで話は終わりよ。冥琳、穩、亞莎、
連合参加の準備をお願い」

冥・穩・亞「」「御意」「」

小「やっと終わった〜。ねえ一成、今から街にお出かけしない？」

蓮「小蓮！ちゃんと話を聞いていたの！？これは孫呉の未来を
左右する大切な……」

小「ぶ〜！何よ！お姉ちゃんと違ってシャオはまだ一回も一成
とお出かけしてないんだからね！」

蓮「なっ……」

小「いいでしょ一成」

—「……悪い、少し考えたい事があるんだ」

小「え……」

—「雪蓮、もう下がってもいいんだよな？」

雪「え、ええ……」

「じゃあ……」

俺は玉座の間を後にした。

小「一成……いつもと違った」

亞「複雑な顔をしていましたね。怒っている様な悲しんでいる様な」

明「あんな一成さん初めて見ました」

思「ふん、ヤツの事だ、どうせくだらない事で悩んでいるのだろう」

蓮「思春、心配なら心配って素直にそう言えばいいのに」

穩「反董卓連合に思う所でもあるんでしょうかね」

冥「さあな。だが、今回の件がヤツの何かに触れたのは間違いないだろう」

祭「直接聞くのが一番じゃが……その様な雰囲気でもなさそうじゃしの」

雪「……」

・・・

—「ふう・・・」

出て来たはいいが、部屋に戻る気分でもなかったもので、中庭に移動し、木の下に腰を下ろした。

—「（今一番心を痛めているのは月だ。ありもしない事をでっちあげられ、自分を討つ為に連合まで組まれて、そのせいで自分に付き従ってくれている兵達の命が失われていく事に・・・）」

はい、その時を楽しみにしています

別れ際の彼女の笑顔が浮かぶ。あの笑顔を悲しみに変えさせはしない。
い。

—「・・・そろそろ行くか」

?「何処に行くのかしら?」

勢いよく立ちあがる俺にかけられる声。

—「雪蓮……」

雪「心配して様子を見に来てみれば……全く、良い顔しちゃって」

—「心配って……俺を？」

雪「出ていく時に何だか思いつめてたみたいだから。みんなも気にしてたわよ？　いつものあなたと違ったって」

—「……ありがとう。でも、俺は大丈夫だ」

雪「そうみたいね。……それで、さっきの話だけど、何処に行こうって言うの？」

—「……」

雪「言えないの？」

—「……すまない」

雪「そっか……」

— 瞬悲しみの表情を浮かべた雪蓮だったが、すぐにいつもの笑顔に戻った。

雪「だったら、お別れの宴を開きましょう！」

「はい？」

雪「今まで色々してもらった礼も含めて、これくらいはさせてもらっていいでしょ？」

「しかし、キミへの借りがまだ・・・」

雪「なあに？ そんな事気にしてたの？ 借りなんておじいちゃんとおばあちゃんを助けてもらった時点で十二分に返してもらったわよ」

「そ、そうなのか？」

雪「そうなの。じゃあ、さっそくみんなに伝えて来るから、明日の夜を楽しみにしてなさい」

スタスタ・・・

「・・・行ってしまった」

開いてくれるだけでも嬉しいんだが、何だか話がどんどん大きくなっていったような・・・

そんなこんなで次の日の夜、部屋にやって来た雪蓮に引っ張り出され、玉座の間に向かうと・・・

雪「みんな〜！ 主役連れて来たわよ〜！」

そこには山盛りの料理と大量の酒が机の上に所狭しと並べられ、周りの椅子には蓮華達が座っていた。

祭「遅いぞ秋月！ お主が来なければ酒が飲めんではないか！」

冥「祭殿・・・主役より先に飲む人がありますか・・・」

一「これは・・・」

雪「街のみんなにあなたがここを去る事を伝えたの。そしたらいろんな所から次々と贈られてきちゃって、おかげでこうして玉座の間を使う事になったのよ」

一「みんなが・・・」

雪「伝言も預かってるわ。「私達のような者まで色々気にかけてくださってありがとうございます。また冥に来られる事がありましたらぜひいらしてくださいね」ですって」

一「・・・」

街の人達の優しさに言葉が出て来ない。気にかけてもらっていたのはこっちの方だというのに・・・

「……ありがとう」

雪「ほらほら、嬉しいのはわかるけど早く座らないと本当に祭が暴走するわよ?」

「あ、ああそうだな」

端に座ろうとしたが、主役がそんな所に座ってどろするといつ事で、真ん中の席に腰を下ろした。

雪「それじゃあ、気持ち良く一成に旅立ってもらうために……始めるわよ〜!」

全員「お〜〜!」

こうして、宴は始まった。

祭「うむ、やはり宴の席での酒は格別じゃな!」

冥「祭殿、今からそんなに飛ばして大丈夫なのですか?」

祭「ふん、この程度で儂がつぶれると思っておるのか?」

冥「……はあ」

最早お決まりのような冥琳と祭さんのやりとり。

蓮「ねえ思春、これ一口どう？ とても美味しいわよ」

思「はっ、頂きます」

蓮「ふふ、今は宴の席なんだから、そんなに畏まらなくていいのよ？」

思「い、いえ、そういうわけには・・・」

料理を勧める蓮華と、こんな時でも態度を崩さない思春。

亞「ちょ、ちよつと明命、そんなに急いで食べたなら喉に詰まっちゃ
うよ？」

明「大丈夫・・・んぐ!？」

亞「た、大変！ 明命！ お水お水!!」

明「んぐッ・・・んぐッ・・・ぶはぁ！ はれっ？ 何だか体が
ポカポカして・・・」

亞「・・・ああ！ お、お酒渡しちゃった・・・」

友達同士という事で、いつもと違い砕けた口調の亜莎と明命。大変
そうだが・・・亜莎に任せよう。

小「ねえ穩、どうやってたらそんなにおっぱい大きくなるの？」

穩「んっ・・・気が付いたらこうなっちゃってましたからよくわかりませせん」

小「気が付いたらって・・・くっ！ 余裕がましてくれちゃって
っっ！」

穩「そんなつもりないですよっ」

小「むきっっ！ 揺らすなっっっ！！」

・・・そっとしておっじ。

—「ふふ・・・」

雪「どうしたの？」

—「みんな楽しそうだな」

雪「あら、あなたは楽しくないの？」

—「いや、最高だよ」

雪「そう、よかった。一成の為の宴なんだからあなたが楽しまない
と意味ないものね」

それから、他愛ない話で盛り上がったたり、俺にお酌するのは誰かと
いう事で何故か数人が争ったりしながら時は過ぎて行き、宴も終盤
にさしかかっていた。

雪「そうだ、最後にみんな写真を撮りましょう!」

全員「しゃしん?」

雪「いいでしょ一成?」

—「そうだな、みんなの思い出の為にも撮っておくか」

雪「そこなくっちゃ」

冥「・・・二人とも、盛り上がっている所悪いが、『しゃしん』と
は何だ?」

雪「あ、そつか。私以外は知らないのよね。え〜つと・・・天の
国の技術で、撮った物を紙に写し取った物・・・だったかしら?」

—「よく覚えてたな」

カメラを発現させみんなに見せる。

亞「変わった箱？ですね。それが『しゃしん』ですか？」

一「これはカメラ。写真を撮る道具だよ。使い方は……」

雪「はいはい！ 私が撮ってあげる！」

カメラを雪蓮に渡し、とりあえず俺を撮ってもらった事にした。

雪「いくわよ……えいつ」

カシャ！

明「い、今の音は何ですか！？」

雪「あははは！ あの時の私と同じ反応しちゃって。大丈夫よ明命、
今のは写真を撮る時の音らしいから」

明「そ、そうなんですか？」

雪「あ、出て来たわ」

出来あがった黒い写真に怪訝な顔をするみんなだったが、時間が経つにつれてその顔が驚きに変わっていった。

蓮「え、これ……一成!？」

雪「どう? これが写真よ。絵なんかよりよっぽど凄いでしょ?」

冥「これは、どういう原理なのだ?」

一「すまない、俺もそこまで詳しくは知らないんだ」

穩「こんな技術があるなんて……天の国への興味がますます強まっちゃいました〜!」

祭「確かに、これ程の物を見せられるとお……」

思「……ふむ」

興奮するみんな。思春までもが若干目の色を変えている。

雪「とりあえず、この写真は私が貰うとして……さあ、撮りましょうか」

亞「あ、でも先程のやり方だと一人写らない方が出るのでは……」

一「ああ、その点は問題無いよ。自動で撮るように設定出来るから」

冥「……何でもありだな」

「とりあえず、みんな並んでくれるか」

小「じゃあ、シャオは一成の隣ね」

蓮「し、小蓮！勝手に決めないの！」

小「ふーんだ！こればかりは譲らないんだから！」

雪「こらこらケンカしないの。そんなに隣がいいんなら後で二人つきりで撮ればいいじゃない」

蓮・小「……へっ？」

雪「いいわよね一成？」

「別に構わないけど……」

雪「決まりね。はいはい、さっさと並びなさい」

適当に並びを決め、タイマーをセットし、急いで戻る。今回も俺が中心だ。ちなみに、右隣は穩で左隣は祭さんだった。

カシャ！

……

雪「じゃあ、次は一成と一人ずつ撮って行くわよ。まずは蓮華ね」

蓮「は、はい」

雪「みんなの分は私が撮ってあげるから」

蓮華が俺の隣に立つ。

蓮「あの、一成？ さっきはいきなりだったけど、これって何か作法とかあるのかしら？」

一「いや、楽な姿勢で構わないよ。強いて言えば、笑顔で写る事くらいかな」

蓮「そ、そうなの？・・・なら」

ギョツ！

一「蓮華？」

蓮「て、手を繋いでも問題無いわよね？」

一「ああ、そうやって撮る人も多いしな」

蓮「ツ・・・／／」

雪「蓮華の顔が真っ赤だけど・・・まあいいわ、撮るわよ」

カシャ！

冥「次は私か・・・」

一「冥琳、聞いてただろうけど、楽な姿勢でいいからな」

冥「・・・ああ」

一「？ どうしたんだ？」

冥「・・・どうやらガラにもなく緊張しているようだ」

一「緊張？」

冥「ああ、さっきまでは何ともなかったのだが、こうしてお前の隣に立った途端な」

一「まあ、初めての体験なんだから緊張するのも普通だと思うぞ？」

冥「そう・・・かもしれんな」

雪「（二人とも鈍すぎ・・・）撮るわよ」

カシャ！

—「祭さん、何故に腕を？」

祭「何じゃ、儂が腕を組むのはおかしいか？」

—「い、いえ、そういうわけでは」

祭「なら問題無かるう。儂はお主の事を気に入っておるのじゃからな。お主のおかげで忘れていたものを思い出せたしの」

—「？」

カシャ！

雪「ちよつと思春、そんなに離れてたら撮れないじゃない」

思「し、しかし……」

雪「仕方ないわね……一成、思春を抱き寄せなさい！」

思「なあっ!？」

—「それは……」

雪「このままじゃ埒があかないわ。男だったら時には強引に攻めな

いと」

思「わかりました！ 寄りますから早く終わらせて下さい！」

一「お、おい思春、落ち着け」

カシャ！

明「うう……」

一「明命、固くなり過ぎだ。もう少し落ち着いて」

明「は、はい……」

一「……そうだ、猫の事を思い浮かべてみるんだ」

明「お猫様ですか？」

一「ああ、目の前に猫がいると想像するんだ」

明「目の前に……」

一「どうだ？」

明「……えへへ、お猫様……」

一「今だ雪蓮」

雪「はいはい」

カシヤ！

亞「では、お願いしますー成さん」

雪「あら、一番緊張すると思ってたのに、大丈夫そうね」

亞「はい！」

雪「なんだったら抱きついちゃえば？」

亞「はい！」

ギユ！

雪「・・・まさか、本当にやるなんて」

亞「どうぞ雪蓮様！」（実はヤケクソである）

カシヤ！

小「一成」

—「どうしたんだ小蓮？」

小「前に教えてくれたあの・・・なんだけ・・・そう！ お姫様抱っこ？ して欲しいな」

—「わかった。じゃあ、いくぞ」

小「あはは 高い！ 姉様、撮っていいよ！」

雪「（あの娘、いつの間に・・・）」

カシャ！

穩「はあっ・・・はあっ・・・」

—「穩？ 息が荒いけど、体調が悪いなら無理して・・・」

穩「違いますよ。さっき写真を見た時から興奮しちゃって」

—「雪蓮！ 急いでくれ！」

カシャ！

雪「最後は私ね」

冥「では私が撮ってやるう。やり方は見ていたからな」

雪「お願いね冥琳」

最後に雪蓮が隣に並んだ。

雪「一成、あなたが来てから色々あったわね」

一「ああ、ありがとな雪蓮。キミが俺をここに置いてくれたおかげで、こうしてみんなと過ごす事が出来た」

雪「うん・・・あのね、私、あなたの事好きよ？」

一「俺も雪蓮の事好きだよ。この世界で出来た大切な友達だからな」

雪「そうね、あなたにとっては友達なのよね。でも・・・」

冥「撮るぞ」

雪「一成」

一「ん、なん・・・」

チユツ

—「!?!?!?!?!」

全員「あゝゝ!?!」

雪「私は『友達』で終わらせるつもりはないからね」

蓮「ね、ねねね姉様！ 何をしてるんですか——！」

雪「何って……接吻？ もしくは口づけ？」

蓮「せつ……!?!」

小「ずるいずるいゝゝ！ 一成、シャオにもしてよ！」

—「……」

冥「？ おい、秋月？」

—「……はっ！ 俺は何を……」

数秒意識が飛んでいた。気付けば、蓮華が雪蓮に詰め寄り、小蓮が俺にくつつき、祭さんが大笑いし、冥琳が呆れ、明命と亞莎が顔を真っ赤にして目を回し、穩がにこやかに二人を介抱し、思春が冷やかな目で俺を見つめていた。

「（何が起きたんだ・・・）」

こうして、状況が掴めないまま、夜は更けて行った・・・

翌日、城の前まで見送りに来てくれた全員と握手を交わし、街のみんなにお礼を言いつつ、俺は呉を後にした。

「本当に良い人達ばかりだった。・・・出来れば戦いたくはないな」

複雑な思いを抱きながら、俺は次の目的地、月がいる洛陽を目指し、歩み始めた・・・

S I D E O U T

袁紹より放たれた反董卓連合参加の檄文、それは当然のごとくあの二人の元にも届いていた・・・

朱「・・・では、連合へは参加するという事でよろしいですね？」

桃「うん！ 董卓さんの所為で苦しんでいる人達がいるなら助けなきゃー！」

愛「董卓め・・・我が正義の刃、必ず突きつけてやる！」

鈴「鈴々もやってやるのだ！」

雛「あわわ・・・朱里ちゃん、私達も頑張ろうね」

？「ふむ、私の名を轟かす絶好の機会ですな」

桃「（ご主人様、私達頑張るから、早く戻って来てね）」

そして・・・

桂「・・・以上がこの檄文に書かれている内容です」

華「・・・まさか、本当に起こるなんて」

桂「あの・・・華琳様？」

華「いいわ、麗羽の誘いに乗ってあげる。桂花、私達も参加するわよ」

桂「よ、よろしいのですか？ 華琳様ならお気づきだろうと思いましたが、これは・・・」

華「わかっているわ、でもね、私の目的は別にあるの。精々利用さ

せてもらつわ
「

桂「別・・・ですか？」

華「ふふ、いずれわかるわ。さあ、皆すぐに準備に取り掛かりなさい。完了次第出立するわよ！」

全員「御意！」

華「（待っていないさい・・・一成）」

劉備と曹操。二人の英傑が、己が願ひ、己が目的の為に連合への参加を決意した。

そして、渦中の少女。暴君とされている董卓は・・・

月「・・・」

夜、月は自分の部屋で寝台に腰掛けていた。

？「月、入るわよ」

ガチャ

月「・・・詠ちゃん」

詠「月、少し休まないよ。ずっと寝てないんでしょ？」

月「うん、でも・・・眠れなくて」

詠「月・・・」

月の隣に座る詠。しばらくの沈黙の後、月はゆっくりと口を開いた。

月「・・・ねえ詠ちゃん、一成さんは連合に参加するのかな？」

檄文が放たれ、自分が暴君に仕立て上げられた日から、月はずっとその事を気にしていた。自分と親友を助けてくれた心優しい天の御遣い。彼が自分を討ちに来るのではないかと。

詠「・・・わからないわ。たまに噂を聞くけど、あいつが今何をしているのかもさっぱりだもん」

月「そうなんだ・・・」

詠「というか、二ヶ月くらい前までは曹操とかいうヤツの所にいるっていう噂があったと思ったら、この前は呉にいるって聞いたし・・・滅茶苦茶よあの男！」

月「ふふ、一成さんは御遣い様だから・・・」

詠「・・・やっと笑ってくれたね」

月「え？」

詠「あいつがボク達の敵になるかわからない。でも、月はあいつを信じてるんでしょ？」

月「・・・うん」

詠「なら信じ続けなさい。今は・・・そうするしかないんだから」

月「・・・そうだね」

ふと、月は窓から星空を見上げた。

月「（一成さん・・・）」

・・・

一「今日は星が綺麗だな」

時を同じくして、空を見上げている男が一人。

一「月……」

反董卓連合……この壮大な茶番劇の中で旅人がとる行動とは……
そして、少女の運命は……今はまだ誰にもわからない。

第四十一話　そして歴史は動き出す（後書き）

作「さて、ようやく次回から反董卓連合編に移れるぞ」

一「久しぶりだなこの終わり方」

作「今さらだが、基本、俺は全ての人物と絡ませるように心がけているが・・・今回でそれは破られてしまった。小蓮と穏好きの方、拠点イベントなくてすみません」

一「言い分を聞こうか」

作「どうしてもネタが思いつかなかったんだよ。だけど、このまま伸ばしても読者の方を待たせるだけだし、だったらいつそ飛ばしてしまうのもありかなって」

一「約一ヶ月か・・・怠慢だな」

作「ふん、俺は学生だ。こっちはかり時間はかけられないんだよ」

一「・・・他の作者の方の中にも学業と両立しながらも早く更新されている方も多いがな」

作「・・・」

一「最近思うんだが、ずいぶん月に肩入れするんだな」

作「何を！　貴様、あんな理不尽な目に遭っている少女に何も感じないのか！？　鬼！　悪魔！」

—「喚くな。誰もそんな事言っていないだろう」

作「わ、悪い。つい興奮して」

—「別にいい。気持ちはわかるからな」

作「そ、そうか。お前には存分に暴れてもらうからな、頑張ってくれよ」

—「……前にも聞いたが、どれくらい無茶苦茶させるつもりだ？」

作「そうだな……剣の一振りで百人くらいぶっ飛ぶくらいか？」

—「前より悪化してるじゃないか！ そんな某栄光のゲームみたいな事させるな！」

作「冗談……かな？」

—「聞くな！」

第四十二話 回りくどい事言ってキレられても自業自得(前書き)

なんか前回の最後辺りでシリアスっぽい感じになりましたが、反董卓連合編でも飛ばして行きます。この小説にシリアスなど不要だ！

第四十二話 回りくどい事言ってキレられても自業自得

呉を去って一週間、ようやく洛陽に到着した。

—「平和だ・・・」

街の中には笑顔が溢れていた。この人達が圧政に苦しんでいるって？

—「・・・袁紹を引っぱって来てこの光景を見せてやりたいな」

グゥ！

俺の腹から盛大な音が鳴る。そういえば、ここ最近ほとんど食べ物
を口にしていない。

—「まずは腹ごしらえだな」

丁度肉まんを売っている店を見つけたので、とりあえず十個ほど購
入した。

—「さて・・・」

肉まんを食べながら街を歩く。今すぐにも城に向かいたいが、懸念すべき事が一つ。

—「いきなり押しかけて大丈夫だろうか？ 門前払いされる可能性もあるし・・・」

?「ワンッ!」

—「ん?」

足元から聞こえる声に目を向けると、一匹の犬が俺の足に纏わりついていた。

犬「ワンッ!」

—「・・・お腹空いているのか?」

俺の持つ肉まんに視線を向ける犬。心なしか目をキラキラさせている。

—「いいぞ、ほら」

犬「ワンッ」

犬の前で屈み、中身は熱いのでとりあえず皮の部分の部分を差し出すと、嬉しそうに食べ始めた。

「はは、落ち着いて食べるよ」

犬「ワンッ！」

しかし……どこかで見た覚えがあるような……

?「……じゅ〜」

「?」

頭上から感じる視線。見上げると褐色の肌をした赤い髪の少女と目が合った。

「もしかして、キミの犬かな？」

少女「……（コクン）」

「そうなんだ、名前は？」

少女「……セキト」

—「そうか、よろしくなセキト」

セ「ワンッ!」

少女「……じゅ」

—「? どうしたんだ?」

少女「肉まん……」

—「ああこれ? もしよかったら食べるか?」

少女「……(コクコク)」

先程より強く頷く少女に肉まんを渡す。

少女「もつきゅもつきゅ……」

—「……和む」

少女の肉まんを頬張る様子につい見惚れてしまった。

少女「……無くなった」

シユンとする少女にもう一度肉まんを見せる。

「もう一つ食べるか？」

少女「……（コクコク！）」

結局、残りの肉まんも全てこの娘にあげてしまった。全てを食べ終えた少女はとても満足げな表情をしている。

少女「……美味しかった」

「はは、それはよかった。ところで……えっと、キミは……」

少女「……恋」

「それって真名じゃないのか？」

少女「いい……肉まんのお礼」

「肉まんなんかじゃ真名とぜんぜんつり合わないと思うんだが……」

少女「……そう?」

「ま、まあ、せつかく教えてくれたんだし、呼ばせてもらっつよ。あ、俺の名前は秋月 一成。真名がないから一成って呼んでくれ」

恋「……………」(コケン)「

—「そうだ恋、実は俺……………」

?「ちんきゅー……………」

—「ツ……………」

?「きー……………」

ブオン!

?「ぴッ!?!」

背後から襲い来る殺気に、振り向きざまに拳を放ったが、すぐに軌道を逸らせた。

恋「……………」ちんきゅ

?「り、呂布殿……………」怖かったですぞ……………」

何故なら、俺を襲おうとしていたのが小柄な少女だったからだ。どうやら恋の知り合いのようだな。

恋「自業・・・自得・・・」

少女「う・・・」

—「呂布？　もしかして、恋がああ呂布か？」

少女「そうです！　この方こそが飛將軍と名高いあの呂布殿ですぞ
！」

恋に聞いたのだが、何故か自慢げに少女が答えた。

少女「というかお前！　今呂布殿の事を真名で呼びやがりましたね
！　おのれ～～何処で聞いたか知りませんが許しませんぞ～～！」

恋「いい、ちんきゅ・・・恋が教えた」

少女「な、なんですと～～！？　うう、なんと羨ましい・・・」

—「・・・で、いきなり俺に飛び蹴りを喰らわそうとしたキミの名
前は？」

少女「ふん！　お前に教える名前などありはしません！」

恋「ちんきゅ・・・」

少女「り、呂布殿・・・そのような目で見つめないでください」

恋「じ～～・・・」

少女「・・・陳宮です」

—「俺は秋月 一成。よろしくな陳宮」

陳「秋月？・・・まさか、お前が董卓殿の言っていた御遣いなのですか？」

—「ああ、確かに俺は月と知り合いだ」

陳「なつ・・・董卓殿の真名まで・・・」

恋「一成、ついてきて・・・」

—「恋？」

恋「月が会いたがつてる・・・だから・・・」

—「わかった。俺がこの街に来たのもそれが目的だったからな」

恋の案内の下、俺は月がいる城に向かった。

陳「お、お待ちください呂布殿！ ねねもお供しますぞ！」

・・・

その後、トントントン拍子に話は進み、すぐに月と面会出来る事になった。侍女に案内され、玉座の間に向かう。

詠「……………」

恋「……………」

陳「……………」

女性A「へ〜…………あの男がなあ」

女性B「ふん……………」

そこで俺を待っていたのは、詠、恋、陳宮、そして初めて見る女性が二人。

そして…………

月「…………お久しぶりですね、一成さん」

にこやかに、だが、どこか悲しそうな表情で俺を迎える月がいた。

—「月……………」

月「こうしてまたお会いする事が出来てとても嬉しいです。それで、恋さんのお話では私に会うためにわざわざいらしてくれたそうですねけど・・・何か御用ですか？」

一「・・・今、巷を騒がせている噂についてだ」

月「ッ・・・」

『噂』という単語にピクンと反応する月。

一「『洛陽にて董卓の圧政により多くの民が苦しんでいる』・・・細かな部分は違つが、だいたいこれで合ってるだろ」

月「それは・・・」

女性B「貴様あ！ よもやそのような出鱈目を信じて董卓様を害しに来たのか！？ そこに直れ！ 我が戦斧のサビにしてくれろ！！」

傍に控えていた女性が、いつの間にか俺の首筋に武器を押し当てていた。

女性A「落ち着き華雄。・・・せやけどまあ、もしそうやったとしたら・・・なんや、御遣い言っんも大した事なさそうやな」

もう一人の女性も、武器こそ構えていないが鋭い瞳で俺を睨みつけ

ている。

陳「た、大変ですぞ呂布殿！ あの男、董卓殿のお命を！」

恋「……大丈夫、殺気が無い」

詠「……アンタは月が……この娘が本当にそんな事すると思ってるの！？ あの檄文や噂はねえ、月の洛陽入りを妬んだ袁紹のつちあげよ！！ アンタちゃんと街の様子を見たの？ あの中に苦しんでいる人達はいた？ いるわけないよね、民達は常日頃月に感謝してるんだもの。 どう、それでも理解出来ない？ ならハッキリ言ってるわよ……月は圧政なんて布いていないわ！！」

月「詠ちゃん……」

一「ああ、俺も同感だ」

全員「……へっ？」

俺の言葉にポカンとする一同。なんだ？ そんなに変な事言ったか？

一「あんな一方的な檄文や信憑性の無い噂を信じるわけないだろ。詠の言う通り街の人達も笑顔だったし、とても圧政が布かれているようには見えない」

月「一成さん……」

—「それに、噂が流れ始めた時点で俺は出鱈目だと確信していたからな。他人を心から思いやる事が出来る月が、己のために民を虐げるなどあり得ない」

月「私を・・・信じてくれていたんですね」

—「当然だ」

月「ありがとう・・・ございま・・・うう・・・」

大粒の涙を流し始める月。しまった、泣かせるつもりはなかったんだが・・・

詠「なら回りくどい言い方せずに最初からそう言いなさいよ」

—「回りくどいって・・・俺が言う前に彼女が早とちりしたんじゃないか」

俺に武器を突き付けていた女性を見据える。

女性B「私の所為だと言うのか!」

女性A「せやなあ、ウチも早とちりしてしもったけど、最初に話を遮ったんは華雄やしなあ」

女性B「だ、だが、元はといえばこの男が噂の話をした所為であつ

てだな・・・」

—「・・・俺の所為なのか？」

恋「一成、悪くない・・・」

女性B「り、呂布まで・・・」

月「ふふ・・・」

月の顔に笑顔が戻り、場は穏やかな雰囲気にも包まれた。

・・・

詠「それで、アンタはこれからどうするつもりなの？」

—「その事なんだが、月・・・俺もキミに力を貸すよ」

月「え？」

—「俺も戦う。俺の全力を以ってキミを守ってみせる」

月「へう・・・／＼」

決意の言葉と共に月を見つめると、俯かれてしまった。チラツと見えだが、何故か頬を赤くしている。

女性A「かゝっつ！ さすが天の御遣い！ ようそんな臭いセリフ
言えるな自分！」

—「はあ・・・」

女性A「名乗るのが遅れたけど、ウチは張遼、字は文遠や。アンタ
は？」

—「俺は秋月 一成。よろしく張遼」

女性B「華雄だ。さっきは、その・・・すまなかつた」

—「よろしく華雄。気にするな、月への忠誠心の現れだろ？」

華「その通り！ よくわかっているな」

詠「アンタ・・・本当にいいの？ ボク達に加担するって事は、連
合軍と戦うって事なのよ？」

—「ああ、覚悟は出来ている」

詠「・・・わかった、アンタの力、貸してもらっわ」

こうして、正式に月の軍で戦う事になった俺。後は来るべき時に備
えるだけなのだが・・・

張「じゃあ・・・早速秋月の力を見せてもらおうぞ」

そつは問屋がおろさないようだ。

—「どういう事だ？」

張「鈍いやつちゃんゝゝ、勝負に決まっとるやる」

華「面白そうだな、私も参加させてもらおうぞ」

俺の腕を掴み、ズルズルと引き摺って行く張遼。何故か華雄まで乗り気のようだ。

張「どんな勝負が出来るんかなゝゝ・・・急ぐでえ秋月、目指すは中庭や！」

—「お、おい！ 引つ張らないでくれ！」

月「・・・行っちゃった」

詠「ボク達も行ってみる？ 正直、アイツがどれくらい戦えるか興味あるし」

月「うん」

陳「呂布殿、どうされますか？」

恋「…………行く」

陳「では、ねねもお供いたしますぞ！」

結局、全員で中庭に向かう事になった。

一「春蘭に思春、そして今回は張遼…………何で毎回絡まれる？」

張「何か言ったか？」

一「……………何でもないよ」

俺は盛大な溜息を吐いた……

第四十二話 回りくどい事言ってキレられても自業自得（後書き）

作「ついに月と再会できたな。さあ、これから忙しくなるぞ！」

一「……あのまま斬られるかと思った」

作「無事だったからいいじゃないか」

一「そういう問題じゃない」

作「次回は張遼と華雄との戦いだ。さて、どう戦わせようか……」

一「頼むからまともな戦い方させてくれ」

作「え、そんなの普通で詰まらんだろ〜」

一「普通でいいんだよ！」

作「わかったよ……ククッ」

第四十三話 不意打ちが卑怯とか言うヤツは本当の戦場を知らない(前書き)

久しぶりの戦闘描写・・・みなさんの反応が怖い・・・

第四十三話 不意打ちが卑怯とか言うヤツは本当の戦場を知らない

「それで、どっちから戦うんだ」

張遼と華雄、どちらもかなりの実力者だ。だが、こちらも月を守ると宣言した手前、情けない姿を見せるわけにはいかない。

張「はいはい！　まずはウチと勝負や！」

華「ちよつと待て、何故お前が決めるのだ」

張「ウチが言い出した事なんやからウチが最初に戦うのが道理やろ？」

華「む・・・そう言われると」

張「というわけで、アンタは大人しく見物しとき」

華「いいだろう。だが、やり過ぎるなよ。お前の次は私なのだからな」

張「さあ、それは秋月しだいやな」

張遼が俺の前に立つ、彼女から発せられる殺気が徐々に強くなっていくのがわかる。

—「（まずは手甲で様子を見たいが、彼女の武器は堰月刀、リーチ差が大きい。だったら・・・）」

今回は刀を発現させる。以前見せた事のある月と詠以外は驚くかと思っただが、意外と普通の反応だった。

張「それがアンタの得物か。ずいぶん細いけど、そんなんでウチの一撃を受けきれんか？」

—「受けきってみせるさ」

張「言うやん。これは益々期待出来そうやな」

詠「二人とも、準備はいい？」

—「ああ」

張「ウチはいつでもいけるで」

詠「それじゃ・・・始め!」

詠が合図をするが、俺も張遼も動かない。

張「どしたん？ かかって来んのか？」

「初めて戦う相手に何も考え無しに突っ込む程馬鹿じゃないさ」

張「なら・・・ウチから行かせてもらおうで!!」

飛竜堰月刀を振りかぶりながらこちらに向かって来る張遼。

「ッ！ 速い！」

張「ウチの『神速』とくと味わい！」

ブオン！ ガギン！ ギリギリ・・・！

迫りくる高速の三連撃。その一撃目を何とか避け、二撃目を打ち払い、最後は鎧迫り合いに持ち込んだ。

「神速か・・・よく言ったものだな、やられたかと思ったぞ」

張「よう言うわ、そないな余裕顔見せとるくせに」

交差する刃の向こうで張遼が笑みを浮かべる。その目は喜びに溢れていた。

「」（思春と同じく、彼女も速さと手数重視か。しかし、あの速さ

相手に武器破壊は難しそうだな。だったら・・・彼女と同じ土俵に立ってみるか」

一度距離を取るため、後ろに飛んだ。張遼も同じ考えだったようで、追撃はしてこなかった。

張「やっぱり勝負して正解やったな。こんな楽しいのは久しぶりや」

「そう言ってもらえるとこちらとしても嬉しいな」

張「なら、もっと楽しませてもらうぞ!」

先程よりもさらに速い速度で再び襲い来る張遼。

張「せりゃあああああー!」

ギン! ギン! ブン! ガギン! ブオン!

張「そろそろそろあ!」

ブン! ギン! ガツン!

—「……………」

張「なんやあ！ 守ってばかりやないかあ！」

ガキン！

上段からの振り下ろしを強引に打ち払い、再び後ろに下がる。

陳「なんですかあの男、大層な事言った割には全然大した事ないじゃないですか」

恋「……………一成、本気出してない」

華「確かに、まるで張遼の力を推し量っている様な……………」

詠「まさか？ 霞相手に？」

月「（二人とも、どうかケガだけはしないように）」

刀を鞘に戻す。その行動に張遼が怪訝な表情を見せる。

張「……………降参か？」

—「いや、今度はこちらから行かせてもらおうと思ってる」

張「そうかそうか、やっとやる気になってくれたんか。このまま様子見で終わるかと思ったで」

一「やっぱり気付かれてたか」

張「それで、せっかくの得物をしもつてどうするつもりや?」

一「これが俺の構えでね」

刀を腰元で構え、精神を集中する。機会は一度のみ、その一撃に全てをかける。

一「……………」

張「ええやんええやん……ゾクゾクしてきたで。秋月、アンタやっぱり最高や!」

対する張遼も堰月刀の切っ先を俺に向けながら不敵に微笑む。

張「来いや、何をするつもりか知らんが返り討ちにしたるで!」

視界には張遼以外は映らない、いや映さない。今の俺に彼女以外に意識を向ける必要はない。

—「その神速、越えてみせる」

フツ……

張「なつ、消え……」

—「……居合いの太刀」

ヒュン！……カチン

張「あ……れ？」

刀を仕舞うと同時に張遼が崩れ落ちた。どうやら勝負ありだな。

詠「そ、そこまで！ 勝者秋月！」

陳「な、何が起こったのですか！？ あの男が消えたと思ったたら張遼殿が倒れ込んでしまいましたぞ！」

恋「……擦れ違いざまに斬った」

華「見えたのか呂布？」

恋「……少し」

華「むっ、流石だな」

月「し、霞さん！ 大丈夫ですか!？」

倒れる・・・というか、尻もちをついている張遼に慌てて駆け寄る月。そんな彼女に手を振りながら張遼が応える。

張「平気や。なんや少し痺れる感じがするけど、どこもケガしてないで」

月「よかった・・・」

—「立てるか張遼？」

張「秋月、アンタあの一瞬に何をしたんや？」

—「居合の太刀・・・防御を一切捨てて、己の出せる最高の速さで刀を抜くと同時に相手に斬りつける技だよ。何も考えずに斬る事だけに専念すれば俺にもあれくらいの速さは出せる。まあ、外せば大きな隙になる両刃の剣だけだな。あと、体が痺れるのは衝撃を直接体の内部に送ったからだ。その内収まるさ」

張「なるほどな、あれがアンタの最高の速さか。やれやれ、あんなん見せられたら神速なんて言えへんやん」

スツと立ち上がる張遼。どうやら痺れは抜けたようだ。

張「完敗や・・・ウチの真名、アンタに託すで。霞って呼んでや」

一「わかった、なら俺の事も一成って呼んでくれ。真名は無いがそれに近いからな」

霞「ほなそう呼ばせてもらうわ。改めてよろしくな一成」

一「ああ、こちらこそな霞」

笑みを浮かべる張遼・・・ではなく霞と握手を交わす。しかし、武人というのは皆戦って絆を深めるものなんだろうか？

華「終わったか。では次は私と勝負だ！」

っと、考えているヒマは無い。もう一人勝負しなければならぬ相手が残っている。

華「私は張遼のようにはいかんぞ」

霞「言っただな？ 一成！ ボコボコにしたれ〜〜！」

一「（ボコボコって・・・仲間だろう）」

さて、今度はどんな武器で戦うべきか。確か華雄は猪突猛進型、ならば意外性のある物で攻めてみよう。

—「発現」

右手に現れた昆をしっかりと握る。

華「何だそれは？ ただの棒ではないか。そんな物で戦うつもりか？」

—「ああ」

詠「いいわね？・・・始め！」

華「ならばその棒きれで、我が戦斧・・・受け止めてみる！！」

予想通り開始の合図と共に突っ込んでくる華雄。こちらも見せてやるっ、昔いた世界で見たあの技を。

—「伸びろおおおおー！！！！！！」

咆哮と共に昆の先端が凄まじい速さで華雄に向かって伸びて行く。

華「なっ！？ はぶっ！」

あまりにも予想外だったのだろう。華雄の動きが止まった。そんな無防備な彼女の腹に思いつきり昆が突き刺さった。

ギューーーン……バコン！

なおも伸び続ける昆はそのまま華雄の体を運び、壁にぶつかった所でようやく止まった。

—「必殺……月面パンチ」

厳密にはパンチではないが、あれと違って俺は腕を伸ばせないのだから今回は代用させてもらった。

華「きゅっ……」

いつまでたっても起き上がって来ないので駆け寄ってみたら、目を回して気絶していた。

霞「だーっはっはあ！ あんな偉そうな事言っというて瞬殺やんか！ おもろすぎるで華雄！」

月「な、何が起こったの？」

詠「……どこまで滅茶苦茶なのよ」

陳「の、伸びた！？ 伸びましたぞ呂布殿！ 何なのですかあの棒は！？」

恋「……欲しい」

フツと息を吐き緊張を解く。さすがに疲れたな。

霞「いや、ええもん見せてもらったで一成。そや、恋とも戦って見たらどうや？」

—「え？」

恋「……やる？」

—「……いや、止めておくよ。それに……」

グ~~~~~！

—「俺の腹も限界みたいだしな」

よく考えてみれば、買った肉まんも最初の一個以外全部セキトと恋にあげてしまったからな。動いた所為か一気に空腹が襲って来た。

霞「なんや、腹減つとんのか？　ならウチがいい店紹介したるで」

一「本当か？　それは助かる」

霞「というわけで詠、ウチは今から一成と街に出て来るから後はよろしくな〜」

詠「はあ・・・仕方ないわね」

一「すまないな詠」

詠「べ、別にアンタの為じゃないわよ！　勘違いしないで！」

一「？　そんなつもりはないが？」

詠「う、うっさい！　行くんならさっさと行きなさいよ！」

霞「ほな、行くで一成」

一「ああ」

こうして、洛陽での一日目は過ぎて行った。色々あったが、みんなともすんなり打ち解ける事が出来てよかった。だからこそ、ここにいる全員を失いたくはないと強く思えた。

余談だが、次の日からやたらと華雄に勝負を挑まれるようになった。
「あのような決着で納得できるわけないだろう」との事らしい。

「……………どうしてこうなった」

華「待てい！ 逃がさんぞ秋月！ もう一度勝負しろ！」

第四十三話 不意打ちが卑怯とか言うヤツは本当の戦場を知らない(後書き)

作「いや、久しぶりに書いたが、やっぱり戦闘描写は難しいね」

—「……」

作「なんだ？ まだあの戦いに不満があるのか？」

—「当たり前だ。霞との勝負はまだいいとして、華雄との戦いで使ったあれは何だ？」

作「パチンコのCMが話題になった某機械天使の必殺技だ。本当はちゃんと拳にしたかったんだが、お前別に食べたら全身がゴムになるような実食ってないし、でもどうしてもやりたかったから別のもの伸ばせばいいかって」

—「あんまり原作名に書かれてない漫画やアニメのネタ出さない方がいいと思うが」

作「大丈夫、今回限りだ」

—「ならいいが……」

作「ちなみに、原作は見た事ないので、セリフはあのスーパーなロボットのたくさん出て来るSRPGのヤツを使わせてもらった」

—「ああ、某アニキがよく叫ぶヤツだな」

作「なんだ、お前も詳しいじゃないか」

「……少しな」

第四十四話 一本調子じゃいつか挫折する(前書き)

華雄大好きな方々、今回の話・・・読めば後悔するでしょう。

第四十四話 一本調子じゃいつか挫折する

一「はあ……ここまで来れば……」

俺は今、ある人物に追われていた。

月「あ、一成さん」

詠「そんなに息を荒げてどうしたのよ？」

中庭に逃げ込むと、月と詠が仲睦まじくお茶を楽しんでいた。

一「いや、追われててな」

詠「また？ 飽きもせずよくやるわね」

一「やりたくてやってるわけじゃないんだがな……」

汗を拭いながら呼吸を整える。肉体より精神的な疲れが酷い。

月「凄い汗……一成さん、お茶でも飲みますか？」

一「いいのか？ じゃあ一杯……」

？「あゝきゝゝじゝゝきゝゝ！！」

—「……まだ諦めてなかったのか」

向こうの方から砂煙を巻き上げながら何者かが走って来る。・・・
まあ、正体はわかっているが。

華「ようやく追いついたぞ秋月！ さあ、勝負だ！！」

—「勘弁してくれ、昨日も勝負したろ」

初めて勝負した日からこうして毎日華雄に勝負を挑まれるようになってしまった。最初の方こそちゃんと受けていたが、こう連日挑まれてはさすがに疲れるので、最近は専ら逃げる事になっている。・・・
稀に捕まってしまうが。

華「昨日は昨日、今日は今日だ！ 次こそお前に我が一撃を叩き込んでやる！」

—「……そういつ割にはいつも気絶してるよな」

華「う、うるさい！ とにかく勝負しろ！」

—「だが断る！」

華「何だと！」

詠「いいかげんにしなさいアンタ達!!」

一・華「ツ……!!」

月「え、詠ちゃん？」

詠「ボクと月が楽しくお茶を飲んでる場にいきなり現れたと思ったら下らない事で言い争ったりして!!」

華「下らない事だと!?! 今のは聞き捨てなら……」

詠「ギロリ……!!」

華「うつ……」

詠「アンタもアンタよ! どうせ逃げても無駄なら満足するまで付き合ってやればいいでしょ!」

一「し、しかしだな詠……」

詠「文句あんの……?」

一「……無いです」

詠「わかったんならさっさと動きなさい!」

一・華「「はいい!」!」

俺と華雄は脱兎のごとくその場を走り去った。

詠「ふう・・・これで落ち着いてお茶が飲めるわね」

月「へうへう・・・」

詠「ど、どうしたの月！？ え？ ボクの声にびっくりしたって？

ああ！ 目まで回しちゃって。ゴメン月！ 戻って来て〜〜！」

・・・

一「・・・金輪際、彼女は怒らせないようにしよう」

華「この私が気圧されるとは・・・賈駆め、やるではないか」

一「少しは反省してくれ」

華「おかしな事を言うな、何故私が反省せねばならん」

一「・・・」

華「では秋月、勝負だ」

一「・・・わかったよ。詠にも言われたし、やっつてやるよ」

華「行くぞ！」

.....

華「きゆうっっ.....」

一「ふう.....」

勝負は突っ込んで来た華雄の鳩尾にカウンターの拳を打ち込んで終了した。仰向けに倒れ込む華雄を一瞥し、手甲を消す。

一「（実力は充分あるのに、毎回突っ込んでくるばかりだからな、絡め手を入れればもっと戦い方が広がると思うんだが.....）」

彼女は己の武に絶対の自信を持っているのだろう。もちろん自信を持つ事は大切だが、自信と過信は違う。その慢心がいつか身を滅ぼす事になるだろう。

華「うっっん.....董卓様.....私が必ずお守りします.....」

一「.....まあ、その真っ直ぐな所が華雄のいい所なんだろうけどな」

気絶している彼女をそのまま放っておくわけにもいかないので、部

屋まで運ぶ事にした。

—「よつと……」

華「う……ん……」

華雄をおんぶし、廊下を歩く。周りには俺の足音だけが響いていた。

華「……ん、私は……」

—「目が覚めたか？」

華「秋月？ 私は一体……って、な、何故私はお前におぶさっているのだ!？」

—「気絶したキミを部屋まで運ぼうと思ってな、勝手だがこつさせてもらった」

華「気絶……そうか、私はまた負けたのだな」

無言で肯定する。

華「秋月……私は弱いのか？ 私では董卓様を守る事は出来ないのか？」

「・・・ああ、キミは弱い。そして、今の華雄では月は守れない」
事実を突き付ける。こういう時に下手な慰めは不要だ。

華「そうか・・・それでいいのかもしれないな。董卓様には張遼や呂布、そしてお前がいる。私がいなくても大丈夫なんだろうな」

「なんだ、自分の大切な主を他人に任せるのか？ それとも・・・キミにとって月はその程度の存在なのか？」

華「ふざけた事を言うな！ 董卓様こそ我が全てをにかけてお仕えするただ一人のお方だ！！」

ギリギリ！

肩の乗せられていた華雄の指が食い込む。

「華雄、痛いんだが・・・」

華「む、すまん」

「いや、俺の方こそ無神経な事を言っすまない」

華「秋月・・・私はどうすればいいのだろう」

—「どうすればって……今まで通り月の為に戦えばいいじゃないか」

華「しかし、先程お前は私では董卓様を守れないと……」

—「……大事な部分が抜けてるぞ。俺は『キミではと言っただんだ』」

華「？ どういう事だ」

—「簡単な事だ、今のキミで無理なら守れるようになるまで強くなればいい」

華「強く……」

—「もちろん、華雄の努力次第だがな」

数秒の沈黙……

華「……そうだな、お前の言う通りだ。董卓様の為に……そして私自身の為にも、私はもっと強くならなければならない」

表情は見えないが、華雄の雰囲気が変わった気がした。

—「俺でよかつたらいつでも鍛錬に付き合っからな」

華「ふん、とても私から逃げていたヤツの台詞とは思えんな」

—「努力する人間に何かしてやりたいと思うのはおかしくないだろ？」

華「……ありがとう」

—「ん？」

華「な、何でもない！」

華雄を部屋に送り届け、俺も自分の部屋に戻った。

数日後……

華「はああああ——！！！」

ガギン！

霞「うあっ!?!」

霞の堰月刀が宙を舞い、華雄の戦斧が首元に突きつけられた。

華「私の勝ちだな」

霞「華雄に負けるなんて・・・ウチ自信無くしそう」

華「聞こえたぞ張遼！」

霞「冗談や冗談。にしても急に強くなったな華雄。何があったんや？」

華「ふっ、さあな・・・」

チヲ

—「ん？」

—瞬こつちを向いたかと思ったが・・・気のせいかな？

霞「？ ようわからんけど、このままやらねっ放しのウチやないで。

華雄、もう一勝負や！」

華「いいだろう、来い！」

ガキイイイイイン！！！！

「（数日でここまで・・・人間変われば変わるものだな）」

結局、日が沈むまで中庭から剣戟の音が止む事はなかった・・・

第四十四話 一本調子じゃいつか挫折する（後書き）

作「ヒヤッハアアア！ 凧、雪蓮に続き、三人目のキャラ改変だぜ！」

「最早別人と言っても過言じゃないな。どうしてこうなった・・・」

作「連合軍にとってやっつかいな存在が増えたな。今の華雄なら原作みたいなマネはしないぞ」

「原作キャラをこれ以上いじるな！」

作「華雄を生き残らせるためなら手段は選ばん！」

「な、何をする気だ？」

作「ククク、今度の戦いは荒れるぜえ」

第四十五話 水辺で遊ぶ時は必ず複数で（前書き）

お待たせしました、今回は霞です。

第四十五話 水辺で遊ぶ時は必ず複数で

「それじゃあ、今日の調練はここまでにしようか」

兵達「あ、ありがとございました・・・」

終了を告げると同時に兵達が一斉にへたりこんだ。中には大の字になって寝転がっている者もいる。

「（早朝からずっと休憩無しで昼までだからな、仕方ないか）」

何故俺がこんな事をしているかという・・・連合軍との戦いの前に少しでも役に立てる事はないかと数日前に詠に相談したのがきっかけだった。

詠、俺に何か出来る事はないか？

そうね・・・じゃあ、兵の調練でもお願いしようかしら

・・・と返されたのでこうして兵のみんなと調練の日々を送る様になった。

霞「お疲れさん一成」

兵達にならって腰を下ろすと、背後から霞が声をかけて来た。

「ああ霞、どうしたんだ？」

霞「ちょっと話でもしよう思ってた、終わるのを待ってたんや」

「わざわざ待たなくても話しかけてくれればよかったのに」

霞「いやあ、めっちゃ真剣な顔で調練しとったし、邪魔するんも悪い思ってたな」

「そうか、気を遣わせてしまってますまない」

霞「ええよ別に。それにしても・・・ズタボロやな」

霞が兵達を見渡しながら苦笑いを浮かべる。

「鍛えればそれだけ生き残れる確率が上がるからな。その為なら妥協は一切しない」

霞「それはわかるで、わかるけど・・・アンタに一太刀、しかも一対一でやなんて・・・無理やる」

霞の言う通り、俺は実戦形式で兵一人一人の相手をしている。

「「そうでもないぞ、最初の頃に比べてみんな確実に強くなってるからな」

実際、みんな弱音一つ吐かずによくついて来ている。初めての調練後、その事について尋ねてみた。

董卓様をお守りする為です！

口をそろえてそう答える兵達に、俺は軽く感動したのを憶えている。

「「そういえば、話って何だ？」

霞「ウチ、今日非番でヒマなんよ。せやから一成に付き合ってもらおう思ってたな」

「「なるほど・・・わかった、俺でよければ付き合っよ。みんなは落ち着いたら戻ってくれていいからな」

兵達「わかりました」

解散を告げると、兵達はゆっくりと去り始めた。

霞「ほな、早速行こか」

—「何処に行くんだ？」

霞「せっかくの非番やし、いつもと違うところ行ってみたいな」

—「なら川に涼みにでも行くか？」

霞「ええね、そうしよか」

俺の提案により近くの小川に行く事になった。という事でとりあえず馬を取りに向かう。

霞「ところで、アンタ馬には乗れるんか？」

—「いや、経験は無い」

霞「そうか、ならウチの後ろに乗るしかないな」

—「ああ大丈夫、全力で走れば馬と並走するくらい余裕だから」

霞「・・・アンタ、ほんまに出鱈目やな」

—「そうか？」

こうして、馬に乗った霞と共に俺は出発した・・・

「思ったより早く着いたな」

数十分後、目的の小川に到着した。

霞「ん〜、涼しくて気持ちええなあ」

「にしても・・・小川と言うより池みたいだな」

馬を縄で固定し、川原に近づく霞。

「落ちるなよ」

霞「子どもやないんやし、んなアホな真似・・・」

その時、霞のバランスが崩れ、その体が大きく揺れる。

霞「なっ、ちよっ・・・うわっ!？」

「霞ッ!」

だから言わんこっちゃない。慌てて彼女の元へ駆け寄る。

霞「・・・なんてな」

—「え・・・」

バシヤアアアアアン！！！！

彼女を支えようとした瞬間、ひらりと身をかわされ、勢いを殺せなかった俺はそのまま川に飛び込んだ。

霞「あゝっはっはっはあ！！　引っ掛かったな一成！　アホや、アホがおるで！！」

腹を抱え、心底面白そうに大笑いする霞の様子に、ようやく嵌められたのだと気がついた。

霞「あゝもう最高や！　落ちる瞬間のあの顔・・・ウチを笑い死にさせる気か一成！！」

—「・・・おい」

霞「落ちるわけがないって言ったやろ？」

ツルツ！

霞「あれ？」

バシヤアアアアアン！！！！

体勢を変えようとした霞がそのまま目の前に倒れ込んだ。

—「……………ふっ」

霞「……………ははっ」

呆けている霞を見て俺が吹き出すと、つられて霞も笑い出した。

……

霞「くしゅん！」

お互いずぶ濡れで川からあがると可愛らしいくしゃみが聞こえた。

霞「さすがに寒いなあ」

—「霞、これを・・・」

上着を絞り、霞の肩にかけた。

—「無いよりはマシだろう」

霞「ええの？ —成も寒いんちゃうん？」

—「俺なら大丈夫だ。それに、霞に風邪をひかせるわけにもいかな
いしな」

霞「・・・おおきに」

—「礼なんかいいさ。それより、寒くないか？」

霞「大丈夫・・・あつ」

—「どうしたんだ？」

霞「な、何でもあらへん！」

急に背を向けて体を縮込ませる霞。やはり上着一枚だけでは寒いのだらうか。

霞「（ウチ、サラシ透けてもつてるやん！ —成は気付いてないみ

たいやけど・・・うつ、不覚・・・／＼」

一「霞、本当に大丈夫なのか？」

霞「へ、平気やから近づかんといて！」

一「わ、わかった・・・」

どうみても平気そうには見えないが、従っておいた方がいいな。

数分後・・・

霞「おおきにな一成、もう大丈夫やから」

返された上着を羽織る。

一「ああ、どういたしまして。日も傾いて来たし・・・そろそろ帰るか？」

霞「せやな」

来た時と同じ道を辿り、俺達は城に戻った。

—「それじゃあ俺は部屋に戻るよ。霞、今日はありがとな」

霞「礼を言うんはウチの方や、付き合ってくれておおきにな」

—「じゃあ・・・お互いさまという事で」

霞「ははっ、そうやね」

霞と別れ、俺は自分の部屋に戻った・・・

S I D E O U T

霞 S I D E

霞「ん〜、今日はおもろかったな〜」

— 一成とおると退屈せんな。またヒマがあれば付き合ってもらおか。

霞「あれ、華雄やないか」

廊下の向こうから華雄が近づいて来た。

華「おお張遼か、ちょうどいい、秋月を見なかったか？」

霞「一成なら部屋におると思うで」

華「そうか、では行ってみるか」

霞「なんや華雄、最近一成と一緒にいるんをよう見かけるけど、そんなに気に入ったんか？」

華「な、何を馬鹿な！ 私はただ、あの男と手合わせするためにだな！」

霞「ふん……ま、そういう事にしといたるわ」

華「だから違つと……！」

霞「何にしても、今日はもう勘弁したつてや。さっきまでウチと出掛けとつて疲れとるやろつし」

華「二人でか？」

霞「そうや」

華「そ、そうか……」

明らかに気落ちした様子の華雄。この反応はもしや……

霞「ふわ〜」・・・眠う、ウチもそろそろ部屋に戻るわ」

・ 部屋に戻ったウチはそのまま寝台に横になりすぐに眠りについた・

第四十五話 水辺で遊ぶ時は必ず複数で（後書き）

作「先生！ 霞のあの可愛さは正直反則だと思います！」

一「誰が先生だ阿呆」

作「もう一度言おう、霞の可愛さは反則だ！」

一「落ちつけ！ お前テンションおかしいぞ！？」

作「『真』の拠点イベントを見て悶えたのは俺だけじゃない筈だ！
あれを見て何も感じないヤツは漢じゃない！」

一「悶えるとか言つな！」

作「さあ、気になった方は今すぐ『真』をプレイして確認してください。そして、霞の魅力におもいきりやられちゃってください」

一「……病気か？ 病気なんだな……」

第四十六話 余計な発言は身を滅ぼす（前書き）

すいません、まだ戦には移りません。

第四十六話 余計な発言は身を滅ぼす

とある昼下がりに、俺は月を街に連れ出していた。

—「今日もいい天気だな」

月「そうですね」

月はいつもの豪華な服ではなく、街娘が着ているような質素な服に身を包んでいる。これは他の人間に月だと気付かせないためだ。

月「あの、ありがとうございます—成さん。こうして街に誘って頂いて……」

月の言う通り誘ったのは俺だ。厳密には誘うようにある人物に頼まれたのだが。

少し回想……

詠「秋月、アンタに頼みがあるわ」

—「何だ？」

詠「明日、月を街に連れて行ってあげて欲しいの」

一「月を？ どうして」

詠「あの娘、最近ずっと部屋に籠ってばかりなの。アンタが来てから少しは減ったけどね」

一「……やっぱり今度の戦いの所為か？」

詠「ええ、月はずっと自分を責めてるわ、『自分が洛陽に入りさえしなければこんな事にはならなかった』ってね」

一「それは違う、原因は袁紹であって月は何も悪くないじゃないか」

詠「わかってる、でもね、月はそういう娘なの」

一「……」

詠「ボクは月の心を少しでも軽くしてあげたい、気分転換になるかわからないけど、街に出れば少しは気が紛れるんじゃないかと思っ
て」

一「……月はいい友達を持ったな」

詠「う、うっさい！ アンタは月の父親か！！」

一「わかった、明日誘ってみるよ」

詠「本当は刺客のいるかもしれないなか街に出るのは危険だけど……
・アンタなら何があっても月を守るだろうしね」

「そうだな、警戒しておくよ」

詠「一応対策は考えてあるわ、それと・・・あの娘けっこう鋭いから気をつけなさいよ、自分の為なんて知ったら遠慮するに決まっているわ」

「了解」

回想終了・・・

月「一成さん？」

「あ、ああすまない、あまりに天気がよくて少しボーっとしてしまっただけ」

月「ふふ、気持ちはわかります」

・ 僅かに微笑む月、このまま詠の狙い通りに進んでくれればいいが・・・

？「おう兄ちゃん！ 今日も見回りかい？」

点心の出店の店主に声をかけられる。洛陽でも当然のように街に繰り出していたので、すっかり顔を覚えられてしまった。ちなみに俺

が御使いだとは明かしていない、ここでの俺はあくまで董卓軍の
武將に過ぎない。

—「ええ、そんなものです」

店主「そうかい、ん？ そっちの嬢ちゃんは初めて見るな。もしか
して・・・兄ちゃんの彼女かい？」

月「ふえ！？」

—「違いますよ。この娘は、えつと・・・妹です」

店主「へえ、お前さんにこんな可愛い妹さんがいたとはねえ・・・
よし兄ちゃん、今ならその妹さんに免じておまけしてやるけど・・・
どうだい？」

—「相変わらず商売上手ですね。わかりました、少し包んでもらえ
ますか」

店主「はいよ！ まいどありー！」

袋の中身を確認する、確かに多めに入っていた。

—「」では、俺達はこれで「

店主「おう、また来いよ！」

「行こうか月」

月「ポ〜／＼・・・／／」

「月？」

月「は、はい!？」

「どうしたんだ？ 顔が少し赤いぞ」

月「な、何でもないです・・・」

「そうか？ なら行こうか」

月「はい」

俺達は出店を後にし、再び街中を歩き始めた。

店主「う〜ん・・・あの妹さんどっかで見た事あるような・・・」

店主の咳きは俺達の耳には届かなかった・・・

「「すまないな月、とっさの事とはいえ勝手に妹扱いしてしまって」

月「気にしないでください、あの場合はしかたなかったですし、それに、嫌じゃありませんでしたから」

一「そう言ってもらえると助かるよ。にしても月が彼女なんて……あの人の冗談にも困ったものだな」

月「わ、私はそれでも……」

一「ん？」

月「へう……何でもないです」

またしても顔を赤らめて俯く月。

一「……そうだ、せっかく買ったんだしこれでも食べよう」

気分を変える為、袋から点心を取り出した。

月「うわあ、美味しそうですね」

一「あそこの点心は絶品だからな、月も気に入ると思うぞ」

そう言いつつ点心を口に運ぶ。

—「……うん、やっぱり美味しいな」

月「……」

—「どうしたんだ月？」

月「いえ、私、歩きながら物を食べるなんて初めてで……」

—「ああすまない、行儀が悪かったな」

月「でも……こういうのって何だか楽しいですね」

—「楽しい？」

月「はい、こうやって街を歩いて……ふらりと立ち寄ったお店で物を買って……他のみなさんにとっては普通の事なんですけど、私にはとても新鮮なんです」

嬉しそうに話す月、そうだ、彼女は為政者である前に一人の少女だ。本当はこういったものに前から憧れがあったのかもしれないな。

—「……よし、なら今日は普通の事をしよう」

月「え？」

—「今日だけはキミは『董卓』じゃない、俺の妹の『月』だ」

月「……はい！」

手を差し出す。すると、月は微笑みながら自分の手を乗せてくれた。

「はは・・・」

月「ふふ・・・」

何か暖かいものを感じながら、俺達はゆっくりと歩みを進めた・・・

女性「そちらのお二人、ちょっと見ていきませんか？」

歩く事数分、またしても出店の店主らしき人物に引き止められた。
今度のは首飾りや指輪などの装飾品を扱っている店のようだ。

「面白そうだな、月、ちょっと見て行くところか？」

月「そうですね」

店主「どうぞ、手に取ってみて頂いて結構ですよ」

月「素敵な物がたくさんありますね」

店主「ふふ、ありがとうございます」

—「確かに・・・これなんか月に似合うんじゃないか」

花びらの様な形をした髪飾りを手に取る。派手過ぎでもなく、かといつて地味でもない、なかなか好感が持てるデザインだ。

月「そ、そんな・・・私なんかよりきつと詠ちゃんの方が似合いますよ」

—「そんな事はないと思うけどな・・・」

店主「そうですね、ほらほら、試しに付けてみてくださいいな」

髪飾りを手渡され、おずおずと身に付ける月。

月「ど、どう・・・ですか?」

—「うん、思った通りだ」

店主「ふふ、よくお似合いですよ」

月「へう・・・／＼」

—「じゃあこれを・・・そっだ、これの色違いってありますか?」

店主「はい、ございますよ」

—「じゃあ、それと合わせて二つ頂けますか」

店主「はい、ありがとうございます」

なかなかの値段だったが、払えない程でもなかった。

月「一成さん、何を・・・」

—「そんなに似合ってるのに買わないのも何だし、俺からプレゼントさせてもらっよ」

月「そんな、駄目ですよ、こんな高価な物・・・」

—「いいからいいから、これも普通の事だよ」

店主「お待たせしました」

別々の包みを受け取り、一つを月、もう一つを懐に仕舞う。

月「・・・ありがとうございます。あの・・・これ、絶対大切にしますから」

—「ははっ、喜んでもらえてなによりだ」

店主「ありがとうございます〜!〜!」

その後も色々な場所を周り、気付けば空があかね色になっていた。

―「……つと、もうこんな時間か」

月「そろそろ戻りましょうか」

―「そうだな、じゃあ……」

?「テメエ! もう一度言ってみろ!」

突如、街中に怒声が響き渡る。

月「な、何……?」

見れば、前方に人だかりが出来ている。今は月がいるので無視したかったが、あいにく城に戻るにはこの道を通るしかない。

―「行くしかないか……月、俺から離れないでくれ」

月「は、はい……」

俺達はゆっくりと騒ぎの中心に足を踏み入れた。

そこには二人の男がいた。一人は顔を怒りに歪ませ、もう一人は胸ぐらを掴まれ戸惑いの表情を浮かべている。

—「何があつたんですか？」

近くにいた女性に事情を尋ねる。

女性「あの胸ぐらを掴まれてる男……ついさっきやって来た行商人なんだけどね、今この街で最も触れちゃいけない話題を口にしちやつたのよ」

商人「い、いきなり何をするんですか！？ 私はただ『噂と違ってみなさん平穩そうに暮らしてるな』って言っただけですよ！」

月「ッ……！」

・ 月の体が強張る。なんてこった、よりもよって彼女の目の前で・

男「この野郎！」

バキイ！

もう一方の男が商人を殴り飛ばした。

男「テメエみたいなのヤツ等の所為で、あの方が・・・董卓様がどれだけ心を痛めておられるかわかってんのか!!」

商人「え？」

男「あんなクソみてえな噂に踊らされやがって、董卓様が暴君？冗談じゃねえ、あれほど民の事を思ってくれている方はいねえぞ」

老人「そうじゃそうじゃ！董卓様を悪く言う輩はワシ等が許さんぞ！」

女性「早く訂正した方がいいわよ、じゃないと・・・さっきより痛い目にあつかもね」

男の言葉を皮切りに、周りの人々が次々に声をあげる。そのどれもが月を擁護する声だった。

一「月・・・今はつらいかもしれないけど、こうしてわかってきている人達がいる事を忘れないでくれ」

月「・・・」

無言で頷く月、泣いてはいるが、それは決して悲しみの涙ではないだろう。

男「テメエ行商人だったな・・・董卓様を悲しませるヤツは誰だろうと許さねえ。他の街のヤツ等にもそう伝える!!」

商人「ひいゝゝゝ!!」

商人は悲鳴をあげながら街の出入り口に向かって駆け出した。

『わあああああ!!!!』

商人が去り、辺りは歓声に包まれた。

老人「よう言った若いの! 胸がすつとしたぞ!!」

女性「カツコよかったわよゝゝ!!」

男「へへ、どうもどうも」

男は照れくさそうに頭を掻いていた。その後人だかりも解け、いつもの街並みに戻った。

—「それじゃあ、今度こそ戻るつか」

月「はい」

夕日に照らされながら、俺達は城へと戻った・・・

詠「お帰りなさい月・・・って！ど、どうしたの月！？目が真っ赤よ！」

月「そ、それは・・・」

詠「まさか・・・アンタ！月に何したのよ！！！」

—「落ちつけ、俺は何もしちゃいない」

詠「だったら何でよ！」

月「あ、あのね詠ちゃん・・・」

月が事の顛末を話すと、詠はやっと落ちついてくれた。

詠「そ、そうだったの、ボクはてっきりコイツが・・・」

月「詠ちゃん、一成さんに謝らないと」

詠「う・・・わ、悪かったわね、勝手に誤解したりして」

一「いいさ、気にするな。それより月、疲れてないか？」

月「そうですね、少し・・・あれだけ歩き回ったのも久しぶりですから」

一「じゃあ部屋まで送るよ」

詠「ボクも行くよ」

三人で月の部屋に向かう。

一「それじゃあ月、ゆっくり休んでくれ」

月「はい、一成さん、今日は本当にありがとうございました。とても楽しかったです」

一「俺もだ、また今度一緒に出掛けような」

月「はい！」

詠「じゃあボクも行くね、後でまた来るから」

月「うん」

扉が閉まり、月の姿は見えなくなった。

詠「……アンタに任せて正解だったわね、出掛ける前とまるで様子が違うもの」

—「そうか、ならよかった……」

詠「じゃあね、アンタもゆっくり休みなさい」

—「ああ、ちょっと待ってくれ」

詠「何よ？」

懐から包みを取り出す。中身は言わずもがな、あの時買った髪飾りだ。

—「お土産だ、よかつたら受け取ってくれ」

詠「え？」

ポカンとする詠だったが、その顔がみるみる内に赤くなっていった。

詠「ば、馬つ鹿じゃないの！ ボクに買う余裕があるなら月に買ってあげなさいよ……！」

—「もちろん月にも贈ったよ。ちなみに彼女とおそろいだからな」

詠「何で・・・ボクになんか・・・」

—「月がキミに似合うと言っていたからな・・・迷惑なら渡さないけど」

詠「だ、誰も迷惑だなんて言っていないでしょ！」

焦ったような声で包みをひったくる詠。

詠「・・・綺麗」

—「（どうやら気に入ってくれたみたいだな）」

まあ彼女の場合、月が選んだ物なら何でも喜びそうだけど。

—「ふっ・・・」

詠「な、何笑ってんのよ」

—「ははっ、すまない、引き止めて悪かったな、渡す物も渡したし俺は部屋に戻るよ」

詠「ま、待ちなさいよ!」

先程とは逆に、俺を引き止める詠。

—「どうした？」

詠「あ、あの・・・その・・・」

—「？」

詠「あ、あり・・・あり・・・がと／＼」

かなりの小声だったが、俺の耳にはしっかりと届いていた。

—「ああ」

そんな彼女に、俺は微笑みながら頷いた。

詠「ツ~~~~~!!」

ダダダダ!

—「え？」

急に振りかえったと思ったら、詠はそのまま走り去って行った。

「そんなに走ったら危ないぞ……って聞こえるわけないか」

誰もいない廊下に、俺の声が反響した。

「……俺も戻るか」

詠の様子を不思議に思いつつ、俺も自分の部屋に戻った。

第四十六話 余計な発言は身を滅ぼす（後書き）

作「ええい！ 月の可愛さはこんなものじゃない筈だ！！」

一「毎回わけのわからない事づのは止める」

作「俺に文才があれば月の可愛さをもっと上手に表せたはずなのに・・・悔しいです！」

一「ああ、その点に関しては同意してやるよ」

作「更新速度が更に遅くなると言った以上、半端な物書いて読者の方に幻滅されるわけにはいかんのに！！」

一「そんなんだから感想も少ないんだよ」

作「うぐ・・・」

一「まあ、精々頑張る事だな」

作「悔しいのう、悔しいのう・・・」

第四十七話 エンゲル係数って何ぞや(前書き)

最後の更新です。

第四十七話 エンゲル係数って何ぞや

陳「ふんふんふん」

廊下を歩く途中、足取り軽く陳宮が向こうからやって来た。

—「ずいぶん機嫌がよさそうだな」

陳「むっ、秋月、実は明日、呂布殿のお宅にお呼ばれされているのです」

—「恋の？　そうか、彼女は家持ちだったな」

陳「ふっふっふ、羨ましいですか？　羨ましいでしょう」

—「よかったな陳宮」

ナデナデ

陳「な、なぜ撫でるのですか!？」

—「いや、つい・・・」

陳「とにかく、明日の為に早く仕事を終わらせなければならぬので、いつまでもお前にかまっていられないのです!」

そう言い残し陳宮は去って行った。

恋「……一成」

すると、今度は恋がやって来た。

—「やあ恋、調練は終わったのか？」

恋「……（コクン）」

—「そうか、お疲れ様」

ナデナデ

恋「ん……」

頭を撫でると恋は気持ち良さそうに目を細めた。なぜだろう、この娘といい陳宮といい、つい手が伸びてしまう。

—「そういえば、さっき陳宮と話したんだが、明日キミの家に行くのずいぶん楽しみにしてたぞ」

恋「一緒にご飯食べる・・・」

一「なるほど、恋の家でお食事会って事か」

恋「・・・（コクン）」

一「ははっ、楽しそうだな」

きつと食べるのは恋だけで、陳宮はその姿を見るだけで満足するんだろうな。

恋「一成も・・・」

一「ん？」

恋「一緒に・・・食べる？」

一「もしかして、誘ってくれてるのか？」

恋「・・・（コクン）」

一「それは嬉しいけど、いきなり参加していいのか？」

恋「一緒に食べると美味しくなる・・・だから、一成も一緒だともっと美味しくなる・・・」

一「・・・そうだな、大勢での食事は美味しいもんな。よし、そ

ういう事ならい同伴に預らせてもらおうかな」

そう言つと、恋は優しく微笑んだ。

翌日・・・

「」というわけで、俺もい一緒させてもらつ事になった」

俺は今、陳宮と仲良く恋の家の前に立っていた。両手に街で買った点心を持って。

陳「どういうわけですか！ せつかくの貴重な呂布殿との二人での時間を邪魔するとは・・・ふてえ奴です！」

「」いや、ほぼ毎日二人で過ごしてるじゃないか」

陳「そういう問題ではないのです！」

「」じゃあどういう問題なんだよ・・・」

・・・と、二二でいつまでも話していてもしょうがない。そろそろ入るう。

「お邪魔します」

陳「あ、コラッ！　ねねより先に入るなです！」

慌てて付いて来る陳宮と共に奥に進むと恋が顔を出した。

恋「いらっしやい・・・」

陳「り、呂布殿！　本日はお招きいただきありがとうございますです！！」

陳宮が深々と頭を下げる。その様子に思わず笑みがこぼれる。

陳「何を笑っているのですか！　お前もお礼を言うのです！」

「ははっ、そうだな。恋、今日はお招きありがとうな」

恋「ん・・・」

素っ気ない返事とは思わない。アレが恋なりの返事だからだ。

？「ワンッ！」

家に入ろうとした俺達の前に一匹の犬が走って来た。特徴的な赤いスカーフが風に揺れている。

—「セキトか、元気だったか？」

セ「ワンッ！」

千切れんばかりに尻尾を振るセキトを撫でる。すると、鳴き声に触発されたのかさらにたくさん動物達が姿を現した。

猫「にゃ〜〜〜!!！」

鳥「チュンチュン!!！」

犬「ワンワン!!！」

？「ぶるああああああ!!！」

・・・最後のは何だ？

—「これは・・・」

恋「・・・家族」

—「家族？ 恋の？」

恋「……………(コクン)」

—「そうか……………素敵な家族だな」

恋「ありがと……………」

動物達を引き連れ、今度こそ俺達は家にあがった。そのまま食事の出来る場所まで向かう。

—「そうだ恋、これお土産だ」

点心を見せる。

恋「美味しそう……………」

—「それはよかった」

陳「……………むう」

—「どうしたんだ陳宮？」

陳「吕布殿の家に料理を届けるよう一昨日の内に頼んでおいたのですが……………まだのようですね……………」

恋「ツ……………」

陳宮の言葉に恋が若干目を見開く。心なしかソワソワしているよう
な・・・

陳「？ どうされましたか呂布殿？」

恋「ちんきゅ・・・ゴメン」

陳「り、呂布殿？」

いきなり恋が謝罪の言葉と共に頭をさげた。突然の事に陳宮が狼狽
する。

恋「料理・・・恋が食べた・・・」

陳「へ・・・？」

・・・

陳「ええつと・・・つまり、ねね達が来る前に料理はすでに届い
ていたのですね。それで、あまりに美味しそうだったから味見のつ
もりで一口食べたなら止まらなくなって、気付けば全部食べてしまっ
た・・・という事ですか？」

恋「……………(コクン)」

—「なんともまあ……………恋らしいな」

恋「恋が悪い……………ゴメンなさい……………」

陳「と、とんでもないです呂布殿！　そもそも、ねねは呂布殿に食べて頂きたく頼んだのですから！！」

恋「でも……………二人もお腹空いてる……………」

陳「ねねは呂布殿に満足して頂けたのならそれで充分なのですよ」

—「ああ、俺も大丈夫……………」

グキユルルル！！

その時、最悪のタイミングで俺の腹が鳴った。

陳「お、お前！　空気読みやがれです！！」

—「す、すまん……………」

恋「……………(シユン)」

ズキユン！×2

—「ぐっ……！」

陳「はう……！」

ま、まずい……恋の表情が見る見るうちに沈んでいく。

—「そ、そうだ恋！ なら街に行こう！ な？ そうしよう？」

陳「そ、そうです！ 秋月の言う通りです！ 呂布殿、街で美味しい物をいっぱい食べましょう！」

恋「二人とも……怒ってない？」

— 陳「もちろん（だ！）（なのです！）」

恋「……よかった」

必死の提案に恋はようやく顔を上げてくれた。

—「……ふう」

陳「よくやったのです秋月」

—「あの表情を見て何も感じないヤツは人間じゃない」

陳「同感なのです」

—「陳宮・・・」

陳「秋月・・・」

ガシッ！

俺は陳宮と熱い握手を交わした。

恋「？」

その様子に、恋は可愛らしく首を傾げていた・・・

その後、俺が持って来た点心を三人で平らげ、すぐに街に出掛けた。そして、行く先々で恋の目に止まった店に片っ端から突入した。

—軒目・・・

ザシユ！

恋「もつきゅもつきゅ……………」

ザシユ！

恋「もつきゅもつきゅ……………」

陳「ああ、呂布殿…………なんと愛らしいお姿なのでしょう！ これだけでねねは…………ねねは…………！」

一「（箸の使い方著しく間違えているが…………まあ、本人が食べやすいならいいか）」

ザシユ！

恋「もつきゅもつきゅ……………」

二軒目…………

恋「…………おかわり」

陳「店主、早く用意するのです」

店主「はいよ！」

一「大丈夫か恋？　今ので五杯目だろ？」

恋「ん・・・ちよつと満足」

一「ということは、まだ食べるんだな・・・」

三軒目・・・

陳「呂布殿、ねねのもどろぞ」

恋「・・・いいの？」

陳「はい！」

恋「ちんきゅ、優しい・・・」

陳「えへへ・・・」

一「（それはキミが俺から取ったヤツだけどな陳宮・・・）」

・・・

恋「……満足」

六軒目の店を出た後、ようやく恋の口から待ち望んでいた言葉が出た。

陳「ねねも呂布殿と一緒出来て満足なのです」

笑顔の恋と陳宮。何故か俺が奢る羽目になってしまったが、この笑顔が見れたんだから良しとしよう。

恋「今日は楽しかった……また行きたい」

陳「そうですね、機会があればぜひまた行きましょう」

早くも第二回を計画する二人に思わず苦笑いする。

「（とりあえず……明日からしばらく水だけでの生活だな）」

恋「一成……?」

陳「何をボーっとしているのですか？ 置いて行きますよ!」

「「すまない、今行くよ」

俺は急いで二人の元に駆け寄った・・・

第四十八話 イベントの前日は興奮して眠れない・・・ことってありますよねっ

シ水関のシはとある事情でカタカナにしました。読みにくかったら
ゴメンなさい。

第四十八話 イベントの前日は興奮して眠れない・・・ことってありますよねっ

月の元で過ごした穏やかな日々。それもとうとう終わりの時が来た。

その日、俺を含めた董卓軍全ての将が玉座の間に集められた。突然の召集だったが、全員が確信していた。そう・・・戦いの時が来たのだ。

詠「・・・そろったわね」

一「詠、何か動きがあったのか？」

詠「シ水関から兵が戻って来たわ。「関の周りに連合軍が続々と集結している」という情報を持ってね」

洛陽を目指すならシ水関、そして虎牢関を突破するしかない。この二つの関をめぐっての戦いになりそうだ。

華「賈馱よ、警戒すべき諸侯は確認できているのか？」

詠「そうね・・・まずは袁家の二人、それに、曹操や馬騰、あとは・・・公孫贛かしら」

一「・・・その中に劉備という人物はいるか？」

詠「劉備？ 確認してるわ。最近急速に力をつけている人物ね。それがどうかしたの？」

一「いや、気にしないでくれ」

来たか桃香・・・それに、華琳と美羽、白蓮も。名前は出ていないが、雪蓮もいるはずだ。今は美羽の傘下なのだろう。

一「（覚悟していたとはいえ・・・いい気分ではないな）」

だが、それでも戦わなければならない。月を・・・いや、ここにいるみんなを守るために。

霞「中々歯応えがありそうな連中やな。まあ・・・袁紹が扱いきれるとは思えへんけどな」

詠「そうね、総大将は袁紹、つけ入る隙はいくらでもあるはずよ」

一「すごいな、総大将まで調べたのか」

詠「いや、まだ決まっていはいはずよ」

一「え、でも今・・・」

詠「多分・・・いいえ、確実に袁紹が総大将になるわ」

「……その心は？」

詠「だって袁紹だもの」

……MITUWO?

霞「袁紹やもんなあ……」

華「うむ、袁紹だからな……」

恋「……絶対」

陳「なのです」

しきりに頷く一同。とりあえず、ゲーム内での袁紹の事を思い出してみる。

「（美羽の従姉で、白蓮とは知り合い、そして、彼女を襲った張本人。性格は……）」

……

……

・・・

チーン！！

—「・・・納得」

しかし、全員に断言されるとは・・・ある意味すごいな。

詠「それで、みんなの配置についてなんだけど」

—「詠、その事で一つ頼みがある」

詠「何？」

—「俺は華雄と同じ関にしてくれ」

俺との鍛練の中で少しは暴走を抑えられる事が出来るようになったが、『もしも』を考えると彼女の傍にいた方がいい。そう思っただけの提案だった。

詠「わかったわ」

—「そうか、ありがとう」

詠「……むしろこっちからお願いしたいくらいだったし（ボソッ）」

—「ん？」

詠「何でもないわ、じゃあ、シ水関は華雄と霞、そして秋月。虎牢関は恋とねねに任せるわね」

恋「ん……わかった」

陳「呂布殿の『武』とねねの『知』があれば連合軍など物の数ではないのです！」

頷く恋と自信満々に応える陳宮。

華「なんだ秋月、そんなに私の武を間近で見たいのか？ 仕方のないヤツだな」

—「え？」

華「……まあ、私もお前と共に戦えるのは嬉しいぞ。あ、あくまで武人としてだからな、勘違いするなよ」

—「あ、ああ……」

自分で言った事に何故か慌てる華雄。どうしたんだ一体……？

霞「いや〜助かったで一成、毎回毎回ウチ一人であの猪を押さえるんも大変やったからな」

一「猪つて・・・」

霞「とにかく、華雄の手綱を離すんやないで？」

一「・・・了解」

霞・・・今までどれだけ苦勞してたんだろう。

詠「これで決まりね、それぞれ兵をしっかり纏めておきなさいよ」

とはいうものの、俺には兵はいない。今回も全体のフォローが主になるだろうが、今までと違う広大な戦場を俺一人で対処出来るだろうか・・・

一「(・・・いや、やるしかないんだ)」

この戦い・・・『本気』で挑むのは当然だが、『全力』を出すのも辞さない覚悟でいた方がいいだろう。

月「みなさん……」

その時、ずっと黙っていた月が口を開いた。

月「私の所為でこんな事になって……本当に申し訳ありません」

本心からの言葉だろう。月は今にも泣きそうな表情をしている。

—「月……」

そんな彼女に俺は……

月「一成さん……？」

ピシッ!!

月「あう!?!」

渾身のデコピンを一発打ち込んだ。

月「な、何ですか？」

一「あのな月、今回の原因は袁紹であってキミが責任を感じる事は何も無い。前から言ってる事だし、ここにいるみんなだってそう思ってる」

そう言っつて詠たちに視線を移す。

詠「秋月の言う通りよ、月が気にする事なんて何も無いわ」

霞「連合軍なんざすぐに片付けてきたるわ、月は城でのんびり茶でも飲んどき」

華「ご安心ください董卓様！ この私が全て打ち倒し、必ずお守り致します！」

恋「恋・・・月守る・・・絶対」

陳「大船に乗ったつもりでいるのです！」

月「みなさん・・・」

一「さっきの一発はみんなの気持ちに気付かなかった月へのお仕置きだ。効いただろ？」

月「はい・・・とても」

月の顔に笑顔が戻る。やっぱり彼女は笑顔の方が似合うな。

月「必ず帰って来て下さいね、私、待ってますから」

霞・華・陳「っ」応ッ！（です！）「っ」

恋「……お〜」

一「ああ、もちろんだ！」

そのために、俺はここに来たんだからな……

解散し、それぞれの場に戻る。早ければ明日にでも出陣だ、今日は早めに休んだ方がいいだろう。

一「………とっていた時期が俺にもあったな」

俺が今いるのは中庭。そして、そこには至る所に酒や食べ物並び、将も兵も関係なく、皆が飲んで食べていた。

霞「ん？ どしたん一成、そんな所で突っ立って？」

「霞、これは一体・・・？」

霞「戦の前には宴！ 当然やる？」

「「そうなのか？」

霞「そうや、一成も楽しまんと損やで」

そう言いつつ、右手の杯を口に近付ける霞。

恋「おかわり・・・」

兵B「おお！ これで三十皿目だぞ！！」

兵A「くッ！ まだまだあ！！」

兵C「こっちも二十八皿目だ！」

陳「呂布殿！ 頑張ってください！！ ねねがついておりますぞ！！」

賑わう一団に目を向けると、恋と兵の一人が大量の料理を食べていた。

「「何やってるんだ？」

霞「大食い勝負やて、ちなみに、あれは六人目の挑戦者や」

少し離れた所に寝転がっている五人を見つけた。多分、あれが挑戦した兵たちだろう。

恋「おかわり・・・」

兵B「呂布將軍！ 四十皿目に手をつけたあ！！」

兵A「げ・・・限界だ・・・」

ドサツ！！

兵C「すげえ！ また呂布將軍の勝ちだ！」

陳「ふふん、当然なのです！」

恋「もつきゅもつきゅ・・・」

何だかすごいものを見てしまったな。この様子じゃ他のみんなも何かしらやってるんじゃない・・・

華「は〜はつはあ！！ 飲め飲め！ もっと飲むのだあ！！」

兵D「か、華雄將軍！ もう無理です！！」

華「情けないヤツだな、男なら意地を見せてみる！」

兵E「將軍、顔が真っ赤ですよ。大丈夫なんですか？」

華「問題ない、まだまだイケるぞ〜！！」

次に目に入ったのは、二人の兵に酒を勧めている華雄だ。ここからでも出来あがっているのがわかる。

一「あれは大丈夫なのか？ 明日に響くぞ」

霞「それくらいの分別は出来るやろ」

華「んあ？ なんだ、お前双子だったのか？ と思ったら三人……四人……」

一「……相当酔ってるな」

霞「ちょ、華雄！ 飲み過ぎや！！」

そう言っつて霞は華雄の元へ駆け寄って行った。

一「今の華雄には近づかない方がいいな」

そう結論づけ、俺は再び視線を移した。

詠「月、何か食べたい物ある？ ボクが取って来てあげるよ」

月「ううん、大丈夫だよ詠ちゃん」

最後に目に入ったのは、騒ぎから少し離れた所で仲良く談笑している月と詠の二人だった。

月「あれ、詠ちゃんそれ・・・」

詠「え、あ・・・」

月が指すのは以前俺がプレゼントしたあの髪飾りだ。

月「一成さんに貰ったんだよね、気に入った？」

詠「ち、違うわよ！ ただ・・・せっかく貰った物だし、使わなきゃ悪いと思っただけで・・・」

月「もう、素直じゃないんだから」

詠「だ、だから・・・！」

月「あ、一成さん」

詠「え!？」

月「……なんちゃって」

詠「ちよ、変な冗談止めてよ月!」

月「ふふ……」

楽しそうだな、ちょっと声をかけてみよう。

月「あ……」

詠「ふふん、今度は引つ掛からないわよ月……」

—「楽しそうだな、何話してたんだ?」

詠「……って、何でいるのよ!？」

—「?」

月「あ、あはは……」

いきなり怒られた。何でだ……?

S I D E O U T

こうして、騒がしくも楽しい時間は過ぎていく。明日には命の奪い合いをする事になるかもしれない中、誰一人悲壮な顔はしていない。

当然だ、彼等は死に行くのではない、生きる為に戦うのだ。主を守る為・・・そして、またここにいる全員で宴を開く為に・・・

戦いに犠牲はつきものだ、将だろうと兵だろうと死ぬ時は死ぬ。しかし、彼らに不安は無い。全員が確信めいた予感をしていたからだ。

この戦い・・・敗北は無い・・・と。

そして、その予感は一人の男によって現実のものとなる。この外史において、後世まで語り継がれる事になる天の御遣いと呼ばれた英雄の物語・・・始まりとなるシ水関と虎牢関の戦い、その幕開けは近い・・・

第四十八話 イベントの前日は興奮して眠れない……とっておりますよねっ

作「さあ、次回からいよいよ戦いが始まるぞ。無双する準備はいいか!」

一「仕方ない、今回はかりは無双もやむを得ないか」

作「おお、やる気になってくれたか! いいか、今度の戦いでは読者の方が引くくらい暴れさせるからな、その為にあの配置にしたんだし」

一「配置って……ああ、将の配置か。確かに、戦力的に考えたら霞を虎牢関に配置した方がよかつたんじゃないか?」

作「全てはお前の見せ場を作る為だ」

一「……何させる気だ?」

作「身を挺して仲間を逃がす男ってカッコいいよな……」

一「何だよいきなり」

作「今のがヒントだ」

一「?」

作「とにかく、一成の無双、仲間との再会、さらに旅人VS恋姫たちの対決、そして月の運命、見どころ満載の反董卓連合編……お見逃しなく!!」

「果てしなく不安だ・・・」

第四十九話 たった一つの命令（前書き）

・ 反董卓連合編までで五十話・・・最終話はいつになるんだろう・・・

第四十九話 たった一つの命令

シ水関に到着し、城門の上から連合軍全体を見渡す。

「……………多いな」

正に連合軍という名に相応しい、今までに見た事も無い程の大勢の人間がそこにはいた。その全てが月を討つ為に集まったわけだ。

霞「ビビったか一成？」

からかう様な感じでそう聞いて来る霞。

「いや、そういうわけじゃないけど」

華「安心しろ秋月！ いざとなったら私がお前を守ってやる！」

「ははっ、そうだな、頼りにしてるよ華雄」

華「う、うむ……………」

霞「どっちかっちゅうと、華雄の方が守られそうな感じやけどな」

華「な、何だとお！」

茶化す霞に怒鳴る華雄、そんないつも通りの二人の様子に、周りで準備をしている兵達の表情も和らいでいる。

霞「まあ、その可能性も低いやろうけどな。籠城戦やし、ウチらの目的は時間稼ぎやから」

華「ん？　こちらから打って出ないのか？」

—「華雄・・・出立前の詠の話をちゃんと聞いてたのか？」

いい？　アンタ達がシ水関を守りきる必要はないわ、連合軍を相手にするには総力戦しかないし、時間を稼いだら撤退しなさい

華「・・・おお！　そういえばそうだったな」

霞「一成・・・ウチ、もう不安なんやけど」

—「安心しろ霞・・・俺もだ」

華「それにしても、敵側に全く動きが無いの不気味だな、何を仕掛けてくるのやら・・・」

—「その心配は無いと思うぞ」

霞「なんや、一成は何かわかるんか？」

「多分……総大将を決めるのに手間取ってるんだろう」

原作ならその後、痺れを切らした桃香の一言で袁紹が総大将になって、そのまま先陣を切らされるハメになるんだっただな。さらに言えば、挑発役に雪蓮も出て来るはずだし。

「（話せる機会があればいいんだが……）」

霞「それじゃ、一成、頼んだで」

「？ 頼むって何を？」

霞「激励の言葉や。みんながビシッと気合いが入るようなヤツを頼むで」

「何で俺が……新参者の俺より霞や華雄の言葉の方が気合いが入るんじゃないか？」

霞「ええからええから……皆整列！！」

霞の一喝で、散らばっていた兵達が整列を始める。

霞「一成がお前らに言いたい事があるそうや！ 心して聞き！！」

兵達「はっ……！！」

霞「どや、これで逃げ道は無くなったで？」

—「……………やられた」

華「しつかりな秋月、腑抜けた事を言ったら許さんぞ」

二人に促され、俺はいつの間にか用意されていた台の上に入った。

兵達「……………」

兵のみんなが真剣な表情で俺を見ている。俺の言葉を一字一句聞き逃さないために……

—「俺はこういった事をした事がなくてな、正直何を言えばみんなを励ませられるかわからない。だから……俺の気持ちをみんなに伝えようと思う」

兵A「……………」

—「今回の戦いは茶番だ。月は討たれる様な事は何一つしていない。それはここにいるみんなが一番わかっているはずだ」

兵B「（そうだ、董卓様は……あの優しい方はいつだって俺達の事を想ってくれていた）」

—「本当は話し合いで解決したかったが、事態はどうしようもない所まで来ている。もう・・・戦う事でしか月を守る事が出来ない」

兵C「（上等だぜ、董卓様の為ならこの命・・・惜しくはねえ!）」

—「連合軍は強大だ、それこそ命を懸けて戦わなければならないだろう。だからこそ、俺はみんなに一つだけ命令したい」

兵D「（わかってますよ將軍、命を懸けて・・・つまり、死ぬまで戦えって事ですよね）」

—「・・・死ぬな、絶対に生きて帰って来て欲しい」

兵達「え・・・?」

—「みんなの中にはこの戦いで死んでもいいと思っている人もいるだろう。だけど考えて欲しい、自分の所為でみんなが犠牲になってしまった時の月の気持ちを・・・」

兵達「ッ・・・!!」

—「みんなを犠牲にしてまで助かって月は決して喜ばない。それに・・・みんなにはいるはずだ。家族が、友人が、恋人が・・・」

兵E「（家族・・・そうだ、俺には母ちゃんと息子がいるんだ）」

兵F「（俺が死んだら・・・あいつは悲しむのかな?）」

—「甘い馬鹿な考えだってわかってる。戦場に絶対はない。でも・・・それでも俺は、みんなに生きて欲しい。また・・・みんなと宴を

したい」

全てを吐き出し、俺はホッと息をつく。静寂が場を支配していた・

「（・・・やっぱり、こんな言葉じゃ駄目だよな）」

失敗を確信し、台を降りようとしたその時・・・

兵A「死ぬな・・・か、またえらい命令を出されたもんだぜ」

兵の一人が声をあげる。さらに・・・

兵B「まったくだ。でも・・・命令じゃしかたねえよな」

兵C「おう！ これで死ぬわけにはいなくなっちゃったな！」

一人、また一人と声をあげる兵達。先程の静寂とは違って変わって、今は兵の気合いの入った声が響き渡っている。

霞「・・・お疲れさん」

華「ふん、まずまずだったな」

台を降りた俺を労ってくれる二人。

—「俺の考えって甘いかな？」

霞・華「甘い」

—「……そうか」

霞「せやけど……嫌いじゃないで、その考え」

—「え？」

華「こんな時代だ……そんな考えを持つ馬鹿が一人いてもいいかもしれない」

—「……ありがとう」

霞「ええかお前ら！ 今の命令、無視したら許さへんからなあ！！」

兵達「おおおおおー……ッ！！！！！！」

雄叫びと共に、兵達が一斉に腕を天に突き上げる。俺もそれにならい、改めて決心する。

「（戦ってみせる・・・相手が誰だろうと！！）」

SIDE OUT

連合軍SIDE

とある幕舎、そこには諸侯が集まり軍議が開かれている。だが・・・
実際には軍議は全く進んではいなかった。

袁紹「では・・・改めて皆さんにお聞きしますわ、この連合軍・・・
総大将に立候補される方はいませんか？」

そう言つて周りを見渡しているのは、今回の戦いの発端役である袁紹だ。すでに何度も繰り返されている彼女の問いに、諸侯は沈黙を守っている。

曹「・・・・・・・・」

孫「・・・・・・・・」

公「（はあ・・・本初のヤツ、本当は自分が総大将やりたいくせに、あくまで推薦してもらつまで待つつもりなんだ・・・全く、相変わらずだな）」

袁術「のうのう七乃、何故麗羽姉様は自分から立候補せぬのじゃ？
（ボソボソ）」

張「そうですねえ……がつついていると思われたくないからじやないですか？（ボソボソ）」

袁術「なるほど、姉様らしいの……（ボソボソ）」

袁紹「美羽さん、先程から何をコソコソ話してらっしゃるの？」

袁術「な、何でもありません姉様！」

袁紹「？」

そんな中、先程から軍師二人と何やら話していた劉備がとうとう声をあげた。

劉「いったいいつまでこうしているつもりですか！ 私達がこうしている間にも、苦しんでいる人達がいるかもしれないですよ！！」

諸侯が一齐に劉備に視線を向ける。だが、それにも怯まず劉備は続ける。

劉「これ以上先延ばしにするのなら私が推薦します！ 袁紹さん、あなたにお願いします」

袁紹「あら、わたくしですの？ 別に総大将などちつとも、これっぽっちも興味ありませんが、せつかく推薦して頂いたのですから、断るのも悪いですし……」

これっぽっちの部分をやたら強調する袁紹。そんな彼女に、劉備を除く諸侯たちは心の中で溜息を吐いた。

袁紹「他の皆さんはどうかしら？ 反対の人はいて？」

沈黙……それが答えだった。

袁紹「では、仕方ありませんわね、わたくしが総大将を務める事に致しましょう」

高笑いする袁紹。彼女を知る人物からすればお馴染の光景だろう。

袁紹「では、私を推薦して下さいました劉備さんにはお礼を差し上げなくてはね……シ水関の先陣役をお任せしますわ」

劉「なっ!？」

お礼どころではない、兵の少ない劉備軍からすればそれは死刑宣告

に等しかった。他の諸侯が黙っていたのも、この恐れを見越しての事だった。

劉「む、無理ですよ！ 私達の軍は皆さんの中で一番弱小なんですよ！ 先陣なんて出来るわけないです！」

袁紹「劉備さん、わたくしはあなたの推薦で総大将になったんですのよ？ なら、命令には従うのが道理ではなくて？」

劉「そ、それは……」

袁紹「とにかく、あなた達が先陣を切る事、これは決定事項ですわ」

劉「そんな……」

項垂れる劉備、今さらだが自分の発言に後悔しているようだ。だが、そんな彼女に、意外な人物から救いの手が差し伸べられた。

袁術「……劉備とやら、よければ妾の兵を貸してやってもよいぞ」

劉「え……？」

袁術「そちの言う通り、妾達が集まったのは苦しんでいる民を助ける為じゃ、ならば、協力するのが道理じゃろ」

劉「いいんですか！ お願いします！」

袁術「うむ、任せるのじゃ」

劉「ありがとうございます！！」

満面の笑みでお礼を言う劉備。だが、他の諸侯・・・特に袁紹は驚きの表情で袁術を見ていた。

袁術「孫策、お主に劉備軍と共に先陣を任せたいのじゃが・・・
お願いしてよいかの？」

孫「りょくかい、精々頑張らせてもらおう」

袁術「すまんの」

孫「（本当に変わったわね袁術ちゃん。お願いだなんて・・・以前の袁術ちゃんなら有無を言わさず命令してきたはずなのに・・・これも『彼』のおかげかしら。それに、私も簡単に了承しちゃって・・・変わったのはあの子だけじゃないみたいね）」

袁術「七乃、もし兄様がここにいたら、妾の事褒めてくれるかの？」

張「そうですね、きっと褒めてくれると思いますよ」

袁術「そ、そうか！もしそうなら嬉しいのじゃ！」

曹「・・・ふうん」

袁紹「な、何ですの華琳さん、わたくしと美羽さんをそんなに見比べて……」

曹「別に……ただ、どこかの誰かよりよっぽどしっかりしてると思っただけよ」

袁紹「そ、それはわたくしの事をおっしゃっているんですの？」

曹「あら、心当たりがあるのかしら？」

袁紹「うぐぐ……劉備さん!!」

劉「ひゃい!!」

突然名を呼ばれ、体を跳ねあげる劉備。

袁紹「感謝なさい、わたくしの兵も貸して差し上げますわ!!」

劉「え、いいんですか？」

袁紹「わたくしの慈悲深い心に感謝なさい！　おーーほっほっほ!!」

劉「あ、ありがとうございます……」

こうして、袁紹、袁術両方から兵を得た劉備軍。自分の所為で脅威が増えた事を、もちろん彼は知らない……

「
・
・
・
くしゅん!
風邪か
・
・
?」

第四十九話 たった一つの命令（後書き）

作「どうだ！ 呉での美羽とのやりとり・・・全てはこの為の布石だったのだ！！」

一「な、なんだってー！！！」

作「・・・すまない、一度やってみたかったんだこのやりとり」

一「気にするな。しかし・・・これですます敵しくなったわけだな」

作「籠城戦だぜ？ 楽なもんだろ」

一「それは、確かに攻めるより守る方がいいが・・・」

作「まあ、爆弾抱えてるから安心は出来ないけどな」

一「爆弾？」

作「・・・華雄」

一「・・・」

作「頑張れ！ いざとなったらプラスターぶっ放せばいいだけだ！」

一「だが断る！！！」

作「冗談だって。今回は肉弾戦オンリーだ、たっぷり楽しめよ」

「何を楽しめばいいんだよ……」

第五十話 身体的特徴を持ち出すのはいじめになる（前書き）

ご都合主義な戦いになります。そういったものが嫌いな方はスルーしてください。

それと、連合SIDEの時は一成と知り合いでも真名ではなく名前で表記するようになっていますので、わかりにくかったらすみません。

第五十話 身体的特徴を持ち出すのはいじめになる

シ水関到着から一日、それまで沈黙を保っていた連合軍がついに動き出した。

華「敵が動くぞ！ 総員、すぐに持ち場につけ！！」

声を張り上げる華雄、こういう時の彼女の対応の早さは頼りになる。

霞「ぎょうさん来よるなあ・・・」

大地を揺るがしながら迫り来る連合軍。やがて、シ水関の少し手前で停止し、そこから少数の隊が躍り出た。

一「（旗印は『劉』・・・桃香達か）」

やはり、原作通り先陣を切らされる事になったのか。よく見れば、緑を基調とした鎧を纏う兵の他に、黄金色の鎧に身を包んでいる兵の姿も確認出来る。

霞「ん？ 誰か出て来たで」

霞の指差す方を見ると、そこには黒髪の女性と赤髪の少女が立っていた。見間違うはずがない、彼女達は……

愛「我が名は関羽！ 劉備様一の家臣！！」

鈴「張飛なのだ！！」

—「愛紗……鈴々……」

愛「貴様等！ いつまでそこに籠っているつもりだ！ 腰抜けめ、それでも武人か！！」

どうやら俺には気付いていないようだ。愛紗の挑発が容赦なく俺達に叩きつけられる。

華「ふん、くだらん……」

—「え？」

華「あの程度の挑発で私達が動くとも思っているのか？ 我等の目的は時間稼ぎ、戦う事ではない」

華雄の口から信じられない言葉が出て来た。以前の彼女ならすぐに乗っていただろうに。

霞「う、ウソや・・・挑発に全く乗らないなんて、こんな華雄やない・・・！」

華「ふっ、張遼よ、もはや猪とは呼ばせんぞ」

その後も愛紗の挑発は続いたが、華雄は冷静に受け流した。やがて、効果が無いと悟ったのか、愛紗と鈴々は下がって行った。

—「……………ん？」

桃香達の軍の横に別の軍がつく。真紅の旗に印されているのは『孫』の一文字。

華「ッ！ あれは……………！」

霞「どしたん華雄？」

先程の愛紗達のように、今度は一人の桃色の髪の女性が姿を現す。彼女も俺がよく知る人物だった・・・

雪「聞こえるか華雄！ 我が名は孫策！ そして…………我が母の名は孫堅！！！」

「雪蓮……」

雪蓮は、以前華雄が彼女の母である孫堅に手酷くやられた事を引き合いに出し、華雄の武を貶める様な発言を繰り返した。

雪「この負け犬が！　せつかく現れた仇の娘を前にして怖気づくのか！！」

これはさすがにマズイ。そう思い華雄の様子を窺うと……

華「ぐ、ぐぐぐ……！」

体を震わせながら彼女は必死に耐えていた。今の華雄の心の中では、月を守る気持ちと飛び出したい気持ちがせめぎ合っているのだろう。

霞「耐えるんや華雄！　アンタなら出来る！！」

霞の言う通りだ、ここで華雄が耐え切る事が出来れば原作と違い完璧な籠城戦を行う事が出来る。そうすれば後の戦いも格段に楽になるだろう。それを理解しているからこそ華雄は我慢しているのだ。

雪「へえ……てつきり出て来るかと思っただけど、ずいぶん頑張る

じゃない。なら・・・」

遠くからでよくわからないが、雪蓮が笑った気がする。同時に俺の胸に嫌な予感がよぎった。

雪「これだけ言っても出て来ないなんて・・・やっぱり胸が小さい人は肝っ玉も小さいのかしらね〜」

ピシッ・・・

雪蓮の発言に戦場の空気が凍る。何だ？ 一体どうしたんだ？

華「ふ・・・ふふふ・・・」

—「か、華雄・・・？」

ただ事ではない様子の華雄に声をかける。彼女の後ろに鬼が見えるのは気のせいではないだろう。

華「全軍突撃！ 私に続けええええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

—「なあッ！？」

華雄の怒号により城門が開く。あまりに予想外の展開に俺は一瞬固まってしまった。

霞「だ〜もう！ やっぱりこうなるんかあああ！〜！」

霞が頭を抱えつつ数人の兵に指示を出す。おそらく虎牢関に使いを送るのだろう。

霞「まさか、あんな挑発方法があったとはなあ・・・やられたで」

一「霞、何で華雄はあんな事に？」

霞「一成・・・それは女にしかわからん問題や」

一「？」

霞「とにかく！ ウチがあこの馬鹿引き戻して来るから、一成は城門を守ってや！！」

一「わかった、気をつけてな！」

霞「アンタもな」

そう言っつて霞も戦場へと出て行き、俺は残りの兵を纏めて城門の前に陣取った。

董兵「(にしても、こんな方法を考えつくとは、秋月將軍ってすげえな)」

.....

それは、出立する二日前の出来事だった。いつもの様に調練をして頂こうと集まった俺達に、秋月將軍はとある作戦を教えて下さった。

秋「さて、今度の戦いではおそらく時間稼ぎが重要になって来るけど、その時間稼ぎに有効な手は何だと思っ？」

董兵A「時間稼ぎですか？」

董兵B「やっぱり籠城戦じゃないですか？ こっちも戦いやすいですし」

秋「うん、それが一番だな。だけど、逆に打って出る方法もあるんだよ」

董兵C「それは？」

秋「それは・・・敵を殺さない事だ」

董兵達「え・・・？」

耳を疑った。殺さなければこっちが殺されてしまう。

秋「正しくは死なない程度に力を奪うって事だ。仮の話だが、もしみんなの近くに負傷した仲間がいたらどうする？」

董兵D「もちろん助けます」

秋「そこをつくんだよ。負傷者を助けるのに兵を割かなければならない、すると、戦える兵はその分少なくなるだろ？ 誰だって仲間を見捨てるのは嫌だろうし」

董兵E「なるほど！ それに、負傷者の手当てや場合によっては重傷者を国に返す必要だってあるだろうし、それだけでも進軍が遅れる事になりますしね！！」

秋「ああ、そういう事だ。もちろん徹底しろとは言わないけど、ただ倒すより利用した方がいいだろ？」

董兵F「勉強になります！」

.....

董兵「首尾は上々みてえだな」

周りでは傷を負い倒れ込んでいる連合兵が、味方に助け起こされて

いる。

連合兵B「痛え・・・痛えよお・・・」

連合兵C「しっかりしろ！　すぐに手当てしてやるからな！」

追いはしない。それより一人でも多くの敵を負傷させなければなら
ない。

董兵「にしても、殺さずに勝つて・・・やっぱ変な方だよなあ・
・・・」

秋月將軍、何者なんだろう・・・

董卓軍兵SIDE　OUT

華雄SIDE

城門を飛び出した私は、孫策を探して戦場を駆け回っていた。

華「孫策は何処だああああ！！」

ドゴンー！！

連合兵「ぎゃあああああ！！」

群がる敵を吹き飛ばす。あの女……人が気にしている事をずけずけと……許さん！！

？「待て！！」

孫策を探す私の前に、一人の女が立ち塞がった。

？「我が名は関雲長！ 華雄、討ち取らせてもらっぞ！！」

華「ふん、貴様などに用は無い！ どけえ！！」

ガギン！！

関「ぐっ……！！」

戦斧を叩きつけると、関羽の体が大きく吹き飛んだ。

華「噂に名高い関羽・・・その程度か？」

関「ぬかせえ!!」

ギン！ ガギン！ ブオン！ ギャリイイイン!!

強い、以前の私なら苦戦していただろう。そう・・・『以前』の私なら。

華「秋月に比べたら、貴様など・・・相手ではないわああああ!!」

ガギイイイイイイン!!

関「うわぁッ!?!」

再び吹き飛ぶ関羽。だが、次の瞬間、ヤツの雰囲気が大きく変わる。

関「秋月？ 貴様、何故ご主人様の名を知っている!?!」

華「ご主人様？」

突然何を言い出すんだこの女は？

関「とぼけるな！ 私達のご主人様である秋月 一成様の事だ！！」

華「何だと？」

秋月がこの女のご主人様？ という事は・・・ヤツは敵なのか？

華「（・・・・ふツ、何を馬鹿な）」

私は頭に浮かんだ疑惑をすぐに消し去った。ヤツの董卓様を想う心は本物だ、それに・・・私自身、ヤツが敵だとは思いたくない。

関「何を黙っている！ 早く答えろ！」

華「ふん、貴様に教える道理などない」

関「なっ!？」

華「聞きたければ・・・カづくで聞くがいい!!」

私は再び戦斧を構えようとした・・・が。

張「やっと見つけたで華雄!!」

そんな私の背後に、馬に乗った張遼が姿を現した。

華「張遼？ 私に何か用か？」

張「何か用か？・・・じゃないわドアホ!! 勝手に突撃してくさってからに!!」

一気にもくしたてる張遼。まずいな、本気で怒っているようだ。

華「だ、だがな張遼・・・」

張「言い訳無用や! さっさとシ水関まで撤退するで!!」

グイ!

華「うわッ!？」

いきなり首ねっこを掴まれ、私は抵抗する暇もなくシ水関まで撤退する事になってしまった。

関「ま、待て……！」

背後に、関羽の制止の声を聞きながら……

華雄SIDE OUT

IN SIDE

城門が開いて数刻、未だ霞は戻って来ない。戦局はこちらに傾いているが、それもいずれは翻されてしまっただろう。

—「まだか……！」

董兵B「秋月將軍！ 張遼將軍のお姿を発見しました！」

—「華雄も一緒か!？」

董兵B「はい！ ご健在です!!！」

—「よし、銅鑼を鳴らせ！ みんなを戻すんだ!!！」

ジャンジャン!!

銅鑼が大きな音を立て、戦場に出ていた董卓軍兵達が一斉に城門に向かつて撤退を始めた。もちろん、連合軍は追撃をかけるが、城壁からの弓による攻撃に阻まれている。

—「どうやらみんな、あの作戦を実行したみたいだな」

まさかここまでうまくいくとは思わなかったが、将が出て来なかったのが幸いだっとな。

霞「待たせたな一成！ちゃんと馬鹿を連れ戻して来たで」

霞が戻って来た。確かに彼女の後ろには華雄が乗っている。

—「全員戻ったか!？」

董卓C「はい！」

—「門を閉める！ 急げ!!」

俺の指示で門が大きな音を立てて閉じられる。これでまた時間が稼げるな。

華「ふう、一時はどうなる事かと思ったな」

霞「お前の所為やるが!!」

スパーーーーーン!!

華「な、何故叩くのだ!？」

霞「当たり前やアホ!」

—「華雄・・・何故あそこまでキミが怒ったのかわからないが、もうこんな危ない事は二度としないでくれ」

華「だが秋月、ヤツは私を・・・」

—「いいな・・・?」

若干睨みながら念を押すと、渋々ながら華雄は頷いてくれた。

霞「どうする一成? 兵達も疲弊しとるし、ここらが潮時かもしれんで」

霞の言う通りだ、それに負傷者の手当てもしなくてはならない。もうシ水関は捨てるしかないだろう。

「……いや、このまま終わらせるわけにはいかない」

霞「一成……？」

華「どうしたんだ？」

「俺は残る。みんなは撤退してくれ」

霞「な、なんやて!？」

「考えてみてくれ、このまま全員で撤退して、もしすぐに追撃されたらそれこそ全滅だ。安全な距離がとれるまで誰かが足止めしなくてはならない」

華「そ、それはそうだが、お前一人でどうにかなる数じゃ……」

「ああ、だから……『全力』を出そうと思う」

霞・華「ッ……!?(ゾクッ!!)」

オーラが膨れ上がる。二人ならこの力を感じ取ってくれるだろう。

霞「……わかった、アンタに任せる」

華「張遼!？」

霞「信じてみようや華雄。一成の……天の御使いの全力っちゅ

うヤツを……」

—「霞……」

霞「ただし！ 絶対戻って来るんやで？ 約束出来んのなら力づくでも連れて行くからな」

—「もちろん、約束するよ」

霞「絶対……絶対やで？」

華「秋月、何故お前はそこまでして……」

—「理由なんて一つしかないさ……」

俺は微笑みながら答えた。

—「みんなを……仲間を守りたいから……」

S I D E O U T

連合軍 S I D E

袁紹「ちょっと斗詩さん！ シ水関はまだ落ちませんの！」

？「それが、各軍の兵の損傷が予想以上に酷くて、思うように攻める事が出来ないそうです」

袁紹の問いに答えたのは、彼女の側近である斗詩こと顔良である。

袁紹「だったらあなた達が落として来なさい！」

顔「わ、私達がですか!？」

？「無茶言わないでくださいよ麗羽様」

これまた彼女の側近である猪々子こと文醜がそう返す。

文「また籠られちゃいましたし、まだまだ時間はかかりそうですよ」

袁紹「ああもう！ 劉備さんは何をしてらっしゃるのかしら!！」

劉「くしゅん！」

張「お姉ちゃん、風邪なのだ？」

劉「ううん、大丈夫だよ鈴々ちゃん」

関「……………」

諸「愛紗さん、先程から何をそんなに考えているんですか？」

関「ん？ ああ、ちよつとな・・・」

諸「？」

曹「変ね・・・静か過ぎる」

許「もしかして、逃げちゃったんじゃないですか？」

旬「華琳様、どうされますか？」

曹「畏の可能性も否定できないわ、しばらくは様子見ね」

夏渥「むっ・・・もどかしいな」

夏淵「もうしばらく我慢してくれ姉者」

孫「どう思う冥琳？」

周「わからないわ。けど、うかつに近づくのは危険ね」

孫「そうよね。でも、私の勘は逆の事言ってるのよね」

周「今回ばかりは頼るのは駄目よ」

孫「わ、わかつてるわよ……」

袁術「七乃、何故皆動こうとせぬのじゃ？」

張「それはですね、シ水関が静か過ぎるからですよ。もしかしたら罠が仕掛けられているかもしれませぬしね」

袁術「なるほど、ならば妾達も動かん方がいいの」

警戒し、全く動かない連合軍。だが、とうとう一人の人物に我慢に限界がやって来た

袁紹「もう限界ですわ！ 全軍に突撃命令を出します！！」

顔「ええッ！？」

袁紹「ええッ！？ ではありません！ すぐに伝令を……」

連合兵「も、門が開きます！！」

兵の言う通り、閉じていた門が再びゆっくりと開き始めた。やがて、完全に開門したその瞬間……

ゾクッ！！！！

この戦場に存在する全ての人間が、全く同じタイミングで凄まじい殺気を感じ取った。兵の中には気絶する者まで現れている。

関「こ、この殺気は……！！」

曹「……来たわね」

孫「え、この感じ……」

全員の視線が門に集中する中、一人の男が姿を現した。仲間を……友を守るために……

連合兵「は、旗を確認しました！ 旗印は……『秋』！！」

全将「ッ！？」

破壊神と呼ばれた男……今、その異名の真価が明らかになる。

？「……ここは通さない」

第五十話 身体的特徴を持ち出すのはいじめになる（後書き）

作「盛り上がりすぎて来たぜえええええええええええ！！！！」

―「こんな下らない策よく書けたな」

作「ご都合主義のこの小説にちゃんとした策を求める方がおかしいんだよ」

―「開き直るな」

作「華雄も逃がしたし、あとは暴れるだけだ。恋姫たちとの真剣勝負、気合い入れて書くぞお！！」

―「おふざけは無しだろ？」

作「……………」

―「答えろよ！！」

第五十一話 リアルの修羅場はマジできつい(前書き)

シリアス二割、ボケ八割といったところでしょうか。いいかげんシリアスはこりこりです。

第五十一話 リアルの修羅場はマジできつい

城壁の上に立てられた『秋』の印の旗をジッと見つめる。いつの間
に用意していたのか不思議だが、みんなの心遣いが嬉しい。

門を開き、俺は真っ直ぐに戦場を見据えた。

―「……ここは通さない」

連合軍との距離はかなり縮まっている。籠っている間はかなり接近
を許してしまったみたいだな。

連合兵A「誰か出て来たぞ」

連合兵B「お、おい、あれってまさか……！」

連合兵C「間違いねえ！ でも、何で董卓軍にいるんだよ!？」

俺の姿を確認した複数の連合兵がどよめく。おそらく、彼等は魏か
呉で俺と顔を合わせた事があるのだろう。

連合兵D「なにビビってんだよ。相手は一人だぜ？」

一人の兵が剣を構え俺に向かって来た。

連合兵B「ば、馬鹿野郎！ お前なんか敵う相手じゃ……」

—「ふっ……！」

ズン！！

連合兵D「がッ!？」

鳩尾に拳を叩き込むと、体を痙攣させながら兵はその場に崩れ落ちた。

—「……次は誰だ？」

連合兵A「ヒイツ!!」

—「来ないのなら……こちらから行くぞ!!」

雄叫びと共に、俺は連合軍に向かって全力で駆け出した。

「うおおおおおおおおおおおお！！！！」

S I D E O U T

連合軍 S I D E

劉「あ、あれってご主人様だよね！？」

張「何でお兄ちゃんが敵側にいるのだ！？」

諸「はわッ！？ ご主人様が味方部隊と接触！ 戦闘を開始しました！！」

鳳「あわわ！ 味方部隊壊滅！ ご主人様、次の部隊と接触しました！！」

劉「早ッ！ 早すぎるよご主人様！！」

？「はっはっは！ 相変わらず惚れ惚れする武だな一成殿！」

関「笑っている場合ではない！ とにかく、ご主人様にお会いして話を聞かねば！！」

劉「うん！ 行こうみんな！！」

公「あいつ・・・全然姿を見せないと思ったらこんな所にいたのか。桃香達はいいつの所へ向かうだろうし・・・私も行ってみるか」

夏惇「あれは秋月？ あの男、華琳様の元を去ったと思えば董卓などの手先になっていたとはな」

夏淵「華琳様のおっしやった通りだな、本当に私達の前に立ち塞がるとは」

許「あゝ兄ちゃんだゝゝ！ 流琉、あれが僕が言ってた兄ちゃんだよ！」

？「あの人が・・・」

楽「そんな・・・師匠が敵だなんて・・・」

于「まずいの！ あの光の筒を使われたら沙和達なんてあつという間に昇天しちゃうの！！」

李「シヤレにならん事言わんといてや沙和！」

旬「華琳様、行かれるのですか？」

曹「もちろんよ桂花。私はこの時を待っていたのだから」

孫権「か、一成！？ 何で董卓軍に・・・」

周瑜「・・・そうか、何故急に別れを告げたのか疑問だったが、
全てはこの戦いの為だったというわけか」

呂「一成さんがいるという事は・・・やはりあの檄文の内容は間違
っていたという事なんでしょうか？」

陸「そうですね〜、董卓さんが噂通りの方だったら一成さんが味
方するはずありませんし〜」

甘「おのれ、蓮華様を悲しませおって・・・あの男許さん！」

周泰「はうあ！？ 思春さんが燃えています！」

孫尚香「うわ〜、味方がポンポン吹き飛んでる。やっぱり一成って
凄いな〜」

孫策「・・・冥琳」

周瑜「何だ雪蓮？」

孫策「後よろしく」

黄「策殿！？ 一人では危険じゃ！ 儂も行くぞ！」

周瑜「ま、まで二人とも！」

袁術「おお、兄様じゃ！ 兄様がおるぞ！」

張「あらら〜〜本当ですね・・・って、孫策さんが凄い勢いで向かって行ってますね」

袁術「七乃、妾も兄様に会いたいのじゃ！」

張「そうですね〜〜幸い、他に敵はいませんし、こっそり行けば大丈夫ですかね」

袁術「うむ、では早速向かうのじゃ！」

張「はいは〜〜い」

文「な、何なんだよあの男!? 滅茶苦茶強いじゃんか!」

顔「あの人・・・もしかして天の御遣い様じゃ・・・」

文「はあッ!? 何で天の御使いが董卓軍にいるんだよ!」

顔「そ、そんな事私に聞かれてもわからないよ〜」

文「麗羽様〜〜! どうするんですか〜〜!」

袁紹「・・・」

顔「麗羽様?」

袁紹「・・・素敵」

顔・文「…………え？」

袁紹「何ですのあのお方は！？ 敵を倒す時の流麗な舞の如き動き、数万の相手を前に全く恐れを見せない豪胆さ、遠目からでもハツキリ見える美しい銀髪……あのようなお方がこの世に存在していたなんて…………！」

文「あの……麗羽様？」

袁紹「斗詩さん！ 猪々子さん！ 今すぐあのお方をわたくしの所にお連れしなさい！！！」

顔「む、無理です！ 無理無理！ 絶対無理ですよ…………！！！」

袁紹「いいからお行きなさい！ それとも……お仕置きされたいのかしら？」

文「斗詩、諦めよう……」

顔「ひ…………ん！！！」

こうして、劉備、公孫賛、曹操、孫策、袁術、そして袁紹……この六つの軍が一斉に一成に狙いを定めた。旅人と恋姫……再会の時が迫る。

連合軍SIDE OUT

IN SIDE

—「崩山槍拳!!」

連合兵E「ぐわあああああ!?!」

腕を槍に見立てて突き出し、そのまま一気に間合いを詰め貫く。てつきり俺を放置してシ水関に攻め寄せられると思ったが、予想に反して次から次へと敵が俺に向かって来ていた。

連合兵F「これ以上は行かせんぞ! 二人とも、用意はいいか!?!」

連合兵G「任せろ!」

連合兵H「食らえ! 三位一体、噴射気流撃!!!」

三人の兵が縦一列に並びながら突っ込んできた。多少面食らったが、俺は落ち着いて先頭の兵の肩を踏み越えて後ろに回り込んだ。

連合兵F「お、俺を踏み台にしたあ!?!」

—「せやあ!?!」

バキヤ！！×3

連合兵F「ば、馬鹿な……」

連合兵G「俺達の連撃が……」

連合兵H「こんな……若造に……」

ドサツ……×3

—「何だったんだ……？」

倒れ込む三人を一瞥する。不思議な戦法を使う敵だったな、しかし……どこかで見えた覚えがあるような……

？「兄ちゃん見〜っけ！！」

—「ッ！？」

ズドン！！

反射的に飛び退いた瞬間、直前まで立っていた地面に巨大なトゲ付

き鉄球がめり込んでいた。

？「あゝあ、避けられちゃった。やっぱり兄ちゃんには不意打ちは効かないか」

—「……季衣か」

季「久しぶり兄ちゃん！ こんな所で会えるとは思わなかったよ」

鉄球を引き戻しながら、季衣は魏にいた頃と変わらない笑顔を俺に向けてくれた。

？「ちよつと季衣！ 一人で先に行かないでよ!!」

季衣の元へ一人の少女が駆け寄って来た。季衣と同じくらいの身長で、頭の大きなリボンが可愛い。

季「ゴメンゴメン、兄ちゃんの姿が見えてつい……」

？「もう……」

—「季衣、その娘は？」

季「え？ あ、そうか、兄ちゃんは初対面なんだよね。この娘は流琉。僕の友達だよ」

―「季衣、それは真名じゃないのか？」

季「あ、そうだった。名前はね〜」

？「季衣、自己紹介くらい自分でやるから」

少女がぺこりと頭を下げる。

？「初めまして、私の名前は典章と言います」

―「俺は秋月 一成・・・って名前は知ってるかな」

典「はい、あなたのお話は季衣からよく聞いていますから」

丁寧な挨拶に、つられて頭を下げてしまった。

―「それで、典章と季衣は俺を止めに来たのか？」

典「正確には、あなたを捕まえに来ました」

―「捕まえる？」

季「華琳様がね、兄ちゃんをどうしても配下にしたいって。その為には戦って下すのが一番手っ取り早いって言ってたよ」

覚悟していなさい・・・私が言いたいのはそれだけよ

別れ際の言葉を思い出す。そうか、華琳はこの事を言っていたのか。

―「なるほど、それで二人で・・・」

季「ううん、僕達だけじゃないよ」

―「え？」

？「あ~~~~き~~~~づ~~~~き~~~~!!!!」

尋常でない殺気が迫って来る。振り向くと、大剣を振り上げた春蘭が俺に向かって猛スピードで突っ込んで来た。

春「死ねええええええー！！！！ツ！！！！」

ブオン！

春「チツ！ 避けるなああああ！！」

―「やあ春蘭、久しぶりだな」

春「ん、おお、そうだな……じゃなくて！ 秋月、華琳様の為に大人しく捕まれ！」

コロコロと表情が変わる春蘭。 元気そうで何よりだな。

—「秋蘭はいないのか？ てっきり二人で行動していると思ってたんだが……」

ヒュン！ ドカ……！

秋「私を呼んだか秋月？」

足元すれすれに一本の矢が突き刺さる。 相変わらず大した腕だな。

—「秋蘭……」

秋「私だけではないぞ」

—「え？」

凧「師匠！」

沙「一成さん！」

真「兄さん！」

さらに凧、沙和、真桜の三人まで姿を現した。というか、これで魏の武将全てが集まってしまった。

一「何でみんな俺の所に来るんだよ？ シ水関はどうした？ 一番乗りすれば結構な荣誉になるんだろ？」

？「そうね、けど、あなたを手に入れる事に比べたら一番乗りの価値など大したものではないわ」

おいおい、何で彼女までここにいるんだよ・・・

一「か、華琳！？ それに桂花も・・・」

桂「ずいぶん好き勝手にやってくれたわね、おかげで我が軍の被害は尋常じゃないわよ」

華「一成、話は聞いているでしょう？ 私はあなたを手に入れる。正々堂々、全力を以てね！」

春蘭を筆頭に全員が武器を構える。どうする？ 全員を相手にしていたらシ水関を突破されてしまう恐れがある。

？「おーい！ 一成~~~~！！」

悩む俺に新たにかけられる声。嫌な予感を感じつつそちらを振り向くと……

—「し、雪蓮……」

雪「あなたと戦場で会うとは思わなかったわ、元気してた？」

—「あ、ああ。キミも元気そうで何よりだ」

雪「ふふ……」

久しぶりに見た雪蓮の笑顔は、少し眩しかった。

華「あら、ずいぶん孫策と仲がいいのね一成……」

—「ん？ ああ、キミ達と別れた後、しばらく呉で世話になってたからな」

孫「あら曹操、あなた何でこんな所にいるの？」

華「……あなたには関係ないでしょう？ それより、一成がここにいる今ならシ水関も簡単に落とせると思うけど、行かないの？」

雪「別に一番乗りなんて興味ないし、そういうあなたこそ行かない

の？ 今なら私が一成の足止めしてあげてもいいけど？」

華「結構よ……」

雪「あらそう……」

何だ……二人の背後にうつすらと竜と虎の姿が見える。

祭「やっと追い付いたぞ策殿！」

一「（祭さんまで……もしかしてこのまま呉のみんなもやって来たりしてな……なんて、いくらなんでもそんな事……）」

蓮「姉様！ 独断先行はお止め下さいとあれほと言ったでしょう！」

冥「蓮華様のおっしゃる通りだ！ いいかげん自分の立場というものを理解しろ……！」

穩「一成さ〜ん、お元気でしたか〜？」

思「秋月、蓮華様を悲しませた罪……その身で償ってもらおうぞ」

明「小蓮様！ こちらです！」

小「みんな速すぎ……うっ、馬飛ばし過ぎてお尻が痛い……」

亞「だ、大丈夫ですか小蓮様！？」

—「なん・・・だと・・・」

魏のみんなは理由があるからわかる。だけど、何で呉のみんなまで集まって来るんだよ!? まさか、雪蓮達も俺を捕まえようかと・・・?

?「ご主人様~~~~!!」

—「・・・・・・・・」

落ちつけ、落ち着くんだ。二度ある事は三度あると言つが、全部が全部そういうわけじゃない。深呼吸してゆっくり目を開けよう。ほら、気のせい・・・

愛「ご主人様あああああ!!!」

—「じゃなかったああああ!!!」

華・雪「ご主人様?」

『ご主人様』という単語にピクリと反応する華琳と雪蓮。

鈴「お兄ちゃん〜ん!!! 鈴々の事忘れてないのだ?」

朱「雛里ちゃん雛里ちゃん！ 本物のご主人様だよ！」

雛「やっと・・・やっと再会出来たね朱里ちゃん！」

？「ふふ、何やら面白そうな事になっておりますな一成殿・・・いや、主」

一「せ、星！？ 何でキミが！？ それに主って・・・」

星「あれから、私は桃香様配下の武将となりました。その桃香様にご主人様と呼ばれている一成殿は私にとっても主ですからな。今度からはこう呼ばせて頂きます」

一「そ、そうか。それで桃香は・・・」

？「ご主人様！！」

ガバツ！！

一「うおッ！？」

突然横から抱き締められ、俺は大きくバランスを崩した。何とか踏みとどまり、抱きついて来た人物を確かめると・・・

一「桃香・・・」

桃「ご主人様・・・ずっと、ずっと会いたかったよ・・・」

—「・・・すまない」

桃「謝らなくていいよ。こうして、またご主人様に会えたんだもん」

桃香達と別れたのがずいぶん昔の様に感じる。それだけ濃い数か月を過ごしたという事か。

雪「ちよつと劉備、いつまで一成に抱きついてるつもりよ」

桃「ふえ？ 孫策さん？ それに曹操さんまで・・・ご主人様、何かあつたの？」

華「それよ、そのご主人様って何なの？」

桃「ご主人様は私達のご主人様ですから。それより、孫策さんさつきご主人様の事一成って呼びましたよね？ ご主人様と会った事あるんですか？」

雪「そこら辺の事は本人に聞いた方が早いんじゃない？」

三人が一斉に俺の方を向く。その瞬間、背筋に冷たいものが通るのを感じた。

桃「ご主人様・・・」

華「どういう事が・・・」

雪「説明してくれるわよね・・・」

気付けば、正面を魏軍、右方を呉軍、そして左方を愛紗達によって完全に塞がれていた。どうする？ 後方から一度包囲を脱出するか？

美「七乃！ 兄様を見つけたぞ！」

七「やりましたね美羽様！」

白「よお秋月・・・って、何だよこの面子は？」

？「文ちゃん、やっぱり私達には無理だよ〜」

？「何言ってるんだ斗詩！ こついつ分の悪い懸けの方が燃えるじゃねえか！」

—「・・・」

唯一の脱出箇所であった後方まで、美羽、七乃さん、白蓮、そして初めて見る二人の女性によって塞がれてしまった。

—「・・・どうしてこうなった」

第五十一話 リアルの修羅場はマジできつい（後書き）

作「完全包囲された一成！ 果たして無事に戻れるのか！？」

一「前回までシリアスっぽかったのに一気に壊れたな」

作「これ以上シリアス書いてたら俺の頭が爆発してたぞ」

一「むしろそっちの方がよかったな」

作「まあ・・・連投し過ぎてテンションがおかしくなった感じは否めないけどな・・・」

一「というか、みんなシ水関の事全く眼中にないな。そっちがメインのはずなのに」

作「いいじゃねえか、それだけお前が人気者だって事さ」

一「あの状況じゃ素直に喜べないけどな・・・」

第五十二話 激突！ 旅人VS恋姫（前書き）

セリフがないキャラがいますが、ちゃんと全員いるのであしからず。

第五十二話 激突！ 旅人VS恋姫

華「とりあえず、ここにいる全員との関係を答えてもらいましょうか……」

雪「そうね、みんな気になってるでしょうし」

全員「（コクン）」

—「……了解」

黙秘を許されない空気の中、俺はそれぞれの勢力との出会いから別れまでの流れを事細かく説明した。

雪「なるほどね、私達に出会う前にそんな事してたなんて……」

華「まさか、袁術や公孫賛にまで真名を許されてるとはね……節操無しにも程があるわ」

それは一刀君の専売特許だろ。ここにいない人物の事を言っても仕方ないがな……

桃「大変だったんだねご主人様。でも無事に再会出来たし、これで私達の所に戻って来てくれるんだよね？」

「……すまない桃香、俺はまだ戻れない」

桃「え……」

「今の俺は董卓軍……キミ達の敵だ」

俺は再び戦闘態勢をとった。場が緊張に包まれる。

愛「な、何故ですご主人様！？　そもそも、どうしてあなたが董卓軍で戦っているのですか!？」

「愛紗、所詮噂ではその人物の本質など理解出来ないんだぞ……」

愛「わかりません……わかりませんよご主人様……」

愛紗が崩れ落ちる。俺は駆け寄りたい衝動を必死に抑えた。

華「ずいぶん余裕そうね一成、今の状況がわかっているのかしら」

雪「いくらあなたでもこの包囲を突破するのは難しいんじゃない？」

四面楚歌とはこの事か。一応上空に逃げるといつ手もあるが……

秋「おつと秋月、下手な真似はしない方がいいぞ」

祭「傷付けるのは忍びないが、容赦無く射らせてもらうからの」

あの二人がいる以上、ハイロウを展開した瞬間に射られるのが目に見えている。というわけで上空も却下だ。なら取る道は一つ・・・

一「（彼女達を打ち倒し、この包囲を崩すしかない）」

自分で決めた事とはいえ、これは骨が折れそうだな（汗）。

一「（さて、どう動くべきか・・・）」

?「なあなああ斗詩、今ならあたい達でも捕まえられるんじゃないか
?（ボソボソ）」

?「何言ってるんの文ちゃん。それに、そんな空気でも無さそうだよ
（ボソボソ）」

?「いいからいいから、せーので行くぞ（ボソボソ）」

後ろからヒソヒソ声が聞こえて来る。確か彼女達は文醜と顔良だったか？ そうだ間違いない、ゲームで見たのと同じ人物だ。

文「せー…の！」

顔「え、ええええええい！！！」

—「ツ…！！！」

二人に意識を向けた次の瞬間、ほぼ同時に襲い掛かって来た。

文「大人しくあたいらに捕まれー！ツ！！！」

顔「ゴメンなさーい！！！」

—「……だが断る」

バキ！×2

顔「きゃ~~~~！！？」

文「い、一撃！？ —太刀も交わさずに！？」

武器は立派だが振りが大き過ぎる。その隙を狙い、俺は二人を大きく吹き飛ばした。

—「（これで、後ろには白蓮と美羽、そして七乃さんだけだ。やっ

ぱり抜け出るにはこつちが一番か」

華「逃がしはしないわ！ 春蘭！ 季衣！ 一成を止めなさい！！」

春「はっ！ お任せ下さい！！」

季「わかりました〜！！」

華琳の指示が飛び、春蘭と季衣が俺の前に立ち塞がった。

—「くっ……！！」

春「秋月よ、今日こそ私の力を思い知らせてやる！ 覚悟しろ！！」

季「兄ちゃん！ 僕も全力でいくからね！！」

—「そうか……。なら、俺も全力でいかせてもらっぞ！！」

俺は手甲を消し、新たに二本の剣を発現させた。長年生死を共にし、パートナーであったあの赤と青の剣を……

—「……やっぱり、この二本が一番しっくりくるな」

あくまで模倣品、応える声はない。だが、それでも充分だ。

—「（神奈・・・天音・・・俺に力を貸してくれ）」

春「食らええええええい!!!」

ガギイイイイイイン!!!

振り下ろされる渾身の一撃、それを双剣を交差させ受け止める。金
属同士が擦れあう耳障りな音が響き渡る。

春「チイツ・・・!」

—「こんな一撃で・・・俺を倒せると思うな春蘭!!!」

春「嘗めるなよ秋月！ 私の全力がこの程度だと思ったかあ!!!」

押し込まれる力がさらに増す。手合わせでは見られなかった魏武の
大剣の本当の姿がそこにはあった。

春「華琳様の為にも、私は負けるわけにはいかんだあああああ!
!」

—「そうか、だがな・・・俺にも負けられない理由があるんだよ!
!」

ギリギリ!!

春「なっ!? 私が押し負け……!」

—「うおおおおおおお!!」

ガキン!!

春「しまッ……! 剣が……!」

振り抜いた俺の一撃が春蘭の剣を吹き飛ばす。

季「春蘭様! 下がってください!!」

春蘭が下がると同時に、季衣の鉄球が大きな唸りをあげて襲いかかって来た。

—「クロス……」

避ける必要はない。この二本があれば……俺に不可能はない!!

華「まさか・・・春蘭と季衣の二人がかりでも止められないなんて・・・」

雪「下がりなさい曹操！ 思春、明命、次はあなた達の番よ！」

思・明「御意!!！」

今度は思春と明命か・・・あの速さにどうついていくかが鍵だな。

明「思春さん、どう戦いましょう・・・」

思「迂闊に仕掛ければ先程のヤツらの二の舞だ。ここは同時攻撃を仕掛けるぞ」

明「はい！」

思「手合わせでの借り・・・今こゝで返してやる!!！」

ヒュン！

—「ッ!?!（以前よりずっと速い!!!）」

ギャリイイイイイイン!!!

思「ふん、よく防いだな・・・だが!!」

明「隙あります!!」

思春の陰から明命が長刀を振りかぶりつつ跳びかかって来た。

—「くっ・・・! やらせるかああああ!!」

ドガ!!

明「あうッ!？」

白刃が迫る中、俺は長刀の鐔の部分を全力で蹴り上げた。明命の手を離れ、長刀は円を描きながら明命の背後に飛んで行った。

思「ば、馬鹿な!？ 蹴っただと!？」

—「・・・今のは危なかったな」

思「明命! 私が抑えている間に取って来い! 急げ!!」

明「わ、わかりました!!」

思春に言われ、慌てて長刀を拾いに行く明命。これで少しの間だけ
一対一で戦う事が出来る。

思「貴様・・・何故殺気がない？ 私達は敵だぞ？」

一「当たり前だよ。俺はキミ達を殺すつもりはないし、本当は敵だ
とも思っていない」

思「では・・・では何故董卓軍で戦っている！ 蓮華様は、貴様が
去ってからもずっと貴様の身を案じておられたのだぞ！ それなの
に貴様は・・・！」

一「キミが蓮華の事を想うように、俺にも守りたい人がいるんだ。
だから、退けない・・・」

思「・・・馬鹿が！」

一「ああ、俺は馬鹿だからな、こんな方法しか思いつかなかったん
だよ」

同時にその場を飛び退く。長刀を回収した明命が思春の横に並んだ。

一「（今必要なのは力よりも速さだ。武器を変えた方がよさそうだ
な・・・）」

俺は双剣を消し、再び手甲を発現させた。相手を無力化する技を使
うにはこの武器が一番だ。

思「手甲か・・・武器破壊には気をつけるよ明命！」

明「はい！」

警戒されている以上、武器破壊は狙えない。だったら・・・

—「行くぞ思春、明命！止められるなら止めてみるー！」

両手にオーラを凝縮し、高速移動で攪乱しながら二人に接近する。

明「くっ・・・どこから・・・！」

思「右・・・いや、後ろか!！」

—「・・・上だ」

思・明「ッ!?!」

動きを止めた二人の腹部に向け両手を突き出す。そして、触れた瞬
間に凝縮したオーラを一気に体内に送り込んだ。

「烈空掌破あー!!」

ドクン!!

思「ぐッ……!!」

明「こ、これは……!!」

今の二人は体の自由が利かないはずだ。手合わせで霞にやったように直接衝撃を流し込んだからな、回復には時間がかかるだろう。

蓮「思春！ 明命！」

蓮華が慌てて二人に駆け寄る。

思「も、申し訳ありません蓮華様、負けてしまいました」

蓮「謝らなくていいわ、それより体は大丈夫なの？」

明「はい、痺れ以外は特に問題ありません」

蓮「そう、よかったわ……」

ホッと息を吐く蓮華、少し罪悪感が湧いてしまった……

雪「あの二人でも勝てないか……なら、今度は私が……！」

冥「やらせると思うか？」

雪「しょぼーん……」

雪蓮に出て来られたらそれこそマズイ。今度こそ撤退しなければ……

鈴「お兄ちゃんが行っちゃうのだ！」

朱「ど、どうしよう雛里ちゃん!？」

雛「わ、私に言われても……！」

桃「……ご主人様を止めなきゃ」

鈴「わかったのだ！ 愛紗！ 星！ 行くのだ!!」

星「承知！」

愛「……」

鈴「愛紗？」

愛「無理だ・・・ご主人様に刃を向けるなど、私には出来ない・・・」

星「何を言っている！ 我等がやらねば主は行ってしまつのだぞ！」

愛「わかっている！ だが、それでも私は・・・」

桃「愛紗ちゃん・・・ご主人様の言葉憶えてる？」

愛「ご主人様の・・・言葉？」

桃「『力が必要になつたら躊躇つてはいけない。例え・・・相手が自分の知っている人物だとしても』・・・ご主人様はこうなる事を予期して言つたんだと思うんだ」

愛「・・・」

桃「苦しいのは愛紗ちゃんだけじゃないよ？ 鈴々ちゃんも星ちゃんも、朱里ちゃんも雛里ちゃんも、もちろん私だって苦しい。でもね、それでもやらなくちゃいけないの・・・躊躇っちゃいけないの！」

愛「桃香様・・・」

桃「だからお願い愛紗ちゃん！ ご主人様を止める為に、愛紗ちゃんが必要なの！！」

愛「・・・わかりました」

愛紗の纏う雰囲気、弱々しい少女のようなそれから、力強い武人のそれへと大きく変わる。

「（強くなつたな桃香・・・）」

白「桃香！ 私も力を貸すぞ！」

桃「白蓮ちゃん！」

華「・・・凧、沙和、真桜、あなた達も力を貸してあげなさい」

凧・沙・真「「ぎ、御意！」」

桃「曹操さんまで・・・」

華「あなた達の為じゃないわ、一成を止めるにはこれぐらいの戦力じゃないと足りないと思っただけよ」

桃「それでも構いません、ありがとうございます！」

華「ふ、ふん・・・変な娘ね」

桃香の真つ直ぐな礼に珍しく華琳が照れている。

雪「残念、私がいけない以上、ウチからは出せないわね」

祭「儂が出てもよいが、あの人数の中で秋月だけ狙い撃つのも少々骨が折れそうじゃしの。まさか味方を撃つわけにもいかんし・・・」
美「七乃・・・」

七「わ、私は行きませんよ美羽様！ 一成さんみたいな非常識な人と戦えるわけないじゃないですか！！」

愛紗、鈴々、星、白蓮、凧、沙和、真桜・・・合計七人の将が俺をとり囲む。彼女達を押さえれば今度こそ終わりだ。

—「（霞達も心配しているだろうし、何とか早めに決着をつけなければ・・・）」

愛「ご主人様、お覚悟を！」

鈴「お兄ちゃんはとっても強いから鈴々も本気で行くのだ！」

星「いやはや、まさか主と刃を交わす時が来ようとは・・・ふふ、滾りますな」

白「正直私の剣が通用するとは思えないが、精一杯やってやるさ！」

凧「沙和、真桜、師匠の強さはわかっているだろう？ 最初から全力を出せよ」

沙「もちろんなの！」

真「……全力出しても勝てる気せえへんけどな」

七人がそれぞれの構えをとる。おそらく一斉攻撃を仕掛けて来るつもりだろう。

愛「……今だ!!」

鈴・星・白・凧・沙・真「「「「「「はあああああああー
ーッ!!」」」」」

愛紗の号令の下、全員が一斉に飛びかかって来た。だが、俺は慌てず、両手にオーラを溜めこんでいく。

ー「爆砕……」

凧「ッ!? いけない! みんなすぐに離れ……」

凧が気付いたようだが、一足早く俺は地面に向かって拳を叩きつけた。

ー「跳天昇!!!」

ブワ!!

四方に伸びる巨大な気柱が七人を飲み込む。やがて気柱が消えると、そこには地面倒れ込む七人の姿があった。

「……迂闊だったな風、キミならもっと早く気付いてもおかしくはなかったが」

風「くっ……！」

雪「強過ぎる……これが一成の……」

華「天の御使いの……本当の力なの……？」

「……時間稼ぎはこれで充分だ、俺は退かせてもらっぞ」

桃「ま、待ってご主人様！！」

「追って来るのを止めはしない。だが、そうなればまた俺はキミ達の前に立ち塞がるからな」

包囲を突破した俺は、シ水関を捨てそのまま虎牢関に向かった。

「……くそ」

胸にやりきれない思いを抱えながら……

第五十二話 激突！ 旅人VS恋姫（後書き）

作「というわけで、初戦はお前の勝利だ」

一「……………」

作「元気出せって、お前はお前のやれる事を精一杯やったんだ。それに、誰も死んでないだろ？」

一「……………そうだな、お前の言う通りだ」

作「そうそう、あまり思い詰めても何にもならないぞ」

一「まさかお前に慰められるとは……………何か変な物でも食べたのか？」

作「お、お前……………人がせつかく心配してやったのに！」

一「ははっ、すまない……………ありがとな」

作「お、おう」

一「次は虎牢関か……………総力戦だな」

作「安心しろ、またシリアス分は減らしてやるからな」

一「それは……………まあ、いいか」

第五十三話 予想外の言葉は思いの外強力（前書き）

やっとリアルが落ち着きました。

第五十三話 予想外の言葉は思いの外強力

華「むう・・・無事に虎牢関までたどり着けたが・・・秋月はまだ戻って来ないのか・・・」

霞「華雄、心配なんはわかるけど、少し落ち着いたらどうや」

華「わ、私は別に心配なぞしていない！ ヤツがしくじればそれだけ連合軍の到着が早まるのだからそれを懸念してだな・・・」

霞「はいはい。ま、そういう事にしといたるわ」

恋「大丈夫・・・一成強い・・・」

陳「呂布殿がこう言うっておられるのですから問題ないのです」

その時、見張りの兵が何かを発見し、叫んだ。

兵「虎牢関に接近する人物を確認！ あれは・・・秋月將軍です！
！」

ワアアアアアア！！！！

兵達は歓声をあげ、自分達の為に命をかけて敵を足止めした英雄を迎え入れた。

霞「・・・ほらな」

I N S I D E

虎牢関に辿り着いた俺に、兵の歓声があびせられた。

兵A「秋月將軍！ よくぞご無事で！！」

兵B「一体どんな手を使っただんですかい！」

兵C「アンタが味方で本当によかったぜ！」

兵D「抱いてくれー！！」

—「え？」

歓声に混じってありえない言葉が聞こえた気がしたが・・・流しておこつ。

霞「一成、よう無事に戻って来てくれたな」

—「霞・・・それに華雄、恋、陳宮」

恋「ケガは・・・ない？」

一「大丈夫。どこもケガしてないよ」

恋「ん・・・よかった」

華「ふん、てつきりやられたかと思っていたぞ」

一「ははっ、必ず戻るって約束したからな」

霞「あんな事言うとするけど、さっきまでずっとアンの事心配してたんやで」

華「ち、張遼！ そのような出鱈目を・・・！」

霞「ウチ、ホンマの事しか言うてへんも〜ん」

一「華雄・・・ありがとう、心配してくれて」

華「だ、だから違つと・・・」

陳「まったく、素直じゃないのです」

華「うう・・・うがああああ!!」

霞「のわッ!? 武器を振りまわすなアホ!!」

一「? 何で怒ってるんだ華雄？」

恋「……………（フルフル）」

—「恋にはわからないのか。じゃあ陳宮は？」

陳「ねねに聞かれても困るのです」

霞「ちょ！ のん気に話したらんで止めてえな！！」

S I D E O U T

連合軍 S I D E

シ水関を制圧した連合軍だったが、喜びの声は少なかった。

孫「まさか……一成が敵になるなんてね」

曹「おそらく虎牢関でも出て来るでしょうし、あの男を何とかしないと洛陽に辿り着く前にこっちが全滅させられるかもしれないわね」

劉「ご主人様……」

公「げ、元気出せ桃香！ きつと理由があるはずだ！」

袁術「むゝ、結局兄様とお話する事が出来なかったのじゃ」

張「そうですね。みなさんをブツ飛ばしたあとさっさと撤退しちやいましたしね。」

緊急で開かれた軍議で、一成について口を開く一同。そんな中、話しについて行けていない人物が一人。

袁紹「？ みなさん、どなたの事を話しておられるんですの？」

曹「本陣からでも見えたでしょ？ たった一人でこちらの兵を次々に倒していった男の事。」

簡単に説明する曹操。すると、袁紹はとたんに目の色を変えた。

袁紹「ちよ、ちよつと華琳さん！」

曹「何よ？」

袁紹「あなた『銀髪の君』とお知り合いなんですの！？」

曹「『銀髪の君』？ 一成も変な二つ名をもらったものね。」

袁紹「教えなさい華琳さん！ あのお方は何者なんですの！」

曹「……人に頼む態度じゃないでしょ。それより、私に聞くより劉備に聞いた方がいいんじゃない？ 何せ……一成は彼女達の

『ご主人様』なんですものね」

劉「そ、曹操さん!？」

袁紹「劉備さん! 教えてくださいませわよね?」

劉「うう、わかりましたあ〜」

.....

袁紹「秋月 一成様・・・ああ、何と凛々しいお名前! しかも、あのお方が噂に名高い天の御遣いだなんて・・・!」

曹「それで、一成の事を知ってどうするつもり?」

袁紹「あのお方に出会えたのはわたくしの天命に他なりません。袁家にお迎えし、ゆくゆくはわたくしの伴侶に・・・」

劉「だ、駄目です!!」

袁紹「何が駄目なんですの?」

劉「ご主人様は私達のご主人様なんです! 袁紹さんには渡せませ
ん!」

袁紹「何を言ってますの? あなたの所より、わたくしと一緒にな
って暮らす方が一成様にとって幸せに決まっていますわ」

曹「……それは聞き捨てならないわね」

袁紹「華琳さんも文句がありました?」

曹「あなたは一成の価値がわかっていないわ。彼の武、知、そして人を引き付ける力は私だけが扱いきれるのよ」

孫「扱うだなんて……まるで物みたいな言い方ね曹操」

曹「あなたは違うの孫策?」

孫「ええ。私は一成に惚れてるもの。天の御使いとしてでなく、あの強大な力にでもなく、彼の優しさにね」

曹「小霸王ともあろうものが、まるで生娘みたいな答えね」

孫「あら、小霸王である前に私は女ですもの」

公「(私達、軍議の為に集まったんだよな? 何だこの状況……)」

火花を散らす両者。だが、またしても意外な人物から意外な言葉が発せられた。

袁術「そちら……いかげんにせんか~~~~!!」

劉・曹・孫「……!!?」「」

袁紹「み、美羽さん・・・？」

袁術「こんな話をする為に軍議を開いたのではないであろう！ 敵は兄様だけではないのじゃぞー！」

袁術の言葉に静まる一同。

袁術「だいたい、そちらは思い違いをしておるぞ」

劉・曹・孫「」「」思い違い？」「」

袁術「うむ。兄様と結婚するのは・・・妾じゃ！」

劉・曹・孫・袁紹「」「」異議あり（ですわ）！！」「」

袁術「ぴいっ！？　ね、麗羽姉様まで・・・！」

再びヒートアップする一同。ちゃんとした軍議が行われたのはそれから数刻後の事だった・・・

連合軍SIDE　OUT

「」「・・・ん？」

霞「どしたん一成？」

一「いや・・・緊迫した状況のはずなのに、何かどうでもいい話が行われた気がする」

霞「？」

第五十三話 予想外の言葉は思いの外強力（後書き）

作「一ヶ月ぶりに更新したが・・・またふざけた話を書いてしまっ
た」

一「酷いな。更新を待っていた方々に申し訳ないと思わないのか？」

作「だ、大丈夫。この部分さえかければ後は・・・」

一「そうか。なら早めに更新するようにな」

作「どうかな、次は別の小説を更新するつもりだし」

一「そこは「うん」って言っとけよ!!」

第五十四話 敵を倒す事だけが勝利ではない(前書き)

「都合主義」という言葉がこんなに便利とは・・・

第五十四話 敵を倒す事だけが勝利ではない

俺が虎牢関に撤退して三日。連合軍は未だに姿を見せなかった。

華「・・・遅い」

霞「あんがい、諦めとったりしてな。一成一人にボコボコにされたわけやし・・・」

一「いや・・・来るさ、必ず」

陳「何にせよ、こちらとしては都合がいいのです。今の内に、各自隊の再編成をしっかりとやるのです」

恋「ん・・・わかった」

陳宮の指示で散っていく霞達。さて、俺はどうするかな・・・

霞「一成、ちょっと・・・」

手招きする霞に近づく。

一「どうしたんだ？」

霞「もしも・・・もしもの話やけど、ここが落ちたら・・・アンタに月と詠の事頼んでええか？」

一「え？」

霞「アンタなら二人を守っていく事くらい余裕やる？ 頼むわ・・・」

いつものひょうひょうとした態度ではなく、真剣に頼んで来る霞。

一「・・・わかった、その時は、命をかけて二人を守る」

霞「おおきに・・・」

一「もしも・・・の時だがな」

霞「もちろんや。ウチだって負ける気はさらさらないんやからな」

いつもの笑顔に戻り、隊の編成に向かう霞を見送りつつ、俺は兵のみんなの様子をうかがう事にした。

兵A「あ、秋月將軍！」

見覚えのある兵の声に、俺は安堵の笑みを浮かべた。

—「よかった、無事だったんだな」

兵A「はい！ 私以外もみんな無事です。さすがに無傷とはいきませんでしたが……」

—「いや、生きていてくれただけで充分だ……本当に、無事よかった」

兵A「將軍……」

兵B「俺達が生き残れたのは、將軍のおかげですよ」

—「俺の？」

兵C「『死なない程度に攻撃する』……まさか、あれほど効果があるとは思ってませんでしたぜ」

—「それはよかった」

兵D「何なんですかね……私、負ける気が全く起きないんです。こんな風を感じたの初めてです」

兵B「あ、俺もそれ思った！」

兵C「俺もだ」

兵A「絶対に生き残ろうぜ！ 董卓様の為……そして、俺達を大切に思ってくれている人達の為に……！」

兵「B・C・D」「応っ!!」「」

この戦いの勝利は、敵を倒す事じゃない。いかにして仲間を守りきるかだ。例え・・・虎牢関が落ちる事になっても。

それからさらに二日後・・・とうとう連合軍が虎牢関へと押し寄せて来た。

霞「さてと・・・先鋒はどこか？」

華「呂布よ、見えるか？」

恋「・・・(フルフル)」

華「ん？ お前ならあれくらいの距離でも見えるのでは？」

恋「先鋒・・・ぐちゃぐちゃ」

「え？」

目を凝らしてジッと見つめる。そこには・・・

桃「ご主人様~~~~!!」

白「ま、待て桃香！ やっぱりマズイって!!」

華「ちょっと劉備！ 何で後方支援のあなたが前に出てるのよ!」

雪「そう言うあなたも人の事は言えないでしょ曹操!」

美「兄様〜! 今会いに行くからの〜!!」

一直線に並びながらこちらへと猛進して来る桃香、白蓮、華琳、雪蓮、そして美羽の軍がいた。

—「おいおいおいおい!!!!」

そんな五つの軍に、俺は我も忘れてツッコんだ。

霞「のわ!? い、いきなり大声出さんといてや」

—「す、すまない・・・」

華「何だあの陣形は・・・滅茶苦茶にも程がある」

霞「確かに、あれならまだ華雄の方がマシやな」

華「そうだな・・・ってオイ!!」

陳「のん気にしゃべっているヒマは無いのです! 連合軍、近づい

て来ているのです!」

恋「・・・行く」

霞「わかつとるよ。華雄、今度は挑発にのつたらあかんで」

華「わかっている! 弓兵、構え!!」

華雄の指示で、弓兵達が一斉に弓を構える。

華「ツ射ええええええ!!!!」

シュババババババ!!

連合兵「ぎゃあああああああ!!!!」

陳「弓兵はこのまま射続けるのです!!」

「・・・よし」

俺は城壁に足をかけた。

恋「一成・・・?」

—「ちょっと足止めして来る。みんなも頃合いを見つけたら出て来てくれ」

華「お、おい待て秋月!!」

制止を振り切り、俺は城壁から飛び降りた。

ヒュウウウウウウ・・・ドガン!!

—「・・・痛い」

ハイロウ使えばよかった。

連合兵A「ひ、人が落ちて来たぞ!!」

連合兵B「あ、あれは・・・」

—「・・・どいてくれ」

バツ!!

俺の言葉に、一瞬で道を開ける連合兵達。うん、優しい人達だ。

一「桃香！ 白蓮！ 華琳！ 雪蓮！ 美羽！ 俺は……」
だあああああああ！！！！！！」

声を張り上げ、俺は全力で戦場を駆け出した……

S I D E O U T

連合軍 S I D E

袁紹「秋月様ですわ！！ ああ……なんと凛々しいお姿……」

文「れ、麗羽様？ まさか……」

袁紹「さあ！ お行きなさい！ 斗詩さん！ 猪々子さん！」

顔「や、やっぱり……」

張「お兄ちゃんの声なのだ！」

趙「自分から居場所を明かすとは……クク、面白い方だ」

関「桃香様！」

桃「うん！」

白「あゝもう！ 何で私まで〜〜！」

華「一成が動いた・・・あなた達、わかっているわね？」

夏侯「もちろんです！」

夏淵「秋月・・・そして、神速と名高い張遼の捕縛。お任せ下さい」

孫策「もう我慢出来ないわ！ 今度こそ私が戦うわよ〜！」

周「なつ！？ 許すわけないだろう〜！」

孫策「ふ〜んだ！ 勝手にやるもんね〜〜！」

張「今のは一成さんの声ですね〜」

袁術「今度は絶対に兄様とお話するのじゃ〜！」

張「わかってますよ〜。とりあえず、今は兵のみなさんにお任せしましよ〜！」

袁術「頼んだぞお主ら〜！ ただし・・・無理はしてはならんぞ？」

袁術兵「袁術様の為ならあああああああ〜！！〜！」

連合兵SIDE OUT

INSIDE

ー「オーバードライブー！」

連合兵「ぐわぁー!？」

立ち塞がる兵をなぎ倒し、ひたすらに突き進む。彼女達の狙いが俺なら、これでかく乱出来るはずだ。

?「でええええええええええい!!！」

ー「ッ！」

ブオン!

数瞬前に立っていた場所に振り下ろされた一撃……俺はゆっくり視線を向けた。

春「貴様から出て来るとはな秋月！」

—「春蘭か……」

春「もう、ごちゃごちゃ考えるのは止めだ！！ とりあえず、貴様
は私が叩きのめしてやる！！」

—「はは、春蘭らし……ッ!？」

春「ど、どどし……うわあ!？」

ドサ!!

俺は勢いよく春蘭を押し倒した。

春「な、ななな何をする秋月!？」

—「……危なかった」

春「え？」

目の前の地面に突き刺さる矢。俺が押し倒さなかったら間違ひなく
春蘭に直撃していた。

—「(……)……そうだ、確か原作でも彼女が射られるシーンがあっ

たな）」

これでまた原作から一つ逸れたが、ケガは負わない事が一番だし、別に問題は無いだろう。

春「お前・・・何故私を助けた？」

一「大切な人を傷付けさせるわけにはいかない」

春「なっ・・・／＼」

一「それじゃあな」

彼女を立ち上がらせ、俺は再び走り始めた。

曹兵「か、夏侯惇將軍？ どうされました？」

春「うう・・・うがあああああああ！・・・！」

曹兵「か、夏侯惇將軍、御乱心！・・・！！！」

一「・・・ん？」

周りの兵が初めて見る鎧を纏っている。という事はもしかして・・・

「突っ込み過ぎて本陣まで来てしまったか」

「お待ちになって！」

踵を返そうとする俺を、誰かが引き止める。

「ん？ キミは……」

「お初にお目にかかりますわ！ わたくしは袁本初！ この連合軍の総大将を務めさせて頂いております！！」

「ど、どうも……俺は秋月 一成……」

袁紹「存じておりますわ！」

「……何でだ？」

袁紹「ああ……近くで拝見すると益々凛々しく見えますわ……わたくし、あなた様とお会い出来た事を天に感謝いたします！！」

「は、はあ……？」

何だ？ 彼女こんな性格だったか？

袁紹「秋月様！ わたくし、回りくどい事は嫌いですの。ハッキリ
言わせていただきます、わたくしはあなたを袁家にお迎えしたの
です！！」

—「はい？」

袁紹「わたくしと夫婦になり、共に袁家を盛りたてていきましょう
！！」

えっと・・・どうなってるんだ？ 彼女は連合軍の総大将で、俺は
彼女の敵。それなのに、今彼女は俺に対して告白して来た・・・

—「・・・すまない」

とりあえず断る。すると、袁紹はこの世の終わりを迎えたかのような
表情を浮かべた。

袁紹「な、何故ですの！？」

—「あ、あのな・・・俺とキミは敵同士だぞ？ 普通、その相手か
らの告白を受け入れるわけないだろ？」

袁紹「そ、そうでした・・・わたくしとあなたは敵・・・ああ、
天よ！ どうしてこの様な残酷な仕打ちをわたくしになさるのです
か！！」

天を仰ぐ袁紹・・・その隙に、俺は彼女の前から逃げ出した。

—「彼女が袁紹・・・まさか、アレほどとは・・・」

原作で、白蓮が苦労していたのがよくわかった・・・

S I D E O U T

董卓軍 S I D E

董兵「報告！ 秋月将軍のかく乱により、戦場全体が混乱しています！！」

華「ああ・・・よく見えている」

霞「どんだけ滅茶苦茶しよるん・・・」

陳「ですが、今が好機です呂布殿！」

恋「・・・行く」

陳「御意なのです!! 呂布將軍が出撃するのです! 旗を上げるのです!!」

董兵「おおおおおおお!!」

華「私も出るぞ! 孫策め・・・叩き潰してやる!!」

霞「なら・・・ウチは曹操の相手でもしようかな」

こうして、恋が劉備軍、華雄が孫策軍、霞が曹操軍へと狙いを定め、一斉に出撃した・・・

董卓軍SIDE

連合軍SIDE

まずぶつかりあったのは、劉備軍と呂布軍だった。

関「この殺気・・・こやつが呂布か」

張「うわ・・・すっごく強そうなのだ」

趙「二人とも、わかっているな?」

関「武人としては府に落ちんが・・・軍師の朱里と雛里の命令だ。
呂布よ・・・我等三人の相手をしてもらうぞ」

呂「ん・・・来い」

孫策軍に近づくと一騎の馬。それに乗っているのは・・・

華「うおおおおおおお！！！！」

ドドドドドドドド！！！！

連合兵「ぬわああああああ！！！！」

華「はっはあ！！ 止めたければ止めてみるお！！！！」

？「じゃあ、私が止めてあげる」

華「ッ！ お前は・・・」

孫策「私を探していたんでしょ？ 一成の所へ向かいたいけど、せっかく戦ってくれる相手がいるんだし、ちゃんと応えないとね」

華「減らず口をおおおおおお！！！！」

曹操軍に接近する張遼軍。

張「さつてと・・・ウチの相手は・・・」

？「見つけたぞ張遼！！」

張「誰や？」

？「私は夏侯惇！ 張遼よ、我が主華琳様の為、大人しくお縄につけい！！」

張「いきなりなんやの？」

夏侯「華琳様はお前を欲している。大人しく下れば痛い目に遭わずにすむぞ？」

張「はっ！ お断りや。ウチの主は月だけやからな・・・」

夏侯「そうか。では・・・力づくで大人しくさせてやろう！！」

張「やってみいや！！！！」

それぞれの思惑でぶつかり合う各軍。決着の時は、刻一刻と迫っていた。

連合軍SIDE OUT

IN SIDE

—「門が開いている?」

という事は、霞達も出撃したという事か?

—「……マズイ!」

イレギュラーである俺の出現で、この戦いも大きく変わった。だが、本来の目的が失われていないとしたら……

—「霞が危ない!!」

俺は、全速力で曹操軍の元へ向かった。

—「霞……!」

数分後、辿り着いた俺の前で、霞は縛られていた。

霞「たはは・・・捕まっつてもうた」

—「待つてる！ 今助け・・・！」

霞「来たらアカン！！」

—「ッ！？」

霞「言つたやる一成！ 月と詠を守るつて！！」

—「だが！」

霞「ウチなら大丈夫や。けど、あの二人にはアンタしかおらんのや！ はよ行きい！！」

—「・・・すまない！」

夏惇「貴様等・・・私を無視して話しを進めるなああああ！！」

霞「嫌やわ惇ちゃん。見逃したつてえな」

夏惇「惇ちゃん言つな！！ それに、秋月も捕縛せよと華琳様の命令だ。逃がすわけにはいかん！！」

霞「・・・何て言つとる内にホラ」

夏惇「え・・・？ あ、こら！ 逃げるな秋月！！」

一瞬の隙をつき、俺は撤退した。霞の言う通り、原作ならこのまま彼女は華琳に仕える事になるので、無事な事は確実だ。だが・・・こうなる前に何とかしたかった。

一「（後悔は後だ！ 今は他のみんなを・・・）」

だが、戦場をいくら駆けまわっても華雄と恋の姿が見えず、仕方なしに、俺は虎牢関に下がった。

陳「秋月！ 無事だったんですね！」

一「陳宮！ 華雄と恋は!?!」

陳「華雄殿は・・・孫策軍と戦闘後、行方不明となったのです」

一「なっ!?!」

陳「呂布殿も敗走し、残った兵達はみな投降したのです。虎牢関は・・・落ちたのです」

一「・・・・・・・・」

怒りが湧いて来る・・・連合軍ではない。こんな結末を招いた俺自身に。

陳「呂布殿は洛陽にご自分の家族を迎えに行っているのです。ねねも・・・お供しようと思ってます」

「・・・そうか、なら、俺も月と詠を迎えに行かないとな」

陳「では急ぐのです」

陳宮と共に、俺は虎牢関から撤退した。

「」(すまない・・・みんな・・・)」

自責の念が絶え間なく押し寄せて来ていた・・・

第五十四話 敵を倒す事だけが勝利ではない（後書き）

作「次回辺りで反董卓連合編は終了だな」

一「……くそ」

作「落ち込むな。この戦いは月を守るのが目的だ。それに関していえばまだ負けたわけじゃない」

一「そうか……そうだな」

作「さて……ここから原作に沿わせるか、それとも、オリジナルに進むか……また考えないとな」

一「頼むから普通なの書いてくれ……」

第五十五話 時にはあえて約束を破る必要がある(前書き)

とりあえず、こんな感じになりました。

第五十五話 時にはあえて約束を破る必要がある

ハイロウを使ったおかげで、程なくして洛陽に辿り着いた。

陳「では、ねねは呂布殿の元へ向かうのです」

一「わかった……陳宮、無事だな」

陳「お前もなのです」

陳宮と別れ、急いで城に向かう。月と詠は玉座の間にいた。

月「一成さん……」

詠「アンタが戻って来たって事は……負けたのね」

一「……ああ、霞は捕まり、華雄は行方不明、恋と陳宮は一緒に脱出した」

月「そ、そんな……霞さんと華雄が……」

一「すまない……」

詠「ふ、ふん！ あの二人が簡単に死ぬわけないわ！ それよりボク達も逃げないと」

詠が月を励ますように声をあげる。そうだ、まだ終わっていない。俺はこの二人を何としても守りきらなければならない。

—「逃げる事は可能だが・・・それよりもっと可能性のある方法がある」

詠「その方法は？」

—「董卓と賈馱に死んでもらう」

詠「ッ！？ あ、アンタ・・・って、ああなるほど」

俺の言葉に驚愕する詠だったが、すぐに理解したようだ。この二人は顔を知られていない。死んだと噂を流し、別人として保護したといえは匿ってもらえるだろう。原作で一刀君が使っていた方法そのものだ。

詠「でも、この方法はどこかの諸侯が協力してくれないと成立しないわ。あてはあるの？」

—「ああ、劉備、曹操、孫策・・・このいずれかの軍ならきつと」

詠「そうね・・・その中からなら劉備軍が一番可能性があるわね。今一番名声を欲しているはずだもの」

彼女達なら名声関係無く匿ってくれそうだけだな。

わかった！ 私達の所においでよ！

ー「…………ふっ」

二つ返事で了承する桃香の姿を想像し、軽く吹き出す。

詠「どうかした？」

ー「何でもないよ」

その時、伝令の兵が息を切らせて玉座に間に入って来た。

兵「報告します！ 東に砂塵！ 連合軍が見えました！！」

詠「わかったわ。それじゃあ、兵には投降するように伝えなさい」

兵「はっ！」

月「……………」

詠「月……………」

不安げに顔を曇らす月。そんな彼女を気遣う詠も、やはり不安そうに顔をしかませている。

—「…………大丈夫」

月・詠「「え？」」

—「劉備軍なら必ず匿ってくれるはずだ。それに、万が一……もし万が一、断られたりしたら……その時は俺が命をかけて二人を守る。その先もずっとな……」

詠「ず、ずっとってアンタ……それって／＼」

月「へう……／＼」

頬を染める二人。不安は無くなったようだけど……どうかしたのだろうか？

すぐさま準備を整え城を出る。連合軍はすでに洛陽に入っていた。

—「よし、それじゃあ劉備を探して来るよ」

詠「気をつけなさいよ」

頷き、見つからないように街中を巡る。やがて、裏路地の方に見慣れた姿を発見した。

—「みんな」

桃「へ？」

振り向く桃香達。その顔が見る見るうちに驚きが変わる。

桃「ご、ご主人さ……！」

—「静かに頼む」

桃「……（コクコク）」

慌てて桃香の口を押さえ、大声を出さないように頼んだ。

—「まずはみんな、こんな形で再会する事になってしまったって本当にすまない。だが、俺にはどうしてもやらなければならない事があったんだ」

愛「そ、そうですねご主人様。どうしてあなたが董卓軍に？」

—「董卓が圧政を布いていたのは全くのデタラメ……といったら？」

愛「え？」

朱「なるほど・・・やはりそうでしたか」

一「やっぱり、朱里や雛里は気付いていたか」

雛「はい・・・ですが、確証がない以上、風評の問題で参加せざるを得なかったんです」

一「わかってるよ。みんななら必ず参加するだろうと思ってたさ。民達の為に発ちあがったキミ達ならな」

鈴「にはは、お兄ちゃんにはお見通しだったのだ」

星「それを知った主は、憶え無き罪を擦り付けられた董卓の為に戦った・・・という事ですか？」

一「その通りだ・・・俺は董卓と顔見知りでな、そんな事をする人物だとは思えなかった。それで確かめに洛陽に入れば、案の定だったというわけだ」

桃「そうだったんだ・・・董卓さん、悪い人じゃなかったんだ」

一「それで桃香、実は逃げていた民間人の子を二人保護してな。すまないがキミ達の所で匿ってあげてくれないか？」

桃「もちろんだよ！」

やはり彼女を頼ってよかった。俺は急いで月と詠を迎えに行った。

—「この二人だ」

月「こ、こんにちは・・・」

詠「・・・」

桃「可愛い〜」

星「ふむ・・・さすがですな主。保護の名目でこのような美少女二人を侍らすとは」

愛「なっ!?! ご主人様! どういう事ですか!?!」

—「星・・・頼むからそういった冗談はホントに止めてくれ」

星「クク・・・失礼」

朱「あの、お名前は?」

月「ゆ、月です・・・」

詠「詠よ」

鈴「にゃ? それって真名なのだ?」

月「そ、それは・・・」

—「それ以上聞かないであげてくれ」

朱「ご主人様・・・まさかこの二人は」

—「・・・・・・・・」

桃「？ どうしたの朱里ちゃん？」

朱「・・・・・・・・いえ、何でもありません」

朱里は気づいたようだ。それにも関わらず、何も言わない彼女に俺は心の中で感謝した。

—「さてと・・・それじゃあ、俺はここでお別れだな」

全員「え？」

—「やらなきゃいけない事があってな。それに・・・今の俺が桃香達の所へいたら危険だ」

愛「ど、どづい事ですか？」

—「この戦いの最中、俺とキミ達は敵だった。そんな俺達と一緒にいたら、通じていたと勘違いされる危険がある。・・・俺は目立ちすぎたからな」

桃「で、でも！ 黙ってれば・・・」

「それこそ、知られた時の反動がまずい。この戦いの熱が冷めるまで、俺はキミ達の元へ戻れない」

桃「そんな……」

雛「……けど、確かにご主人様のおっしゃる通りです。その結果、もし諸侯達に目をつけられたら……今の私達では抵抗すら出来ません」

「俺はみんなが大好きだ。だからこそ、俺の所為で危険な目には遭わせたくない。どんなに小さい芽でも、無視する事は出来ないんだ」

俺はみんなに背を向け歩き始めた。

桃「ま、待ってご主人様……！」

「約束する……次に再会した時、必ずみんなの元へ戻ると」

返事を聞かず、俺は再び城へ戻った。そして、董卓と賈馱は劉備軍によって討たれたと宣伝して回った。

「（すまない霞、約束を破ってしまつて……けど、今の俺と一緒にいるより、桃香達と一緒にいた方がずっと安全だからな。許してくれ）」

全てを終わらせた俺は、気付かれないように洛陽を後にしようとした……が

？「ふっふっふ……見つけたわよ一成」

—「ッ!？」

そんな俺の前に、雪蓮が現れた。

—「な、何で……」

雪「私の『勘』を甘くみないでよね」

—「まさか……勘だけで俺の居場所を突き止めたのか？」

雪「そうよ」

あっけらかんと言う雪蓮……どこまでデタラメなんだ。

雪「ねえ一成、逃げるくらいならウチに来ない？ 悪いようにはしないわよ」

—「駄目だ。俺がいたら……」

先程の理由を雪蓮に話す。だが、雪蓮は全く気にしていないように口を開く。

雪「大丈夫よ。そんなのバレやしないわ」

—「理由は？」

雪「勘よ」

—「……………」

雪「だから、ね？　一緒に行きましょう？」

—「し、しかしだな……………」

雪「隙あり」

ガシ！

—「なっ!？」

—瞬間の隙を突かれ、俺は雪蓮に捕まってしまった。

雪「これであなたは私の捕虜よ。捕虜をどうしようかと勝手にしよう

「？」

「ま、待ってくれ雪蓮！」

雪「待たないも〜ん」

ズルズルズル！

引き摺られた俺は、そのまま兵軍が駐屯している場所まで連れて行かれてしまった・・・

第五十五話 時にはあえて約束を破る必要がある（後書き）

作「へっへっへ・・・まだ桃香達の所へは戻らないぜ！」

一「ふざけるな！ いいかげん戻せ！」

作「だが断る。月達も無事に保護したし、次は雪蓮に関する重要なイベントの番だ。その為にも、多少強引でもお前を呉に送らなければならん」

一「イベント？」

作「忘れたのか？ お前は一人も死者を出してはいかんだぞ」

一「まさか・・・」

作「これから大陸は大きく動き出す！ お前も気合い入れろや！！」

第五十六話 厚意に甘えるのは悪い事ではない(前書き)

というわけで、再び県に向かいます。

第五十六話 厚意に甘えるのは悪い事ではない

雪「ただいま〜！」

冥「雪蓮！ また勝手に行動して！」

雪「ゴメンゴメン。お土産があるからそれで許してよ」

冥「土産？」

ズルズル

ー「……………」

全員「一成（さん）（秋月）！？」

ー「や、やあ……………」

全員の視線に晒される中、俺は片手を上げてあいさつした。

雪「どう？ 素敵なお土産でしょ？」

蓮「ほ、本物！？」

雪「本物よ〜。さっき洛陽で捕まえたの」

穩「あは、まるで動物みたいですな〜」

冥「どういづつもり雪蓮？」

雪「どういづつもりって・・・もちろん連れて帰るのよ」

一「冥琳！ キミからも言ってやってくれ！ 俺を抱き込むのは危険だと・・・！」

三度目の理由説明。だが・・・

雪「だ・か・らあ、あなたは捕虜よ。捕虜の扱いを他国にどういづつ言われる筋合いはないわ」

冥「まあ・・・確かにそうね」

祭「問題無かろう」

一「なん・・・だと・・・」

冥琳あたりは絶対反対するだろうと思っていたのに・・・どうしてこうなった。

小「いいじゃない一成！ これでまたシャオと一緒にいられるんだから！」

—「小蓮・・・」

蓮「呉の民達もあなたに会いたがっているわ。も、もちろん私もずっと会いたかった・・・／＼」

—「蓮華・・・」

雪「あなたに選択肢はないわよ。大人しく私達の所に来なさい」

・・・まったく、そんな風に言われたら断れなくなるじゃないか。

—「後悔しないな？」

雪「あら、私、後悔した事ないもの・・・」

—「わかった・・・キミ達に従うよ。俺が役立てる事があつたら何でも言ってくれ」

ここで誓う・・・もし、俺の所為で彼女達に害が生じたら、その時は俺の力の全てを以ってその害を排除してみせると。

—「（もう・・・華雄や霞の二の舞にはさせない!）」

明「またご一緒ですね！ よろしくお願ひしますー成さん!」

—「ああ、こちらこそ・・・」

思「少しでも不穏な動きを見せてみる・・・私が必ず斬ってやる」

—「その時は頼むよ思春」

思「・・・ふん」

雪「うんうん・・・っと、そういえば、あなたの他にもう一人捕虜がいるのよね」

—「え？」

雪「今連れて来るから」

そう言つてとある幕舎に引つ込む雪蓮。そして、数分後、一人の女性を連れて戻つて来た。

？「ええい！どこに連れて行くつもりだ！」

—「ッ！この声は・・・！」

雪「お待たせ。ほら、彼女が捕虜よ」

連れて来られた女性の姿に、俺は絶句した。なぜなら・・・

—「か、華雄!？」

華「秋月!？ 何故お前が孫策の陣に……!」

そこにいたのは、行方不明となっていたはずの華雄だったからだ。俺と同様に、彼女も信じられないといった表情で俺を見ていた。

—「華雄!！」

ギユ!!

全員「ッ!？」

—も二もなく、俺は彼女を抱き締めた。

華「あ、秋月!？ なななな何を……!？」

—「生きてた……生きていてくれたんだな華雄……」

華「……ああ、私はこの通り生きている。だからそんな顔をするな」

—「す、すまない……けど、嬉しくて……」

華「ふっ、仕方のないヤツだな・・・」

お互いに笑いあう。本当に・・・本当によかった。

雪「あ！手が滑っちゃった〜！」

ズドン！

華「うわっ!?!」

突然、雪蓮が華雄に向かって南海霸王を振り降ろした。回避した華雄の代わりに、地面が大きく抉れる。

雪「・・・チッ」

華「い、いきなり何をする孫策!?!」

雪「ごめんなさ〜い。手が滑っちゃって」

華「では今の舌打ちは何だ!」

雪「空耳よ」

ブオン！

華「くっ！」

冥「何をしてるの雪蓮！？」

雪「何だか急に体を動かしたくなってね〜。華雄、ちょっと付き合ってよ」

華「ならこの縄を今すぐ解け！」

雪「そんな事したら殺り難くなるじゃない」

華「言った！ 今殺るって言ったぞ！！」

雪「だから空耳だってば」

—「お、おい雪蓮・・・？」

雪「一成から抱き締めてもらえるなんて羨ましいわ・・・殺したくらい」

華「秋月い！ 責任とってお前が何とかしろお！！」

—「わ、わかった！」

蓮「姉様・・・」

雪「なぬに蓮華？」

蓮「お手伝いいたします」

—「なっ!? 蓮華!?!」

同じく剣を抜き、華雄に迫る蓮華。

亞「こ、これが『病む』という事なのですね・・・」

—「その知識は何処から!?!」

亞「えつと・・・この前読んだ書物で」

—「焼却処分してくれ!?!」

祭「はっはっは!?! たった一人戻っただけでこの騒ぎ・・・やはりお主が居ると退屈せんのお」

—「笑ってないで止めてくださいよ祭さん!?!」

小「無駄だよ一成・・・あなつた二人は誰にも止められないもん」

明「はうあ!?! お二人の眼から光が失われています!?!」

思「蓮華様! どうか正気にお戻りください!?!」

冥「秋月・・・今回の戦で少々尋ねたいことがあるのだが」

—「何でそんなに落ち着いてるんだ冥琳!？」

冥「どうせその内飽きるさ。それより、私は軍師としてお前に聞きたい事がある」

—「な、何だ？」

冥「連合軍の勝利に終わりはしたが、兵の損害はこちらの方が圧倒的に多かった。それにも関わらず、死者はほとんど無し・・・まるで、最初から殺す気など無かったかのような」

—「ああそれはな・・・」

実践した策を教える。すると、冥琳は眼鏡を光らせながら納得の表情を浮かべた。

冥「そのような策が・・・お前が考えたのか？」

—「素人の浅知恵だけだな」

冥「ほお・・・という事は、その策に見事嵌まった私達は素人以下だど?」

—「そ、そういうわけじゃなくてだな・・・」

冥「ふっ、言ってみただけだ。だが、これでお前の軍師としての可能性を見出せたな。これからは軍師としても働いてもらうぞ」

—「…………お手柔らかに」

冥「お前がここまですんなり受け入れられたのも、その策によるところが大きい。もっと自信を持って」

亞「普通、敵対していた人物がここまで好意的に受け入れられる事はありませんから」

亞「私が会話に加わる。けど、実際頑張っていたのは兵のみんなで、俺は勢いよく吹き飛ばしていたんだけどな……」

華「何をのん気に話しているんだお前はああああああ！！！！」

—「あ…………」

雪「はあっ！！」

蓮「せいっ！！」

華「ぬわああああああ！！！！」

それから数分後、落ち着いた雪蓮が改めて話をする。

雪「ねえ華雄、あなたもウチに来ない？」

華「はあ・・・はあ・・・たった今まで殺そうとしていた相手を勧誘するとは・・・」

雪「あら、ちよつとしたおふざけじゃない」

華「どこがだ！」

雪「それより、返事はどうかしら？」

華「断る。私の仕えるお方は董卓様ただお一人」

雪「なら、私はこのままあなたを斬るわよ？」

華「望む所だ。董卓様亡き今、この世に思い残す事は無い・・・」

一「・・・雪蓮、ちよつと華雄と話をさせてくれないか？」

雪「？ 別にいいけど・・・」

一「「すまない」

許可をもらい、華雄と顔を近付ける。

華「何だ秋月？（ヒソヒソ）」

一「華雄、月は生きている（ヒソヒソ）」

華「なつ！？ 董卓様が・・・！」

雪「？」

—「声を押さえてくれ（ヒソヒソ）」

華「す、すまん……（ヒソヒソ）」

—「月と詠はある人物に任せてある。俺が心から信頼している相手だ（ヒソヒソ）」

華「そうか……お前が言うなら間違いはあるまい（ヒソヒソ）」

—「だから華雄……月に再会するまで、キミは死んではいけない。いつか、必ず会える時が来るから……（ヒソヒソ）」

華「……」

雪「お話は終わったかしら？」

—「ああ」

雪「それじゃ、もう一度だけ聞くわよ……華雄、私の下に来ない？」

沈黙を守る華雄……だが、何かを確かめるように頷き、ゆっくりと口を開いた。

華「わかった……貴様に降る。我が戦斧、存分に振るわせても

らおう」

雪「決まりね。華雄・・・私達はあなたを歓迎するわ」

臣下の礼をとる華雄。まさかこんな展開になるとは思っていなかったが、彼女がこうして無事だったのだから、今は素直に喜ぼう。

祭「秋月、どうやって説き伏せたのじゃ？」

一「はは・・・秘密ですよ」

第五十六話 厚意に甘えるのは悪い事ではない(後書き)

作「まさかの華雄生存！ しかも呉に参加！！」

「ここまでで最大の原作改変だな。これからどうなる事やら・・・」

作「呉は将が少ないからな、これで少しは戦いやすくなるだろ」

「それはそうだが・・・」

作「細けえ事ぁいいんだよ！」

第五十七話 命令は空気を読んで出そう(前書き)

しばらくのほほんとした話が続きます。華雄の真名と、ネタを送って下さった方々、どうもありがとうございます。

第五十七話 命令は空気を読んで出そう

雪蓮に捕まり、華雄と共に呉へ連れられて二週間が経った。最初こそ戸惑っていた華雄だが、少しずつみんなと打ち解けているようだ。

そんなある日・・・中庭で日向ぼっこをしていた俺の元へ雪蓮がやって来たことから全てが始まった。

雪「やつほぐ、見つけたわよ一成」

一「やあ雪蓮。俺に何か用か？」

雪「街に行かない？」

一「わかった。俺でよければ付き合おう・・・」

蓮「あ、一成・・・」

蓮華がやって来た。

一「蓮華？ どうしたんだ？」

蓮「も、もしよかったら一緒にお茶でもどうかしら？」

小「一成〜！ シャオと遠乗りに行こうよ〜！」

小蓮が笑顔で駆け寄って来た。

雪「ちょっと、私が最初に頼んだのよ」

蓮「姉様は一成を振り回し過ぎです。昨日だって夜遅くまで月見酒に付き合わせていたじゃないですか」

小「ぶ〜！　そう言うお姉ちゃんだって人の事言えないじゃない」

火花を散らせる孫三姉妹・・・どうしてこうなった。

雪「このままじゃ埒があかないわね。こうなったら・・・」

一・蓮・小「？」

何かを閃いた様子の雪蓮に、俺は若干の不安を抱いた。

・・・

雪「『第一回！　一成争奪ドキドキくじ引き大会』〜〜〜」

俺達だけでなく、臣下全員が玉座の間に集められ、雪蓮の言葉に一齐に首を傾げた。

冥「はあ・・・今度は何を思いついたの雪蓮？」

雪「いい質問ね冥琳。みんな、久しぶりに一成と再会して募る話がたくさんあるでしょうけど、この二週間、ほとんど時間がとれなかったと思うの」

蓮「そうですね・・・主に姉様の所為で」

雪「うつ・・・と、とにかく！ その問題を解決する為の策がこれよ！ くじを引いて、当たりを引いた人が一成と過ごす・・・いい考えでしょ？」

華「何故私まで・・・」

雪「あら、華雄だって一成との時間が欲しいって言ってたじゃない」

華「な、何を言っている！？ 私はそのような事・・・！」

雪「言ってたわよ。この前、一緒にお酒を飲んだ時に、べろべろに酔いながら「秋月い！ 私に付き合ってくれ〜〜！！」って」

華「ッ！？」

雪「話を戻すわね。当たりを引けばそこで終わりだけど・・・それ

ただだと面白くないじゃない？　そこで、当たり以外のくじに適当な命令を書いて、それを引いた人がその命令を実行するってのはどう？」

祭「それは何を命令してもよいのか？」

雪「ええ、実行可能ならどんな命令でもいいわ」

穩「ふふ、面白そうですね」

雪「紙を用意してるから、みんな一枚ずつ取ってちょうだい。書いたらこの箱に入れてね」

というわけで、急に始まってしまったくじ引き大会。箱の中に当たりと、それぞれが命令を書いた紙が入られる。俺達十一人に対し、当たりが一枚、そして命令の紙が十枚。俺は命令を書かず引くのみとなった。

雪「まずは冥琳からね」

冥「早く終わらせて仕事に戻らせてもらおうよ」

冥琳が箱に手を入れ、一枚の紙を取り出した。そこに書かれていたのは……

『語尾に「にゃあ」をつける』

冥「な、何だこれは!？」

小「あ、それシャオが書いたやつだ」

雪「あははは！ 最初からいいもの引いたわね冥琳！」

冥「こんな真似出来るわけないだろう！」

雪「あら、周公謹ともあるつものが、決まり事を守らないなんて恥知らずな事はしないわよねえ？」

冥「ぐっ……！」

雪「じゅゅ……。」

冥「……こ、これでいいのか……にゃあ／＼」

冥琳は顔を真っ赤にさせつつ、命令を実行した。

祭「聞いたか皆の者！ あの冥琳が顔を真っ赤にさせつつ」にゃあ「じゃとー！」

明「はう！ 冥琳様がお猫様になってしまいました！」

思「（わ、私じゃなくてよかった……）」

雪「だ、駄目……可笑し過ぎてお腹痛い……」

冥「う、うるさい……にやあ!」

怒りながらも命令を守る冥琳……さすがだな。

雪・祭「あははははは!」

あの二人はまだ戻って来なさそうなので、先に他のみんなに引いてもらおう。

亞「で、では……いきます」

二番手の亞莎が、ゆっくりと箱から紙を取り出す。

『手合わせ』

華「おお、それは私が書いたやつだな」

亞「ええ!」

華「しかし……お前が相手ではな。仕方ない、この命令は無しだ」

亞「あ、ありがとうございます・・・」

華「では、次は私が引こう」

そう言っつて華雄が取り出したのは・・・

『書庫の整理を手伝ってください』

穩「ああ、それは私のですね〜」

華雄以外「ツ!?!」

華「整理などした事ないぞ」

穩「大丈夫です〜。私がみっちり教えて差し上げますから〜」

華「そうか。それなら役に立てそうだな」

雪「華雄・・・あなたの事は忘れないわ」

華「?」

小「次はシャオだね!」

『酒を買って来い』

祭「おお、それは儂のじゃ。頼みましたぞ尚香殿」

小「うん……なんか普通の命令でつまらないな」

祭「儂も引くかの」

『禁酒』

祭「なん……じゃと……」

冥「それは私が書きましたにゃあ」

祭「冥琳！ お前、儂を殺す気か！？」

冥「酒など飲まなくても人は死にませんにゃあ。というわけで小蓮様、先程の命令は実行しなくてよろしいですにゃあ」

祭「ま、待ってくれ冥琳！ せめて一瓶だけでも……」

冥「黄蓋殿……命令には従って頂きますにゃあ。そう……私のようににゃあ」

もはや躊躇いなどまったく見せずに「にゃあ」をつける冥琳……腹を括った人間ほど恐ろしいものはない。

蓮「つ、次は私ね・・・」

『ぜひお猫様教にご入信ください!』

明「あ! 蓮華様がお引きになられたのですね!」

蓮「明命・・・これはあなたが?」

明「はい! 一緒にお猫様を崇め、愛でましょー!」

蓮「(こ、これは命令なのかしら?)」

穩「では、次は私ですね〜」

『胡麻団子の美味しいお店を教えてください』

亞「あ・・・それは私です」

穩「亞莎ちゃん、こんなの普通に言ってくればいくらでも教えますよ〜?」

亞「す、すみません・・・どうしても思いつかなくて」

「」ははっ、亞莎らしいな

亞「あ、あう・・・/」

明「私も引きますね」

『新技の特訓に付き合っで欲しい』

思「それは私だ」

明「思春さん？」

思「前回の戦いで、私は自分の無力さを痛い程味わった。蓮華様をお守りする為、私はもっと強くならなければならぬ」

明「さすが思春さんです！私でよければいくらでもお付き合いしますよ！」

思「すまない・・・なにぶん特訓中の技は手加減が出来ないからな。お前が引いてくれて助かった」

明「え・・・」

思「・・・死ぬなよ」

明「はうあ!？」

一「次は俺だな・・・」

『侍女の格好で一日過しせ』

—「なっ!?!?」

雪「あは! ドンピシャね! それ書いたの私よ」

—「ドンピシャって……最初から俺狙いかよ!?!?」

雪「服は用意してあるから向こうで着替えて来て」

冥「秋月……まさか逃げるつもりはあるまいにゃあ?」

—「くっ……わかってる。キミがそこまでしているのに、この程度で逃げ出すわけにはいかない」

侍女服を受け取り、物陰で着替えを済ました。

雪「着替えたかしら?」

—「……ああ」

雪「それじゃあ、出て来てちょうだい」

笑いたければ笑え……覚悟を決め、俺はゆっくりとみんなの前に歩み出た。

全員「え……」

「ど、どうした……?」

何故か固まる一同を怪訝に思いつつ尋ねる。

蓮「か、一成……よね?」

小「すごい! 服を着替えるだけでこんなに雰囲気変わるんだ〜!」

祭「まさかこれほどのものになるとは……」

明「お綺麗ですよ一成さん!」

穩「あは、本当に女の人みたいですね〜」

亞「よ、よくお似合いです……」

思「ふ、ふん……男のくせに女の服など着こなすとは、変なヤツだ……」

冥「くく……今日だけといわず、これからずっとその姿で過ごしてみるかじゃあ?」

華「お前、こいついった才能でもあるのか?」

雪「凄いわ一成! やっぱり私の目に狂いはなかったのね!」

絶賛の嵐だった・・・

—「何なんだよこの空気は！？ 何で誰も笑わないんだよ！？ 頼むから笑ってくれよ！ 似合ってるとか言われても嬉しくないよ！」

雪「もう、女の子がそんなしゃべり方したら駄目でしょ？」

—「俺は男だ！」

雪「こんな可愛い娘が男なわけない！！」

—「ええい！ 話を通じやしない！！ 思春！ 次はキミだ！ 早く引いてくれ！」

思「わ、わかった」

こんな大会さつさと終わらせてやる。そう思い、思春を急かす。そして、彼女が引いたのは・・・

思「あ、当たった・・・」

全員「え！？」

思「あ、当たってしまいました蓮華様・・・」

思春の引いた紙には、大きな字で『当たり』としっかり書かれていた。

雪「おめでとう思春。これで一成と過ごす権利はあなたの物よ」

思「……………」

祭「どうしたのじゃ思春？」

思「せっかくですが雪蓮様……私はこの権利を蓮華様にお譲りします」

そう言って、思春は当たりの書かれた紙を蓮華に差し出した。

蓮「わ、私に……？」

思「私は別に秋月の事などどうでもいいのです。ですから蓮華様、どうぞお受け取りください」

雪「そうね。得たものをどうしようとその人の自由だし。受け取っちゃいなさい蓮華」

蓮「思春……ありがとう」

思「お喜びになって頂けたのなら幸いです」

こうして、全員を巻き込んだくじ引き大会は思春の勝利で幕を閉じた……はずだった。

雪「それにしても……私が引く前に当たりが出ちゃうなんてね」

亞「そういえば、あと一枚残ってますね」

冥「引きなさい雪蓮……自分だけ何もしないなんて許さないにやあ」

—「ああ、冥琳の言う通りだ」

明「な、何でしょう……お二人のあの鬼気迫る雰囲気は……」

雪「はいはい、わかってるわよ（あとは蓮華の書いたヤツだけだし、あの娘ならそこまで酷い命令は……）」

『仕事しろ』

雪「な、何よこれえ!?!」

—「へえ……これはいい命令だな」

雪「れ、蓮華！ これ書いたのあなたよね!?!」

蓮「は、はい。ですが・・・亞莎と同じく、私も思いつかなくて、参考までに冥琳に意見をもらったんです」

雪「という事は・・・これは冥琳が!？」

冥「あなたが引く事を願っていたにゃあ・・・さあ、すぐにとりかかってもらうにゃあ」

雪「む、無効よ! 一人一枚が決まりなのに!」

冥「秋月・・・」

—「任せる」

ガシッ!

俺は雪蓮の腕をしっかり掴んだ。

雪「は、離してよ一成!」

—「あの時、そう言った俺を離さなかったのは・・・キミだろうか?」

雪「うっ・・・!」

冥「これでこの騒ぎも終わりにゃあ。他の者も下がっていいにゃあ」

亞「わ、わかりました」

穩「では華雄さん、書庫に参りましょうか」

華「うむ、案内を頼む」

思「明命、さっそくつきあってもらっていいだろうか？」

明「は、はい。死なないように頑張ります」

それぞれが散っていく中、俺と冥琳は雪蓮を引き連れ彼女の部屋に向かった。

雪「ど、どうしてこうなるのよ~~~~!!!!」

その日、中庭と書庫から明命と華雄の悲鳴が響き渡り、雪蓮は部屋から出て来なかった。

華「う、うわあああああああ~~~~!!!!」

明「はうあああああああ~~~~!!!!」

「……こんな恐ろしい企画……二度と開かせんぞ」

第五十七話 命令は空気を読んで出そう（後書き）

作「むう・・・今回は冥琳の一人勝ちだったな」

一「にやあって・・・こんな機会でもなければ一生聞く事もなかっただろうな」

作「そういうお前だって、新しく女装スキルが身に付いたじゃないか」

一「黙れ！ その話題を出すな！！」

作「街に出て一騒ぎ起こすのもいいかな・・・」謎の美女出現！「みたいな」

一「そんなもん書いたら今度こそ貴様を殺してやる！！！」

第五十八話 勤労は必ず為になる（前書き）

まずい・・・雪蓮のイベントの前に美羽を何とかしないと。

第五十八話 勤労は必ず為になる

―「今日も賑わってるな」

街中を歩く俺の耳に、店の持ち主たちの威勢の良い声が聞こえて来る。

店主A「へいらっしやい！　ウチの肉まんは絶品だよ！！」

店主B「その奥さん！　ちょっと見て行きなよ！！」

店主C「いいモン仕入れたよ！　ぜひ買ってってくれ！！」

その声を聞きつつ、俺はいつもの飲食店に向かった。

―「こんにちは」

店主「むう……どうすれば……」

店主の男性にあいさつするが、彼は俺に気付いた様子なく頭を抱えていた。

―「どうかしたんですか？」

店主「え・・・？ おお！ 御遣い様！ いつの間に！？」

一「今さっきです。何やら考え事に没頭していて気付かなかったようですけど」

店主「も、申し訳ありません！ 御遣い様に対してなんと失礼な事を・・・」

一「そんなの気にしないでくださいよ。それより、どうかしたんですか？」

店主「はい・・・実は、女房が腰を傷めちまって店に出る事が出来なくなつちまつたんです。ウチは私と女房の二人でやってますから、あいつがいないと営業が出来ないんです・・・」

一「奥さんは大丈夫なんですか？」

店主「お医者様の言う事にゃあ、一、二、三日安静にすれば大丈夫だって」

一「そうですか。大事なくてよかったです」

店主「ありがとうございます。けど・・・その間どうすれば・・・」

一「よければ、俺が手伝いましょうか？」

店主「え！？」

俺の提案に目を見開く店主さん。

—「接客ぐらいなら俺にも出来ると思いますし、他にも役立てる事があれば」

店主「そ、そんな恐れ多い!! 御遣い様にこのような廃れた店の手伝いなど……!」

—「困った時はお互い様ですよ。それに、以前他の店も手伝った事がありますから」

店主「そ、そうなんですか?」

—「はい」

再び考え込む店主さん……だが、数秒後、決心したように口を開いた。

店主「……御遣い様、お願いしてよろしいでしょうか?」

—「任せてください」

店主「で、では、早速簡単にやり方をお教えしますので……」

店主さんから接客時の決まりを聞く。あとは開店を待つだけだった。

店主「今日はよろしくお願い致します」

「そんな畏まらないくださいよ。今の俺はただの従業員ですから」

店主「そ、そういうわけにはいきませんよ」

「（これじゃあ逆に迷惑かけそうだな・・・）」

そんな事を考えていると、一組目の客がやって来た。

女性A「え、こんな店に入るの？」

女性B「いいじゃない。案外美味しいかもしれないし」

二人組の女性だった。先程教えてもらったやり方を思い出しつつ、俺は二人に近づいた。

「いらっしやいませ」

女性A・B「え・・・？」

二人が俺の顔を見るなり固まってしまった。

—「どうしました?」

女性A「み、御遣い様!？」

女性B「どうしてこんなお店に!？」

—「手伝いです。人数はお二人でよろしいですか?」

女性A「そ、そうです・・・」

—「では、お席にご案内しますね」

適当な席に案内し、椅子を引く。

—「ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

女性B「は、はい・・・」

—「失礼します」

礼をしつつ、俺は厨房へ引っ込んだ。

—「あんな感じでよかったですか?」

店主「はい! 完璧です!」

— 「ありがとうございます」

店主「しかし……ずいぶん慣れた様子でしたけど」

— 「何回か経験した事がありました」

女性A「す、すみませ〜ん！」

— 「行って来ますね」

注文票を手に、再び席に向かった。

— 「どうされました？」

女性B「ちゅ、注文したいんですけど」

— 「はい、かしこまりました」

女性A「えっと……回鍋肉一つください……」

女性B「私は青椒肉絲で……」

— 「回鍋肉と青椒肉絲を一つずつですね。少々お待ち下さい」

厨房へ向かい、注文を伝える。

女性A・B「はう・・・／＼」

「ん？ どうしました？ 顔が赤いですけど？」

女性B「な、何でもありません！ ちょっと暑くなってきちちゃって！
」

「そうですね。では、ごゆっくりどうぞ・・・」

いつまでも話しかけては邪魔だろうと思い、俺はその場を後にした。

女性A「（ああ・・・やっぱり御遣い様って素敵）」

女性B「（こんな間近で見られるなんて・・・幸せ）」

食事を済ませた二人は、満足げな表情で店を出て行った。

「ふう・・・何とかかなりましたね」

店主「御遣い様のおかげです。本当にありがとうございました」

「はは、まだ営業時間は終わってませんよ」

店主「そうですね・・・よし！ 私も気合を入れるぞ！！」

男「あゝ、腹減ったゝゝ」

「いらつしやいませ。一名様ですか？」

男「み、御遣い様!？」

S I D E O U T

蓮華 S I D E

蓮「何かしらこの行列・・・」

今日の仕事を早めに終わらせた私は、思春と共に気分転換に街に出た。すると、ある一軒のお店から凄い行列が並んでいるのを見つけた。

蓮「しかも女性ばかり・・・何かあったのかしら？」

思「見て来ましようか蓮華様？」

蓮「ううん、私も行くわ」

店の前まで歩き、中を覗き込む。そこには・・・

—「お待たせしました。杏仁豆腐です」

蓮「か、一成!？」

両手に皿を持ち、店内を走り回っている一成の姿があった。

—「やあ蓮華、思春、いらっしやい」

蓮「な、何をしているの一成?」

—「人手が足りないから手伝っているんだ」

蓮「そ、そうなの?」

—「ああ。ついさっきまではヒマだったんだが、今じゃすっかり大忙しだよ」

なるほど・・・だから女性ばかり並んでいたのね。

女性A「すみません御遣い様! 注文いいですか!」

女性B「こっちもお願いします御遣い様!」

—「ただいま参ります!・・・とうわけで蓮華、もう少し話したいけど、俺は仕事に戻るよ」

蓮「え、ええ・・・頑張つて」

注文を取りに向かう一成を見送り、私は店から離れた。

思「まったく・・・あの男の考えはよくわからん」

蓮「・・・」

思「？ どうされました蓮華様？」

蓮「ねえ思春。少しお腹が空かない？」

思「・・・はい？」

蓮「お店も見つけたし、ここでお昼を食べましょうよ」

思「し、しかし、この店は蓮華様に相応しくないと思つのですが・・・」

蓮「た、たまにはこんな所もいいじゃない！ ほら、並びましょうよー！」

思「ぎ、御意・・・」

そう、こういったお店の方が案外美味しい料理を出すかもしれない。決して、一成にあんな風に接客されたいから決めたわけでは断じて

ない！

蓮「(は、早く一成に・・・じゃなくて！ 料理を食べたいわね)」

蓮華 SIDE OUT

IN SIDE

「「ありがとうございます」

最後の客を見送り、俺はホツと息を吐いた。あれから蓮華と思春もここで食事していったが・・・蓮華もこういった店が好きなのだろうか？

店主「お疲れさまでした御遣い様。本当に助かりましたよ」

「「凄い人でしたね。あんなに行列になるなんて」

店主「はい。おかげで三日分の材料が全て切れてしまいました。これじゃあ明日、明後日は休みにしなければなりませんね」

「「じゃあ、次に開く時は奥さんも一緒ですね」

店主「ははっ、そうですね。逆に助かりましたよ」

グウ~~~~~!

「あ・・・」

店主「そういえば、御遣い様には何もお出し出来ませんでしたね・・・よろしければ今からお作りしましょうか？」

「え？ でも、材料は・・・」

店主「実は・・・一食分だけ残ってるんです。勿体無いですし、お礼というには物足りないかもしれませんが・・・」

「ぜひお願いします」

店主「お任せ下さい！」

数分後、店主さんが作ってくれた料理は最高の美味さだった。やはり、働いた後のご飯は美味しい。

「（予想外の出来事だったが・・・やってよかったな）」

こうして、俺の勤労の一日は幕を閉じた・・・

それから五日後、再び街に出た俺はもう一度店に向かった。

「こんにちは」

店主「むう……どうすれば……」

奥さん「どうしましょうかねえ……」

すると、五日前とまったく同じ格好で悩んでいる店主さんと奥さんがいた。

「また何かあったんですか？」

店主「え……？ おお！ 御遣い様！ いつの間に!？」

「今さっきです……って、この前とまったく同じ会話をしているような……」

奥さん「ああ、御遣い様！ このたびはお世話になりました！」

「いえ、お気になさらずに。それで……どうしたんですか？」

店主「じ、実は……女房も回復して、二日前から店を再会したんですが……女性客がぱったり来なくなってしまって」

—「え？ あの時はあんなに並んでたのにですか？」

店主「はい……」

女性A「あ！ 御遣い様よ！」

店の前を歩いていたら女性達が俺を見て立ち止まる。

女性B「あの！ 今日はお店に出られるんですか!？」

—「え？ い、いや、俺はあの時だけの手伝いで……」

店主「そ、そうです！ 今日御遣い様がまた店に出られます！」

—「なっ!？」

女性A「本当に!？ じゃあ私、今日はここで昼食べるわ！」

女性B「私も！」

そう言って、二人の女性は足取り軽く去って行った。

—「あの……」

店主「お願いします御遣い様!! どうか今日も店に出てください
!! お礼はいくらでも致しますから!!」

奥さん「お願いします！　きっと、あの人達の目当ては料理じゃなくて御遣い様です！　ですからどうか！！」

「「で、ですが・・・」

店主・奥さん「「お願いします！！」」

「「・・・わかりました」

必死で頭を下げる二人を前に・・・断れるはずもなかった。

「「（どうしてこうなった・・・）」

女性「御遣い様あ！　注文お願いしま〜す！！」

第五十八話 勤労は必ず為になる（後書き）

作「軽はずみな行動はとんでもない結果を引き起こす・・・勉強になっただろ？」

一「ああ・・・よくわかったよ」

作「今回は二次元最高様のアイディアを使わせて頂いた。ちなみに、前回は永遠の翼様からだ。どうもありがとうございます！」

一「そうだな、この場で改めてお礼を言わなければ」

作「他にも、斬滅のザン&食べられる野草様からや、さまよう人様からもご意見を頂いたぞ。おかげで書きたい話がたくさん出来てしまった」

一「それはいいが・・・その前に美羽の事を何とかしないと」

作「それなんだよなあ・・・けど、実際あその場面ほとんど憶えてないし、いつそ終わった後の話から書こうかな」

一「それは最後の手段だな」

作「せっかくいい子になったんだから、何とか残そうとは思ってるんだが・・・」

一「いざとなったら俺が美羽と七乃さんを守る」

作「ひゅー！ カッコいいぞ一成！」

「…………そして貴様をボコる」

作「話繋がってねえ!!!」

第五十九話 究極のクールビズ・・・それは裸である(前書き)

思い切って端折ってみました。

第五十九話 究極のクールビズ・・・それは裸である

美「兄様~~~~!!」

大きな瓶を持った美羽が俺の元へ駆け寄って来る。その後ろからは七乃さんがゆっくりとついて来ている。

今俺がいるのは呉の城の中庭だ。にも関わらず、何故この二人がいるのか・・・それは先日のお話に遡る。

・・・

・・・

・・・

雪「ねえ一成・・・ちょっと話があるんだけど」

その日、俺は雪蓮に呼び出された。

—「何だ？」

雪「知ってるかしら？ 袁紹が公孫贄を滅ぼした話？」

—「……………ああ」

ついに時代が動き始めた。これから群雄割拠の時代がやって来る。袁紹の白蓮への侵攻はその始まりだ。

—「（大丈夫だ……白蓮は必ず生きている）」

雪「どうかしたの？」

—「いや、何でもないよ。それで、その話がどうかしたのか？」

雪「これから戦乱の世がやって来る……私達もいつまでも立ち止まっているわけにはいかないわ。そろそろ袁術ちゃんから独立して、呉の土地を取り戻そうと思うの」

—「……………そうか」

雪「あら、あなたは賛成してくれないの？」

—「そ、そういうわけではないが……」

雪「わかってる。袁術ちゃんの事が気になってるんでしょ？」

—「……………ああ」

俺を兄と慕ってくれている少女・・・そんな彼女を俺は・・・

雪「私はあの娘が嫌い。今まで好き勝手やって来たあの娘を、私は決して許さない」

—「……………」

雪「…………と、以前の私なら思っていたでしょうね」

—「え？」

ハッと顔を上げる。

雪「今のあの娘は以前とはまるで別人よ。領主として、民の事を考えて政を執り行っているし、私達への態度も大きく変わったわ。この前なんて、会いに行ったらいきなり「孫策・・・今までのすまんかったの」・・・なんて言われてさ、私呆然としちゃったわよ」

—「美羽が……………」

…………のう兄様、妾もその王の様になれるかの？

—「…………そうか、キミなりに、自分に出来る事を精一杯やっていたんだな」

雪「一成？」

一「ん・・・ああ、話を続けてくれ」

雪「なんかさ、その言葉を聞いてからあの娘に対する怒りとか憎しみとかがスーッと消えちゃってね、このまま仲良くやるのもいいかな〜とか思ったりしてるの」

一「だが、それでは・・・」

雪「うん。悪いけど、私達の悲願を果たすためにはどうしてもあの娘に領主から降りてもらわないといけない・・・力づくでもね」

このままいけば原作通りの流れで、美羽と七乃さんは雪蓮達の前から消える事を条件に命は助けてもらえるだろう。しかし、それではあまりに不憫だ。

一「・・・なあ、雪蓮」

雪「何かしら？」

一「俺に・・・美羽を説得する時間をくれないか？」

雪「説得？」

一「うまくいけば無駄な血を流さなくて済む。それは雪蓮にとって
も悪い事ではないだろ？」

雪「それは・・・そうね」

—「キミ達に迷惑はかけない。だから頼む・・・」

全身全霊を込めて頭を下げる。こんな事を言える立場ではないが、それでも俺に出来る事は何でもやってみせる。

雪「・・・はあ、あなたってホント甘いわね。いつか後ろから刺されちゃっわよ?」

—「後悔するよりマシだ」

雪「けど・・・そんなあなただからこそ、みんな変わったのよ。袁術ちゃんも・・・そして、私も・・・」

—「え?」

雪「何でもないわ。それじゃあ一成、今からちゃちゃっと説得して来てよ」

—「許してくれるのか?」

雪「どうせ止めても行くんですけど?」

—「う・・・」

雪「あはは! やっぱり凶星ね! けど、失敗したらその時は覚悟

しておいてよ？」

「ああ、その時はキミ達と一緒に戦うよ」

雪「ならよろしい」

許可をもらった俺は、すぐさま美羽の城へ向かい、説得を試みた。もちろん、簡単に済むとは思っていなかったのだが……

美「わかったのじゃ。妾は領主を辞める」

「え!？」

なんと、美羽は二つ返事で説得を受け入れてくれたのだ。

美「兄様に言われ、妾なりに一生懸命務めを果たそうとしたが……やはり妾には無理じゃった。兄様の話してくれた王のようにはなれなかった」

「そんな事はない。現に民達はキミの事を慕って……」

美「うむ、本当にありがたい事じゃ。けど、妾の力ではこれ以上民達を幸せにしてやる事が出来そうにない」

「……」

美「じゃから、もういいのじゃ・・・」

寂しそうな表情を浮かべる美羽。本当は自分の手で民達を幸せにしてあげたかったのだろう。

一「七乃さんはいいんですか？」

七「はい。私は美羽様の決定に従います」

一「そうですか」

美「それに、領主を辞めれば、兄様といつでもお話する事が出来るからの！ 妾としてはそつちの方がずっといいのじゃー!!」

一「美羽・・・」

美「えへへ」

一「ありがとう二人とも・・・」

・・・

・・・

・・・

こうして、美羽は領主を降り、雪蓮達は戦わずして独立を果たした。そして、美羽と七乃さんは雪蓮の心配りによって呉に迎え入れられた。

当初、蓮華や他の臣下達からは不満が出るかと思っただが、どうやらみんな雪蓮と同じ気持ちだったらしく、二人は好意的に受け入れられた。

—「俺の介入によって二人の運命は大きく変わった。また守るものが増えてしまったが・・・むしろ望むところだ」

美「兄様！ 珍しい蜂蜜水を手に入れたぞ！ 一緒に堪能するのじゃ！」

ズル！

美「ひゃう！？」

七「お嬢様！？」

—「え・・・？」

何かに躓き、転倒する美羽。それに伴い、彼女が持っていた瓶が放

物線を描きながらゆっくりと俺の元へ飛んで来て……

バシャアアアアアン!!

俺の頭の上から盛大にぶちまけられた。濃厚な蜂蜜の匂いが辺りに漂う。

美「ぴいつ!? 兄様が蜂蜜まみれに!？」

七「あらあら、せつかくの蜂蜜水が勿体無いですね〜」

一「そつちですか七乃さん……」

上着はおろか、中のシャツまで染み込んでいる。これは洗わないと駄目だな。

美「兄様……ごめんなさいなのじゃ……」

一「いや、それより美羽にケガが無くてよかった」

シユンとする美羽に気にしないように言い、俺は服を脱ぎ、上半身裸になった。

美「七」「え……」

一「ふう……ん？ どうしたんだ二人とも？」

何故か固まる二人。しかも顔が若干赤い。

美「な、何をしておるのじゃ兄様！？」

一「何って……洗濯しようと思ったから脱いだんだが」

七「じよ、女性の前でいきなりそんな格好しないでくださいよ！」

一「す、すみません……」

美「……し、しかし、凄い体じゃな兄様」

七「そ、そうですね。細身の割には筋肉がしっかりついてますし、さすが男性ですね」

一「ははっ、ありがとうございます。とりあえず、どこかから水をもらって来るんで、俺は失礼するよ」

美「わ、わかったのじゃ」

七「お氣をつけて」

氣をつける？ 何をだ？

美「（や、やはり兄様は格好いいのお／＼）」

七「（私ですら見惚れてしまったんですから・・・孫策さんあたりは絶対・・・（汗）」

・・・

一「さて・・・とりあえず厨房で水を・・・」

ドサ!!

一「ん？」

亞「あ・・・ああ・・・」

落下音に振り向くと、亞莎が尋常じゃないくらい顔を真っ赤にさせて俺を見ていた。足元には本が散らばっている。

一「やあ亞莎。こんな格好ですまな・・・」

亞「は、はだ・・・はだ・・・」

—「亞莎？」

亞「……………あう／＼」

バタン！！

—「亞莎！？」

崩れ落ちる亞莎。俺はすぐに彼女を抱きかかえた。

—「亞莎！ どうした！ しっかりしろ！！」

小「どうしたの一成……………！」

俺の声を聞きつけたであろう小蓮がやって来た。

—「小蓮！ 亞莎が急に……………！」

小「か、一成が……………」

—「小…蓮……………」

小「一成が……………亞莎を襲ってる————！！！！！！」

雪・蓮「なんですって!?!」

雪蓮と蓮華が現れた。

—「誤解だ小蓮!!　そして二人は何処から現れた!?!」

祭「何じゃ何じゃ、騒がしいのお」

穩「一成さんがどうしたんですか〜?」

明「どうしたの亞莎!?!」

思「秋月……貴様、とうとう本性を現したか!」

華「ほお……やはりお前も男だったのだな。だが、褒められた行動ではないぞ」

冥「またお前か秋月……毎回毎回騒ぎを起こすのは止めて欲しいのだが」

—「何故みんな集まる!?!　そして俺の話聞いてくれ!?!」

その後、全員を落ち着かせ、事情を説明するのに十数分の時間を要した。

「……というわけだ。断じて亞莎を襲ったわけではない！」

明「そ、そうだったんですか……」

小「シャオは最初から一成を信じてたよ」

「……そもそも、キミの誤解が始まりなんだが」

冥「だが、そんな格好でうろついていたお前にも責任があると思うが」

「む……それを言われると」

祭「大した体じゃのお……大抵の女ならイチコロじゃな」

「イチコロ？ まあ、一般の女性相手に遅れをとる事はないと思いますけど」

蓮「（凄い胸板……もし抱き締められたりしたら……って！
何考えてるの私！？）」

思「おい秋月、いつまでも蓮華様の前でみっともない姿を晒すな」

「ああ、わかってるよ。洗濯して乾かしたらすぐに着るから」

穩「代えの服は持ってないんですか？」

華「この前みたいに侍女服でも着たらどうだ？」

「断固拒否する！」

雪「じ〜〜〜」

—「雪蓮・・・そんなに凝視されると流石に恥ずかしいんだが」

雪「ねえ一成、カメラを出してくれない？」

—「一応聞いておこう・・・何を撮るつもりだ？」

雪「もちろん、今のあなたの姿を・・・」

—「断る！」

なおも食い下がる雪蓮を無視し、水を手に入れた俺は、無事に洗濯を終える事が出来た。

翌日・・・

小「おはよう一成」

—「おは・・・ッ!？」

小「えい」

バシャ!!

小「あ、避けられちゃった」

—「い、いきなり何をするんだ小蓮!？」

小「今日は暑くなりそうだから水をかけてあげようと思って」

—「そんな心配りはいらん!」

小「酷いよ・・・せつかく一成の為を思ってたのに」

雪「あら、小蓮に先を越されちゃったわね」

小「雪蓮姉様!」

—「し、雪蓮・・・その手に持った容器は？」

雪「今日は暑くなると思うから、水をかけて涼んでもらおうと思っ
て」

—「いいかげん水から離れてくれ!!!」

その日、俺は容器を持った二人に一日中追いかけて回された・・・

第五十九話 究極のクールビズ・・・それは裸である（後書き）

作「無血開城成功。よくやったな」

一「・・・ありがとう」

作「何疲れてんだ？」

一「ちよつとな・・・」

作「まあとにかく、美羽の問題も解決したし、そろそろイベントを
起こすかな」

一「その前に華雄の真名を何とかしないと」

作「おっと、そうだった。次回辺りでどうにかしようか」

第六十話 人生の中で一度は命を懸ける時が来る（前書き）

とうとうこの時が来ました。

第六十話 人生の中で一度は命を懸ける時が来る

一「月が綺麗だな・・・」

華「うむ、こつして酒を飲みながら見上げる月も風情があつてよいものだな」

夜、華雄と共に月見酒を楽しむ。ちなみに、こついう時真つ先に参加しようとする雪蓮と祭さんは、冥琳に捕まつて今回は不参加だ。

華「なあ、秋月、お前に話があるのだが」

一「何だ？」

華「私の・・・真名についてだ」

一「え？」

華「私は今まで、誰にも真名を教えた事はない。董卓様にもな」

一「そついえば・・・」

華「我が一族のしきたりで、『生涯、家族以外で真名を許すのは一人のみ。己が心底認め、身も心も捧げられるたつた一人に教える』という決まりでな」

一「そんな理由があつたとはな・・・」

華「もちろん、私がお仕えする董卓様にはお教えしようと思ったのだ。だが、董卓様は「それは私にはなく、いつか、華雄が心から好きになった人に教えてあげてください」とおっしゃってな。結局お教えする事が出来なかったのだ」

—「ははっ、月らしいな」

華「そ、それでだな、話はここからが本題なのだが・・・私は、お前になら真名を教えてもよいと思っっているのだ」

—「俺に？」

華「お前の強さ、そして高潔な心は・・・武人として、人として大いに尊敬出来る。そんなお前を、私は認めているのだ」

—「華雄・・・」

華「だから秋月・・・私の真名を受け取ってもらえないだろうか？」

真っ直ぐに俺を見つめる華雄。俺の答えはもちろん・・・

—「わかった・・・キミの真名を教えてください」

華「感謝する秋月。私の真名は・・・志臨^{シリン}。『志高く、それに向か
いただ真っ直ぐに高みを臨む』という意味の込められた真名だ」

—「いい真名だな。華・・・志臨にピッタリだ」

志「そ、そうか・・・／＼」

一「じゃあ、志臨。俺の事も一成と呼んでくれ。真名ではないが、それに一番近い呼び方だから」

志「わ、わかった・・・一成」

月明かりの中、俺の名を呼んでくれた志臨は、今までで一番優しい微笑みを見せた。俺はこの時、初めて彼女の『女性』としての顔を見たような気がした。

一「しかし・・・これで、家族以外でキミの真名を呼べるのは俺だけになったのか」

志「そうだぞ。しっかり自覚しろよ」

一「じゃあ、俺とキミもある意味家族になったのかな？ いや・・・むしろ夫婦か？」

志「え・・・」

俺がそう言くと、志臨は一瞬ポカンとしたが、次の瞬間には真っ赤になって怒鳴り始めた。

志「ば、ばばば馬鹿を言うなあ！！！！ お前と私が、め、夫婦だ

とお!？」

—「あれ？ 違うかな？」

志「当たり前だ!! そ、それに! 武人として生きると決めた時から、私は『女』を捨てたのだ!! め、夫婦などと腑抜けた事など言っておられん!!」

—「そんな悲しい事言つなよ。志臨ほどの素敵な女性ならきつといお嫁さんになると思つんだが」

志「ツ!？ お、お前! 酔っているだろう!!」

—「そうだね、キミの美しさに酔ってしまったかもな」

志「今の台詞で確定だ!!」

—「何だろう? 今なら普段言わないような事が躊躇いなく言えそ
うだ」

志「ええい! 月見酒は中止だ!! 部屋に戻ってさっさと寝ろ!
!」

—「まだ飲めるが・・・キミがそう言つならしかたないな」

志臨の肩を借り、部屋に戻った俺はすぐに寝台に横になった・・・

S I D E O U T

曹操 S I D E

桂「華琳様・・・準備が整いました。華琳様の号令一つでいつでも出陣出来ます」

曹「そう・・・なら、すぐに出るわよ」

桂「御意！」

麗羽は倒した・・・次はあなたの番よ。

曹「孫策、あなたとの戦い・・・楽しみだわ」

曹操 S I D E O U T

I N S I D E

—「・・・頭が痛い」

昨日飲み過ぎたか。華雄の真名を覚えてもらった辺りからの記憶が
あいまいだ。

志「お、おはよう一成」

一「やあ、おはよう志・・・」

志「ま、待て！」

一「？」

志「で、出来れば二人の時だけに真名を呼んでくれないか？」

一「それは構わないが・・・」

志「で、では頼むぞ」

一「そういえば今さらだけど、何で急に真名を覚えてくれたんだ？」

志「何故だろうな・・・あの時を逃すと一生後悔すると思ったんだ」

一「そうか・・・」

志「引き止めて悪かったな。では、私は失礼する」

そう言って志臨は去って行った。すると、入れ替わるように雪蓮が
やって来た。

雪「ねえ一成・・・ちょっと付き合ってもらっていいかしら？」

「いいぞ。どこに行くんだ？」

雪「大切な所よ・・・」

しんみりとした様子の雪蓮の後について行く。城外に出て、城から少し離れた森の中に入ると、小川が見えて来た。その近くに、石碑のような物が存在している。

雪「・・・・・・・・」

無言で石碑に手を合わせる雪蓮。それにならい、俺も手を合わせた。

雪「ここにね・・・母様が眠っているの」

「お母さん？ という事は孫堅さんか」

雪「よく知ってるわね。さすが天の御遣い」

石碑の周りを掃除する雪蓮。もちろん、俺も手伝う事にした。

雪「……ありがとう」

—「当然だろ？」

雪「ふふ、あなたらしいわ」

川の流れる音を聞きながら、俺達は掃除を続けた……

S I D E O U T

一成と雪蓮が離れている中、一人の兵が血相を変えて城に現れた。

兵「申し上げます！ 我が国に曹操軍が侵攻しているとの事です！
現在、敵の先鋒隊と思わしき一団がこの城より十数里先にまで迫っているとの事です！」

もたらされた報告に目をむく冥琳と祭。

冥「何だと！？ 国境の守備隊は何をやっていた！！」

兵「それが……全滅です。敵の進行速度があまりにも早過ぎたのです！ おそらく……先の戦いで魏に降ったとされている『神速』の張遼の部隊によるものと思われます！」

冥「そうか・・・なら、すぐに籠城の準備を始めろ」

兵「御意！」

去っていく兵を見送りながら、冥琳は腕を組みジッと考え始めた。

冥「袁紹を破った勢いのまま、我等も潰そうというのか・・・舐められたものだな」

祭「儂も迎撃の準備に移る。冥琳は姿の見えない策殿を頼む」

冥「承知しました祭殿」

途端に慌ただしくなる城・・・戦いの時はすぐそこまで近付いていた・・・

I N S I D E

雪「こんなところかしらね」

雑草をあらかた抜き取り、汲んで来た水で石碑を磨くと、雪蓮は満足そうに頷いた。

雪「こんなひっそりした場所で驚いたでしょ？ 母様、派手なのが嫌いだから……」

一「へえ……派手好きなキミとは正反対みたいだな」

雪「ちよつとお、なによそれ〜。言つとくけど、私なんかよりもつと滅茶苦茶な人だったんだからね」

一「ははっ、それは凄いな」

再び手を合わせる雪蓮。

雪「母様……ようやく一歩が踏み出せたわ。でも、これから本当の始まり。呉の民達がみんな、笑って、泣いて、ずっと平和に暮らしていけるような国を必ず作ってみせるわ。その時まで、もう少しだけ待っててね。全てが終わったら、今度は蓮華や小蓮、大切な仲間達と一緒に報告に来るわ。その時は、ここで酒盛りをさせてもらうけど、騒がしくなっても怒らないでね」

一「……」

雪「あ、そうそう。この人は秋月 一成。私の夫になる人だから覚えておいてね」

一「し、雪蓮!？」

雪「あははは！」

SIDE OUT

????SIDE

?「ほ、本当にやるのか？」

?「ここまで来て今さら何言っ
てやがる。手柄さえ立てちまえば何
とでもならあ」

?「それはそうだが・・・」

?「得物は目の前だ。いかげん覚悟決めちまえ」

????SIDE OUT

IN SIDE

「ッ!」
「?」

突然、言いようもない不安感が俺を襲った。まるで、これから何かが起きるようなそんな不安が・・・

—「（そうだ、俺は知っている・・・これから何が起ころかを）」

雪蓮との墓参り。華琳の呉への侵攻。そして・・・

ガサ！

雪蓮の暗殺！！

雪「？ どうしたの・・・」

—「雪蓮！！！」

ヒュン！

風切り音・・・それを聞くと同時に、矢を掴みとった。

雪「ッ！？ 何奴だ！！！」

？」「ひっ！！！」

木の陰から短い悲鳴と、逃げる足音が聞こえて来る。

―「飛燕の太刀！」

ザシユ！

？「ぎゃあ！？」

すぐさま刀で斬り捨てる。斬撃音と共に、人影が倒れた。

―「ふう・・・雪蓮、無事か？」

雪「ええ、助かったわ一成・・・ツ！？」

ヒュン！

雪蓮の表情が驚愕に染まり、二度目の風切り音が聞こえた。

―「（二射目だと！？）」

再び雪蓮に迫る矢。今度のは対処が間に合いそうにない。

—「うおおおおおおお！！！」

ザクッ！！

間一髪、彼女の前に体を滑り込ませる。俺の左胸に深々と矢が突き刺さった。

—「ぐうっ!？」

バシャアアアアアアアン！！！！

よろけた俺は、そのまま川に落下した。落ちる瞬間、二射目を放ったであろう人物が、悲鳴をあげながら去って行くのが見えた。

—「(くそ、体が痺れて・・・)」

雪「一成!? 待ってて! すぐに助け・・・!」

—「来るな!!」

雪「ッ!？」

飛び込もうとする雪蓮を制止する。

—「今のキミがやるべき事は俺を助ける事じゃない! すぐに城に戻って今の出来事をみんなに知らせるんだ!！」

雪「そんな事出来るわけない!」

—「呉王『孫策』!! すぐに城に戻れ!！」

段々と意識が薄くなって来る。この程度の毒で死にはしないだろうが……しばらくは動けそうにないな。

雪「一成い!!!」

—「行くんた雪蓮……俺なら大丈夫……」

全てを言い切る前に、俺は意識を失った……

S I D E O U T

雪蓮SIDE

雪「そんな・・・嘘・・・嘘よ・・・」

一成は微笑みながら沈んでいった。最後まで、私達の事を思って・・・

蓮「姉様！ やはりここにいたのですね！！ 大変です、曹操の軍が・・・」

雪「わかっているわ・・・」

蓮「え？」

茂みから一成が倒した刺客の死体を引き摺り出す。

蓮「その者は！？ まさか・・・襲われたのですか姉様！？」

雪「ええ・・・一成が助けてくれたけどね」

蓮「そうですか、よかった。では、その一成は何処へ？」

雪「・・・」

蓮「姉様？」

雪「一成は……私の代わりに矢を受けた拍子に川に落下して……
流されたわ」

蓮「え!？」

雪「おそらくは毒矢……きっと、一成は助からない」

蓮「そんな……!? 嘘です!! 嘘だと言って下さい姉様!!」

雪「うろたえるな!!」

蓮「ッ!？」

雪「今は……こんなふざけた事をしでかしたあの女に報いを受け
させる方が先よ」

悲しむ事も、悔む事も後でいくらでも出来る。だが今は、この胸の
内で激しく燃え上がる怒りのままに暴れてやる。

雪「殺してあげるわ……曹操」

蓮華と共にすぐに城に戻った。

冥「雪蓮、その死体は？ 秋月は一緒じゃなかったのか？」

雪「こいつは刺客よ。一成は私を庇って刺客の矢を受け川に落ちた。・・・今頃はもう・・・」

全員「ッ!？」

その言葉に全員の顔が豹変する。悲しみや驚愕の表情を浮かべるが、やがて、全員が同じ表情を見せた。

即ち・・・怒り。大切な仲間を殺した者への抑える事のない怒りだった。

雪「・・・出るわよ」

全員「御意!!」

雪蓮SIDE OUT

曹操SIDE

曹「出て来たわね孫策・・・」

両軍が展開する中、孫策が単騎で前に出て来た。

曹「まずは舌戦ってわけね・・・私も出るわ」

馬を歩かせ、私も前に出た。

孫「曹操・・・貴様、よくも恥ずかしげもなく顔を現せたものだな」

曹「どついつ意味かしら？」

兵の鼓舞ではなく、私に対する嘲りの込められた言葉。あの孫策がいきなりこんな事を言うなんて・・・

孫「自分の胸に聞いてみる・・・自身の部下の躰も出来ていないくせに」

曹「何を言っている！言われもない理由で私の部下を中傷するのは許さんぞ！！」

意味のわからない言葉と、部下への中傷に、私の口調も荒くなる。

孫「しらじらしい・・・そんなに私の口から言わせたいのか」

曹「だから、一体何の話を・・・！」

ドサ！

孫策が、馬の後ろに載せられていた何かを私の前に落とした。

曹「え・・・」

それを見て、私は一瞬固まってしまった。何故・・・どうして・・・

曹「どうして私の兵の死体があるの!？」

それは、曹魏の鎧を纏った男の死体だった。

孫「先程、その者ともう一人の兵が私を暗殺しに来た。そして・・・
・私を庇って、天の御遣いの秋月 一成が矢を受け川に沈んだ」

全員「ッ!？」

私だけでなく、将全員が息を呑んだ。暗殺？ 矢？ それより、どうして一成が呉に？ 川に沈んだってどういう事!？

孫「一人も逃がさない……皆殺しにしてやる」

曹「ま、待って……」

そう言つて自軍に戻る孫策。その去り際の表情は……どこまでも冷たかつた。

曹「すぐに兵達を問い詰めなさい！ この戦いを穢した大罪人を、必ず見つけ出すのよ!!」

春「ぎ、御意！」

すぐに動き出す春蘭達。やがて、一人の兵が私の前につれて来られた。

兵「ひ、ひい……どうかお許しを……」

ザン!!

即座に首を刎ね飛ばした。

曹「貴様のような者が一時でも我が軍にいたなんて……末代までの恥だ!!」

桂「華琳様！ どうされるのですか!？」

曹「すぐに呉へ使者を出せ！ こんな戦い、私は望んでいない！
すぐに撤退する!！」

桂「し、しかし！ 今退けばこちらの被害が・・・！」

曹「これ以上私に恥をかかせるな!! この戦いに勝ったとて、我
が霸道には何の意味もない!!！」

桂「し、承知しました！ すぐに指示を・・・！」

春「華琳様！ 敵が突撃を開始しました！」

曹「そんな・・・私はこんな戦い、望んでいないというのに・・・
」

秋「華琳様、お気を確かに・・・」

曹「・・・ええ、わかっているわ秋蘭。皆、すぐに撤退せよ!!！」

全員「御意!！」

どうして・・・どこで狂ってしまったの？

曹「一成・・・」

小「絶対許さない・・・許さないんだからあ！！！！」

ヒュンヒュン！！！！

魏兵「ぎゃああああああ！！！！」

祭「（秋月・・・儂はお主を気に入っておつた。そんなお主を殺した彼奴等は、儂が残さず殺してやる！！！！）」

小「（大好きな一成を奪つたあいつらを・・・シャオは絶対許さない！！！！）」

祭・小蓮SIDE OUT

思春・明命SIDE

明「一人も逃がしません！！」

思「殺せえ！！ 我等の怒り・・・思い知らせてやるのだあああああ！！！！」

ザシュ！！

魏兵「が・・・あ・・・」

明「（どうして、あんなに優しい一成さんが殺されなければならぬんですか！?!）」

思「（秋月の事などどうでもいい・・・どうでもいいはずなのだが、この湧き上がる怒りは一体・・・）」

思春・明命SIDE OUT

冥琳・穩・亞莎・美羽・七乃SIDE

亞「構いません！ 突撃してください!!」

穩「あら〜、亞莎ちゃん、かなり怒ってるみたいですね〜」

冥「それはお前も同じじゃないのか穩？」

穩「そうですね〜。もし、軍師としての立場じゃなかったら、すぐに突撃してたでしょうね〜」

冥「我等は軍師・・・つねに冷静に物事にあたらなければならない。だが・・・正直私も限界に近い」

美「妾も同じじゃ!!。もし、妾に戦う力があれば、この手で曹操

雪蓮と華雄だ。立ち塞がる兵を全て一刀の下に斬り伏せながら、凄まじい速度で曹操に迫る。

夏侯惇「待て！ それ以上進ませはせんぞ！！」

張「華雄！？ 何でアンタが孫策軍に！？」

そんな二人の前に、殿を務めていた夏侯惇と張遼が立ち塞がった。

雪「夏侯惇！ 貴様に用はない！！ 道を開けろお！！！！」

華「張遼！ 邪魔をすれば、貴様だろうと躊躇いなく斬る！！！！」

張「待てや！ 今回の件は華琳の指示やない！ 兵が勝手に暴走しただけや！！！！」

雪「たとえそうだろうと、私が襲われ、一成が犠牲になったのは事実よ！！！！」

夏侯惇「ほ、本当に秋月は死んだのか？」

雪「それを・・・それを貴様等が聞くのかああああああ！！！！」

ガギャン！！！！

咆哮と共に振り下ろされる南海霸王。怒りによって何倍も威力が上がったその一撃は、魏武の大剣とまで称されている夏侯惇を防御の上から吹き飛ばした。

夏侯「ぬわあ!?!」

雪「曹操おおおおお!?!?!」

一瞥する事なく、雪蓮は馬を走らせた。

張「惇ちゃん!?!」

華「ふん!?!」

ガギン!?!!

金剛爆斧が唸りをあげ、張遼の飛龍堰月刀に叩きつけられた。

張「ぐっ!?!」

華「退けと言っているだろっ!?!?!」

張遼に向けられる目は、もはやかつての仲間に向けるものではなかった。

華「（一成だけが……私の真名を呼んでくれるはずだった。それなのに、貴様等が……貴様等があああああ！！！！）」

自身の主と同等……いや、もしかしたらそれ以上に大切な存在になるかもしれない人物を失った今の彼女を止められる者は……
・存在しない。

雪「逃がすか曹操！！　貴様は私が殺す！！！」

雪蓮の突撃はなおも曹操を追い詰めていた。そして、あと少しで姿を捉えようという距離まで来た時、彼女の前に新たな敵が現れた。

楽「申し訳ありませんが、あなたにはここで諦めて頂きます！」

于「華琳様は必ずお守りするの！」

李「これ以上行かせへんで！」

立ちほだかるのは、魏の三羽鳥。だが、三対一という状況にも関わ

らず、気圧されているのは楽進達の方だった。

楽「（な、何という殺気だ・・・これが小霸王孫策）」

雪「雑魚に用はない・・・失せる」

于「そういうわけにはいかないの！」

雪「なら・・・死ね！！」

李「ッ！？ 危ない沙和！！」

ザシユ！！

李「うあっ！！」

雪蓮の横薙ぎが、李典の腕を軽く切り裂いた。

于「真桜ちゃん！？」

楽「下がれ二人とも！ 爆碎・・・跳天昇！！」

ブワ！！

迫り来る気柱。それは・・・『彼』も使っていたあの技だった。

雪「あああああああ！！！！」

パン！！

楽「なっ！？ 気柱が・・・弾けた！？」

雪「それ・・・きつと一成があなたに教えたんでしょう？」

楽「は、はい・・・」

雪「その彼を・・・あなたの主が殺したのよ！！！！」

楽「ち、違います！ 華琳様は・・・！」

雪「だから私は曹操を殺す！！ 邪魔しないで！！！！」

修羅・・・今の彼女には何を言っても意味がないだろう。

雪「（一成・・・あなたがここにいたら、きつと私を止めるでしょうね。けどね、私、本当にあなたが好きだったの。愛していたの。だから・・・私は止まらない。止まるつもりもない！）」

『女』としての感情が彼女を動かす・・・手柄を焦った愚かな者達
が、最も触れてはならない部分に触れてしまったのだ。

雪「道を開けるお！ 邪魔をするなああああああ！！！」

・・・

・・・

・・・

その後、呉軍は、国境付近まで曹魏を追撃し続けた。今回の戦、魏
は多くの兵を失い、甚大な被害を被った。それに対し、呉は負傷者
こそ出たが、被害は全くと言っていいほどなかった。

感情の爆発は凄まじい力を発揮させる・・・正にそれを証明するか
のような戦だった。だが、喜びの表情を浮かべる者は一人としてい
ない。

王を守って散った一人の英雄・・・その姿が全員の脳裏に浮かび上
がる。

怒りの次に押し寄せて来るのは・・・悲しみ。

蓮「う・・・うう・・・」

蓮華の嗚咽。それを皮切りに、亞莎や美羽などが次々に涙をこぼし始めた。玉座の間を、悲しみが支配する。

雪「祭・・・悪いけど、みんなの事頼むわね」

祭「承知した。策殿は？」

雪「・・・少し一人にさせて」

そう言い残し、雪蓮は玉座の間を出て行った。

穏「雪蓮様・・・一番泣きたいのはご自分でしょうに・・・」

冥「だが、雪蓮は王だ。王が臣下の前で涙を流すわけにはいかない」

七「そうですね・・・しばらく、孫策さんのお部屋には近づかないようにしておきましょう」

・・・

ボタン

自室に戻った雪蓮は、机から何かを取り出した。

雪「…………一成」

それは以前、別れの宴の席で、一成と二人っきりで撮った写真であった。写真には、雪蓮に口づけされて固まっている一成が写っている。

俺も雪蓮の事好きだよ。この世界で出来た大切な友達だからな

雪「一成…………一成い…………」

その写真を見た瞬間、彼女の我慢は限界を迎えた。

雪「あ…………ああ…………うあああああああああああ……！！！！」

雪蓮は泣いた。泣いて泣いて泣きじゃくった。声を張り上げ、涙を

こぼし、雪蓮は泣いた。

王は人前で泣いてはならない。だから、彼女は一人で泣く。愛する者を失い、慟哭するのだ。

雪「うあああああああ！！！！」

悲しみは続く。いつまでも、いつまでも・・・

.....

.....

.....

所変わって、ここは城から離れた森の中。その中を、一人の男性と二人の乙女・・・いや、漢女が歩いていた。

男性「二人とも、川が見えたぞ」

漢女A「ホント？　じゃあ水浴びでもしようかしらん」

漢女B「うむ、儂の美しい肢体を、だーりんに見せてやるう」

男性「飲み水が足りなくなってきたからな、助かった」

そして、三人が川へ近づくと、上流から人が流れて来た。

漢女A「あらん、素敵な男性じゃないの〜」

漢女B「確かに、思わず見惚れてしまったわい」

男性「そんな事を言っている場合じゃない！早く引き上げてやるう！」

ザバア！

男性「胸に矢が・・・」

漢女A「何か事情がありそうねん」

漢女B「だーりん、どうするのじゃ？」

男性「もちろん助ける！二人とも、力を貸してくれ！」

漢女A・B「任せ（てん）（るのじゃ）！ー！」

？「……………」

引き上げられたのは、銀髪の髪に、煌びやかな服を纏い、左胸に矢の突き刺さった男性だった。

この時の彼らには知る由もなかった。この偶然の出会いが、一人の女性を定められた運命から救う事を・・・

第六十話 人生の中で一度は命を懸ける時が来る（後書き）

作「暗殺阻止成功。そしてお前は川をドンブラコ」

一「何だこの展開・・・」

作「雪蓮と華雄が弱チート化してきたな・・・どうしてこうなった」

一「そういえば、ようやく華雄の真名が出たな」

作「志臨な。この真名は薄様から頂いたものだ。他にも多くの方から送って頂いたぞ。やっぱり華雄は愛されているな」

一「送って頂いたみなさん、どうもありがとうございます」

作「さて、次は原作の中でも強力なインパクトを持ったあの三人との絡みだ。今の内に覚悟しておけよ」

一「あの三人？」

作「ヒントをやるう・・・ガガガとアナゴと師匠だ」

一「・・・さっぱりわからん」

第六十一話 王子様は姫のキスで目覚め・・・逆じゃね？（前書き）

ひとまず呉編はこれが最後です。

第六十一話 王子様は姫のキスで目覚め・・・逆じゃね？

—「(う・・・俺は・・・)」

ぼんやりと意識が戻って来る。体が妙に重い。

—「(そうだ・・・雪蓮を庇って、川に落ちたんだったな・・・)」

?「彼の様子はどうだ？」

?「特に変化はないわよん」

?「むう・・・あれから一週間経つというのに、まだ目覚めんのか」

聞こえて来たのは、数人の会話。

—「うう・・・」

?「ッ！ 気がついたのか!？」

?「後少しみたいね。こうなったら、私のおつゝいキスで目を覚
まさせてあ・げ・る」

?「ずるいぞ貂蟬!」

—「(何だ・・・?)」

ゆっくりと目を開ける。そこには・・・

?「ん~~~~」

俺の顔に迫る化物? がいた。

—「崩山槍拳————ツ!!!!!!」

ドバキイ!!!!!!

化物「ぶるあああああああ!?!?!?!?」

迷う事無く全力で殴り飛ばすと、化物は断末魔をあげながら転がっていった。

?「大丈夫か貂蟬!?!」

?「ふははは! おま、やるではないか!」

化物の他に、赤い髪の男性と……もう一体の化物がいた。

化物B「誰が化物じゃあ！ 儂らはお主の命の恩人じゃぞ！！」

—「え……？」

……

男性「……というわけで、川に辿り着いた俺達の前に、キミが流れて来たんだ。急いで引き上げて手当てを施して、ようやくキミが目覚めたってわけだ」

—「そうだったのか……すまない、命の恩人に対してなんて事を……」

化物A「気にしないで。素敵な男性を助けるのは当然の事なんだからん」

化物B「うむ、自分の過ちを素直に認める……いい男子じゃなお主は」

—「本当にありがとう。えっと……」

男性「俺は華陀。医者をやっている」

化物A「私は貂蟬よん」

化物B「卑弥呼じゃ」

一「よろしく三人とも。俺は秋月 一成だ」

華「秋月？　もしかして・・・キミがああの御遣いか？」

一「ああ、一応はそうなっている」

貂「そう・・・あなたが、ご主人様のいないこの外史の主人公なのねん」

卑「不思議な雰囲気的男子じゃな・・・よければお主について詳しく教えてくれんか？」

一「俺は・・・」

華「まあ待て、目覚めたばかりで疲れているだろうし、話は後にしよう。キミも一週間眠っていたんだ。体が思うように動かせないだろう？」

一「一週間？　そんなに寝てたのか・・・」

貂「ええ、とつても可愛い寝顔だったわ」

卑「思わず襲い・・・見つめてしまったわい」

・・・よく無事だったな俺。

華「食べ物もある。好きなだけ食べてくれ」

一「いいのか？ これはキミ達の・・・」

華「困った時はお互い様さ」

華陀はキラリと齒を光らせ、微笑んだ。

一「ありがとう華陀。ところでキミ・・・地獄と天国って叫びながら手を組む癖とかあるか？」

華「ははっ、そんな癖を持つてるヤツがいたら、俺が見てみたいよ」

一「そうだよな。変な事聞いてすまない」

貂「そうよん。私だって手当てしようとしたら急にキレるような性格してないし」

卑「僕も、自身の何倍もの大きさの相手に布一枚で立ち向かったりせんぞ」

貂「でも、卑弥呼は私の師匠だけどねん」

卑「だからお前はアホなのだぁ！」

貂「いやん、急に怒らないでよん」

一「・・・華陀」

華「気にするな。いつもの事だから」

一「わ、わかった」

本当に気にしていないように言う華陀……慣れとは恐ろしいものだな。

食事を済ませた俺は、改めて三人と話をする事にした。

貂「ねえ、ちょっと聞いてもいいかしら？」

一「何だ？」

貂「どうして胸に矢を受けてたのかしらん？」

華「貂蝉、それは……」

貂「もちろん、嫌なら無理に話さなくていいわ」

一「いや、別にそういうわけじゃないよ。そうだな、何から話したらいいか……」

俺は三人に事情を説明した。

卑「やるなお主、女子の為に自身を盾にするとは！」

貂「素敵！ 惚れちゃいそうだわん！」

一「あ、ありがとう」

華「しかし、それでは、キミがこうして生きている事をみんな知らないんじゃないか？」

一「おそろくな」

華「なら、すぐに戻って無事な姿を見せてやらないと」

一「いや・・・俺はこのまま呉を去ろうと思う」

貂「それはどうして？」

一「今回の件で、呉のみんなと同じくらい傷ついた娘がいるんだ。その娘を何とかしてあげたい」

雪蓮との真っ向勝負を望んでいたであろう、誇り高いあの娘を・・・

華「そうか・・・キミが決めたのなら、俺は何も言わないよ」

一「ありがとう華陀。それで、実はキミに頼みたい事があるんだ」

華「頼み？」

「ああ、キミの医者としての腕が必要なんだ」

華「患者か！」

瞳を燃やす華陀。

「呉に周瑜という女性がいる。その人を診てあげて欲しい」

華「周瑜さんだな。よし！ 任せろ！！」

「頼む。城にいるから、俺の名前を出せばきっと会ってくれるはずだ」

華「なるほど、ついでにキミの無事も知らせるつもりなんだな」

「ははっ、お見通しか」

華「任せてくれ。周瑜さんの診察と、キミの無事を伝える事・・・俺が必ず果たしてみせる！！」

卑「おお！ だーりんが燃えておる！！」

貂「ふふ、こうなった華陀ちゃんは誰にも止められないわん」

華「待っている病魔め！！ 俺が必ず滅してやるからな！！」

冥琳の病の進行はまだそこまで酷くないはずだ。原作で見た華陀の

腕なら、きつと彼女を救ってくれるはず。

—「雪蓮も守れたし、冥琳も助けられそうだな。こころ思うと・・・川に落ちてよかったかもな」

華「ぷっ、ははっ！ 川に落ちてよかったか・・・キミは面白いな！！」

—「そうかな？」

貂「ポジティブねん。そういう男性は大好きよん」

卑「お主なら、周りの人間全てを救う事が出来るやもしれんな」

—「もちろんだ」

俺は、その為にこの世界にやって来たんだからな。

その日は共に一夜を過ごし（貂蝉の所為であまり眠れなかったが）、翌日の朝、華陀達は呉に向けて出発して行った。

—「さて・・・俺も行くかな」

桃香達には申し訳ないが、再会にはもう少し時間がかかりそうだな。

「待つててくれ・・・華琳」

少しずつ・・・少しずつだが、物語は確実に良い方向に進もうとしていた・・・

第六十一話 王子様は姫のキスで目覚め・・・逆じゃね？（後書き）

作「これで冥琳も無問題だ」

一「お前にしてはよく考えたな」

作「これでまた、死者ゼロに向けて一歩前進したぞ！ この流れのまま最終話までしっかりな」

一「お前しだいだろう・・・」

作「はん！ この俺がバッドエンドなんか書くわけないだろうが！
！」

第六十二話 死んだはずの人間が生きているのはある意味お約束(前書き)

次は魏です。

第六十二話 死んだはずの人間が生きているのはある意味お約束

―「そろそろ魏領だな」

今頃雪蓮達はどうしているだろうか。

―「俺が生きてる事を喜んでくれて・・・たらいいな」

すると、遠目にだが、街のようなものが見えて来た。

―「よし、今日はあの街で一泊しよう」

S I D E O U T

その数日前、呉の城にとある三人組がやって来た。彼等は王である雪蓮への謁見を望み、雪蓮はこれに応じた。玉座の間にて、雪蓮と冥琳、そしてその三人組が会した。

雪「それで・・・あなた達は？」

華「俺は華陀。医者だ」

貂「貂蝉よん」

卑「卑弥呼じゃ。よろしく頼む」

貂蝉と卑弥呼の姿に多少面食らう一人だったが、すぐに平静を取り戻した。

雪「そのお医者様が私に何の用？ 悪いけど、今はあまり話をする気分じゃないの」

貂「そうねん。ずいぶん目を腫らしてるようだし」

卑「悲しい目をしておるの……好いていた相手でも失ったのか？」

雪「ッ!？」

貂蝉と卑弥呼の指摘に、雪蓮は今度こそ動揺した。自分だけではない、一成がいなくなっただけから、この城内はおろか、街の雰囲気まで沈んでいたのだ。

華「ここに周瑜さんという人はいるか？ 俺はある人物に頼まれてその人を診察しに来たんだ」

冥「……周瑜とは私の事だが」

華「そうか！　じゃあ、早速・・・」

雪「待ちなさい。あなた、頼まれたって言ったわね・・・誰に頼まれたの？」

華「秋月　一成・・・天の御遣いさ」

雪「ッ・・・！」

ガキイイイイイイン！！！！

卑「・・・いきなり斬りかかるとはのお」

雪蓮は南海霸王を抜き、華陀に斬りかかった。しかし、その一撃は卑弥呼によって片手で防がれた。

雪「どうせ、天の御遣いの名を謳って取り入ろうという魂胆なのだろう！！　彼の名を利用するヤツは・・・私が許さない！！！」

貂「そうね・・・そう思うのも無理はないわよねん」

華「すまない、言葉が足りなかったようだ。ちゃんと説明するから、聞いてくれないか？」

冥「伯符・・・話だけでも聞いてやったらどうだ？」

雪「……いいだろう。だが、少しでも不審に思ったら、その時点で貴様等を斬る」

華「ああ、その時は逃げも隠れもしないよ」

華陀は雪蓮を真っ直ぐ見つめ、語り始めた。

華「二週間くらい前の話だが、森の中を彷徨っていた俺達は川を見つけた。そこで、飲み水を確保しようと川に近づいたら、上流から人が流れて来たんだ」

冥「人？」

華「俺達はすぐに川から引き上げた。その人は、銀色の髪に、見た事無いような煌びやかな服を着ていて……胸には矢が刺さっていた」

雪「そ、それって……まさか！」

華「凄い生命力の持ち主だな。普通なら死んでもおかしくなくらい衰弱していたのに、一週間後、その人は目を覚ました。そして自分の事をこう名乗った……「俺は秋月 一成だ」……と」

雪「ほ、本当に……？ 本当にそう名乗ったの？」

華「俺が御遣いかと尋ねたら、彼は頷いたぞ」

冥「雪蓮……！」

雪「生きて……生きてた……」

ポロツ……

この時、雪蓮は王の掟を破った。即ち……王は人前で泣いてはならないという掟を。だが、今の彼女にはそんな事どうでもよかった。愛する人が生きていたという事実には、彼女は大粒の涙を流す。

貂「あらん、泣いちゃったわよん」

卑「惚れた男が生きていたのだ。我慢しろという方が無理じゃろう」

華「これで、信じてもらえたかな？」

雪「ええ……信じるわ。それで、一成はどこ？ 帰って来てくれたの？」

華「彼は……俺達と別れたあと、そのまま呉を去った」

雪「え……？」

生きていたのなら、何故自分達の所に戻って来てくれないのか？
彼の行動に、雪蓮は愕然とした。

華「俺にはよくわからないが、彼の言葉をそのまま伝えるよ。「今回の件で、呉のみんなと同じくらい傷ついた娘がいるんだ。その娘を何とかしてあげたい」との事だ」

冥「我等と同じ？ そんな人物・・・」

雪「・・・曹操ね」

冥「そうか・・・数日前、謝罪の使いが暗殺を企てた兵の首の塩漬けを持って来たな。という事は、秋月は兵の暴走だと気付いていたのか？」

雪「違うわ。きっと曹操を信じていたのよ。そんな卑怯な手を使うはずがないってね・・・」

この時点で、曹操に対する怒りは無くなったが、今度は少しだけ嫉妬を抱いた雪蓮だった。

華「続けていいかな？」

雪「ええ、お願い」

華「彼は別れる前、俺に頼んで来た。呉にいる周瑜という女性を、診てあげて欲しいってな」

冥「・・・」

雪「冥琳、あなた・・・どこか具合でも悪いの？」

冥「・・・ふっ、これでも隠し切れていたつもりだったのだが、
天の御使いとはどこまで知っているのだろうか？」

雪「それじゃあ・・・！」

冥「本当は隠し続けておこうと思っていたのだが、こうなっては仕方ない。華陀殿、診てもらってよろしいだろうか？」

華「もちろんだ！ 必ずあなたの体から病魔を滅してみせる！！

貂蝉！ 卑弥呼！ すぐに準備に入るぞ！！」

貂「オツケよん！」

卑「任せい！」

雪「冥琳・・・私・・・」

冥「わかっている。蓮華様達に知らせて来い。秋月が・・・我等の
仲間が生きていた事をな」

雪「うん！！」

雪蓮は、すぐさま玉座の間を飛び出した。未だ悲しみに暮れている
妹達を、笑顔にする為に。

雪「聞いてみんな～～！！ 一成が・・・一成が生きてたわよ」


~~~~~!!!」

その日、街をあげての大宴会が夜明けまで開かれていた事を、当の本人が知る由もなかった・・・

IN SIDE

「わああああああ!!!」

—「何だ？」

街に辿り着いた俺が聞いたのは、向こうの広場の方から聞こえて来る人々の大歓声だった。

—「祭りか何かか？」

気になった俺は、広場に向かってみた。

男「ほああああ!!　ほああああ!!!!」

そこでは、大勢の男達が、奇声をあげながら舞台の上の人物達にく

ぎづけになっていた。そして、その舞台上の人物達は、俺の知っている相手だった。

天「みんな〜！ 盛り上がってる〜〜！！」

男A「最高だよ天和ちゃーん！！」

地「この程度でへばってんじゃないわよ！！ ちゃんとして来ないと許さないんだからね！！」

男B「もちろんだよ地和ちゃーん！！」

人「次は新曲です！ しつかり聞いて下さいね！」

男C「人和ちゃーん！！ 結婚してくれー！！！！」

一「天和・・・地和・・・人和・・・」

そこでは、元黄巾党首領であり、今は華琳の元で歌を歌っている張三姉妹が、眩しい笑顔を見せながら、美しい歌声を披露していた。

一「（こんな所で見かけるなんて・・・興行か何かか？）」

こうして彼女達の歌う姿は初めて見るが、確かに目を奪われるものしかたない。それだけの魅力を彼女達は持っている。

もし近くで公演中だったら必ず応援に行かせてもらおうよ・・・差し入れを持ってね

以前交わした約束を思い出す。向こうは覚えてないかもしれないが、せっかくの機会だ、久しぶりに顔を合わせておこう。

そう決めて、俺は広場から一度去り、差し入れになるような物をいくつか買う事にした・・・

S I D E   O U T

張三姉妹 S I D E

天「ふ〜、今回も大成功だったね！」

控室に戻った天和は、満足げに笑みを浮かべた。

地「ちいの魅力のおかげね！」

人「観客の数も段々増えて来ている。努力がやっと形になって見え来たわね」

地和と人和も、納得の表情を浮かべた。だが、フツと天和の表情が曇った。

天「お兄さんにも・・・見てもらいたかったね」

地・人「・・・・・・・・」

興行中だった三人にも、魏兵の暴走によって一成が生死不明だという事は伝えられていた。ほんの少ししか接する機会がなかったが、それでも三人が彼の事を忘れた事は一日もなかった。

人「きつと・・・きつと一成さんは見ててくれるはず。天から私達の事を・・・」

その時、慌てた様子で控室に警備兵が入って来た。

兵「し、失礼します！」

地「どうしたの？ そんなに慌てて」

兵「み、みなさんに面会したいという方がお見えになられています」

人「面会？ 誰かしら？」

兵「お通しても?」

天「いいですよ」

兵「で、では、すぐにお連れします!」

そう言って、兵は控室を出て行った。

天「誰だろうね?」

人「兵の人のあの慌て具合からして・・・結構な相手みたいね」

地「誰だっといういわよ」

兵「お、お連れしました」

再び入室して来る兵。その後ろから、一人の人物が顔を覗かせた。

天・地・人「……え?」

その人物の顔を確認するなり、天和は目を見開き、地和は竹で出来た水筒を手から落とし、人和は眼鏡をすり落とした。



人「お、教えてください！ 何があつたんですか!？」

一「実はな……」

説明中……

一「……というわけで、華陀っていう医者に助けてもらつたんだ」

張蟬と卑弥呼の名は出さなかった。というか、出しくなかつた。

天「そうだったんだ〜」

地「あんた馬鹿じゃないの。矢の前に立つなんて……」

一「ははっ、けど、そのおかげで守れたものがあるしな」

人「けど、本当に……本当によかつたです」

ポロツ……

突然、人和が涙をこぼし始めた。申しわけない気持ちと、心配してくれていたという嬉しさが同時に湧き上がる。

—「ありがとう人和・・・心配してくれてたんだな」

人「い、いえ・・・／＼」

天「わ、私だって心配してたんだよ〜！」

地「ちは・・・ちょっとだけ、ちょっとだけだからね！」

—「二人もありがとう。そして・・・すまない」

天「えへへ〜／＼」

地「ふ、ふん・・・／＼」

？「おつかれさーん・・・って、誰や？」

—「ん？」

新たな人物が控室に入って来る。振り返るとそこには・・・

凧・沙・真「・・・え？」

—「あれ？ 何で三人がここに？」

人「彼女達が今回の興行の警備責任者です」

—「そうなのか。お疲れ様三人とも」





「……………というわけだ」

真「はあ……どこに行っても、兄さんは相変わらず滅茶苦茶やな」

沙「一成さんは不死身なの！」

凧「さすがです師匠！！ 私も、矢を受けても生き残れるようこれから精進を続けます！」

「凧……それは止めておいた方がいいぞ」

沙「でも、ホントによかったの。なんか安心したら急に……………」

ポロツ……………」

真「な、なんや沙和。泣いとんのか？」

凧「そう言う真桜こそ……………」

沙「凧ちゃんもなの……………」

天「泣きたい時は我慢しないで泣いた方がいいよ」

天和が優しくそう言うと、三人は堰を切ったように号泣し始めた。

凧「沙・真」「う……うわああああああん……」「」

—「凧……沙和……真桜……」

凧「師匠！ 師匠！！ よくぞ、よくぞ生きてくださりました  
！！！」

沙「嬉しいのに……嬉しいのに涙が止まらないの！！！」

真「兄さん！ ウチ……ウチ……！」

—「……ありがとう」

落ち着きを取り戻すまで、俺は三人を両腕でしっかり抱きしめ続け、  
凧達も抱き締め返してくれた。

そのまま数分が経過し、泣き声が収まったのでゆっくり離れた。

—「落ちついたか？」

凧「は、はい。」「迷惑をおかけして申し訳ありません」

—「ははっ、迷惑なわけないだろう」

沙「えへへ、やっぱり一成さんは優しいの」

真「うう……冷静になったら結構ハズいな／＼」

「さて、思わぬ所で再会出来たけど、そろそろ本来の目的に戻らないとな」

凧「目的……ですか？」

「ああ、俺は華琳に会いに行こうと思ってるんだ」

沙「華琳様に？」

「俺が生きている事をちゃんと知らせておこうと思ってな。もしかしたら全然気にしてないかもしれないけど」

真「なら兄さん。ウチ等と一緒にいこうや」

「え？」

凧「今回の興行はこれで終了ですから、これから城に戻って華琳様にご報告しなければなりません。せつかくなら一緒に出来ればと」

「そうだな……よし、じゃあ一緒にさせてもらうよ」

沙「わーい！ 一成さん、お話したい事がいっぱいあるのー！」

凧「ま、待て沙和。私だって師匠にお聞きしたい事が山ほどあるんだ」

真「二人とも、抜け駆けは許さんで。当然ウチも入れてもらうからな」

地「ちよつとちよつと！ ちい達無視して勝手に話を進めるんじゃないわよ！」

天「お兄さん。帰る前に私と一緒に街を歩こうよ！」

人「わ、私もぜひ！」

—「ははっ……」

騒ぐみんなを眺めつつ、俺は再会の喜びをしっかりと噛み締めていた。

第六十二話 死んだはずの人間が生きているのはある意味お約束（後書き）

作「妬ましい！」

一「何だよ急に？」

作「美少女に取り合いされるなんて・・・羨ましいにも程がある！」

一「だから、書いたのはお前だつてずっと前から言ってるだろうが」

作「そうさ！　そして、その度に俺はお前の事が嫌いになっていくてるのだ！..！」

一「逆恨みも甚だしいな」

作「M O G E R O」

一「D A M A R E」

第六十三話 おおげさな謝罪はこっちが申しわけなくなる(前書き)

序盤からまったく出番のなかったあの二人をようやく出せます。

第六十三話 おおげさな謝罪はこっちが申しわけなくなる

華琳SIDE

桂「華琳様、凧達が戻って来たようです」

華「・・・そう」

桂「あの・・・」報告を」

華「ええ・・・呼んで来てちょうだい」

桂「御意」

一礼し、桂花が玉座の間から出ていく。私はぼんやりとそれを見送った。

華「（孫策は、こちらの謝罪を受け入れてくれた。けど、私は『彼』には永遠に許してもらえないでしょうね）」

虎牢関での戦いからずっと行方を掴めなかった『彼』。霞から董卓軍にいた頃の話聞いたが、相変わらずのようだった。

華「（そんな『彼』が・・・たった二人の兵の暴走で死んだ。いえ・



・私が殺したようなものね」

正直、あれほどの力を持つ『彼』が、そう簡単に死ぬとは思えないけど、あの時の孫策達の怒りを考えると、『彼』の生存確率は限りなく零だ。

華「（せめて……もう一度『彼』と話したかった。なんて……そんな夢物語……）」

バン！！

桂「か、華琳様！！」

凧達を呼びに行っただけの桂花が、血相を変えて戻って来た。

華「どうしたの桂花？ 凧達の姿が見えないけど」

桂「あ、あの男が！ 生き、生きて……！！」

華「あの男？ 生きて？ 何を言ってるの桂花？」

凧「ただいま戻りました華琳様」

桂花の後ろから凧達が姿を現した。

華「お帰りなさい三人とも。早速、今回の興行の報告を……」

沙「ちょっと待って欲しいの」

真「すごいお客さん連れて来たさかい、驚かんと言ってや」

華「客？」

凧「……どうぞ」

扉が開き、新たな人物が入って来た。そして、その人物の姿を見て、私……いや、ここにいる全員が己が目を疑った。

—「やあ、久しぶりみんな。元気そうで安心したよ」

華「か、一成!？」

現れたのは……先の戦いで孫策を庇って戦死したはずの……  
一成だった。

華琳 SIDE OUT

IN SIDE

—「あれ？ みんなどうして固まってるんだ？」

真「そらまあ、死んだはずの人間が生きてたんやから当然や」

沙「沙和達だってあの時固まってたの」

凧「・・・あ、どうやら正気に戻られたようです」

?「一成!!」

—人の女性が、俺に向かって全速力で駆け寄って来た。

—「霞・・・」

霞「ホンマに・・・ホンマに一成や・・・」

—「よかった霞、無事だったんだな」

霞「それはこっちの台詞や!!　ウチがどんだけ泣いたか知っとんのか!!」

—「・・・すまない」

霞「許さへん!　絶対許さへんからなあ・・・!!」

俺の胸を叩きつつ、涙を流す霞。困った・・・どうすれば許しても  
らえるのだろうか？

季「兄ちゃああああああん！！」

ギユ！！

季衣が俺の腰にしがみ付く。そんな彼女の頭を優しく撫でつつ、視  
線を春蘭と秋蘭に移す。

春「お、お前・・・何で生きて・・・」

秋「ふっ、天の国の人間を殺すには、矢<sub>こ</sub>ごときでは駄目らしいな」

—「ひどいな秋蘭」

秋「許せ。私も未だに信じられないのだ」

桂「ふ、ふん！　せっかく目障りなヤツがいなくなって清々したと  
思ったのに！」

—「ははっ、相変わらずみたいだな桂花」

桂「う、うるさい！」

華「一成・・・」

華琳が玉座を立ち、俺の前にゆっくり歩いて来た。

「華琳、前回の戦いは残念だったな」

華「教えて・・・何があつたの？」

「あの時は、偶然森に行く用事があつてな・・・」

またまた説明中・・・

「気付いたら一週間も眠っててな、華陀達に助けられてなかったらどこまで流されてたかわからなかったよ」

霞「わ、笑って話す内容やないと思うけど・・・」

「終わった事だしな」

華「そう・・・では、改めて謝罪するわ」

華琳が頭を下げる。当然だが、王らしからぬその行動に、桂花達が慌てて進言する。

桂「か、華琳様!! 何故そのような男に……!!」

華「彼は私達の所為で生死を彷徨ったのよ。それに、彼がいなければ、一人の英傑がこの世を去っていた。謝罪と感謝の為なら、私は頭を下げる事を躊躇わない」

桂「で、ですが……!!」

華「くどいわよ桂花。私を恥知らずにするつもり?」

桂「……いえ、申し訳ありません」

華「一成、あなたの気が済むのなら、私は何をされても構わない。体を要求するなら従うし、首を差し出せと言うのなら……私は喜んで差し出すわ」

全員「ツ!?!」

その言葉に、今度は桂花以外のみんなも目を見開いた。

一「……わかった、なら魏王『曹操』……キミに命じる」

華「ええ、何かしら?」

春「秋月!! 貴様、華琳様に何を……!!」

秋「駄目だ姉者!! これは華琳様がお決めになられた事! 我等

は黙って見ておく事しか出来ない!!」

凧「・・・大丈夫ですよ春蘭様」

春「え？」

沙「他の人ならいざ知らず、相手はあの一成さんなの」

真「そういう事です。ええから見とってください」

全員の視線が集中する中、俺は口を開いた。

「今すぐ最高の料理を食べさせてくれ。ここ数日ロクな物を食べていないんだ」

華・春・秋・桂「「「「・・・え?」「」「」

ぐう~~~~!!

タイミングよく俺の腹が大きな音をたてた。

「華琳は料理の腕も抜群なんだろ? 一度食べてみたかったんだよ」

華「こんな時に茶化さないで!! 真面目に答えてちょうだい!!」

—「俺は大真面目さ。それに・・・キミこそ、本気で言ってるのか？」

華「え？」

語気を強めにして言うと、華琳はキョトンとした顔を見せた。

—「体を許す？ キミの体はそんなに安くないだろう？ 首を差し出す？ 残された春蘭達はどうなる？」

華「それは・・・」

—「それだけじゃない。今までキミを信じて戦って来た兵はどうなる？ キミを慕っている民はどうなる？ 魏は・・・どうなる？」

華「・・・」

—「キミの覇道を・・・こんなつまらない事で終わらせていいのか？」

華「つまらない？」

—「つまりだな・・・終わった事をいつまでも気にするなって事だ。俺も生きてたし、雪・・・孫策も無事だった。それでいいじゃないか」

華「そういつわけには・・・」



—「だったら命令する。気にするな」

華「一成……」

真「……ほらな」

凧「流石です師匠！」

沙「一成さんならそう言おうと思ったの！」

霞「ぷっ、はは!! ころ一本取られたな華琳!! あんた自身が一成に従う言うたんやから、今の命令もちゃんと聞かなあかんで!!」

季「あはは! 兄ちゃん格好良い!!」

—「というわけで華琳。今すぐ俺の為にご飯を作ってくれ。正直限界が近い……」

華「本気……なのね」

—「もちろんだ」

見つめ合う事数秒……やがて、観念したように華琳は溜息を吐いた。

華「……わかったわ。今から至高の料理をあなたに味あわせて

あげる。流琉！ 手伝ってちょうだい！！」

？「はい！！」

—「あれ、キミは確か・・・」

典「シ水関以来ですね秋月さん」

—「やあ典章。久しぶりだね」

典「ふふ、今まで話の中に入れてませんでしたけど、ようやくお話出来ましたね」

？「それは風達もですよ〜」

？「正直、いつ終わるのかずっと待ってましたよ」

—「え？」

確かに聞き覚えのある声の方を向くと・・・そこには、この世界に来て最初に出会った二人の少女が立っていた。

—「風！ 稟！ キミ達も魏にいたのか」

風「はいです〜。お兄さんが華琳様達と面識があるとは思ってませんでしたよ〜」

—「以前、華琳達の所で世話になってた時があっただけな」

真「なるほど、ですから真名で呼んでいるのですね」

「「そういう事だ」

霞「なあなあ！　いつその事宴でも開こうや！！」

季「さんせ〜い！！！」

華「そうね・・・そうしましょうか」

霞「おっしゃあ！！　これでぎょうさん酒が飲めるで！！！」

春「お前が飲みたいだけではないのか？」

霞「たはは・・・ばれた？」

秋「やれやれ・・・華琳様、私もお手伝い致しましょうか？」

凧「で、では私も！」

沙「待つ凧ちゃん！」

真「唐辛子ビタビタは許さへんで！」

凧「ち、違う！！　私はただ、師匠に私の料理を食べて頂きたいと思っただけで・・・」

華「ふふっ、なら秋蘭、凧、あなた達も厨房に来なさい」

秋「わかりました」

凧「お、お任せ下さい!!」

華「でも一成、せっかく私を抱く機会が得られそうだったのに・・・  
もうこんな機会は巡って来ないかもしれないわよ?」

一「そういう行為は、本当に好きになった相手とだけするべきだ。  
キミが俺の事を好きになってくれたその時は、キミを抱かせて欲しい」

華「ツ~~~~~ノノ」

一「ははっ、なんて冗談だ・・・」

華「し、秋蘭! 凧! 流琉! いますぐ厨房に向かうわよ!!」

秋・凧・典「「「ぎ、御意!」」」

三人を引き連れ、華琳は顔を真っ赤にさせながら玉座の間を出て行った。

一「どうしたんだ華琳?」

真「いや! どう考えても兄さんの所為やろ!!」

一「?」

稟「か、一成さんと華琳様が・・・ブハツ!!」

風「あららやっぱり。は〜い稟ちゃん、トントントントント〜」

桂「（やっぱり・・・こいつは殺るしかない!!）」

霞「どしたん桂花？」

桂「な、何でもないわ・・・」

その夜に開かれた宴で食べた華琳達の料理は、今までこの世界で食べて来た料理の中で最高の美味さだった・・・

第六十三話 おおげさな謝罪はこっちが申しわけなくなる（後書き）

作「今回はお前の甘さがいい結果を呼んだな」

一「華琳もいつもの調子が戻ったみたいだな」

作「そして・・・またお前の自覚無き一撃が放たれたな」

一「そんなの放ったか俺？」

作「思い出してみろ！」

一「・・・ああ」

作「わかったか？」

一「そういえば、まだ霞に許してもらってなかった」

作「そつちかよー!!」

第六十四話 大切な人の言葉は覚えているものだ（前書き）

目的は果たしましたが、少しでも魏に留まらせませぬ。

第六十四話 大切な人の言葉は覚えているものだ

—「……朝か」

寝台から体を起こす。宴は夜遅くまで続き、結局、部屋まで借りてそのまま一泊してしまった。

—「久しぶりに戻って来たんだ……みんなの様子でも見てみよう」

城の中を見て回る事に決めた俺は、早速部屋を出た。

沙「今日の警邏担当はお前らなの！」

兵「さー！ いえっさー！！」

—「ん？」

中庭を覗くと、沙和が兵達に向かって指示を飛ばしている姿が見えた。

沙「ウジ虫なお前らでもないよりマシなの！！ しっかり街の治安を守るの！！」



兵「さー！ いえっさー！！」

沙「声が小さいの！」

兵「さー！！ いえっさー！！！」

—「……え？」

おかしい、沙和のあれは一刀君のアイデアだったはずだ。だが、その一刀君はこの世界にいない。なら誰が彼女に教えたんだ？

凧「あ、師匠。おはようございます」

—「お、おはよう。ところで、沙和のあれは一体……」

真「驚いたやろ？ あれはな、沙和が偶然見つけた本に載ってあった方法なんよ」

—「本？」

凧「はい。それを呼んで以来、沙和はずっとあの方法をとっているのです」

……どうやら、一刀君がいろいろいるまいが、彼女があの方法と出会うのは決定事項みたいだったようだな。

—「これがご都合主義か・・・」

凧「何かおっしやいましたか？」

—「いや、何でもないよ。それにしても、ずいぶん気合いが入ってるな」

真「そらまあ、沙和は隊長やからな」

—「え？」

沙和が隊長？ てつきり凧が勤めていると思っていたが・・・

凧「沙和は、師匠が魏を去られる時に言われた言葉を胸に、ずっと頑張っていました」

沙和・・・警備隊の仕事、頑張ってくれよ？

真「ウチらもちろん頑張ったけど、その中でも沙和が一番やった。ほぼ毎日警邏に出ったし、騒ぎの収束も沙和が先頭になってやっとなしな」

凧「あれほど真剣に何かを努める沙和の姿は今まで見た事ありませんでした。それほど、師匠のご期待に添えるよう頑張っていたのです」

沙「では、今から街に出るの！ それぞれ準備を整えてまたここに集まるの！」

兵「さー！ いえっさー！！」

沙「もたもたしないの！！ さっさと動くの！！」

兵「さ、さー！ いえっさー！！」

—「沙和」

頃合いを見計り、俺は沙和に声をかけた。

沙「え？ か、一成さん！？ どうしてここに！？」

—「中庭から沙和の声が聞こえてな、自然と足がこつちに」

沙「じゃあ、今も見えたの？」

—「ああ」

沙「は、恥ずかしいの！！」

沙和は顔を真っ赤にさせ、手をバタバタと動かした。

—「何で恥ずかしがるんだ？　しっかり指示を出せていたじゃないか」

沙「そ、そうかな？」

—「ああ、流石隊長だな」

沙「え？　何で沙和が隊長だって知ってるの？」

—「二人に教えてもらったんだよ」

沙「そうなんだ・・・ねえ一成さん。沙和、ちゃんと一成さんの期待に応えられてるかな？」

—「もちろんだ。キミが隊長になってくれて本当によかったよ」

沙「え、えへへ・・・嬉しいの／＼」

凧・真「むっ・・・」

—「？　どうしたんだ二人とも？」

凧「沙和、私の担当はどの地区だ？」

沙「え？　凧ちゃん、今日はお休み・・・」

真「ウチも今日は一日中やからな。気合い入れんと」

沙「真桜ちゃんは午前で終わりじゃ・・・」

凧「さあ、行くぞ沙和！」

グイ！

沙「ま、待つのに！ まだみんな集まってないの！」

真「来んヤツは置いていけばええんや！！」

沙「きゃ~~~~！！！！」

二人に引き摺られ、沙和は消えて行った。

兵「あの・・・私達はどうすれば？」

一「・・・追いかけてあげてくれ」

兵「わ、わかりました」

兵達も慌てて三人の後を追って行った。

一「本当に頼もしくなったな三人とも。嬉しい限りだ」

凧「何が嬉しいんですか~~~~？」

向こうから風がやって来た。

「「「やあ、おはよう風」

風「はい。おはようございますですよ〜」

「「「稟は一緒じゃないのか？」

風「稟ちゃんはお仕事です。そして風はお休みなのですよ」

「「「そうなのか。じゃあ、少し話でもしないか？」

風「いいですよ。ではこちらに〜」

そう言って風は、中庭でお茶が楽しめるように設置されている机と椅子のある場所まで俺を引っばった。

風「お兄さんお兄さん。ちょっとこの椅子に座ってください」

「「「座ればいいのか？」

風「そうです〜」

とりあえず、言われた通りに椅子に座った。

「これでいいのか？」

風「はい。では失礼しますね。」

ポスツ・・・

「風？」

風は、別の椅子ではなく、俺の膝の上に座って来た。

風「風としては、こっちの椅子の方がいいですよ。」

「ははっ、なら最初からそう言ってくればよかったのに」

ナデナデ

風の頭を撫でると、彼女は気持ち良さそうに目を細めた。

風「はっ。お兄さんの手は気持ちいいですね。」

「そうか？」

風「何か気持ち良くさせるような物質でも出してるんじゃないですか？」

—「まさか・・・無意識にオーラを放出しているのか？」

そんなはずはない。ちゃんとコントロールしているはずだ。

風「どうしたんですかお兄さん？」

—「・・・」

風「あややく。何か考え中みたいですね」

季「あれ？二人とも何してるの？」

典「こんにちはは秋月さん」

—「・・・」

季「兄ちゃん？」

風「何やら考え」との最中みたいですよ

季「えい」

トス



—「……はっ」

フツと意識を戻すと、不思議そうに俺を見つめている季衣と典章の姿があった。

—「あれ、二人とも、いつの間に？」

風「お兄さんが考え事をしている間にですよ」

—「そうか。気付かなくてすまない」

典「何を考えていたんですか？」

—「ん、気にしないでくれ。どうでもいい事だから」

季「気になるな〜。教えてよ兄ちゃん」

風「風も気になるのですよお兄さん」

—「秘密だ」

季「え〜〜!!」

—「ははは」

典「……」

そんな俺達のやりとりを、典章は黙って見つめている。

―「? どうしたんだ典章?」

典「あ、あの・・・私も兄様とお呼びしてもいいでしょうか?」

―「え?」

典「少しでも秋月さんと打ち解けたいですし、その・・・季衣が楽しそうにそう呼んでいるのを見てちょっとだけ羨ましく思っています・・・」

―「もちろん構わないぞ。キミの好きなように呼んでくれ」

典「あ、ありがとうございます兄様!」

これで、典章が兄様で美羽が兄様か・・・やっぱり様付けは少しくすぐりたいな。

典「では兄様、私の事も真名でお呼びください。私の真名は流琉です」

―「なら、そう呼ばせてもらおうよ。よろしくな流琉」

流「はい!」

季「よかったね流琉！」

風「さすがですねお兄さん。早速一人落とししましたね〜」

—「落とす？」

流「な、何を言ってるんですか!？」

風「ふっふっふ・・・風にはお見通しなのですよ」

季「ねえ兄ちゃん！ 一緒にお昼ご飯食べようよ!」

—「もうそんな時間か・・・」

気付けば結構な時間を過ごしていたみたいだ。

—「よし、なら街に出て・・・」

流「兄様、よければ私がお作りしましょうか？」

—「それは嬉しいな。昨日食べた流琉の料理はとても美味しかったし、これは期待出来そうだし」

流「そ、そんな・・・/」

—「風も一緒にどうだ？」

風「そうですね〜。せっかくだし、一緒にさせてもらいますね

」

厨房に向かうと、早速流琉は調理の準備に入った。

流「では、少し待っていてくださいね」

—「何が出て来るんだろうな」

流「それは出来てからの楽しみです」

流琉の調理風景を眺めつつ、季衣や風と雑談を交わす。

—「そういえば季衣。武器はどうなったんだ？」

シ水関での戦いで、俺は彼女の鉄球を真っ二つにしてしまった。

季「岩打武反魔の事？ うん、あの後すぐに直したから大丈夫だよ」

—「そうか」

季「しっかし驚いたな〜。剣で反魔を斬っちゃうんだもん。兄ちゃんってホントに凄いやね」

風「あれを斬っちゃったんですか？ お兄さんはやっぱり出鱈目で

すね  
「

—「むう・・・最近滅茶苦茶やら出鱈目やら言われる事が多いな」

季「だってホントに滅茶苦茶なんだもん」

自重した方がいいのか？

流「お待たせしました！」

俺達の前に、たくさんの料理が並べられた。

—「よし、じゃあ早速・・・いただきます」

季「いただきます！」

風「頂くのですよ〜」

流「はい、召し上がれ」

期待していた通り、流琉の料理はどれもこれもとても美味しく、俺は箸を止める事が出来なかった。

季「やっぱり流琉の料理は最高だね！」

流「ふふっ、おだてたって何も出ないよ季衣？」

—「季衣の言う通りだ。こんな美味しい料理をいつでも食べられる華琳達が羨ましいよ」

流「も、もう！ 兄様まで・・・！」

風「こうして、着々と旗を立てていくお兄さんなのでした」

—「何か言ったか風？」

風「いえいえ、ただの独り言ですよ〜」

昼食を済ませた俺達は、再び中庭でまったりとした時間を過ごしていた。

季「兄ちゃん、膝枕してよ」

—「固くてもいいならどうぞ」

季「わ〜い、やったね」

風「ではでは、風も失礼するのですよ」

右膝に季衣、左膝に風の頭を乗せ、優しく撫でる。

—「流琉はどうする？」

流「私は、兄様の隣で」

そう言って、流琉は俺の隣に腰掛けた。

季「ふわあ……」

—「季衣？」

季「……むにゃ」

—「眠ってしまったのか？」

風「仕方ないですよ。風も何だか眠く……」

—「？」

風「……ぐう」

—「おいおい。キミもか」

流「……」

—「流琉、すまないが……」

流「……すう」

流琉の頭が俺の肩に乗せられた。そして、聞こえて来たのは規則的な呼吸音。

「……………動けん」

こうなつては仕方ない。彼女達が目を覚ますまで、ジツとしておこう。

季「兄ちゃん……………」

風「お兄さん……………」

流「兄様……………」

彼女達が目覚めた頃、日はすっかり傾いていた。流琉には謝られたが、たまにはこんな日があってもいいだろう……………

「……………つて、また出発出来なかった」





第六十五話 何事にもタイミングというものがある(前書き)

結局長居してるし。

## 第六十五話 何事にもタイミングというものがある

華琳SIDE

偶然昼からヒマになってしまった私は、一成を探して城内を歩き回っていた。

華「（どうせ予定もないだろうし、せつかくだから付き合っただけなんだから）」

別に、久しぶりに一緒に過ごしたいか思っているわけじゃない。ただ、思いついたのが彼だっただけの話だ。

華「・・・って、誰に言い訳してるのよ私」

頭を振り、私は廊下を歩く。

華「それにしても・・・部屋にいないとなると何処に・・・」

？「では、お願いします師匠！」

？「どれくらい強くなったのか楽しみだな」

華「今の声は……」

中庭を覗くと、一成と凧、沙和、真桜の四人が、武器を持って向かい合っていた。きつと鍛練の最中なのだろう。

沙「まずは沙和からなの！」

双剣を構えた沙和が一成に斬りかかった。

沙「くろす……でいばいだーなの!!」

華「あれは……」

間違いない、一成の技だ。けど、速度もキレも甘い。当然のように一成に受け止められた。

一「驚いた……まさか俺の技を使うとはな」

沙「見よう見まねなの」

一「なら、お手本を見せてあげるよ」

沙「え!? い、いいの! 遠慮するの!-!」

「くろす……でいばいだー!!」

ガギン!

沙「きゃ~~~~!?!」

何とか受け止めたものの、沙和は防御の上から吹き飛ばされた。

凧「馬鹿者! 真剣にやれ沙和!」

沙「さ、沙和は真剣にやったの!」

「もう少し振り抜きを速くすれば実戦でも使えると思うぞ」

沙「ホントなの?」

「ああ」

沙「えへへへ。これで沙和も一成さんと同じ技が使えるの」

満面の笑みの沙和。よっぽど嬉しいみたいね。

真「よし! 次はウチや!」

螺旋槍を振るいながら、真桜が前に出る。

「いつ見ても惚れ惚れするな。キミの螺旋槍は」

真「おお〜！ 兄さんも螺旋の良さがわかるんか？」

「どり・・・螺旋は男の浪漫だと誰かが言ってたのを覚えている」

真「そうや！ 浪漫や！ ウチの螺旋は天を突く螺旋なんや！」

盛り上がる二人・・・螺旋ってそんなに魅力的なのかしら？

「いくぞ真桜・・・その螺旋で、俺を突いてみせろ！」

真「上等や！ ケガしても知らんで兄さん！」

華「（どうするつもりなのかしら？）」

真桜の螺旋槍の恐ろしさは、攻撃を仕掛けても、回転する螺旋部分に弾かれてしまう所にある。攻撃と防御が同時に行えるあの槍に正面から立ち向かうのは無謀だ。

真「そりゃあああああああ！」

それに加え、真桜自身の突進力もかなりのものだ。あのような至近距離では、回避の成功率は限りなく低い。

華「（あくまで・・・なみの武人ならね）」

スツ・・・

相對しているのはあの一成だ。槍が突き刺さる瞬間、彼は静かに半身をずらして回避した。

一「でゆあるえっじ！」

ザシュ！

真「のわっ!？」

一 成の反撃を受けた真桜が崩れ落ちた。当然だが峰打ちだ。

一 「槍の持ち味は正面からの突破力だ。けど、その反面、一点からの攻撃という特性上、他方からの攻撃に弱いという部分もある」

真「兄さんの言う通りや。避けられるとどうしても隙が出来てまうんよ」

一「だけど、真桜の突破力はかなりのものだし、外すのを恐れてそれが弱くなってしまうのもな・・・」

真「え？　ウチ・・・もしかして褒められとる？」

一「ああ。大したものだよ真桜」

真「へ、へへ・・・そっか。なんか嬉しいな」

一「キミは、弱点を補うより、長所を伸ばした方がいいと思うよ」

真「わかった！　おおきにな兄さん！」

自身の力を褒められ、満足げに微笑む真桜。

華「（・・・指導者としても優秀みたいね。彼に出来ない事ってないんじゃないの？）」

凧「では師匠、最後は私とお願いします！」

一「わかった。なら、俺も武器を変えさせてもらおう」

一成の双剣が消え、新たに手甲が装備される・・・どういう原理なのかしらあれ？



凧「はあああああああ!!」

気弾を放つ凧。しかし、一成は片手でそれを弾き飛ばす。その隙を狙い、凧は一成の右方から跳びかかった。

—「ッ！ 凧か!？」

凧「せやあつ!!」

ドガ!

凧の拳が一成の顔面を捉え・・・

—「・・・危なかった」

凧「くっ・・・!」

放たれた拳は、すんでの所で防がれていた。凧はすぐに後方にさがる。

—「凄いな凧・・・気弾の威力も、拳の威力も、別れる前とは段違

いだ」

凧「これも師匠の教えのおかげです。私はその通りに鍛練を続けただけですから」

一「はは、謙遜しなくてもいいよ。凧が頑張ったから努力が実を結んだんだろ？」

凧「あ、ありがとうございます／＼」

顔を赤らめる凧・・・ああいう事を躊躇いなく口走るから性質が悪いのよね。

一「？ 凧、顔が赤いけどどうかしたか？」

凧「い、いえ！ 何でもありません！」

華「（本人は全く気付いてないし・・・もしかして、ワザとじゃないわよね？）」

一「さて・・・そろそろアレを見せてもらおうかな」

凧「はい！ いきます！ 爆砕・・・跳天昇ーーーーッ！！！！」

凧が拳を掲げ、地面に向かって叩きつけた。同時に、彼女の身長の倍ほどの気柱が一成に向かって伸びる。

—「はああああああ！！」

同じ様に、一成が気柱を放つ。両者の気柱がぶつかり合い、消滅した。

凧「どうですか師匠？」

—「驚いた・・・もう完全に使いこなしているといってもいいじゃないか」

凧「ほ、本当ですか？」

—「教えた者としては嬉しい限りだな」

凧「ありがとうございます！！！」

—「しかし・・・三人とも本当に見違えるくらい強くなったな。華琳達も驚いてるんじゃないか？」

凧「い、いえ、そんな事は・・・」

華「一成の言う通りよ」

頃合いを見計り、私は四人の前に進み出た。

沙「か、華琳様!？」

真「もしかして・・・見とったんですか？」

華「ええ。最初から最後までね」

—「華琳、俺の言う通りって？」

華「三人の強さに私達が驚いたって話よ。特に凧の伸びは凄いわね。以前、春蘭を相手に一本取った程ですもの」

—「春蘭から一本？ 凄いじゃないか凧」

凧「あ・・・あう・・・／＼」

華「沙和と真桜も、五回に一回は引き分けに持ち込めるくらいになってるわ」

真「なんや・・・凧の後やと大した事のないように聞こえるな」

沙「で、でもでも！ 引き分けでも凄いの！ 昔の沙和なら引き分けどころか一瞬で倒されて終わりだったの!」

—「そうだな。真桜、もっと自信を持っていいと思うぞ」

真「う、うん・・・」

—「ところで華琳。今日は仕事はいいのか？」

華「昼からヒマになったのよ。それであなたに・・・」

—「俺に？」

華「……何でもないわ。その娘達に付き合っただけなさい」

—「？ ああ、わかった」

しょうがない。三人が強くなればそれだけ私の益になる。今日は春蘭でも誘おう。

二日後……

またも偶然昼からヒマになった私は、再び一成を探し回っていた。改めて確認するが、断じて彼と過ごしたいと思っているわけではない。

—「……」

前方から一成が近づいて来た。向こうも私に気付いたようだ。

華「あら、奇遇ね一成」

—「やあ華琳。どうしたんだ？」

華「実は・・・」

季「お~~~~い！ 兄ちゃ~~~~ん!!」

ギユ！

後方から走って来た季衣が一成の腰にしがみついた。

—「季衣？ どうしたんだ？」

季「僕今日非番なんだ！ 一緒に街に遊びに行こうよ！」

—「ああ、いいよ。というわけで華琳、俺は失礼するよ」

華「え、ええ。しっかり季衣を楽しませてあげなさい」

ま、まあ、季衣はよく頑張ってくれているし、せつかくの非番を邪魔するのも悪いわね。

華「そうね・・・部屋に戻って休もうかしら」

さらに二日後・・・

華「今日こそは……」

ダダダダ！

華「……………」

—「すまない華琳！ 今は話しているヒマがないんだ！」

春「待てええええええ！！ 逃げるな秋月iiiiiiiiiiii！！」

—「ッ！ くそ！ もう追いついて来たか！」

ダダダダ！

春「逃がすか……！！」

目の前を、剣を持った春蘭が通り過ぎていく。私に気付いていないようだ。

華「ふ……ふふふ……まるで狙ったみたいに次から次へと……」

上等よ。こつなったら・・・

華琳 SIDE OUT

IN SIDE

霞「おはようさん一成」

「おはよう霞」

霞「そうや一成。ウチ今日非番なんよ。一緒に遠乗りでもせえへん？」

「いいな。俺でよければ付き合・・・」

華「一成・・・」

華琳がやって来た・・・何故か、凄まじいプレッシャーを放ちながら。

「ど、どつしたんだ華琳？」

華「今日一日、私に付き合いなさい」



—「え？ でも俺、今から・・・」

華「い・い・わ・ね？」

—「わ、わかった・・・」

有無を言わさぬ迫力に、俺は頷くしかなかった。

華「なら行くわよ。霞、後から来て悪いけど・・・借りていいわよね？」

霞「ど、どござござ！ いくらでもござぞぞ！」

華「ありがとう」

その日、陽が沈むまで、俺は華琳に付き合わされた・・・

第六十五話 何事にもタイミングというものがある（後書き）

作「溜めに溜めこんで最後にプツンする事ってあるよね？」

一「限度があるだろ。あの霞まで震えてたんだぞ」

作「霸王と呼ばれる彼女のプレッシャーだから無理もないと思うぞ。お前だってたじろいでたじゃないか」

一「ま、まあそうだが」

作「何とか理由つけて二人っきりになろうとする華琳様萌え」

一「萌えとか言っな」

第六十六話 目的を果たしたら速やかに帰りましょう(前書き)

魏編終了です。

第六十六話 目的を果たしたら速やかに帰りましょう

流「兄様、美味しいお魚が手に入ったんですが、一緒にどうですか？」

一「もちろん。ご馳走になるよ」

季「待つて〜！ 僕も食べた〜い！」

・・・

稟「か、一成さん！ 私と一緒に街に・・・ぶはっ！」

風「あらら〜、稟ちゃん。誘う前に倒れたら駄目じゃないですか。というわけでお兄さん、今日は失礼するのですよ」

一「・・・何だったんだ？」

・・・

桂「ちょっとあんた。手伝わせてくれって言うから仕方なくだけど、ちゃんと仕事しなさいよ！」

一「わかってるよ」

・・・

春「勝負しろ秋月~~~~!!」

—「秋蘭、彼女を止めてくれ・・・」

秋「あんなった姉者は止められんよ。すまんが付き合っっちゃってくれ」

・・・

霞「一成、今日の夜一緒に月見酒でもせえへん？」

—「いいな。じゃあ、つまみを用意しておくよ」

・・・

凧「師匠！ 今日もよろしくお願いします!」

—「こちらこそ、よろしくな」

沙「今日こそ一成さんに触れてみせるの!」

真「なら、ウチから行かせてもらうで! 勝負や兄さん!」

・・・

「・・・って、いつまで留まってるんだよ俺」

華「何を言ってるのあなた？」

俺の生存を知らせるという目的を果たした以上、今度こそ桃香達の所に戻る時が来た。にも関わらず、毎日のようにみんなと過ごし、今だって華琳とお茶を楽しんでいる自分がいた。

「いや、そろそろ桃香達の所へ戻ろうと思ってな」

華「あら、連日のように騒いでいたのに、飽きたらすぐにさよならなんて・・・酷い男ね」

「そ、そんなつもりじゃないぞ。寝る所も食事も用意してくれてとてもありがたかった。けど、本来俺がいるべき所は・・・」

華「ふふっ、言ってみただけよ。あなた、結構からかいがあるわね」

「勘弁してくれよ・・・」

華「それで、出発はいつにするの?」

―「そうだな・・・明日の早朝にするか」

華「そう。劉備は今、徐州で太守の身についているそうよ。あなたなら・・・そうね、一週間もかからないんじゃないかしら」

―「そうか。教えてくれてありがとう華琳」

華「けど、私の前から去った時点で、あなたは再び私の敵よ。近い内に劉備を倒して、今度こそあなたを手に入れてみせるわ。その事をしっかり胸に刻んでおきなさい」

―「望む所さ。けど、桃香達を甘く見ない方がいいぞ」

華「それこそ望む所よ。簡単に決着がついても面白くないもの。孫策との戦いでの欲求不満を、劉備で存分に晴らさせてもらうわ」

不敵に笑う華琳。

―「ははっ、もう完全にふっきたみたいだな。それでこそ俺の好きな華琳だよ」

華「え・・・？」

―「いつでも自信に満ち溢れ、正々堂々と決着をつけようとする気高い心。キミのそういうった姿が俺は好きなんだ」

華「・・・」

一瞬、頬を赤らめた華琳だが、すぐに不機嫌そうな顔になった。

一「ん？ 何かまずい事言ったか俺？」

華「・・・そうね、あなたはそういった人だものね。期待した私が馬鹿だったわ」

一「期待？」

華「な、何でもないわ」

翌日、少々（というには多過ぎるくらい）の路銀を貰い、俺は魏を後にした。前回のように、みんなで見送りに来てくれたのがとても嬉しかった。

・・・

・・・

・・・

一「・・・って魏を出てから今日で一週間か」



俺は現在、徐州に最も近い街に辿り着いていた。ここから半日歩けば、桃香達のいる徐州だ。

「とりあえず、少し休んだらすぐに向かおう・・・」

そういつて歩き出そうとした俺の目に、一人の女の子の姿が入った。ソワソワと動き、歩いている人達の顔を熱心に眺めている。

「どうしたんだろう？」

気になった俺は女の子に近づいた。

「こんにちは」

少女「え？」

話しかけると、少女はキョトンとした表情で俺を見上げた。まさか、話しかけられるとは思ってなかったのだらう。

「何かあったのかい？ 妙にソワソワしているみたいだけど」

少女「あ、あのね・・・お母さんとはぐれちゃったの」

なるほど、迷子か。女の子は不安げに表情を曇らせる。「ここまで聞いた以上、当然放っておくわけにはいかない。

「わかった……。もしよければ、俺もお母さんを探すのを手伝うよ。」

少女「いいの？」

「もちろんさ。」

女の子を安心させるよう、優しく頭を撫でた。すると、彼女の表情がようやく明るくなった。

少女「じゃあ、えつと……。よろしくお願いします。」

「ははっ、礼儀正しいね……。っと、そういえば、キミの名前を聞いてなかったな。教えてくれないか？」

少女「璃々！」

璃々と名乗った女の子と手を繋ぎ、街中を歩きまわる。だが、彼女のお母さんは中々見つからなかった。

—「璃々ちゃん、ちょっと休憩しようか」

璃「うん」

ちょうど目の前に肉まん屋があったので、何個か購入しようと近付くと、どこかで聞き覚えのある声が聞こえて来た。

?「もう！ 何でわたくしがこのような事をしなければなりませんの！」

?「しょうがないですよ麗羽様。あたいらは文句を言える立場じゃないですから」

?「そうですよ。劉備さんが受け入れてくれなかったら、今頃私達大変な事になってましたよ」

?「名家のわたくしを受け入れるのは当然ですわ！」

?「はあ……」

—「この声は……」

声はどんどん近付いてくる。やがて、声の主が姿を現した。

袁・文・顔「……え?」「」

—「ああ、やっぱりキミ達だったか」

そこにいたのは、反董卓連合戦で、少しだけ顔を合わせた、袁紹、文醜、顔良の三人だった。

文「み、みみみみ御遣い!? あんた死んだはずじゃ!?」

顔「で、でも! あの姿は間違いなく御遣い様だよ!？」

文醜と顔良が驚愕の顔で俺を見つめる。どうやら、俺が死んだという噂はこんな所まで流れていたようだ。

袁「秋月様! わたくし、信じておりました! あなた様のような英傑が、華琳さんごときに殺されるはずはないと!！」

—「そ、そうか」

顔「あ、あの、今まで何をしていらしたんですか？」

—「実は・・・」

反董卓連合の勝利から今までの出来事を伝える。すると、袁紹が何故か涙を流し始めた。

袁「なんと・・・自身を盾にして孫策さんを救っただけでなく、その原因である華琳さんまでお許しになったなんて・・・。秋月様！わたくし、あなた様のその慈悲深いお心に感激の涙を禁じ得ませんわ！！」

—「・・・ええつと」

顔「き、気にしないでください。麗羽様ですから」

—「わ、わかった」

璃「ねえお兄ちゃん。その人達だあれ？」

俺の背後に隠れていた璃々ちゃんが尋ねる。

—「ちよつとした知り合いだよ」

文「ん？ その女の子どうしたんだよ？」

—「お母さんとはぐれてしまったらしい。それで、一緒に探している最中だったんだよ」

袁「秋月様！ わたくし達もお手伝い致しますわ！」

—「え？」

文「ちよつ！？ 何言ってるんですか麗羽様！？」

顔「私達、朱里ちゃんに頼まれてこの街の太守様に話をしに・・・」

袁「あなた達！　このような幼い少女が辛い目に遭っているのですわよ！　力になってあげるのが当然じゃなくて！」

顔「そ、それは・・・」

璃「お姉ちゃん達も一緒に探してくれるの？」

文・顔「う・・・」

あどけない視線を二人に向ける璃々ちゃん。それを直視した二人が断れるわけがなかった。

文「・・・よ、よし！　あたいらに任せな！　すぐに見つけてやるよー！」

顔「そ、そうだね！　私も協力するよ！」

璃「ありがとうー！」

満面の笑みの璃々ちゃん。やはり、子どものあの目に逆らえる者など存在しない。

二手に別れ、探し続ける事約半刻。・・・袁紹達が一人の女性を連

れて俺達に合流した。

袁「見つけましたわ秋月様！」

女性「璃々ー！」

璃「お母さ〜ん！！！」

女性の姿を確認した璃々ちゃんが、嬉しそうに駆け寄る。女性はすぐさま璃々ちゃんを抱き締めた。

袁「警備兵から、あの子と同じくらいの年の子を捜している女性がいると聞きましたの。それで、その女性を連れて来たのですが・・・どうやら当たりだったようですわね」

文「提案したのは斗詩ですけどね〜」

袁「わたくしが提案する前に斗詩さんが先を越しただけですわ」

顔「・・・もう、それでいいです」

一「そうだったのか。ありがとう袁紹。キミ達が協力してくれて助かったよ」

袁「あ、秋月様が・・・秋月様がわたくしにお礼を！！ ああ、わたくし、それだけで天にも昇る気持ちですわ！！！」

文「ちょっと麗羽様。戻って来てくださいよ」

袁「……………（へブン状態）」

顔「だ、駄目だよ文ちゃん。完全に入っちゃってる……………」

騒ぐ三人はとりあえず置いておいて、俺は女性と向き合った。

女性「本当に、ありがとうございます」

—「いえ、俺は当然の事をしただけですから」

女性「久しぶりに友人に会うためにこの街に来たのはよかったのですが、ずいぶんと様変わりしていて、情けない話ですが迷ってしまったのです。しかも、璃々とまではぐれてしまっ」

—「それは大変でしたね」

女性「はい。ですから、あなた様方には本当に感謝しております。私は黄漢升。よければ、恩人様のお名前をお聞かせ願えないでしょうか？」

—「俺は秋月 一成です」

女性「秋月？……………まさか、あなたがあの……………」

—「はい？」



女性「……何でもありませんわ。それでは、私達はこれで失礼させていただきます」

璃「さようならお兄ちゃん！」

「お気をつけて」

最後にもう一度会釈をし、二人は去って行った。

顔「あゝんもう麗羽様……！！　しっかりしてくださいよ……！！」

袁「……あ、あら？　あのお二人は？」

文「麗羽様がポケーっとしてる間に行っちゃいましたよ」

袁「そうですか」

「改めてありがとう三人とも。おかげで璃々ちゃんもお母さんと無事に再会出来た」

文「ま、まあ放っておくのも後味悪いしな」

顔「そ、そうですよ。別にお礼なんて……」

袁「あ、秋月様の為なら、わたくしは何でも致しますわ！」

頭を下げると、三人は照れくさそうにはにかんだ。

—「さて……これでようやく徐州に向かう事が出来るな」

袁「秋月様！ でしたら、ぜひわたくしもお供させてください！」

—「え？」

顔「で、ですから麗羽様。私達にはまだやる事が……」

袁「なら、すぐに終わらせてみせますわ！ 秋月様、申し訳ありませんが、少しの間お待ちになって頂いて構わないでしょうか？」

—「あ、ああ、わかった」

袁「ありがとうございます！ では、行きますわよ二人とも！」

文・顔「ぎ、御意！！」「」

袁「おーっほっほっほ！！」

高笑いを響かせながら、袁紹達は街中へと消えていった。それからきっちり三十分。再び高笑いを響かせて三人は戻って来た。

袁「お待たせ致しましたわ！」

—「は、早いな」

袁「秋月様をお待たせするわけにはまいりませんもの」

顔「凄かったね文ちゃん。麗羽様、あっという間に太守様を説き伏せちゃって（ボソボソ）」

文「あんな真剣な麗羽様初めて見たよ。こりゃあ本気で惚れちまつたみたいだな〜（ボソボソ）」

袁「では秋月様！ わたくしが徐州までご案内いたしますわ！」

—「ああ、よろしく頼む」

袁「お任せください！ さあ、文醜さん！ 顔良さん！ グズグズしていると置いて行きますわよ！ わたくしとしてはそちらの方がいいですけどね」

顔「ま、待って下さいよ麗羽様〜！！！」

こうして、偶然袁紹達に出会った俺は、彼女達の案内の元、徐州へと向かった。仲間達との再会まで後少しだ・・・

第六十六話 目的を果たしたら速やかに帰りましょう(後書き)

作「どうにか桃香達の所へ帰らせる事が出来たな」

一「おい、袁紹達はまだしも、こんな所で彼女達に会わせるなよ」

作「まあまあ、顔を見せあっておけば、後からがスムーズだろ？」

一「だからといってだな・・・」

作「というかお前！ 十五話から別れてようやく戻る事が出来るんだからもっと喜べや！」

一「もちろん嬉しいが、つつこむ所はきちんとつつこんでおかないとな」

作「妙な所で真面目になるなよ！」

第六十七話 散々心配かけたんなら引っ叩かれても文句は言えない(前書き)

ようやく帰って来ました。ここからが本番ですね。

第六十七話 散々心配かけたんなら引っ叩かれても文句は言えない

麗「一成様！　ここが徐州ですわ！」

街の入口に立つ麗羽（道中の間に真名を覚えてもらったので、こっちも名前で呼ぶよう頼んだ）。

「ここまで色々あったけど、やっとみんなに会えるんだな」

しみじみと呟く。まあ、こうなった原因の半分以上は俺の所為だが。

麗「では一成様、お城までご案内いたしますわ」

「え、でも、徐州まで案内してもらっただけでも充分なのに、そこまでしてもらうわけには」

斗「私達も報告しなければならぬ事がありますから」

猪「そのついでってわけさ。だから気にすんなよ」

「そうか・・・そういう事なら頼むよ」

麗「お任せ下さい。劉備さん達との感動的な再会を演出して差し上げますわ」

猪「麗羽様、余計な事しない方がいいと思っんですけど」

麗「何かおっしやいましたか？」

猪「・・・何でもないっす」

—「斗詩・・・」

斗「だ、大丈夫です。いざとなったら私と文ちゃんて絶対止めますから」

不安を感じつつ、俺は三人と城に向かった・・・

S I D E O U T

城の一室では、将や軍師を交えての軍議が行われていた。

愛「だから何度も言っているだろう！ ご主人様のお命を奪った魏をこのまま置いておくわけにはいかん！」

星「ならばどうする？ 曹魏は我等の何十倍もの国力と兵力を持っている。その様な敵とまともに戦えると思っっているのか？」

愛「私が曹操を討つ！ それで全てが終わる！」

星「それこそ不可能だ。たどり着く前に押し潰されて終わりだ」

愛「ならば諦めろというのか！ 我等のご主人さまを殺したヤツ等を放っておけというのか！ 星、お前はご主人様を喪って何も思わないのか！」

冷静に愛紗の言葉を受け流していた星だったが、その一言に食ってかかった。

星「そんなわけないだろう！！ 私は冷静になれと言っているだけだ！！」

一成の訃報が届いてから、劉備軍は真つ二つに分かれていた。即ち、曹操に復讐を望む者達と、そうでない者達だ。

前者は、愛紗、鈴々、そして、新たに仲間に加わった恋と陳宮の四人。

後者は、桃香、星、朱里、雛里、恋と同じく新たに加わった白蓮の五人。

ちなみに、今ここにいない袁紹達も前者である。保護された月と詠は、そもそもこういつた事に関わらないので数に入っていない。



月「あの・・・お茶をお持ちしました」

お茶を持った月と詠が室内に入って来た。二人は侍女として新たな日々を送っている。

桃「ね、ねえ二人とも、お茶でも飲んで少し休憩しようよ」

愛「いえ、のどは渴いていませんので」

星「私も結構」

桃「そ、そつか・・・」

詠「ふん、毎日毎日よくも飽きないわね。どうせ平行線なんだから時間の無駄よ」

つまらなそうにそつ漏らす詠。当然のように愛紗が怒鳴る。

愛「無駄だと!? ご主人様の無念の晴らす事が無駄だといっのか  
!?!」

詠「そつよ」

愛「ッ!?!」

詠「だって・・・ボクは信じてるもの。あいつが、そう簡単に死ぬはずないって」

愛「え・・・」

今にも詠に斬りかかりそうだった愛紗だったが、その言葉に落ち着きを取り戻す。

詠「シ水関の戦いで、あいつはあんた達をたった一人で圧倒してみせたんでしょ？ そんなあいつが死ぬと思う？」

愛「・・・」

詠「ボクは思わない。あいつは絶対生きてる。それに、あいつ約束したじゃない。「次に再会した時、必ずみんなの元へ戻る」って。案外、今頃ここに向かって来てるんじゃないの」

月「そうですよ愛紗さん。一成さんは約束は必ず守ってくれます。だから、きつと生きてます」

愛「月・・・」

詠「だから無駄って言ったのよ。愛紗、あいつの事をそんなに思ってるあんたが信じないでどうするのよ。鈴々、恋、あんた達はどんなのよ？」

鈴「・・・そうなのだ。お兄ちゃんが死ぬわけないのだ」

恋「恋も信じる・・・一成強い。だから生きてる・・・」

陳「ちょ、ちょっと待つのです！　なぜねねには聞かないのですか！」

詠「どうせ、あんたは恋についてるだけでしょ」

陳「う・・・」

桃「ごめんね詠ちゃん。本当なら私が言わなきゃいけない事だったのに」

詠「べ、別に謝らなくていいわよ。どうせ、そっちは全員そう思ってたんでしょ？」

朱「うん。私もご主人様を信じてるから」

雛「私も・・・」

白「というか、秋月が殺される事自体想像出来ないからな」

星「やれやれ、詠や月の方がよっぽど主と深い信頼関係を築いているようだな」

月「へう・・・そ、そんな事ないです・・・」

桃香達が愛紗達を止めようとしたのも、今の自分達が曹操とまとも  
に戦えるとは思っていない部分もあったが、心のどこかで一成の生  
存を信じていたからである。

一触即発な空気からようやく解放されそうになったその時……

バン！

麗「ただいま戻りましたわ！」

勢いよく扉が開かれ、麗羽が姿を現した。

朱「え、袁紹さん！？」

雛「どうして！？」

麗「どうしてって……要件を終わらせて戻って来たからに決まっているではありませんか」

全員「え！？」

あっけらかんと答える麗羽に、その場にいる全員が驚愕した。

白「そ、そんな……麗羽がこんなに早く任務を終わらせるなんて」

星「二、三日は帰って来ないだろうと思っていたが……まさか、

その日の内に帰って来るとは」

鈴「大変なのだ！！ 袁紹がおかしくなったのだ！！」

麗「失礼にも程がありますわよみなさん！！ わたくしが本気になればこれくらい当然ですよ！！」

桃「で、でも袁紹さん。こんなに早く帰って来るなんて・・・何かあつたんですか？」

麗「そうですね。みなさん、わたくし素晴らしいお方をお連れしましたのよ」

愛「素晴らしいお方？」

麗「そのお方の顔を見れば、あなた達は泣いて喜び、お連れしたわたくしへの感謝の気持ちでいっぱいになるはずですよ！」

白「勿体ぶらずに早く教えろよ」

麗「せっかちな女性は嫌われますわよ白蓮さん。では・・・お入りくださいー成様！！」

全員「え・・・？」

斗詩と猪々子を連れ、一人の男性が姿を現した。その瞬間、室内の時間が止まった。

—「ずいぶん遅くなったけど・・・ただいま、みんな」

全員「ご主人様（お兄ちゃん）（主）（一成）（さん）（秋月）  
!?!?!?!?!?」

そして、一斉に彼の名を呼ぶ桃香達だった・・・

IN SIDE

恋「一成・・・!」

ドン!

麗「はぶっ!?!」

俺の前に立っていた麗羽を突き飛ばし、恋が抱きついて来た。

—「恋、桃香達の所にいたんだな」

恋「一成、生きてた・・・!」

—「ごめんな、心配かけて」

鈴「お兄ちゃああああああん!!」

グシヤ!

麗「ふぎやつ!」

倒れた麗羽を踏み超え、鈴々が右腕にしがみつく。

鈴「お兄ちゃん! 生きてるのだ? お化けじゃないのだ?」

「お化けじゃないよ。ほら、足がちゃんとあるだろ?」

鈴「うわああああああん!! よかった! よかったのだー!ー!ー!」

麗「……」

猪「麗羽様〜、大丈夫ですかあ?」

斗「あはは……やっぱりこうなっちゃった」

ピクピクしている麗羽を二人が助け起こす。麗羽は目を回していた。

月「一成さん、よくぞご無事で・・・」

詠「ま、まあ、ボクが信じてやったんだから当然よね」

「二人とも、ちょっと耳を貸してくれ」

月・詠「？」

「華雄と霏は生きている。今はそれぞれ呉と魏に仕えている（ヒソヒソ）」

月「ほ、本当ですか？（ヒソヒソ）」

「ああ。いつかまた二人と会えるから、その時までもう少し我慢してくれ（ヒソヒソ）」

詠「で、何であんたはそんな事知ってんのよ？（ヒソヒソ）」

「ちょっとした理由でまた二国に世話になったからな（ヒソヒソ）」

伝える事を伝え、顔を離す。いつになるかまだわからないが、洛陽にいた頃のようにまたみんな揃って宴でも開きたいな。

雛「朱里ちゃん・・・私、嬉しいのに涙が止まらないよ・・・」

朱「な、泣かないでよ雛里ちゃん。私も涙が・・・」



朱・雛「ふ、ふええええええええん！！」

抱き合って号泣する朱里と雛里。申しわけないと思う一方、何だか微笑ましいと思ってしまう俺は最低である。

星「やれやれ、女泣かせとは正にこの事ですな」

白「そういうお前も目が潤んでるぞ」

星「なっ!?!」

白「嘘だ」

星「くっ・・・白蓮殿にしてやられるとは」

白「ははは！ たまにはお返しさせてもらわないとな」

星「ならばこちらも・・・主、白蓮殿は、あなたが死んだと聞かされた夜に・・・」

白「ッ!? ま、待て星！ 私が悪かった！ だからそれだけは止めてくれ!!」

星「ククク・・・どうしましょうか」

「ははっ、相変わらずだな星」

この二人のやりとりを見てみると、帰って来たんだという実感がわく。

陳「よく無事だったんですね。ねねも一応心配していたのです」

一「俺も二人の事がずっと心配だったんだが、まさかここで会えるとは思ってなかったよ」

陳「あれから別の城を拠点として活動していた恋殿とねねは、討伐に来た劉備殿に敗北し、そのまま仕えさせて頂く事になったのです」

一「そうだったのか。ん？　そういえば、今恋の事を真名で・・・」

陳「ねねも真名を許して頂いたのです」

一「よかったな陳宮」

陳「・・・ついでにお前にもねねの真名を許してやるのです。音々音という真名ですが、ねねで構わないのです」

一「ありがとうねね。なら、俺の事も・・・」

ね「仕方ないですね。一成と呼んでやるのです」

彼女だけ真名を知らなかったので、ようやく教えてもらって嬉しかった。

愛「ご主人様・・・」

最後に、桃香と愛紗が俺の前に立った。

愛「私達がどれだけ心配したと思っているんですか？」

—「すまない」

愛「それだけですか？ 他に言う事はないんですか？」

—「もう何処にも行かない。これからは愛紗達とずっと一緒だ」

愛「本当ですか？ 本当に約束してくれますか？」

—「ああ、もちろん・・・ッ！」

そこで気付く。愛紗の目から一筋の涙が零れていた。

愛「絶対ですよ？ もう、私達の前からいなくならないでくださいよ..」

—「約束する。二度と愛紗を泣かせない」

愛「わ、私は泣いてなど・・・」

桃「愛紗ちゃん。我慢しないでいいんだよ」

愛「桃香様・・・」

桃「泣きたい時は思いつきり泣かなきゃ・・・ね？」

愛「あ・・・ああ・・・うわあああああああ！！！！」

桃香の言葉が一線を越えさせたのか、愛紗は俺の胸で全てを吐き出すように泣き始めた。俺は、左手で彼女の頭を優しく撫で続けた。

桃「ご主人様、愛紗ちゃんが一番苦しんでたんだよ。洛陽で再会した時、どうして力づくでも引き止めなかったのか。そもそも、一人旅を許さえしなければこんな事にはならなかったって、ずっと自分を責めてたの」

—「・・・すまない」

桃「ううん。ご主人様にはやらなきゃいけない事があったんでしょ？ だから愛紗ちゃんも止めなかったんだもん」

—「愛紗・・・」

愛「ご主人様！ ご主人様あああああ！！！！」

桃「ご主人様、愛紗ちゃんの気の済むまで泣かせてあげて。そうすれば、きつといつもの愛紗ちゃんに戻るから」

—「・・・（コクン）」

桃「えへへ、本当は私もご主人様の胸で泣きたかったけど、今回は愛紗ちゃんに譲ってあげなきゃね」

桃香も涙を流していたが、それでも笑顔を浮かべようとしていた。この娘は優しくして強い・・・改めてそう思った。

それから十分くらいは経過しただろう。徐々に落ち着きを取り戻した愛紗はゆっくりと俺から離れた。

愛「も、申し訳ありませんご主人様。お召し物を濡らしてしまつて・・・」

「愛紗の為だ。これくらいどうでもいいさ」

愛「あ、ありがとうございます／＼」

憑き物が落ちたように、愛紗は照れながら微笑んだ。

愛「ところで・・・お前達、いつまでご主人様に抱きついてる気だ？」

鈴・恋「ずっと(なのだ)」「」

愛紗の言う通り、恋と鈴々は、最初に抱きついて来た時からいまま  
で、背中と右腕にずっとくっついたままだった。

愛「何を言っている！ ご主人様にご迷惑をかけるんじゃない！」

鈴「ふーんだ！ 愛紗だって抱きついてたのだ！ なのに、鈴々に  
文句を言うのはおかしいのだ！」

恋「一成・・・迷惑？」

一「ん？ いや、別にそんな事はないぞ」

恋「よかった・・・」

愛「ご主人様！」

星「では、私も・・・」

ギョ！

星が左腕に抱きつく。動きが取れなくなって来た。

愛「星！ お前まで何を・・・！」

星「ほらほら、前が空いているぞ。久しぶりに主の感触を堪能しよ  
うとする者はいないのか？」

朱「ひ、雛里ちゃん！」

雛「うん！」

月「へう・・・どうしよう詠ちゃん？」

詠「な、何でボクに聞くの月!？」

桃「はい！　じゃあ私もー！」

麗「お待ちなさい！　わたくしを差し置いてそのような真似は許しませんわよ！」

猪「うわっ！　急に復活した！」

斗「（あっという間にみんなに笑顔が戻った・・・それだけ一成さんの存在がみんなにとって大切なんだな・・・）」

ね「はあ・・・これから騒がしくなるのです」

白「ははっ、やっぱりこうでないとな」

仲間達にもみくちゃんにされながら、俺は込み上げて来る嬉しさを止められなかった・・・

第六十七話 散々心配かけたんなら引っ叩かれても文句は言えない（後書き）

作「お帰り一成。これからまた楽しくなりそうだな」

一「ああ。こうしてまたみんなの顔が見れて本当に嬉しい」

作「ここからしばらくは存分に日常を堪能してもらおうぞ。離れていた時間をたっぷり埋めてくれ」

一「なんだ、妙に優しいような感じがするけど・・・何かあったのか？」

作「別に。ただ、ちょっと感慨深くなっちゃってな。よくここまで書き続ける事が出来たなって・・・」

一「まるで終わりみたいない方だな」

作「まさか。ようやく折り返し地点って所さ。話はまだまだ続くぞ」



第六十八話 監視？ いいえお供です（前書き）

蜀組の拠点イベントを始めます。

第六十八話 監視？ いいえお供です

再会の翌日、今まで迷惑をかけた分を取り戻そうと、俺は早速政務を執り行う事にした。

—「ん、これは・・・」

新たに開いた竹管を見て手が止まる。少しわからない部分があった。

—「朱里が雛里に聞いてみるか」

何かわからない事があつたら聞きに来てくれて構わないと言われていたので、俺は竹管を持って部屋を出た。

—「さて、まずは朱里の部屋に・・・」

愛「ご主人様！」

愛紗が血相を変えてやって来た。

—「愛紗？ どうしたんだ？」

愛「ご主人様、どちらへ行かれるおつもりですか？」

一「朱里の部屋にな。ちょっと聞きたい事があった」

愛「そうですか。では、私もお供いたします」

一「そんな、一人で大丈夫・・・」

愛「お供いたします！」

一「わ、わかった」

愛紗のそのあまりの剣幕に、俺は頷くしかなかった・・・

・・・

朱「・・・という事です」

一「なるほど、ありがとうございます朱里」

朱里の部屋を訪ね要件を伝えると、朱里は丁寧に教えてくれた。

愛「ご主人様、ご用件が済んだのでしたらお部屋にお戻りください」

後ろに控えていた愛紗が促す。

朱「あ、あの、何で愛紗さんまでここに？」

一「部屋を出た所でバッタリ会ってな、キミに会いに行くと言っただらお供するって……」

朱「（ご主人様と一緒にいたいからかな？ でも、それにしても嬉しそうには見えないけど……）」

一「とにかく助かったよ。じゃあ、俺は戻るから」

朱「はい、また何かありましたらいつでもいらしてくださいね」

朱里の部屋を後にし、自室に戻った。

愛「ではご主人様、私はこれで失礼させていただきます」

一「ああ、わざわざ付き合ってくれてありがとうございます愛紗」

愛「いえ、これくらい当然です。それからご主人様、どこかに向かう時は必ず誰かを連れて行くようお願いします。私でよければいつでも構いませんので」

一「それは……」

愛「いいですね？」

—「……了解」

それからというものの、何処へ行くにしても愛紗がついてくるようになった。

—「お腹空いたな。とりあえず厨房に……」

愛「厨房ですね、では行きましょう」

……

愛「中庭で鍛練ですか。では、私がお相手させて頂きます」

—「あ、ああ、頼むよ」

……

—「……」

愛「ご主人様。どちらへ？」

—「……… 厕所だ」

愛「し、失礼しました／＼」

・・・

—「・・・というわけなんだ」

街への誘いで部屋を尋ねて来た桃香に話してみると、彼女は苦笑いを浮かべた。

桃「あはは、大変だねご主人様。でも・・・私は愛紗ちゃんの気持ちわかるな」

—「愛紗の気持ち？」

桃「・・・不安なんだよ愛紗ちゃん。またご主人様がいなくなっちゃわないか心配で心配でしょうがないんだよ。だから、常にご主人様の傍に居ようとしてるんだと思う」

—「だが、俺はもうみんなから離れるつもりは・・・」

桃「うん、約束してくれたもんね。でもね、それでも愛紗ちゃんは心のどこかで怖れてるの。もしご主人様がまた消えちゃったら、今度こそ愛紗ちゃんは立ち直れなくなっちゃう。それだけ愛紗ちゃんはお主人様の事が大好きなんだよ」

—「・・・」

俺は何も言えなかった。今頃になって、愛紗の思いが痛いほど伝わって来た。同時に、彼女の思いに気付けなかった自分が腹立たしくなった。

桃「だからご主人様、愛紗ちゃんの事、邪険にしないであげてほしいの。愛紗ちゃんは本当にご主人様の事を・・・」

一「もちろんだ。そんなに想ってくれる相手を邪険にするなどとてもないからな」

桃「えへへ、よかった」

すると、噂の張本人が部屋に入って来た。

愛「ご主人様・・・あ、桃香様もこちらにいらしたのですか」

桃「愛紗ちゃん！ ちょうどよかった！」

愛「・・・と、申されますと？」

桃「今からご主人様と街にお出かけするんだけど、よかつたら愛紗ちゃんも一緒に行かない？」

愛「桃香様・・・今日のお仕事は？」

桃「もちろん終わらせてるよ」

愛「本当ですか？」

桃「ほ、本当だよお」

見つめ合う二人・・・やがて、愛紗が観念したように頷いた。

愛「わかりました。私でよければお付き合いたします」

桃「うんうん　そうと決まれば、早速しゅっぱーっ!!」

グイ!

—「うおっ!?!」

愛「きゃっ!?!」

腕を掴まれ、俺と愛紗は引き摺られるように桃香の後を走る。こっつして、俺達三人は街へと出掛ける事になった・・・

.....



・  
・  
・  
・

・  
・  
・

少年A「あ〜〜！ 太守様だ〜〜！」

街に出ると、早速子ども達が桃香の周りに集まり出した。

桃「こんにちはみんな！ 元気だった？」

少女A「うん！ 私は元気だよ！」

桃「あはは！ よかったあ！」

少年B「今日はどうしたの？」

桃「遊びに来たんだよ」

少女B「じゃあじゃあ！ 私と遊んでよ！〜！」

少年C「僕も！」

桃香はあっという間に囲まれてしまっていた。

—「ははっ、凄い人気だな桃香」

愛「桃香様は常に民の事を第一に考えております。ですから、民達が桃香様をお慕いするのも当然です」

嬉しそうに話す愛紗。彼女自身桃香の事を慕っている節があるからな。

少年B「あ！ 関羽將軍もいる！」

一人の少年が愛紗を指差した。

少年C「將軍！ また僕に稽古つけてよ！」

愛「す、すまないが、今日は予定があつてな」

少年B「え〜、そうなの？ 残念だなあ」

—「愛紗、稽古つて？」

愛「えと・・・その・・・何人かに軽い武の手ほどきをしておりまして」

—「へえ、じゃあ、将来はその子達がキミの部下になるかもしれないな」

少年B「うん！ 俺、大きくなったら絶対將軍の部下になるんだ！」

少年C「僕だって！」

—「ははっ、キミも大人気じゃないか愛紗」

愛「うう・・・／＼」

照れているのか頬を染める愛紗。すると、今度は一人の少女が俺に近づいて来た。

少女C「お兄ちゃん、だあれ？」

そういえば、しれっと会話に参加しているけど、自己紹介してなかったな。

桃「ふっふっふ・・・みんな、聞いて驚かないでね。この人はね・・・天の御遣い様だよ！」

子ども達「な、なんだってー！ーッ！！」

一瞬、子ども達の顔が某調査団みたいな表情を浮かべたように見えたが・・・うん、気のせいという事にしておこう。

愛「と、桃香様！ いきなりバラしたりしては混乱が・・・！」

少年A「すげー！ 兄ちゃんが御遣い様なんだ！」

少女A「カッコいいな〜！」

少年B「俺知ってる！ 御遣い様って悪いヤツをやっつけて色んな人達を助けてくれるんでしょ？」

少女B「じゃあ、私達の事も守ってくれるのかな？」

—「あ、ああ。今までは用事があって離れてたけど、今日から俺も、桃香や愛紗達と一緒に、キミ達が幸せに暮らせるよう頑張るよ」

子ども達「わ〜〜い！！！」

俺達の様子を眺めていた周りの人達も話しかけて来た。

男性「あんたが御遣い・・・いや、ご主人様かい。これからよろしく頼むぜ」

—「え？ 何故ご主人様だと・・・」

女性「太守様や他の方々からよくお話を聞いておりました。それにしても・・・ふふ、皆様が夢中になるのもわかりますね」

桃・愛「ッ・・・ノノ」

「そうでしたか。こちらこそ、どうかよろしくお願いします。．．  
．．ところで、どうしたんだ二人とも？」

桃・愛「な、何でもない（よ）（です）！！」「」

「」？」「」

すんなりと顔合わせが終わってしまった。どうやら好意的に受け入れてもらったようでホッとした。

それから、三人で街中を散策していたのだが、ある店の前で事件が起こった。

店主「ああ、太守様！　いい物が入りましたよ。ちょっと試してみませんか？」

桃「いいんですか？　じゃあ．．．」

愛「お待ちください桃香様！　まずは私が毒味を．．．！」「」

店主さんの前で言うセリフではない事を口走りながら、愛紗はそれを手にとって口に含んだ。

愛「う、これは．．．酒じゃにゃいかあ．．．」

フラフラ

途端に愛紗は顔を真っ赤にして千鳥足になった。

—「だ、大丈夫か愛紗？」

愛「じえんじえん大丈夫でしゅよ〜〜〜!!」

—「どう見ても大丈夫じゃないだろ・・・」

桃「愛紗ちゃん、お酒弱いから」

愛「うっ〜ん・・・」

ドサッ!

—「あ、愛紗！」

倒れ込む愛紗を急いで抱き起こすと、気持ち良さそうに寝息を立てていた。

桃「ね、寝ちゃったの愛紗ちゃん・・・？」

「仕方ない、帰ろう桃香。愛紗は俺が背負うから」

桃「うん。それにしても、いくらお酒に弱いからってあれだけの量で酔っ払っちゃうなんて、凄く強いお酒なんだね」

「星あたりは喜びそうだな」

桃「あはは、そうだね。店主さん、今度星ちゃんが来た時に勧めてあげてください」

店主「はい・・・何かすみません。余計な事をしてしまったようで・・・」

桃「気にしないでください。じゃあ、失礼しますね」

愛紗を背負い、俺達は城に向かって歩き出した。

愛「う・・・ううん・・・ご主人様・・・」

俺の肩に顔を乗せた愛紗が呻いた。

愛「ご主人様・・・行かないで。私の前から居なくならないで・・・」

ポロツ・・・

肩に感じる温かな感触・・・それは愛紗の涙だった。

桃「愛紗ちゃん・・・」

愛「ご主人様・・・行かないで・・・」

一「・・・大丈夫だよ愛紗」

俺は出来るだけ優しい感じで愛紗に話しかけた。

一「俺はここにいる。もう、キミの前から居なくなったりしないから」

愛「・・・」

眠っている彼女に話しかけても意味がない。だが、俺の言葉で彼女の涙は止まり、再び安らかな寝息を立て始めた。

桃「・・・ね？ 私の言った通りでしょ？」

一「そうだな。さすが桃香だ」

桃「これでもお姉ちゃんですから」



満足気に胸を張る桃香。

桃「ねえご主人様、また今度一緒にお出かけしようね」

—「ああ、また三人で必ずな」

桃「それもいいけど……私は一人つきりがいいな（ボソッ）」

—「ん？ 何か言ったか？」

桃「え、えへへ、何でもないよ！」

ギユ！

桃香が右腕にしがみついて来た。

—「桃香、今しがみつかれたら……」

桃「駄目？（ウルウル）」

—「……好きなだけしがみついてくれ」

桃「わーい、ありがとうご主人様」

バランスをとるのに苦労しつつ、俺達は城へと歩き続けた・・・

第六十八話 監視？ いいえお供です（後書き）

作「蜀でのイベント・・・まずは愛紗だ」

一「桃香もいたけど、メインが愛紗って事か？」

作「そういう事だ、桃香のイベントも別にやるぞ」

一「全員分か・・・いつ終わる事やら」

作「ネタ募集はまだ続いています。何かありましたらお願いします！」

一「他力本願は止めるとあれほど言っただろうが」

第六十九話 人はほんの少しの切っ掛けで変わる（前書き）

今理解した。全員って無理じゃね・・・

第六十九話 人はほんの少しの切っ掛けで変わる

鈴「あつ！ お兄ちゃんなのだ！」

—「おはよう鈴々。ずいぶん早いな」

鈴「今日は星と一緒に街の警邏なのだ。だから鈴々も早起きしたのだ」

—「なるほど、頑張つて来てくれ」

ナデナデ

鈴「ふあ・・・(ドキ!)」

いつものように鈴々の頭を優しく撫でる。すると、何故か彼女の体がビクツと震えた。

鈴「(な、なんなのだ。お兄ちゃんにナデナデされた瞬間、胸がドキツとしたのだ)」

—「鈴々？」

鈴「え、えつと・・・鈴々もう行くのだ！」

ダダダダ！

—「どうしたんだ？」

走り去る鈴々の後ろ姿を見送りつつ、俺は首を傾げた。

その翌日、中庭で手合わせをしている愛紗達を見かけた。

鈴「うりゃりゃりゃりゃ〜〜〜！！！」

ギン！

愛「甘い！〜！」

ギャリン！

鈴「愛紗の方が甘いのだ！！！」

ガギン！

—「みんな精が出るな」

星「おや、主ではありませんか」

鈴「ッ！ お兄ちゃ・・・」

愛「スキありだ！！」

ガキイイイイイン！！

鈴「うあっ!？」

愛紗の一撃を受けた鈴々が弾き飛ばされ、勝敗が決した。

—「すまない、邪魔をしてしまったか」

愛「いえ、ご主人様は何も悪くありません。戦いの最中に余所見をしたこやつが悪いのです」

鈴「余所見じゃないのだ！ お兄ちゃんの声がしたからそっちを見ただけなのだ！」

愛「それが余所見だと言っているんだ！」

「立てるか鈴々？」

鈴「ありがとうなのだお兄ちゃん」

尻餅をついている鈴々に手を差し出し、引き上げる。が、思いの外彼女の体重が軽く、力を入れ過ぎてそのまま抱き寄せる形になってしまった。

鈴「はにゃ！？」

「おっと、すまない鈴々。強く引つ張り過ぎたみたいだな」

鈴「（お兄ちゃんがこんなに近くに・・・な、なんか体が熱いのだ）」

愛「こら鈴々！　いつまでご主人様にくっついてるつもりだ！　早く離れんか！」

星「なんだ愛紗、ヤキモチか？」

愛「な、何故私がヤキモチなど・・・！」

鈴「り、鈴々・・・のどが渴いたからお水飲んで来るのだ！」

ダダダダ！



またしても走り去る鈴々。

星「やれやれ、次は私との手合わせだというのに、居なくなられては困るのだが」

愛「では、代わりに私が相手をしようか？」

星「いや・・・ここは主と戦いたい」

—「俺？」

星「受けて頂けますかな？」

—「わかった。付き合おうよ」

愛「で、では！ その次は私とお願いします！」

鈴々の様子を気にしつつ、俺は剣を発現させた・・・

さらに翌日、午前の仕事を終えた俺は、非番だった白蓮を連れて、昼食をとり、街に出た。

白「まさか、誘ってもらえるとは思ってなかったぞ」

—「迷惑だったか？」

白「そ、そんな事はないぞ。むしろ、忘れ去られていたと思ってたからな。ほら、私って、桃香達と違って普通だし、その所為で影も薄いし……」

—「俺はそう思わないけどな」

白「ほ、ホントか？」

—「白蓮は桃香の友達だろ？ キミの友達としての言葉が、桃香の支えになる。姉妹でも家臣でもない、友達のキミの言葉がな……」

白「そ、そうか。なんかくすぐつたいな。でも……ありがとう秋月」

—「どういたしまして。さて、そろそろ店を見つけて……」

?「オヤジ！ もう一杯なのだ!!」

白「この声は……」

声は近くのラーメン屋から聞こえて来た。のれんをめくると、そこには想像していた通りの人物が椅子に座ってラーメンを食べていた。

白「やっぱり鈴々だったか」

鈴「にゃ？ 白蓮お姉ちゃん。それにお兄ちゃんも」

—「美味しそうなラーメンだな。白蓮、俺達もここで食べよう」

白「そうだな」

店主「はいよ！ もう一杯！！」

鈴々の前に巨大なラーメンの丼が置かれた。

鈴「……………」

店主「？ どうしました張飛將軍？」

鈴「おかしいのだ。さっきまでお腹ペコペコだったのに、今は食べたくないのだ」

店主「なんですって！？ まだ十五杯目ですよ！？ いつもなら三十杯は召しあがるはずなのに！！」

白「食い過ぎだろ……………（苦笑）」

—「けど、確かにおかしいな。鈴々、どこか体の具合でも悪いのか？」

鈴「ううん、鈴々は元気いっぱいなのだ」

—「ふむ……………」

「ト・・・」

鈴「ッ!？」

鈴々の額に自分のを当て、熱を測る。

鈴「お、お兄ちゃん・・・/」

—「熱いな。それに、頬も赤い・・・やはり熱が」

鈴「ご、ごちそうさまなのだ!!」

ダダダダ!

店主「あっ! 張飛將軍! お勘定!!」

白「すまない店主。私達が代わりに払うから」

—「鈴々・・・本当にどうしたんだ?」

白「(あの慌てよう・・・まさか鈴々)」

これで鈴々を見送るもの三回目だが、未だに理由は不明だった・・・

S I D E O U T

鈴「うゝゝ、わかんないのだ」

城に戻った鈴々は、自室の寝台で横になっていた。

鈴「さつきからドキドキが止まらないのだ。鈴々、どうしちゃったのだ」

彼女を悩ませていたのは、先程の一成とのやりとりの事だった。一成と額を合わせたあの時、鈴々は今まで感じた事のないような気持ちになっっていた。

鈴「誰かに聞いたら、教えてもらえるのだ？」

そう思った鈴々は、早速自室を飛び出した。向かった先は、自分達の中で抜群に頭の良い者・・・即ち、軍師の朱里の部屋だった。

鈴「朱里ゝゝ！ いるのだゝゝ？」

朱「はわっ！？ り、鈴々ちゃん？」

雛「あわわ、ビックリしたよ」

鈴「にや？ 雛里もいたのだ。ならちようどよかったのだ」

朱「何かあつたの？」

鈴「聞いて欲しいのだ二人とも。鈴々……もしかしたら病気かも  
しれないのだ」

朱・雛「「ええ！？」」

鈴「鈴々……ドキドキが止まらないのだ！」

朱・雛「「……へ？」」

鈴「お兄ちゃんにナデナデされたり、ギュってされたり、おでこを  
くつつけたりしたら、鈴々、なんか胸がドキドキして顔が熱くなっ  
ちゃうのだ。これってやつぱり病気なのだ？」

鈴々の告白に、二人は啞然とした顔をした。

朱「ね、ねえ鈴々ちゃん。それってずっと前から？」

鈴「違うのだ。お兄ちゃんが帰って来てからなのだ」

雛「他に何か変わった事ってある？」

鈴「お別れする前よりずっとカッコよく見えるのだ。たまにお兄ちゃんの顔を見るとポーっとしちゃうのだ」

雛「朱里ちゃん、これってやっぱり……(ヒソヒソ)」

朱「うん、間違いないよ雛里ちゃん。とうとう鈴々ちゃんも……(ヒソヒソ)」

鈴「二人とも、ヒソヒソ話じゃなくて鈴々にも聞こえるように話して欲しいのだ」

朱「……わかったよ鈴々ちゃん」

鈴「ホントなのだ？」

朱里は、充分に間を開けると、ゆっくりと告げた。

朱「鈴々ちゃん……あなたは、ご主人様に恋しちゃったのです！」

鈴「こ……い……?」

雛「鈴々ちゃんは、ご主人様の事が好きになっちゃったの」

鈴「鈴々はお兄ちゃんの事好きなのだ」

朱「ううん、鈴々ちゃんの言う『好き』と、雛里ちゃんが言った『好き』は違うの」

鈴「？ どういう意味なのだ？」

雛「つまりね、今まで鈴々ちゃんは、ご主人様の事を『お兄ちゃん』として好きだったんだけど、今は『男の人』として好きになっちゃったんだと思うの」

鈴「男の人・・・それって恋人さんなのだ？」

朱「そうだよ」

鈴「恋人さん・・・恋人さん・・・」

反芻する鈴々。

鈴「・・・ま、またドキドキして来たのだ」

朱「これで間違いないね雛里ちゃん」

雛「恋人・・・ご主人様と恋人・・・／＼」

朱「ひ、雛里ちゃん！ 帰って来て雛里ちゃん！」

雛「・・・はっ、私、一体・・・」

朱「ほっ、よかった・・・」

鈴「わかったのだ。鈴々、お兄ちゃんの恋人になりたいのだ!!」



鈴々は、自分に言い聞かせるように大きな声でそう言った。

鈴「教えてくれてありがとうなのだ二人とも！」

礼を言った鈴々は、そのまま部屋を出て行った。

朱「ふふ、元気になったみたいでよかった」

雛「うん・・・でも、これで、ご主人様の競争率がっちゃったね」

朱「・・・うん」

雛「・・・」

朱「・・・」

雛「・・・頑張ろうね朱里ちゃん」

朱「・・・そうだね」

そう言って、二人は同時に溜息を吐いた・・・

第六十九話 人はほんの少しの切っ掛けで変わる（後書き）

作「鈴々みたいな妹がいたら・・・毎日のように頭を撫でまくってやるのに」

一「お前の場合、遊びに付き合ってブツ飛ばされるのがオチだろうな」

・・・

鈴「お兄ちゃ～～ん！！ 鈴々と遊ぶのだ～～！」

作「じゃあ、キャッチボールでもするか」

鈴「うん！ じゃあ、鈴々から投げるのだ」

作「よし、来い」

鈴「とりゃ～～～～！！！」

ギョオン！！

作「なっ！？ 速っ・・・！」

バゴツ!!

作「ごはっ! は、腹に直撃……」

ドサ!

……

—「運動神経ゼロのお前なら、きつとこんな事になる」

作「や、やっぱり鈴々は妹じゃなくて恋人の方がいいな!」

—「……ロリコンが」

作「ああもう! ああ言えばこう言いやがって!!」

第七十話 薬も使い方を誤れば毒になる(前書き)

スランプなう・・・

## 第七十話 薬も使い方を誤れば毒になる

愛「(あ、ご主人様・・・)」

廊下を歩く愛紗は、前方に一成の姿を発見し、あいさつを交わした。

愛「おはようございますご主人様」

—「おはよう愛紗。今日もとても綺麗だね」

愛「・・・へ？」

愛紗はポカンと口を開けた。一成の口から信じられない言葉が出て来たからだ。

愛「ご、ご主人様？ どうされたのですか？」

—「？ どういう意味だ？」

愛「い、今、私の事を綺麗だと・・・」

—「愛紗は綺麗だよ。キミほど綺麗な女性もいないな」

愛「なっ!?! 本当にどうされたのですかご主人様!?! どこか具合でも悪いのですか!?!」

「そうだな・・・キミが綺麗過ぎて立ちくらみしてしまいそうだよ」

愛「ッ!?!」

ボン!!

愛紗の顔が瞬く間に朱色に染まった。一成はにこやかに微笑み、愛紗の頬を撫でた。

「ふっ、照れているのか？　そういう奥ゆかしいところも好きだよ」

愛「う、う主・・・」

「愛紗・・・」

一成の顔がゆっくりと近づく中、愛紗はなけなしの精神力を振り絞って離れた。

愛「し、ししし失礼しますっ!?!?!」

ダダダダ！！

そして、そのまま廊下を走り去って行った。残された一成は、苦笑のようなものを浮かべていた。

・・・

愛「ご主人様がおかしくなった！！」

桃「ど、どうしたの愛紗ちゃん？」

玉座の間に飛び込んで来た愛紗に、近隣に現れた盗賊団の討伐の軍議の為に集まっていた将達は目を見張った。

愛「桃香様！ご主人様が・・・ご主人様が！！」

桃「落ち着いて愛紗ちゃん。ご主人様がどうしたの？」

愛「そ、それが・・・」

愛紗は、先程の一成の言動を皆に話した。

ね「ただの惚気話じゃないですか」

愛「ち、違う！ あのご主人様がそんな事を言うのがおかしいと言っているんだ！」

朱「確かに、普段のご主人様はそう言った事は言いませんよね」

雛「でも、ここぞという時にドキッとするような発言や行動をとりますよね」

桃「そうそう！ しかも本人は気付いてないから余計に性質が悪いんだよね！ 私なんかこの前・・・」

軍議そつちのけで過去の一成の言動について話し始める桃香達に、白蓮が呆れながらつつこむ。

白「おいおい、論点がずれてるぞ。とりあえず、秋月がおかしくなったって言うんなら、その原因を探るのが先決じゃないのか？」

桃「そ、そうだね。白蓮ちゃんの言う通りだね。みんな、何か心当たりはある？」

鈴「鈴々は知らないのだ」

恋「恋も知らない」

桃「そつか。ん〜、私も思いつかないな〜」

星「・・・もしや」



愛「星？ 何か知っているのか？」

星「いや、昨日の事なんだが、街で無許可で商売をしている商人を見つけてすぐに取り締まったのだが・・・そこで面白い物を見つけ  
てな」

朱「面白い物？」

星「確か・・・『こまし薬』といった名前だったか？ なんでも、それを服用した者は、手当たり次第に異性を口説いてしまつとか・・・」

白「何だそれ？ 何でそんな物作るんだ？」

星「元々は、奥手な者が気になる異性に声をかける勇気を与える為に作られた薬らしいが、効果が強すぎて販売禁止になつたらしい」

雛「あわわ、そんなに凄い薬なんですか？」

星「それをくすね・・・ごほん！ 没収してな。夜に主と月見酒をする約束を交わしていたので、主が月に見惚れていた間に・・・」

桃「間に？」

星「盛つた」

愛「盛るな！！」

間髪入れずに愛紗がつっこんだ。

星「どうやら今の主は薬の所為でとんでもないスケコマシになっているようだ。まあ案ずるな、効果は一日で切れるらしいからな。明日には元の主に戻っているだろう」

愛「何を気楽な！ 元はと言えばお前が怪しげな薬を……！」

星「だが愛紗よ、主に綺麗だと言われて嬉しかったのだろうか？」

愛「そ、それは……」

愛紗は言葉につまった。戸惑いもあったが、嬉しかったのも事実だったからだ。

星「今の主の前に立つたら……面白い事になりそうだな」

恋「……」

恋は無言で扉に向かった。

朱「恋さん、どちらへ？」

恋「恋も褒めてもらいたい……だから行く」

ね「お、お待ちください恋殿〜！」

その後をねねが慌ててついて行った。

朱「え、えっと・・・恋さん達も出て行っちゃったので、軍議は一旦中止しましょうか」

桃「そ、そうだね」

星「では、私も失礼するぞ」

愛「待て星！ まだ話は終わっていないぞ！」

星の手に入れた『こまし薬』・・・それは、城内を騒然とさせるとんでもない物だった。

月「おはようございます一成さん」

詠「こんな所でどうしたのよ？ 確か、今は軍議の時間でしょ？」

「・・・」

月「一成さん？」

「・・・可憐だ」

月「え？」

—「キミの事だよ月。正に、可憐とはキミの為に作られた言葉だ。俺は、キミを守る為なら、例え百万の敵でもなぎ倒してみせるよ」

月「へ、へう・・・／＼」

詠「ち、ちょっと一成！ あんた、急に現れて何を・・・！」

—「キミもだよ詠」

詠「へ？」

—「その眼鏡の奥に見える澄んだ瞳・・・どんな宝石よりも美しい」

詠「な・・・な・・・な・・・」

—「出来れば・・・その瞳には俺だけを映して欲しいな。そうすれば、ずっと俺が一人占め出来るのに・・・」

詠「ツ~~~~／＼」

—成の言葉に、月はおるか、詠までもが顔を真っ赤にした。一成は満足げに微笑み、再び廊下を歩き始めた。

麗「暇ですわね。何か面白い事はないかしら」

猪「でも、何であたいらだけ軍議に出なくていいんですかね？」

斗「(何となくわかる気がする)」

一「やあ、麗羽、猪々子、斗詩」

猪「よおアニキ」

真名を教えた際、猪々子は、一成の事をアニキと呼ぶようになっていた。

麗「一成様、ご機嫌うるわしゅうございますわ」

斗「軍議はもう終わったんですか？」

一「軍議？ そんな事よりもっと大切な事がある」

一成は麗羽の手を取った。突然の事に、麗羽は慌てふためく。

麗「か、一成様？ どうされたんですの？」

一「三人とも……今から俺と愛について語りあわないか？」

猪「は、はあ？ 何言っただよアニキ？」

斗「か、一成さんもそういう冗談言っんですね」

一「俺は本気だよ。前からキミ達のような美女と話したいと思って  
いたんだ」

麗「一成様！ わた、わたくしも、一成様とお話しの機会を設けた  
い思っておりますの！！」

一「それはよかった」

一成の笑顔に、麗羽はノックアウトされた。

麗「はう……／＼」

猪「美女ねえ……ならあたいには関係ねえな」

一「どうして？」

猪「どうしてって……別に、あたいは美人じゃないし……」

その言葉に、一成は盛大な溜息を吐いた。

一「はあ……重罪だな猪々子」

猪「は？」

一「無知とは罪。キミは、自分がどれほど魅力的な女性か全然わか  
っていない。だから重罪だと言っただ」

猪「なっ・・・／＼」

一「キミは美人だよ猪々子。俺が断言する」

齒の浮くようなそのセリフは、猪々子すら撃沈した。その威力・・・まさに一撃必殺！

斗「まさか文ちゃんまで」

一「どうしたんだ猪々子？ これからキミが魅力的な理由を五十ほど語ろうと思ったんだが・・・」

斗「ご、五十つて、凄いですね一成さん・・・というか、何かあったんですか？」

一「斗詩の素敵な所も五十ほど知ってるよ。なんなら教えてあげようか？」

斗「い、いえいえ！ 私はいいですよ！」

一「むしろ語らせて欲しいな」

斗「し、失礼します~~~~~!!」

斗詩は限界だった。気絶した麗羽と呆けている猪々子の首根っこを掴み、逃げるように駆け出した。

「むう……どうして逃げるんだ？」

その後も、一成の暴走は止まらなかった。擦れ違う女官や女中、さらには、女性兵士にまで声をかけていった。

「毎日ご苦労様。キミの頑張りはちゃんと見ているよ」

女官「そ、そんな……勿体無いお言葉です／＼」

「」「どうかな、俺専属の女中になってくれないか？」

女中「ふえ！？ わ、私がですか？」

「」「……駄目だ。鍛練とはいえ、キミの珠の様な肌を傷付けるなど、俺には出来ない」

女兵「な、何を言ってるんですか。私、そんな綺麗な肌じゃありません／＼」

バタバタと倒れていく女性達。最早一種の兵器だった……

さらに、恋とねね。星と愛紗。朱里と雛里。桃香と鈴々。白蓮と次



々に口説いて回った一成。その度に、抱きつかれたり、目を回されたり、蹴られたりと様々な目に遭っていた。

そして、翌日……

—「おかしい……昨日の記憶が無い」

薬の効果が切れ、一成は元に戻っていた。だが、彼のしでかした事は消えていなかったわけで……

詠「ッ！」

—「おはよう詠……」

詠「う、うっさい！ こっち来るな！！」

ダダダダ！

—「え……」

白「秋月……」

—「白蓮。ん？ 風邪か？ 顔が赤いぞ」

白「わ、私にあんな事した責任・・・ちゃんとつてもらうからな  
／／」

ダダダダ！

—「・・・何したんだ俺？」

それから三日間、一成は桃香達に避けられ続けた。

星「いやはや、まさかあれほどとはな。主には悪い事をした」

そう言う星の懐には、『こまし薬』の袋が二つ残っていた・・・

第七十話 薬も使い方を誤れば毒になる（後書き）

作「いや〜、面白かったな〜。お前をイジるのって今回が初めてじゃないか？」

—「……………」

作「？ どうしたんだ？ 無言で刀なんか持って……………」

—「……………潰す」

ビュン！

作「ふおおっ！？ い、いきなり何だよ！？」

—「捻じる」

ビュン！！

作「お、怒ってんのか！？ 馬鹿な事やらせたから怒ってんだな！？」

—「殺おおおおおすー！！」

ビュン！！！

作「わ、わかった！！ 土下座でもなんでもするから許してくれ！」

一「だが・・・断る！！！」

ビュン！！！！

作「そおおおおおおおい！！！！！」

第七十一話 みんな違ってみんないい(前書き)

気付いたら、お気に入り登録が凄い事になっていた。

第七十一話 みんな違ってみんない

朱「買ってよかったね雛里ちゃん」

雛「うん」

ある日、午前中の仕事を終えた朱里と雛里は、待ち望んでいた本を購入する為に街に出た。そして現在、二人は無事に購入を済ませ、城へと戻ろうとしていた。

朱「……あれ？ あそこにいるのって……」

朱里の視線の先には、とある店の前で店主と楽しそうに会話している一歳の姿があった。

雛「そういえば、今日はご主人様非番だったんだよね」

朱「ご挨拶しなきゃ」

二人は、早速一成に近寄った。

雛「ご主……」

店主「それで御遣い様、実際どんな女性が好きなんですか？」

朱・雛「「ッ……！」」

—「何ですか急に？」

店主「いえね、劉備様を始め、魅力的な女性に囲まれているじゃないですか。……正直、気になる方くらいいるでしょう？」

雛「しゅ、朱里ちゃん……これって……」

朱「しっ！ 静かにしないと聞こえないよ！」

雛「あわわ……目が本気だよ朱里ちゃん」

朱「雛里ちゃんだって気になるでしょ？」

雛「……う、うん」

朱「盗み聞きなんてホントは駄目だけど……相手をだし抜くのが軍師の務め！ あそこに隠れて話を聞かなきゃ」

身を隠し、聞き耳を立てる二人。一成には気付かれていないようだが、他の民達は何事かと二人の様子を眺めていた。

—「気になる……ですか。……そういえば、最近鈴々の様子が少しおかしいような……」

店主「い、いえ、そういう気になるのではなくてですね・・・」

—「？」

店主「で、では、最初の質問に戻りましょう・・・。どんな女性が好みですか？」

—「そうですね・・・何でも受け入れる大きな・・・を持った人ですかね」

店主「なるほど・・・では、劉備様あたりはまさにピッタリじゃないですか？」

—「ははっ、確かに」

会話を続ける一成と店主。朱里と雛里の姿は消えていた。

・・・

朱・雛「・・・・・・・・」

その後、二人はすぐさま城に戻り、中庭の休憩場に腰を下ろしていた。

朱「ねえ雛里ちゃん。私、肝心な部分が聞き取れなかったんだけど・



・・・何となくわかつちやった」

雛「うん、私もだよ朱里ちゃん」

朱「桃香様の持っている大きな物。それは・・・」

朱・雛「おっぱい!!」

二人の脳裏に、笑顔で胸を揺らす桃香のイメージがよぎった。

雛「まさか、ご主人様にそんな趣向があったなんて・・・」

朱「これは由々しき事態だよ雛里ちゃん！ わかっているとっけど、私も雛里ちゃんも・・・」

ペタ・・・

自身の胸を触り、同時に嘆息する二人。

朱「このままじゃ、ご主人様に私達の想いを伝えても・・・」

すまない、貧乳には興味ないんだ

朱「なんて返されて終わりだよお!!」

本人は絶対言いそうにないが、今の二人は冷静さを失っていたので、  
気付く事はなかった。

雛「ど、どうしよう朱里ちゃん。私、そんなの嫌だよ」

朱「もちろんだよ雛里ちゃん。……どうやら、買った本が早速  
役に立ちそうだね」

そう言つて、朱里は手前に本を置いた。その表紙には『お手軽豊胸  
術〜これであなただも巨乳の仲間入り〜』と書かれていた。

朱「これさえあれば、私達だってやれるはずだよ!!」

雛「そうだね。頑張ろう朱里ちゃん!!」

朱・雛「お〜!!」

瞳を燃やし、拳を掲げる二人。その背後に、ある人物が近づく。

?「おや、こんな所でどうしたのかな軍師殿?」

朱「はわっ!?!」

雛「あわっ!?!」

星「何を慌てている? 私だよ」

朱「せ、星さん……」

星「……ん? ほお、面白そうな本だな」

置かれた本を見つけ、星はニヤリと笑った。

星「結構結構。女として、自身を磨くのは大切な事だからな。……  
・惚れた殿方の為にも」

朱・雛「あう……./」

星「しかし……そんな物に頼らずとも、あと数年待てば……」

雛「だ、駄目です! 早くしないとご主人様が……!」

朱「ひ、雛里ちゃん!」

雛「……はっ!」

星「主? どうしてそこで主の名が出るのだ?」

雛「そ、それは……」

星「まあ、無理に聞こうとは思わんよ。だが……教えてくれると嬉しい」

優しく微笑む星。……だが、目が本気だった。

朱「わ、わかりました。教えますからそんな目で見ないでください」

星「いやはや、催促したみたいで申し訳ない」

雛「（したじゃないですか〜！）」

説明中……

星「なるほど……主もやはり男だという事が」

雛「ですから、私達も早く大きくしたいんです」

星「あいわかった。ならば私も二人を応援しよう」

朱「あ、ありがとうございます。けど、この事はどうか秘密に……」

星「……（ニヤリ）」

雛「あわわ、なんですかその笑みは？」

星「二人の事はもちろん黙っておく。だが・・・せつかく主の趣向が一つ判明したのだ、それを我等だけで秘めておくのは公平ではないな」

桃「あれ？ 三人とも、何話してるの？」

桃香がやって来た。

星「桃香様、どうやら主は巨乳好きらしいですよ」

桃「え、ホントに？」

こうして、一成は巨乳好きだという情報は、あっという間に広まっ  
て行った・・・

IN SIDE

一「今日も楽しかったな」

街の散策を楽しんだ俺は城に戻った。

鈴「お帰りなのだお兄ちゃん！」

—「ただいま鈴……」

鈴「？ どうしたのだお兄ちゃん？」

—「……鈴々。その……胸が……」

ボヨン！

鈴々の胸がもの凄く膨らんでいた。おかしい、朝あいさつした時は普通だったのに……

鈴「鈴々はきよにゆーなのだ！ どうなのだお兄ちゃん？」

—「どうって……何て言えばいいんだよ……」

鈴「ほらほら、揺れるのだ」

鈴々がその場でジャンプする。それに合わせ、胸も大きく弾むのだが……

ボト！

—「え？」

鈴「あ、落ちちゃったのだ」

鈴々の胸元から、肉まんが二つ飛び出した。どうやら、あの大きな胸の正体はこれだったらしい。

鈴「おっと、勿体無いのだ。お兄ちゃんも食べるのだ？」

一「い、いや、遠慮しておくよ」

今の今まで彼女の胸元に入っていた物を食べられるわけがない。

鈴「ん〜、美味しいのだ〜」

一「そ、それはよかったな」

鈴「じゃあ鈴々はもう行くのだ。じゃあねお兄ちゃん！」

肉まんを平らげ、鈴々は去って行った。……一体、何がしたかったのだろうか？

星「おや、お戻りになられたのか主」

一「……星」

数日前、彼女に盛られた薬でとんでもない事をしでかしてしまった。星自身から説明と謝罪をもらったが、未だに無意識に身構えてしまう。

星「主、そこまで警戒されずともよいではありませんか」

—「そ、そうだな。すまな・・・」

星「まあ、原因は私ですけどな」

はっはっはと笑う星に、俺は何も言えなかった。・・・本当に反省してくれているのだろうか？

—「それで星、俺に何か用かな？」

星「おや、用がなければいけませんか？」

星がしなだれかかって来た。一瞬の出来事だったが、彼女の場合、最早お決まりのパターンだったので、特に気にする事もないのだが・

フニユン



気になるのは、何故かやたらと胸を押しつけて来ている事だ。星は、俺の反応を伺いながらニヤニヤしている。

—「……何だ？」

星「ふむ、この程度では反応しませんか。なら……桃香様」

桃「任せて星ちゃん！」

何処に隠れていたのか、いきなり桃香が俺の前に現れた。

桃「えい！」

ギュム！！

—「ッ！？？」

何を思ったのか、桃香はいきなり俺の頭を抱き、そのまま自身の胸元へ抱き寄せた。女性特有の柔らかさが顔に伝わる。

—「~~~~~！！！」

星「おお、主が喜んでる。その調子ですぞ桃香様」

桃「うん！」

—「~~~~~!!!(いいから離してくれ!!!)」

桃「あん　くすぐつたいよご主人様」

—「~~~~~!!!(くそっ!　こうなったら・・・!!!)」

力づくで拘束を解き、息を整える。桃香は残念そうに俺を見つめていた。

桃「ああ、ご主人様、逃げちゃ駄目だよ」

星「顔が真っ赤ですぞ主。そんなによかったのですか？」

—「苦しかったんだよ!　というか、そもそも何でこんな事を・・・!!!」

桃「え、だって・・・」

桃香の話の内容に、俺は頭が痛くなった。曰く、俺が大きな胸の女性が好きらしいので、こうしたら喜んでくれるかと思ってやったとの事だ。

—「デタラメだよ。俺はそんな事で相手を判断したりはしない」

星「ですが、朱里と雛里がすっかり聞いていたそうですよ。主は桃香様のような大きな胸の女性が好みだと」

一「朱里と雛里が？」

桃「街で店主さんと会話しているのを聞いたって言ってたよ」

一「街・・・店主・・・ああ」

そこまで聞いてようやく合点がいった。どうやら、二人は聞き間違いをしていたようだ。

一「違うよ。俺は、何でも受け入れる大きな心を持った人って言ったんだ」

桃「心？」

一「ああ。それで、街に流れて来る人達を笑顔で受け入れる桃香がピッタリだって言ったんだ。全部二人の勘違いだったんだよ」

桃「そつかあ・・・えへへ、なんか嬉しいな」

星「何ともつまらんオチですな。まあ、それでこそ主といったところでしょうかな」

一「つまらなくて・・・（苦笑）」

星「（しかし・・・それではあの二人は・・・）」

SIDE OUT

朱里と雛里は、部屋に籠って例の本を読み耽っていた。

朱「ふむふむ、こうすればいいのか・・・」

雛「これならすぐに出来そうだね朱里ちゃん」

朱「そうだね。そして、ご主人様好みの素敵な女性になろうね雛里ちゃん！」

雛「うん！」

思いつきり勘違いしている二人だが・・・世の中には知らない方がいい事もあるものだ。

第七十一話 みんな違っでみんないい(後書き)

作「やっぱり、この二人にはこのネタだろ」

一「あんな、本人達は真剣なんだからあまりふざけた事書くなよ」

作「なら、八百一ネタの方がよかったか？」

一「……俺が悪かった」

作「まあ、いつかやるけどな」

一「おい！」

第七十二話 体調管理は自己責任(前書き)

いっしょに仕事をやってレベルじゃないぞ・・・

第七十二話 体調管理は自己責任

コンコン

桃「はい」

—「一成だけど、入っていいかな？」

桃「ご主人様？ うん、どうぞ」

ガチャ

扉を開ける。出迎えてくれたのは、寝台のそばの椅子に腰かけていた桃香と・・・

白「お、おお秋月。こんな格好ですまないな」

その寝台に横になり、力無く微笑んでいる白蓮だった。

—「大丈夫なのか？」

白「なあに、ちょっと風邪をひいただけだよ」

桃「ちよつとじゃないよ！ 私の前で倒れちゃったんだもん！」

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

桃「おはよう白蓮ちゃん！ 今日もお仕事頑張ろうね！」

白「……………」

桃「白蓮ちゃん？」

白「……………ん？ ああ、桃香じゃないか。どうしたんだ？」

桃「それはこっちの台詞だよ。白蓮ちゃん。顔が真っ赤だよ」

白「ちよつと頭がボーっつとしてな……………」

桃「大丈夫？」

白「大丈夫、大丈夫……………」

フラッ……………」



桃「ば、白蓮ちゃん!？」

白「はじ……」

トサッ!

……

……

……

一「そんな事が……」

桃「お医者様を呼んだら、案の定風邪だって。熱がかなりあるから、  
二、三日は絶対安静だって言ってた」

白「おおげさだよ。ちょっと休めばすぐに……」

一・桃「駄目だ(よ!)」「」

白「え？」

—「風邪を甘く見てはいけない。ちゃんと治せる時に治さないと大変な事になるぞ」

桃「そっだよ白蓮ちゃん。私、白蓮ちゃんが苦しんでいる姿なんていつまでも見たくないもん」

まるで自分の事のように悲痛な表情を浮かべる桃香。彼女の優しさ、思いやりがよく伝わって来る。

白「・・・そうだな。秋月の言う通りだ。中途半端に治してまた迷惑かけるわけにもいかないし、ゆっくり休ませてもらうよ」

—「ああ、そうしてくれ」

白「桃香も、心配してくれてありがとう」

桃「えへへ、当然だよ」

白蓮が眠ったのを確認して、俺と桃香は静かに部屋を後にした。

・・・

桃「というわけで、白蓮ちゃんが休んでいる間のお仕事を、みんなで分担しようと思います」

あれからすぐみんなを集め、白蓮の仕事の分担を話し合う事にした。

朱「容態はどうなんですか？」

桃「お話は出来るけど、とても辛そうだった。一、三日は安静にしなければいけないって」

雛「では、三日分のお仕事をみなさんでそれぞれ受け持つ事にしましょう」

麗「はあ、急に呼び出されたと思えば……どうしてわたくしがそんな事をしなければなりませんの？」

斗「麗羽様、白蓮さんは一緒に過ごす仲間じゃないですか」

麗「ではあなたが手伝ってさしあげなさい斗詩さん」

朱「……ご主人様」

朱里が小声で話しかけて来た。

—「どうしたんだ？」

朱「ご主人様から袁紹さんに協力するようお願いしてもらえませんか？」

—「俺から？ ああ、わかった」

朱「お願いします」

麗「とにかく、わたくしには関係ありません・・・」

—「そう言わずに、頼むよ麗羽」

麗「それで、わたくしは何をすればよろしいんですの？」

猪「うええ!？」

麗「どうしました猪々子さん？ その様な間抜けな声を出して」

猪「な、何でもありませんよ麗羽様 (なんつー変わり身の早さ・・・)」

朱「(やっぱり・・・これからは、袁紹さんに何か言う時は、ご主人様をお願いしよつと)」

—「ありがとうございます麗羽」

麗「嫌ですわ一成様。困った時に協力するのは当然じゃございませんか」

—「うん、そうだな。当然だよな」

麗「当然ですわ。おーっほっほっほー!」

—「(原作の先入観に囚われて誤解していたみだが、仲間を想

う優しい心を持つてるんだな。・・・しかし、何で愛紗達はあんな可哀そうな物を見るような目で麗羽を見つめているんだ？」

朱「では、早速分担を始めましょう。まずは愛紗さんには・・・」

それぞれ指示を受け、自身の仕事と白蓮の分をこなす為に動き始めた・・・

朱「・・・以上です」

—「あれ？ 朱里、俺の分は？」

朱「ご主人様はご自身のお仕事だけで構いません」

—「そんな、俺だけ何もしないなんて・・・」

雛「ご主人様・・・ご主人様も相当無理をなさっているんじゃないですか？」

—「え？」

朱「ご主人様は、戻って来られて以来、ほぼ毎日政務をなさっていますよね？」

—「今まで迷惑をかけていたんだ。それくらいしないと申しわけが立たないからな」

雛「そのお心はとてご立派だと思います。ですが、それでご主人

様まで倒れてしまわれては、今度は私達が申しわけが立ちません」

—「ははっ、大丈夫だよあれくらい・・・」

朱・雛「駄目です」

—「・・・わかった」

二人とも微笑んでいたが、その後ろに炎が見えたので頷くしかなかった。

朱「その代わりと言ってはなんですが、ご主人様には別の事をお願いします」

—「別？」

・・・

—「・・・よし、これで今日の仕事は終了だな」

筆を置いた俺は、部屋を出て白蓮の元へ向かった。

お仕事を終えられましたら、白蓮さんのお見舞いに行っておあげください。きつとどんな薬より効くと思いますから

—「（元々見舞いには行くつもりだったけど……最後のはどう  
いう意味なんだ？）」

朱里の言葉を不思議に思いつつ歩いていると、いつの間にか白蓮の  
部屋の前に着いていた。

コンコン

白「だ、誰だ？」

—「俺だよ白蓮。入っていいかな？」

白「あ、秋月！？ ま、待て……！」

ガチャ

—「え……」

俺の目に入ったのは、下着姿の白蓮。タオルらしき物を持っている  
ので、おそらく体を拭こうとしていたのだろう。

「（……………つて！ 冷静に状況観察している場合じゃない！！）  
」

白「あ……ああ……」

「す、すまない！！」

バタン！！

「（クズめ！ 貴様の軽はずみな行動が、彼女をどれほど傷付けてしまったかわかってるのか！！ 土下座しろ！！ いや、腹を切れ！！）」

すぐさま扉を閉め、先程の映像を脳内から抹消しながら、自身を罵倒する。

「ふんっ！！」

バキッ！

さらに、拳を一発顔面に打ち込む。しかし、これでもまだ彼女の受けた痛みには比べたら……



白「は、入っていいぞ」

もう一発撃とうとしたその時、白蓮の声拳を止めた。

—「……………失礼する」

白蓮は布団を被って横になっていた。

白「お、おい秋月。何で鼻血が出てるんだ？」

—「キミへの謝罪と自戒の為に自分で殴った」

白「謝罪？」

—「すまなかった……………キミの、その……………あんな姿を見てしまった」

深々と頭を下げる。許してもらうつもりは全くない。ただ謝りたかった。

白「い、いいよ別に。私は気にしてないから」

—「え？」

白「わざとじゃないんだろ？ お前がそういつヤツじゃないって事は私だってよく理解してるからな」

—「許してくれるのか？」

白「ああ。だからこの話はもうお終いだ」

—「ありがとう白蓮」

白「あはは、だからもういいって。それより、どうしたんだ？」

—「お見舞いに来たんだ」

白「そうか。ずっと横になっててヒマだったんだ。少し話し相手になってくれないか？」

—「俺でよければ」

椅子を動かし、白蓮の横に座る。

白「私さ・・・ずっとお前に礼が言いたかったんだ」

—「礼？」

白「ああ」

そう言って、白蓮は首飾りを取り出した。

—「それは……」

白「お前が別れの時にくれた首飾りだよ。これが私の命を救ってくれたんだ」

—「どういう事だ？」

白「麗羽に攻められた時、馬上の私に向かって一本の矢が飛んで来た。それを、こいつが代わりに受け止めてくれたんだ」

—「（やはり、あの時渡しておいて正解だったな）」

白「私がこうしてここにいるのも、秋月……お前のおかげだ。だから、ありがとう」

—「別に礼なんて……」

……待て。白蓮は心から感謝してくれている。それを受け取れないのは彼女に失礼だ。

—「いや……どういたしまして」

白「借りは必ず返すからな。それまで待っていてくれ」

—「わかった。楽しみにしておくよ」

白「ははっ、あまり期待されても困るんだが・・・ゴホッ、ゴホッ」

一「大丈夫か？」

白「少し喋り過ぎたな。喉が渴いてきた」

一「じゃあ水を・・・いや、それよりもっといい物があるな」

白「秋月？」

一「白蓮、ちょっと待っててくれ」

俺は部屋を後にし、厨房に向かった。そこで、一人の調理人に事情を話し、『アレ』を作る為の材料を分けてもらった。

一「さて、この時代でちゃんと出来るかわからないが・・・とりあえず作るか」

・・・

十数分後、完成したそれを持って白蓮の部屋に戻る。

一「お待ちませ白蓮」

白「何してたんだ秋月？」

—「これを作って来たんだ」

持って来た物を差し出す。

白「これは？」

—「卵酒だ。これを飲むと体がよく暖まるんだ」

白「お前が作ってくれたのか？」

—「うる覚えだったんだが、なんとかかな」

白「……ありがとう」

—「ん？」

白「な、何でもなし。それより、飲んでいいか？」

—「もちろん。キミの為に作ったんだから」

白「じゃあ、頂きます」

卵酒を飲んだ白蓮がホッと息を吐いた。

—「」  
「」

白「美味しい……それに、身体がどんどん暖かくなってきた」

一「それはよかった」

白「お前って料理も出来るんだな」

一「少しだけだな」

白「謙遜するなよ。こんな美味しい物作れるのに」

一「どうやら気に入ってくれたみたいだな。なら、明日も作って来るよ」

白「本当か？」

一「ああ、約束するよ」

それから、しばらくとりとめもない話（主に白蓮の麗羽に対する愚痴）を交わし、俺は見舞いを終えた。

それから二日間、俺は卯酒を持って白蓮へのお見舞いを続けた。

そして三日後……

白「みんな、迷惑かけてすまなかったな」

白蓮はすっかり元気になっていた。

愛「もう動いて大丈夫なのですか？」

白「ああ、おかげですっかり良くなったよ」

麗「白蓮さん。あなたが休んでいた間のお仕事は、このわたくしが代わりにこなしてあげましたわ。感謝してくださいね」

白「わかってるって。ありがとな麗羽」

ね「しかし、本当に三日で治るとは思ってなかったのです」

白「それは・・・やっぱり秋月のおかげかな」

—「俺の？」

白「あの卵酒ってやつだよ。あれを飲まなかったらもっと長引いてたかもな」

鈴・星・恋「」「卵酒？」「」

三人の目が光った・・・気がした。

星「主よ。卵酒とはどのような酒なのですか？」

鈴「鈴々も飲みたいのだ！」

恋「恋も……」

詰め寄って来る三人。目が本気だった。

—「じ、じゃあ今日の夜にでも作ってあげるよ」

鈴「やったのだ！」

星「ふふ、楽しみですな」

恋「わかった……」

その夜、三人だけでなく、桃香達全員に卯酒を振る舞う羽目になってしまった。全員分を作るのは大変だったが、みんなとても喜んでくれたのでよかった。

ただ、愛紗が酔っぱらってしまったのは計算外だったが。

さらに、どこから知られたのかわからないが、いつの間にか街でも卯酒が大流行していたのだが、これはまた別の話だ。



白「（秋月が最初に作ってくれたのは私だからな。・・・って、だからどうしたって話だよな）」

第七十二話 体調管理は自己責任（後書き）

作「唐突だが、俺は白蓮が好きだ」

一「本当に唐突だな」

作「だが、ほとんどの二次創作では、彼女は可哀そうな娘になってしまっている。それが俺はとても悲しい」

一「まあ、確かに」

作「だからこそ、この小説では彼女を優遇する事を誓う！」

一「別に誓うほどの事でもないだろ」

作「白蓮大好きな方は、ぜひとも『白馬党』にご参加ください」

一「何だよその怪しさ満点な党は？」

作「白蓮の魅力をひたすら語りあう党だ」

一「他にもありそうだな」

作「ああ、愛紗好きな方々の『美髪党』とかな」

一「……駄目だ。名前だけだとどうしても怪しさしか残らん」

作「それより！ お気に入り登録が1000を超えたぞ！」

「急に話を変えるのももう慣れたな。しかも、それ前回の前書きでも書いたろ」

作「いや、あまりに嬉しくてな」

「……」

作「よし忘れよう」

第七十三話 死んで果実が咲くものか(前書き)

グダグダやってもしかたないので、そろそろ物語を進めようと思  
います。

## 第七十三話 死んで果実が咲くものか

—「華・・・曹操から降伏勧告が来た？」

街の警邏を終え、城に戻った俺に、軍師二人がそう告げて来た。

朱「はい。ご主人様が出られている間に、使者の方がいらして・・・

—  
雛「すでにみなさん戦の準備に入っています。ご主人様もよろしく  
お願いします」

—「わかった。俺も準備を進めておくよ」

とは言つものの、おそらく無駄になるだろう。最近原作の内容がうる覚えなのだが。確か、今回の魏軍の規模はとんでもない数だったはずだ。今の俺達じゃ抵抗すら出来ないほどの。

けど、私の前から去った時点で、あなたは再び私の敵よ。近い内に劉備を倒して、今度こそあなたを手に入れてみせるわ。その事をしっかりと胸に刻んでおきなさい

—「だからといって、おいそれと屈するわけにはいかないけどな・・・」

それから数日後、一人の伝令が城にかけ込んで来た。

伝令「報告します！ 北方の国境警備隊より敵の軍勢の総数が明らかになりました！」

愛「ご苦労。して、数は？」

伝令「……五十万です」

全員「え……？」

伝令「で、ですから……五十万です！」

それから正確に五秒経過し……

全員「五十万!？」

予想していた通りだったので、特に驚きはしなかったが、対する桃香達はそろって驚愕の声を出した。

愛「我が軍は約三万……今から義勇兵を募っても最大で五万ほど……」

星「それでも相手はこちらの十倍。これでは勝負ならんぞ」

愛「しかし、民達を守る為にも、曹操軍を止めなければ！」

恋「恋、頑張つて敵たくさん殺す・・・」

ね「ねねもお供しますぞ恋殿！」

白「待て。いくら恋でもそれは無茶だ」

一「だったら俺が・・・」

全員「ダメ（だよ！）（です！）（なのだ！）」

一「・・・わかった」

信用ないな。・・・まあ、それだけの事をしでかしてみんなに心配かけてしまったのも事実だしな。

桃「だったらさ・・・逃げちゃおっか」

愛「桃香様!？」

桃「この戦力差じゃ、どう考えても戦えそうにないし、なら逃げるのも一つの手だと思うよ」

愛「民を見捨てるおつもりですか？」

桃「それは違うよ愛紗ちゃん。私達がここに留まったら戦う事になるけど、その私達がいなくなったら戦の必要もないでしょ？　そうすれば、民のみなんだって傷つく事もないだろうし」

愛「それは・・・そうですが」

一「曹操軍の軍律は相当厳しかったからな。桃香の言う通り、民が犠牲になる事はまずないと思うぞ」

雪蓮の一件もあるだろうし、そこは徹底されているだろう。それに、あの華琳がいたずらに民を虐げる事などあり得ないしな。

一「民の為に戦わずに退く・・・桃香らしくていいじゃないか。これでもし、「せめて華々しく散ってやる」なんて言ったら、俺が引つ叩いてたぞ」

雛「確かに、それが一番の方法だと思います」

鈴「お兄ちゃんとお姉ちゃんが言うなら鈴々も賛成なのだ」

愛「私は・・・」

一「愛紗、キミにとって逃げるという事は我慢ならない事だって充分理解している。けど、大切なものを守る為に、今は我慢して欲しい」

愛「・・・わかりました」



桃「ゴメンね愛紗ちゃん」

愛「何をおっしゃいます桃香様。そんなあなただからこそ、私はお慕いしているのです」

桃「愛紗ちゃん・・・」

愛「桃香様・・・」

見つめ合う二人。麗しい姉妹愛だな。・・・義理だが。

白「しかし、逃げると言ってもあてはあるのか？」

朱「そうですね・・・荊州よりさらに西に蜀という地方があるのですが、現在ここを治めている劉璋という方は、あまり風評がよろしくありません」

雛「それに加え、後継問題によるいざこざも生じているようです。今なら簡単に入蜀出来ると思います」

星「ふむ、ならば攻め入る事に何の躊躇いもないな」

朱「桃香様、よろしいですか？」

桃「うん。二人が言うなら間違いないだろうし。行こう、蜀へ」

雛「それでは、その方針で準備を進めましょう。各所に詰めている兵達に戻るように伝令を。それから、民への説明もしなくてはなり

ません」

桃「なら、私が説明するよ」

―「俺も行く。一人より二人の方が説得しやすいだろう」

というわけで、早速街の広場に向かい、民達に方針を伝えたのだが・

男A「俺も連れて行ってください!!」

女性A「私も!」

男B「俺は劉備様以外の下で暮らす気はないです!」

女性B「こんな事で御遣い様とお別れしたくないです!」

広場に集まった全ての人が、口々に自分も連れて行って欲しいと嘆願して来た。

―「落ち着いて下さい! 俺達がここを去るのは、みなさんに危害が及ばないようにする為です! 曹操軍は間違いなく俺達を追撃して来るはず。もし追いつかれて戦いにでもなれば、間違いなくみなさんまで戦いに巻き込まれてしまいます!!」

男C「覚悟の上です!」

—「向かう蜀まではかなりの距離があり、間違いなく過酷な旅になります。それこそ、ついて来たのを後悔するほどに」

最もらしい理由を口にするが、誰一人退こうとする人はいなかった。

老人「でしたら御遣い様、足手纏いだと判断されたらその場で見捨てて頂いて結構です。ですから、どうかご一緒させてください。儂等は、心の底から劉備様と御遣い様をお慕いしておりますのじゃ」

桃「……わかりました」

—「桃香？」

桃「私達と一緒に行きたいと思った人は、準備をしてください。ちやんと全員連れて行きますから」

桃香の宣言に、民達は喜びの声をあげた。

桃「でも！」

民達「？」

桃「私はみなさんの事を足手纏いだなんて思わない！　そして、絶対に見捨てたりなんかしない！　いざとなったら、私が必ず守ってみせます！—！」

老人「劉備様・・・」

桃「だからおじいさん。そんな悲しい事言わないでください」

老人「おお、劉備様。儂なんかの為に・・・」

一「(・・・敵わないな)」

気付けば、あれだけ騒いでいた民達が一言も発さずに桃香を見つめていた。中には涙を流している人もいる。

一「(『武』でも『知』でもない。これこそが彼女の持つ力なんだな)」

この時代には相応しくない、一見甘過ぎるその心。・・・けれど、その優しさが、その思いやりがあるからこそ、これほどまでに桃香は慕われている。

桃「ご主人様？」

一「桃香・・・キミと同じ道を歩める事を光栄に思う」

桃「ふえっ！？ あ、ありがとうございますご主人様」

男D「劉備様！ お顔が真っ赤ですぜ！」

女性C「若いっていいわね〜。私もあんな真っ直ぐな言葉言われてみたいわ〜」

桃「も、もう！ 何言ってるんですかあ！」

民達「あははははは！」

もう、悲しみの表情を浮かべている者は一人もいなかった。民達がそれぞれ準備の為に散って行くのを見届け、俺と桃香は城に戻った。

・・・

全ての準備が整い、玉座の間に一同が会した。将だけでなく、文官達も揃っている。

朱「民のみなさんの準備も完了したようです。すぐにでも出発する事が出来ます」

桃「じゃあ早速・・・」

星「しかし、このまま何もせずに逃げ出してよいのだろうか？」

愛「どついつ意味だ星？」

星「我等が姿を消せば、間違はなく曹操は追って来る。時間稼ぎと

は言わないが、何かしらの手を打っておいた方がいいと思うのだが」

愛「一理あるな。朱里、雛里、何かあるか？」

朱「……難しいです。今からではとても時間がありません」

雛「それに、時間稼ぎという事は、誰かが残らなければなりません。そんな危険な策、とても提案する事など出来ません」

星「なに、言ってみただけだ。それに、もし追いつかれたら、その時は私が全て打ち倒してしまえばいいだけの事だ」

鈴「鈴々もやってやるのだ！」

白「今から気にしてもしょうがないって事か……」

猪「おお！　なんか燃えてきたぜ！」

斗「ぶ、文ちゃん。もしそうなったら大変な事になるんだよ？」

一「時間稼ぎ……」

桃「どうしたのご主人様？」

一「みんな……俺に任せてくれないか？」

愛「だ、ダメです！　ご主人様は絶対ダメです！」

一「別に戦うつもりはないよ愛紗。ただ……これを使う」

そう言つて、俺は右手に長銃を発現させた。

愛「それは・・・確か『おおらふおとんぶらすたあ』でしたか？」

一「これを撃つたら・・・結構な威嚇になると思わないか？」

S I D E O U T

華琳 S I D E

稟「変ですね・・・敵の抵抗が全くありません」

稟の言う通り、城から数里の距離まで接近しているにも関わらず、劉備軍どころか、敵兵一人すら現れなかった。

霞「籠城でもしとんのちやうか？」

稟「ですが、偵察や策敵すら行わないなんて・・・」

華「畏ね・・・。各自、警戒しつつ前進・・・」

カツ………！

華「ツ！？」

その時、見覚えのある一筋の光が私達の上空を突き進んで行った。  
・  
・  
・  
間違いない、あれは『彼』の……

魏兵A「な、何だ今の光は！？」

魏兵B「敵の新兵器か！？」

魏兵C「雲が薙ぎ払われてるぞ！　なんて恐ろしい威力だ！！」

目の前で起こった光景に、兵達は恐怖で足をすくませていた。

稟「い、今のは一体！？」

秋「華琳様」

華「ええ、どうやら向こうは戦う気満々のようね。それでこそ潰し  
甲斐があるわ。各部隊！　それぞれ距離をとって前進！　連射は出  
来ないみたいだけど、狙い撃ちされたらたまったものじゃないわ」

稟「ぎ、御意！　すぐに伝令を！」



霞「華琳。今は・・・」

華「ええ・・・『彼』よ」

霞「敵に回してこんなに恐ろしいと思ったんも久々やな」

言葉とは裏腹に、嬉しそうに笑う霞。おそらく、『彼』と戦えるのが楽しみで仕方ないのだろう。

華「・・・人の事は言えないわね。私も興奮しているみたい」

それが、かつてない強敵と戦える事への喜びなのか、『彼』を手に入れられる事への喜びなのか、今の私にはわからなかった。

華琳 SIDE OUT

IN SIDE

—「上手くいったかな」

愛「あ、相変わらず出鱈目な武器ですね。しかし、これで曹操軍も迂闊に近付けないはずですね」

「目的も果たしたし、長居は無用だ。桃香達の後を追おう」

愛「はい。ご主人様が無茶をなさらないでよかったです。いざとなったら全力でお止めしようと思っておりましたから」

「一人で大丈夫だと言ったのに、キミがお供するって譲らなかつたからな。・・・そんなに信用ないかな俺？」

愛「わ、私はご主人様を信用しています。ただ、どうしても心配で・・・」

「そうだったのか・・・。ありがとう愛紗」

愛「い、いえ、当然の事です／＼」

城壁を下り、愛紗は留めてあった馬にまたがった。そして、俺と愛紗は、先に脱出した桃香達の後を追って駆け出した・・・

第七十三話 死んで果実が咲くものか（後書き）

作「久しぶりに出たなプラスター」

一「だから、アレは止めるって前から言ってるだろうが！」

作「使える物は使う！ 当然だろうが！」

一「しかも、全員分の拠点イベントやるとか言っておいたくせに、先に進めるとはな」

作「ネタ切れだったんだよ。それに、いつまでもグダグダやってるとまたお叱りを受けそうだな」

一「それは当然だ。むしろ叱られた方がいい」

作「知るか！ どうせ今回の話でまた何か言われるに決まってる！ だから勝手にしただけだ！」

一「荒れてるな。何かあったのか？」

作「教えん！」

第七十四話 辛い時こそ支え合おう（前書き）

また『らしくない』キャラが出ますが、どうかご容赦ください。

## 第七十四話 辛い時こそ支え合おう

華琳SIDE

華「劉備がいらない？」

結局、あれから一度も光は放たれる事はなかった。さらに、城門手前まで進軍したにも関わらず、とうとう最後まで敵は行動を起こさなかった。

秋「はい。城内には劉備どころか誰も存在していませんでした。おそらく、逃げたのかと・・・」

様子を知る為に、秋蘭以下数名を送ったが、その報告は驚くべきものだった。同時に、ようやく敵の策の全容がつかめた。

華「やられた・・・。あの光は交戦の意志を示したのではなく、私達に警戒させ、時間を稼ぐものだったのね」

秋「さらに、街の住民の数が極端に少なくなっています。聞き込みをしたところ、「劉備様は自分達の為に城をお捨てになられたのです。そして、自分は足が不自由なので諦めたが、住民のほとんどは劉備様について行きました」・・・との事です」

華「民の為に城を捨てる・・・か」

籠城の道も、誇りを持って討ち死にの道も選ばず。民を守る為とはいえ、躊躇いなく城を捨てるとは・・・

華「ただの甘ちゃんだと思ったけど・・・ふふ、意外と無茶苦茶するのね」

秋「いかがいたしますか？」

華「全軍入城。その際、民には一切手出しを禁ずる。もし略奪等を働こうとする輩がいればその場で斬り捨てよ」

秋「御意」

こうして、私達は戦う事なく入城する事が出来た。それから一刻後、玉座の間にて軍議が開かれた。

華「さて、こうして城は落とされたけれど、逃げ出した劉備軍を討伐するまで、この戦は終わった事にはならないわ」

全員が頷く。

華「それで、劉備はどこへ逃げたのかだけれど・・・風」

風「……………」

華「風？」

風「……………」

稟「風！早く起きなさい！」

風「おおっ！風とした事がつい……………」

華「おはよう風。では、あなたの考えを聞かせてちょうだい」

風「劉備さんがどこへ逃げたのかですよね……………とはいっても、北は華琳様の、そして南は孫策さんの領土ですし。さらに東は海。なので残りは一つしかないですね」

華「西……………」

風「はい。益州あたりが狙い目だと思いますですよ」

稟「そういえば、領主の後継問題で内乱が勃発する可能性があるとの報告が以前ありました。おそらく、その隙を狙っているのでは？」

華「これでほぼ確定ね。すぐに追撃の準備を。民を引き連れているというのなら、まだそこまで離れていないはずよ」

全員「御意！」

無事に逃げ切るのか。それとも、私達に追いつかれるのか。

華「天命はどちらに傾くのかしらね、劉備……」

華琳SIDE OUT

IN SIDE

城を脱出して数刻。ようやく移動中の一団が視界に入った。

一「改めて見ると凄い数だな……」

数え切れないほどの人達が、家財道具を持ってひたすら歩き進んでいた。

愛「これも桃香様の人徳のなせるわざです。そして、私達が命を懸けて守るものでもあります」

一「そうだな。それじゃあ、愛紗は桃香への報告を頼む。俺はこのまま殿を受け持つよ」



愛「それは……いえ、お願いしますご主人様」

—「任せてくれ」

再び馬を走らせ、愛紗ははるか前方に向かって消えて行った。

麗「一成様。よくぞご無事で……」

—「麗羽？ それに、斗詩に猪々子、白蓮」

すると、一団の中から四人が近付いて来た

麗「わたくし、いち早く一成様をお迎えする為に最後尾についていましたの」

—「そうだったのか。ありがとう麗羽。けど、他の三人は……」

斗「私と文ちゃんは麗羽様から離れるわけにはいきませんので」

白「私も朱里に頼まれて麗羽の付き添い……というか世話役を」

疲れた様子の白蓮。……何となく理由はわかるが。

猪「ところでアニキ、曹操軍はどうなったんだよ？」

「強めに脅しをかけておいたからな。すぐに追撃される事はないと思っよ」

白「脅して・・・何やったんだ？」

「まあ、秘密という事で」

西へ向かいひたすら進み続ける一団。それに伴い、民達の疲労も確実に蓄積していった。

老人「あう・・・」

限界を迎えたであろう一人の老人が、その場に力無く崩れ落ちた。

女性「お父さん!？」

老人「儂はもう駄目じゃ・・・。娘よ、儂は置いて行け」

女性「そんな事言わないで！ さあ、立って！」

老人「無理じゃ。もうそんな力も・・・」

「しっかりして・・・」

すぐさま駆け寄ろうとしたが・・・

麗「ほらっ、しっかりなさいな」

それよりも先に老人に手を差し出したのは、なんと麗羽だった。

老人「え、袁紹將軍。お手が汚れてしまいます」

麗「いいから掴まりなさい」

老人「は、はい・・・」

グイッ！

麗羽に引かれ、老人は再び立ち上がった。

斗「麗羽様？」

麗「あなた、無責任にもほどがありますわよ」

老人「無責任？」

麗「劉備さんの言葉を思い出しなさい」

私はみなさんの事を足手纏いだなんて思わない！　そして、絶対に見捨てたりなんかしない！　いざとなったら、私が必ず守ってみせます！！

麗「劉備さんが城をお捨てになつたのも、こうしてあなた達を連れてくるのも、全てはあなた達を守る為、あなた達の意志を尊重されたからですのよ。そこまでしていただいているあなたが、そんなに簡単に諦めていいとも思っていますの？」

老人「……………」

麗「あなたには、最後まで劉備さんに付き従う義務があります。ですから、こんな所で立ち止まっているヒマはありませんわよ」

老人「……………そうですな。袁紹將軍の言う通り、儂が諦めるわけにはいきませんな」

麗羽の言葉を聞き、老人の目に光が戻った。

女性「お父さん……………！」

老人「それに、グズグズしておつたら曹操に追いつかれてしまいますからな」

麗「あら、何を言っていますの？　わたくし達には天の御遣いであらせられる秋月　一成様がついているのですわよ？　たとえ追いつ

かれようと、あの金髪クルクル娘ごとき相手ではありませんわ」

老人「ほっほっほ！　そうですね！　儂等には御遣い様がついておられるのですからな！」

老人だけではない。周りにいる人達の目にも再び力が宿っていた。結果的に、麗羽は民達を鼓舞したのだ。

白「麗羽・・・お前・・・」

麗「な、何ですの白蓮さん？　言っておきますけど、わたくしは別にあのご老人がどうなるうと構いはしませんのよ。ただ・・・」

白「まったく、素直じゃないな」

麗「で、ですから・・・！　いえ、それよりも一成様。申しわけありません」

一「？　何で謝るんだ？」

麗「許可なく天の御遣いの名を使わせて頂きました。入蜀が終わりましたら、どのような罰でも受け入れますわ」

一「何言ってるんだ。キミはとても素晴らしい事をしたんだぞ。それなのに、どうして罰を与えなくてはならないんだ？」

麗「許していただけますの？」

—「もちろんさ」

麗「ああ、なんて広いお心……。どうしましょう。わたくし、より一層あなた様をお慕いする気持ちが強まってしまいましたわ!」

砂が入ってしまったのか、麗羽の目が潤んでいる。

白「しかし、麗羽ってあんなヤツだったっけ?」

斗「劉備さんに拾われて、みなさんと一緒に生活している内に、何か思う所があったようです」

猪「そういやあ、よく考えごととしてる姿を見かけたのを覚えてるな」

白「桃香と触れ合った人間はどこか影響を受けるからな。麗羽も例外じゃなかったってわけか」

すると、前方に長い橋が見えて来た。

—「あれは……」

斗「長坂橋ですね」

あれが長坂橋か。という事は……。もうじき華琳達に追いつかれるな。

白「どうした秋月？ そんな難しい顔をして」

一「いや、危ない場所だなど思ってたな」

橋がかけられた崖下を覗き込む。かなり深い所に川が見えた。

白「確かに。ここから落ちたら即死だな」

かなりの大人数だったが、橋が崩れる事もなく、全員が無事に渡る事に成功した。ここさえ抜ければ後は・・・

一「ん？」

後方から複数の騎影が接近して来た。まさか、もう追いつかれたのか？

斗「大丈夫ですよ一成さん。あれは曹操軍の様子を知る為に放った斥候ですから」

斗詩の言う通り、現れたのは劉備軍の鎧を纏った兵達だった。そのまま俺達の横を通り過ぎて行く。

猪「戻って来たって事は・・・何か動きでもあったのか？」

白「すぐに連絡が来るだろう」

数分後、今度は愛紗がやって来た。

愛「ご主人様、敵が追撃を始めたそうです。我等の移動速度と曹操軍の追撃速度を計算して、おそらく二刻後には追いつかれるとの事です」

一「二刻後か・・・」

愛「そこで、このまま先行して城を落とす部隊と、曹操軍を足止めする部隊の二つに分ける事になりました」

一「なら、俺は足止めだな」

迷う事なく選択する。

愛「ダメです・・・と言いたいところですが、そうおっしゃると思っております。鈴々と恋、そしてねねも足止め部隊ですので。く・れ・ぐ・れ・も！ お一人で何とかしようなどと思わないでくださいね」



—「……了解」

愛「袁紹殿達は私について来てください」

麗「わかりましたわ。では一成様、ご武運を……」

斗「気をつけてくださいね」

猪「先に行ってるぜアニキ」

白「絶対戻って来いよ秋月」

—「ああ。みんなも無事で……」

愛紗達と別れ、しばらくその場で待機していると、兵を引き連れた鈴々達がやって来た。

鈴「お待たせなのだお兄ちゃん」

—「兵の数は？」

ね「三万です。城攻めの事も考え、これ以上は割けなかったのです」

—「充分だよ。今回はあくまで迎撃だ。鈴々と恋の『武』とねねの『知』。そして、兵のみんなの『勇氣』があれば必ずうまくいくさ」

恋「恋……頑張る」

「ああ、頼りにしてるよ」

ね「それで、具体的にはどうするつもりですか？」

「ねねなら気付いてるだろう？　今まで通って来た道の中で、敵を迎え撃つのに最適な場所がある事を」

ね「……………なるほど、一成にしては上出来なのです」

鈴「それってどこなのだ？」

後方を指差し、俺はその場所を告げた。

「長坂橋さ……………」

第七十四話 辛い時こそ支え合おう（後書き）

作「麗羽さんが変わっちゃったよ」

一「まあ、お前の事だから何かやらかすとは思ってたけどな」

作「ボロクソ言われる麗羽が不憫だな。せめてこれくらいはしてもいいだろう」

一「麗羽は優しい女性だぞ。何でみんな嫌ってるんだ？」

作「（それはお前に対してだけだよ）」

一「作者？」

作「何でもない。それより、次は激戦になると思うぞ。覚悟しとけよ」

一「どうせ、またグダグダで終わらせるんだろ？」

作「むむむ……」

第七十五話 別に倒してしまっても構わんのだろっ？ (前書き)

ああ、久しぶりに原作をプレイしたいな・・・

第七十五話 別に倒してしまっても構わんのだらう？

俺と鈴々、そして恋の三人は、長坂橋の前で曹操軍が追いついて来るのを待っていた。ねねと兵達は、向こう岸でそれぞれ姿を隠して配置についている。

鈴「……来ないのだ」

恋「……ふわぁ」

ヒマそうに蛇矛を振り回す鈴々。恋に至ってはあくびをもらしている。

—「しりとりでもしようか？」

鈴「しりとり？」

—「簡単な言葉遊びだよ。まず、一人が適当な単語を言う。で、次の人は最初の人が出た単語の最後の文字から始まる単語を言う。それを続けていって、同じ単語を言う、もしくは『ん』で終わる単語を言った人の負けてという遊び。例えば、俺が鳥って言ったたら、鈴々は『り』から始まる単語を言えればいいんだ」

鈴「面白そうなのだ」

—「じゃあ俺、鈴々、恋の順番でやってみようか。まずはしりとり

の『り』からだ」

鈴「えーつと・・・鈴々！」

恋「『ん』がついた・・・」

鈴「ああ！ しまったのだ！」

—「おっと、言い忘れてた。人の名前も駄目だから」

鈴「そうなのだ？ じゃあ、また最初からなのだ」

—「今度は鈴々から始めだな」

鈴「なら・・・橋なのだ！」

恋「小籠包・・・」

—「馬」

鈴「街！」

恋「青椒肉絲・・・」

—「水泳」

鈴「家！」

恋「海老餃子・・・」

—「はは、食べ物ばかりだな恋」

恋「・・・お腹空いた」

鈴「何だか鈴々もお腹空いてきたのだ」

—「この戦いが終わったら、たくさん食べような」

鈴「うん！」

恋「楽しみ・・・」

こんな所で死ぬつもりはない。だからこそ、先の話だって楽しく出来るのだ。

・・・

それから延々としりとりを続けてどれほど経っただろうか。遙か彼方に砂塵が見えた。

恋「・・・来た」

鈴「待ちくたびれたのだ！」

—「本当は来てくれないのが一番よかったんだけどな」

手甲を発現させつつ、俺は眼前を見据えた。段々と旗が見えて来る。

—「（『夏』と『許』。季衣と……たぶん春蘭か）」

いきなり厄介な人物を送って来たな。春蘭に突破されてしまったら、後方の味方が危険すぎる。

—「はあ……これは骨が折れそうだ（苦笑）」

やがて、橋の前に立つ俺達の周りを、曹操軍がぐるりと囲んだ。退路は一つ。だが、逃げるのではなく、守らなければならない。

春「やはり貴様が出て来たか秋月」

季「元気そうだね兄ちゃん」

—「そつちもな季衣」

鈴「こらちびっ子！ お兄ちゃんは鈴々のお兄ちゃんなのだ！」

季「お前だつてちびじゃないか！ それに、兄ちゃんは僕の兄ちゃんだぞ！ 気安くお兄ちゃんなんて呼ぶな！」

鈴「なにお〜〜！ 春巻きみたいな髪のかせに〜〜！！！」



季「は、春巻きだと!? ぬぬぬ・・・ペタン」め~~~~!~!~!」

鈴「これから大きくなるのだ!」

「・・・鈴々。少し落ち着いてくれ」

鈴「む〜。お兄ちゃんがそう言うなら・・・」

春「こら季衣! 相手の口車に乗せられてどつする!」

季「ご、ごめんなさい春蘭様」

春「うむ、わかればいいのだ」

恋「・・・」

春「ん? そこにいるのは呂布ではないか! 面白い、前から貴様とは戦ってみたかったのだ!」

恋「・・・じ〜」

春「な、何故そんなに見つめるのだ」

恋「おでこ・・・眩しい」

ピシィッ!~!

恋の一言に、春蘭の表情が固まった。

—「恋……それは言つては駄目だ」

恋「？」

春「……なす」

季「し、春蘭……様？」

春「死なす！ 呂布！ 貴様は絶対に死なあああああすつ！！」

七星餓狼を抜き、春蘭は恋に襲いかかった。

ギイイイイイイン！！

—「恋！」

恋「大丈夫……こいつ、恋が倒す」

春「ほざけえ！」

季「なら、僕の相手はお前だ！！」

ビュオン！！

鈴「にやあつ！？」

迫り来る岩打武反魔を、鈴々はしゃがんで回避した。

鈴「いきなりなんて卑怯なのだ！」

季「へへん！ 油断したお前が悪いんだ！」

鈴「上等なのだ！ 泣いて謝ったって許してやらないのだ！」

それぞれ一騎打ちを始める四人……。俺と兵達は完全に取り残されていた。

—「さて……。終わるまで待つか？ それとも……」

魏兵「？」

拳を合わせつつ、俺は笑顔で告げた。

—「俺と……。闘るか？」

魏兵「待たせて頂きます！」

俺の提案に、兵達は迷いなく答えた。とりあえず、これで一騎打ちが終わるまでは動きはないだろう。

鈴「うりやりやりやりやーっ！…！」

季「甘い！」

蛇矛を縦横無尽に振るいながら、鈴々が季衣に肉薄する。対する季衣も、鉄球を器用に扱いながら一撃一撃を受け止めている。

季「今度はこっちの番だ！」

反撃とばかりに振り回された鉄球が、凄まじい速さで鈴々へと襲いかかる。正に一進一退の攻防だった。

鈴「やるな春巻き！」

季「お前こそなペタンコ！」

「（称えているのか貶しているのかわからないな）」

鈴「でも、いつまでもお前の相手をしてるわけにはいかないのだ。

だから・・・」

ビュオツ！

季「え・・・？」

鈴「これで・・・終わりなのだあああああ！！！！」

ザシユ！！

季「うわああああああ！！！！」

鈴々の姿が消えたと思った次の瞬間、季衣の体が宙を舞っていた。  
鈴々の全力の速さに、季衣はまだ及ばないようだ。

鈴「これが、燕人張飛の力なのだ！！！！」

季「きゅっっっ・・・」

鈴「ありや？ 気絶してるのだ」

魏兵「き、許緒將軍が破れた！？」

春「季衣！ しっかりしろ・・・！！」

恋「ふっ……！」

ギャリイイイイイン！！

ぶつかり合う刃が甲高い音を響かせる。鈴々と季衣も凄かったが、こっちの二人はそれ以上だった。

ブン！ ギン！ ガン！ ブオン！ ガギャン！ ガツン！ ギャリ！ ギリギリ……！！

高みに登り詰めた二人の戦いは、まるで舞のようだった。その姿に、俺は無意識に見惚れていた。

春「流石だな呂布！ 力も技も速さも私と同じ……いや、それ以上か！」

恋「お前も強い……。でも……負けない」

春「ふん！ それはこちらの台詞だ……！」

絶えずぶつかり合う両者。だが、時が経つにつれ、徐々に恋が主導権を握っていった。

恋「はっ……!!」

今まで以上の速度で恋が戟を突き出す。それは、春蘭の防御を超え、彼女の眼前に迫ったが……

春「ッ！ 舐めるなあ!!」

ギチッ!!

恋「ッ!?!」

なんと、春蘭は歯で以って戟を受け止めていた。

春「ふっふっふ……おろろいふあふあ!!」

——「（無茶苦茶にも程があるだろ……!）」

大声を出すのも無粋なので、俺は心の中で春蘭にツッコんだ。

春「ふん!!」

ビュン！

恋「ツ・・・！」

あまりに衝撃的だったのか固まっている恋に、春蘭は横薙ぎを放ったが、すぐさま冷静に回避した恋には届かなかった。

恋「お前・・・面白い」

春「面白い？」

恋「恋・・・歯で受け止めるヤツ、初めて見た・・・」

春「私だって、あんな受け止め方をしたのは初めてだ」

—「初めてって・・・」

鈴「お兄ちゃん、あいつ馬鹿なのだ」

いつの間にか、俺の隣に立っていた鈴々がそう呟く。

春「聞こえたぞ張飛！」

鈴「おまけに地獄耳なのだ」



春「ええい！ 呂布を片付けた後は貴様の番だ！」

鈴「ふーんだ！ お前なんか恋に勝てるわけないのだ！ やっちやうのだ恋！」

恋「ん・・・行く」

再び押し始める恋。そして、先程のように渾身の突きを春蘭の頭部に向かって放った。

春「何度来ようと受け止めてやる！」

恋「・・・甘い」

スツ・・・

恋は戟を持ち変え、春蘭の腹部を突いた。

ザシュ！

春「ぐあっ！」

脇腹を裂かれ、血を滲ませる春蘭。量からして致命傷ではないようだが、これで勝負は決まった様なものだった。

春「まだだ！ この程度で倒れるわけにはいかんだあああああ  
！！」

傷を負ったにも関わらず、春蘭のスピードは先程までよりも目に見えて速くなっていた。

鈴「お兄ちゃん！ また砂塵が見えるのだ！」

鈴々の指差す方を見つめると・・・春蘭達の時よりさらに大きな砂塵が舞っているのが見えた。

—「どうやら本隊がやって来たみたいだな」

鈴「それじゃあ、あいつらを止めればみんな助かるのだ？」

—「ここからが本番だな。・・・覚悟はいいか鈴々？」

鈴「もちろんなのだ！」

今度は・・・俺の番だ。

第七十五話 別に倒してしまっても構わんのだろう？。(後書き)

作「いやあ、相変わらず戦闘描写が下手だね」

一「自分で言っただけじゃ世話ないな」

作「事実だからな。それに、何だか殺伐としてないし」

一「言われてみれば・・・今の状況、戦ってるのは恋と春蘭だけで、俺と鈴々だけならまだしも、魏兵全員も一緒に見てるだけだしな」

作「まあでも、この時代の一騎打ちって神聖なものだし、案外リアル三国志でもこうだった場面あったかもしれないぞ」

一「それもそうだな。確か原作の魏ルートのも、桃香と華琳の一騎打ちだったような」

作「・・・いつその事、この小説の最後も一騎打ちで終わらせるか」

一「誰が三国の王になるか、桃香と華琳と雪蓮の三人で？」

作「いや、どの国がお前を独占するかで」

一「動機が不純過ぎるだろ！！」

第七十六話 石橋はぶっ壊す勢いで叩け（前書き）

挿絵があつたら戦闘描写もわかりやすくなるのに・・・

## 第七十六話 石橋はぶつ壊す勢いで叩け

春「でえええええええい!!」

恋「はあっ……!」

恋と春蘭の戦いはさらに激しさを増していた。恋は圧倒的な力と速さを見せつけながら春蘭を攻め立て、対する春蘭も、負傷しているにも関わらず、隙あらば反撃を繰り返す。

魏兵A「す、凄い……これが将对将の戦い……」

魏兵B「將軍があれほど善戦されているのに、俺達このままでいいのか」

魏兵C「そうだ！俺達にだって出来る事はある!!」

二人の戦いに触発されたのか、魏兵達が一斉に武器を構え、橋の前に立つ俺と鈴々へ視線を移す。

魏兵D「やるぞ！何としても橋を突破してやる!!」

魏兵E「よし！バラバラになるな！一斉に仕掛けるぞ!!」

魏兵F「やってやらあ!!」

春「そつだお前達！ それでこそ誇りある魏の兵だ！」

恋「一成・・・鈴々・・・！」

春「隙を見せたな呂布！」

ビュン！

恋「ッ！」

恋の赤髪が数本宙を舞った。

春「ちいつ！ 浅かったか！」

恋「恋、二人を助ける・・・。お前、もう倒れる・・・！」

春「私は倒れん！ 魏の為、華琳様の為にも！」

ギャリイイイイイイン！！

もう何度目になるかわからない刃と刃のぶつかり合う音・・・。それを聞きながら、俺は拳を構えた。

—「かなりの気迫だな」

鈴「うん。だけど・・・」

魏兵G「おりゃあああああああ！！！」

ザシュ！

魏兵G「ぐあっ！」

鈴「気迫だけじゃ・・・鈴々は倒せないのだ！！！」

魏兵H「怯むな！ 攻め立てろ！」

—「ああ、そうだ・・・な！！！」

バキッ！

魏兵I「がはっ！」

手近な兵を殴り飛ばす。だが、次の瞬間には別の兵が目の前に現れる。

魏兵」「今だ！」

「甘いっ！」

ドゴッ！

魏兵」「く・・・そ・・・」

鈴「とりゃあああああああ！！！」

ザシュ！ ザン！ ドシュ！

魏兵 A・B・C「うわあああああああ！！！」

鈴々は蛇矛を大きく振り回し、瞬く間に魏兵達を地に伏せていく。  
まだまだ余裕そうな表情を浮かべている。

「（援護射撃が欲しいが・・・まだねね達に頼るわけにはいかな  
い）」

とにかく、今は三人で時間を稼ぐしかない。敵の本隊がやって来た  
その時が勝負だ。



？「お前ら下がりい！」

魏兵達「ッ！？」

戦場に響く第三の声・・・それは、別働隊を率いて現れた霞の声だった。周りにいた魏兵達が一斉に下がる。

—「さっきの砂塵は霞達のものだったのか」

霞「そうや。けど、華琳達もすぐそこまで来とるで。今の内に降伏した方がええと思うけどな」

—「頷くと思うか？」

霞「そう言つと思つたわ」

不敵に笑う霞。馬から降り、飛龍堰月刀を軽く振るいながらこちらに向かって歩み出る。

霞「季衣は気絶、春蘭は恋と一騎打ち・・・なら、アンタらの相手はウチしかおらんっちゅうわけやな」

鈴「なら、鈴々が相手してやるのだ」

—「いや、ここは俺に任せてくれないか鈴々」

鈴「お兄ちゃん？」

一「鈴々はさつきあれだけ頑張ってくれた。だから今度は、俺が頑張る番だ」

前に出ようとする鈴々を制し、霞の前に進む。

一「キミとは洛陽での手合わせ以来だな、霞」

霞「あの時の借り・・・返させてもらうので、一成」

手甲を消し、新たに刀を発現させた。鞘から抜き、そのまま上段に構える。

一・霞「」

見つめ合い、少しずつ距離を縮めていく。やがて、互いの刃が相手に届く距離になったその時、俺と霞は同時に武器を振るった。

一「はあああああああああ！！！！」

霞「せええええええええええい！！！！」

ギィィィィィィィン！！

刃が交差し、あの時と同じように霞が笑みを浮かべる。ただ一つ違うのは、これは手合わせではなく、命を懸けた本気の戦いだということだ。

霞「これや・・・これなんや！ やっぱリ 안타と刃を交わした時が一番ゾクゾクするで一成！！」

— 「こっちはキミの殺気でヒヤヒヤしてるんだが」

霞「はっ！ とてもそうは見えへんけどな！」

互いに弾かれ一度距離が取れる。だが、次の瞬間には俺の懐に霞が潜り込んでいた。

— 「ッ！？ 速っ・・・！」

霞「でえい！」

— 「やらせるかあ！」

ガギン！

霞「んなっ!?!」

—「せやあ!」

ブンッ!

霞「うわっ! たったった・・・!」

胸元を狙った一閃を、左手で持った鞘で間髪防ぐ。反撃とばかりに刀を薙ぐが、霞は器用に体を捻らせてそれを避けた。

—「・・・なんて速さだ」

霞「あの時のウチと同じと思うたら大怪我するで?」

それだけ言うと、霞は先程よりもさらに速い速度で堰月刀を突き出して来た。

霞「そら! そら!!! そらあああああ!!!!」

—「くっ・・・!」

ヒュン！ ギン！ チツ……！

霞の一撃が俺の右頬を軽く切り裂いた。少しばかりの痛みの後、生温かい何かが右頬を伝うのを感じた。

霞「今ので七割くらいや。ウチはまだまだ速うなるで」

—「（これが……『神速』の張遼）」

手合わせの時とはまるで違う……彼女の二つ名の恐ろしさを身を以って味わった。

—「やるしかないか……」

刀を鞘に仕舞い。全身の力を抜きながら腰元で構えた……

S I D E O U T

霞 S I D E

突然、一成は得物を仕舞った。それを見た兵達が口々に呟く。

魏兵「武器を仕舞ったぞ。降伏するののか？」

霞「……いや、あれは構えや」

あの細い剣を持った時に見せる独特な構え。あの構えから放たれる高速の一撃に以前ウチはやられた。

霞「（確か……『居合いの太刀』やったか？　せやけど、一度見せた技を同じ相手に撃つんは迂闊やで一成？）」

何をしてくるのかわかっていれば、対処はいくらでも出来る。ウチは油断なく堰月刀を構え直した。

霞「……ん？」

一瞬、一成の体から黒い何かが噴き出たように見えた。

「……いくぞ、霞」

ヒュン！

一成の姿が消える。ここまででは前回と同じ。だが……

霞「ウチ相手に、同じ技が通用する思っなや一成!!」

ガギイイイイイイイイイン!!

霞「よし防いだ！ すぐに反撃……」

「はあっ!!」

ギン！ ギン！ ガキン！

一成の攻撃が止まらない。連撃によって強引にこちらを攻め立てて来る。さらに……

霞「（一撃ごとに速さが増しとる!!）」

「まだまだあ!!」

二連撃……三連撃……四連撃……手数が増加と共に速度も増していく。

霞「くつ！ 捌き切れへん・・・！」

—「せやあああああああ！！！」

最後に、九つの斬撃がウチを襲った。

霞「（九連撃！？）」

ガン！ ギン！ ブン！ ガツン！ ガギン！ ブオン！ ギャリ  
ン！ ガキン！ ギイン！

霞「（よ、よし！ 耐え・・・）」

—「無名の太刀」

霞「え・・・」

ヒュン・・・カチン

すれ違い、再び得物を仕舞う一成。だが、次の瞬間・・・

ザシユ！



霞「ッ!？」

腹部を襲つた凄まじい衝撃。それを感じると同時に、ウチの意識は闇に沈んだ・・・

霞SIDE OUT

IN SIDE

—「何とか勝てたか・・・」

気絶した霞を抱え上げ、緊張を解く。

ズキッ!

体の節々が痛む。それは技を使った反動だった。

無名の太刀・・・黒マナを練り上げたものを取り込み、感覚を加速させ限界を超えた速度を強引に引き出した上で超高速連撃で相手を攻め立て、最後にX状の剣閃で止めを刺す。俺が使える最大級の奥

義の一つだが、強制的に力を引き出すので、使用すると肉体に大きな負荷がかかる。

春「く、くそ……！」

恋「恋の勝ち……」

どうやら向こうも勝負がついたようだ。跪いた春蘭に恋が戟を突き付けていた。

魏兵「き、貴様！ 張遼將軍を離せ！！」

「落ち着け、別に危害を加えるつもりは……」

鈴「お兄ちゃん！ また砂塵が見えるのだ！」

恋「……本隊」

大地を揺らし、大量の砂塵をまき散らせながら、今までで最大級の一団がこちらに向かって接近していた。恋の言う通り、あれが本隊で間違いないだろう。

春「おのれ……華琳様がご到着する前に劉備を討つつもりだったのに……」

鈴「鈴々達がいる限り、お姉ちゃんには指一本触れさせないのだ！」

やがて、本隊が合流し、一人の少女が前に出て来た。

華「久しぶりね・・・一成」

一「そうだな」

秋「無事か姉者！？」

流「季衣！　しっかりして！」

秋蘭と流琉がそれぞれ飛び出す。

春「私は大丈夫だ。季衣も気絶しているだけだ」

流「よかった・・・」

春「華琳様、申し訳ありません。劉備に追いつくどころか、たった三人相手にこれほどの損害を出してしまいました」

華琳が周囲を見渡す。俺と鈴々が打ち倒した魏兵達が大勢地に伏せている。

春「さらに、霞まで秋月の捕虜に……こうなれば、私の首を斬り、この度の失敗の責任を……」

—「いや、だから別にそういうつもりは……」

華「そう思うなら生きて挽回なさい。私にはあなたが必要な。死ぬ事など許さないわ」

春「か、華琳様……私などにそのようなお言葉を……」

—「話を聞いてくれ」

春蘭が感激の面持ちで華琳を見つめる。それを流し、華琳は再びこちらに視線を移した。

華「たった三人で足止めとはね……舐められたものだわ」

—「本当に三人だけだと思っか？」

華「あら、伏兵でも忍ばせてるのかしら？」

—「想像に任せるよ」

流「ッ！ 華琳様！ 今、橋の向こうの草むらが不自然に揺れました！」

さすがね。最高のタイミングで動いてくれる。

「さあ……どう出る華琳？」

華「一騎当千の人物が三人……それが橋の前に陣取れば、戦えるのは自ずと将のみ。けれど、もし破れば、兵の士気も落ち、最悪敗走の危険も出て来る。現に、春蘭、季衣、霞がやられ、兵達は大きく動揺している。さらに、伏兵の数も把握出来ていない。こうなればとるべき道は一つね……」

秋「華琳様……？」

華「……追撃は中止。全軍撤退せよ」

華琳の宣言に、魏軍はすぐに撤退準備を始めた。

春「な、何故ですか華琳様！？　せつかくここまで追い詰めたのですよ!？」

秋「落ちつけ姉者。華琳様には何かお考えがあるのだ」

春「しかし……」

華「私の決定に不服があるの春蘭？」

春「い、いえ！　滅相ありません!」

霞「う、うん……なんやうるさいなあ」

—「気がついたか霞」

霞「は、はれ？ 何でウチ一成に抱っこされとるん？」

—「キミは気絶してたんだよ。それと、華琳達は撤退するみたいだぞ」

霞「なんや、ウチが寝とる間に色々あったみたいやな。ん？ この場合、ウチって捕虜なん？」

—「いや、俺はキミをどうこうするつもりはないよ」

霞を下ろし、武器を返す。

霞「今回もウチの負けか。次こそ負けへんからな一成」

—「ああ、望む所だ」

霞「ほな、さいなら」

そう言っつて、霞は去って行った。

華「相変わらずの甘さね。人質に取ろうとは思わなかったの？」

—「それで躊躇うキミじゃないだろ？ そっちこそ、撤退していい

のか？」

華「分の悪い賭けは好きじゃないの。劉備に伝えてちょうだい、決着は必ずつける。精々首を洗って待ってなさいってね」

一「わかった。伝えておく」

華「それじゃ、また戦場で会いましょう一成」

振りかえる事なく、華琳は馬を走らせ一団と共に消えて行った。

鈴「やったのだ！ これでみんな助かったのだ！」

恋「よかった・・・」

一「二人のおかげだ。本当によくやってくれたよ」

労いの気持ちを込め、二人の頭を撫でた。

鈴「にははは、お兄ちゃんのだデナデはやっぱり気持ちいいのだ」

一「ははっ、それは嬉しいな」

恋「一成も・・・」

一「ん？」

ナデナデ

恋「頑張った・・・」

すると、今度は恋が俺の頭を優しく撫でてくれた。

—「あ、ありがとう」

まさか撫で返されるとは・・・嬉しいのと気恥ずかしいのが半々だった。

ね「恋殿~~~~~!!」

ねねが橋を渡って駆け寄って来た。

恋「ねねも頑張った・・・」

ナデナデ



ね「ひゃわっ!? ね、恋殿に頭を撫でて頂けるなんて・・・ねねは感無量なのです!」

—「いや、本当に最高の頃合いだったよ。あれが決定打だったな」

ね「弓で斉射しようとも思ったのですが、実行に移す前に撤退させてしまいました」

—「いや、それでよかったんだ。下手に攻撃すると、本格的な戦闘が始まっていたかもしれないしな」

鈴「ねえねえお兄ちゃん、早くお姉ちゃん達を追いかけた方がいいと思うのだ」

恋「お腹・・・空いた・・・」

—「そうだな。兵を纏めたらすぐに出発しよう」

こうして、曹操軍を追い払った俺達は、城攻めの為に先に向かった部隊を追いかけた。やがてとある城に辿り着くと、すでにそこは制圧されており、俺達は安全に入城する事が出来た。

桃「お帰りみんな!」

玉座の間に通されると、まず桃香が出迎えてくれた。

星「その様子だと、無事に任務をこなせたみたいですね」

—「ああ。曹操軍は撤退して行った。もう追われる事はないだろう」  
麗「ほぐら、わたくしの言った通りでしょう？ 華琳さんごときに  
—成様が負けるはずがありませんわ」

鈴「それより、鈴々お腹が空いたのだ！ ご飯はまだなのだ？」

恋「恋も・・・」

愛「よし、危険な任務をこなしたご褒美に、私が作ってやろう」

鈴「うえっ！？」

愛「どうした？ この世の終わりを迎えたような顔をして・・・」

鈴「愛紗の料理を食べるくらいならメンマ丼を食べる方がマシなのだー！！」

愛「なっ！？ どういう意味だ鈴々！！」

星「聞き捨てならんな鈴々。メンマ丼を馬鹿にする者は私が許さんぞ」

？「お姉様、私達完全に忘れ去られてるね」

？「言つなよ蒲公英・・・」

—「ん？」

聞き慣れない声に視線を向けると、初めて見る少女が二人、愛紗達の騒ぎを離れて眺めていた。

—「キミ達は・・・」

朱「西涼の馬超さんと馬岱さんです。ご主人様達と別れた後、偶然お二人が率いていた部隊と接触しまして。話し合った結果、新しくお仲間に加わってもらったんです」

—「そうなのか。初めまして、俺の名前は秋月 一成だ」

馬岱「馬岱だよ。真名は蒲公英。よろしくね！」

—「真名までいいのか？」

馬岱「もちろんだよご主人様」

—「ありがとう蒲公英・・・出来れば名前で呼んでくれた方がいいんだが・・・」

馬超「・・・」

蒲「？ どうしたのお姉様？」

馬超「・・・はっ！ い、いや、何でもない！」

蒲「あゝ、わかった。ご主人様に見惚れてたんでしょ？ 格好良い

もんねご主人様」

馬超「ば、ばばば馬鹿な事言うな！ 私は別に見惚れてなんか・  
・！」

蒲「それよりほら、お姉様も自己紹介しなきゃ」

馬超「・・・ば、馬超だ。真名は翠」

—「よろしくな翠」

馬超「あ、ああ・・・」

蒲「ねえねえご主人様。お姉様つて可愛いでしょ？ もしよかったらお嫁さんにしてあげてくれない？」

翠「なっ！？ 何言ってるんだ蒲公英！？」

蒲「どう、ご主人様？」

—「お嫁さん云々はともかく、素敵な女性だと思うけど」

翠「 @ ツ！？」

蒲「あはははは お姉様、顔が真っ赤だよ！」

—「（何かまずい事言ってしまったのか俺？）」

新たな仲間を加えつつ、俺達は益州の平定の第一歩を踏み出した・

.

第七十六話 石橋はぶっ壊す勢いで叩け（後書き）

作「はあ……どうにか長坂橋の戦いを終わらせる事が出来た」

一「特に言う事はないな」

作「おつ、それってよく書けてるって言う事か？」

一「逆だ。今までと同じだから言う事が無いんだよ」

作「ぬか喜びさせるなや！」

一「お前が勝手に勘違いしたんだろう」

作「黙れ！ いつもいつも追い込まれたら新技出しゃがって！  
ち方がワンパターンなんだよ！」 勝

一「それはつまり、お前がワンパターンだって言ってるようなものだぞ」

作「しまった！」

第七十七話 苦しみ抜いて得た答えは誰にも否定出来ない(前書き)

策らしい策が思いつかない。誰かご教授ください・・・

## 第七十七話 苦しみ抜いて得た答えは誰にも否定出来ない

華琳達を撤退させ、無事に入城して数日が過ぎ、長距離の移動によって疲れ切っていた民達もすっかり落ち着いていた。

いよいよ本格的な益州平定が始まる。俺達は早速軍議を行う事にした。

朱「では、これからの方針ですが、途中にある城を落としながら、益州の州都である成都を目指します」

桃「城つていくつくらいあるの？」

雛「おそらく、二十以上はあると思われます。ですが、内乱で疲弊している今なら、労せずして落とすといけると思います」

一「だが、もし結託されて攻められたら、こっちの方が危ないんじゃないか？ 劉璋からすれば俺達は侵入者だからな」

朱「その心配はありません。この諷陵に入城してすぐに劉璋さんに使者を出して、入城の正当性を伝えてありますから」

一「ああ、なるほど。さすが軍師、抜け目がないな」

朱「えへへ、ありがとうございます」

白「しかし・・・どう考えても正当性なんて無いと思ってるのは私



だけか？」

雖「それを何とかするのが私達の役目ですから」

星「ふつ、劉璋の無能さを証明しているのと同じだな」

愛「しかも、その評価を下しているのが民では、もはや救いようがない」

桃香達が入城した際、諷陵の住民達は歓声を上げて迎え入れてくれたそうだ。さらに、桃香が益州を平定しようとしている事を説明すると、長老の一人に、「是非とも、あの無能に代わってこの地を治めて頂きたい」と言われたらしい。

ね「ですが、油断は出来ないのです。太守が無能でも、内乱が起これば益州は人口も多く、土地も豊かです。それを守る兵達は・・・おそらく相当な数のはずなのです」

数の力は絶対的だ。時間をかければ潰されるのはこちらだろう。出来るだけ早く成都を制圧したい。

「ここは最短距離で成都に向かうべきだと思うのだが」

朱「はい。ですが、最短距離だからこそ、配置されている兵もかなりの数になるでしょうし、有能な将も配置されているはずですよ」

鈴「そんなの鈴々がやっつけてやるのだ」

鈴々が自信満々に胸を叩く。

星「私も主の意見に賛成だ。最短距離で成都に向かえ、なおかつ良将と戦えるなど、願ってもない事だからな」

愛「そうだな、民達の為、我等は一刻も早く益州を平定しなければならん。相手がどれほど強大だろうと薙ぎ倒すだけだ」

全員が俺の意見に賛成のようだった。その翌日、俺達は成都へ向かって出陣した。

朱「今から向かう城の城主は、黄忠さんとおっしゃる方だそうです」

—「黄忠さん？」

俺の脳裏に一人の女性の顔がよぎった。

桃「知ってるのご主人様？」

—「以前迷子になっていた娘さんを保護してな。その時知り合っただんだ」

麗「思い出しましたわ。わたくしが一成様と運命の再会を果たしたあの時の事ですわね」

朱「・・・ねえ雛里ちゃん、ねねちゃん。もしかしてこれなら・・・」

雛「うん、いけるかもしれない」

ね「間違いないですよ」

軍師三人が確信したように頷く。何かいい考えが浮かんだのだろうか。

愛「三人とも、何か思いついたのか？」

雛「はい。もしかしたら、戦う事なく入城する事が出来るかもしれない」

白「そんな事出来るのか？」

朱「劉璋さんに使者を出す時に、益州の各地にも斥候を放っておいたんです。その人達に桃香様が益州に入った事を広めてもらっています。もちろん、黄忠さんのお城にも」

雛「おそらく、諷陵と同じように、住民達は桃香様歓迎の雰囲気一色になっていると思われれます。ですから、矢文か何かでこちらに桃香様がいる事を伝える事が出来れば、必ず反応があるはずですよ」

ね「上手くいけばそのまま入城。たとえ駄目でも、その動きに乗じれば一気に城を押さえる事が出来るはずなのです」

朱「それに加え、黄忠さんはご主人様に恩があります。その事も書き加えればほほ確実かと」

三人の提示した策に、桃香が感動した面持ちで頷いた。

桃「凄いよ三人とも！もしかしたら、誰も傷付ける事なく入城する事が出来るかもしれないんだね！」

雛「これからいくつもの城を攻略しなければならぬ以上、避けられる戦いは避けるべきですから。それに、民や兵の事を第一に考えられる桃香様なら、こういった策の方がお気に召すかと思ひまして」

それからさらに数日後。城に到着した俺達は、形だけの陣を敷き、相手の動きを待った。

星「やはり籠城を選んだか。……むしろ好都合かもしれないな」

雛「はい。早速矢文を放ちましょう。お願いします」

雛里の指示で矢文が放たれた。すると、城内が大きくざわつき始め、その数分後、見覚えのある一人の女性が城壁の上に現れた。

桃「あの人は……」

—「間違いない、黄忠さんだ」

黄忠さんは天高く弓を構え、一本の矢を放った。それは、放物線を描いて俺達の手前十メートルほどの場所へ落ちて来た。

愛「ほお、見事な腕だな」

鈴「文がついてるのだ」

朱「すみません、取って来てもらえますか？」

兵「はっ！」

一人の兵が矢を回収して朱里に手渡した。

桃「何て書いてあるの？」

朱「……証拠を見せて欲しいとの事です」

—「証拠？」

朱「はい。本当にご主人様と桃香様がいらっしゃるか、顔を見せて欲しいと書いてあります」

桃「そんな事でいいの？　じゃあ早速・・・」

愛「お、お待ちください桃香様！　危険です！　もし、畏だったら・・・」

桃「でも、そうしないと信じてもらえないし。それに、もし畏だったとしても、ご主人様が守ってくれるもん。ね？　ご主人様？」

—「ああ。桃香は必ず守る。だから安心してくれ愛紗」

愛「・・・わかりました」

渋々納得してくれた愛紗に礼を言い、俺と桃香は城門に向かって歩き始めた。すると、門が開き、そこから黄忠さんが出て来た。

互いに歩み寄り、ちょうど中間部分で相對する。

黄「お久しぶりです秋月様。そして・・・初めまして劉備様。私がこの城を任されている黄漢升です」

桃「は、はい！　こちらこそ初めまして！」

—「璃々ちゃんはお元気ですか？」

黄「はい。あれから変わりはありません」

—「そうですね」

黄「さて劉備様、文には降伏するよう書かれておりましたが……  
どういっておつもりでしょうか？」

桃「え？」

黄「劉備様は争いを無くし、民達を幸せにしたいと仰っております  
が、その為に益州に武力を以って攻め入るのは矛盾していると思う  
のですが」

桃「それは……」

黄忠さんの問いに、桃香は何も返さずに俯いてしまった。

—「……確かに矛盾しているかもしれませんが、  
ですが、桃香はそれでいいんですよ」

黄「どういう意味でしょう？」

—「今は乱世です。力の無い者は力を持つ者に呑み込まれる……  
そんな時代です。その中で、桃香の想いはそれこそ夢物語と思われ  
るかもしれませんが、実現は難しいかもしれませんが、ですが、それで  
も想いを貫き、理想を追い求めようとするのは間違っている事では  
ようか？ その為に力を振るう事は間違っている事でしょうか？」

黄「……」

—「黄忠さんの指摘された事は、桃香も以前からずっと悩んでいます。あいにく、まだ答えは出ていないようですが。悩み苦しみ、それでも前に進もうとする桃香を俺はとても尊敬しています」

桃「ご主人様・・・」

—「俺だけじゃありません。愛紗や鈴々、星や朱里や雛里、白蓮に恋にねね、月に詠、麗羽や猪々子や斗詩、それに、数日前に新しく仲間になった翠や蒲公英も、そんな桃香の理想に共感して共に戦っているんです。一つお教えします、桃香が益州にやって来る時、以前いた街のほとんどの住人が桃香を慕ってついて来たんですよ。そこまで慕われている人物を他に知ってますか？」

黄「・・・いえ」

—「桃香の理想はもう桃香一人だけのものじゃないんです。俺の・・・俺達全員の理想なんです。みんなの力を合わせれば、必ず実現出来る。俺はそう信じています」

そこまで言って、俺は桃香を促した。

桃「黄忠さん。確かに、争いを無くすために力を振るう事は矛盾していると思います。でも、それでもやらなといけないんです。今以上に苦しんでいる人達を救うために！」

桃香は黄忠さんを真っ直ぐに見詰め、自らの思いを伝える。



桃「ですからお願いします！　どうか私達を信じて降伏してください！　私は、必ず理想を実現してみせます！！」

黄忠さんは黙って桃香を見つめるが、やがて、フッと表情を和らげると・・・

黄「ふふ、どうやら噂以上のお方みたいですね」

と言つて右手をあげた。すると、城壁の上に白旗がいくつも上がり始めた。

桃「黄忠さん？」

黄「今までの無礼な発言をお許しください。どうしても、あなた様の口から直接お聞きしたかったものですから」

桃「え？」

黄「本当は、矢文を読んだ時点で降伏しようと思っておりました。この城は劉備様にお渡しいたします。そして、お許しただけのなら、この黄漢升も、劉備様の理想の実現のお手伝いをさせて頂けたら嬉しいのですが」

そう言つて、黄忠さんは桃香の前で臣下の礼をとった。

桃「はい！ もちろんです！」

黄「ありがとうございます。私の真名は紫苑、以後は真名でお呼びください」

桃「私の真名は桃香です」

—「よかつたな桃香」

桃「ご主人様のおかげだよ。ご主人様が紫苑さんを説得してくれなかつたらきつと駄目だったよ」

—「説得なんて大それたつもりは・・・ただ、思っていた事を口にしただけで・・・」

黄「ふふ、語られていた時の秋月様、とても凛々しく見えましたよ」

—「ははっ、ありがとうございます黄忠さん」

黄「紫苑で結構ですよ秋月様」

—「わかりました。では俺の事も一成と・・・」

桃「ご主人様の事はご主人様って呼んでくださいね」

紫「わかりましたわ、ご主人様」

—「・・・うん、桃香はそう言うと思ってたよ」

桃「？」

こうして、紫苑さんを仲間に加え、無血開城に成功した俺達は、悠々と入城を済ませた。次もうまくいってくれたらいいのだが・・・

—「まあ、そんな簡単にいくはずがないか」

後に、この呟きが現実のものとなるのだが、今の俺にわかるはずもなかった。

第七十七話 苦しみ抜いて得た答えは誰にも否定出来ない（後書き）

作「はい、爆乳未亡人も無事に加入いたしました」

一「その呼び方止める。失礼だろうか」

作「ん？ なんだよ、紫苑の事気に入ったのか？」

一「……下種が」

作「ちょ、軽く言っただけなのに何故に冷たい目で見て来る!？」

一「見てるんじゃない……見下してるんだ」

作「余計悪いわ!」

第七十八話 　こちやこちや考えるより殴った方が早い時もある（前書き）

纏めるのに本当に苦労しました。・・・なのにこの出来。

第七十八話 一こちやこちや考えるより殴った方が早い時もある

紫苑さんを愛紗達に引き合わせ、お互いの真名を交換し終えた俺達は、一日の大休止をとった。翌日、次の進路を決める軍議の中で、紫苑さんがある場所を示した。

朱「巴群ですか？」

紫「私の友人が城主を務めている所よ。敵顔と魏延・・・名前くらいはご存知かしら？」

雛「お二人とも、優将と名高い人物ですね」

翠「なら、紫苑に説得してもらえばいいんじゃないか？」

紫「それは難しいわね。二人ともかなり頑固だから、素直に説得に応じてくれるとは思えないわ」

愛「なるほど。ならば、戦ってこちらの力を示す必要があるというわけか」

紫「そうね。二人ともかなりの戦好きだから・・・」

苦笑いする紫苑さん。こうして、次の目的地は巴群となり、すぐさま出陣する事となった・・・

SIDE OUT

所変わってここは巴群。城主である敵顔の元に、配下である魏延がやって来た。

魏「桔梗様！ 紫苑殿の城が劉備軍によって落とされたそうです！」

敵「ほお、紫苑が負けたのか」

魏「敵は現在、この城に向かって進軍中との事！ 桔梗様、私達も！」

敵「おう！ 出るぞ焰耶！ 正面から叩き潰してくれるわ！」

魏「御意！！！」

武人としての血を騒がせながら、敵顔と魏延は兵を引き連れ城を出る。この二人、そして彼女達につき従う兵達の辞書に、『籠城』などという言葉は存在していなかった・・・

IN SIDE

進軍開始から数刻後、放っていた斥候が戻って来た。

兵「申し上げます！ 前方約二十里先に敵軍を発見！ 数はおよそ八万！ 旗印は『敵』と『魏』です！」

朱「ご苦労様です。下がって休んでください」

兵「はっ！ 失礼いたします！」

報告を終えた兵を見送り、もたらされた情報にそれぞれが口を開く。

愛「籠城ではなく、野戦を選ぶとは……」

星「解せんな……何が狙いだ」

蒲「伏兵とか隠してるんじゃないの？ それか、援軍とか」

雛「なににせよ、もう少し情報を集めないと判断がつけられません」

鈴「なら紫苑に聞くのだ」

桃「でも、敵顔さんは紫苑さんの友達だし……」

紫「お心遣いありがとうございます桃香様。ですが、私はもうあなた様の配下。有益な情報を話す事になんの躊躇いもありませんわ」

躊躇いを見せる桃香に紫苑さんは優しく微笑んだ。



紫「敵顔と魏延・・・二人とも、戦を心から楽しむ生粋の武人よ。野戦を選んだのも、その方が楽しめるから。きつと籠城なんて最初から考えてなかったでしょうね。援軍の方も心配しなくていいと思うわ。元々、劉璋様の事を快く思っておらず、いつも批判ばかりしていたから。援軍を要請しても対応してくれるはずないでしょうし、それ以前にあの二人は要請すらしてないでしょうね」

秋月~~~~!!

一成~~~~

二人の人物像を聞いて、春蘭と雪蓮の顔が頭をよぎった。

鈴「どうしたのだお兄ちゃん？」

—「どこにも似た人っているんだな鈴々」

鈴「？」

蒲「よっぽど戦うのが好きなんだね」

猪「へへ、気の合いそうな連中だな」

ね「やれやれ、野蛮な考えですね。軍師からしてみれば迷惑もいい所なのです」

星「そう言うなねね。己が誇りの為に野戦で堂々と決着をつける・  
・同じ武人として共感出来る部分はある」

桃「とにかく、敵顔さん達とお話するには勝たないといけないんだね。なら、やるしかない・・・」

朱「では、今の内に配列を決めておきましょう。紫苑さんの言う通りなら、おそらく正面からのぶつかり合いになるはずです。それを踏まえて、先鋒は鈴々ちゃんに翠さん、それと星さんをお願いします」

鈴「わかったのだ!」

翠「おつし! やってやるぜ!」

星「先鋒か・・・ふっ、腕が鳴るな」

朱「その補佐を白蓮さん、蒲公英さんをお願いします」

蒲「うん、お姉様熱が入っちゃうとすぐに突撃したがるから、補佐なんて必要ないかも」

白「それを止めるのが私達の役目だ。注意しとけよ蒲公英」

朱「愛紗さんと恋さんはそれぞれ右と左についてください」

愛「心得た」

恋「ん、わかった・・・」

朱「袁紹さん達はいざという時の予備隊として本隊で待機してください。雛里ちゃんとねねちゃん、紫苑さんは私と一緒に桃香様の傍に」

麗「しょうがないですわね」

猪「え〜、あたかも暴れたかったのに〜」

斗「これだって大事な役目だよ文ちゃん」

ね「待つのです。軍師三人が同じ場所においてもあまり意味がないのです。補佐に一人回した方がいいと思うのです」

雛「確かに・・・ねねちゃんの言う通りかも。朱里ちゃん、私が行くよ」

朱「そうだね。お願い雛里ちゃん」

紫「私も待機なの？」

朱「相手はお友達なんでしょう？ もし躊躇いが出たら紫苑さんの方が危ないですから」

紫「大丈夫よ。さっきも言ったけど、今の私の主は桃香様なんですから。たとえ友人が相手でも、この弓を向ける事になんの躊躇いもないわ」

弓に視線を向け、毅然と言い放つ紫苑さん。

朱「……わかりました。では、紫苑さんにも先鋒をお任せします」

紫「ええ、任せてちょうだい」

そこではたと気づく。まだ俺の名前が出ていない。

—「朱里、俺は？」

朱「ご主人様はお好きなように動かれて構いません」

—「わかった、任せてくれ」

朱「そろそろ接敵します。みなさん、それぞれの配置についてください」

朱里の指示でそれぞれ散っていく一同。俺は鈴々達と先鋒に出る事にした。

—「（朱里は好きなように動いて構わないと言った。つまり、何も考えずに全力で戦えという事か。だったら使うべき武器は……）」

相手は八万。刀や手甲で一人ずつ倒しては時間がかかる。なら、一度に複数を相手に出来る武器を使えばいい。

—「発現」

少し悩んだ末、俺は大剣を発現させた。切先から柄頭まで全てが漆黒に彩られ、全長は俺の身長のはある長大な剣。所謂ツヴァイハンドーと呼ばれる物だ。

星「なんとという大きさ・・・主、それはちゃんと振るえるのですか？」

—「もちろん」

片手で振り回しながら答える。『絆』は俺の想像通りの武器を発現させる。本来は両手で扱うこの剣も、俺が軽いと思えば羽のように軽くなるのだ。

鈴「凄いのだ！ 片手で振り回してるのだ！」

紫「ご主人様、見かけによらずとても力持ちでいらっしやるのですね」

—「いえ、そういうわけではなくてですね・・・」

翠「ちょっと私にも持たせてくれよ」

—「いいけど、気をつけ・・・」

ドゴッ！

翠「痛たたたたた！！！」

渡した途端、翠は大剣を地面に落した。しかも、握り部分を持ったままだったので、右手が地面と握り部分に挟まれていた。

—「だから気をつけてくれって言ったんだが」

翠「いいから早く退けてくれよ！」

大剣を持ち上げると、翠は涙目で右手をさすり始めた。

紫「ご主人様、そろそろ・・・」

—「はい。鈴々、星、翠、意識を切り替えてくれ。そろそろ始まるぞ」

銅鑼が鳴り響く。劉備軍と嚴顔軍の戦いがついに始まった。四人と共に一直線に敵に向かって突撃する。

「でええええええええええやあああああああああ！！！！」

ドギヤツ！

兵「うわあああああああ！！！」

「振りごとに数人が大きくふき飛ば。だが、次の瞬間には倍の数の敵兵が殺到して来る。」

兵A「落ちつけ！ あの大きさだ！ 接近さえすれば振れまい！」

兵B「なるほど！ よし、俺に任せろ！」

「考えたな……だが！」

ザシユ！

兵B「ぐおっ！？」

「「そう簡単に近づかせると思っか？」」

兵A「くっ……！！！」

兵C「なら同時に仕掛ければ!！」

兵D・E「おう!！」

三人の兵が同時に踏み込んで来る。だが、それも予測済みだ。俺は大剣を地面に突き立てながら叫んだ。

—「紫昌國烈斬!！」

ブワツ……!

兵C・D・E「……んなっ!?!」「」

大剣を中心に地面に広がる衝撃波が三人に直撃する。爆碎跳天昇と似ているが、威力はこちらの方が上だ。ただし、地面を伝わるという特性上、跳ばれれば簡単に避けられてしまうので、使いやすさは爆碎跳天昇の方が上だ。

—「(……っ、くだらない事を考えているヒマはない)」

鈴「とりゃあああああああ——っ!——!！」

星「はいはいはい——っ!——!！」



翠「らっしゃおらあああああーっ！っ！」

紫「そこっ……！！！」

至る所から叫び声が聞こえ、その度に敵の兵が宙を舞っている。それに負けじと敵を倒し続けていると、いつの間にか俺の周囲には敵が一人もいなくなった。

蒲「もー！ やっぱり無茶するんだからお姉様は！！」

白「翠は任せたぞ蒲公英！ 私は鈴々を援護する！！」

やや敵へ突っ込み気味の鈴々と翠の部隊へ、それぞれ白蓮と蒲公英の隊が合流する。さらに、俺の元に雛里の隊がやって来た。

雛「ご無事ですかご主人様！」

一「俺は大丈夫。キミの方も無事でよかった」

雛「兵のみなさんが守ってくれましたから。それにしても……結局力押しになっちゃいましたね」

一「相手もそれを望んでいたみたいだな。それで、今の状況は？」

雛「今の所はこちらが押しています。このままいけばこちらの勝利で間違いないでしょう」

「このままいけば・・・な。まだあの二人が残っている」

「はい。ですが、未だ姿を見せていません。いったいどこに・・・」

「いや・・・どうやら向こうから来てくれたみたいだ」

「え？」

「その娘。戦場は子どもの来る所ではないぞ」

一人の女性が悠然とこちらに向かって歩いて来る。胸元が大きく開いた衣装を身に纏い、左肩に『酔』と書かれた巨大な肩当てをつけ、右の腰には壘を下げている。

「子どもじゃありません。この娘は俺達の仲間で軍師です」

「それはすまんかったの。それで、そういうお主は何者じゃ？」

「俺の名前は秋月 一成。天の御遣いと呼ばれている者です」

「なんと、お主があのお遣いじゃと？ どうやら、劉備に力を貸しているというのは本当だったようじゃな」

「さあ、今度はあなたが名乗る番です」

「儂の名は嚴顔。この先にある巴群の城主であり、大将じゃ」

兵達「ッ……!?!」

途端に色めき立つ兵達。いきなり敵軍の対象が目の前に現れれば無理もないがな。

—「なぜ、大将であるあなたがこんな所に？」

敵「僕は酒と喧嘩が大好きでの。後ろでジツと待っておるのは性に合わん。猛者を探して戦場を駆けておれば、こちらの方から面白そうな気配を感じ取ってな。急いでやって来てみれば、目の前にはお主がいた。まさか、天の御遣いと戦えるとは思っておらんかったがの」

敵顔さんの目が変わった。得物を狙うかのような鋭い瞳。それは、完全に俺に向けられていた。

—「一騎打ちですか」

敵「よもや断るつもりではあるまいな？」

—「いえ、お受けします。雛里、危ないから下がっててくれ」

雛「ですが……」

—「大丈夫。雛里を残して死んだりしないよ。必ず勝つから見えてい

てくれ」

雛「は、はい」

不安げな表情を浮かべる雛里にそう言っつて、俺は敵顔さんと対峙した。

敵「くくく、戦いの前に見せつけてくれるではないか」

—「？ どういう意味ですか？」

敵「お主とそっちの娘は恋仲ではないのか？」

—「何処をどう見たらそんな結論になるんですか・・・」

敵「なんじゃ、儂はてつきり・・・まあよい、そろそろ始めるとしようか」

敵顔さんが武器を構える。回転弾倉式の弩弓（どう見ても杭打ち機だが）に剣が取り付けられている。明らかにこの時代の技術を大きく上回っている武器だ。

—「（どうやって作ったんだ・・・？）」

敵「我が豪天砲の威力、その身で味わうがよい！！」

ドンッ！

—「くっ……！」

放たれた矢を大剣で受け止めた瞬間、尋常でない衝撃が俺を襲った。防いだにも関わらず、俺の体は大きく弾き飛ばされた。

敵「ほお、壊れるどころか傷一つつかぬとは、ずいぶん頑丈な剣の様じゃな」

—「（なんて威力だ……まともに喰らえばバラバラになるな）」

敵「さあ、休んでおるヒマはないぞ御遣い！ 天を裂き、大地を割ると噂されているお主の力、この儂に見せてみる！！」

—「（また根も葉もない噂を……一体何がどうしてそうなった）」

敵「そこじゃ！」

ドンッ！

—「くっ、それなら……！」

あえて突っ込み接近戦を挑む。だが、弩弓にばかり気を取られ、剣の事をすっかり忘れていた。

敵「甘いわ！」

ビュン！

—「しまった・・・！」

敵「もらった！！！」

ドンッ！

—「まだだあ！！！」

ガシッ！

敵「なっ！？ 掴んだじゃと！？」

振り上げられた豪天砲を紙一重で避け、続けざまに撃たれた矢を左手で掴み取る。敵顔さんの顔が驚愕に染まり、俺は右手で持った剣を振り下ろした。

—「だあああああああ！！！！」

敵「チイツ！！」

バゴン！

受け止めるのは分が悪いと判断したのか、敵顔さんが後ろに飛び退く。俺の一撃は空を切り、そのまま地面を大きく陥没させた。

敵「なんという馬鹿力じゃ。まさに噂通りじゃな」

—「そちらこそ、さすが戦好きというだけありますね。今は危なかったです」

敵「そうか？ 儂が見た所、お主はまだ力を隠しておるように見えるがの」

—「そのセリフ、そのままお返しします」

敵「言うではないか。なら、本気でいかせてもらおうぞ！！」

ギン！ ガン！ ドンツ！ ガツン！ ブオン！ ドガツ！ ギャ  
リン！ バンツ！ ブン！ ドゴン！ ガギヤ！ バガツ！ ズド  
ン！ ギヤガ！ バゴツ！

振り下ろし、避けられ、撃たれ、叩き落とす。俺と敵顔さんの攻防は三十分以上続き、いつの間にか周囲にいた兵達も戦いを止めて俺達の一騎打ちをジツと見つめていた。

敵「ふははは！ 楽しいのお御遣い！ こんなに血が沸き立つのは本当に久しぶりじゃ！！」

一「（なんて人だ・・・ここにきて動きが鈍るところか、一撃一撃の速さが増している）」

敵「じゃが、いつまでもお主と戦っておるわけにもいかん。どうじや、そろそろ決着をつけんか？」

一「・・・わかりました」

次で全てが決まる。俺は両手でしっかりと大剣を構え、意識を極限まで尖らせた。

一「（回避も防御も必要無い。この一撃に全てを込める！）」

対する敵顔さんも腰元に豪天砲を構え、今まで以上の殺気を発しながら俺を見据える。



兵「・・・・ゴクッ」

一人の兵が大きく喉を鳴らす。それを合図に、俺と敵顔さんは同時に動いた。

一・敵「うおおおおおおおおお！！！！！！」

ドンツ！ ガッ・・・

一・敵「・・・・・・」

兵「ど、どつちが勝ったんだ・・・」

一「・・・・・・ぐっ」

鋭い痛みが脇腹に走る。恐るべき速度で放たれた豪天砲の一撃が、俺の脇腹を抉っていた。

雛「ご主人様!?!」

兵A「やった！ 敵顔様の勝ちだ!!」

兵B「やりましたね敵顔様!!」

敵「……………」

兵C「敵顔様？」

敵「……………見事」

ドサッ

敵顔さんが膝をつく。あの最後の一瞬、敵顔さんの一撃が俺の脇腹を抉ったように、俺の一撃も敵顔さんの腹部に直撃していたのだ。

兵A「げ、敵顔様！　しっかりしてください！！」

兵に支えられ、敵顔さんがふらつきながら立ち上がる。斬る直前、刃を潰すよう想像したので、傷を負ってはいないはずだ。それでもかなりの衝撃が襲ったはずだ。

敵「見事じゃ御遣い。儂の完敗じゃ」

一「敵顔さん、お話を聞いてもらいたいので兵を下げてもらえますか？」

敵「勝者に従うのが敗者の理……どうやら焔耶の方も捕まった様じゃしな。この戦、我等の負けじゃ」

いつに間にか上がっていた『魏』の旗が消えていた。きっと他の誰かがうまくやったのだろう。

こうして、劉備軍対敵顔軍の戦いは終わりを告げた。俺は応急処置を済ませ、雛里と共に敵顔さんを連れて桃香達の元へ戻った。

鈴「あ、お兄ちゃんが帰って来たのだ！」

本陣にはすでに俺と雛里以外の全員が集まっていた。

桃「ご主人様、その人が・・・」

—「ああ、この人が敵顔さんだ」

敵「お初にお目にかかる劉備殿。俺が巴群の敵顔じゃ」

桃「初めまして・・・って、あれ？　なんで私が劉備ってわかったんですか？」

敵「連れて来られる途中に御遣いからお主の事を聞いての、一目でわかりましたぞ」

桃「あ、なるほど」

紫「久しぶりね桔梗」

敵「おお紫苑！ 戦場に『黄』の旗が出とったからもしやと思ったが、劉備殿の臣下になっておったとはの」

紫「ええ。この命、桃香様の理想を共にする為に使う事にしたわ」

敵「そうか・・・劉備殿、お主の追い求める理想とはなんじゃ？」

桃「誰もが笑って暮らせる幸せな世を築く事です！」

敵「顔さんの問いに、桃香は迷いなく答えた。

敵「はっはっは！ その様な青臭い事を躊躇いなく言っただけで、は！ 気に入りましたぞ！！」

桃「え・・・？ え・・・？」

敵「劉備殿！ 願わくはこの儂もお主の配下に加えて頂きたい！」

桃「は、はい！ こちらこそよろしくお願いします！」

紫「ふふ、あなたならそう言うと思っていたわ」

敵「儂の真名は桔梗。これよりそうお呼びください」

桃「で、では、私の事も桃香って呼んでください」

敵「承知しました桃香様」

—「そういえば、魏延の方はどうなったんだ？」

紫「すでに説得に応じて仲間になってくれましたわ」

桃「焰耶ちゃん！ ちょっと来て~~~~！」

？「お呼びですか桃香様ああああ！！！」

—「……えつと」

桃「焰耶ちゃん。この人がご主人様だよ」

？「魏延だ。よろしく頼む」

—「あ、ああ、俺は秋月 一成。よろしく」

桃「焰耶ちゃんはね、蒲公英ちゃんが連れて来てくれたの」

蒲「凄かったんだよ。もう面白いくらい罠にかかりまくってくれて。やっぱり体育会系の脳筋は単純でいいわ」

魏「な・ん・だ・と~~~~~！！！」

蒲「ふ〜んだ！ 悔しかったら捕まえてみなさいよ！」

魏「逃がすか〜っ！」

額に青筋を浮かせ、魏延は蒲公英を追い始めた。

ズボツ!

魏「はうっ!?!」

蒲「あははは　またひっかかった!?!」

翠「こら蒲公英!　本陣の中に罾をしかけるやつがあるか!?!」

蒲「大丈夫だよお姉様。落とし穴はそれ一つしか作ってないから」

翠「そういう問題じゃない!　・・・ん?　落とし穴“は”って事は、まさか他にも・・・」

蒲「~~~~」

翠「わざとらしく口笛を吹くな!」

魏「き~~~~さ~~~~ま~~~~!?!」

蒲「うわっ!?!　もう出て来た!」

再び追いかけてこを始める蒲公英と魏延。何とも楽しそうな蒲公英とは対照的に、魏延は明らかに怒っている。

桃「二人とも、早速仲良くなってるみたいでよかったあ」

—「いや、どう見ても仲よさげには見えな……痛っ」

紫「どうされましたご主人様？」

—「いえ、少し脇腹が……」

やはり応急処置では無理があつたか、痛みがぶり返して来た。

紫「大変、すぐに手当てを……」

蔵「儂が手当てする」

—「蔵顔さん？」

蔵「桔梗でいいですぞお館様」

—「お、お館様？」

桔「ご主人様とお呼びした方が？」

—「い、いえ、好きなように呼んでくれて構いませんけど」

桔「ならお館様と呼ばせてもらいますぞ。この傷は儂との一騎打ちで出来た傷。ならば、儂が手当てするのが道理じゃろう」

—「そんな、気にしないでくださいよ。それより、桔梗さんの方こそ大丈夫なんですか？」

桔「お優しいですなお館様。……ますます惚れてしまいそうじゃ」

—「え？」

桃「ど、どういう意味ですか桔梗さん!？」

桔「おかしいですか？ お館様ほどの男に惚れるのは女として当然じゃと思うがの。一騎打ちの最中、儂に向けられたあの鋭い瞳を思い出だけで体が熱くなりますぞ」

桃「体って……././」

桔「というわけで、お館様の手当ては儂に任せてもらおう」

紫「ずるいわよ桔梗。私だつてご主人様に手当てして差し上げたいのに」

桔「お主はただお館様の体を触りたいだけじゃろ」

紫「あら、それはあなたもじゃなくて？」

桃「だ、駄目です駄目です！ ご主人様の手当ては私がやります！」

—「あの……早くしてくれると助かるんだが」

痛みが激しくなつて来る中、俺は三人の結論が出るまでひたすら我



慢した・・・

それからはあつという間だった。歴戦の将である紫苑さん達が下つたという事で益州各地から次々に軍が集まって来て、劉備軍はその数を大きく増やしていった。途中にあった城も抵抗する事無く降伏し、最早俺達を阻むものは何も無かった。

激戦が予想された成都での戦いも、あつけなく決着がつき、劉璋はどこかへと逃げ伸びて行った。

・ こうして、ようやく俺達は益州を平定する事に成功したのだった・・・

第七十八話 一こちゃこちゃ考えるより殴った方が早い時もある（後書き）

作「長いようで短かった脱出編もこれで終わりです」

一「これからどうするんだ？」

作「しばらくはまた拠点イベントでキャツキャウフフするぞ。主に新しく加入した仲間を中心にしてな」

一「やっぱりそうなるか」

作「これでまた話のネタが広がるぜ。何書こうかな・・・」

一「グダグダじゃなければ何でもいい」

作「はっ？ 俺はグダグダな話しか書けんぞ？」

第七十九話 酒は百薬の長(前書き)

無いネタを絞り出して書きました。

## 第七十九話 酒は百薬の長

目の前に老人が立っている。それは、俺をこの世界に送った張本人である駄神だった。

駄神「久しぶりじゃな旅人よ」

—「そうですね。けど、いきなりどうしたんですか？」

駄神「なに、少しお主と話がしたくての。こうして夢の中にお邪魔したというわけじゃ」

—「話ですか？」

駄神「うむ。無事に益州を平定したようじゃな。それに、ここまで主要人物を誰一人死なせておらぬ。よくやってくれたと言っておうかの」

—「みんなが頑張ったからです。俺は少し力を貸しただけですよ」

駄神「ようやく折り返し地点といった所じゃな。ここから先、どうなるかわからんが、お主ならやり遂げてくれると信じておるぞ」

—「はい」

駄神「それと・・・お主に渡した腕輪なんじゃが・・・」

—「これですか？」

駄神「・・・やはり、ヒビが入っておるな」

—「え？」

よく見ると、腕輪には小さなヒビが入っていた。

駄神「酷使させ過ぎたようじゃな。無理もあるまい。お主、その世界でも全然自重しておらぬからな。というか、オーラフォトンブラスターとやらを撃つのは止めれ。あれが一番マナの消費量が激しい。このまま使い続けければ、近い内に腕輪が碎けるぞ。それがどういう結果を招くか、わかっておるな？」

—「・・・はい」

『絆』の使用で消費したマナを、この腕輪が補充してくれるから、俺は戦う事が出来る。もし、この腕輪を失ったら、マナを得る手段がなくなる。そうなれば・・・マナで構成された俺の体はあっという間に消滅してしまう。

駄神「じゃが、そこまで深刻に考える事は無いぞ。消費を抑えれば、その内ヒビも塞がるじゃろうて。とにかく、他の武器はまだしも、ブラスターの使用は控えるのじゃぞ」

—「わかりました。気をつけます」

馱神「……本当にわかっておるのか？」

—「何で疑うんですか」

馱神「お主の場合、仲間が危機に陥ったら何仕出かすかわからんから」

—「無理はしませんよ。……無茶はするかもしれませんが」

馱神「やりの……。さて、そろそろ別れの時じゃ。現実のお主が目覚めようとしておる」

妙に体がフワフワする。これが目覚める兆候なのだろうか。

馱神「これ以降、結末を迎えるまで会う事もあるまい。ではな」

馱神の姿がゆっくりと消えていく。それと共に、俺の意識も沈んでいった。

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

—「……ん」

寝台から立ちあがり、グツと背を伸ばす。窓からは陽の光が差し込んでいる。

—「（まさか、馱神と話をするとはいな……。まあいい。それより、今日も忙しくなるぞ）」

成都を制圧した俺達は、その結果をすぐに大陸全体に広がるように流した。すると、すぐさま各地から人が集まり始めた。以前から世話になっていた商人、さらには、残して来た民達までもがこぞってこぞって成都へとやって来た。まだ二週間ほどしか経過していないが、それでも、益州は目を見張る速度で復興・発展していった。

そんなある日の今日、俺と桔梗さんは、成都近隣のとある村へ向かう事になった。その長老は中々の影響力を持っているらしく、繋がりをもつて強める為だと朱里は言っていた。

先日、会議中にその村の名前が出た時、桔梗さんは、いの一に自分が行くと立候補した。劉璋の支配していた時から、その村には度々お邪魔していたらしい。

桔「あの村で作られる酒はまた格別のお。挨拶ついでに飲んで来るか」

・・・という事らしい。そのお目付け役みたいなもので、俺もついて行く事となった。

桃「二人だけで大丈夫？」

桔「なあに、たとえ襲われようとも、俺とお館様の二人なら、並大抵の者には負けはしませぬ」

—「それじゃ、行って来ます」

桔「お館様、馬は？」

—「俺は走って行きます」

桔「なんと・・・」

馬を飛ばす桔梗さんについて走り続ける事約一刻。目的の村へ辿り着いた。

—「着きましたね」

桔「・・・」



―「どうしました桔梗さん？」

桔「おかしい・・・以前に比べてずいぶんと廃れてしまっておる。何かあったのか？」

怪訝な表情を浮かべながら、桔梗さんは村の奥の一軒家に向かって進む。

桔「長老殿」

中に入ると、一人の老人が座っていた。その人は、桔梗さんが声をかけると、嬉しそうに微笑んだ。

長老「おお！ 爺顔様！ お久しぶりでございます！」

桔「長老殿も元気そうで安心したぞ」

長老「おや？ そちらの御人は？」

―「初めまして。秋月 一成です」

桔「儂が新しくお仕えする事になったお方じゃ」

長老「それはそれは。私がこの村を纏めている者でございます」

―「今回はご挨拶に伺いました。益州は劉璋に代わって劉備が治め

る事になりました。これからもよろしくお願いします」

長老「わざわざご足労ありがとうございます。こちらこそ、劉備様のような徳の高いお方の下で暮らせる事を光栄に思います」

簡単だが、これで目的は達成した。この人達の為にも、しっかり纏めていかないとな。

桔「さて長老、久しぶりにこの村の酒が飲みたいのじゃが。何処で売っておる？」

長老「そ、それは……」

長老の顔に影が差す。明らかに何かを隠している様子だった。

—「何かあつたんですか？」

長老「実は……少し前から山賊がこの村を襲うようになりまして。その者等の所為で、食料も酒も根こそぎ奪われてしまったのです」

桔「何じゃとぉ!？」

—「成都に救援を求めなかつたんですか？」

長老「もちろんお願いしました。けれど、劉璋様はまともに取り合ってくれず仕舞いで」

桔「おのれ劉璋！ どこまでも役に立たぬヤツじゃ！」

長老「山賊は一週間に一度、村にやって来ます。そして、それが今日なのです」

桔「ならば長老、その山賊共、儂とお館様で討伐してやるう」

長老「そ、それは真ですか!？」

桔「よろしいですかな、お館様？」

—「もちろんです。そんな輩を放置しておくわけにはいきませんか」  
「ら」

長老「ありがとうございます!」

桔「……その代わりと言っては何じゃが、酒を作り直したら、儂の所へ届けてくれると嬉しいのじゃが……」

長老「それはもう！ 最高の物をお届けさせて頂きます!」

桔「楽しみにしておくぞ。ではお館様、早速山賊共を迎え撃つ準備を……」

?「さ、山賊が来たぞ————!」

—「どどどやら、そんな時間はなさそうですね」

長老の家を出ると、村の入口に三十人ほどの男達が立っていた。全員が同じ様な格好をしている。どうやら、この男達が山賊のようだ。

山賊A「約束の日だ！ 食い物と酒を寄越せ！」

山賊B「大人しく言う事を聞かないと、痛い目に遭うぜ！」

山賊C「は、早くするんだな」

—「あの三人……」

間違いない、あの三人組だ。だいぶ前に、纏めて放り投げてやったが……まさか、未だにこんな事を続けているとは。

桔「ふん！ 貴様等に渡す物は何一つ無いわ！」

山賊A「誰だテメエ？」

桔「我が名は厳顔！ 益州太守、劉備様の家臣！」

山賊B「厳顔っていやあ、有名な武将ですぜアニキ！」

山賊A「へ、だからどうした！ いくら相手が武将でも、たった一人で三十人を相手に出来るわけ……」

—「……誰が一人だって？」

山賊A・B・C「「ッ!?」「」

俺の顔を見た三人の表情が一変する。

山賊A「ひいつ!? 御遣い!?!」

「まさか、こんな所で貴様等の顔を見る事になるとはな」

桔「知っているのですかお館様?」

「ええ。とりあえず・・・敵です」

手甲を発現させ、構える。それを見た三人が慌てて逃げ出す素振りを見せた。

山賊A「に、逃げろ! 俺達が束になっても勝てやしねえ!」

「桔」「逃がすかあああああああ!?!」「」

ブワッ! ドゴンッ!

雲一つない村の空に、気柱の発生音と、豪天砲の発射音が木霊した。

・・・

桔「ふん、何とも手応えのない連中じゃ」

戦闘は数分で終了し、縛った山賊を連れて、成都へ戻る事にした。

桔「では長老殿。儂等はこれで・・・」

長老「本当にありがとうございました！ 道中お気をつけて！」

—「失礼します」

こうして、予想外の事態に巻き込まれはしたが、俺達は無事に目的を果たし、村を後にした。成都に戻った後、すぐに山賊を兵に引き渡し、俺は部屋に戻った。

それから数日後の夜。寝台に横になろうとした俺の元へ、桔梗さんがやって来た。

桔「お館様、あの村から酒が届きましたぞ。今から儂と一杯やりませぬか？」

—「そうですね・・・はい、ご馳走になります」

桔「では早速……」

持っていた酒瓶を机に置き、桔梗さんは受皿を二枚取り出した。それに酒を注ぎ、一枚を右手に、もう一枚を俺に差し出す。

桔「んぐ……ぶはあ！ やはり、あの村の酒は最高じゃな！」

—「……美味しい」

桔「おお、お館様も気に入りましたか？」

—「桔梗さんがあれだけ言ってたのもわかりますね。こんな酒、今まで飲んだ事ありません」

桔「はっはっは！ そこまでおっしゃられると、儂としても鼻が高いですな。さあお館様、もう一杯……」

—「頂きます」

その日、俺と桔梗さんの酒盛りは深夜まで続いた。翌日、二日酔いが俺を襲ったが、桔梗さんは何一つ変わっていなかった。

—「何という酒豪……」

桔「あの程度、飲んだ内に入りませんぞ」

第七十九話 酒は百薬の長（後書き）

作「今回の拠点イベントの始まりは桔梗からだ」

一「酒と喧嘩好きな彼女らしい内容だったな」

作「フーかこれしか思いつかなかった」

一「え……」

作「ヤヴァイよヤヴァイよ。ネタが無いよ」

一「某リアクション芸人みたいな言い方するな」

作「それくらい困ってたんだよ。次は誰にしようか……」

一「俺に聞くな」



第八十話 祭りは当日よりも準備中の方が楽しい時がある（前書き）

最近、拠点話が必要無いような気がしてきた。

## 第八十話 祭りは当日よりも準備中の方が楽しい時がある

一「今日も特に異常はないな」

星「そのようですな」

星と共に警邏を行う。民達は今日も笑顔だ。

民A「おう！ そっちの準備はどうだ？」

民B「問題ない。当日までには余裕で間に合いそうだ」

民C「だったらこっちを手伝ってくれ！ ちつとばかり作業が遅れてんだ！」

民D「なら俺が手伝うよ！」

一「しかし・・・何だか妙に活気があるような・・・」

星「おや、ご存知ないのですか主？ 四日後、街で祭りが開かれるのですぞ」

一「祭り？」

星「この地方では、この時期に街をあげての大きな祭りを開くそうです。その日だけは全てを忘れて皆で大騒ぎするそうです」

—「そうなのか？ 楽しそうだな」

星「すでに数人が四日後に休みを取っております。もちろん・・・私も」

—「はは、やっぱり」

星「主はどうされるおつもりですか？」

—「俺か？ そうだな・・・時間があつたら出てみようかな」

その後、警邏を終えた俺達は、民達の威勢のいい声を聞きながら、城へと戻った。夜遅くになっても、街からは何かの作業音がずっと鳴り響いていた・・・

次の日、仕事の事で朱里の部屋に向かおうとした俺の目に、紫苑さんと璃々ちゃんの姿が入った。

璃「ねえお母さん、璃々もお祭りに行きたいな」

紫「ごめんね璃々、お母さんその日はお仕事なの」

璃「お仕事？ ずっとなの？」

紫「ええ。だから無理なのよ」

璃「・・・そっか」

紫「本当にごめんね璃々」

璃「ううん。お仕事なら仕方ないよ。お祭りは我慢する」

紫「璃々……」

—「じゃあ、俺が璃々ちゃんと一緒に祭りに行きますよ」

どうにも我慢ならなかったので、俺は二人の会話に割り込んだ。

紫「ご主人様？ 聞いていらしたのですか？」

—「すみません、盗み聞きするつもりはなかったんですが……  
それで、どうでしょうか？」

紫「私としては大変ありがたいですが……ご主人様にご迷惑をお  
かけするわけには。それに、ご主人様もお仕事があるのでは？」

—「祭りまでまだ時間があります。その間に全て終わらせてしまえ  
ば問題ありません」

璃「ご主人様、お祭りに連れて行ってくれるの？」

—「璃々ちゃんさえよかつたら、俺が連れて行ってあげるよ」

璃「わーい！ 璃々、ご主人様とお祭りに行きたーい！」

「と、いう事ですが？」

抱きついて来た璃々ちゃんの頭を撫でながら、もう一度紫苑さんに尋ねる。

紫「…………ご主人様、お願いしてもよろしいでしょうか？」

「ええ、任せてください」

璃「約束だよ、ご主人様？」

「うん、約束だ」

二人と別れた俺は朱里の部屋に向かい、事情を話して三日分の仕事を全て回してもらった。すぐに自室へ戻って机に向かった。

「さて…………璃々ちゃんの為にも、一気に終わらせるか…………」

気合いを入れ、俺は竹菅に手を伸ばした…………

……………

・  
・  
・  
・

・  
・  
・

三日後・・・

チュンチュン！

一「・・・朝か」

鳥の鳴き声で目が覚めた。いつの間にか眠ってしまったらしい。体を動かそうとすると、節々が痛んだ。ずっと同じ格好で作業していたから無理もないが。

一「けど・・・おかげで間に合ったぞ」

どうにか全ての仕事を片付ける事が出来た。これでみんなに迷惑をかけずに祭りに行く事が出来る。

一「とりあえず、顔でも洗ってさっぱりするか」

身支度を整え、朝食を済ませた俺は、昼前になって紫苑さんの部屋に向かった。

コンコン

—「紫苑さん、俺です」

紫「ご主人様？ 今開けますわ」

中に入ると、すでに璃々ちゃんも準備を済ませていた。

紫「おはようございますご主人様。今日は璃々をよろしく願います」

—「はい」

紫「いい、璃々？ わがママを言ってご主人様を困らせたら駄目よ？」

璃「はい！」

—「それじゃ、行くうか璃々ちゃん」

璃「うん！ お母さん行ってきます！」

紫「楽しんでらっしゃいね」

紫苑さんに見送られ、俺と璃々ちゃんは街へと出掛けた。

璃「うわ~~~~！ 凄~~~~い！！」

街には、今まで見た事ないほどの人々が溢れかえっていた。それを見た璃々ちゃんは驚きの声をあげている。

— 「出店もあるのか」

早速近くの出店を覗いてみると、そこは遊戯場だった。男の子が小さな玉を的に向かって投げている。

— 「的当てか……」

店主「あ、御遣い様！ ぜひとも遊んで行ってください！」

— 「そうですね……やってみるか璃々ちゃん？」

璃「うん！」

並ぶ事数分、順番が回って来た璃々ちゃんに店主が玉を渡した。



店主「当てた場所に應じて点が入るからね。その合計によっては景品もあるから頑張りな」

璃「よし！ えいっ！」

ポコッ

璃々ちゃんの投げた玉は、放物線を描きながら、三点の部分に当たった。

店主「あと二回投げれるよ」

璃「とりゃあ！」

ポコッ

店主「ああ、惜しい！」

二回目は、中心をわずかに外れて五点の部分に当たった。

店主「次で最後だ。頑張りな」

璃「今度こそ……やあ！」

ポコッ

店主「おお！ 当たったぞお嬢ちゃん！」

璃々ちゃん渾身の最後の一投は、見事に中心に当たった。店主が興奮したように当たりを宣言した。

璃「やった〜！」

「」おめでとう璃々ちゃん

店主「中心に当たったから、お嬢ちゃんには得点関係無しに景品をあげるよ。さあ、この中から選んでくれ」

子供向けの景品が並べられ、璃々ちゃんはその中から小さな白い髪飾りを指差した。

璃「これにする！」

店主「はいよ。どうぞお嬢ちゃん」

髪飾りを手渡され、璃々ちゃんは早速それを身につけた。

璃「ご主人様、どうかな？」

—「ああ、よく似合ってるよ」

璃「ホント？ 嬉しいな！」

店主「うん、そうして見ると、まるで父娘のようですね御遣い様」

—「か、からかわないでくださいよ」

店主「あはは、これはすみません」

璃「・・・お父さん」

—「ん？ どうかしたか璃々ちゃん？」

璃「うん。何でもないよご主人様」

—「そうか？ それじゃあそろそろ行こうか」

遊戯場を後にし、別の店を目指して歩いていると、聞き慣れた声があちこちから聞こえて来た。

鈴「うん！ 美味しい物がたくさんあって、鈴々は幸せなのだ！」

恋「恋も幸せ……」

鈴「あつちにも美味しそうな物があるのだ！ 恋、ついて来るのだ！」

恋「ん……」

ね「お、お待ちくだされ恋殿……！」

両手に食べ物を持った鈴々と恋を、ねねが必死になって追いかけている。

星「むっ……！ なんと美味な……。このような酒は飲んだ事が無いぞ」

店主「この日の為に特別に取り寄せた物です」

星「気に入ったぞ。店主殿、この酒を一瓶……いや、三瓶くれ」

店主「へい、ありがとうございます……！」

かと思えば、あつちでは星が嬉しそうに酒を購入しているのが見える。

麗「お……っほっほっほ……！ おみこしわっしょい！ おみこしわっしょい……！」

斗「ひぐん！ 何でこんな事に〜〜〜！」

猪「ぼやくなよ斗詩。結構面白いじゃないか」

そして、たった今日の前を凄い一団が通り過ぎて行った。

璃「面白そう！ 璃々も乗ってみたいな！」

—「いや、あれだけは止めような璃々ちゃん」

璃「？」

それから、出店で昼食を済ませ、色々な店を回っていたが、不意に璃々ちゃんが立ち止まった。

—「璃々ちゃん？」

璃「……………」

璃々ちゃんの視線の先には、男の子を肩車した男性の姿があった。

男の子「やっぱりお父さんの肩車は凄いや！ ずつと向こうまで見えるもん！」

男性「はは、そうか？」

男の子「ねえお父さん！ あっちに面白そうなお店があるよ！ 行ってみようよ！」

男性「わかったわかった。じゃあ行ってみるか」

去って行く男性と男の子の姿を、璃々ちゃんはずっと目で追っていた。

—「璃々ちゃん、あの人達がどうかしたのか？」

璃「ううん、違うの。あのね、璃々、肩車してもらった事ないから、どんなのかわかって・・・」

—「なんだ、それなら・・・」

グイッ！

璃「ふわっ!？」

—「ほら、これでどうだい？」

俺は璃々ちゃんを肩車した。

璃「わわわ！ 高い！ 高いよご主人様！！」

—「向こうまで見えるか？」

璃「うん！ とつてもよく見えるよ！ あ！ 鈴々お姉ちゃんがい  
るー！！」

—「さあ璃々ちゃん、どっちに行きたい？」

璃「あっち！ あっちに行こうよご主人様！」

—「よし、じゃあしっかり掴まっててくれ」

結局、璃々ちゃんが満足するまで、俺はずっと彼女を肩車し続けた。  
そして陽が傾いて来た頃、俺達は城に戻る事にした。

—「そろそろ帰ろうか」

璃「う．．ん．．．」

—「疲れたのか？ じゃあこのまま．．．は危ないから、おんぶし  
てあげるよ」

一度下ろし、再び背負い直して、俺はゆっくり歩いて城へ戻った。

紫「お帰りなさいませご主人様。今日は本当にありがとうございました」

城に戻ると、紫苑さんが出迎えてくれた。おそらく、仕事を終えた後、ずっと待っていてくれたのだろう。

—「俺も楽しかったですから。璃々ちゃんもとても楽しんでいて・  
・この通り疲れて眠ってしまいました」

紫「最後までご迷惑をおかけして申し訳ありません」

璃々ちゃんを紫苑さんに渡そうとしたその時、璃々ちゃんが小さく呟いた。

璃「むにゃ・・・お父さん・・・」

紫「璃々？」

—「実は・・・」

肩車の件を話すと、紫苑さんは納得の表情を見せた。

紫「そうですね・・・璃々がそんな事を・・・」



―「璃々ちゃんに伝えておいてください。俺でよかつたらいつでも肩車してあげるからと。父親代わりになるなんておこがましい事は言いませんが、せめてこれくらいは……」

紫「きつと、璃々も喜びますわ。ご主人様、重ね重ね、本当にありがとうございます」

―「いえ、これくらいでお役に立てるなら」

紫「それと、ご主人様には父親代わりなどではなく……本当の父親になつて頂けたら私も嬉しいのですが」

―「え？」

紫「ふふ、何でもありませんわ。これ以上は他の娘に怒られてしまいますから」

―「は、はあ……？」

紫「ではご主人様、璃々を寝かせるので私は部屋に戻ります。しつこいようですが、今日は本当にありがとうございました」

そう言つて、一礼した紫苑さんは去つて行つた。対する俺も、紫苑さんの最後の言葉に首を傾げながら自室へ戻る事にした……

第八十話 祭りは当日よりも準備中の方が楽しい時がある（後書き）

作「デートしながら他の女性にフラグを立てるとはな」

一「デート？ 誰と誰が？」

作「お前と璃々」

一「何言ってるんだ。璃々ちゃんとは祭りに一緒に行っただけだぞ」

作「それがデートだって言ってるんだよ！」

一「？」

第八十一話 温厚な人ほど怒らせると怖い(前書き)

やっと帰って来ました。

## 第八十一話 温厚な人ほど怒らせると怖い

政務の途中、休憩を入れた俺は中庭に出ていた。

「やつぱり、座りっぱなしだと体が固くなるな」

軽く柔軟を行い、陽の光を浴びながら固くなった体を解す。五分ほど続け、最後に肩を回す。

「よし、そろそろ戻るか」

蒲「ご主人様！」

部屋に戻ろうとしたその時、向こうの方から蒲公英が走って来た。

「やあ蒲公英・・・」

蒲「ご主人様！ 今から焰耶が来るけど、蒲公英の事黙っててね！」

そう言うやいなや、蒲公英は後ろの草むらに隠れてしまった。

焰「待てええええええ！ 逃がさんぞ蒲公英ーーーーーッ！！！」

すると、蒲公英の言った通り、焰耶が怒りの表情を見せながら走って来た。

焰「あ、お館！ 蒲公英を見なかったか！？」

一「あ、ああ、蒲公英なら……向こうの方へ走って行ったぞ」

焰「向こうだな？ よし！」

一「何かあったのか？」

焰「蒲公英のヤツ、私を罫に嵌めたのだ！ しかも、「やつぱり猪突猛進の体育会系は面白いくらい引っ掛かってくれるね」なんてほざきおつたのだ！」

そういえば、蒲公英は罫を仕掛けるのが得意だったな。運悪く焰耶はそれに引っ掛かってしまったという事か。

一「（……いや、彼女の性格からして、狙ったのかもな）」

焰「っと、話している場合ではない！ 何としても捕まえて、キツチリお返しさせてもらわなければ！！」

一「そ、そうか。頑張ってな」

焰耶は俺の差した方へ向かって走り去って行った。辺りが静かになると、蒲公英が草むらから出て来た。

蒲「ありがとうご主人様。ふふ、焰耶の顔、面白かったなあ」

—「あんなに怒らせるなんて・・・どんな罫を仕掛けたんだ？」

蒲「普通だよ？ 落とし穴に、動物捕獲用の網でしょ、それと・・・

」

—「いや、もう充分だ」

なるほど、焰耶が怒るわけだ。

蒲「ご主人様は何で中庭に？」

—「ちょっと休憩しようと思ってな。けど、充分休んだし、そろそろ戻るとするかな」

部屋に戻ろうと一歩を踏み出したその瞬間・・・

蒲「あ、ご主人様、そこは・・・」

ズボツ！

—「んなっ!？」

地面が沈み、俺の右足がそこに呑み込まれた。

蒲「あちゃ〜、遅かった」

—「蒲公英。もしかして・・・」

蒲「うん、それも蒲公英が作ったんだよ」

—「やっぱり」

足を引き抜いて穴を覗いてみると、結構な深さだった。こんな物を一人で作るとは。逆に感心してしまった。

蒲「ご、ゴメンなさいご主人様」

—「謝らなくていいさ。少し驚いたけど、こういうイタズラって結構楽しいからな」

蒲「ホント？」

—「ああ。ただ、こういう人通りの多い所に仕掛けるんじゃないって、

他の場所を選んだらいいんじゃないかな。愛紗達のような武将ならともかく、朱里や月がかかったら大変な事になるぞ」

蒲「そうだね。それじゃあ今度は焰耶の部屋にでも仕掛けてみるね」

一「俺は食糧庫の事を言ったんだが・・・」

蒲「それじゃあご主人様、蒲公英そろそろ行くね。もしかしたら焰耶が戻って来るかもしれないから」

一「じゃあ、今度こそ俺も戻るとするか」

蒲公英と別れた俺は、罨に掛かる事なく部屋へと戻った・・・

S I D E O U T

蒲公英 S I D E

蒲「ふふ、今日もたくさん買ったな」

罨の材料が少なくなったから、街に買いに出たけど、ついつい買い過ぎてしまった。



蒲「これでまたあの筋肉女を・・・あれ、あそこにいるのは・・・」

一「これで全部かな？」

月「はい」

ご主人様と月がお店から出て来た。二人とも、両手に大きく膨れた袋を持っている。

月「すみません一成さん。せつかくのお休みなのに、買い物に付き合って頂いて」

一「城にいてもヒマだったからな。こうして月と一緒に出かける方がよっぽど有意義だ」

月「へう・・・あ、ありがとうございます／＼」

蒲「（うわあ、月、ここからでもわかるくらい顔が真っ赤だ）」

一「用事も済んだ事だし、戻ろうか」

月「はい」

二人が城の方へ歩き出す。面白そうだからついて行ってみよつと。

月「街のみなさん、とても明るいですね」

―「これも、みんなが頑張ったおかげだな」

月「そうですね。みなさんが力を合わせて頑張ったからですよね」

―「月もな」

月「一成さんですよ」

―「はは」

月「ふふ」

楽しそうに話す二人。何だかあの場だけ周りと雰囲気違って見える。

男の子「それっ！」

父親「人様に掛けないようにな」

男の子「わかってるよ」

だからだろうか、二人は前方で水を撒いている男の子に気付いていない。

バシヤ！

蒲「あつ！」

やってしまった。男の子が撒いた水が、ご主人様に掛ってしまった。途端に辺りの空気が凍りつく。

男の子「あ・・・ああ・・・」

月「だ、大丈夫ですか一成さん！？」

父親「お、お前！ 何という事を！ 申し訳ございません御遣い様！ ですが、水を撒くよう言ったのは私でございます！ 罰するならどうぞこの私を！！」

地面に額を擦りつけ、必死に謝る父親。それを見たご主人様は困った様な顔をして父親を立たせた。

一「落ちついてください。これくらいで罰するわけないじゃないですか」

父親「え？」

一「ちゃんと前を見ていなかった俺が悪いんです。それに今日は暑いのですし、むしろ涼しくていいですよ」

全然気にしていない感じでそう言うご主人様。父親が深々と頭を下げた。

父親「ありがとうございます！　ありがとうございます！　ほら、お前も頭を下げなさい！」

男の子「ゴメンなさい御遣い様・・・」

「気にしなくていいよ。キミはお父さんのお手伝いをしていただけで、水が掛かったのは俺が余所見をしていた所為なんだから」

男の子の頭を優しく撫でるご主人様。固まっていた男の子の表情があっという間に柔らかくなった。

「では、俺達はそろそろ失礼しますね」

父親「はい！　本当に申し訳ございませんでした！」

「はは、もういいですって」

笑顔で去って行くご主人様と月。そこで、ようやく張り詰めていた空気が元に戻った。

民A「ふう、どうなるかと思っただぜ」

民B「ああ。正直見てられなかったぞ」

民C「けど、やっぱり御遣い様は大したお方だよな」

民B「おう、あれが劉璋だったら二人とも斬られて終わりだったな」

民A「本当に、あの方達が来てくれてよかったぜ」

民B・C「全くだ」

民達の会話を聞きながら、ふと頭に一つの疑問が浮かんだ。

蒲「ご主人様って、何で怒らないんだろう？」

蒲公英だったら、水なんて掛けられたら絶対怒ってしまう。でも、ご主人様は怒るところか感謝するような事を言っていた。

蒲「よくよく考えてみると、蒲公英ご主人様が怒った所って見た事ないかも」

一旦興味が湧くと、それはどんどん大きくなってくる。つまり、  
『ご主人様の怒った所を見てみたい』という事に。

蒲「けど、あの様子じゃちょっとやそつとの事じゃ怒らないだろうし……」

城に戻った後も、ずっと考えていると、そこへ星姉様を通りかかった。

星「おや蒲公英。難しい顔をしてどうしたのだ？」

蒲「星姉様。……そうだ！ 星姉様なら！」

星「？」

思っていた事を話してみると、星姉様は興味深そうに頷いた。

星「ほう、そんな事が。いやはや主らしいな」

蒲「それで、ご主人様が怒ったらどんな感じになるか気になっちゃって」

星「ふむ、面白そうだな。私も力を貸そう」

蒲「ありがとう星姉様！」

星「しかし、二人だけでは心許ないな。いつその事みんなに話してみるか」

蒲「みんな？」

星「ちよつと待っている」

言われたとおりに待っていると、星姉様は桃香様達を連れて戻って来た。

桃「話つて何かな？」

星「実はですな桃香様・・・」

反対する人も多かつたけど、こうして、みんなを巻き込んで、『ご主人様を怒らせてみよう作戦』が始まった。まさか、あんな酷い目に遭うとは思ひもせずに・・・

蒲公英 SIDE OUT

IN SIDE

「」さて、今日も一日頑張るかな」

仕事に取りかかる為、椅子に座ろうとしたその時、ノックと共に朱里の声が聞こえた。

朱「ご主人様、起きていらっしやいますか？」

一「ああ、入ってくれ」

朱「失礼します」

一「おはよう朱里、何か用かな？」

朱「えっと、実は、賊が出現したとの報告がありました」

一「賊？」

朱「ここから十里ほど離れた所にある古城を占拠して、近隣の村を襲っているとの事です」

一「十里という事は・・・五キロか。近いな」

朱「はい。ですから、早い内に対処しなければならぬと思います  
て、討伐隊を結成しました。既に準備を整えています」

一「そうか。さすが朱里、手際がいいな」

朱「あ、ありがとうございます」

一「どうかしたのか？ 何だか落ち着かないようだけど」



朱「な、何でもありません。私は何も知りません」

—「？」

とりあえず討伐隊を見に出てみると、武器を持った星と蒲公英がいた。

—「あれ、兵はどうしたんだ？」

星「報告では、賊はたったの三十人ほどだそうです。その程度なら、私と蒲公英だけで充分ですからな」

蒲「そう言う事だよ。だから討伐隊は蒲公英達だけなの」

—「そうなのか……。けど、二人だけで大丈夫なのか？ 俺も一緒に……」

星「おや、主は私達を信用出来ないと？」

—「そ、そうじゃなくて、もし何かあったら……」

蒲「大丈夫だよご主人様。賊なんかに負けるわけないんだから」

—「……わかった。気をつけてくれ」

星「では、行って参ります」

馬に乗り出て行く二人の背を見送りながら、俺は妙な胸騒ぎがした。

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

時刻は昼過ぎ。二人はまだ帰って来ない。

「（落ちつけ、あの二人の強さはよく知っている。やられるはずがない）」

頭を振り、政務を再開しようとして竹筥に手を伸ばそうとしたその時、桃香が血相を変えて飛び込んで来た。

「ど、どうしたんだ桃香？」

桃「大変だよご主人様！ 星ちゃんが！」

「ッ！」

その一言で充分だった。急いで城の外に出ると、愛紗に支えられた星の姿を確認した。

—「星!！」

星「あ、主。申しわけありません。賊に後れを取ったばかりか、蒲公英が賊の手に落ちてしまいました・・・」

—「何だつて!？」

星「賊は、蒲公英を人質に取り、私に言伝を・・・。天の御遣いを寄越せと・・・」

—「俺を？」

星「従わなければ人質の命は無いと」

—「わかった。行つて来る」

桃「だ、駄目だよご主人様! 一人じゃ危ないよ!」

紫「桃香様のおっしゃる通りですわご主人様。どう考えてもこれは罠です」

桔「紫苑の言う通りじゃ。みすみす掛かる事もあるまい」

—「蒲公英の命が掛かっています。罠だろうがなんだろうが俺は行きます!」

一刻も早く古城へ向かわなければならぬ。俺はハイロウを展開させた。

—「翠、蒲公英は俺の命に替えても必ず助ける。だから待っていてくれ」

翠「あ、ああ。頼むよご主人様」

—「よし、行くぞ！」

ハイロウを羽ばたかせ、俺は空へ飛び上がった・・・

S I D E O U T

星「・・・上手くいったな」

一成の姿が見えなくなると、満身創痕なはずの星がほくそ笑んだ。

桃「ホントにいいのかな？」

紫「ここまで来たらもうどうしようもありませんよ桃香様」

桔「さよう。あとは蒲公英に任せればよい」

愛「確かに、仲間思いのご主人様には、お前の言う様な策が一番効くと思うが・・・ご主人様を騙すなど、私は納得出来ん」

翠「そうだよな。これでもし、私達全員がグルだつてばれたら・・・

「

桃「その時は素直に謝るしかないよね」

一成の飛んで行った方角を見上げながら、桃香はそう呟いた。

蒲公英SIDE

蒲「準備完了！ これで蒲公英だつてバレないよね」

頭からすっぽり黒い外套を纏って、鏡を見る。目の前には見るからに怪しい人間が立っていた。

この古城には賊なんていない。全部ご主人様を騙す為のつちあげ。こつこつこの確か・・・』どつきり』って言うんだよね？

蒲「そろそろ玉座の間へ移動しなきゃ」

玉座に座ってジツと待っていると、外から尋常じゃない殺気を感じ取った。間違いない、ご主人様の殺気だ。

バンツ！

扉が勢いよく開き、ご主人様が姿を現した。射殺さんばかりの目で蒲公英を睨んで来る。

—「貴様が賊か」

体の底から震え上がりそうな冷たい声。この時点ですでに怒ってるように見えるけど、もう少しだけ様子を見てみよう。

蒲「ふ、ふはははは〜！ よく来たな御遣い〜！」

出て来た声は、ちょっと上ずっていた・・・

蒲公英 SIDE OUT

全力でハイロウを飛ばし、古城に辿り着いた俺は、玉座の間へ向かった。そこには、黒い外套を纏った人物がいた。

—「貴様が賊か」

睨みながらも周囲を警戒する。残りの二十九人がどこに潜んでいるかわからないからだ。

賊「ふ、ふはははは〜！ よく来たな御遣い〜！」

—「・・・女？」

賊「た・・・俺が賊の首領だ。お前が来るのを待っていたぞ」

—「俺を呼んだ理由は何だ？」

賊「え？ それは、その・・・。そう！ 巷で噂の御遣いとやらを一目見てみたかったからな」

—「そうか。ならこれで満足だろう。さあ、俺はこうしてやって来たぞ。早く蒲公英を解放しろ」

賊「蒲公英？・・・ああ、あの可愛らしいお嬢ちゃんか」

—「そうだ。俺の大事な仲間だ」

賊「だが断る」

—「何だと？」

賊「返して欲しかったら俺と戦え」

賊が武器を持ち玉座の間を立った。

賊「そうそう、早くしねえと、俺の手下どもがなににするかわからねえぞ」

—「どういう意味だ？」

賊「ほれ」

賊が何かを放り投げた。それを見た俺の心臓が大きく跳ねる。

それは・・・蒲公英の髪を留めていたリボンだった。

賊「さあ、どつする御遣・・・」

ボゴッ！！



賊「へ？」

限界だった。抑えていたものを解き放ち、膨れ上がったオーラが物理的な力となり、玉座を吹き飛ばす。

—「貴様も・・・貴様の部下共も・・・五体満足で帰れると思うなああああああああ！！！！！」

右手に手甲、左手に大剣を持ち、俺は賊へ飛びかかった。

S I D E O U T

蒲公英 S I D E

—「うおおおおおおおおお！！！！！」

ブオン！！

蒲「ひゃわ！？」

—「逃がすかあ！！！！」

ビュン！！

蒲「ひっ……！！」

突き出される拳と、振り下ろされる大剣を、必死の体で回避する。  
それでも、風圧で外套は裂け、地面が大きく陥没する。

蒲「（どうしようどうしようどうしよう！ このままじゃご主人様に殺されちゃうよ！！）」

—「よくも蒲公英を辱めたな！！ 貴様等だけは許さん！！！」

蒲「ま、待ってご主人様！ 蒲公英は……」

—「問答無用！！！」

ガギイイイイイイイン！！

蒲「きゃあああああああ！！！」

大剣で弾き飛ばされた蒲公英は、そのまま反対の壁に叩きつけられた。

—「これで終わりだ・・・」

蒲「違うのご主人様！ 待って！！」

慌てて外套を脱ぎ去ると、大剣を振り上げたまま、ご主人様は大きく目を見開いた。

—「た、蒲公英！？」

蒲「そうだよ！ 蒲公英だよ！ だからその剣下ろしてよ～～！」

—「な、え、ど、どういう事なんだ・・・？ 蒲公英が賊？」

戸惑いながら、ご主人様は剣を下ろした・・・

蒲公英 SIDE OUT

IN SIDE

蒲「え、えつとねご主人様、今回の事は全部どつきりなの」

—「ドツキリ？」

蒲「うん。この前ご主人様、街で水を掛けられたのに怒らなかつたでしょ」

—「そういえば、そんな事もあつたな」

蒲「それで、ご主人様つてどんな事したら怒るのか、もし怒つたらどんな感じに怒るのかなつて気になつちやつて、星姉様に相談して、桃香様達にも協力してもらつたの」

—「・・・そうか。だから朱里は翠はあんなに微妙な顔をしていたのか」

蒲「ご主人様、蒲公英達の事凄く大切にしてくれてるでしょ？だから、蒲公英が酷い目に遭つてゐるつて知つたら絶対怒つてくれるつて星姉様が」

—「なら、蒲公英は何もされてないんだな？」

蒲「うん」

—「はあああああああああああ」

全てを知つた俺は、深い溜息を吐いた。要するに、上手い具合に蔽められてしまったという事か。

「「だったらもう少し早く言ってくればよかったのに」

蒲「言おうとしたらご主人様にふっ飛ばされちゃったんだもん」

「「とにかく、無事でよかったよ。さあ、帰ろう」

蒲「はい」

蒲公英と一緒に城へ戻ると、桃香達が出迎えてくれた。

桃「あ、ご主人様、蒲公英ちゃんを助け出せたんだね」

蒲「もういいよ桃香様。バレちゃったから」

桃「え？」

「「全部聞いたよ。まったく、みんなも人が悪いな」

愛「も、申し訳ありませんご主人様。騙すような真似をしてしまつて」

「「いいさ、気にしてないよ」

星「さすが主、お優しいですな」

愛「お前が言うな！」

「そういえば、今回の件は星が考えたんだよね？」

星「ええ。私の演技も中々だったでしょう？」

「ああ、すっかり騙されたよ。……ところで、三日前に美味しいメンマを手に入れたって聞いたけど」

星「ああ、これですな」

星が懐からメンマの入った小瓶を取り出す。俺はそれを無言で取り上げた。

星「あ、主？ 何をされるおつもりですか？」

「ん？ ちょっと投擲練習でもしようと思ってな」

空に向かって大きく振りかぶる。

星「お、怒っておられるのですか主！？ でしたら謝ります！ 謝りますからそのメンマだけは！！」

「だから怒ってないって。ただ投擲練習をしたいだけだよ」

星「でしたらほら！ この小石でもいいではありませんか！ ほら、手ごろな大きさですよ！」

—「いやいや、これが一番しつくりくるんだよ」

星「お待ちください！　どうかそれだけは！　それだけはあああああああ！—」

—「ふんっ！—」

全力で放り投げた小瓶は、空の彼方へ消えて行った。

星「うわあああああああ！—　メンマが！　私のメンマがああああああ！—」

—「よし、よく飛んだな」

いま鏡を見れば、きつと満面の笑みを浮かべている俺が映るだろう。

全員「わ、笑ってる……」

—「……何か？」

全員「何でもないです！」

こうして、星の慟哭を聞きながら、慌ただしい一日は幕を閉じた。

第八十一話 温厚な人ほど怒らせると怖い（後書き）

作「お久しぶりですみなさん！ やつと・・・やつと帰って来れませんでした！！」

一「何してたんだ？ どうせ、大した理由も無いんだろうけど」

作「入院してた」

一「え？」

作「詳しくは活動報告をお読みください」

一「ホントなのか・・・？」



第八十二話 褒められるのが苦手な相手には逆に嫌というほど褒めてやればい

自分の文才の無さが心底嫌になりました。

第八十二話 褒められるのが苦手な相手には逆に嫌というほど褒めてやればいい

今日は復興作業の進展会議の日だ。俺は急いで会議室へと向かった。

「うわ〜！ 翠ちゃん可愛い！」

室内から桃香の声が聞こえて来た。いったい何の話をしているんだ？

中に入ると、すでに全員が集まっていた。何故か、みんな翠の周りに集まっている。

「すまない、待たせた」

「あ、ご主人様！ ねえねえ、翠ちゃん見てよ！」

「翠がどうかしたのか？」

言われて翠へ視線を移す。そこには、いつもと違い、髪を真っ直ぐに下ろし、恥ずかしそうに俯いている翠がいた。

「な、何だよ。そんなに見つめるなよご主人様」

「すまない。けど、どうしたんだ翠？ いつもと髪型が違うが」

「鍛練中に、髪を束ねてた紐が切れちゃったんだよ。それで、仕方ないからこのまま会議に……」

「ああ、そういう事だったのか」

納得して頷く。すると、蒲公英がにやにやしながら俺に近づいて来た。

「どう、ご主人様？ お姉様とっても可愛いでしょ？ あ、もちろん普段も可愛いけど」

「なっ！？ ご主人様になんて事聞いてんだよ蒲公英！！」

「そんな事言ってる、ホントは気になる癖に」

「べ、別にそんな事……！」

「確かに可愛いな」

「 @      ツ！？ 」

俺が感想を言うと、翠は声にならない声をあげながら立ち上がり、そのまま会議室から走り去って行った。

「ちよ！？ どこ行くのお姉様！？」

「あらあら翠ちゃんたら、ご主人様に褒めてもらってよっぽど嬉しかったのね」

紫苑さんが楽しそうに微笑む。しかし、本当に嬉しかったのだろうか？ 翠の行動に俺は首を傾げた。

「ど、どうしよう朱里ちゃん？」

「あの様子じゃ、翠さん戻って来ないだろうし、しょうがないからこのまま会議を始めよう雛里ちゃん」

朱里の言った通り、その後、翠が会議室に戻って来る事は無かった。

S I D E O U T

翠 S I D E

会議室から飛び出した私は、いつの間にか自分の部屋の寝台に横になっていた。

確かに可愛いな

ドキッ！

「ッ~~~~ッ~~~~！！ ご主人様の冗談は性質が悪すぎだ！ わ、私がか、かか、可愛いなんて、そんな事あるわけないのに・・・！」

こんな、ガサツで、女らしさが全然ない私なんかが可愛いわけがない。可愛いって言うのは、蒲公英みたいな女の子の事を言うんだ。

「……………そうだよ。冗談に決まってる」

そう結論づけ、私は天井を見上げた。

何故か、胸がチクリと痛んだ・・・

翠SIDE OUT

IN SIDE

「お姉様は自分の事が全然わかってないんだと思うの」

翌日、政務を行っていた俺の部屋にやって来た蒲公英がいきなりそう切り出した。

「い、いきなりどうしたんだ蒲公英？」

「ご主人様、昨日お姉様に言った言葉、本気だよね？」

「言葉？」

「お姉様に可愛いって」

蒲公英は笑っているが、目は本気だった。

「もちろんだ。多分、俺以外の人間に聞いてもほとんどが同じ答えだと思うが」

「だよ。私のお姉様だもん」

嬉しそうに胸を張る蒲公英。だが、すぐに表情を引き締めた。

「でも、お姉様自身はそうは思っていないみたいなの。自分は女らしくない、可愛くないって」

「そんな事はない。翠は素敵な女性だ」

断言するように言うと、蒲公英は満足げに微笑んだ。

「そこでね、お姉様に女性としての自信を持たせてあげようって、桃香様達と話し合ったの。それで、本題はここからなんだけど・・・ご主人様にも協力して欲しいの」

答えは決まっていた。

「もちろん、俺に出来る事なら何でもさせてくれ」

「ありがとうご主人様！ そうと決まれば・・・」

蒲公英が耳元で囁く。それは翠に自信を持たせる為の作戦だった。

「・・・それでいいのか？」

「うん、後は蒲公英達が上手くやるから」

その三日後、例の作戦は決行された。

「おはよう翠」

後ろから話しかける。翠の髪型は元に戻っていた。

「あ、おはようご主人様。どうしたんだ？」

「今日は非番なんだろう？ よかったら、俺と一緒に街に出ないか？」

「え？」「ご主人様と私が？」

「ああ」

ここで断られたら元も子もない。俺は何とか言い訳を考えた。

「ほら、キミが仲間になってくれてしばらく経つけど、まだお互いに知らない事もあるだろう？ この機会に色々キミの事を知りたいと思ってるな」

「・・・ま、まあ、別にいいけど」

「そうか、ありがとう。それじゃあ早速出かけよう」

翠を連れ、俺は街に出た。



「さて、まずは・・・」

懐から紙を取り出す。三日前、蒲公英に渡された物だ。

いい、ご主人様？ これに書かれた通りにお姉様を案内してあげてね

「（最初は・・・『服屋に行け』か。とは言っても、どの服屋に行けば・・・）」

とりあえず、今いる場所から一番近い服屋に向かう事にした。

「いらっしやいませ！」

店の中に入った俺達を、二人の店員が迎えてくれたのだが・・・

「まあ、可愛らしいお嬢さんね」

「かつ、可愛っ！？」

「こつちのお客さんも格好良い人だね〜」

「・・・」

「あら、どうかなさいましたか？」

「何してるんですか紫苑さん。それに桃香も」

眼鏡などで変装しているつもりだろうが、どこからどうみても紫苑さんと桃香だった。

「人違いではありませんか？ 私はただの店員ですよ」

「そっだよご主・・・お客様」

あくまでしらを切るつもりらしい。いったい何がしたいんだろう。

「な、なあご主人様。早く用事済ませて出ようぜ」

「そうしたいのは山々なんだが、そもそも用事自体が・・・」

「わかってますわ。その素敵な彼女に似合う服を買いに来られたの  
でしょう」

「「え？」」

俺と翠の声が見事に重なった。

「はいはい、では、試着室へご案内〜」

「え？ ちょ、待つ・・・!!」

二人に引き摺られるように、翠は店の奥へ消えて行った。

「あの、俺は・・・」

「ご主人様はそこで待ってて〜」

止められてしまった。・・・というか、今、完全にご主人様って言ったよな？

「こ、こんなの着れるわけないだろ!」

「あら、どうして？ 似合うと思うけれど」

「そつだよ。いいから着てみなつて」

「無理！ 無理だつて!」

「もつ、しょうがないわね・・・」

「な、何だよその手は?」

「そんなに嫌がるなら、私達が着せてあげる」

「何を・・・ふああ!!」

「ふふ、敏感なのね」

「止めっ・・・！そこは・・・きゃう!？」

「うわあ、お肌すべすべ。いいなあ」

「ひあっ!？だ、誰か、助け・・・!」

「・・・」

奥からの三人の声を聞き、俺は無言で店を出た。

・・・

五分ぐらい経っただろうか、着替えが終了したようなので、再び店の中に戻る。

「お待たせしました」

「ん？ 翠の姿が見えないが」

「ほら、恥ずかしくてないで出ておいでよ」

「お、押さないでくれ・・・うわ」

物陰から現れた翠は、髪を下ろし、所謂・・・確か、ゴスロリ？  
と呼ばれる装いを纏っていた。・・・何であるんだ？

「・・・」

俺は声を出す事も忘れ、しばし彼女に見惚れてしまった。

「今の彼女は・・・そう、まるで、草原に咲く、美しい花だ。俺は  
今、彼女の美しさを改めて思い知らされたのだった」

「・・・何言ってるんですか？」

「いえ、お客様の心の声を代弁したまでですが」

楽しそうに微笑む紫苑さん。対照的に、翠は頬どころか、顔全体を  
真っ赤にしながら俺の前に立っていた。いつもの快活さはなりを潜  
め、清楚で控えめな女性としての姿がそこにはあった。

「うっ・・・そんなに見るなよご主人様・・・」

「す、すまない。つい見惚れてしまった」

「なっ……／＼」

「ふふ、どうやら気に入られたようですわね。では、早速お会計を……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 私は試着しただけで買うとは言うてないぞ！」

「こんなに似合ってるのに買わないなんておかしいよ。ね？」

桃香が期待に満ちた目で俺を見つめる。

「……いくらですか？」

「ご主人様？」

「せっかく試着までしたんだ。俺から贈らせてもらっつよ」

「いやいやいや！ そんなの駄目だ！ 私なんかの為にこんな高そうな服……！」

「はい、お買い上げありがとうございます」

会計を済ませ、俺達は桃香と紫苑さんに見送られながら店を後にした。

「この調子じゃ、これから向かう所にも誰かしらいそつだな」

「……」

「翠？ どうしたんだ？」

翠は店を出てからずっと俺の背中に隠れるようにして歩いている。

「見られてる……めちゃくちゃ見られてるよぉ……」

どうやら、周りから向けられている視線に怯えているようだった。ぶつぶつと呟いている。

「やっぱり、私みたいな女がこんな服着てるなんておかしいんだ。みんな、絶対似合わないって思ってるんだ。うっ……ご主人様が悪いんだぞ」

「（蒲公英の言っていた通りだな。翠は自分の事を卑下し過ぎだ）」

俺は振り返り、翠の肩に手を置きながら諭すように口を開いた。

「翠、周りの声をよく聞いてみるんだ」

「周りの声？」

怪訝そうに、翠は耳を済ませた。

「おい、御遣い様と一緒にいる女の子、すっげえ可愛くねえか」

「あの服可愛い！ どこで買ったのかしら？」

「……惚れた」

「心底御遣い様が羨ましいぜ。あんな女の子を選び放題なんだから」

一部聞き捨てならない言葉があつたが、ほぼ全てが翠の容姿を褒め称えるものだった。

「みんな、俺みたいにキミに見惚れているだけだよ。だから、もっと自信を持っていいんだ。翠は可愛いんだから」

「そ、そんな事言われても……」

「（やれやれ、これは先が長そうだな）」

溜息を吐きながら、例の紙を取り出す。次は『二人で食事』と書かれていた。そういえば、いつの間にか昼時になっている。



「翠、そろそろお昼にしないか」

「え、もうそんな時間なのか？」

「ああ、どこかいい店は・・・」

「そうだ！ この前美味しい店見つけたんだ。私が案内するから、そこで昼飯食べないか？」

「それはいいな。じゃあ早速・・・」

「あいや待たれい！ そのお二人！」

俺達の前に、今度は星が現れた。桃香達のように変装していたが、これもバレバレだった。

「・・・星？」

「やお嬢さん、人違いではないか？ 私はどこにでもいるただの一町人だが」

「ただの町人がなんで槍持ってんだよ」

「まあ、私の事などどうでもいいではないか。それよりお二人、今から昼食をとられるそうだが、それならいい店があるぞ」

「き、聞いてたのか!？」

「ここからしばらく歩いた場所に一軒の店がある。そこは珍しい店でな。店内ではなく、外で食事やお茶が楽しめる店なのだ」

「何でオープンカフェがこの時代に・・・」

「ご主人様、そのおおぶんかふえって何なんだ？」

「広い歩道や広場を利用して屋外に設置された飲食店の事だよ。しかし、まさか欧米文化が入り込んでいるとは。これも外史だからか？」

「ふうん、なるほどな。面白そうじゃん。行ってみようぜご主人様」

「そうだな。俺も興味がある」

「決まったな。では、私はこれで。さらば！」

そう言って、星は走り去って行った。

「この調子では、行く先々に誰かいそうだな」

たどり着いた店は、確かにオープンカフェだった。そして・・・俺の予想は見事に的中した。

「い、いらっしやいますー！」

注文を取りに来た給仕の少女が・・・月だった。

「月、キミもか・・・」

「へう・・・。ち、違います。私は給仕です」

「どうしたんだご主人様？ 早く注文しようぜ」

「気付いてないのか翠？」

「？ その子がどうかしたのか？」

「・・・いや、何でもない」

「私、麻婆豆腐な」

「じゃあ、俺も同じで」

「麻婆豆腐が二つですね。少々お待ち下さい」

一礼し、月が店の中に入って行った。すると、厨房の方に朱里の姿を見つけた。

「どうしたんだよご主人様？ そんな何とも言えない表情して」

「大丈夫だ。問題ない」

「そうか？ それにしてもこの店、男女二人組の客が多いな。というか、それしかないぞ」

周りを見ると、確かに男女ペアで席についている客がほとんどだった。しかも、例外なく仲睦まじそうに。

「お待たせしました」

月が麻婆豆腐の皿を二つ持って再び俺達の席へやって来た。

「なあ、この店、やけに二人組の客が多いけど、何かあるのか？」

「はい。このお店は、お客さん達のような恋人同士の方限定のお店なんです」

「へっ……って、え！？ こ、ここ、恋人同士！？」

「じゅっくりびんぞ」

「一成さん、頑張ってくださいね」というセリフを残し、月はまた店の中に戻って行った。

「ご主人様！ この店は駄目だ！ 早く出よう！」

「いいじゃないか。せっかく料理も来たんだし」

今にも立ち上がりそうな翠を何とか宥める。

「でもご主人様。私なんかの恋人に見られたら嫌だろ？」

「むしろ光栄だけど」

「 @      ツ!？」

翠の顔が、目の前の麻婆豆腐のように真っ赤になった。今にも湯気が立ち上りそうだ。

「ほら翠、早く食べないと冷めるぞ」

「はにゃあ……././」

「翠？」

結局、食事が済むまで、翠は俺の声に全く反応しなかった。

「次が最後か……」

『夕日に照らされる城壁の上で愛の語らい。ばっちり決めてねご主人様』

「（目的変わってないか？）」

「もう限界だ。ご主人様、城に戻ろうぜ」

「すまない、もう少しだけつきあってくれ」

適当な出店を見て回りながら時間をつぶし、陽が傾いて来た頃、俺は翠を連れて城壁の上に向かった。

「は~~~~、風が気持ちいいな」

人目に触れなくなったからか、翠は落ち着いたように声を出した。

「さて、ご主人様。そろそろ話してくれていいんじゃないか」

「何の事だ？」

「私、あんまり頭はいい方じゃないけど。それでも、ご主人様が今日、私を色々連れ回したのには何か理由があるって事くらいわかる」

「……………」

「頼む、教えてくれよご主人様」

「……………わかった」

これ以上ごまかせないだろう。俺は全てを白状した。

「はあ……………やっぱり蒲公英の仕業か」

「翠、蒲公英は……………」

「わかってるよ。私の為に考えてくれたんだ。怒れないよ」

「そうか……………。なら、キミの方はどうなんだ？ 今日一日を通して、それでもまだ自信が持てないか？」

俺の問いに、翠はしばらく黙ったままだったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……………正直、私はまだ自信なんて持てそうにない。けど……………ご主人様は、そんな私に何度も可愛いつて言ってくれた。今は、それで充分だと私は思う」

「そうか……………」

「へへ」

今日は成功だったな……。翠の笑顔を見て、俺はそう思った。

「ちょ、押さな……。きゃあー!」

ドサツ!!

「え?」

物音に振り返ると、蒲公英と桃香が重なり合うように倒れていた。その後ろでは、紫苑さんが苦笑いを浮かべ、星が呆れたような表情をしていた。

「お、お前ら!? どうしてここに……。まさか、覗いてたのか!」

「わ、私は止めたんだよ!」

「あ、ひどい! 桃香様だって乗り気だったくせに!」

「ご主人様、肩でも抱いてあげれば翠ちゃんももつと言んだと思いますよ」



「そういった事を主に求めるのは酷というものだぞ紫苑」

「……ばす」

「お、お姉様……？」

「お前ら全員ブツ飛ばしてやるーーーーッ！！」

四人に向かって駆け出す翠と、慌てて逃げ出す蒲公英達。それを見送りながら、俺も城壁を下り、城へと戻った。

第八十二話 褒められるのが苦手な相手には逆に嫌というほど褒めてやればいい

「やっとここさ翠の拠点イベントが完成したぞ」

「原作のイベントが混ざっていたが、一刀君がいないのにゴスロリ服があるのはおかしくないか？」

「ご都合主義だよ！」

「声高々に言う事じゃないだろ」

「あとは焰耶だけだ。……だが、彼女こそ最大の難関！ マジで……マジでネタが無い！！」

第八十三話 他人の過去についてあれこれ詮索するべきではない（前書き）

またしても勝手な設定を加える事をお許しく下さい。

## 第八十三話 他人の過去についてあれこれ詮索するべきではない

城内を歩いていると、視線の先に桃香と焰耶の姿を見つけた。

「と、桃香様！」

「あ、焰耶ちゃん。どうしたの？」

「い、今、お時間はありませんでしょうか！ よ、よけ、よければ！ 私とお茶でも！！」

「うん、いいよ。あ、でも、今日のお仕事がもう少し残ってるから、ちょっとだけ待っててくれないかな」

「もちろんです！ 何刻でも何日でも何ヶ月でも待ちます！！！」

「あはは。もう、そんなにかかるわけないでしょう〜」

冗談として笑う桃香。だが、焰耶ならきつと本当に何ヶ月でも待つだろう。それほどまでに、彼女が桃香を慕う心は強いのだから。

「あ、ご主人様」

俺に気付いた桃香がこちらに手を振る。俺は二人に近づいた。

「ねえご主人様、後で焰耶ちゃんと一緒にお茶するんだけど、よかつたらご主人様もどうかかな？」

「え!？」

「? どうしたの焰耶ちゃん？」

「い、いえ、何でもありません」

「すまない、誘ってくれるのは嬉しいんだが、まだ仕事が残っててな。それに、俺がいたら女性同士の話も出来ないだろうしな」

「そつかあ、残念。でもそうだね、私も焰耶ちゃんと二人っきりでお話するの初めてだし、せつかくの機会だもんね」

「桃香様・・・」

「よし、そうと決まったら早くお仕事終わらせないと！ 待っててね焰耶ちゃん」

焰耶から向けられる感激の視線に気付かないまま、桃香は自室へ戻って行った。

「感謝するぞお館」

「数日前からキミがやけに張り切って仕事をしている姿を見かけていたが、なるほど、桃香との時間を作る為だったのか」

「なっ、何故それを・・・！」

「ははっ、当たり前だったか」

照れたような焰耶を見て、俺も自然と笑みが浮かんだ。

「ッ・・・！」

「ん？ 俺の顔に何かついていないか焰耶？」

「お館・・・私達、以前どこかで会った事ないか？ あの戦いよりもずっと前に・・・」

「・・・いや、気のせいじゃないのか」

「そうか・・・。いや、すまない。変な事を言ってしまった」

「いいさ。それより、ここで俺と話していいのか？」

「はっ、そうだ！ 桃香様をお迎えする準備をしなければ！ ではなお館！」

駆け足で去って行く焰耶。そんな彼女の後ろ姿を見送りながら、俺は小さく呟いた。

「……あれからもう一年近く経つのか」

SIDE OUT

正午が過ぎ、桃香は焔耶の部屋を訪れた。

「ようこそいらっしやいました桃香様」

「ごめんね。すぐって言うっておきながら結局お昼過ぎになっちゃって」

「何をおっしゃいます。こうして私なんかの為に時間をつくってくださっただけでもありがたいのですから！」

「ありがとうございます焔耶ちゃん。あ、これお土産。非番だった鈴々ちゃんにお願いで買って来てもらったの」

そう言って、桃香は手に持った袋を焔耶に見せた。中には点心が入っているが、桃香が鈴々に渡した金額で買える量よりほんの少し足りなかった。理由は……買い物を頼んだ相手が鈴々だったからと言えば大多数が納得するだろう。

「お気遣いありがとうございます。実は私の方も色々準備していま

して」

部屋に入った桃香は机の上を見て目を見張った。そこには、二人分とは思えないほどのたくさんの菓子や点心が並べられていた。今日の為に焰耶が準備していた物だ。

「桃香様のお口に合えばよいのですが」

「こんなにたくさん・・・焰耶ちゃん、お金大丈夫？」

「桃香様の為ならいくら使っても構いません」

椅子を引き、桃香を座らせた焰耶は、自分も対面の椅子に腰かけた。正面から見る桃香の笑顔に、焰耶は頬を赤らめながら声を出した。

「そ、そうだ、お茶を・・・」

「あ、私が淹れるよ」

「そんな、桃香様のお手を煩わせるわけには・・・」

「いいからいいから」

茶器を手にとった桃香は、慣れた手つきでお茶を淹れる。その姿に焰耶は見惚れた。



「はい、どうぞ」

「い、いただきます」

差し出されたお茶を焰耶は一気に飲み干した。火傷こそしなかったが、彼女の喉を激しい熱が襲った。

「ッ~~~~~!」

「ど、どうしたの焰耶ちゃん？」

「い、いえ・・・こんな美味いお茶は今まで飲んだ事無かったので感動してしまいました・・・」

「大袈裟だよお。でも、そう言ってもらえると嬉しいな」

こうして二人のお茶会は幕を開けた。菓子をつまみながら、お互いに取りとめのない会話を交わす。好きな料理、趣味、最近あった面白い話などを思いついたそばから口に出し、その度に室内を笑い声が包んだ。

「そうだ。私、焰耶ちゃんに聞きたい事があったんだ」

三杯目のお茶を淹れながら切り出す桃香に焔耶は嬉しそうに答えた。

「何でしょう？ 私に答えられる事なら何でもお答えします」

「焔耶ちゃんの左腕に巻かれてるそれって何？」

桃香が言っているのは、焔耶の左腕に巻かれている黒い布の事だった。薄汚れてボロボロのそれを、焔耶は大事そうに撫でた。

「これは・・・私の恩人の物です」

「恩人？」

「はい。つまらない話だとは思いますが、それでもよろしければお話しします」

「うん、聞かせて焔耶ちゃん」

懐かしむように目をつむった焔耶は、数秒の後にゆっくりと目を開いて語り始めた。

「これは、私が桔梗様の配下に加わらせて頂く前の話ですが。その当時、私は修業の旅をしていました。そして、今は魏領になっているとある村に立ち寄った時の事です。その村を賊が襲ったのです」

桃香は一言も口にせず、焰耶の言葉に真剣に耳を傾けていた。それに嬉しさを感じつつ、焰耶は話を続けた。

「私はもちろん撃退に乗り出しました。修行にもなりますし、何より村の住民達を守る為に、私は賊に立ち向かいました。けれど・・・」

「けれど？」

「賊の数は約六十人ほどでした。今の私なら物の数ではありませんが、あの時の私には荷が重すぎたのです。二十人ほど倒した後、私は後ろから斬られました」

「ッ・・・！」

「予想以上の深手でした。私は十人ほどにいたぶられ続けました。そいつらの後ろに、男達が斬られ、女達は賊に捕まり馬に乗せられていました。とうとう武器も持てなくなった私を、賊達は下卑た笑いを浮かべながら押し倒して来ました。殺す前に慰み者にするために」

「そんな・・・酷い・・・」

「尊厳を踏みにじられそうになったその時でした・・・。村の入口の方から絶叫が聞こえて来ました。そして、意識の薄れるなか、私は見たんです。黒衣を纏った何者かが、賊を吹き飛ばし、捕まっていた女を助ける所を・・・それからはあっという間でした。私を犯そうとした賊を含めた全員が、瞬く間に地に伏せていました」

安堵の表情を浮かべる桃香。焰耶はそれが自分が汚されなかった事への安堵だと思い、心の中で感謝した。

「ぼやける視界のなかで彼が・・・まあ彼か彼女かもわからなかったんですが、私に向かって微笑みながら「よく頑張ったな」という言葉を残してくれたところで私の意識はなくなり、次に目覚めたのは家の中でした。そこには、私以外にも襲われた者達が横たわっていました。幸い、重傷者こそ出ましたが、死者はいませんでした。話を聞いたところ、私達を助けてくれた男に怪我人を一ヶ所に集めて手当てするよう指示されたそうです。そこで、黒衣の人物が男だとわかったのです」

「よかった・・・誰も死んでないんだね」

「この布は包帯が足りなくなつたので、その男が自分の服を破いて巻いてくれた物なんだそうです。私は男に会おうとしましたが、すでに村を去つた後でした」

「じゃあ、焰耶ちゃんは結局その人の顔を見れなかったの？」

「はい」

「そうなんだ・・・。ちょっと触つてもいい？」

「どうぞ」

桃香は布に手を触れた。そこである事に気付いた。

「え、この生地って・・・」

「どうかされましたか？」

「ねえ焰耶ちゃん。桔梗さんに仕える前って言ってたけど、今からどれくらい前か憶えてる？」

「今からですと、そうですね・・・一年前くらいでしょうか」

それを聞いて、桃香の頭に一つの仮説が浮かんだ。そして、お茶会が終了すると、桃香はその仮説を確かめにある人物の部屋を訪れた。

「桃香、どうしたんだ？」

部屋に入って来た桃香を一成は不思議そうに見つめた。そんな彼に、桃香は短く告げた。

「ご主人様、上着脱いで」

「？」

言われるままに上着を脱ぎ、黒いシャツ姿になった一成。そのシャ

ツの一部が不自然に破れているのを桃香は見逃さなかった。

「やつぱり……。焰耶ちゃんを助けたのはご主人様だったんだね」

「え……。？」

「焰耶ちゃんから聞いたの。一年前、魏領の村で賊にやられそうになった所を男の人に助けられたって。一年前っていつたら、ちょうどご主人様が旅に出た頃だよ。それと、この破れた部分は焰耶ちゃんの左腕に巻いたんでしょう？ 包帯の代わりに」

しばらく黙っていた一成だったが、やがて観念したように口を開いた。

「……。ああ。桃香の言う通りだ。俺は以前焰耶を助けた事がある。曹操に会いに行く道中に立ち寄った村で偶然な。そこにたどり着いた俺が見たのは、ボロボロになりながらも必死に賊に立ち向かおうとする焰耶の姿だった」

「やつぱり！ でも、それならどうして焰耶ちゃんに教えないの？

焰耶ちゃん、お礼を言いたかったって言ってたよ」

「言わない方がいい事もあるさ。俺に助けられたなんて知ったら彼女も嫌になるだろうしな」

部屋を後にした桃香は納得いかない表情を浮かべた。

「そんな事ないと思うけどな・・・」

しかし、本人が言っているのだから仕方がない。桃香はこの事を自分の胸に秘めておく事に決めた。

後にある出来事がきっかけで焰耶が恩人の正体に気付き、テレビ始めるのだが、それはもう少し先の話である。

第八十三話 他人の過去についてあれこれ詮索するべきではない（後書き）

「よっし！ 焰耶の拠点が終わったぞ。これで先が書けるな」

「またやらかしたなお前は。勝手に過去を捏造して」

「伏線と言って欲しいな。お前の一人旅の裏側にはこんな事があったのだ。正直言つと、今から焰耶のフラグの立て方がどうしても思いつかなくて、だったらすでに立ってた事にしようと思つてな」

「何だよそれ・・・」

「これが俺の限界だ！」

「誇らしげに言つなよ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9835k/>

---

真・恋姫十無双～旅人は外史を渡る～

2011年12月22日00時45分発行